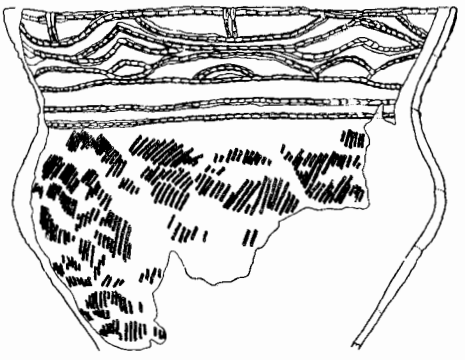
岐阜県文化財保護センター調査報告書　第54集

上　原　遺　跡　II

【第１分冊】



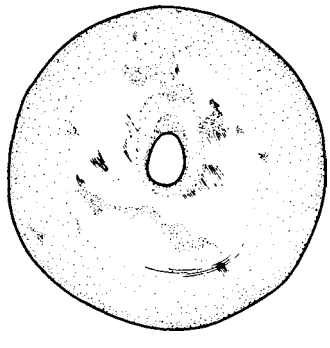
２０００

財団法人　岐阜県文化財保護センター

上原遺跡 II

（あげはらいせき）

【第1分冊】



2000

財団法人　岐阜県文化財保護センター

上原遺跡遠景（写真中央部が上原遺跡　北西より）

上原遺跡第1・4地点（北東より）

上原遺跡第1・4地点出土縄文土器

上原遺跡第1地点出土装飾品

序

揖斐川の最上流域に葉脈状にひろがるこの谷筋に、数多くの遺跡が点在することは、数年にわたる発掘調査の成果によって広く知られるようになりました。とりわけ、縄文時代の遺跡数は他の時代のそれをはるかに凌駕することも周知のこととなりつつあります。

ここ上原遺跡も揖斐谷の恵まれた自然を背景に、早くから縄文文化が花開きました。縄文時代前期にピークに達した気温は、この土地に森を舞台とした豊穣な狩猟・採集文化をもたらしたのです。この時期の遺跡は、県内でも発掘例は限られており、今回の発掘調査によって出土した北白川下層式土器を中心とする土器群とこれに伴う石器類は、この時代の生活復元に益するところが多いと思います。今後、この報告が、これまでの成果と併せて縄文前期の研究を一層深めるための礎となることを願ってやみません。

さて、美濃地方最大級とされる縄文の遺跡群は、徳山ダム完成の折りには水面下でひっそりと息づくこととなります。しかし、徳山の先人たちは、縄文人が狩猟と採集の場とした森林を開発し、後の時代には水田耕作を始めたり、城館や家屋を築いたりしてムラを存続させてきました。開発や再開発を繰り返しながらも、あるときは自然との共存を図り、またあるときはそれを積極的に活用してきたのです。開発とは、その時々において、より快適な生活を求めて自然を最も有効に活用するための必要不可欠な手段と考えます。

最後になりましたが、発掘調査や遺物整理、さらに報告書作成に際して終始温かいご指導、ご助言をいただいた関係諸機関ならびに関係各位に深く感謝申し上げます。

平成12年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　村　木　光　男

例　　言

1．本書は岐阜県揖斐郡藤橋村大字徳山字上原に所在する「上原遺跡」（遺跡番号21407-06380）第１・３・４・５・６地点の発掘調査報告書である。

2．本調査は徳山ダム建設事業に伴うもので、水資源開発公団から岐阜県が委託を受け、発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は平成６～８年度に実施し、故大参義一愛知学院大学教授の指導のもとに、平成６年度は中島康夫・小谷和彦（第３・５地点）、加藤栄二・鈴木昇（第４地点）が、平成７年度は小谷・堀田一浩（第１地点）、中島・竹中一秋（第３・６地点）が、平成８年度は稲川威・堀田（第１地点）が担当し、小坂宗和（平成６年度第５地点・平成７年度第３地点・平成８年度第１地点補助調査員）が補助した。

4．報告書の作成は平成９～10年度に実施し、泉拓良奈良大学教授の指導のもとに、堀田（平成９・10年度）、鈴木隆雄（平成10年度）が担当した。

5．本書に掲載した遺物の実測・拓本等は次の者が行った。

浅野紀美代・伊藤　節子・江間香代子・加納加代子・川尻美和子・酒衛　成功・酒向　邦子
白垣　若代・長坂　　薫・進藤有美子・高島　俊美・田口恵美子・棚橋　絹代・豊田　圭子
服部みどり・和田恵利子・青木健太郎・小野木　学・春日井　恒・小谷　和彦・近藤　大典
千藤　克彦・藤田　英博・増子　　誠・鈴木　隆雄・堀田

6．実測図等のトレースは次の者が行った。

加納加代子・加納恭子・長坂・高島・國井悦子・鈴木・堀田

7．本書の執筆・編集は、小野木・近藤・鈴木隆雄・竹中・堀田・藁科哲男が分担して行った。

8．遺物の写真撮影は、フォトスタジオ サトウに委託して行った。

9．地形測量及び空中写真撮影と空中写真測量は、株式会社イビソクに委託して行った。

10．自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ、京都大学原子炉実験所に委託して行った。それぞれの結果の一部を第８章に掲載した。なお、石材鑑定は藤岡比呂志・鈴木が行った。

11．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の方々や諸機関から御助言・御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

麻生　　優・網谷　克彦・安藤　弘道・伊藤　正人・上田　典男・内堀　信雄・梶田　澄雄
加藤　芳朗・上守　秀明・川崎　　保・河村　一彦・小杉　　康・小山　雅人・佐野　康雄
清水　宣洋・高橋　順之・田代　　孝・田中　　彰・中井　　均・長屋　幸二・西部　良治
野口　哲也・八賀　　晋・林　　直樹・藤田富士夫・松井　忠春・森下　章司・谷藤　保彦
山岸　洋一・脇田　雅彦・渡辺　　誠
藤橋村・久瀬村・揖斐川町・揖斐川町歴史民俗資料館

12．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品 の整理等は 次の者が行った。

〈補助調査員〉

小坂　宗和・高島　俊美・長坂　　薫・牧村美和子

〈発掘作業員〉

池田　満子・石原　敏枝・泉　　武光・泉　　利子・伊丹　敏夫・市田　岱子・今村　昭夫
岩井　弘子・臼井　廣子・梅本　宗七・梅本みつゑ・江口はる子・江口　もと・江崎　利夫

小倉　富恵・小倉ふみ子・小澤　治良・小澤やゑ子・加藤あさゑ・加藤きよ子・加藤　　淳
金指とめの・河合ふみゑ・川口ふじゑ・木本　梅雄・湖海　道子・小玉　春子・小寺　清子
小寺ひさゑ・小西　かの・小西きよ子・小西　直政・小西政治郎・小林さずゑ・佐島　岩吉
佐島みさを・清水おぎの・清水　勝三・清水　久雄・清水美智子・杉里　健三・杉島　利秋
杉島　寛之・杉山　利子・杉山　はる・清生スミ子・扇間　重男・高橋あきゑ・高橋いちの
高橋　勝美・高橋　　静・高橋　鈴子・高橋　つや・高橋戸佐男・高橋　花子・高橋　春枝
高橋　文子・高橋　政雄・高橋　みね・高橋　　実・竹中　卓也・竹中　直太・竹中　三博
竹中ももゑ・竹中よしの・丹度　芳子・土屋　重義・中石　たけ・中川　逸枝・中川　つる
中川　　操・中村たみゑ・中山　清子・成瀬　又勇・野田タツ子・野原　　明・橋本　義治
花木　秀範・林　　典男・樋口　　聡・久野　清秋・堀田　　勉・堀田　信子・本多　博道
前田　　晶・増田　昭治・増元　一夫・増元　清子・増元なつゑ・増元　文子・増元　みち
増元　やゑ・松田知恵子・村山みつ子・森　たかゑ・山岸　孝枝・山北　　満・山下ふみゑ
山本きみの・渡辺あきゑ

〈整理作業員〉

浅野紀美代・伊藤　節子・江間香代子・加納加代子・川尻美和子・酒衛　成功・酒向　邦子
進藤有美子・田口恵美子・棚橋絹代・豊田　圭子・服部みどり・和田恵利子

なお一次整理は、安江祥司（平成６年度）・早野壽人（平成７年度）・篠田通弘（平成８年度）が担当し、揖斐川一次整理所において、粟野由美子・江口陽子・木本千春・小西清美・小西真由美・末松ますゑ・関晶子・竹中栄子・林睦で行った。

13．調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

1．挿図の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

遺構　1/4　　1/10　　1/20　　1/40　　1/50　　1/80　　1/100　　1/400

石器　1/2　　1/3　　2/3　　1/4

土器　1/2　　1/3　（原則として1/2であり、それ以外はその都度明記した）

2．遺物番号は各地点ごとに１～とした。それぞれの地点における種別の遺物番号は以下に示す。

第１地点　　石器　１～503　　土器　1001～2254　　その他の遺物　3001～3012

第２地点　　土器　2255

第３地点　　石器　１～29　　土器　101～110　　その他の遺物　201～214

第４地点　　石器　１～23　　土器　101～175

第５地点　　石器　１・２　　土器　３～９

第６地点　　石器　１～11　　土器　12～21

3．本書で使用した土色名は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）に基づいた。

4．遺構の略号は次の通りである。

竪穴住居跡＝ＳＢ　　大型土坑＝ＳＫ　　小型土坑＝Ｐ　　集石遺構・焼礫集積遺構＝ＳＩ

遺物集積＝ＳＵ　　その他の遺構・不明遺構＝ＳＸ

略号は本書掲載の全地点で共通するが、上記以外のものはその都度明記した。

5．図中で使用したスクリーントーン等については、その都度説明を加えた。

目　　次

序
例言
凡例
目次

第１章　遺跡の概要 …… （堀田）　1

第２章　発掘調査の方法と経過 …… （堀田）　4

第３章　第１地点 …… 12
　第１節　層序 …… （堀田）　12
　第２節　遺構 …… 15
　　１．　縄文時代の遺構と遺物の分布 …… （鈴木・堀田）　16
　　２．　その他の遺構と遺物の分布 …… （堀田）　61
　第３節　遺物 …… 64
　　１．　縄文土器 …… （堀田・近藤）　65
　　２．　石器 …… （鈴木・堀田）　165
　　３．　その他の遺物 …… （小野木・近藤）　219

第４章　第３地点 …… 222
　第１節　層序 …… （堀田）　222
　第２節　遺構 …… （竹中）　225
　第３節　遺物 …… 230
　　１．　縄文土器 …… （近藤）　230
　　２．　石器 …… （鈴木・堀田）　231
　　３．　その他の遺物 …… （小野木・堀田）　239

第５章　第４地点 …… 242
　第１節　層序 …… （堀田）　242
　第２節　遺構 …… （堀田）　244
　第３節　遺物 …… 250
　　１．　縄文土器 …… （堀田・近藤）　250
　　２．　石器 …… （鈴木・堀田）　263

第6章　第5地点 …… 270
第1節　層序 ……（堀田） 270
第2節　遺構 ……（鈴 木・堀田） 277
第3節　遺物 …… 277
1．　縄文土器 ……（堀田） 277
2．　石器 ……（鈴木・堀田） 279

第7章　第6地点 …… 282
第1節　層序 ……（堀田） 282
第2節　遺物 …… 288
1．　縄文土器 ……（堀田） 289
2．　石器 ……（鈴木・堀田） 289

第8章　自然科学分析 …… 292
第1節　上原遺跡第1・3地点出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の原材産地分析（藁科） 292
第2節　上原遺跡第1地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土の玉類の産地分析 …（藁科） 317

第9章　考察 ……（鈴木・堀田・近藤） 337

引用・参考文献 …… 348

挿　図　目　次

第１図　徳山地域の地形図 …… 1
第２図　徳山ダム水没地内遺跡分布図 …… 3
第３図　遺跡周辺地形図 …… 4
第４図　第１・４地点グリッド設定および年度別調査区域図 …… 7
第５図　第３・６地点グリッド設定および年度別調査区域図 …… 8
第６図　第５地点グリッド設定および年度別調査区域図 …… 9
第７図　第１地点L′列西壁土層図 …… 13
第８図　第１地点71列南壁土層図 …… 14
第９図　第１地点で検出した風倒木痕 …… 15
第10図　第１・４地点遺構配置図 …… 17
第11図　第１地点遺物分布図 …… 18
第12図　ＳＢ01・08実測図（1） …… 19
第13図　ＳＢ01・08実測図（2） …… 20
第14図　ＳＢ01・08実測図（3） …… 21
第15図　ＳＢ02実測図（1） …… 23
第16図　ＳＢ02実測図（2） …… 24
第17図　ＳＢ03実測図（1） …… 26
第18図　ＳＢ03実測図（2） …… 27
第19図　ＳＢ04実測図（1） …… 28
第20図　ＳＢ04実測図（2） …… 29
第21図　ＳＢ04実測図（3） …… 30
第22図　ＳＢ05実測図（1） …… 32
第23図　ＳＢ05実測図（2） …… 33
第24図　ＳＢ06実測図（1） …… 35
第25図　ＳＢ06実測図（2） …… 36
第26図　ＳＢ06実測図（3） …… 37
第27図　ＳＢ07実測図（1） …… 39
第28図　ＳＢ07実測図（2） …… 40
第29図　ＳＫ01・02・03・04実測図 …… 43
第30図　ＳＫ05・06・07・08・09実測図 … 45
第31図　ＳＩ01・02・03実測図 …… 48
第32図　ＳＩ04実測図 …… 49
第33図　ＳＩ05・06実測図 …… 50
第34図　ＳＩ07実測図 …… 51
第35図　ＳＵ01・02・04・05実測図 …… 53
第36図　ＳＵ03実測図 …… 54
第37図　ＳＸ01・03実測図 …… 56
第38図　ＳＸ02実測図（1） …… 57
第39図　ＳＸ02実測図（2） …… 58
第40図　ＳＸ04・05・07・09実測図 …… 59
第41図　ＳＸ08実測図 …… 60
第42図　その他の遺構関連実測図 …… 62
第43図　ＳＢ01・08出土土器 …… 68
第44図　ＳＢ02出土土器 …… 69
第45図　ＳＢ03出土土器（1） …… 70
第46図　ＳＢ03出土土器（2） …… 71
第47図　ＳＢ03出土土器（3） …… 72
第48図　ＳＢ04出土土器 …… 72
第49図　ＳＢ05出土土器（1） …… 73
第50図　ＳＢ05出土土器（2） …… 74
第51図　ＳＢ05出土土器（3） …… 75
第52図　ＳＢ05出土土器（4） …… 76
第53図　ＳＢ05出土土器（5） …… 77
第54図　ＳＢ05出土土器（6） …… 78
第55図　ＳＢ06出土土器 …… 79
第56図　ＳＢ07出土土器（1） …… 80
第57図　ＳＢ07出土土器（2） …… 81
第58図　ＳＫ02・03出土土器 …… 82
第59図　ＳＫ05・ＳＫ06・Ｐ03・Ｐ11出土土器 …… 83
第60図　ＳＵ01土器 …… 84
第61図　ＳＵ02土器 …… 85
第62図　ＳＵ03土器（1） …… 86
第63図　ＳＵ03土器（2） …… 87
第64図　ＳＸ02出土土器（1） …… 88

第65図　ＳＸ02出土土器（2）…… 89
第66図　ＳＸ02・03出土土器…… 90
第67図　ＳＢ01石器実測図…… 91
第68図　ＳＢ08・02石器実測図…… 92
第69図　ＳＢ02・03石器実測図…… 93
第70図　ＳＢ03・04石器実測図…… 94
第71図　ＳＢ05石器実測図（1）…… 95
第72図　ＳＢ05石器実測図（2）…… 96
第73図　ＳＢ05石器実測図（3）…… 97
第74図　ＳＢ05石器実測図（4）…… 98
第75図　ＳＢ05・06石器実測図…… 99
第76図　ＳＢ06・07石器実測図…… 100
第77図　ＳＢ07石器実測図…… 101
第78図　ＳＢ07・ＳＫ03・04石器実測図… 102
第79図　ＳＫ05・ＳＩ02・03・ＳＵ04
石器実測図…… 103
第80図　ＳＵ05・ＳＸ01・02石器実測図… 104
第81図　ＳＸ02石器実測図…… 105
第82図　ＳＸ02・03・04・07石器実測図… 106
第83図　縄文土器実測図（1）……108
第84図　縄文土器実測図（2）……109
第85図　縄文土器実測図（3）……110
第86図　縄文土器実測図（4）……112
第87図　縄文土器実測図（5）……113
第88図　縄文土器実測図（6）……114
第89図　縄文土器実測図（7）……115
第90図　縄文土器実測図（8）……116
第91図　縄文土器実測図（9）……117
第92図　特殊突帯分類模式図…… 119
第93図　縄文土器実測図（10）…… 123
第94図　縄文土器実測図（11）…… 124
第95図　縄文土器実測図（12）…… 126
第96図　縄文土器実測図（13）…… 128
第97図　縄文土器実測図（14）…… 131
第98図　縄文土器実測図（15）…… 133
第99図　縄文土器実測図（16）…… 135
第100図　縄文土器実測図（17）……136
第101図　縄文土器実測図（18）……138
第102図　縄文土器実測図（19）……140
第103図　縄文土器実測図（20）……141
第104図　縄文土器実測図（21）……142
第105図　縄文土器実測図（22）……145
第106図　縄文土器実測図（23）……147
第107図　縄文土器実測図（24）……148
第108図　縄文土器実測図（25）……149
第109図　縄文土器実測図（26）……152
第110図　縄文土器実測図（27）……154
第111図　縄文土器実測図（28）……156
第112図　縄文土器実測図（29）……158
第113図　縄文土器実測図（30）……159
第114図　縄文土器実測図（31）……161
第115図　縄文土器実測図（32）……162
第116図　石鏃の平面形による分類……165
第117図　石鏃の折損部位……167
第118図　石槍の尖頭部および
基部の形態による分類…… 168
第119図　打製石斧の折損部位……177
第120図　磨製石斧の形態による分類……178
第121図　磨製石斧の折損部位……179
第122図　石錘の紐掛かり部の状態……185
第123図　凹みの形態と位置による分類……188
第124図　石器実測図（1）…… 194
第125図　石器実測図（2）…… 195
第126図　石器実測図（3）…… 196
第127図　石器実測図（4）…… 197
第128図　石器実測図（5）…… 198
第129図　石器実測図（6）…… 199
第130図　石器実測図（7）…… 200
第131図　石器実測図（8）…… 201
第132図　石器実測図（9）…… 202
第133図　石器実測図（10）……203
第134図　石器実測図（11）……204
第135図　石器実測図（12）……205
第136図　石器実測図（13）……206

第137図　石器実測図（14）……207
第138図　石器実測図（15）……208
第139図　石器実測図（16）……209
第140図　石器実測図（17）……210
第141図　石器実測図（18）……211
第142図　石器実測図（19）……212
第143図　石器実測図（20）……213
第144図　石器実測図（21）……214
第145図　石器実測図（22）……215
第146図　石器実測図（23）……216
第147図　石器実測図（24）……217
第148図　石器実測図（25）……218
第149図　第１地点出土弥生土器……219
第150図　第１地点出土古代以降の土器……220
第151図　第３地点遺構配置図……223
第152図　第３地点ｗ列・89列土層図……224
第153図　ＳＫ01実測図……227
第154図　ＳＫ・焼土実測図……228
第155図　Ｐ01～Ｐ20のピット群実測図……229
第156図　第３地点出土縄文土器……230
第157図　石器実測図（1）…… 235
第158図　石器実測図（2）…… 236
第159図　石器実測図（3）…… 237
第160図　石器実測図（4）…… 238
第161図　第３地点出土古代以降の土器……239
第162図　第３地点出土土錘……240
第163図　第４地点55列南壁土層図……243
第164図　ＳＢ01実測図……245
第165図　ＳＫ01・ＳＩ01実測図……246
第166図　Ｐ01実測図……247
第167図　Ｐ05～Ｐ22のピット群実測図……248
第168図　ＡＨ4-ＳＢ01出土土器（1）…… 255
第169図　ＡＨ4-ＳＢ01出土土器（2）…… 256
第170図　ＡＨ4-Ｐ01出土土器……257
第171図　Ｐ05～Ｐ22出土土器……258
第172図　第１群土器（1）…… 259
第173図　第１群土器（2）…… 260
第174図　第２・３群土器……261
第175図　第３群土器……262
第176図　石器実測図（1）…… 267
第177図　石器実測図（2）…… 268
第178図　第５地点トレンチおよび
遺構配置図……271
第179図　第５地点土層模式図……271
第180図　第５地点第１・２・３トレンチ土層図
……272
第181図　第５地点第４・５トレンチ土層図
……273
第182図　第５地点第６トレンチ土層図……274
第183図　第５地点第７・８・10トレンチ土層図
……275
第184図　第５地点第９トレンチ土層図……276
第185図　ＳＩ01・ＳＩ02実測図……278
第186図　第５地点出土遺物……280
第187図　第６地点トレンチおよび
テストピット配置図……282
第188図　第６地点テストピット土層模式図
……283
第189図　第６地点土層模式図……284
第190図　第６地点第１・２・３トレンチ土層図
……285
第191図　第６地点第４トレンチ土層図……286
第192図　第６地点第４・５・６・７・８トレン
チ土層図……287
第193図　第６地点出土土器……289
第194図　石器実測図……291
第195図　黒曜石原産地……296
第196図　サヌカイトおよび
サヌカイト様岩石の原産地 …… 297
第197図　ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の
原材使用分布圏 …… 323
第198図　ヒスイ原石の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe
の分布および分布圏 …… 324
第199図　ヒスイ原石の元素比値 Ca/Si 対 Sr/Fe

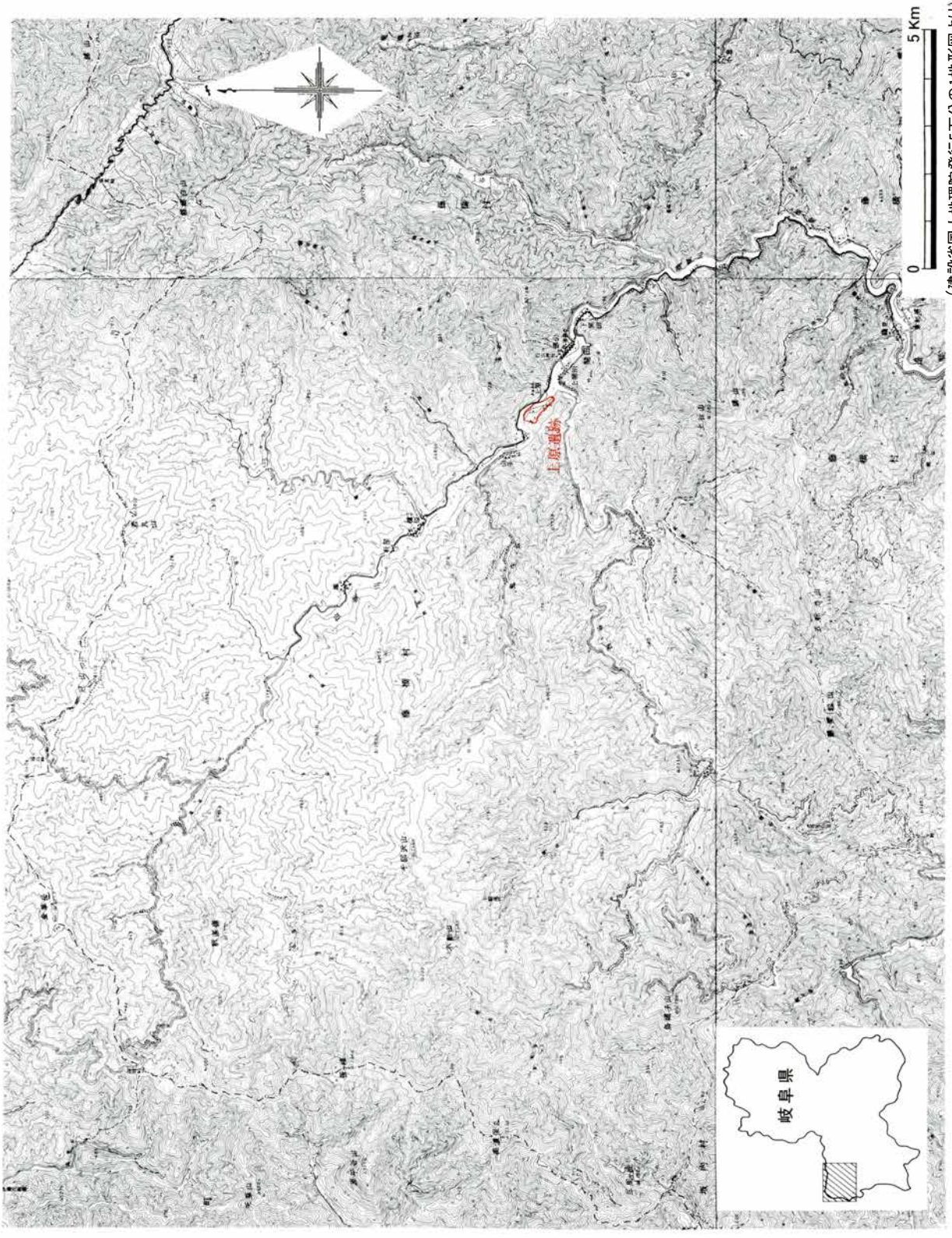
の分布および分布圏……325
第200図　ヒスイ原石の元素比値 Na/Si 対 Mg/Si の分布および分布圏 …… 326
第201図　上原、戸入村平、小の原遺跡出土玉類の Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布 …… 327
第202図　上原、戸入村平、小の原遺跡出土玉類の Ca/Si 対 Sr/Fe の分布 …… 328
第203図　上原、戸入村平、小の原遺跡出土玉類の Na/Si 対 Mg/Si の分布……329
第204図　上加世田遺跡出土玉類石材のＥＳＲ信号……330
第205図　上原遺跡第１地点出土№10：玦状耳飾のＥＳＲ信号……331
第206図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾１(55696)の蛍光Ｘ線スペクトル…331
第207図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾２(55697)の蛍光Ｘ線スペクトル…331
第208図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾３(55698)の蛍光Ｘ線スペクトル…332
第209図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾４(55699)の蛍光Ｘ線スペクトル…332
第210図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾５(55700)の蛍光Ｘ線スペクトル…332
第211図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾６(55701)の蛍光Ｘ線スペクトル…333
第212図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾７(55702)の蛍光Ｘ線スペクトル…333
第213図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾８(55703)の蛍光Ｘ線スペクトル…333
第214図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾９(55705)の蛍光Ｘ線スペクトル…334
第215図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾10(55706)の蛍光Ｘ線スペクトル…334
第216図　上原遺跡第１地点出土垂飾11(55707)の蛍光Ｘ線スペクトル…334
第217図　戸入村平遺跡出土垂飾14(55710)の蛍光Ｘ線スペクトル…335
第218図　戸入村平遺跡出土垂飾15(55711)の蛍光Ｘ線スペクトル…335
第219図　小の原遺跡出土管玉16(55712)の蛍光Ｘ線スペクトル…335
第220図　小の原遺跡出土玦状耳飾17(55713)の蛍光Ｘ線スペクトル…336
第221図　小の原遺跡出土玦状耳飾18(55714)の蛍光Ｘ線スペクトル…336
第222図　第３地点出土土器（追加）……347

表　目　次

第１表　上原遺跡第１地点出土石器類一覧表 …… 64
第２表　第１地点出土縄文土器分類別一覧表 …… 67
第３表　石鏃の分類別出土点数 …… 166
第４表　石錐の分類別素材剥片点数 …… 170
第５表　打製石斧の石材別出土点数 …… 176
第６表　磨製石斧の石材別出土点数 …… 179
第７表　磨製石斧の分類別出土点数 …… 179
第８表　剥片の石材別出土点数 …… 181
第９表　ＲＦ分類別出土点数 …… 182
第10表　ＵＦ分類別出土点数 …… 183
第11表　打欠石錘出土状況別点数 …… 184
第12表　打欠石錘石材別出土点数 …… 184
第13表　切目石錘出土状況別点数 …… 185
第14表　切目石錘分類別出土点数 …… 186
第15表　切目石錘石材別出土点数 …… 186
第16表　凹・敲・叩・磨石類の機能一覧表……187
第17表　打製石斧の石材別出土点数 …… 232
第18表　ＲＦ分類別出土点数 …… 233
第19表　ＲＦ分類別出土点数 …… 264
第20表-1　各黒曜石の原産地における原石群の

元素比の平均値と標準偏差値 …… 299
第20表-2　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 300
第20表-3　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 301
第20表-4　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 302
第21表-1　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 303
第21表-2　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 304
第22表　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果 …… 305
第23表　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果 …… 305
第24表　和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果 …… 305
第25表　上原遺跡第１・３地点出土黒曜石製遺物の元素比分析結果 …… 306
第26表　上原遺跡第１・３地点出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果 …… 307
第27表-1　上原遺跡第１・３地点出土黒曜石製遺物の原材産地推定結果 …… 308
第27表-2　上原遺跡第１・３地点出土サヌカイト、下呂石製遺物の原材産地推定結果 …… 309
第28表　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の一覧表 …… 310
第29表-1　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（1）……311
第29表-2　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（2）……311
第30表-1　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果 … 312
第30表-2　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果 … 313
第30表-3　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果 … 314
第30表-4　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果 … 315
第31表　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の原材産地分析結果 …… 316
第32表　本書における土器分類と『縄文土器大観』編年の対応表 …… 340
第33表　上原遺跡の各地点における縄文土器出土量と遺構 …… 340
第34表　上原遺跡第１地点における石器組成表 …… 345
第35表　上原遺跡第１地点他出土石器群の機能系列別点数 …… 345
第36表　上原遺跡第3～6地点出土石器の機能系列別点数 …… 346
第37表　上原遺跡第２地点出土石器の機能系列別点数 …… 346

第１章　遺跡の概要



第1図　徳山地域の地形図

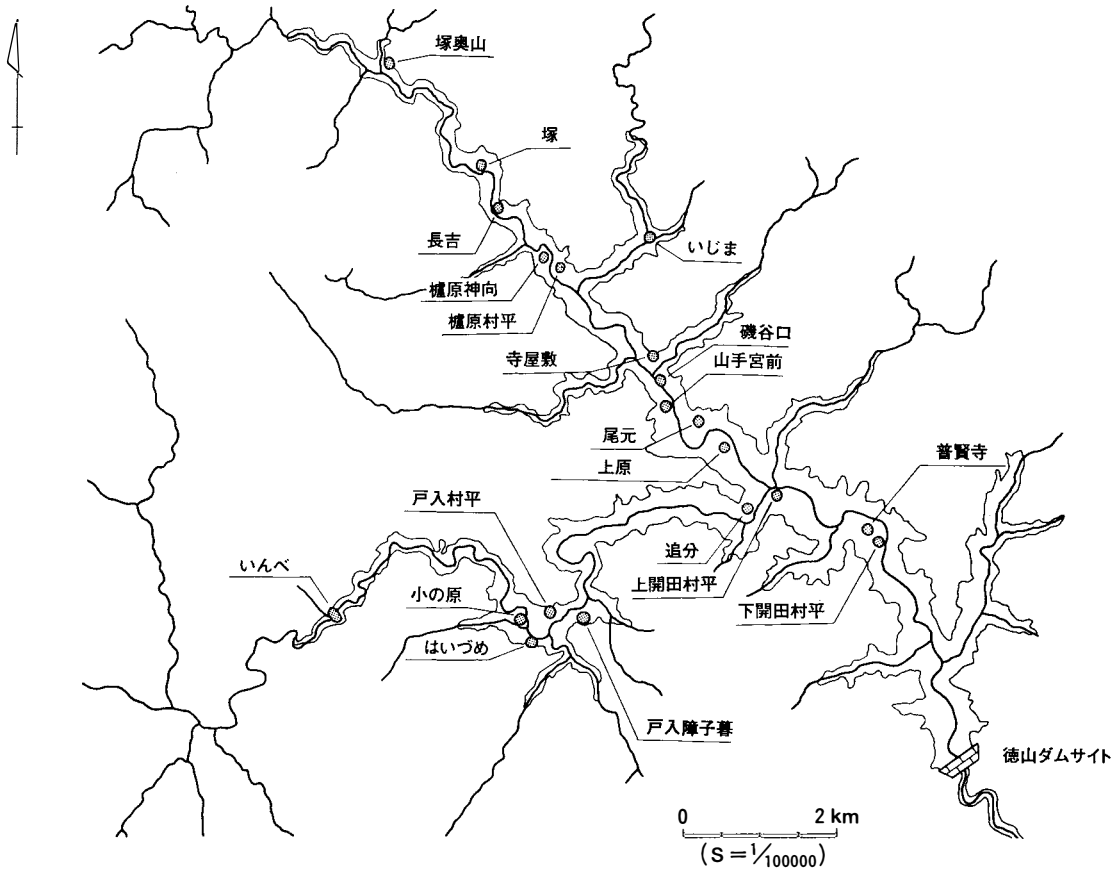
本報告書『上原遺跡II』は、既刊の報告書『上原遺跡Ｉ』の続編である。『上原遺跡Ｉ』で報告した第２地点は、上原遺跡の中位段丘下流部にあたり、本書で報告する第１・３・４・５・６地点とは同一遺跡内の１地点である。地点あたりの調査面積が広く、遺物量が大量であったために先行して報告することとなった。従って『上原遺跡Ｉ』で記載した「周辺の地形・地質」「歴史的環境」「発掘調査に至るまでの経緯」等の内容については本書の記述と重複する。本書ではそれらに関わる詳細な記述は避け、概要のみをまとめて以下に記すことにする。なお重複する内容の詳細については『上原遺跡Ｉ』を参照されたい。

上原遺跡は旧徳山村本郷集落より約１㎞上流の揖斐川本流右岸段丘上に位置している。段丘面積は約75,000㎡と徳山地区でも最も広い面積を有しており、標高は約307～340ｍで、段丘全体を崖錐性堆積物が覆っている。そしてその上に後世の堆積物が広がる形で、高・中・低位の三段階の段丘を形成しており、それぞれに第３地点、第１・２・４・５地点、第６地点がある。この段丘は揖斐川に沿って長くのびており、北西から南東にかけて約450ｍにも達する。しかし、一方背後に迫る山の斜面から揖斐川までの距離は約200ｍほどしかなく、中位段丘上では南西から北東にかけて約160ｍと比較的短い。第３地点がある高位段丘は山裾に広がる位置関係上、比高差約10ｍほど（東西）あるが、最も広い中位段丘は上流から下流にかけて約３ｍほど（標高約307～310ｍ）しか比高差がなく、比較的なだらかな台地状となっている。第６地点がある低位段丘も中位段丘と同じように平坦な地形を形成している。この広大な段丘のうち遺跡面積は約43,000㎡あり、平成２年から平成８年の足かけ７年間で約25,000㎡を調査した。

本遺跡の広がる段丘は、「あげやら」とか「あんぎゃら」と呼ばれ、近現代における土地利用は主に農地であった。中位段丘上下流側の第２地点から第４地点にかけては水田地帯で、上流側の第１地点はその大半が畑地であった。徳山地区で最大の面積を誇りながら、ここには集落が営まれていない。旧徳山村の地区内には現代に至るまで８カ所の集落が存在したが、そのうちのどの集落がある段丘よりも上原は広く日当たりもよい。近現代において集落が営まれなかったのには様々な要因が考えられるが、最も大きいものは水の便が悪かったことである。第３地点の東側に谷筋がみられるが、上原遺跡全体に供給できるだけの水量はない。第２地点を中心に水田が営まれていたのも、近世につくられた潅漑施設である「殿様用水」によるものであった。しかし縄文時代においては、徳山地区最大級の集落が営まれており、時期的にも早期から晩期に至るまで長期的にわたる。

旧徳山村内には平成８年11月現在で、38カ所の遺跡が知られている。そのうち29遺跡が調査対象である。戦前からいくつかの遺跡については報告がなされているが、本格的な発掘調査は昭和62年より行われ現在に至っている。以下簡単にその概要を記す。

現在確認されている徳山地区の歴史は、２万年以上前の旧石器時代から始まる。「寺屋敷遺跡」から出土したナイフ形石器が、姶良火山灰が堆積した層より下層で確認されていることによる。上原遺跡でも１点ナイフ形石器が出土しているが、寺屋敷出土のものよりやや時期が新しい。縄文時代になると多くの遺跡で遺物や遺構が確認されるようになる。そのうち最も古いものは「小の原遺跡」出土の表裏縄文土器と有舌尖頭器で、草創期に属する。早期以降では、各地に遺跡が点在してくる。遺物しか確認できなかった遺跡も含め主なものを以下に羅列する。詳細は『上原遺跡Ｉ』に記載している。



第2図　徳山ダム水没地内遺跡分布図

早期「塚奥山遺跡」「長吉遺跡」「寺屋敷遺跡」「山手宮前遺跡」「尾元遺跡」「上原遺跡」「上開田村平遺跡」「下開田村平遺跡」他

前期「塚奥山遺跡」「櫨原村平遺跡」「尾元遺跡」「上原遺跡」「山手宮前遺跡」「小の原遺跡」「いんべ遺跡」他

中期「塚奥山遺跡」「上原遺跡」「山手宮前遺跡」「下開田村平遺跡」「磯谷口遺跡」「下開田村平遺跡」「塚遺跡」「戸入村平遺跡」「いんべ遺跡」「櫨原村平遺跡」「小屋どこ遺跡」他

後期「塚奥山遺跡」「塚遺跡」「山手宮前遺跡」「上原遺跡」「上開田村平遺跡」「下開田村平遺跡」「いんべ遺跡」「戸入村平遺跡」他

晩期「塚奥山遺跡」「櫨原村平遺跡」「小屋どこ遺跡」「長吉遺跡」「下開田村平遺跡」「山手宮前遺跡」「上原遺跡」「いんべ遺跡」「戸入村平遺跡」他

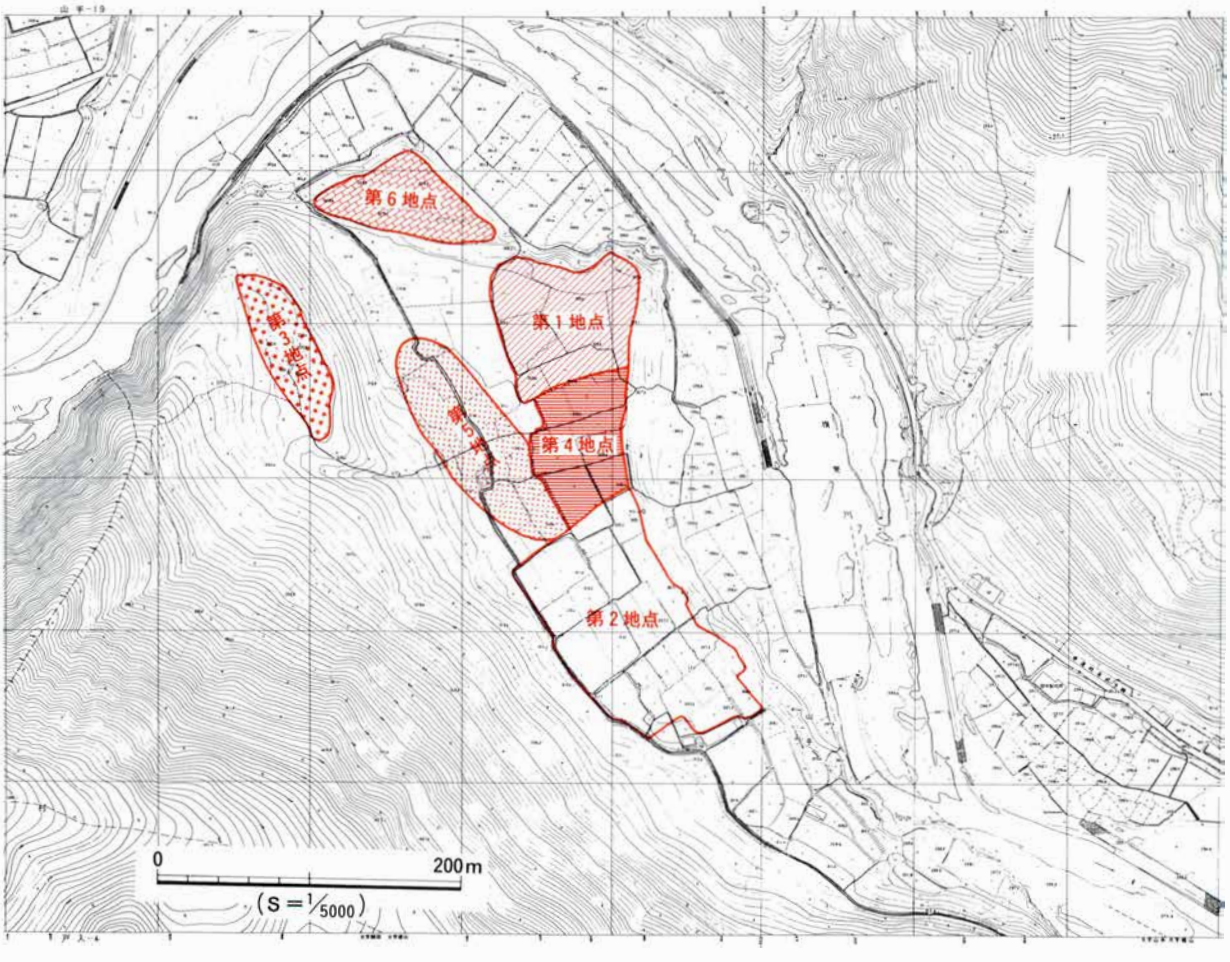
弥生時代時代になると、縄文時代に比べ極端に資料が乏しくなる。現在確認しているものでは「はいづめ遺跡」「上原遺跡」で前期遠賀川系土器が出土しているだけである。最も新しい資料としては「上原遺跡」で中期朝日式～貝田町式土器が確認されている。

古代以降で特筆に値するのは、「寺屋敷遺跡」で平安時代の遺構とその時期の灰釉陶器が確認されていることである。中世以降は各遺跡で山茶碗や古瀬戸、瀬戸美濃系陶器が出土しているが、現時点では詳細不明な点が多い。

第２章　発掘調査の方法と経過

グリッドの設定

本調査にあたっては、上原遺跡の地形に合わせて基準線を設定した。本遺跡では、本書で報告する第１・３・４・５・６地点の調査に先立ち、同一遺跡内にある第２地点（『上原遺跡Ⅰ』で報告）の調査が行われている。第２地点の調査ではその地形に合わせてグリッドを設定している。発掘調査年次や報告書刊行年は異なるものの、同一遺跡であるという性格上、第２地点で設定したグリッドを延長・拡大し、他５地点の基準線を設定することにした。第２地点で設定した基準線は、グリッドの１辺が４ｍで南東から北西に向かってアラビア数字を付し、北東から南西に向かってアルファベット記号を与えるというものであった。他５地点も基本的にはその延長ということで設定を試みたが、アルファベット記号についてはその表示限界を超えたため、さらにＡ′～Ｚ′、ｚ～ａを追加した。追加にあたってはできるだけ混乱を招かぬように、第２地点のＡおよびＺを基準とし、対称となるようにした。Ａより北東へ延びる部分についてはＡ′から順にＺ′を、またＺより南西へ延びる部分については小文字のｚ～ａを付した。なおアラビア数字基準線とアルファベット基準線によって区画されるグリッドの呼称は、基準線の交点である基準杭のうち、山側・上流側のものを採用した。また第１・３・４地点は第２地点同様に、図上での表示はグリッドの１辺が４ｍであるが、第５・６地点は調査方法の違いから１辺８ｍで表示している。



第3図　遺跡周辺地形図

発掘調査方法と経過

第１・３・４・５・６地点の発掘調査は、第２地点の調査が終了した翌年の平成６年度から開始し、平成８年度まで３年間行われた。各地点の調査年次と調査面積は以下に示すようである。

第１地点	平成７年度	3,200㎡	
	平成８年度	3,400㎡	計6,600㎡
第３地点	平成６年度	1,388㎡	
	平成７年度	2,016㎡	計3,404㎡
第４地点	平成６年度	2,827㎡	
第５地点	平成６年度	958㎡	
第６地点	平成７年度	1,190㎡	合計　14,979㎡

調査の方法と経過については各地点で異なるため、個々に記述することにする。

第１地点

平成７～８年度の２年間調査した。調査は本地点内のＪ′～Ｋ′列を境界とし、山側部分と川側部分に分け、それぞれ約７ヶ月間ずつ費やして行った。掘削はすべて人力で実施し、遺物の取り上げは、第Ⅰ層はグリッドごとに、また第Ⅱ層以下についてはサイトシステムによって、その出土位置・遺物に種類などを記録しながら行った。土層セクション図のほか、遺構平面図・断面図などの作成は必要に応じて実施し、写真による記録を行った。発掘調査区全体の遺構プラン図作成および写真の撮影は、実機のヘリコプターを使用しての空中写真測量によって実施した。平成７年５月より、第１地点のほぼ半分にあたる山側部分の調査を開始した。同年11月まで調査を行い、遺構数十基を検出し、土器・石器類を約１万6,000点確認した。検出した遺構は縄文時代のものがほとんどで、竪穴住居跡８軒をはじめ、土坑５基、ピット18基、集石遺構５基、その他の遺構７基である。山側部分での遺構検出は困難を極めた。また掘削でも土量が多く、かなり多くの時間が費やされた。翌平成８年度は川側部分の調査を平成８年５月より開始した。その結果、土坑４基、ピット13基、集石遺構２基、その他の遺構４基を確認した。川側部分は試掘の結果から予測したとおり、遺物包含層の堆積は浅く、検出できた遺構は少なかった。それに伴い、遺物の出土量も少なく約6,000点ほどであった。１４ヶ月の調査期間で実際に調査を行えた日数は約210日ほどしかなかったが、足かけ２年と延べ調査員４人を要した第１地点の現場での調査は平成８年11月末日で終了した。

第３地点

平成６～７年度の２年間調査した。初年度の平成６年度は第５地点終了後の７月から調査に入った。調査は南北方向にｗ列・ｏ列、東西方向に99列・89列の４本のトレンチを井桁状に設定し、土層の確認を行うとともに、遺物確認および遺構検出をはかることを目的とした。掘削はすべて人力で実施し、遺物の取り上げは出土したグリッドと層位を記録しながら行った。土層セクション図のほか、遺構平面図・断面図などの作成は必要に応じて実施し、写真による記録を行った。発掘調査区全体の遺構プラン図作成は人力で、地点全体の写真の撮影は、模型ラジコンヘリコプターを使用して実施した。その結果、約1,100点の遺物が出土し、ピット群を１カ所、土坑を２基、焼土をはじめとするその他の遺

構を数基検出した。翌平成７年度は、前年に調査した４列の範囲のうち、さらなる遺物の出土および遺構検出が期待される箇所を拡大し、北東部を集中的に掘削した。その結果、１基の土壙を検出し、約600点の遺物を確認した。平成７年９月からは第６地点の調査が開始したため、作業員数を縮小して調査を続けた。11月には重機による確認のための掘削を行い、平成７年11月末日をもって第３地点の調査を終了した。

第４地点

平成６年度に調査した。調査は第１地点へとつながる通路を挟み山側部分と川側部分に分けて開始した。両部分とも第Ⅰ層表土のみを重機で除去し、第II層以下を人力によって掘削した。両部分ともに慎重な調査を行ったが、山側部分からは遺物は出土せず、また遺構も検出できなかった。一方川側部分からは少量ではあったが比較的良好な状態で遺物が出土していたので、集中して調査を進めた。遺物の取り上げはすべて出土したグリッドと層位を記録しながら行った。土層セクション図のほか、遺構平面図・断面図などの作成は必要に応じて実施し、写真による記録を行った。発掘調査区全体の遺構プラン図作成および写真の撮影は、模型ラジコンヘリコプターを使用しての空中写真測量によって実施した。そうした調査の結果、約1,000点の遺物が出土し、竪穴住居跡１軒、土坑６基、ピット22基、焼礫集積遺構１基等を検出した。川側部分を段丘礫層まで掘削した後、最後に土層観察用の畦を取り除き、平成６年11月に調査を終了した。

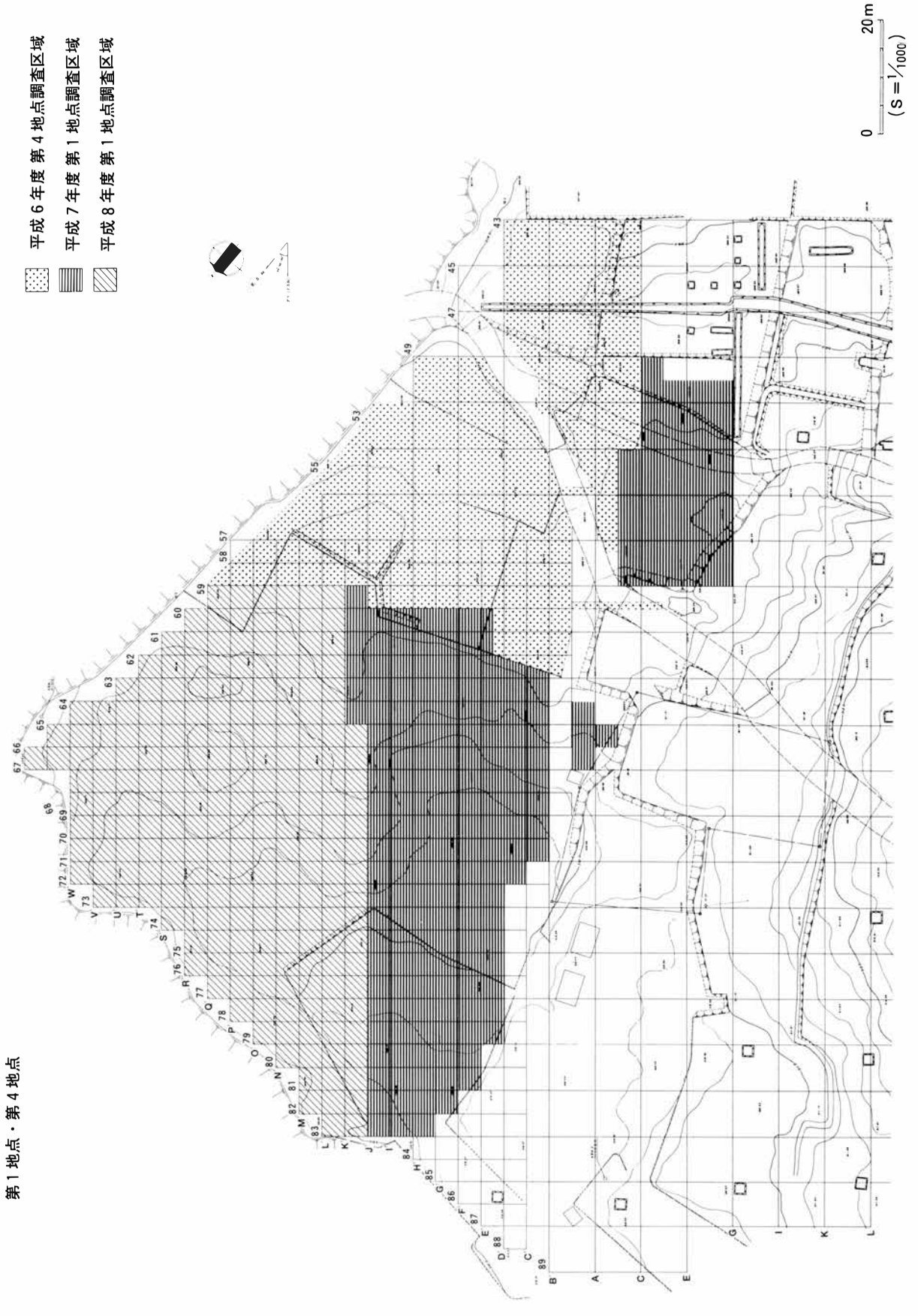
第５地点

平成６年５月から７月の２ヶ月間調査した。調査では崖錘およびアカホヤ火山灰を含む黒色土の残る範囲の確認と、その黒色土中に含まれる遺物の確認と遺構検出を目的とした。崖錘までを重機で除去し、黒色土以下を人力によって掘削した。遺物の取り上げはすべて出土地点と層位を記録しながら行った。土層セクション図のほか、遺構平面図・断面図などの作成は必要に応じて実施し、写真による記録を行った。その結果、土器・石器類を53点確認し、焼礫集積遺構２基を検出した。

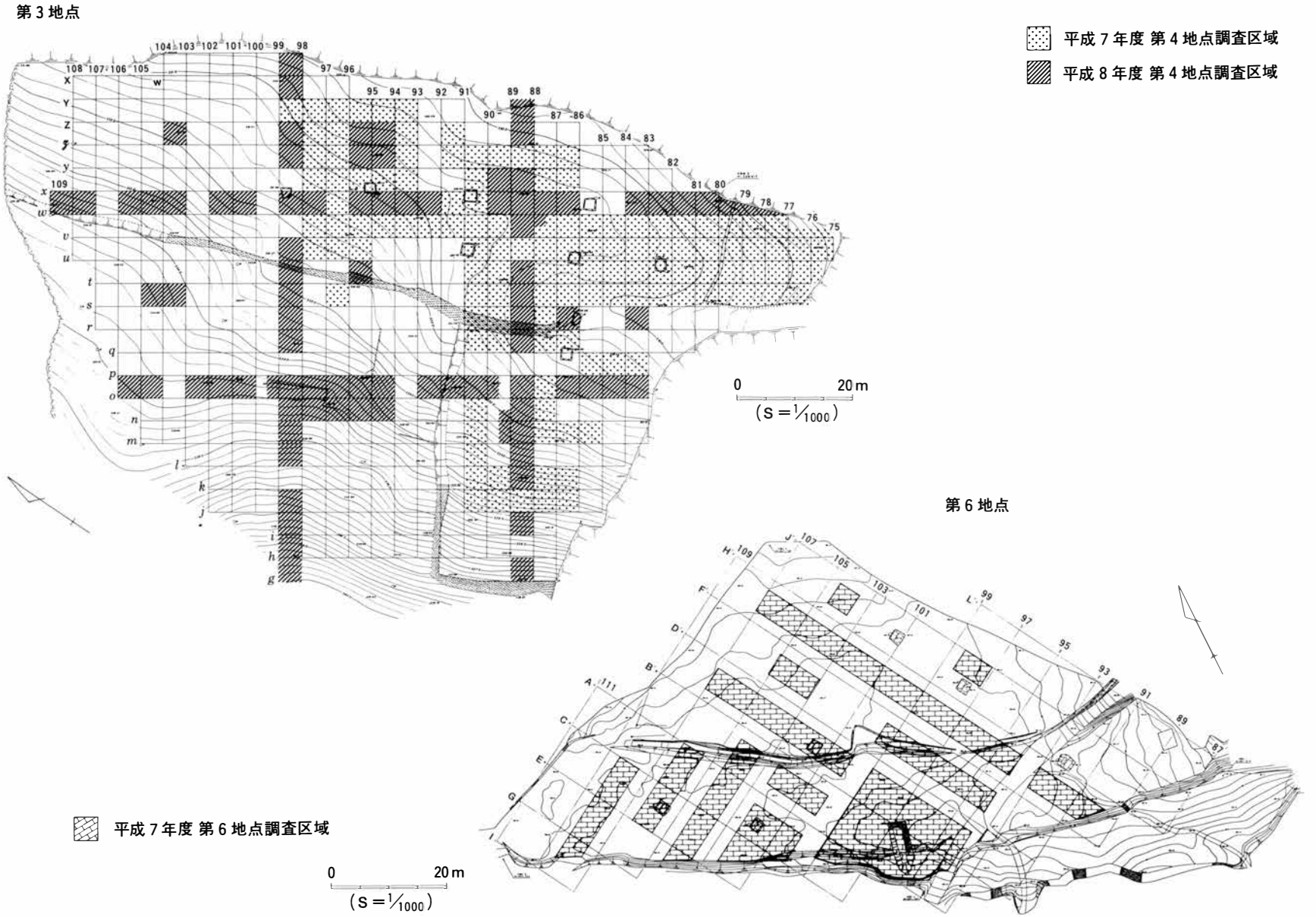
第５地点　土層はぎ取りの様子

第６地点

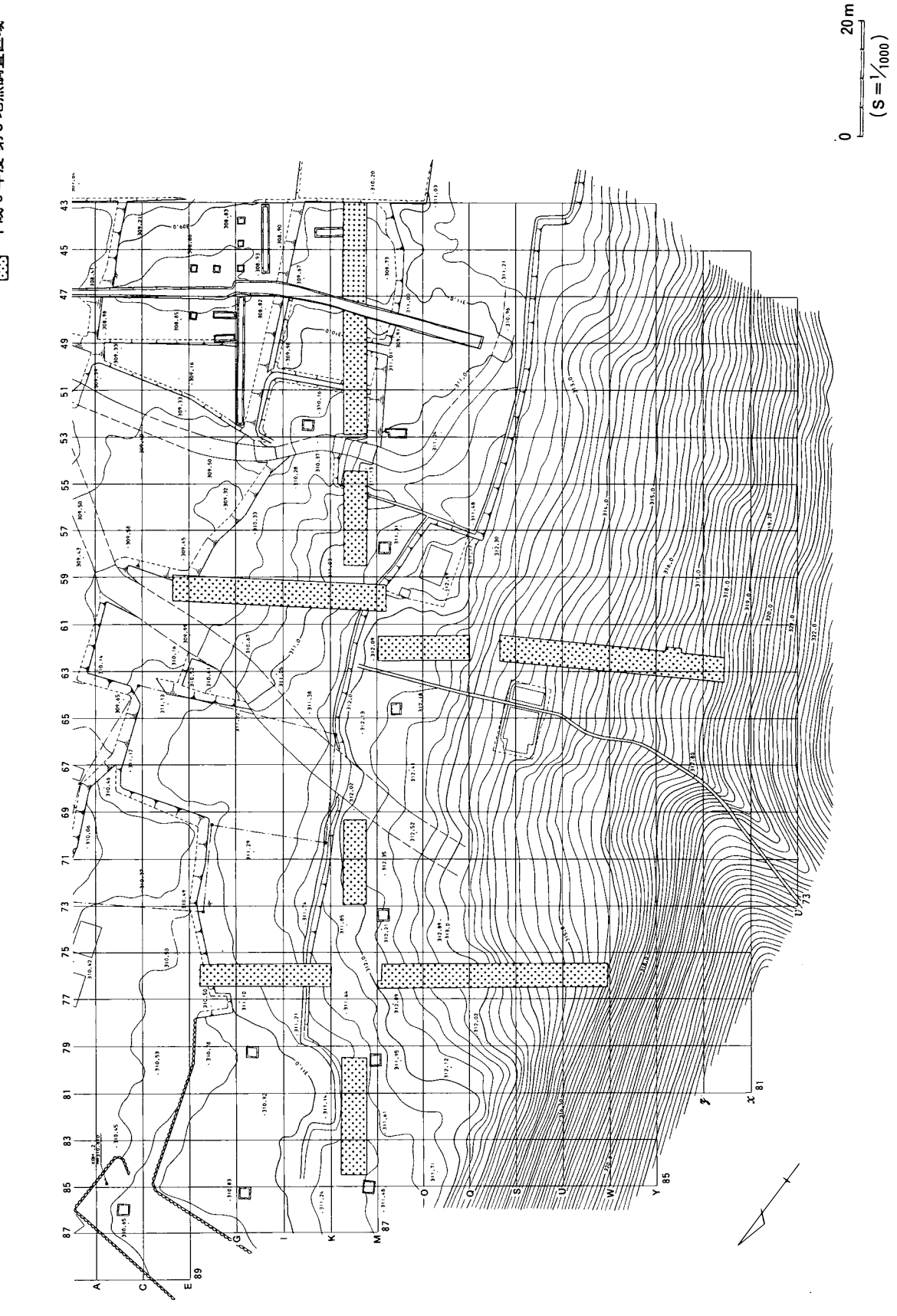
平成７年９月から２ヶ月間調査した。基準線に沿い９本のトレンチを設定した。調査では土層を観察しながら、黒色土層まで重機で掘削した。その後、慎重に人力で掘削を続けながら、土層セクションを記録した。重機で掘削した排土等も調べた結果、120点の土器・石器類を確認した。しかし遺構は検出できなかった。複雑な堆積状況下にあったため、土層の記録は手間取ったが、平成７年11月で調査を終えた。



第４図　第1･4地点グリッド設定および年度別調査区域図



第5図　第3・6地点グリッド設定および年度別調査区域図



第６図　第5地点グリッド設定および年度別調査区域図

第　1　地　点

第3章　第1地点

第1地点は上原遺跡の中で最も広い中位段丘の最上流部に位置する。さらに上流部には低位段丘の第6地点と高位段丘の第3地点がある。

本地点の近現代における土地利用の大半が畑作であり、下流部の第4地点に近いあたりに少し旧水田が残るだけである。調査前の表土面には境界線となる石列が縦横に作られていたのが確認できた。同じく中位段丘上にある下流側の第2地点や第4地点の土地利用は水田であったのに比べて、本地点の大半が畑地として利用されていたのは、最上流部に位置する関係上、水の便が悪かったためである。前述したが、上原遺跡は徳山地区最大の揖斐川本流沿いの段丘でありながら、近現代において集落が営まれていない理由の一つにもその利水が挙げられる。

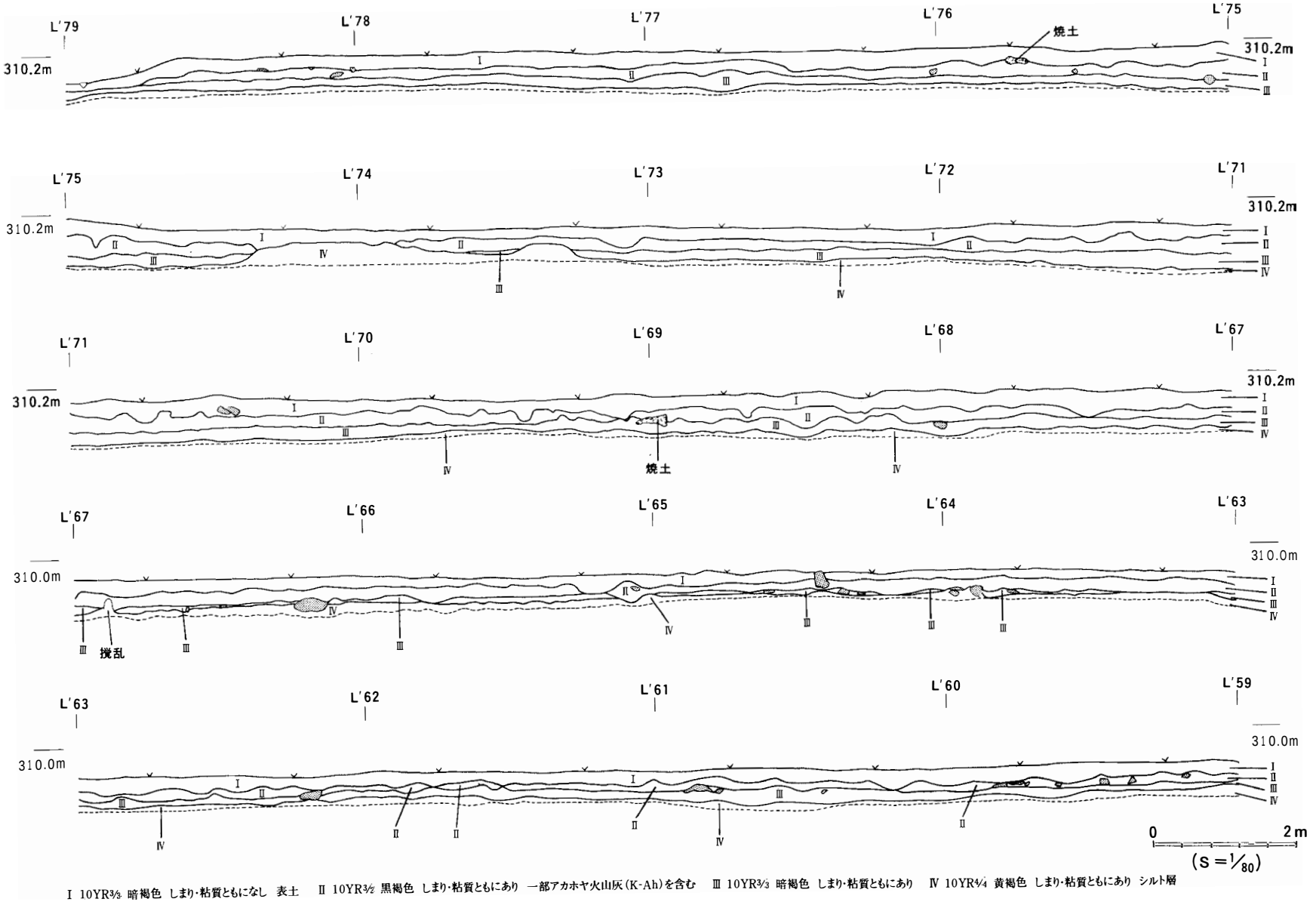
本地点は中位段丘が揖斐川に向かって突き出した形になっている三角形状の台地を含む地点で、最も現揖斐川に接近している。他の2・3・5・6地点とは異なり、南西に控える山からもやや離れており、崩積性堆積物の影響もあまりみられない。本地点の標高はおよそ309.5m～310.4mである。上流に行くほど微妙に高くなっているが、表土面は本地点全体を通してほぼ平坦といえる。上原遺跡の中では最も風の通りがよく、また日当たりもよい地点である。

第1節　層序

前述のように本地点は東西方向にも南北方向にもほぼ平坦な地形である。しかし表土面以下の堆積状況は一様ではなく、厚く堆積しているところもあれば、表土から数cmで段丘礫層に達してしまう箇所もある。H′列からL′列にかけての中央部付近の堆積が最も厚く、第6地点に近い上流側と段丘の縁にあたる川側が浅い。

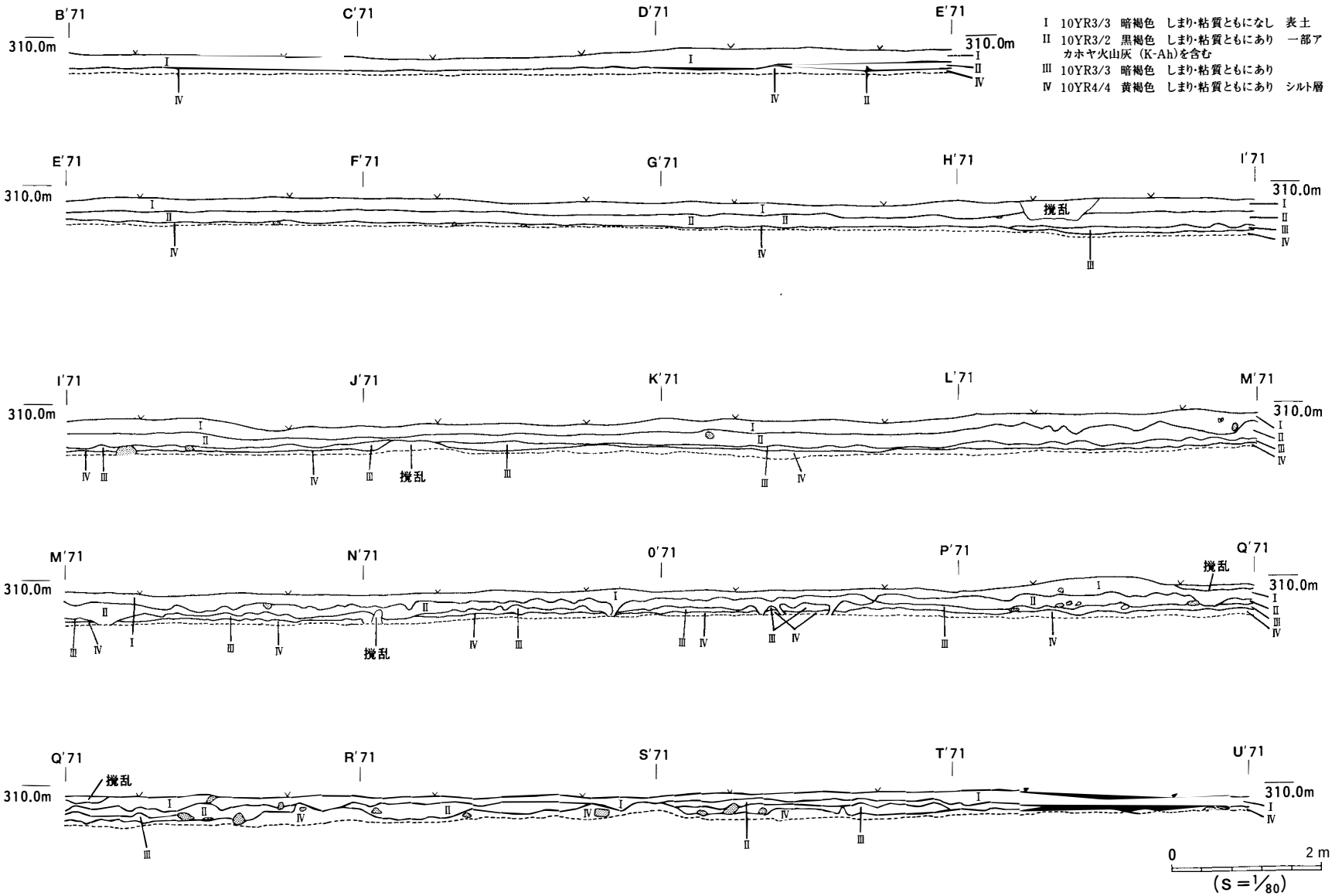
本地点の層序は、第Ⅰ層～第Ⅳ層で構成されている。既刊の報告書『上原遺跡Ⅰ』に記載されている上原遺跡全体を貫く基本的層序に該当する。第Ⅰ層は暗褐色の表土である。やや砂質で、細かい植物の根等が多く入り込んでいる。第4地点に近い下流側で旧水田に伴う敷土（Ⅰ′）が確認できる部分がある。この第Ⅰ層は、水田耕作や畑作により常に撹乱を受けていたと思われる。第Ⅱ層は黒褐色土である。本地点の山側部分では比較的安定した堆積状況で、川側へ向かうにつれて薄くなりやがて消滅する。第Ⅱ層の下部ではアカホヤ火山灰（K-Ah）を検出している。第Ⅲ層は暗褐色土である。第Ⅱ層同様に比較的安定した堆積を示している。これら第Ⅱ・Ⅲ層は遺物包含層である。前者からは縄文時代前期後葉の遺物が多く出土しており、この時期の生活面を含む層と思われる。後者からは早期の遺物を中心に出土しているが、第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけての漸移層としての性格が強い。第Ⅳ層は黄褐色シルト層である。下方へ向かうほど砂質になり、確認できた最下部では段丘礫と思われる円礫を含んでいる。無遺物層である。

第1地点堆積状況（L′列土層）



第7図　第1地点列L'西壁土層図

Ⅰ 10YR3/3 暗褐色 しまり・粘質ともになし 表土　Ⅱ 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘質ともにあり 一部アカホヤ火山灰(K-Ah)を含む　Ⅲ 10YR3/3 暗褐色 しまり・粘質ともにあり　Ⅳ 10YR4/4 黄褐色 しまり・粘質ともにあり シルト層

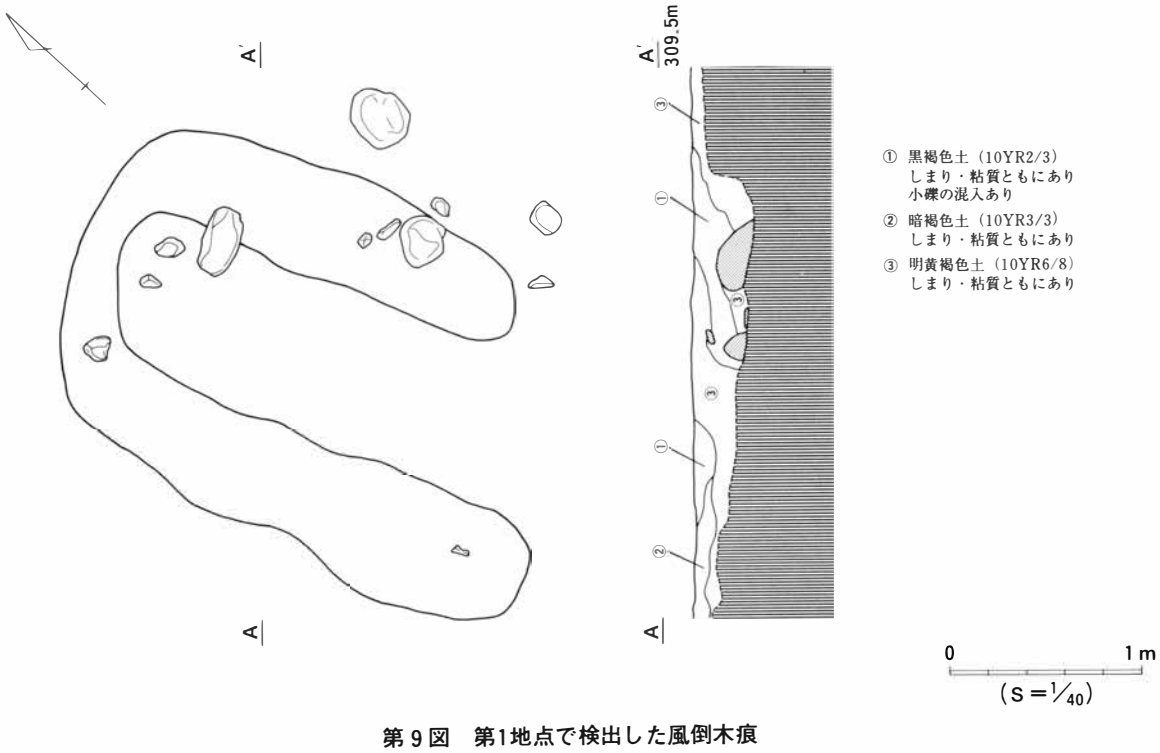


第8図　第1地点71列南壁土層図

第２節　遺構

今回調査した第１地点では、近現代において畑作が行われていた。本地点内を縦横に走る境界線の石列があり、表土だけでなく第II層も上方は全体的に軽い撹乱を受けていた。さらに下方の遺構面に至っても多くの風倒木痕（第９図参照）があり、第Ⅳ層にまで到達する深い撹乱も少なくなかった。また縄文時代前期後葉～末葉の遺物包含層にあたる第II層は、遺構が集中する箇所では比較的厚く堆積しているので、黒褐色土中に黒褐色埋土・覆土を持つ遺構が存在することになり、遺構検出は困難を極めた。竪穴住居跡のような比較的大きな遺構は風倒木痕などを破壊する形で掘り込まれていたし、埋土・覆土の堆積状況も一様でないので、比較的検出しやすかったが、わりと大きな撹乱によって埋没してしまうような小型の遺構の検出は大変困難であった。しかし、そうした中でも何とか数十の遺構を検出した。ほとんどの遺構がその検出状況からみて縄文時代のものと考えられるが、中には時期が不明であったり、近現代の土地利用の際のものであろうと考えられるものもあったりする。検出した遺構は竪穴住居跡８軒、土坑40基、集石遺構７基、遺物集積５件、その他の遺構11基である。

本地点における竪穴住居跡は、検出時のプランが明確であるもの、その埋土・覆土から出土した遺物に比較的まとまりのあるもの、プランの内外に柱穴の可能性のある小型土坑を持つもの、の３点を基準として判断した。形状等から住居跡に近いものも数基検出したが、基準を満たさないものはあえて竪穴状遺構とし、その他の遺構（ＳＸ）に分類した。検出した住居跡はその出土した遺物から判断して、すべて縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。住居跡の規模は径が約４ｍ前後と標準的である。形状は皿状を呈し、掘り込みは浅いものが多い。床面近くには数基の小型土坑が検出できたが、柱穴であるかどうか明確でないものもある。地床炉や石組炉を持つものもあるが、基本的には屋内施設を持たない構造である。床面に張り付く形で石皿が備え付けられているものもある。



第９図　第1地点で検出した風倒木痕

土坑は全部で40基検出したが、そのうち大型のものを土坑（ＳＫ）、小型のものをピット（Ｐ）とした。ＳＫは９基、Ｐは31基検出した。ＳＫ９基のうち３基には遺物の埋納があり、土壙（墓）の可能性がある。その他６基はほとんど遺物を包含していなかった。規模はすべて１ｍ前後で、中には礫が混入していたり、第Ⅳ層に至るまで比較的深く掘られていたりするものもある。Ｐはそのほとんどが遺物を包含していない。従って厳格な意味においては、その帰属時期は決定できない。しかし、表土より手掘りで慎重に掘削を進めていった過程の中で、どのＰも上層よりの掘り込みは認められず、遺構面付近でやっと検出できた。こうした状況を鑑みると、後世のものと考えるより住居跡が構築された時期の所産であると判断することがより妥当であろうという結論に達し、縄文時代の遺構として報告することにした。詳細は不明であるというのが、正直な見解である。

ここで報告する集石遺構は、縄文時代早期にみられるような、屋外調理施設である焼礫集積遺構というよりは、むしろ「意図的に礫を集中させているもの」という包括的な概念で規定している。本地点では、集石遺構のように見える礫集中区を数箇所検出した。しかし、その多くがプランを持たなかったり、表面的に小礫が自然に集中したに過ぎなかったりしたものであった。ここで集石遺構として取り上げた７基は、礫の大小はあるものの、意図的に配したとまではいかなくとも集中させたと考えられるもの、遺跡全体を見渡した上で不自然と思われたものである。遺物はほとんど包含しておらず、時期の決定は困難であったが、Ｐと同様の根拠により縄文時代のものとした。礫が一目で被熱していると判別できるものはないが、その可能性のあるものや集中箇所の中に焼土を持つものなどがある。規模は様々である。７基のうち５基は住居跡が混在する箇所にある。

遺物集積は、他の遺構のような当時の地表面への掘り込み等を持たず、包含層中に遺物が集積している状況を報告するものである。包含層からはこれらの他にも多くの遺物が出土しているが、ここに取り上げた５件は、特にその出土状況に意味を持つものであると判断し、掲載することにした。その内訳は、土器関連が３件、石器関連が２件である。それぞれの意義については個々に説明を後述する。

その他の遺構は、上記の範疇に入らないもの、また、詳細が不明なものを包括した。11基の内、３基は住居跡の規定を満たさなかった竪穴状遺構であり、ほか７基は土坑状遺構、集石状遺構、自然流路等である。不明遺構であるが故に当然その帰属時期はほとんどが決め手に欠けるが、９基を縄文時代の遺構、残り２基は近現代の遺構と判断した。

１．縄文時代の遺構と遺物の分布

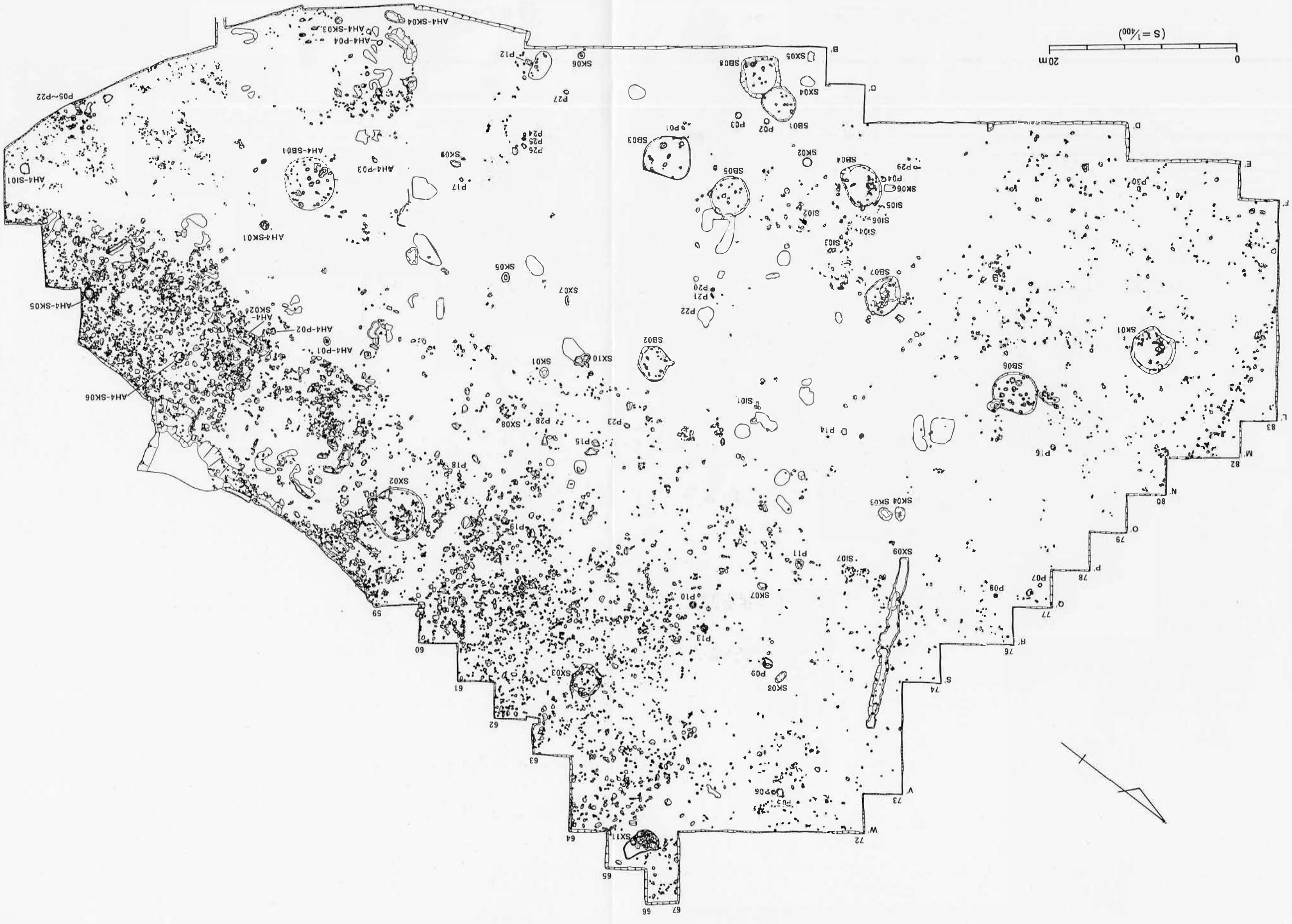
前述のように縄文時代の遺構は、竪穴住居跡８軒、土坑40基、集石遺構７基、遺物集積５件、その他の遺構９基である。順次個々に説明を加える。

竪穴住居跡（ＳＢ）

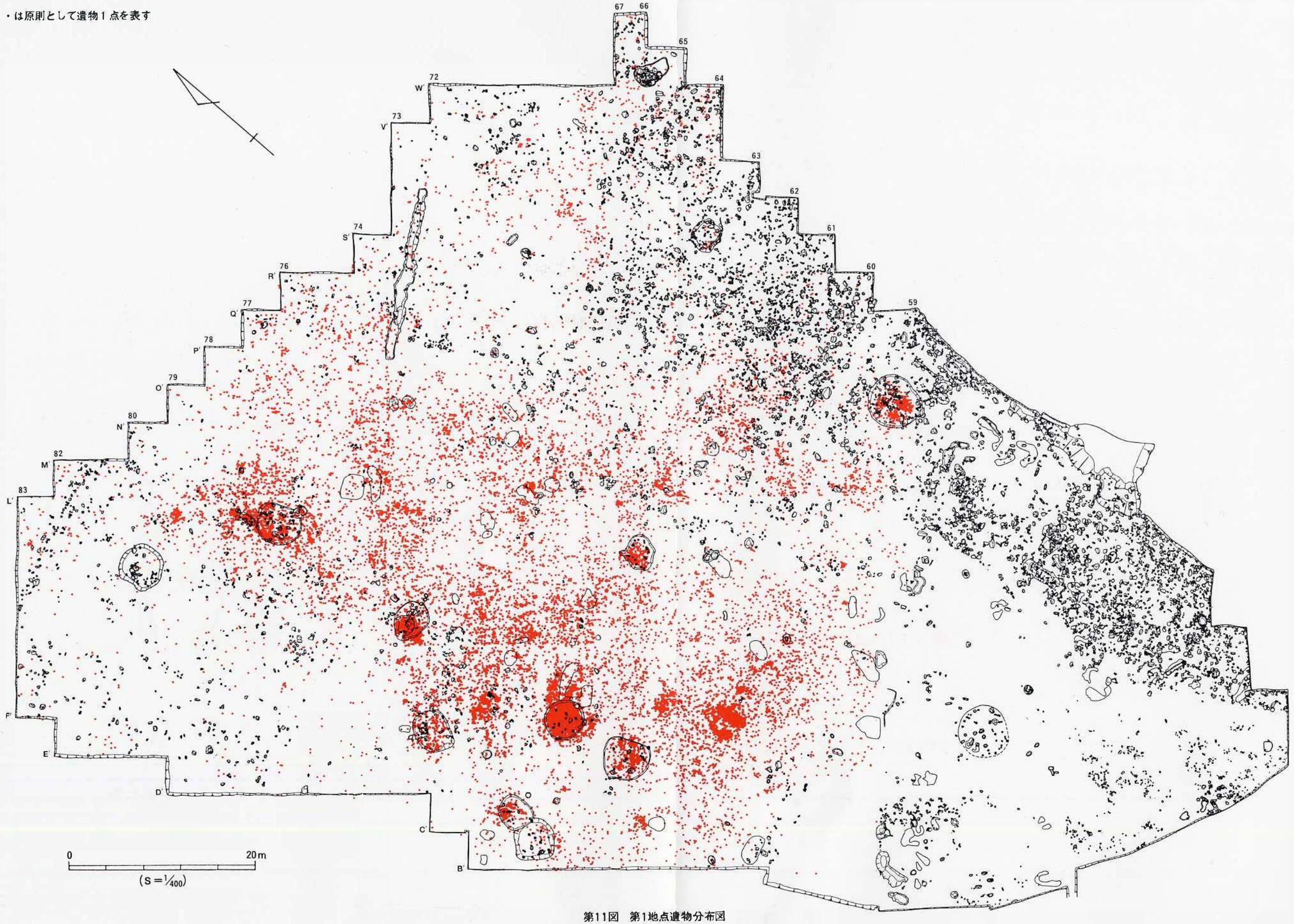
第１号住居跡（ＳＢ01）〈第12～14図　図版１〉

Ｃ′70～Ｃ′71グリッド第Ⅱ層中で検出した。表土より20cmほど掘削したところで、黒褐色土プランがおぼろげながら確認できた。検出レベルは第Ⅱ層最上部である。検出面上部では、薄手の土器片や炭化物が集中する箇所を確認した。精査を繰り返す中で次第にプランが明確になってきたので、四分

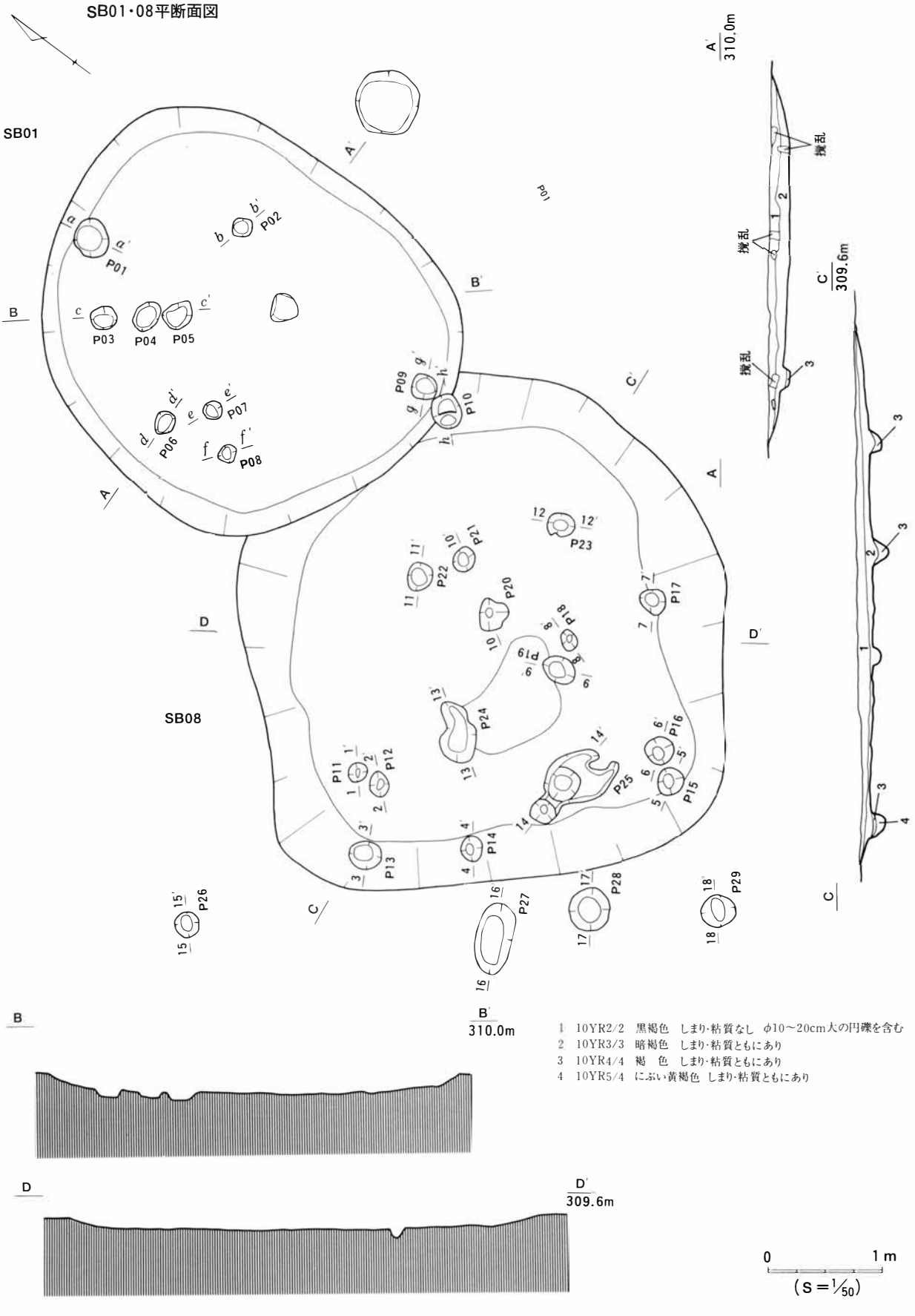
第10図　第1・4地点遺構配置図



・は原則として遺物１点を表す

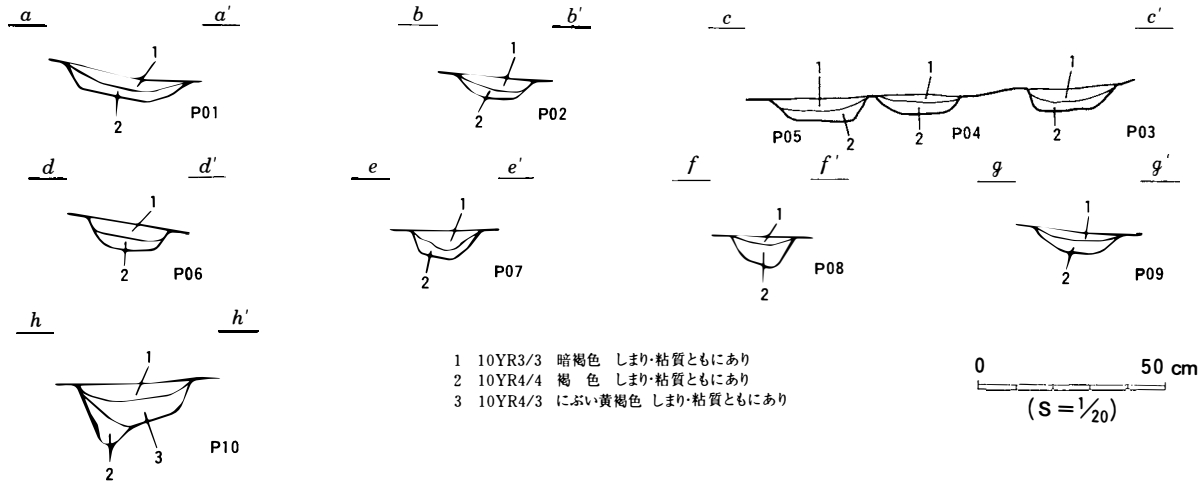


第11図　第1地点遺物分布図

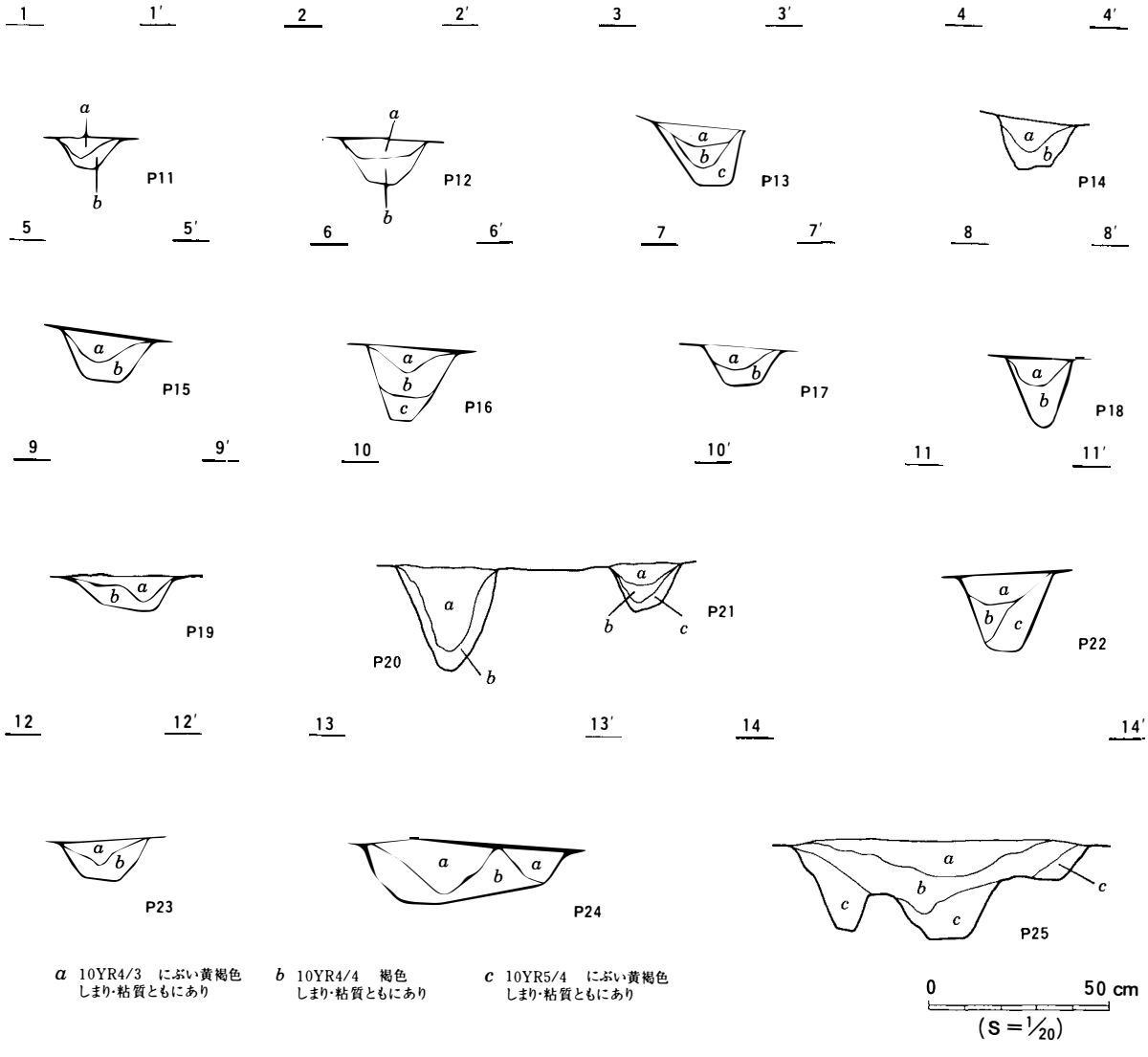


第12図　SB01・08実測図(1)

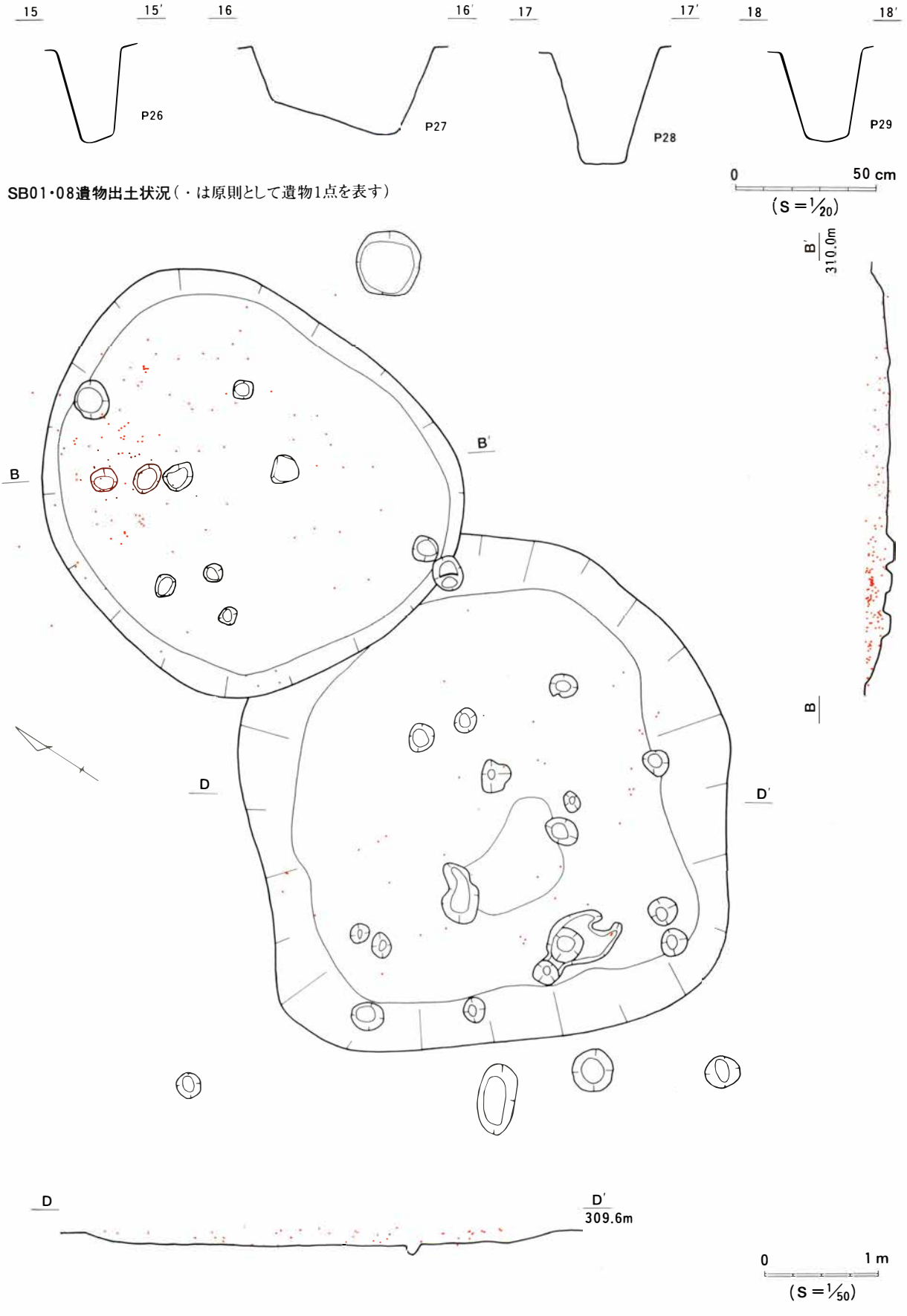
SB01ピット断面図（基準となる標高はすべ



SB08ピット断面・エレベーション図（基準となる標高はすべて309.6m）



第13図　SB01・08実測図(2)



SB01・08遺物出土状況（・は原則として遺物1点を表す）

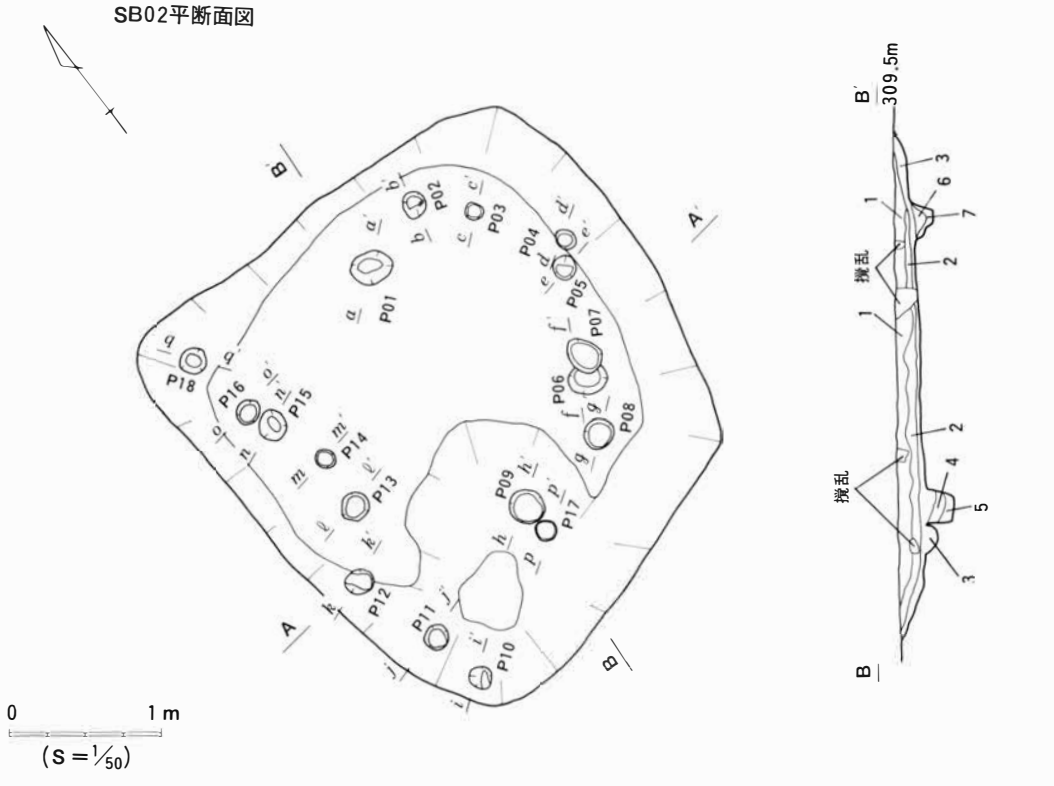
第14図　SB01・08実測図（3）

法により調査を進めたところ、径約3.2～3.5ｍの不整円形のプランを持つ住居跡を検出した。上場は比較的はっきりしているが、明確でない部分もある。断面形は上場からなだらかに床面へ向かう皿状を呈しており、深さは中央部で約20㎝とかなり浅い。床面付近からは10個のピットを検出した。硬化面及び若干の凹地らしき箇所は見られたものの、炉跡・焼土は確認できなかった。ピットは径15～30㎝、深さ10㎝程度の浅いもので、半割した断面から褐色の一次埋土と暗褐色の二次埋土（覆土）が確認できた。遺物は北側半分より集中的に出土している。168点出土した遺物のうち、土器は114点、石器は54点である。土器を大別すると、薄手の北白川下層Ⅲ式土器とやや厚手の十三菩提式土器が確認できる。両者は埋土中より渾然一体となって出土した。住居跡の埋土は上下二層に分けられるが、同一個体が両層より出土しているため、両層に時期差を設定することはできなかった。接合後、分類し18点を図示した。石器は、凹・敲・叩・磨石類が４点、石皿２点、打欠石錘４点、切目石錘３点、微細な剥離痕を有する剥片（ＵＦ）１点、剥片類40点の合計54点が出土した。凹・敲・叩・磨石類の内訳は、表面に敲打痕のみ認められるもの（８）、表裏に凹み・表面と側面に敲打痕・表面に磨痕が認められるもの（９）、表面と側面に敲打痕・表面に磨痕・長軸の下端部に叩きを有するもの（10）、表面に凹みと磨痕・表裏両面と側面に敲打痕・長軸の両端部に叩きを有するもの（11）が各１点ずつであった。２点の石皿は、いずれも平板状を呈するが、全体に磨滅するものと、磨面および敲打痕が不明瞭なものである。このうち１点は、覆土上層中の最上部からの出土である。また、本来なら石皿とセットでとらえられるべき９は、使用による磨痕が側面まで回っており、平板状の石皿とのセット関係をうかがうことはできない。むしろ断面が凹状の石皿とのセットを考えるべきであろう。10・11も磨面を有するが、どれもわずかな痕跡を留めるのみであり、頻繁な使用の痕跡はみられない。打欠石錘は、砂岩製（１・２）と泥岩製（３・４）であり、サイズや質量において数値的に規格性はみられないことから、関連を見出すことはできない。切目石錘（５～７）は、３点とも泥岩製であるが、完形品は１点のみで他の２点は半折している。ＳＢ01については、採取した球根・根茎類や堅果類などの加工・調理工程に使用するものが中心で、狩猟具の出土がみられないことがこの遺構の特徴といえる。なお、出土した遺物から判断すると、本住居跡は縄文時代前期後葉～末葉に帰属すると考えられる。

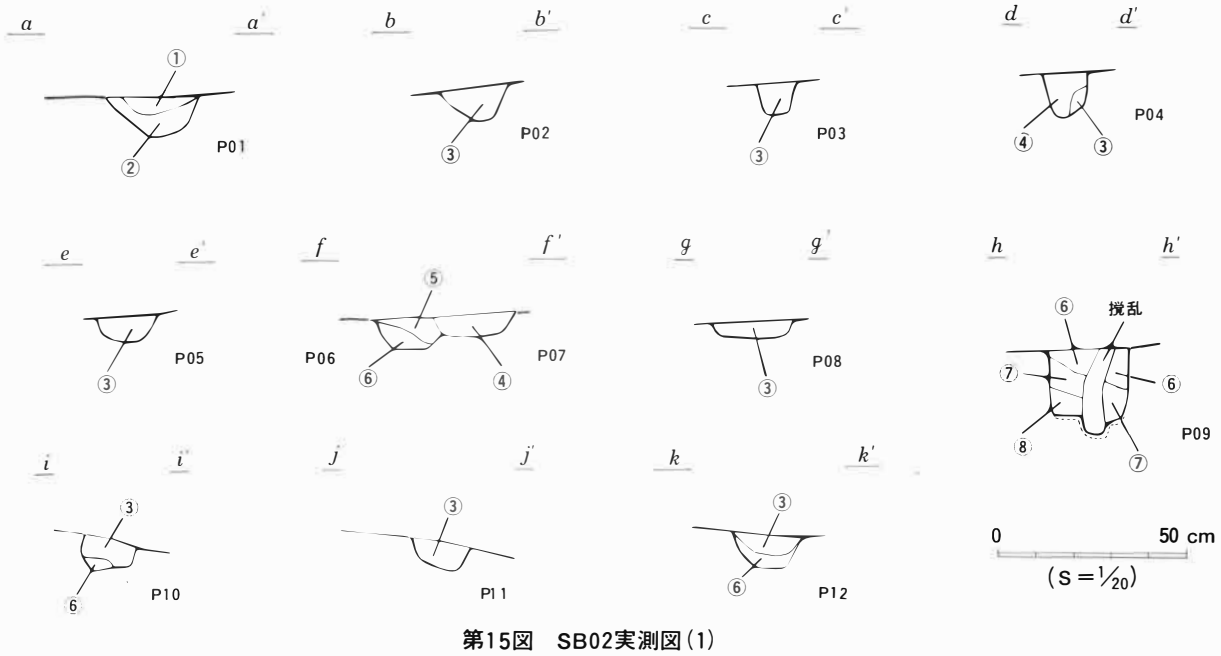
第２号住居跡（ＳＢ02）〈第15～16図　図版１〉

Ｉ′67～Ｊ′67グリッド第Ⅱ層中で検出した。ＳＢ01同様、表土より20～30㎝ほど掘削した第Ⅱ層最上部で黒褐色土プランを確認した。完掘した住居跡の平面形は一辺約3.5ｍの隅丸方形である。断面は浅い皿状を呈している。ピットは径20～30㎝のものが16基確認できた。Ｐ01には床面レベルの焼土があり、地床炉であった可能性がある。竪穴の南西の法面にあるＰ11は、斜めに掘られている。このピットを柱穴であると仮定すれば、柱が内側に向いて立てられていたことになる。またＰ09～12付近の床面は、凹地になっており硬化していた。焼土が北側にある位置関係から類推すると、この凹んだ硬化面が竪穴住居の入り口にあたる可能性がある。本住居跡より出土した遺物は全部で164点であり、そのうち土器は124点である。埋土は上下二層に分けられるが、やや大きめな破片である1028を初めとして、多くの遺物が上層に含まれる。特徴のある文様を持つ土器としては、縄文突帯を有するものや北白川下層式固有の特殊突帯を有するものがある。接合後、分類し36点を図示した。石器は、石鏃１点、ヘ

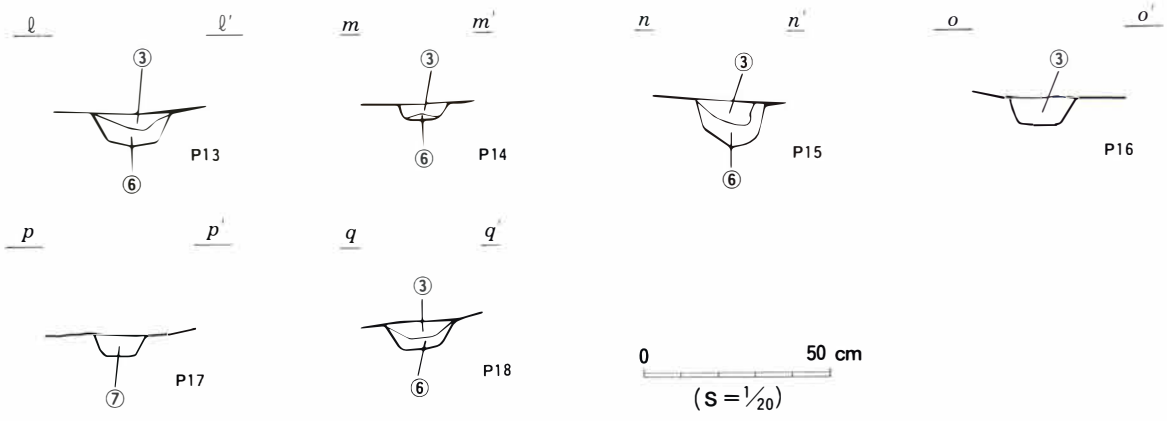
SB02平断面図



SB02ピット断面図（基準となる標高はすべて309.4m）

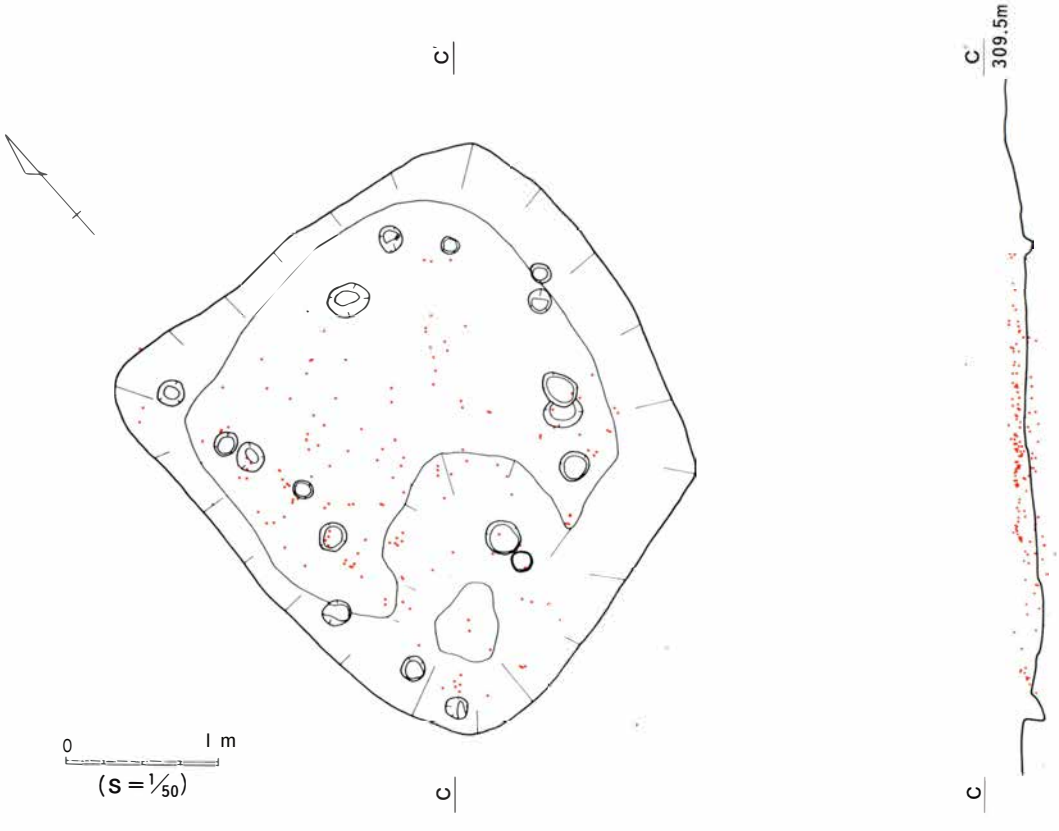


第15図　SB02実測図（1）



① 5YR3/2　暗赤褐色　焼土　しまりなし
② 10YR5/4　にぶい黄褐色　暗褐色土が若干混入　しまりややあり
③ 10YR3/4　暗褐色　黄褐色土が若干混入　しまりあり　炭化物を含む
④ 10YR3/2　黒褐色土　しまりなし
⑤ 10YR3/3　暗褐色　しまりなし
⑥ 10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗褐色土が若干混入　しまりややあり
⑦ 10YR4/4　褐色　しまりあり
⑧ 10YR4/6　褐色　しまりややあり

SB02遺物出土状況（・は原則として遺物1点を表す）



第16図　SB02実測図(2)

ラ形石器１点、凹・敲・叩・磨石類５点、打欠石錘４点、切目石錘７点、ＵＦ１点、剥片類18点の合計37点が出土した。この遺構においても狩猟具の点数はわずかであり、ＳＢ01とよく似た性格をもっている。製粉具と考えられる５点のうち３点が磨石、１点は磨痕に加え凹みと表裏に敲打痕を有するもの、残り１点は長軸の両端に叩きを有する丸石である。しかし、これらに対応する石皿は出土していない。打欠石錘および切目石錘は、両者ともサイズおよび質量に規格性はみられないため詳細は不明である。なお、出土した遺物から判断して、本住居跡は縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。

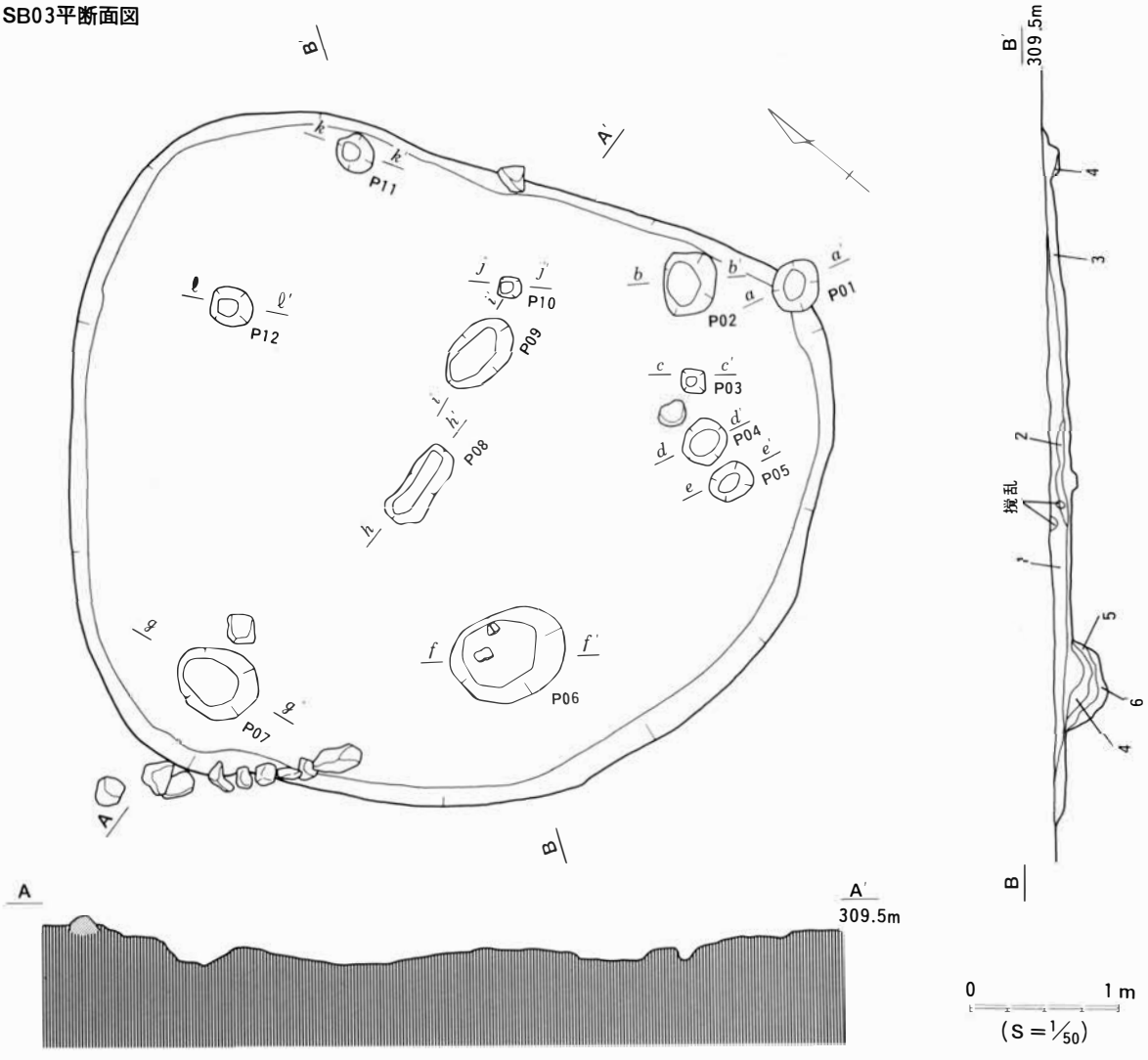
第３号住居跡（ＳＢ03）〈第17～18図　図版１〉

Ｄ′68～Ｅ′67グリッド第Ⅱ層中で検出した。包含層の掘削を進めていく中で、大きな礫数個を検出した。周辺を慎重に精査したところ、長円形の黒褐色土プランを確認した。初めて検出した上層のレベルでは、後世の開墾に伴うと考えられる撹乱を受けており、明確にプランを決定することは困難であった。しかし、四分法により完掘した結果、長径約4.8ｍ短径約４ｍの長円形もしくは隅丸方形のプランを持つ住居跡が確認できた。上部が撹乱を受けていたために明確な掘形は検出できていないが、最終的に確認できた断面は、他の住居跡同様浅い皿状を呈するものであった。ピットは最終的に12基検出した。径及び深さは大小さまざまであり、一様でない。埋土中に多く検出した礫を、１つ１つ確認しながら除去していったところ、石皿（30）が１点混入していた。磨面が下になっていたことから類推すると、住居が廃絶された後、意図的に投棄された可能性がある。なお、プラン南西端に整然と並べられている礫は、後世の開墾に伴う石列（境界線）の一部である。出土した遺物は全部で196点あり、そのうち土器は170点である。確認できた埋土はかなり浅く、かろうじて上下二層に分層できたが、微妙な堆積状況であるため、遺物の分別はできなかった。特殊突帯を有するものも見られるが、縄文突帯を有する比較的古相と思われるものが主体である。石器は、石鏃１点、削器１点、敲・叩・磨石類３点、打欠石錘１点、切目石錘２点、調整剥離を施された剥片（ＲＦ）１点、ＵＦ１点、石皿１点、剥片類21点の合計32点が出土した。石皿を除き、どれも製品としては粗雑なものばかりであり、数量的にもまばらなため、この遺構の性格を明らかにすることはできない。製粉具にみられる敲打痕や叩き、磨痕も不明瞭である。なお、出土した遺物から判断すると、本住居跡は縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。

第４号住居跡（ＳＢ04）〈第19～21図　図版１・２〉

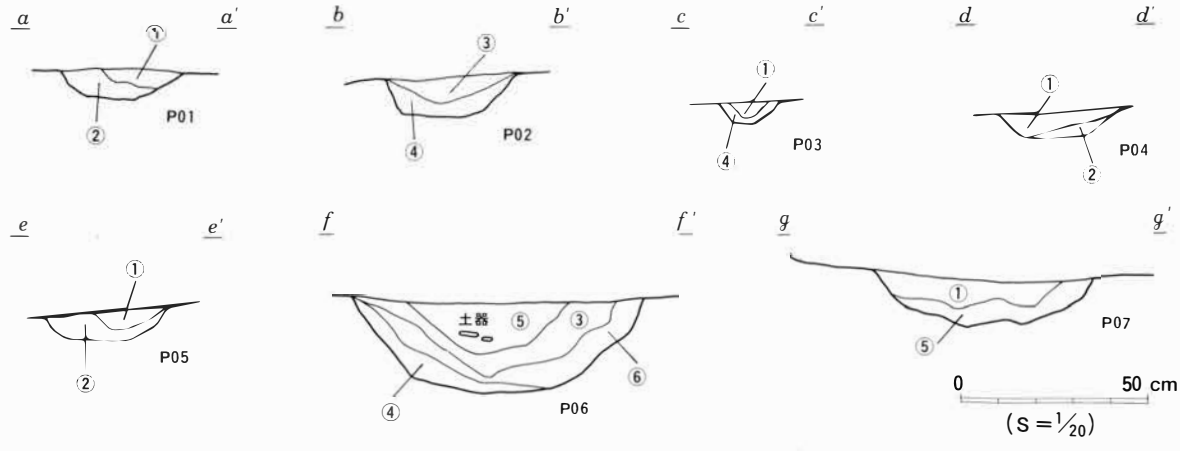
Ｆ′72～Ｆ′73グリッド第Ⅱ層中で検出した。表土面よりあまり深くないレベルで黒褐色土プランを確認した。その段階ではほとんど遺物は出土しておらず、他の住居跡とは様相を異にしていた。暫定的にプランを決定し、四分法で掘削を開始した。掘削を進める中で、他の住居跡に匹敵する点数の遺物が出土したが、質的には良好でなく、土器はかなり摩耗が進み、その多くは判別が不可能であった。一方、埋土中に混入している礫は非常に多かったが、その大きさは一様でなく、大小さまざまであった。そのためか埋土の堆積状況は安定しておらず、断面を見ると一次埋土の上に二次埋土が波をうったように堆積していた。平面的にもプラン南西側は風倒木痕による撹乱を受けていた。混入していた礫をその位置を確認しながら取り除く作業を進めていく中で、プラン内の北よりの位置で１基の石囲炉を検出した。当初、北側に集中する大礫周辺に土色の微妙な差異が確認できたので、凹地の可能性

SB03平断面図

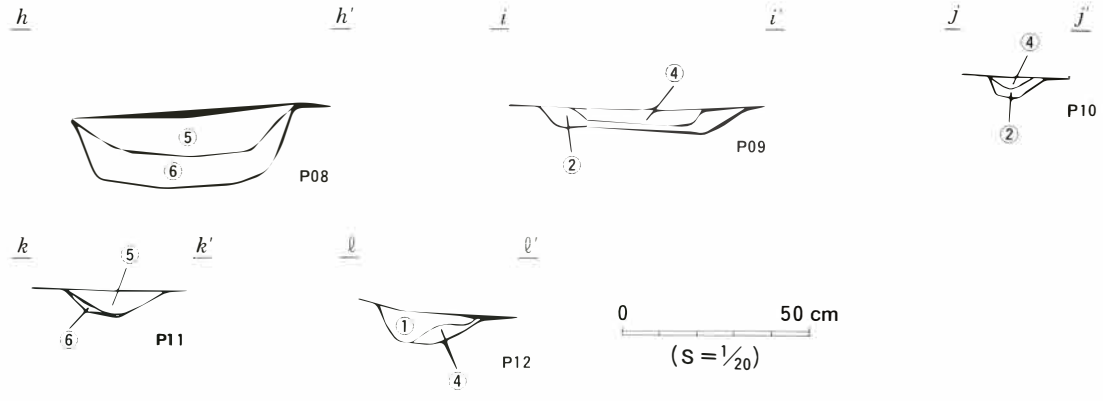


SB03ピット断面図（基準となる標高はすべて309.352m）

1　10YR2/3　黒褐色　しまり·粘質ともになし
2　10YR3/3　暗褐色　しまりなし　粘質ややあり
3　10YR3/4　暗褐色　しまりあり　粘質ややあり
4　10YR3/3　暗褐色　しまり·粘質ともにややあり
5　10YR4/2　灰黄褐色　しまり·粘質ともにややあり
6　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり·粘質ともにややあり

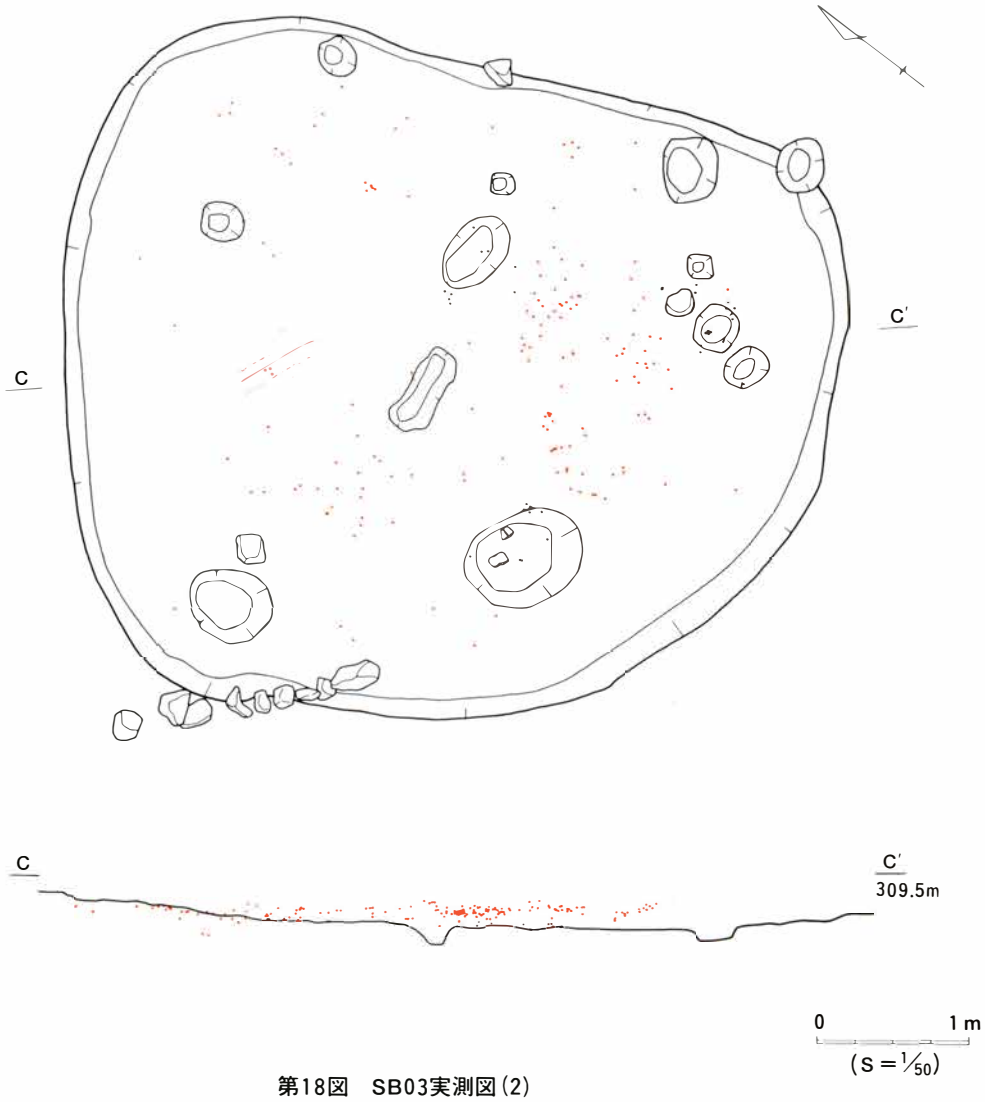


第17図　SB03実測図(1)



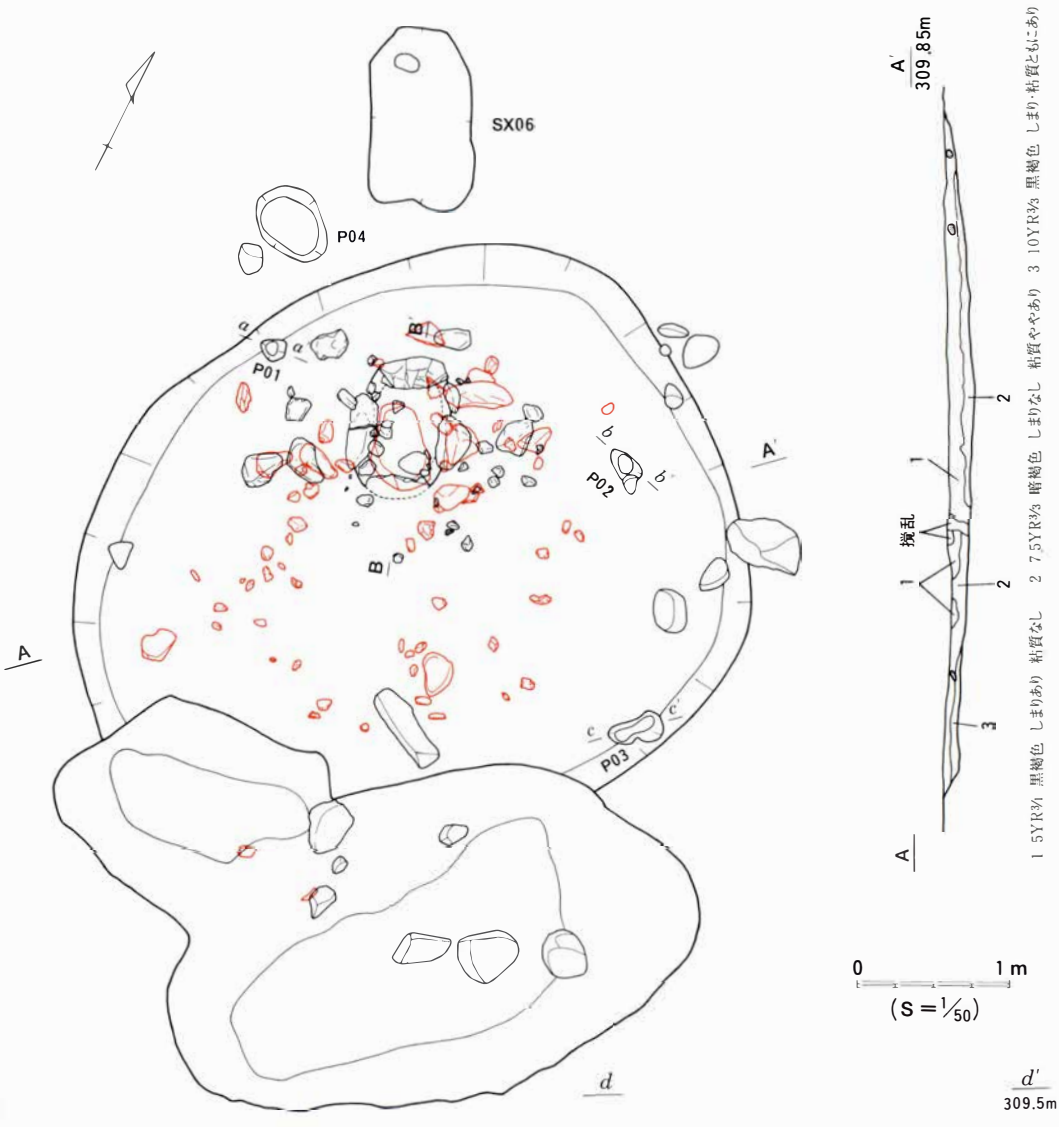
① 10YR3/2　黒褐色　しまり･粘質ともになし
● 10YR4/2　灰黄褐色　しまり･粘質ともになし
③ 10YR3/3　暗褐色　しまり･粘質ともにややあり
④ 10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり･粘質ともにややあり
⑤ 10YR3/3　暗褐色　しまりあり　粘質ややあり
⑥ 10YR4/3　灰黄褐色　しまり･粘質ともにあり

SB03遺物出土状況（･は原則として遺物1点を表す）

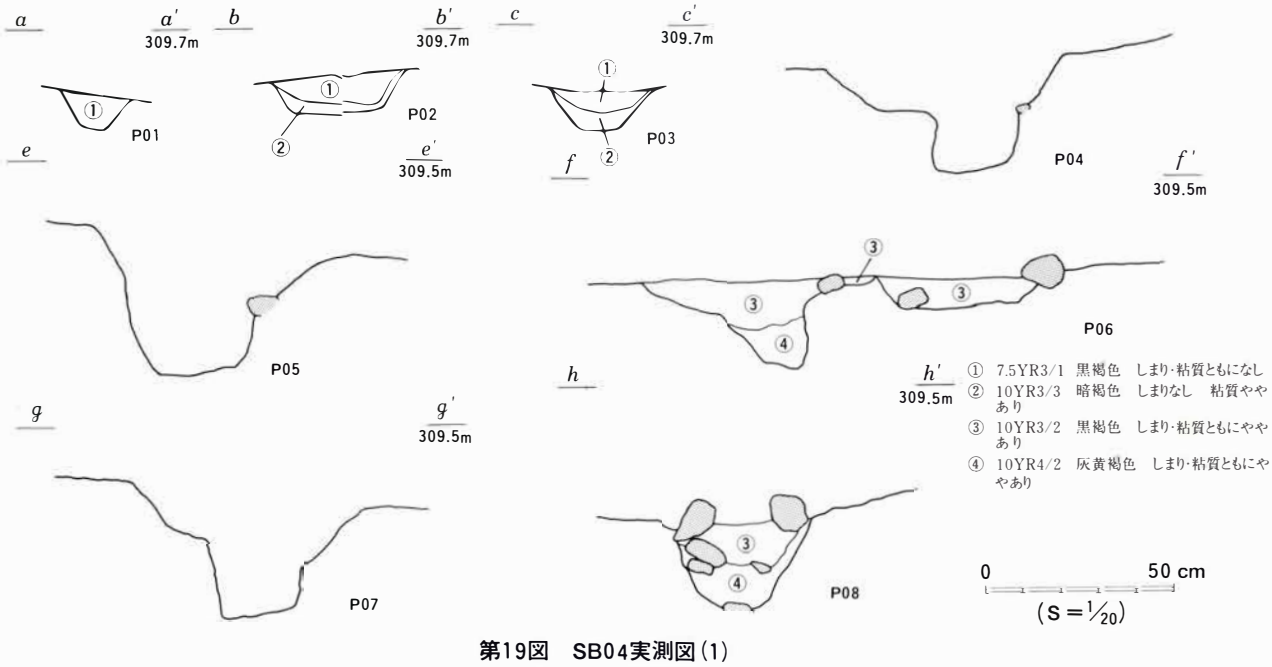


第18図　SB03実測図（2）

SB04平断面図

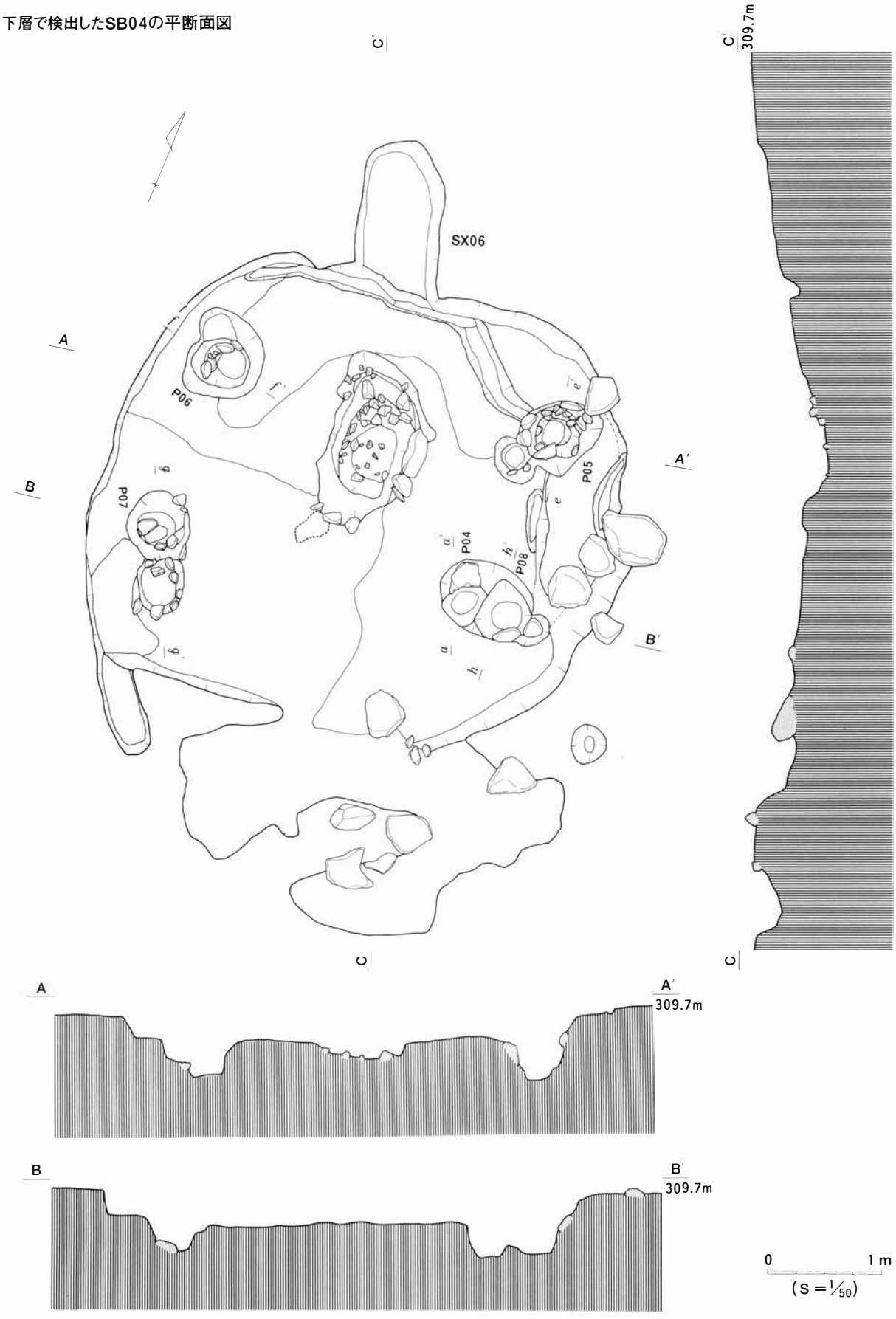


SB04ピット断面図



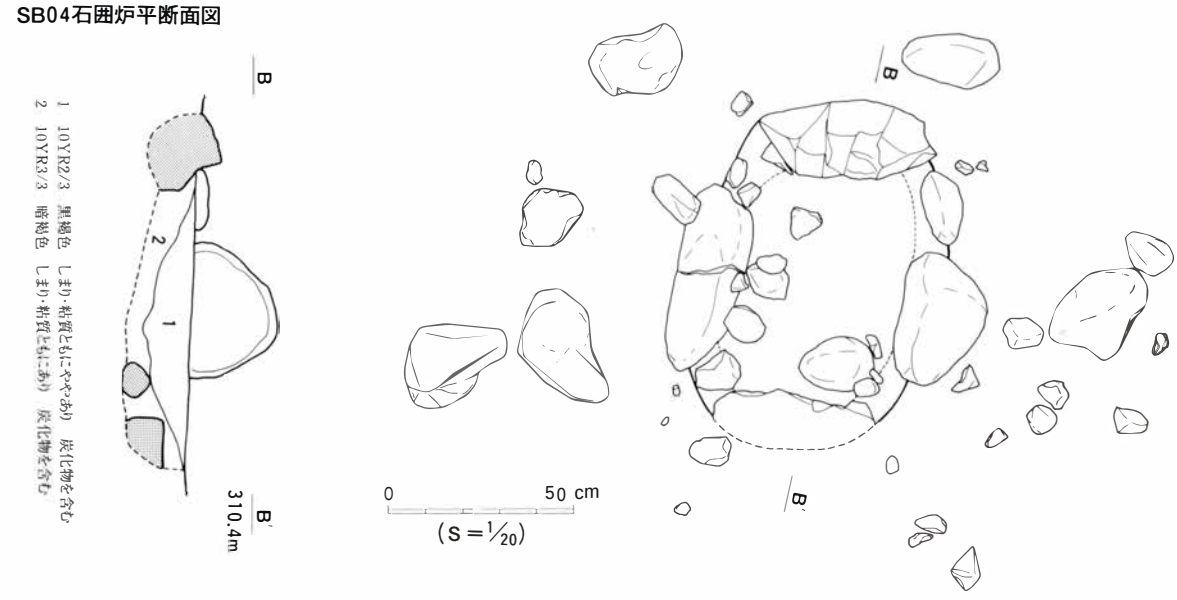
第19図　SB04実測図(1)

下層で検出したSB04の平断面図

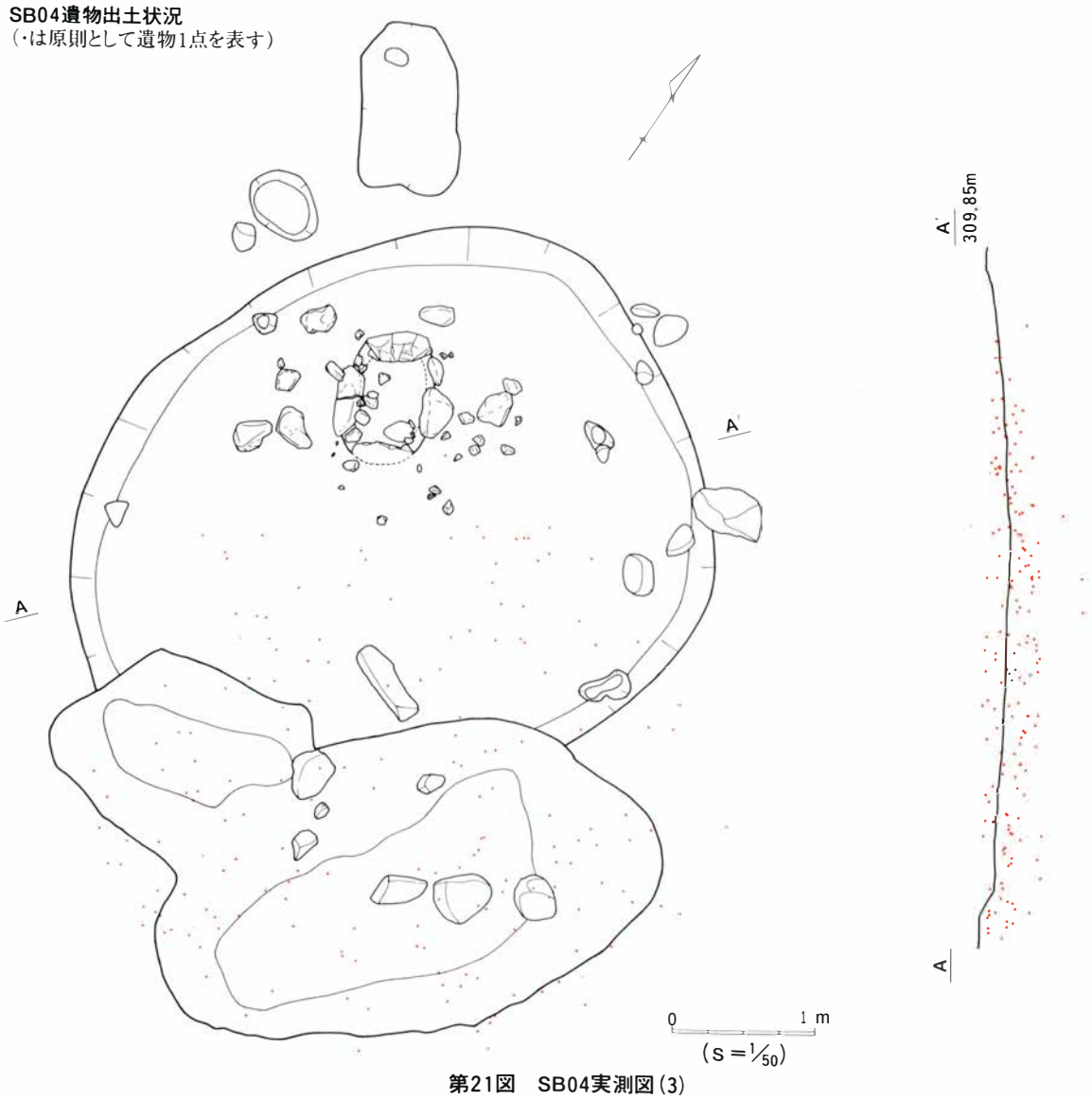


第20図　SB04実測図(2)

SB04石囲炉平断面図



SB04遺物出土状況
（・は原則として遺物1点を表す）

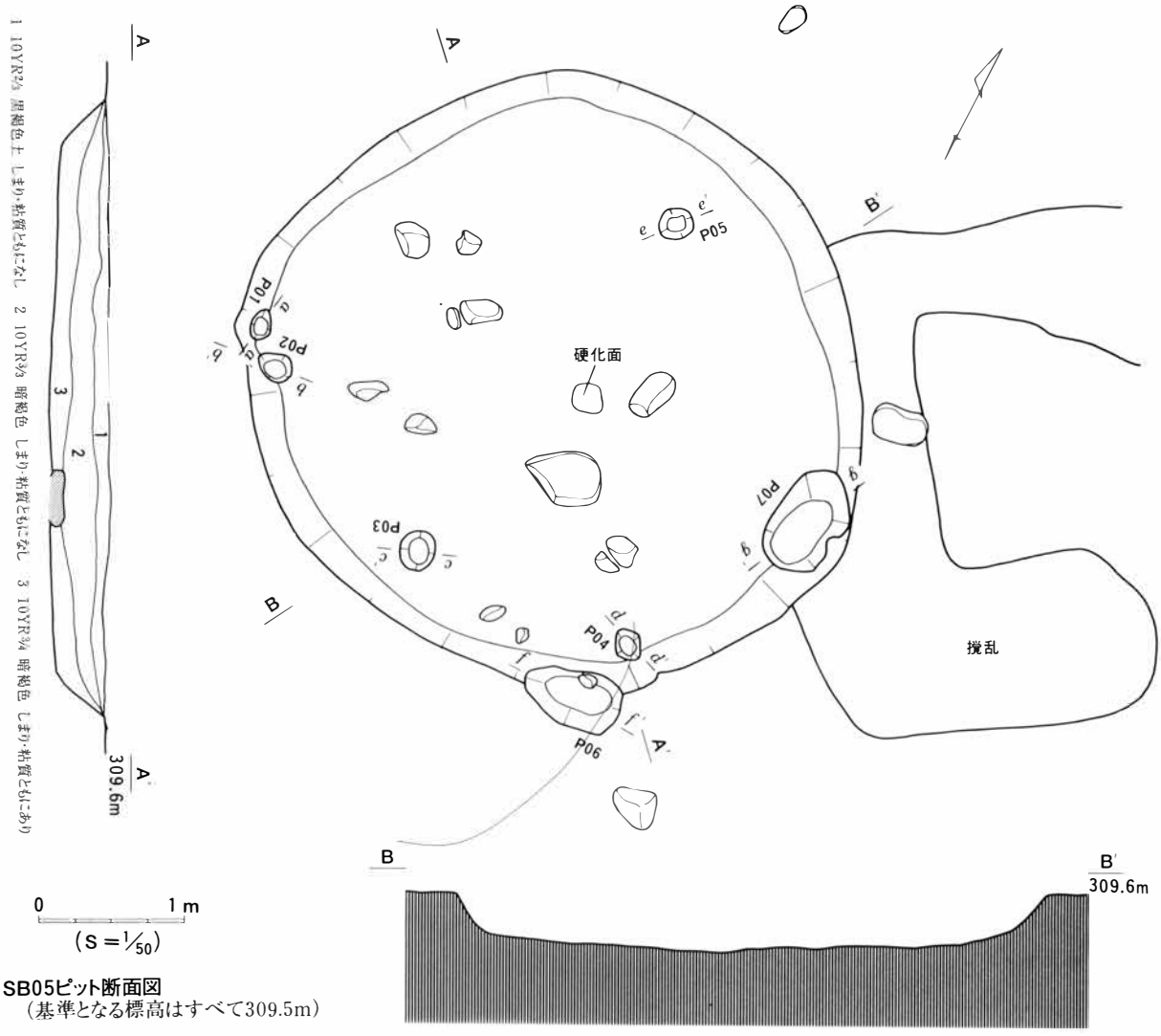


第21図　SB04実測図(3)

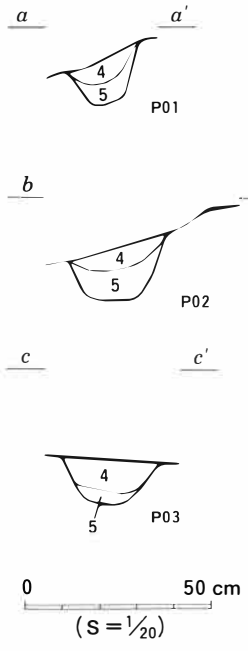
を想定し精査し始めた。慎重に精査を繰り返していく中で、「コ」の字形に３個の礫が配されているのを検出した。さらに「コ」の字形の開いた部分にあたる箇所には、一段低い位置にやや小さめの礫が置かれていた。この石囲炉は長径約90㎝短径約80㎝あり、長軸が住居跡の長軸方向に位置している。住居跡内の位置としては、やや北側により過ぎている感がある。炉としての機能を鑑みると、上部構造との関係が懸念されるが、住居の頂部が必ずしも竪穴の中央部に位置するとは限らないとの指摘もある。現時点では石囲炉として認定していきたい。炉内埋土からの遺物の出土はほとんどなく、微細な土器片と少量の炭化物のみであった。炉を検出したレベルで若干硬化した面が確認できたので、床面と判断した。その時点で確認できたピットは３基しかなく、しかも中央部では検出できなかった。ピットの有無を確認するためにさらに下方へ掘削したところ、下層にもう１軒の住居跡が検出できた。平面形は不整円形で、北側はＳＸ06に、南側は風倒木痕による撹乱で明確でない部分もある。床面はほぼ平らで部分的に貼り床が確認できた。貼り床部分は特に北側に広がり、厚さ約２～３㎝で非常に固く締まっており、炭化物も混入していた。貼り床面ははがれるようにめくれ、その下には別のたたきしめた硬化面があった。貼り床の下部からは遺物の出土はなかったし、ピットも確認できなかった。検出した硬化面は平らで貼り床がされていない床面に連続している。住居跡内の南半分は撹乱等のために明瞭ではないが、同様に固くたたきしめられていたと考えられる。貼り床ならびに明確な硬化部分については図示した。炉石の一部には、焼化による変色（赤色化）、ひび割れが認められた。また、西側から北側にかけて炉石の下に詰石状の礫が見られたり、石囲炉の南側に焼土が確認できたりすることから、炉の改築を行っている可能性が考えられる。住居跡内の北側から西側にかけて周溝が認められた。幅５～20㎝、深さ３～16㎝で特に西側の周溝は浅くはっきりしない。住居跡拡張以前の旧住居跡に伴うものである可能性もある。ピットは全部で８基検出した。規則的な配列で４本柱と考えられる。２個１対となり、建て替えた可能性が高い。ピットの内部には多くの礫が認められた。特にＰ01・04・06では、柱の周りに入れられたと考えられる礫を検出した。詰石の可能性もあるが、もともと多くの礫を含むところでもある。ピットの新旧関係は切り合いや礫の混入状況から判断して、Ｐ05～08が旧く、Ｐ01～04が新しい。遺物は撹乱部のものも含め全部で167点出土しており、そのうち土器は113点である。前述したようにほとんどがかなり摩耗し、判別が困難であるため、図示するのは最小限の20点に留めた。なお、1122は炉内下層より出土している。石器は、石鏃４点、掻器Ｉ１点、敲・磨石類３点、打欠石錘１点、切目石錘２点、ＲＦ２点、ＵＦ５点、剥片類23点の合計41点が出土した。剥片類などを除くと、狩猟具や漁労具、製粉具と思われる定形石器が少量ずつ出土するのみである。石鏃も４点中３点が折損品であり、製粉具にも敲打痕や磨痕はわずかに残る程度である。

炉内より出土した炭化物は少量であったが、科学分析が可能であったので依頼したところ、炉内上層より採取した炭化物の放射性炭素年代測定結果は^{14}Ｃ年代値で3,200＋140yrＢＰ（ＢＣ1,250年）であった。また、炉内下層より採取した炭化物は、同じく^{14}Ｃ年代値で5,090＋180yrＢＰ（ＢＣ3,140年）であった。これらの測定結果からこの住居跡の帰属時期を確定するのは困難である。従って帰属時期不明とするのが本来なのかもしれない。なお、出土した土器の中には、本地点の核となる生活時期に使用されていたと思われる北白川下層Ⅲ式土器が認められる。

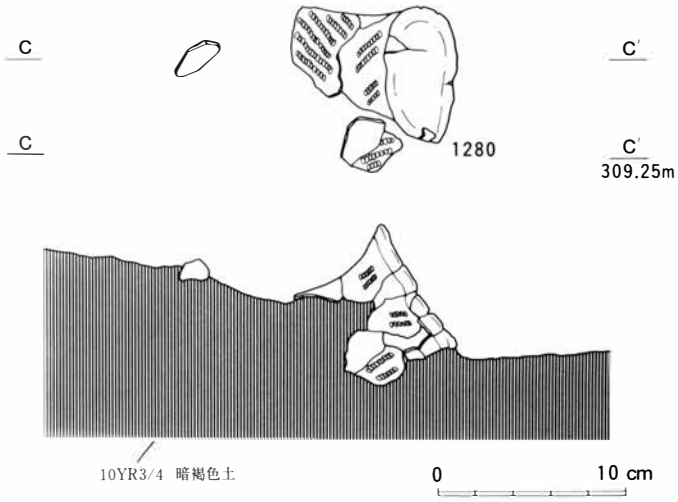
SB05平断面図



SB05ピット断面図
（基準となる標高はすべて309.5m）



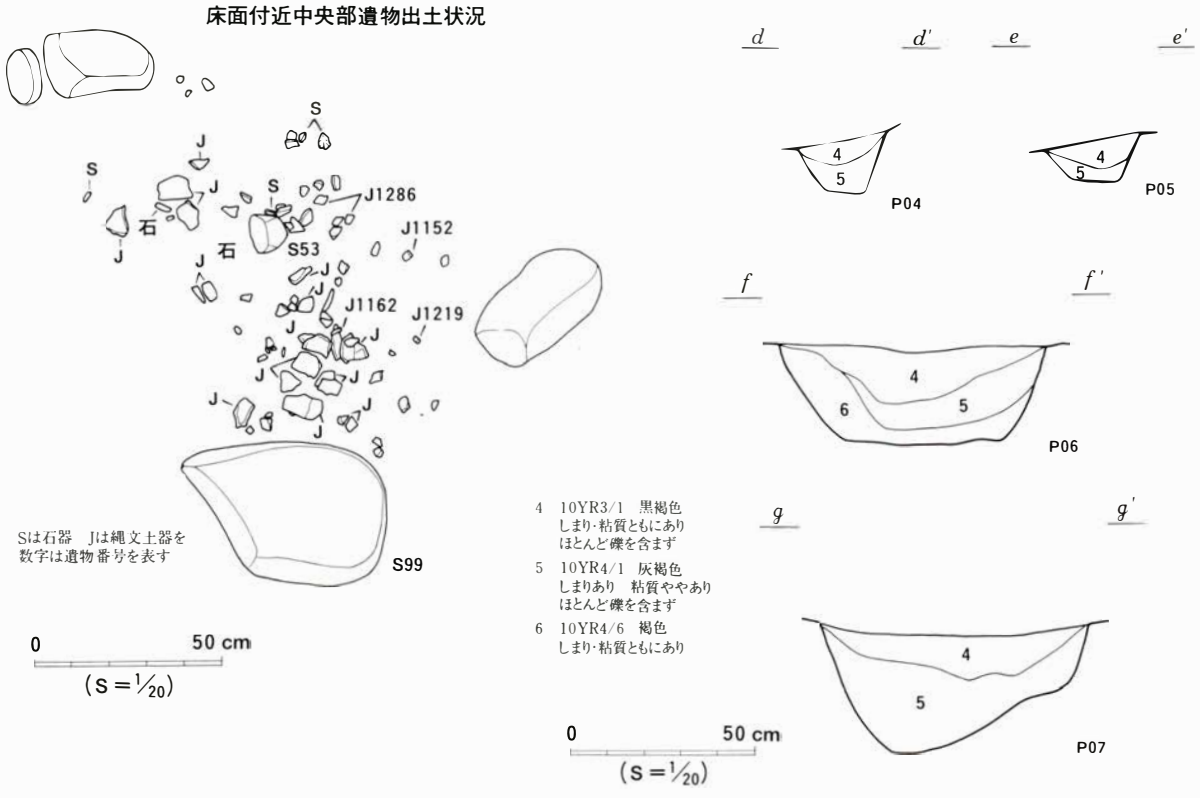
SB05内縄文土器低部出土状況（P02～P03の中間地点あたりで検出）



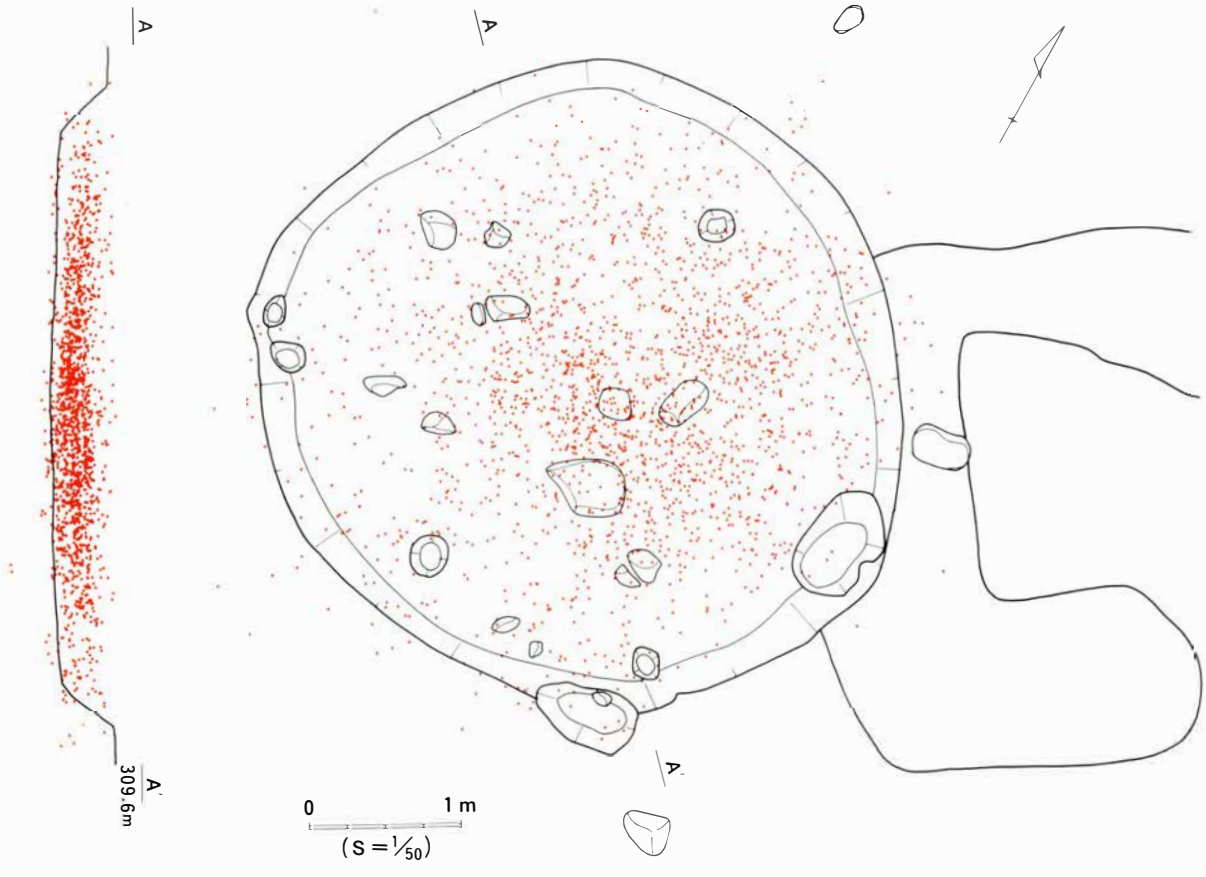
4　10YR3/1　黒褐色
しまり・粘質ともにややあり
ほとんど礫を含まず

5　10YR4/1　褐灰色
しまりあり　粘質ややあり
ほとんど礫を含まず

第22図　SB05実測図（1）



SB05遺物出土状況（・は原則として遺物1点を表す）



第23図　SB05実測図（2）

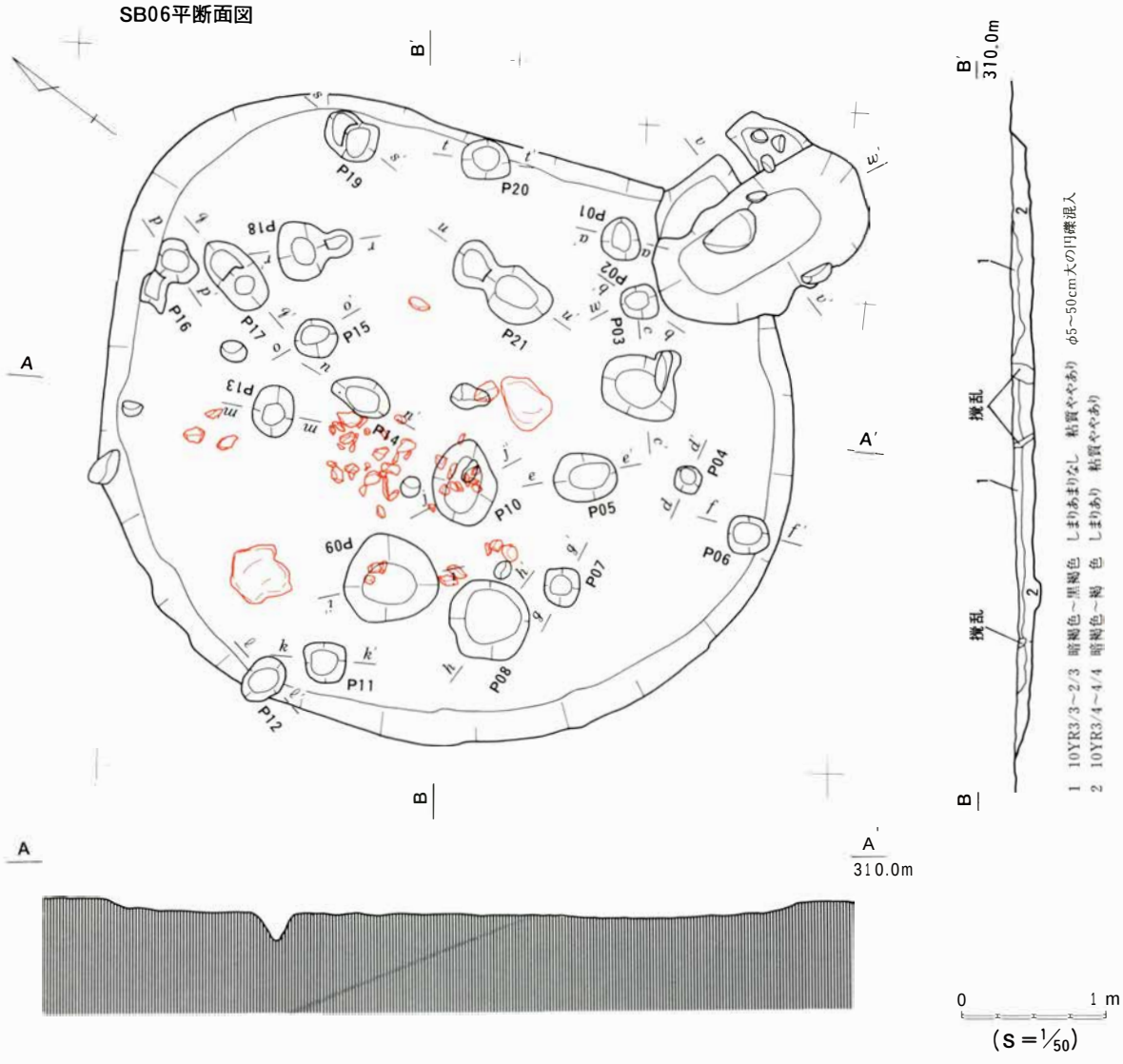
第5号住居跡（ＳＢ05）〈第22・23図　図版2〉

E′69～F′69グリッド第II層中で検出した。平面形は径約4～4.5mの円形である。北東部にあった風倒木痕を破壊する形で構築されているため、北東側のプランを検出する際には困難を極めた。断面形は擂り鉢状で、中央部の最も深いところで45cmほどある。第1地点で検出した他の7軒の住居跡は、どれもさほど深く掘られていないのに対して、このＳＢ05は突出して深く掘られており、他と様相を異にする。また、それに伴って遺物量も多く、全部で2,025点と、第1地点出土総遺物量の約10%にもなる。この住居跡内で確認できたピットは7基あるが、そのうち2基は長径70～80cm、短径40～50cmと比較的大きさがあるが、他の5基は長径で30cm前後と小さくまた深さも浅い。これらが本住居跡の柱穴であるかどうかは判別が困難である。床面の中央部にわずかな硬化面が認められたが、貼り床である可能性は低い。また、同じく中央部には床面に備え付けられるようにして石皿（99）が1点置かれていた。その周辺では比較的良好な形で土器が出土している。土器は全部で1,674点出土している。接合・分類後にそのうちの177点を図示した。縄文突帯や特殊突帯を有する薄手の土器が主体を占めている。出土した土器の中には中期に属するものもあるが、出土した位置は埋土の最上部にあたるので、本住居跡が埋没した最終段階での混入であると考えられる。その他で特筆に値するのは、床面から出土した切目石錘である。本住居跡出土の縄文土器で最も新しいと考えられるものは、特殊突帯を有する北白川下層III式土器である。従って本遺跡における切目石錘の初現は北白川下層III式併行期以前となる。石器は、石鏃9点（未製品2点）、石錐4点、つまみ部付きスクレイパー1点、削器7点、掻器Ｉ2点、複合スクレイパー2点、石篦1点、両側縁調整剥片石器1点、打製石斧2点、磨製石斧2点、ＲＦ9点、ＵＦ13点、剥片類231点、打欠石錘21点、切目石錘14点、凹・敲・叩・磨石類4点、石皿2点の合計327点が出土した。質量ともに特筆される遺構である。漁労および狩猟に使用されたと思われる石器が多く、採集具や製粉具が少ないことから狩猟・漁労型の生業活動を想定することができる。また、スクレイパー類や石錐、石篦、ＲＦ、ＵＦ、磨製石斧など多様な用途をもつ工具類もまとまって出土している。未製品や剥片類など、石器の製作過程に生じたものも233点にものぼるが、製作用具の叩石は認められない。なお、出土した遺物から判断して、本住居跡は縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。

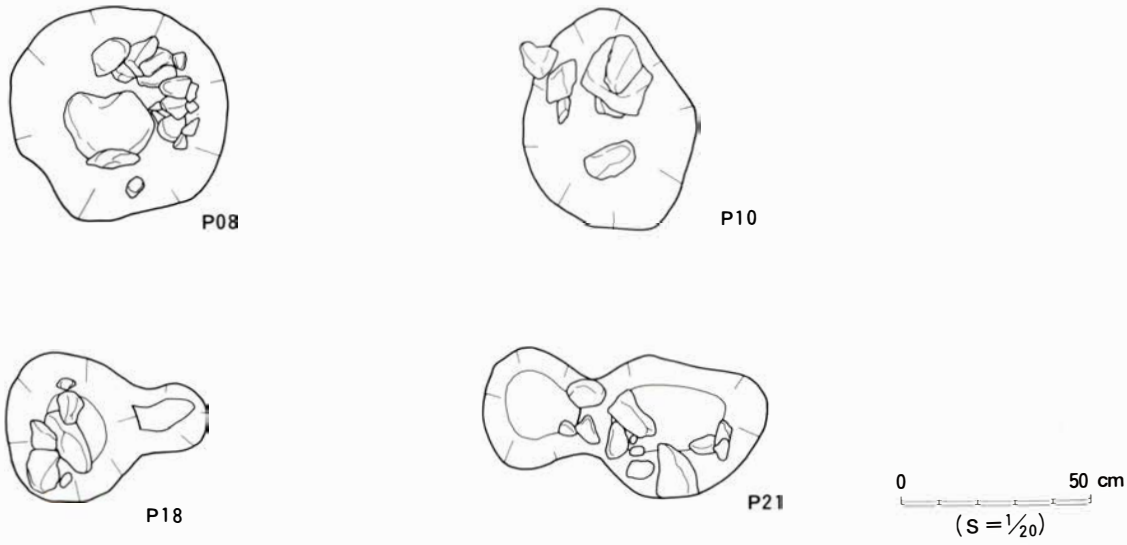
第6号住居跡（ＳＢ06）〈第24～26図　図版2〉

K′76グリッドの杭を中心に黒褐色土プランを第II層中で検出した。プランを検出する以前から遺物が多く出土しており、遺構が存在する可能性が想定されていた。検出した住居跡の平面形は不整円形で、長径約5ｍ短径4.3mと第1地点で検出した住居跡の中では大きい方である。断面形はかなり浅い皿状を呈しており、深さ15cmほどしかない。掘り込みは切り立たず、なだらかに床面に向かっている。床面はほぼ平らだが、意図的にたたきしめられた感じは認められなかった。黄褐色土直上で検出した。竪穴の埋土には大小の礫が多く混入していた。南東隅には長径約1.6m短径約1ｍ深さ約1.3mの長円形土坑が、竪穴を構築後に掘り込まれている。埋土中には多く礫が混入していたが、堆積状況を見ると比較的短時間に埋まった感じがみうけられた。埋土の最上部の土層は若干明るい色を呈しているが、焼土と明言するまでには至らない。土壙と考えたいが根拠が希薄であるし、ＳＢ06との関係も不明である。特に埋設されたと考えられるような遺物も確認できなかった。

SB06平断面図

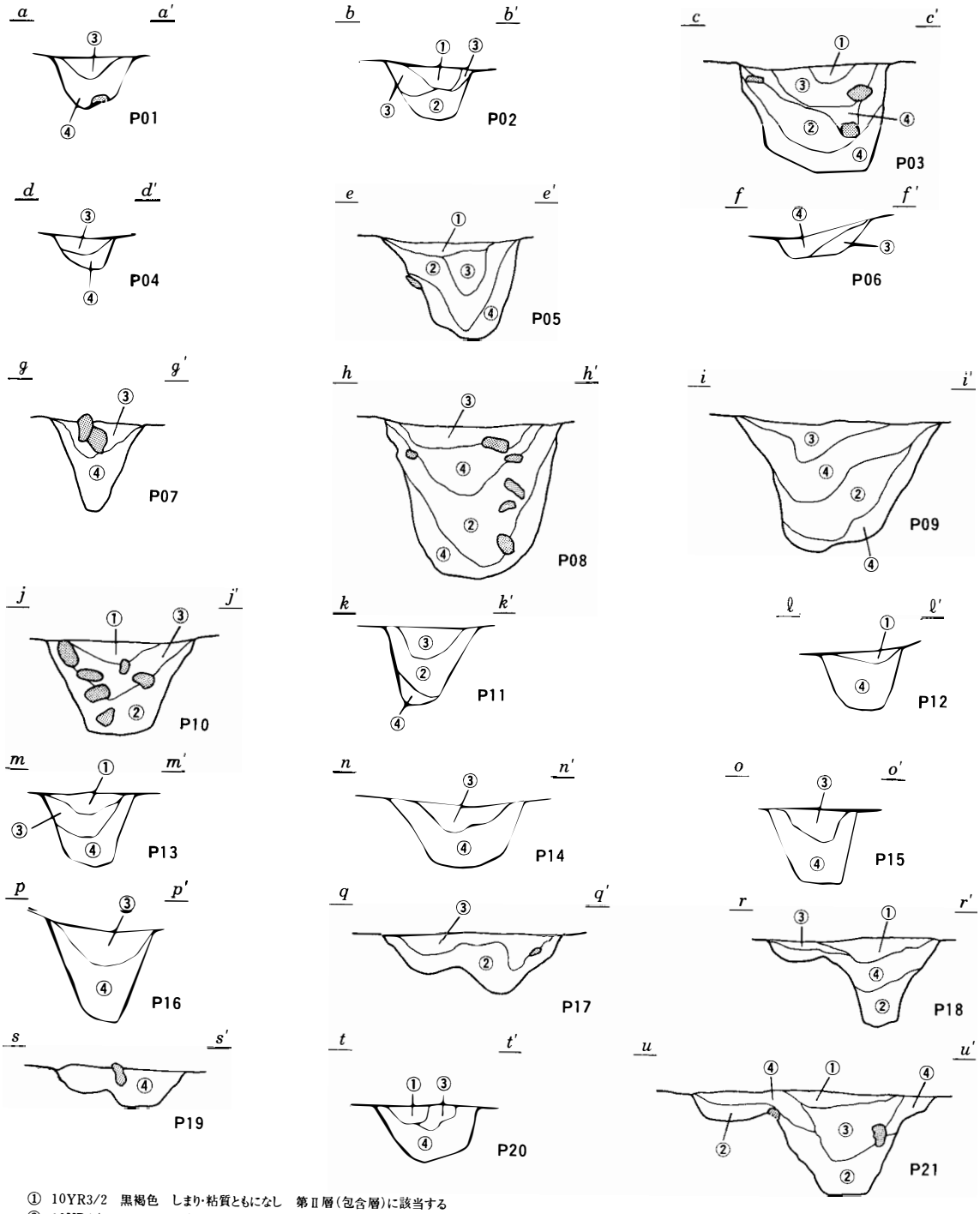


SB06内ピット礫混入状況



第24図　SB06実測図(1)

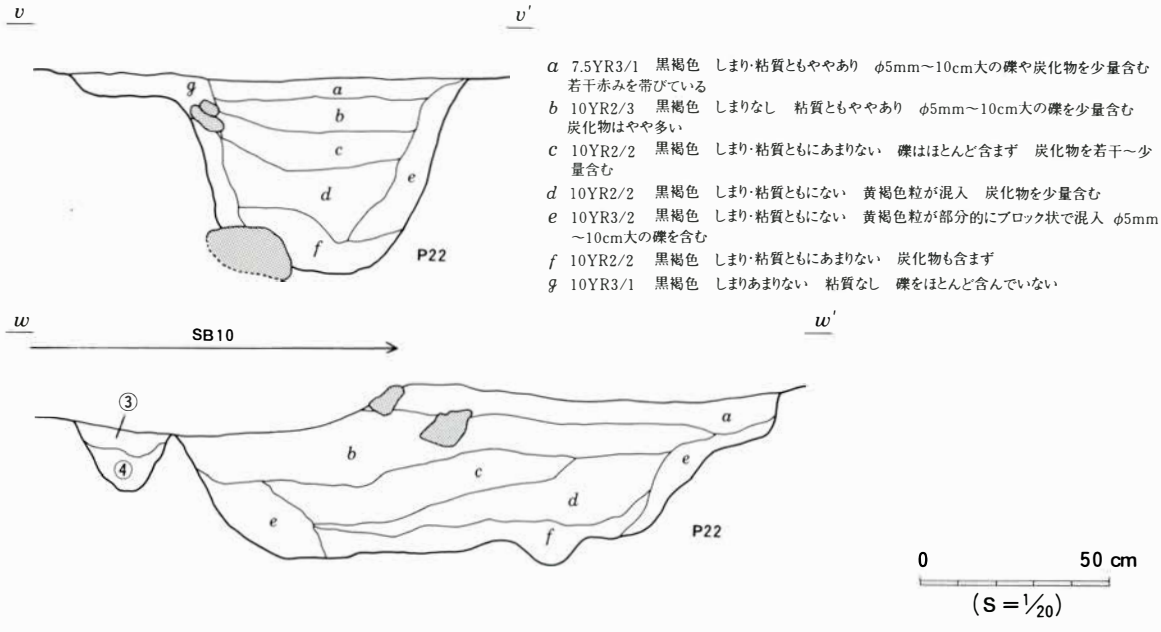
SB06内ピット断面図（基準となる標高はP01～P21が309.7cm　P22･P23は309.8cm）



① 10YR3/2　黒褐色　しまり･粘質ともになし　第Ⅱ層（包含層）に該当する
② 10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり･粘質ともにややあり　炭化物を含むところもある
③ 10YR4/1　褐灰色　しまり･粘質ともにややあり
④ 10YR4/2　灰黄褐色　しまり･粘質ともにややあり　ほとんど礫を含まない

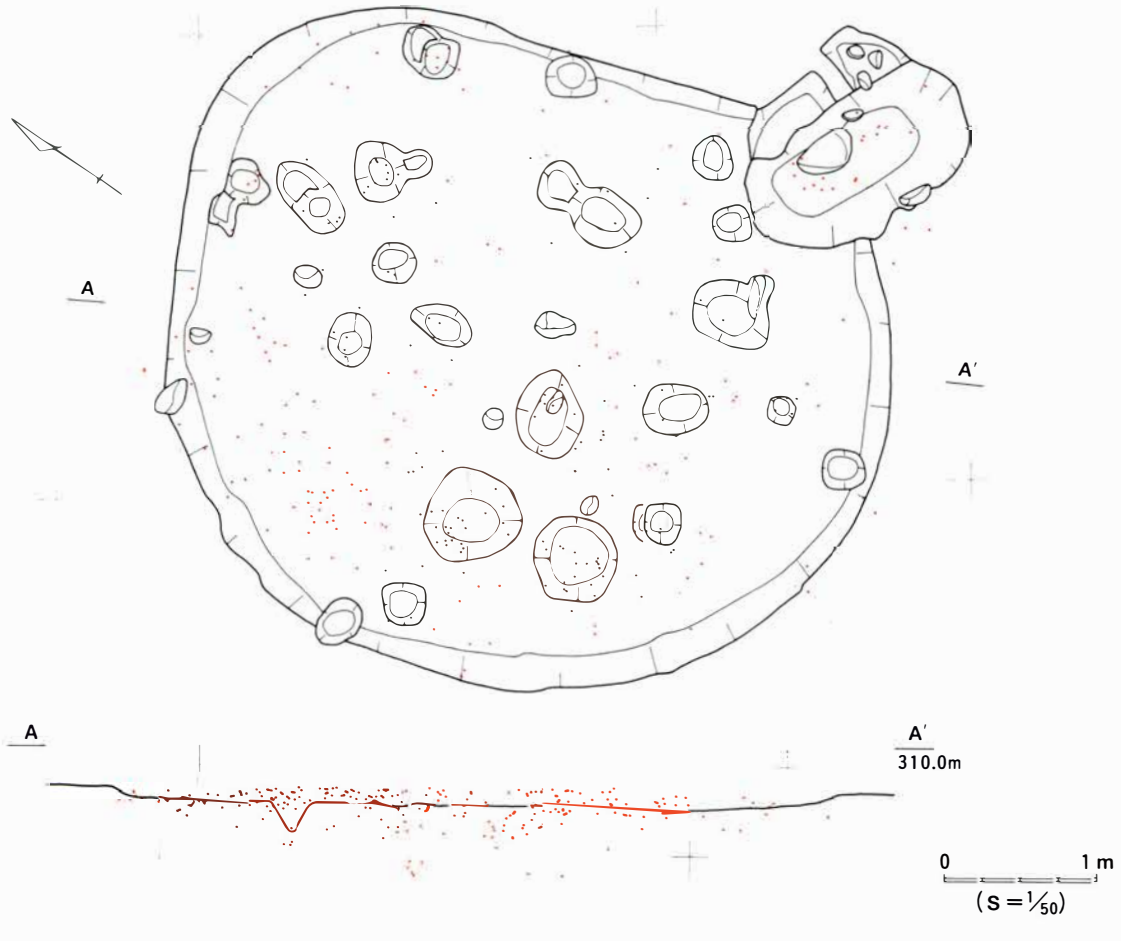
0　50 cm
(S＝1/20)

第25図　SB06実測図（2）



a　7.5YR3/1　黒褐色　しまり·粘質ともややあり　φ5mm～10cm大の礫や炭化物を少量含む　若干赤みを帯びている
b　10YR2/3　黒褐色　しまりなし　粘質ともややあり　φ5mm～10cm大の礫を少量含む　炭化物はやや多い
c　10YR2/2　黒褐色　しまり·粘質ともにあまりない　礫はほとんど含まず　炭化物を若干～少量含む
d　10YR2/2　黒褐色　しまり·粘質ともにない　黄褐色粒が混入　炭化物を少量含む
e　10YR3/2　黒褐色　しまり·粘質ともにない　黄褐色粒が部分的にブロック状で混入　φ5mm～10cm大の礫を含む
f　10YR2/2　黒褐色　しまり·粘質ともにあまりない　炭化物も含まず
g　10YR3/1　黒褐色　しまりあまりない　粘質なし　礫をほとんど含んでいない

SB06遺物出土状況（·は原則として遺物1点を表す）



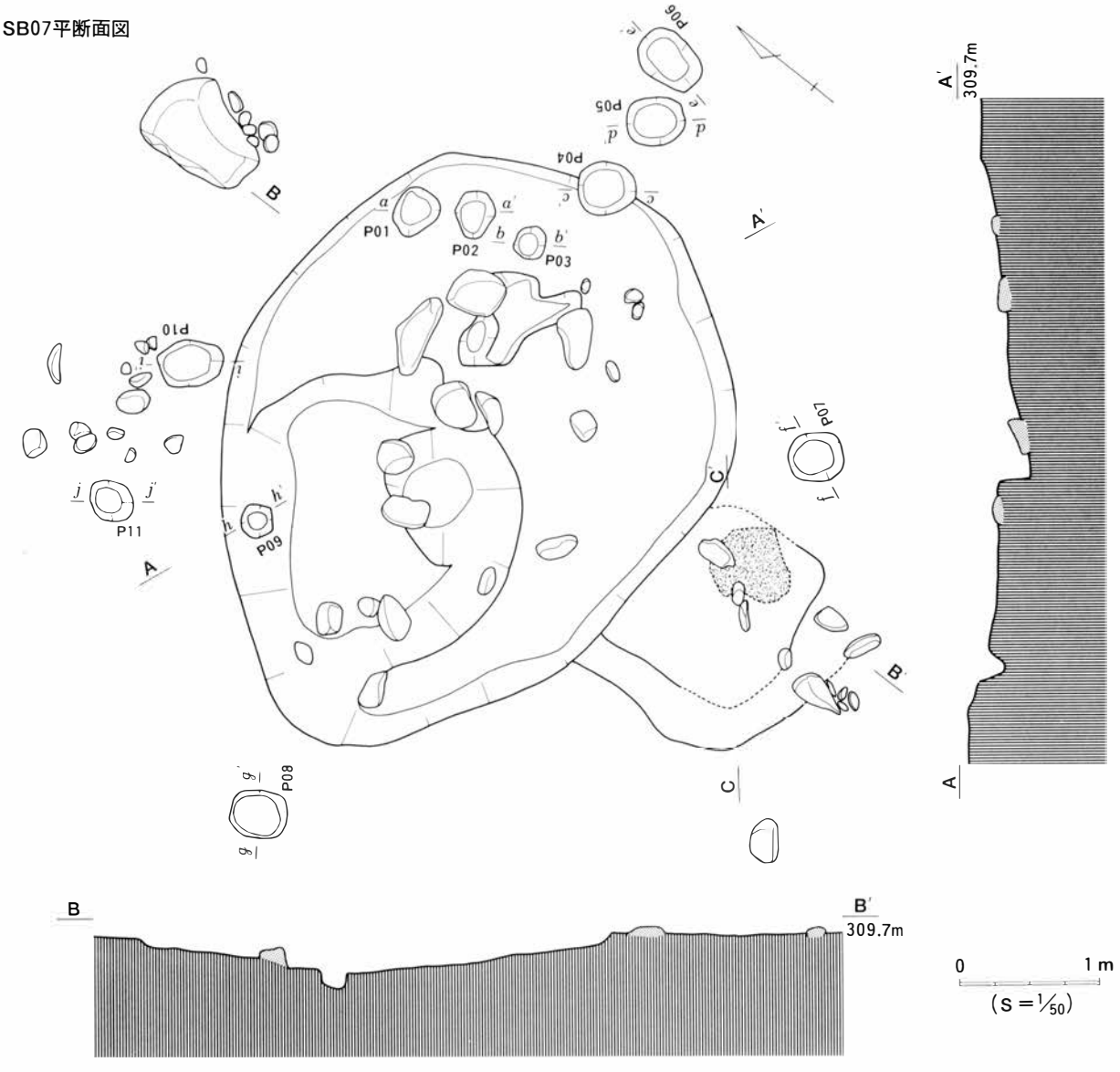
第26図　SB06実測図(3)

他にはピットを全部で21基検出した。他の住居跡と同様な比較的浅いものもあるが、深く掘り込まれたしっかりとしたものも多く認められた。これらすべてがこの住居跡に伴うものであるとするならば、このうちの大部分が柱穴である可能性も否定できない。特にＰ８・Ｐ９の内側には、詰石状の礫が見られた。柱を支えるために使用したとも考えられる。いずれにしても他の住居跡に比べ、ピットの数が多いので、建て替えが行われた可能性がある。出土した遺物は全部で318点で、そのうち土器は218点である。接合・分類後にそれらの中から40点を図示した。埋土掘削中における出土状況は、上方に石器類が多く、下方に向かうに従って土器片が多くなっていった。出土した土器は小片が多いが、他の住居跡と似た傾向の特殊突帯を有するものが主体となっている。石器は、石錐１点、つまみ部付きスクレイパー３点、削器１点、両側縁調整剥片石器１点、ＲＦ３点、ＵＦ３点、剥片類79点、凹・敲・叩・磨石類４点、打欠石錘８点、切目石錘６点の合計109点が出土した。工具類が多く、狩猟具は認められない。採集具として、根茎類・堅果類などの製粉具も認められるが、製粉の痕跡は不明瞭である。なお、出土した遺物から判断すると、本住居跡は縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。

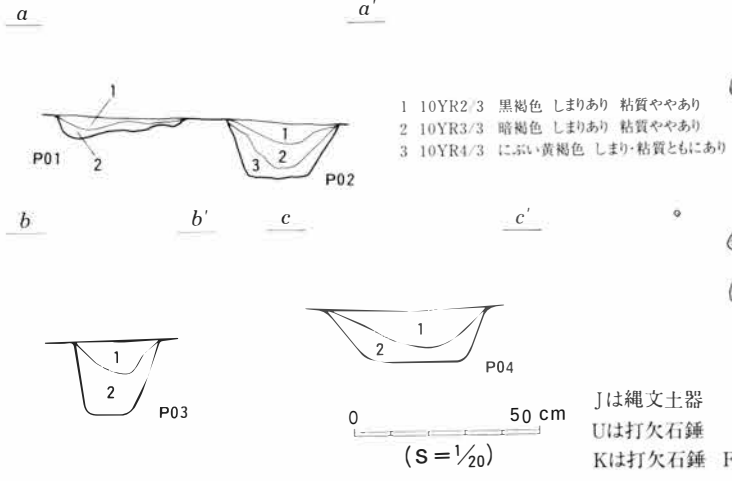
第７号住居跡（ＳＢ07）〈第27・28図　図版２〉

Ｈ′73グリッド第Ⅱ層中で検出した。ＳＢ06同様にプラン検出以前より遺物が集中して出土することから、遺構の存在が予想されたため、慎重に精査を繰り返した。プランの平面形は卵形で、規模は長径約4.5ｍ短径約3.4ｍである。断面形は当初浅い皿状を呈すると考えられていた。しかし、中央部にはブロック状の砂礫質黄褐色土が混入しており、その下に埋土となる黒褐色土が堆積していた。また、その黒褐色土より縄文土器片や切目石錘などが出土している。最終的には床面は確認できず、中央部付近にやや深めの凹みを検出したにとどまった。中央部にある砂礫質黄褐色土内の北側に大きな亜円礫が「コ」の字状にあった。同時並行で調査を進めていたＳＢ04のように、石囲炉の可能性があると考え、断ち割りを行った。しかし、それらの礫の下に埋土である黒褐色土が堆積していることや、その黒褐色土より遺物が出土すること、礫群内部の堆積状況が外部と同じであること等から、石囲炉ではなく、砂礫質黄褐色土混入の際に形成された所産であると判断した。なお、竪穴外部南側で、径50㎝厚さ２㎝ほどの焼土を検出している。ピットは全部で11基検出した。竪穴の内部に５基、外部周辺に６基である。前述の６軒には外部にピットを伴うものはなかったので、若干特異な様相ではある。内部が広範にわたる撹乱を受けていたために、内部でのピット検出は困難ではあったが、そのこととは別に、それらの位置関係や規模から外部周辺に存在するピットも本住居跡に伴うものである可能性があるので含めて図示した。遺物は比較的多く433点出土した。本来混入している砂礫質黄褐色土の上下で分けなければならないが、堆積状況が一様でないため、その分別は困難であった。従って遺物は一括して掲載した。出土した土器の様相は、古相を呈する縄文突帯を有するものと新しい様相を呈する特殊突帯を有するものが共伴している。石器は、石鏃２点（未製品２点）、削器５点、掻器Ⅲ１点、複合スクレイパー２点、磨製石斧１点、ＲＦ３点、ＵＦ２点、剥片類65点、打欠石錘７点、切目石錘６点、敲・磨石類１点の合計97点が出土した。多様な工具類がみられ、採集具の出土は敲打痕と磨痕が認められる１点のみである。なお、出土した遺物から判断すると、本住居跡は縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。

SB07平断面図

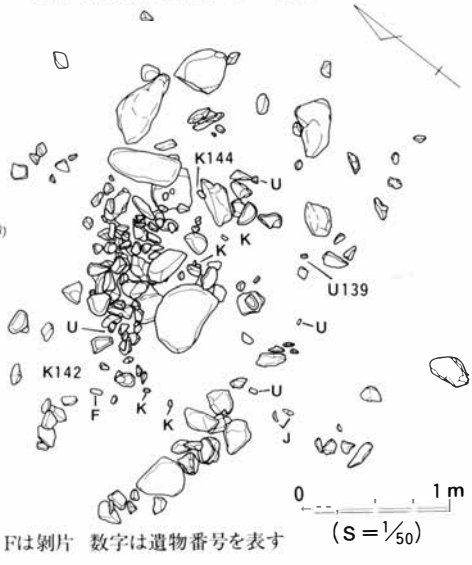


SB07ピット断面図（基準となる標高はすべて309.7m）



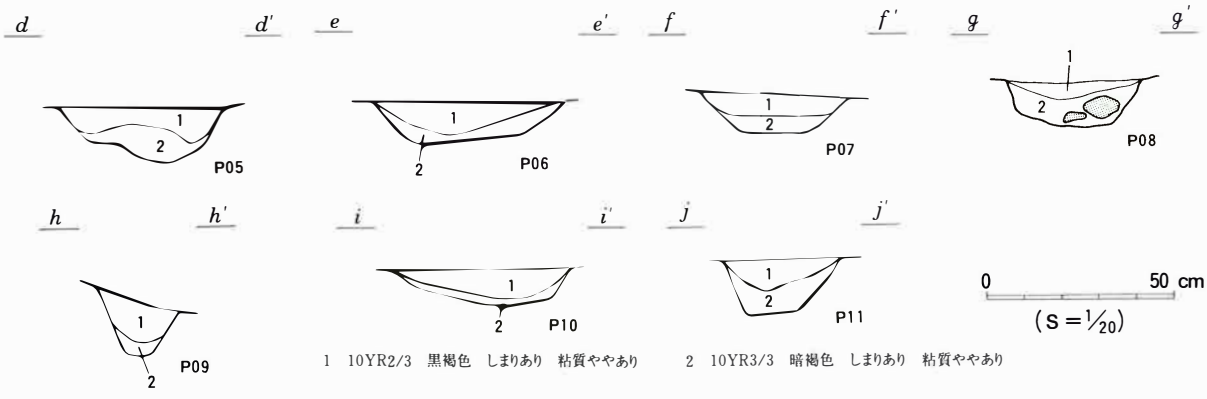
1　10YR2/3　黒褐色　しまりあり　粘質ややあり
2　10YR3/3　暗褐色　しまりあり　粘質ややあり
3　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり・粘質ともにあり

上層で確認した礫群および石器

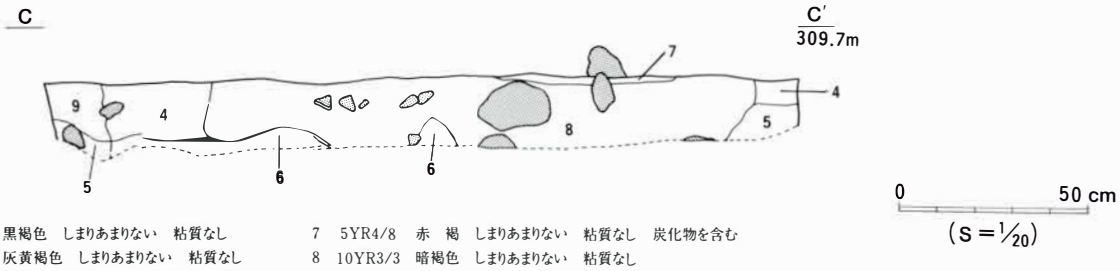


Jは縄文土器
Uは打欠石錘
Kは打欠石錘　Fは剝片　数字は遺物番号を表す

第27図　SB07実測図(1)

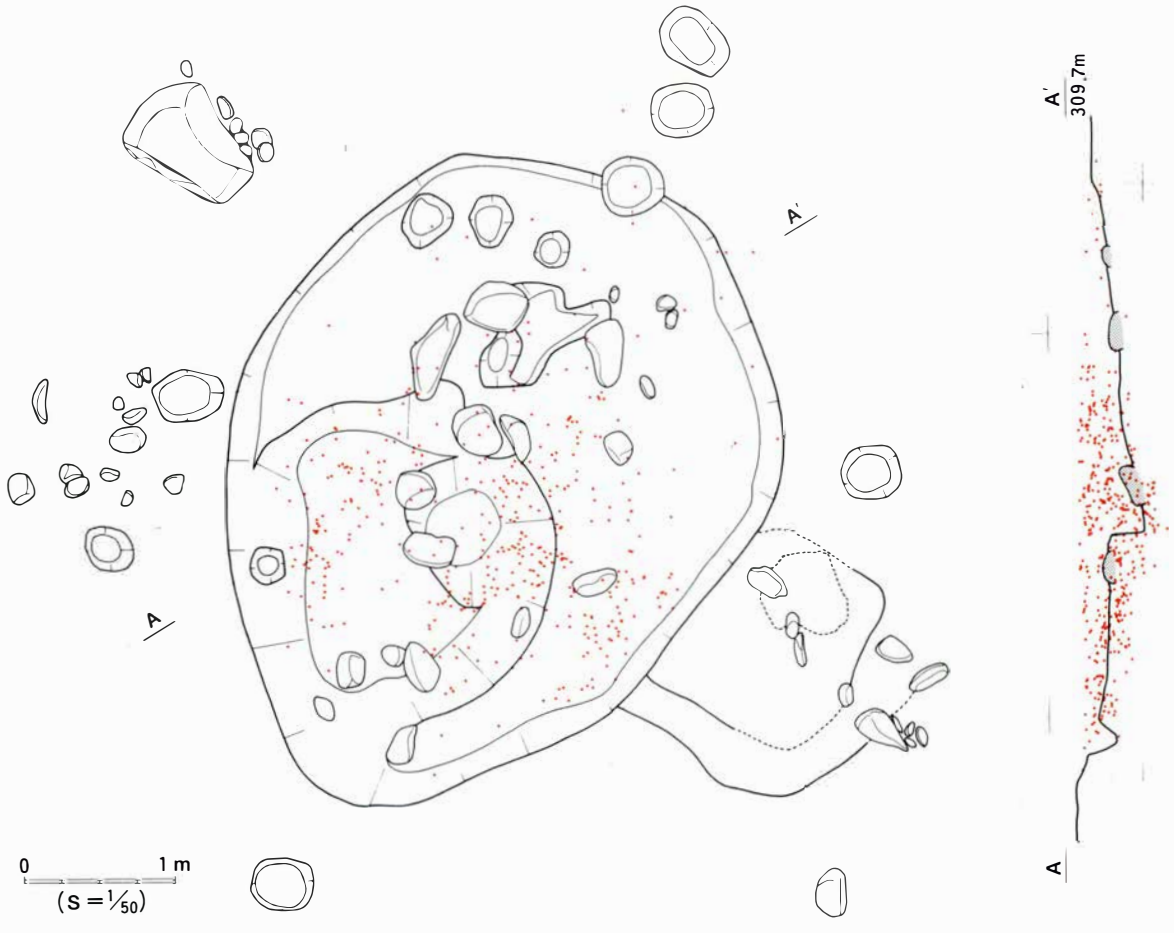


1　10YR2/3　黒褐色　しまりあり　粘質ややあり
2　10YR3/3　暗褐色　しまりあり　粘質ややあり



4　10YR3/2　黒褐色　しまりあまりない　粘質なし
5　10YR4/2　灰黄褐色　しまりあまりない　粘質なし
6　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり・粘質ともにあまりない
7　5YR4/8　赤　褐　しまりあまりない　粘質なし　炭化物を含む
8　10YR3/3　暗褐色　しまりあまりない　粘質なし
9　10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質ともにややある

SB07遺物出土状況（・は原則として遺物1点を表す）



第28図　SB07実測図(2)

第８号住居跡（ＳＢ08）〈第12～14図　図版２〉

Ｃ′69グリッド杭を中心とした辺り、ＳＢ01南西隣の第Ⅳ層直上で検出した。黄褐色土である第Ⅳ層の精査に入った段階で、径約4.5ｍの隅丸方形のプランを確認した。プラン北側の一部をＳＢ01に切られている。従ってＳＢ01構築以前の所産である。埋土の断面を観察すると、約10㎝前後と非常に浅い。側壁と床面の境がはっきりしない部分もあり、緩やかに中央へ傾斜していく。床面にはまったく礫の混入が認められなかった。中央部付近で一部硬化している箇所を確認した。本住居跡は第Ⅳ層で検出したが、竪穴を構築する際の掘り込みはもう少し高いレベルであったと考えられる。ＳＢ01を検出する際にも、その周辺は遺構存在の可能性を想定して精査を繰り返した箇所であった。結局ＳＢ01調査時にはプランを確定し検出することはできなかった。おそらく第Ⅰ層が浅く、耕作に伴う撹乱が多く入っていたために、この面に到達するまで検出できなかったのであろうと思われる。従って本来の竪穴はもう少し深かったであろうと想定される。ピットは全部で14基検出した。ＳＢ07同様、プラン外側南西部に４基のピットが確認できた。若干規模・配置という点で、ＳＢ07とは様相を異にする感じがあるが、本住居跡との関連が否定しきれないので、内部のピットと一括して報告することにした。なお、Ｐ29は半割した断面を見ると、３基のピットの複合体である可能性がある。埋土の上部には炭化物が混入している。検出した面がかなりレベル的に低かったので、埋土中で確認できた遺物も少なかった。全部で40点あり、そのうち土器は24点である。残存度の高いものを取り上げ８点図示した。なお、22はＳＢ01の４・５と、24・25はＳＢ01の14～18と同一個体である。そうした点を加味すると、ＳＢ08からＳＢ01への建て替えも考えられる。石器は、掻器Ⅲ１点、剥片類10点、磨石１点の合計12点が出土した。遺物量が少なく、詳細は不明である。なお、出土した遺物から判断すると、本住居跡は縄文時代前期後葉～末葉に帰属すると考えられる。切り合い関係のあるＳＢ01とはほとんど時期差がない可能性が高い。

土坑（ＳＫ）

ここで１基ずつ具体的に記述するのは、大型の土坑（ＳＫ）についてであり、小型のものについては「ピット」（Ｐ）として後にまとめて記述する。

第１号土坑（ＳＫ01）〈第29図〉

Ｊ′64グリッド第Ⅱ層中で検出した。径約１ｍの不整円形のプランを持つ。掘り込みは第Ⅱ層黒褐色土中より始まり、第Ⅳ層黄褐色砂礫層まで到達する。断面は半円形を呈し、深さは約25㎝である。埋土は三層であることが確認できた。埋土中には少量の炭化物以外に遺物は包含しておらず、帰属時期や本土坑の性格を示唆する手がかりはない。しかし、上層からの掘り込みは確認できず、第Ⅱ層で検出できた状況を考えると、第Ⅱ層が包含している遺物の帰属時期及び同様に検出した７軒の住居跡と時期を同じくする可能性が高いと思われる。従って本土坑も縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。なお、本土坑の中央やや下で14個の被熱していない円礫を検出した。円礫は径５～15㎝の大きさの砂岩である。

第2号土坑（ＳＫ02）〈第29図〉

Ｄ′70～Ｅ′70グリッド第Ⅱ層中で検出した。径約１ｍのほぼ円形のプランを持つ。断面はやや西側が深くはなっているが、皿状を呈している。あまり深い掘り込みはなく、最も深いところで20㎝ほどである。埋土は上下二層に分けられるが、堆積状況はあまり安定しているとは言えない。遺物の出土は剥片が６点あるのみで、礫もほとんど含んでいない。従って帰属時期その他を決定することは困難であるが、ＳＫ01と同様の理由で、縄文時代前期後葉の所産である可能性が高い。なお、本土坑を検出した位置は、ＳＢ01・ＳＢ04・ＳＢ05の三住居跡からほぼ等距離にある、本地点内では中核的な位置である。

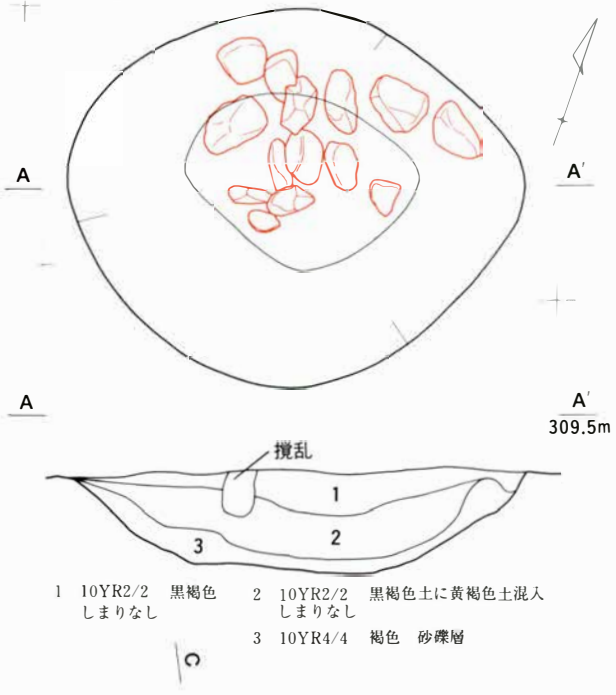
第3号土坑（ＳＫ03）〈第29図　図版３〉

Ｎ′73グリッド第Ⅳ層直上で検出した。本土坑は当初、ＳＫ04とともに風倒木痕であろうと判断していた。前述のように本遺跡の中位段丘上には数多くの風倒木痕があり、第１地点でも数多く検出した。原則として遺構とは関係のない明らかな風倒木痕は掘削しない方針で調査していた。しかし、数箇所の風倒木痕を掘削してみたところ、以外にも埋没している遺物が多いことがわかり、その後は時間の許す限り掘削した。第１地点で検出した風倒木痕の平面形は、楕円形の土坑が二つＵ字形に連なるように見える（第９図参照）。今回の調査で検出したＳＫ03・ＳＫ04もちょうど二つ並んでいたことから、それぞれを土坑とは認識せずに、風倒木痕として掘削を始めた。本土坑ＳＫ03からまとまった土器片が出土した時点でも、まだ土坑として認識していなかったが、隣接する黒褐色の楕円形プランを持つ現ＳＫ04より遺物が出土したので、「二つ並んだ土坑」として認識するに至った。本土坑ＳＫ03は、長径約1.5m短径約1.1mと第１地点では標準的な大きさで、長軸はほぼ南北方向である。断面は浅い皿状を呈しており、南東隅の傾斜は緩やかであるが南西隅はやや急である。深さは中央部の最も深いところで20㎝程度と比較的浅い。検出できたレベルが第Ⅳ層直上とかなり掘削が進んでしまった後であったので、本来の上場が確認できなかった可能性がある。おそらくもっと上方の第Ⅱ層黒褐色土中から掘り込まれていたと考えられる。遺構検出面と埋土の土色・土質が酷似しているため検出が困難であった。遺物は比較的良好な状況で出土している。本土坑を検出した面から数㎝ほど掘削したところで、南東隅より大型土器片が出土した（第一次出土）。土器は外側を上にして出土した。数片に割れていたが、まとまって出土している様子から全体の約1/3ほどの残存度であろうと推測できた。記録した後に慎重に取り上げた。土器が外側を上にして出土していることから、さらに下方に残りが存在する可能性を念頭に置きながら掘削を続けた。しばらく掘ったところで予想した位置とは違った北西隅から、今度は内側を上にして割と大きめの土器片が出土した（第二次出土）。表面の感じつかめないので同一個体かどうか即断はできなかったが、一次整理の後、同一個体で接合可能であることが判明した。最終的に土器（1399）は全体の半周ほどになり、部位も口縁端部から胴部下半まで残存していた。その他の遺物は、土器小片が数点と打欠石錘１点（148）、剥片２点が出土しているのみである。本土坑は、出土した土器から縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。

第4号土坑（ＳＫ04）〈第29図　図版３〉

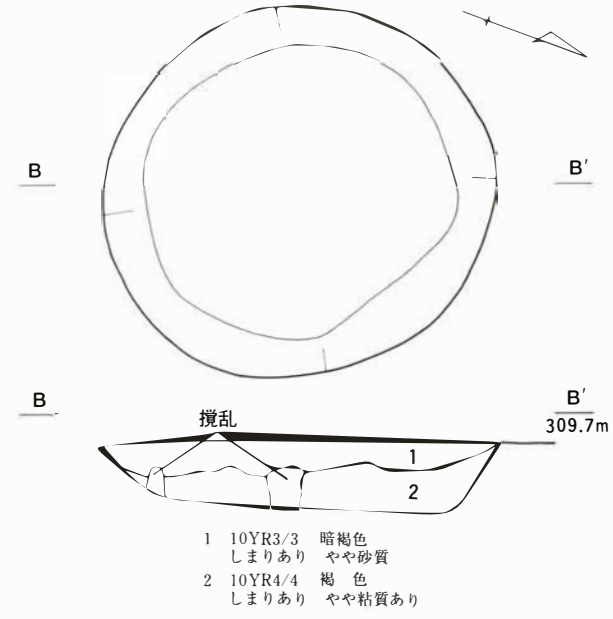
ＳＫ03同様にＮ′73グリッド第Ⅳ層直上で検出した。検出に至る過程についてはＳＫ03のところで記

SK01平断面図

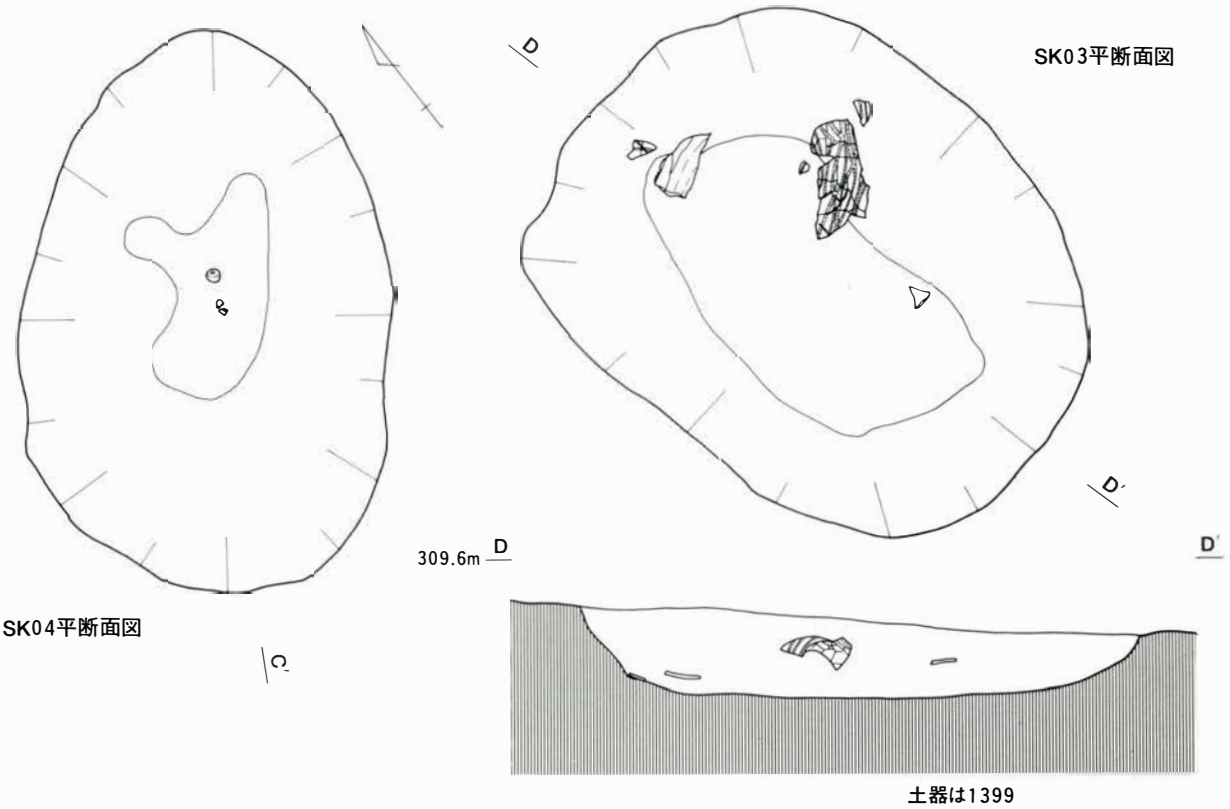


1　10YR2/2　黒褐色　しまりなし
2　10YR2/2　黒褐色土に黄褐色土混入　しまりなし
3　10YR4/4　褐色　砂礫層

SK02平断面図



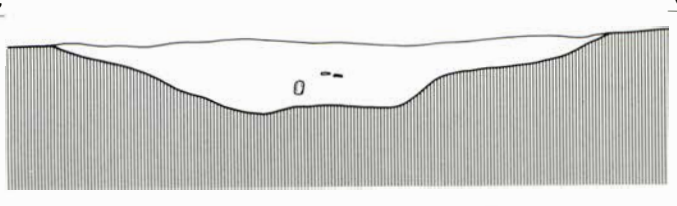
1　10YR3/3　暗褐色　しまりあり　やや砂質
2　10YR4/4　褐　色　しまりあり　やや粘質あり



SK03平断面図

SK04平断面図

土器は1399



装飾品は149

0　50 cm
(S＝1/20)

第29図　SK01・02・03・04実測図

した通りである。長径約1.5m短径約１ｍの楕円形プランを持つ。断面は皿状を呈しており、中央部の最も深いところで約20㎝である。南西部分は緩やかな掘り込みで棚状にほぼ平らになりながら中央部へ向かう。中央部から遺物出土地点にかけてやや深くなり、北東部に向けて緩やかに立ち上がっていく。検出した断面が浅いのはＳＫ03同様、低いレベルでしか検出できなかったためと考えられる。本来もう少し深さがあった土坑であった可能性が高い。本土坑からは完形の垂飾（149）が出土している。この垂飾もＳＫ03出土土器と同様に、検出面の数㎝下から出土した。出土位置は本土坑内の中央から北東よりの地点、つまり長軸方向に中心部より10数㎝端へよった地点である。垂飾は糸擦れによって生じた中央孔の開いた部分を下にし、孔がほぼ長軸方向になった状態で出土した。共伴した遺物は判別不能に近い土器小片が２点あるだけで、時期を明確に示すものはない。ＳＫ03との関係は明確ではないが、検出状況からみて、ほぼ同時期に構築された可能性が高いと考えられる。垂飾出土以降は、その他の装飾品等が一緒に埋納されている可能性があったため、小礫に至るまですべて洗浄して調べたが、人工遺物と考えられるようなものはこれら以外には出土しなかった。ＳＫ03とＳＫ04は最終的に風倒木痕ではなくＳＫとして報告したが、その理由は２点ある。１点は遺構の検出状況からで、二つの土坑の埋土である黒褐色土が連続せず、それぞれが独立したプランを持つことである。もう１点は遺物の出土状況からで、投棄及び流れ込みではなく埋設に近い状況であったことである。この二つの遺構を土坑であるとすると、その性格が問われるところであるが、現状では土壙（墓）として考えていきたい。それはこれらの土壙の検出位置が、住居跡の集中する地域からややはずれ、少ないながらピットが散在する地域である（第10図参照）ことや、前述した遺物の出土状況から判断してのことである。縄文時代前期の段階で居住区域と墓域（広場）の設定があったとする遺跡の類例も聞き及ぶところである。この二つの土壙から本地点でも居住区域と墓域の設定があったとは断言できないが、そうした概念を持つ集落遺跡であった可能性も指摘できる。

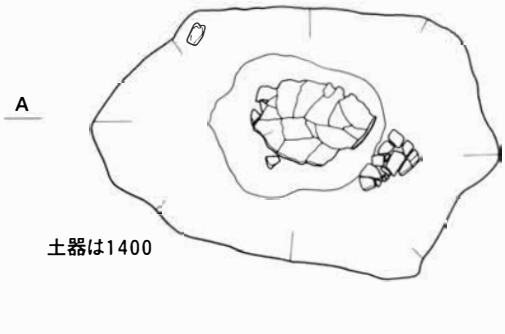
第５号土坑（ＳＫ05）〈第30図〉

H′63グリッド第Ⅲ層中で検出した。検出した位置は第１地点の中でも第４地点寄りで、第Ⅱ層～第Ⅲ層が最も厚く堆積している箇所である。遺物の出土は比較的多いほうであるが、遺構はほとんど検出できなかった。長径約1.1m短径約0.7m深さ約0.3mと本地点における土坑としては標準的な大きさである。ただ深さについては他の土坑と同様に本来の深さより浅いレベルでしか検出できなかったおそれがある。本土坑の底面からは約1/2個体分の深鉢土器（1400）が出土している。中央部に内面を上にした状態にあり、少し離れてもうひとかたまりがやはり内面を上にして出土した。中央部のものと同一個体である。土器が底面に沿うように置かれている出土状況からみて、埋納されたものである可能性が高い。埋土中のやや高い位置から打欠石錘が１点出土している。出土した土器は縄文時代前期後葉のものと考えられる。

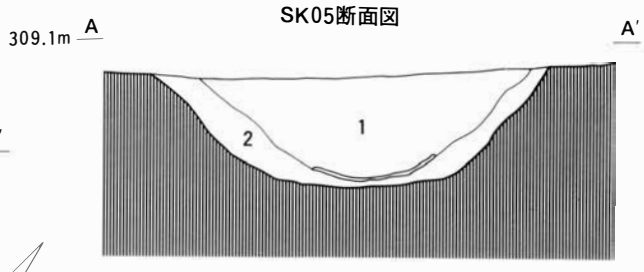
第６号土坑（ＳＫ06）〈第30図〉

B′65グリッド第Ⅱ層中で検出した。調査区域の最も山側で第Ⅱ層～第Ⅲ層の堆積は厚い。平面形は径約１ｍでいびつな円形である。プラン南側には長径約60㎝ほどの亜円礫があるが、本土坑と関係は不明である。断面はほぼ逆台形状を呈しており、最も深いところで約55㎝ほどある。埋土中には多く

SK05平面図

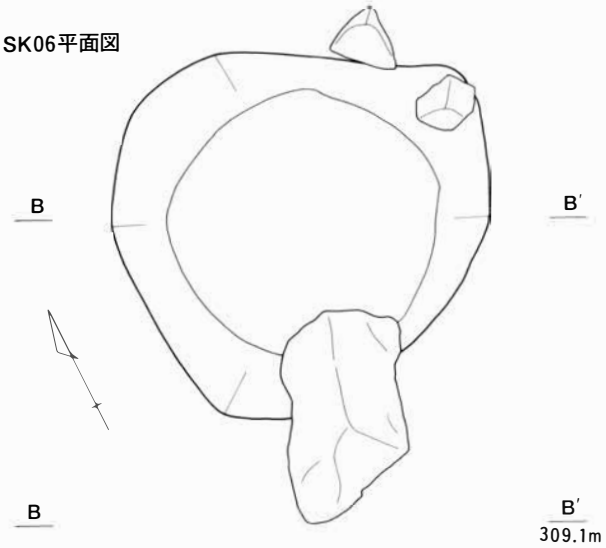


SK05断面図

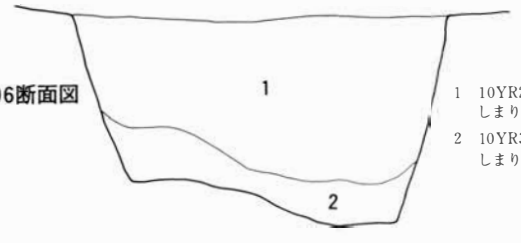


1　10YR3/3　黒褐色　しまりなし
2　10YR3/3　暗褐色土に黄褐色土が混入　しまりややあり

SK06平面図

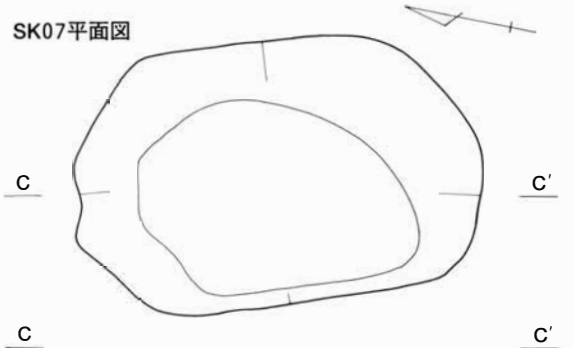


SK06断面図

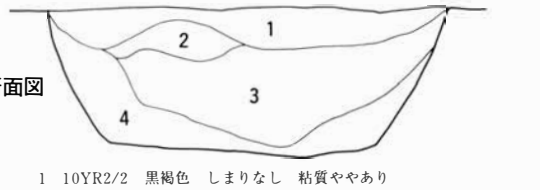


1　10YR2/2　黒褐色　しまりややあり　粘質あり
2　10YR3/3　暗褐色　しまりややあり　粘質あり

SK07平面図

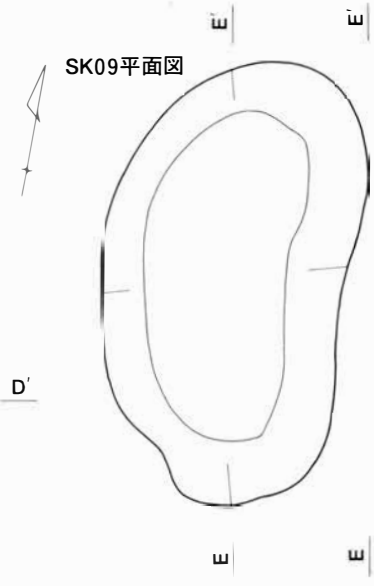


SK07断面図

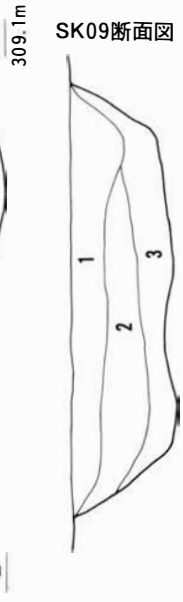


1　10YR2/2　黒褐色　しまりなし　粘質ややあり
2　2.5YR3/3　暗赤褐色　しまりなし　粘質ややあり　焼土か
3　10YR2/3　黒褐色　しまりなし　粘質ややあり
4　10YR5/8　黄褐色　しまり・粘質ともになし

SK09平面図

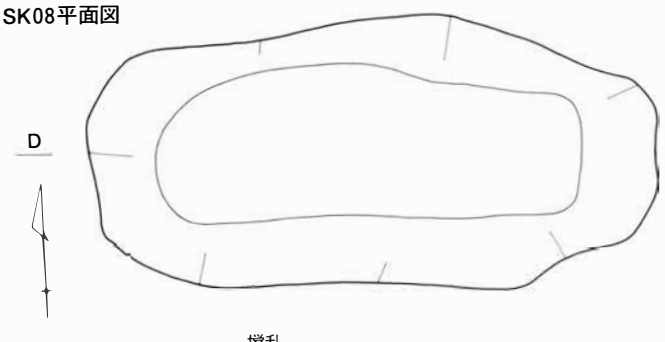


SK09断面図

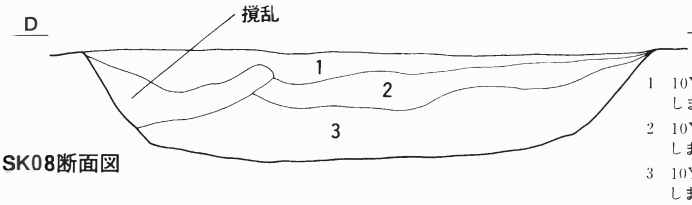


1　10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質ともにややあり
2　10YR2/2　黒褐色　しまりあり　粘質ややあり
3　10YR2/3　暗褐色　しまり・粘質ともにあり

SK08平面図



SK08断面図



1　10YR2/2　黒褐色　しまりややあり　粘質あり
2　10YR2/3　黒褐色　しまりなし　粘質あり
3　10YR5/8　黄色褐色　しまり・粘質ともにあり

0　50 cm
(S＝1/20)

第30図　SK05・06・07・08・09実測図

の礫が混入しており、上層は径10～20cmの亜円礫が、下層では3～5cmの円礫が確認できた。遺物は土器片が1点（1401）だけが埋土上層より出土している。縄文時代前期後葉と考えられる口縁部の破片であるが、10数m離れたF′64グリッド杭を中心とした箇所で同一個体と思われる破片が数点出土している。本土坑の性格は不明である。帰属時期は検出状況から縄文時代前期後葉の可能性がある。

第7号土坑（ＳＫ07）〈第30図〉

P′70グリッド第II層で検出した。長径約1m短径約0.7mと楕円形プランを持つ。断面は擂り鉢状で深さは約40cmほどである。堆積状況は安定しているほうであるが、上層部に焼土のような2.5ＹＲ4/6赤褐色土を含む箇所がある。遺物の出土はみられなかったが、下部では中小の円礫が多く含まれていた。以下に示すＳＫ08・ＳＫ09も同様であるが、埋土および底面からの遺物の出土はなく、時期・性格その他を決定するのに困難を極めるが、現時点ではそれぞれの検出状況から縄文時代前期後葉の所産である可能性があると判断してここに掲載した。

第8号土坑（ＳＫ08）〈第30図〉

R′70グリッド第II層で検出した。長径約1.5m短径約0.7mの長楕円形プランを持つ。断面は洗面器状を呈しており、深さは30cm程度である。一部撹乱を受けてはいるものの全体に安定した堆積状況である。上部にはほとんど礫は含まれていないが、下部には中小の礫が若干含まれている。

第9号土坑（ＳＫ09）〈第30図〉

E′62グリッド第II層で検出した。長径約11m短径約0.6mのややいびつな楕円形プランを持つ。断面は洗面器状を呈しており、深さは最も深いところでも30cmに満たない。比較的安定した堆積状況である。遺物の出土は確認できなかった。

ピット（Ｐ）

第1地点で確認できた小型の土坑であるピットは比較的少ない。理由は定かではないが、強いて言うと前述したように風倒木痕による撹乱が広範にわたっていたことが挙げられる。遺構配置図（第10図）に図示したのは全部で31基である。特別に遺物の埋納があるなどして、そのピット帰属時期や性格を決定できるものはなかった。また、上部構造を持つ遺構が想定できるような配列も確認できない。従って個々の記述は割愛し、サイズを中心に表にまとめておく（第二分冊第1表）。ただ第1地点から第4地点に点在するほぼ同時期と推定される住居跡等との位置関係については、ＳＫ04の記述で指摘したような仮説も検討の余地を残していると思われる。

集石遺構（ＳＩ）

第１号集石遺構（ＳＩ01）〈第31図　図版３〉

K′70グリッド第II層中で検出した。扁平な円礫をそれぞれの長軸が放射状になるように３個集中させていた。検出した段階では石皿の可能性があるということで持ち帰り一次整理を行った。しかし二次整理の段階で他の石皿類と比較検討した結果、明確な使用痕が確認できないという理由で遺物とは認定せず、図化しなかった。礫の周りには径約１ｍ前後の不整円形プランが検出できた。断面は皿状で非常に浅く10cm程度である。このプランを人為的な掘り込みであると仮定しても、礫との関係は明確ではない。また、本遺構東側には焼土らしき赤褐色土が確認されているが、詳細は明らかではない。遺物の混入も認められず性格も不明であるが、検出状況から判断すると縄文時代の所産である可能性がある。

第２号集石遺構（ＳＩ02）〈第31図　図版４〉

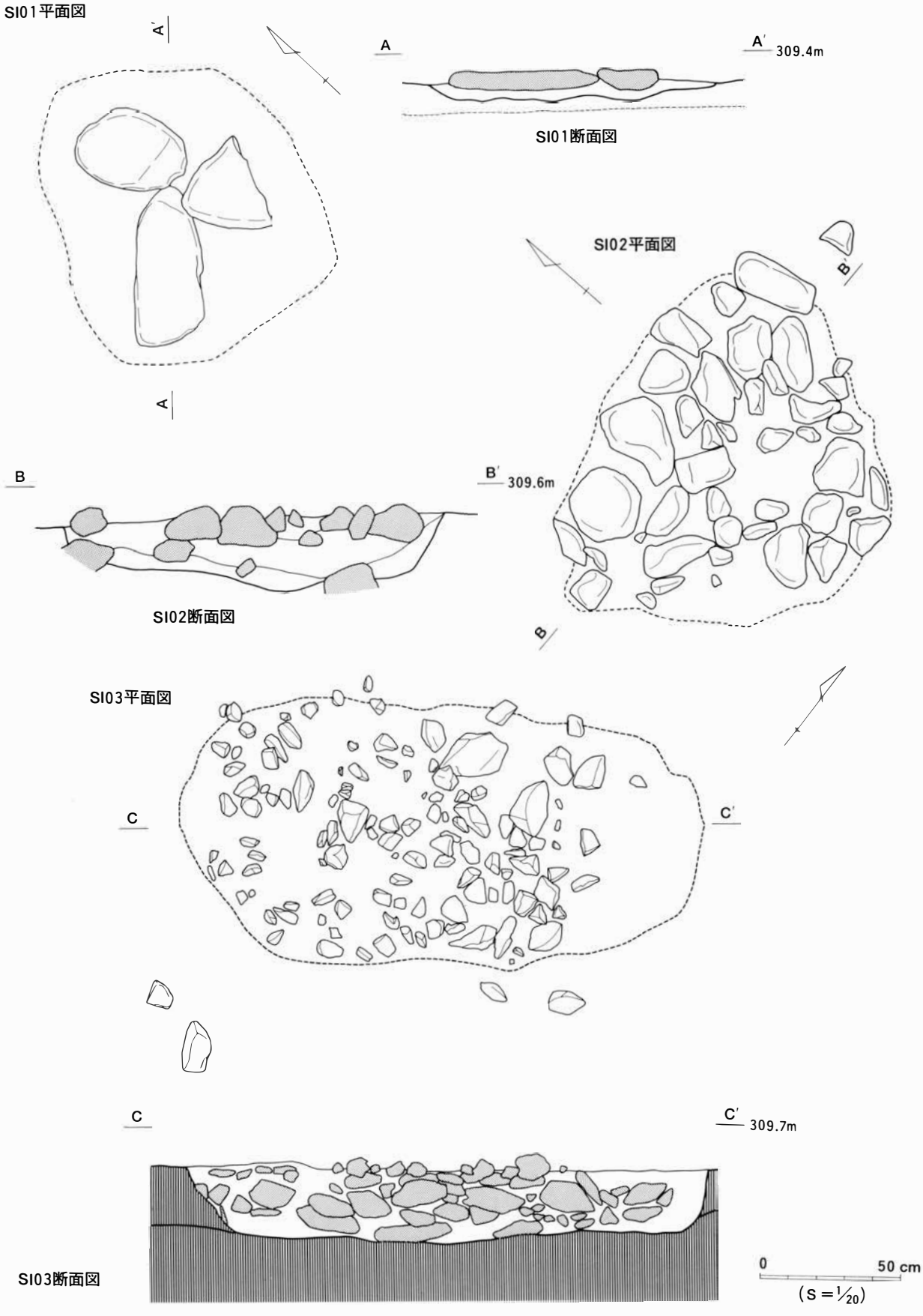
F′71グリッド第II層中で検出した。検出した位置はＳＢ04とＳＢ05から等距離にある中核的な箇所である。礫集中箇所の周りを取り囲むようにして三角形状の黒褐色土プランを検出した。プランは径約1.2m前後の大きさである。断面は洗面器状を呈しており、深いところでも25cm程度である。プラン内の検出面では42個の礫が確認できたが、下方では少なく垂直方向に何層にもわたって積み重ねられている様子はなかった。礫は亜円礫を主体としており、大きさは大小さまざまである。微量の炭化物は検出したが、礫自体に顕著な被熱した箇所は認められなかった。遺物の混入は確認できなかったが、近くにある住居跡と同じレベルで検出していることを考えると、縄文時代の所産である可能性が高い。

第３号集石遺構（ＳＩ03）〈第31図　図版４〉

G′72グリッド第II層中で検出した。検出位置はＳＢ07の近くで、住居跡が集中する箇所である。礫集中箇所を取り囲むようにして、長楕円形の黒褐色土のプランを持つ。プランの大きさは長径約1.8m短径約0.9mで、断面形は洗面器状を呈しており深さ約0.9mである。検出面で確認できた礫は小さなものが多かったが、下部には比較的大きいものも混入していた。礫は亜角礫が主体となっている。埋土中に炭化物は検出できなかったし、礫に被熱も認められなかった。従ってその性格は不明である。検出状況からすると、縄文時代の所産である可能性が高い。

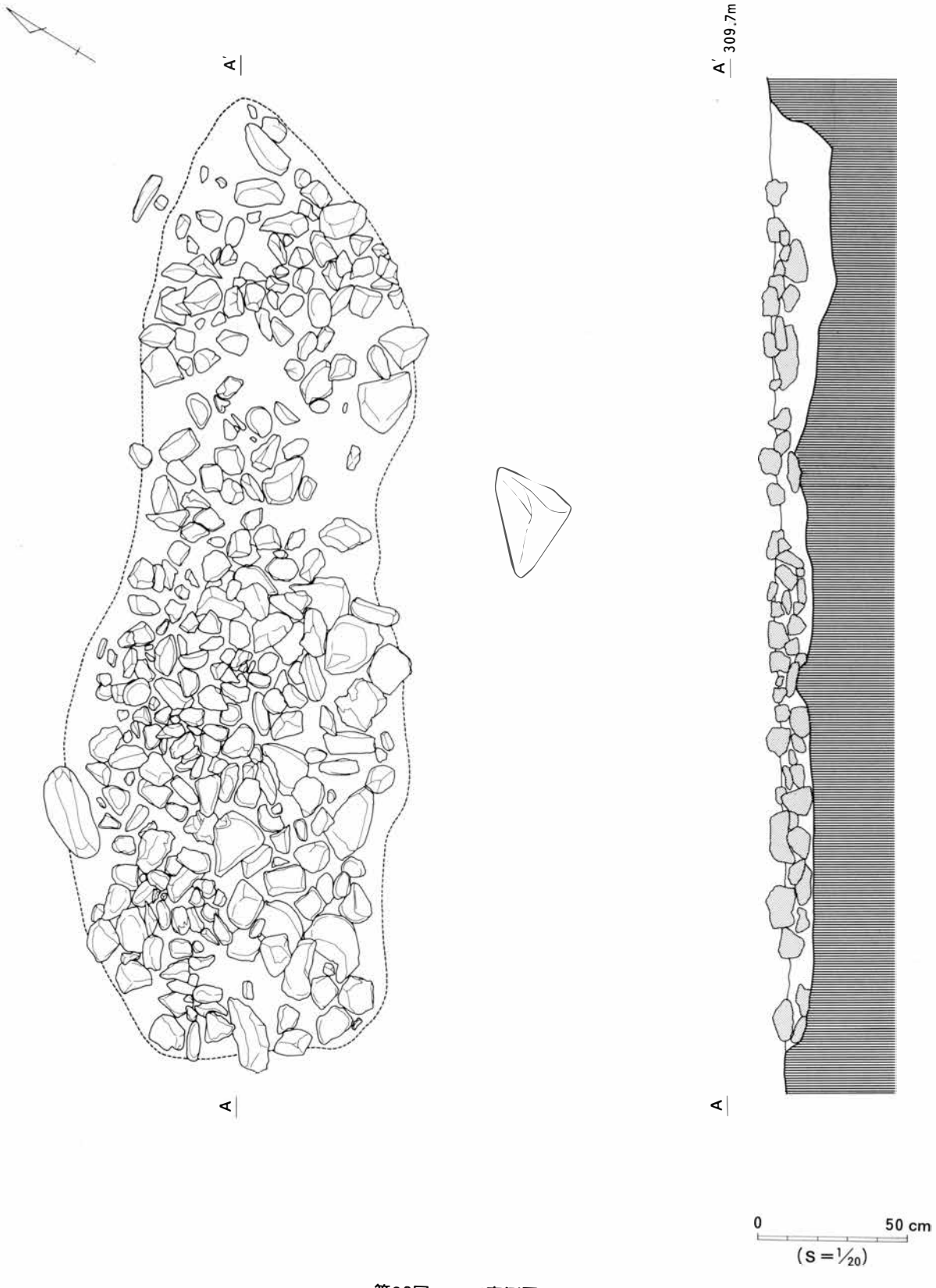
第４号集石遺構（ＳＩ04）〈第32図　図版４〉

G′72～F′72グリッド第II層中で検出した。その位置はＳＩ03の山側で、ＳＢ04に連なる箇所である。礫集中箇所にはほとんどの礫を包括するように黒褐色土プランがある。断面は比較的浅く、ＳＩ03に連なる側は若干深くなっている。最も深いところで20cmほどである。確認できた礫は亜円礫や亜角礫が主体であるが、他と同様に被熱した形跡は認められなかった。平面的にはＳＩ03と同じように考えられたが、下部にあまり礫はなく浅く薄い礫の堆積であった。遺物は近現代陶器の小破片が１点だけ礫上部で出土したが、本遺構に伴うもとは考えられない。従って検出状況から帰属時期の判断を下したい。



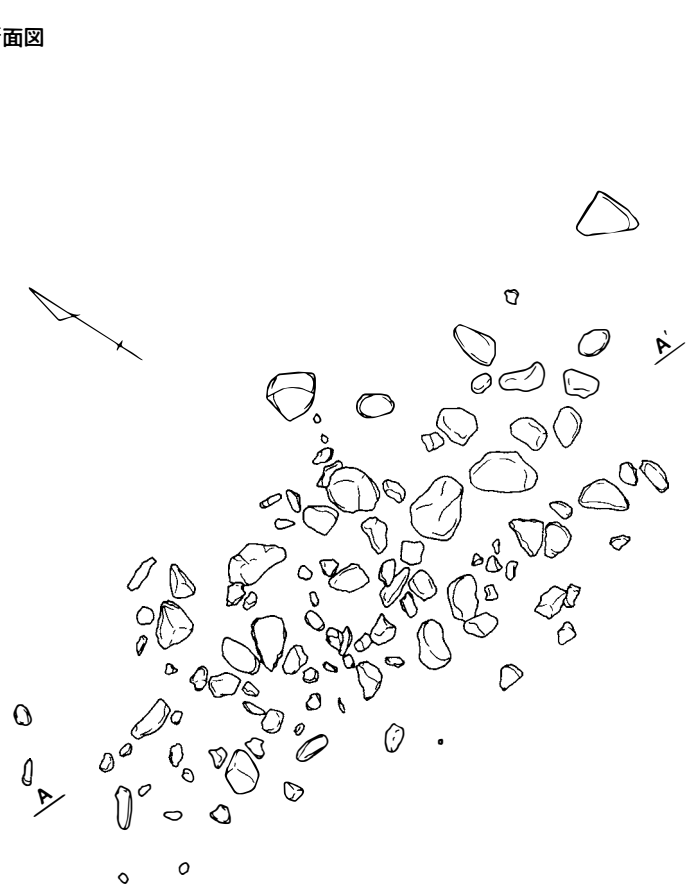
第31図　SI01・02・03実測図

SI04平断面図

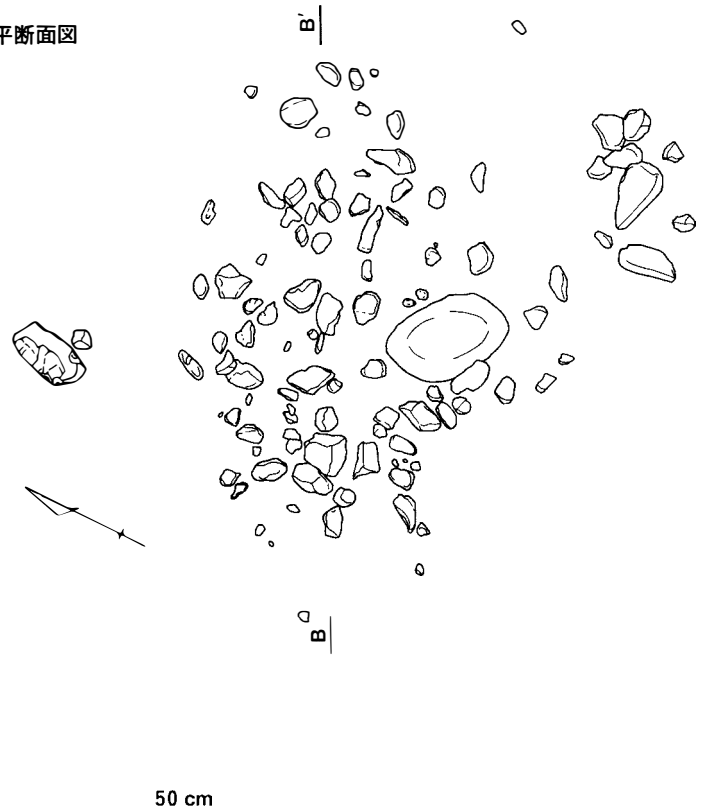


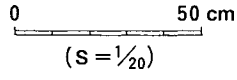
第32図　SI04実測図

SI05平断面図



SI06平断面図





第33図　SI05・06実測図

SI07平断面図

第34図　SI07実測図

第5号集石遺構（ＳＩ05）・第6号集石遺構（ＳＩ06）〈第33図〉

ＳＩ05・ＳＩ06はＳＢ04北側で検出した集石遺構であるが、礫の点在範囲が近接している上に、前述のＳＩ01～03のようにそれぞれ独立したプランを持たないので、一連のものである可能性がある。また検出状況も似ているのでまとめて2基を記述することにした。F′72～F′73グリッド第II層中で検出した。中小の亜角礫・亜円礫を主体としている。平面的には礫が集中しているのが確認できるが、下部にはほとんどなく、厚さ10cm程度の範囲に点在しているだけである。上層からの掘り込みは確認できず、ＳＢ04検出時にはじめて確認できた。当初、後世の土地利用の際に不必要であった礫を埋めたのではなかろうかとも考えたが、そうであるならば平面的に広がるのは不自然であるとの指摘を受け、縄文時代の所産の可能性が高いと判断した。詳細は不明である。

第7号集石遺構（ＳＩ07）〈第34図〉

O′72～P′72グリッド第II層中で検出した。検出位置はＳＫ03・ＳＫ04や自然流路ＳＸ08の近くで、住居跡が集中する地区からやや離れた場所である。ＳＩ05・ＳＩ06同様にプランは確認できなかった。北東側を大きな木の根による撹乱を受け、礫の広がりの全容を確認することはできなかったが、北西から南東にかけて長く広がる。検出した面では礫がかなり密集しているが、下部にはあまりなく平面的な広がりがあるのみである。ただ礫集中区の中央部には一辺約15cm厚さ4cmほどの焼土が確認できた。焼土の周辺にはあまり礫はない。礫集中箇所からの遺物の出土はなく、炭化物も確認できなかった。詳細は不明であるが、その検出状況から縄文時代の所産である可能性がある。

遺物集積（ＳＵ）

第1号遺物集積（ＳＵ01）〈第35図〉

K′77グリッド第II層中で検出した。検出レベルは第II層中だが、厳密に言うと風倒木痕の黒褐色土中である。その埋土である黒褐色土の上層から東日本系土器（1407）が出土した。上下に何層も重なっている様子はなく、個体の一部が潰れるようにして埋没したと考えられる。1407の破片がそのほとんどを占めているが、中に数点は特殊突帯を有するものもあったので、そのうちの3点（1404～1406）を図示した。本遺物集積の場合、東日本的な要素を持つものと西日本的な要素を持つものが共伴する形で出土しているが、その出土状況から判断する限りでは同時性・一括性が高いと考えられる。

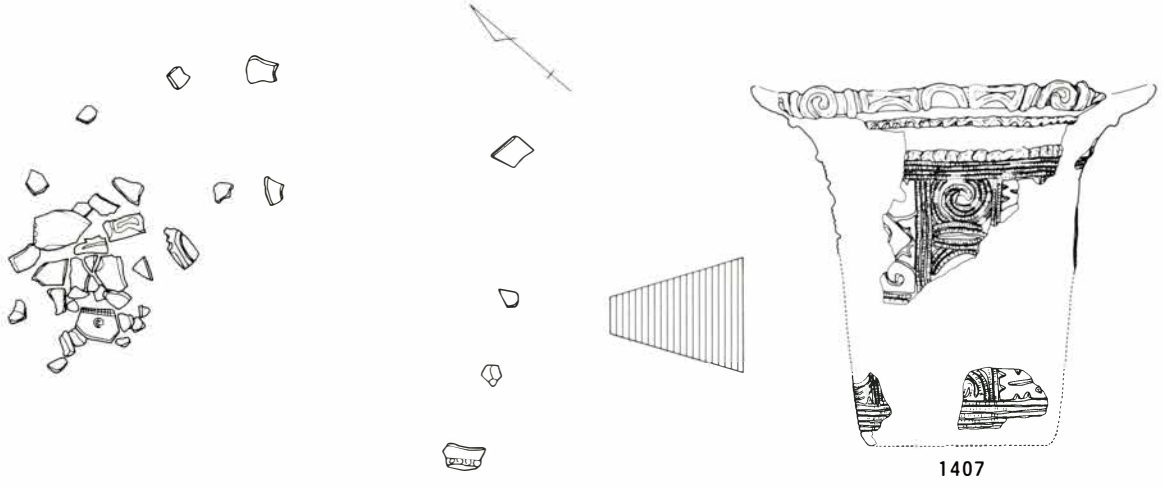
第2号遺物集積（ＳＵ02）〈第35図〉

K′79グリッド第II層中で検出した。ＳＵ01同様、風倒木痕の黒褐色埋土中での検出である。出土状況はほぼ1個体分の土器が潰れた形で埋まっているだけで、特別な状況ではない。ただ出土した土器が他にあまり例を見ないものなので、あえて出土状況を図示した。

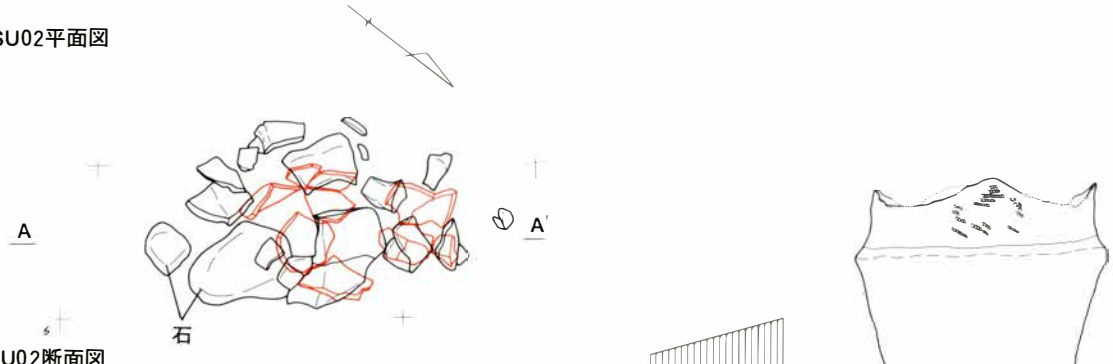
第3号遺物集積（ＳＵ03）〈第36図　図版4〉

D′63～D′64グリッド第III層中で検出した。ＳＵ03は早期高山寺式土器の集中出土箇所である。同一

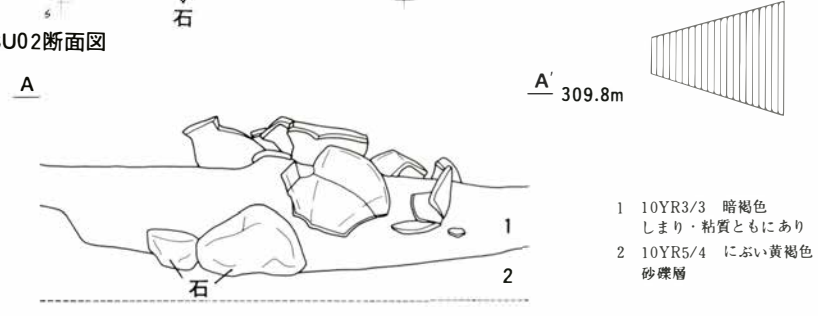
SU01平面図



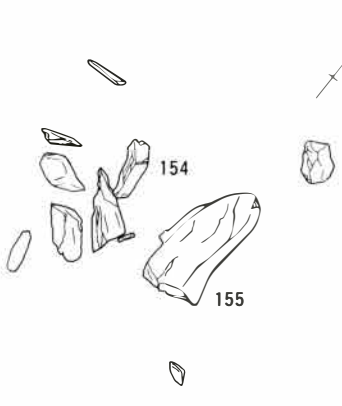
SU02平面図



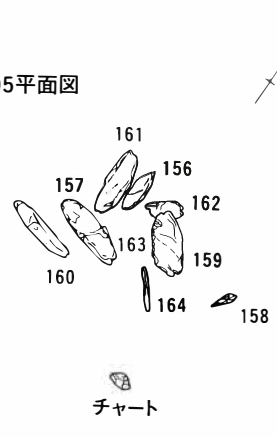
SU02断面図

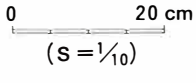


SU04平面図



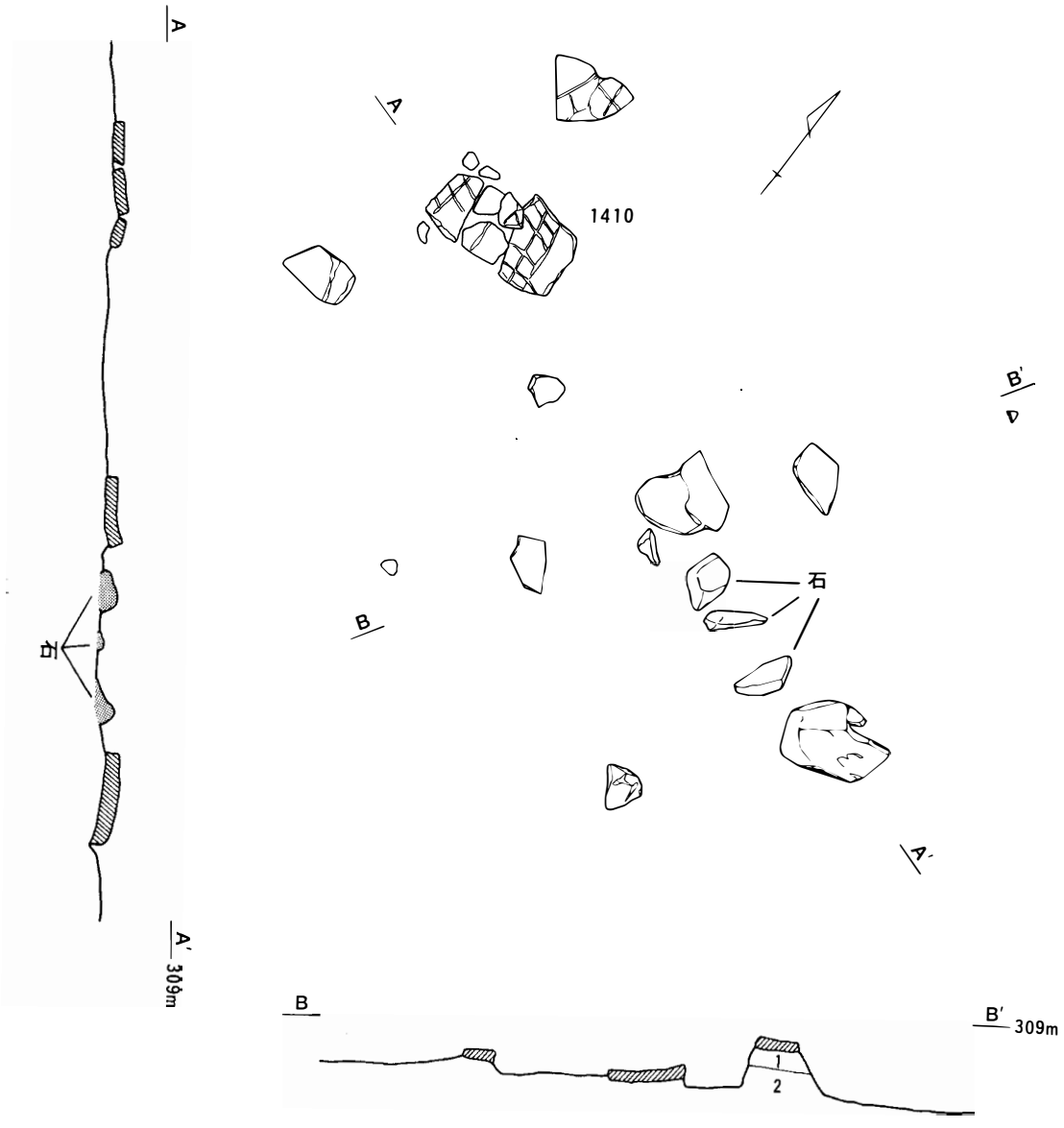
SU05平面図





第35図　SU01・02・04・05実測図

SU03平断面図



第36図　SU03実測図

個体と思われる土器片がD′64グリッドのＴＰ第Ⅲ層より出土していたので、その出土は本調査以前に予想できた。ただ遺物の存在は確認していたが、遺構は確認できていなかったので、その検出の努めたが、結局検出できなかった。本地点における高山寺式土器の分布は、D′63～D′64グリッド周辺以外でも数点あるが、どれもまとまりのない小片が単発的に出土しているに過ぎない。よって本箇所の出土状況を図示することにした。

第４号遺物集積（ＳＵ04）〈第35図　図版４〉

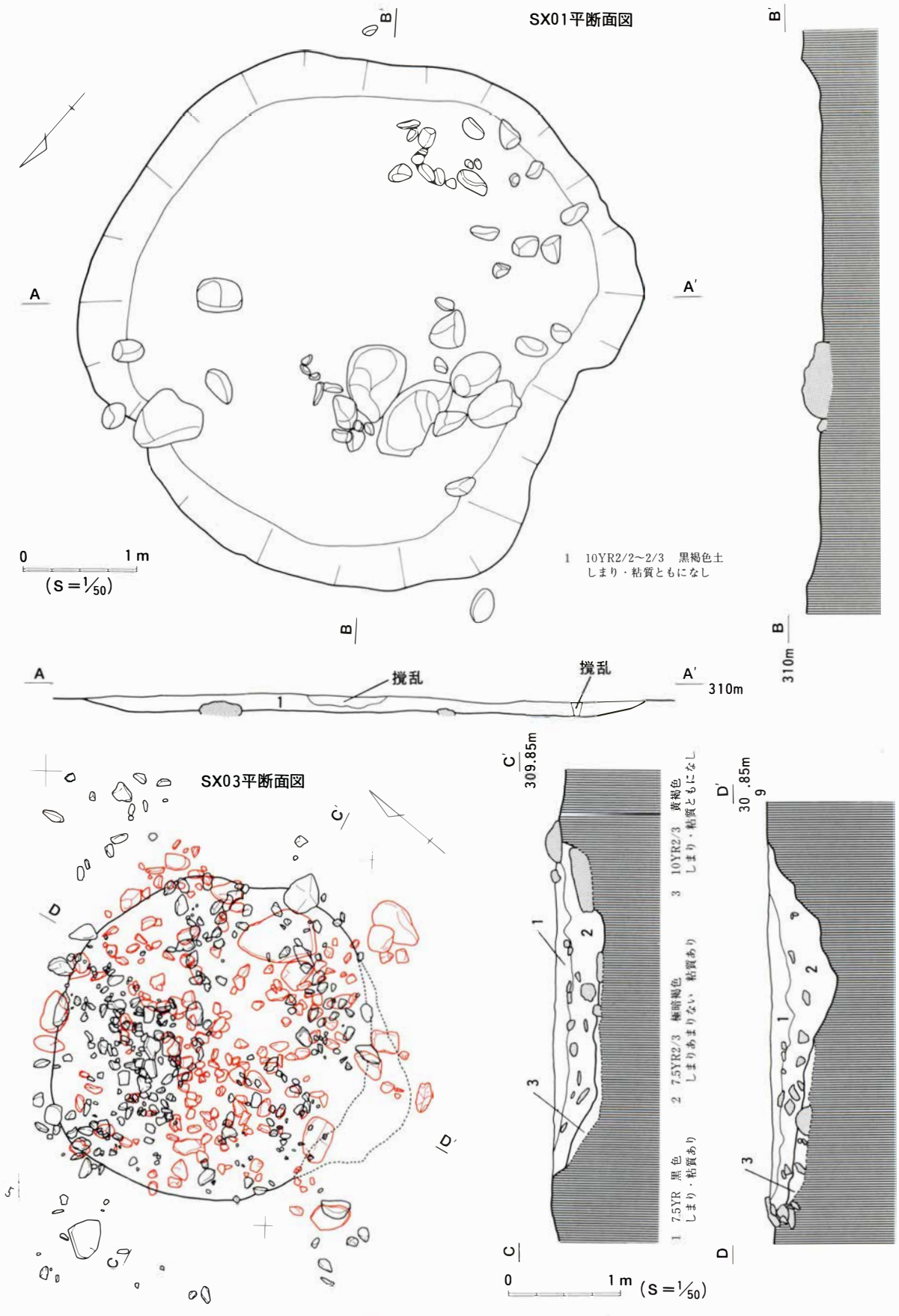
M′65グリッド第Ⅱ層で検出した。泥岩製石材の集積である。出土した周辺には同様の泥岩製の石錘が比較的多く出土している。それらの石錘とここで出土した石材の関係は、憶測の域を脱しない部分もあるが、この石材を使用して石錘を作成した可能性も指摘できる。なお、この数点の石材は一括性の高いものであると考えられる。

第５号遺物集積（ＳＵ05）〈第35図　図版４〉

M′69グリッド第Ⅱ層中で検出した。M′69グリッド杭下の一辺20㎝四方の範囲に集中していた。出土した９点の石錘は重なるように密集しており、包含層であるとはいえ、かなりその同時性・一括性は高いと考えられる。どれも泥岩製であり、他にない出土状況から判断すると、同一の網に使用されていたものが網の一部とともに投棄された可能性も指摘できる。

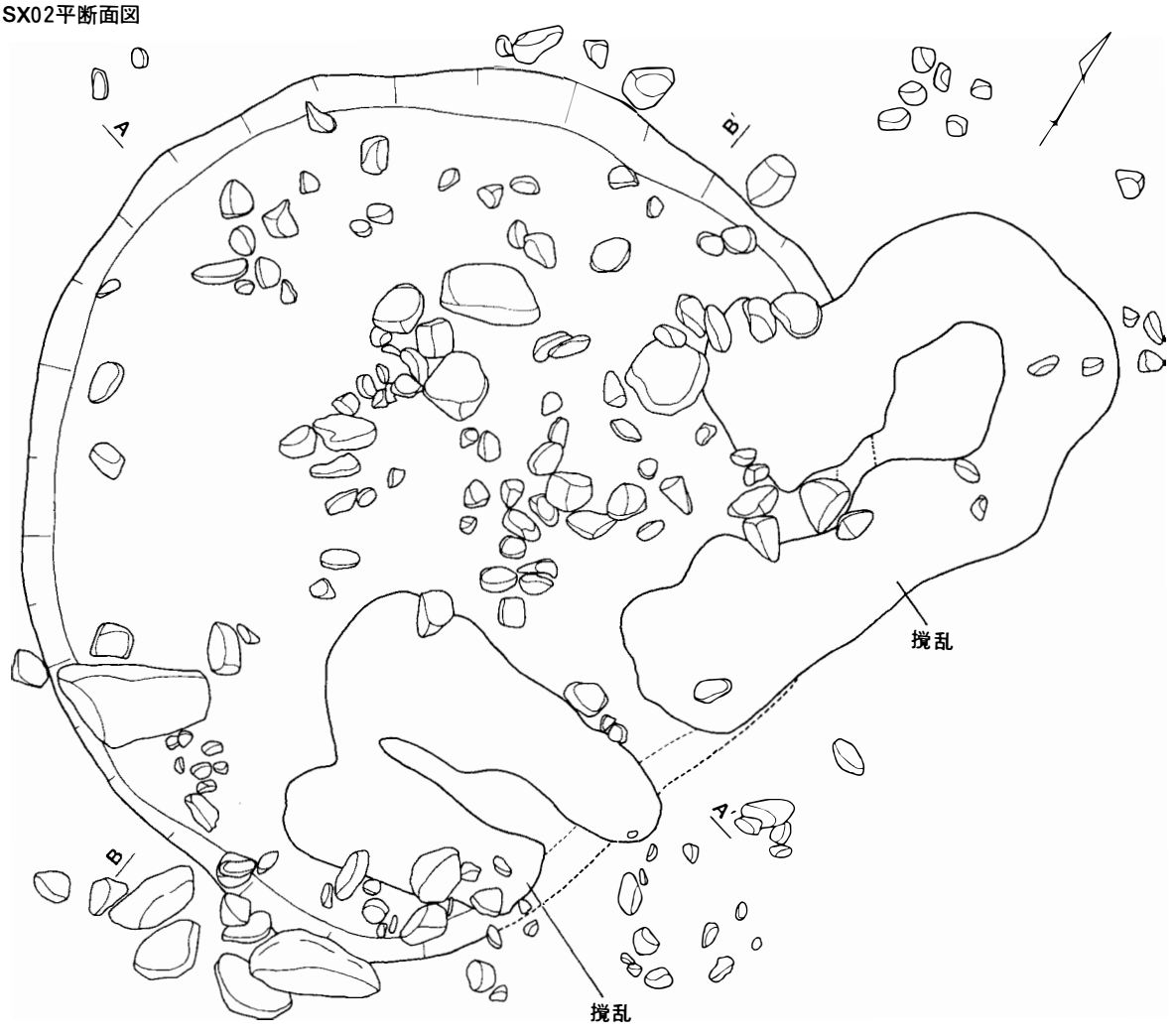
その他の遺構（ＳＸ）〈第37～41図　図版３・４〉

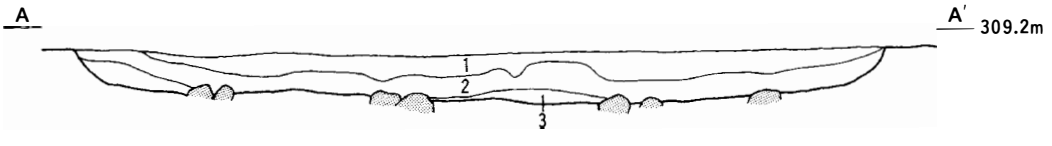
前述したように縄文時代の所産であると考えられるＳＸは９基である。そのどれもが詳細が明らかでない不明遺構である。従って個々の詳細な記述は避け、全体をまとめて記述することにした。ＳＸ９基のうち竪穴状遺構と考えられる３基は、ＳＸ01・ＳＸ02・ＳＸ03である。ＳＸ01はＩ′80～Ｊ′81グリッド第Ⅱ層中で検出した。平面形は径約５ｍのややいびつな円形のプランを有する（第37図）。断面は浅く皿状を呈している。遺物は石核が１点（165）出土しているのみである。自然の凹地というより人為的な掘削によるものと考えられるが、詳細は不明である。ＳＸ02はM′60～Ｏ′61グリッド第Ⅱ層中で検出した。平面形は径5.5mのかなり大きなほぼ円形のプランを有する（第38・39図）。第４地点掘削時にその一部を検出しているが、ほんの一部であったために風倒木痕と考えられていた。平面形プラン全体は風倒木痕による撹乱のために明らかではない。断面は浅い皿状を呈している。埋土中だけでなく床面でも礫の混入が多く、そのためかピット等の検出はできなかった。しかし、遺物の出土は割と多く、特に断面を三角形状に成形した突帯を有する土器が比較的良好な状況で出土している。他にも特殊突帯を有する土器も出土しており、帰属時期は縄文時代前期後葉であると判断できる。他の様相と比較しても住居跡であった可能性は極めて高いが、撹乱の状況なども加味しあえてＳＸとした。ＳＸ03は多くの礫が混入していた竪穴状遺構である（第37図）。Ｒ′65～Ｓ′65グリッド第Ⅱ層中で検出した。平面形は径約３ｍと小さめの円形プランを有する。断面は洗面器状を呈しており、深いところで60㎝程度である。遺物は縄文突帯や特殊突帯を有する土器片が３点ほどその埋土より出土している。検出面では、黒褐色土のプランが確認できたので掘削を開始したところ、掘削直後より多くの

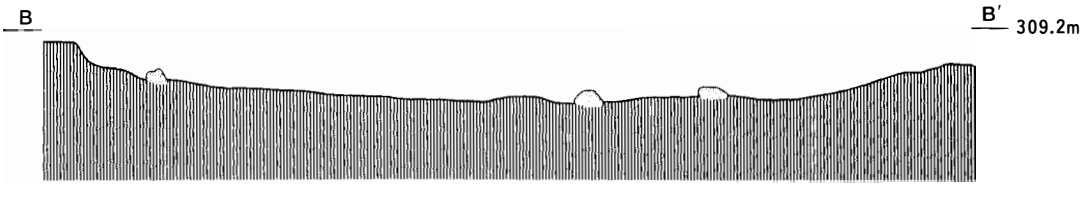


第37図　SX01・03実測図

SX02平断面図





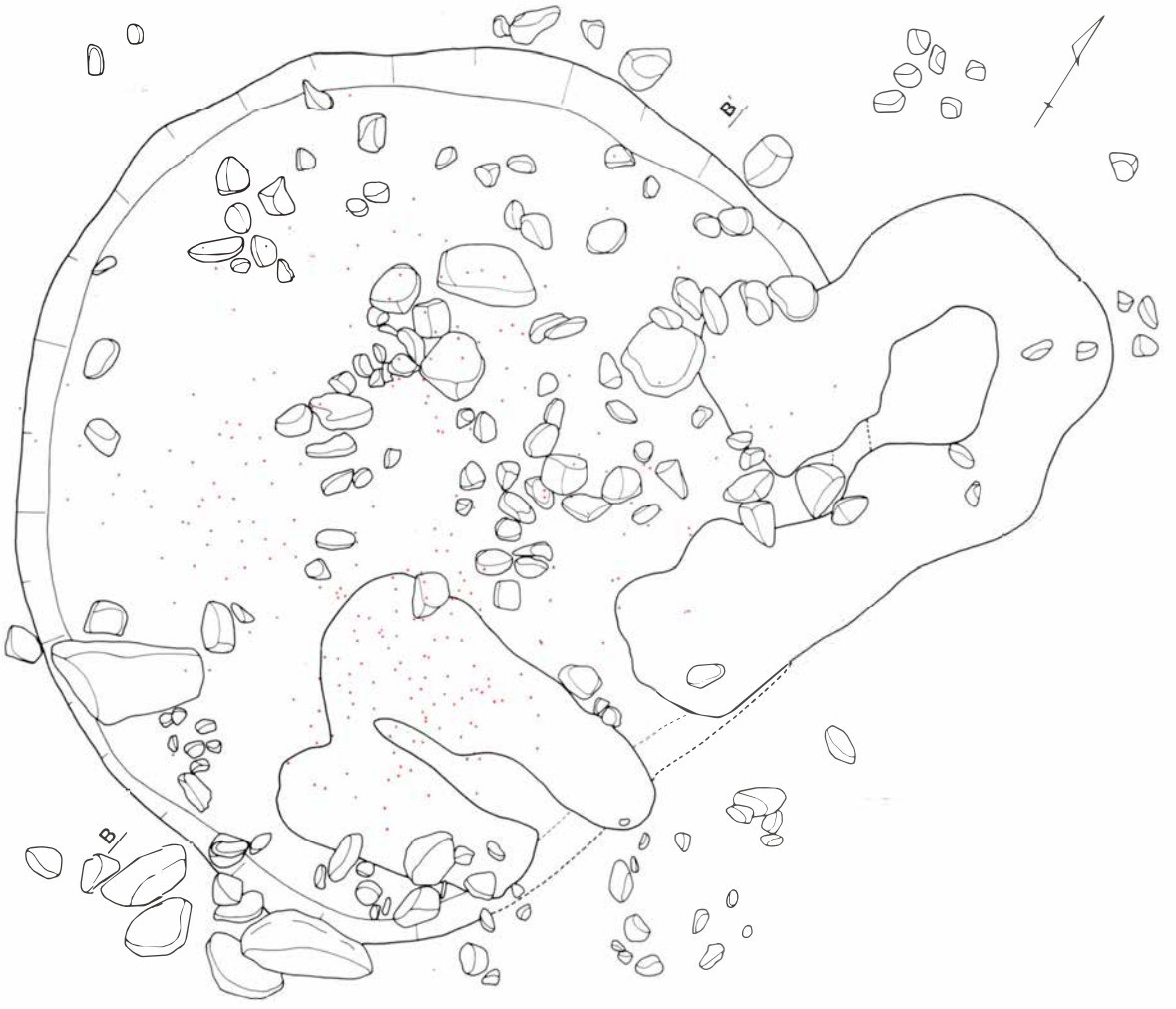


1　7.5YR2/1　黒色 しまり・粘質ともになし　炭化物　φ5～10cm程度の円礫を含む
2　7.5YR3/1　黒褐色 しまり・粘質ともになし　炭化物　φ10～20cm程度の亜円礫(砂岩)を含む
3　7.5YR4/1　灰褐色 しまりあり　粘質なし　φ50～100cm程度の円礫を含む
ところどころ黄褐色土のかたまりも含む

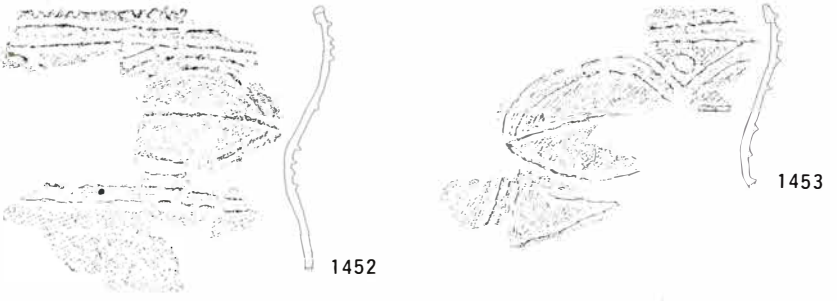
0　1m
(S＝1/50)

第38図　SX02実測図(1)

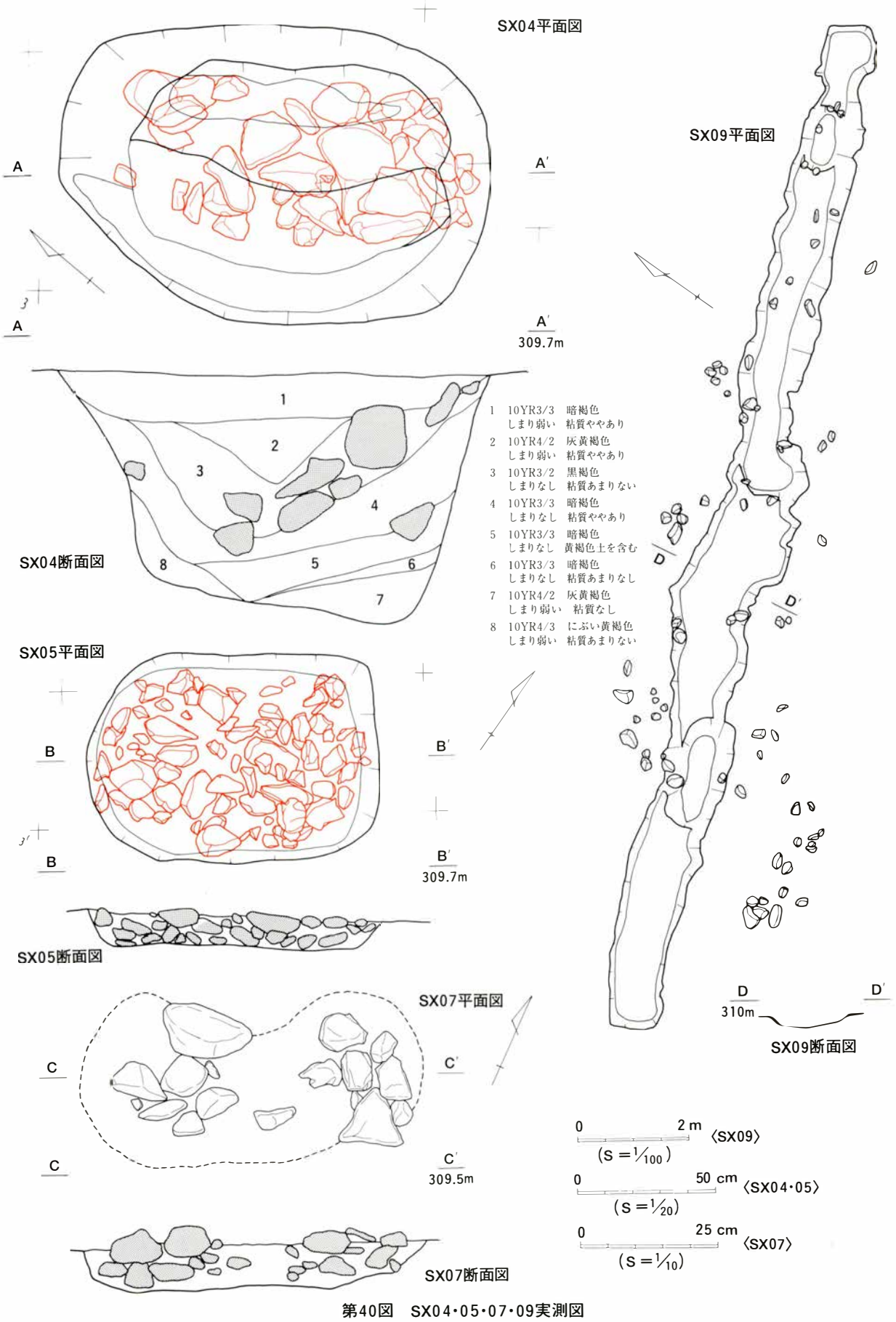
SX02遺物出土状況（・は原則として遺物1点を表す）



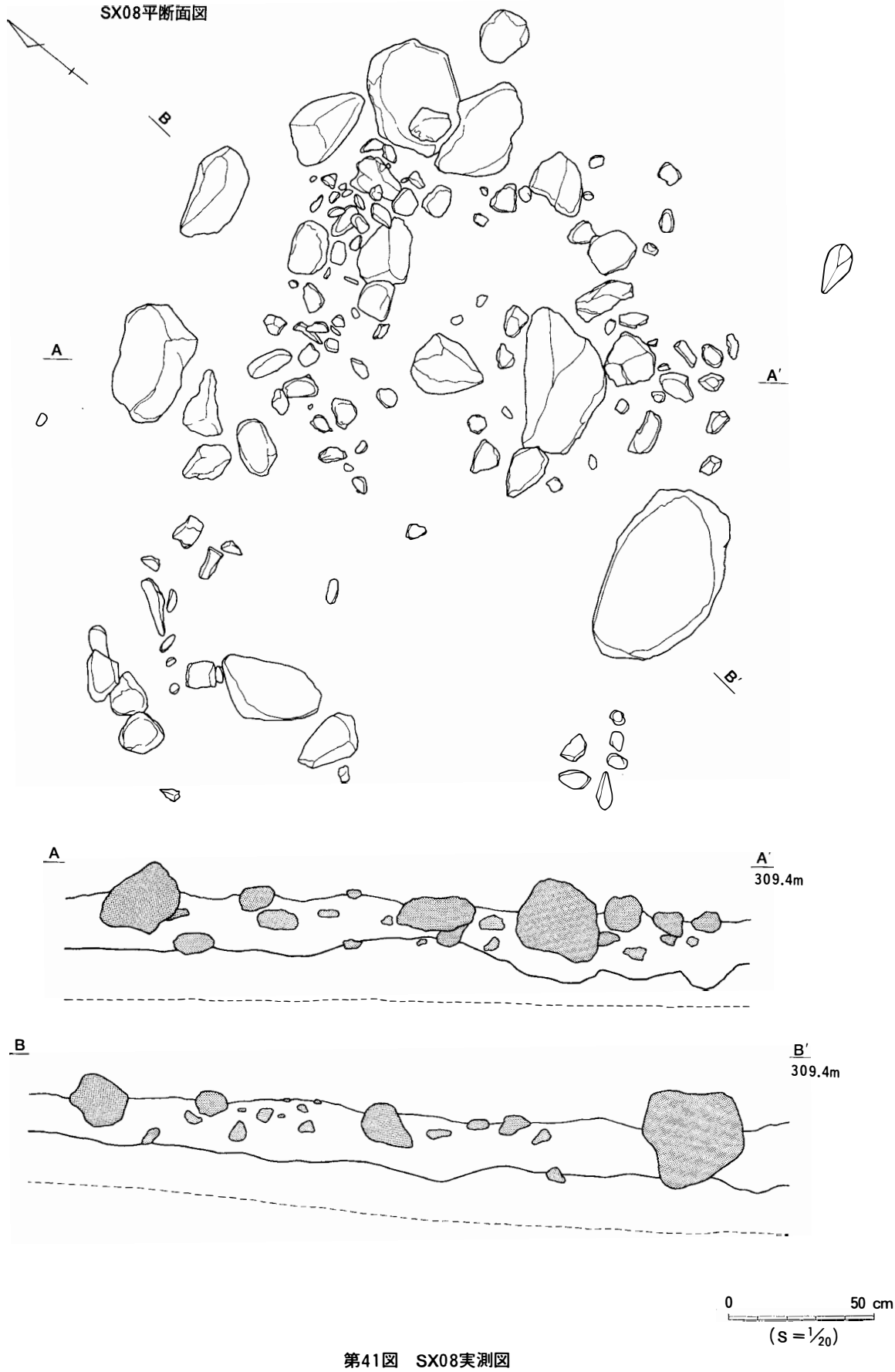
SX02出土土器



第39図　SX02実測図(2)



第40図　SX04・05・07・09実測図

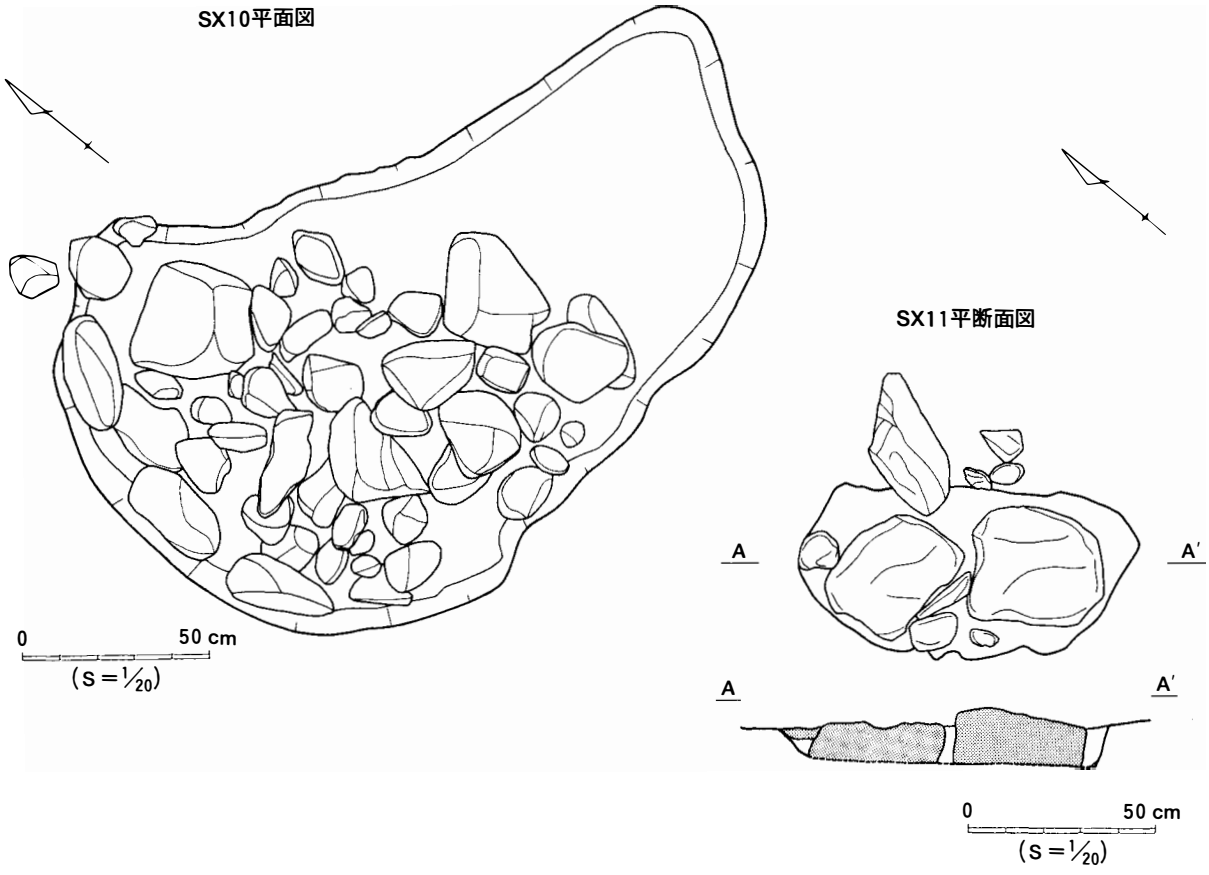


第41図　SX08実測図

礫が出土し調査は難航した。詳細は不明である。ＳＸ04・ＳＸ05はともにＳＢ01付近で検出した礫混入土坑である（第40図）。ＳＸ04の掘り込みは浅く、混入していた礫も小さいものであった。一方、ＳＸ05はかなり深い掘り込みがあり、礫も比較的大きいものであった。個々の詳細やすぐ近くにあるＳＢ01との関係は現在のところ不詳である。ただ両者はＳＢ01検出面よりやや下のレベルで検出できた。ＳＸ06はＳＢ04付近で検出した。ＳＢ04の上層面を検出している際に確認されたものであるが、当初はＳＢ04に連ならず独立したプランを有するように見えた。しかし、最終的に連なっていったので、ＳＢ04に付随するものである可能性がある。遺物は出土していない。ＳＸ07は長径約60㎝短径約30㎝の楕円形状黒褐色土プランに数個の礫を伴う遺構である。礫の中に打製石斧の破片と思われるものがある。他の礫がその打製石斧を囲うように置かれている状況から埋納施設であるという指摘もあるが、詳細は不明である。ＳＸ08は、平面的に大小の礫が環状に配置されているように見える（第41図）。Ｋ′63グリッド第Ⅱ層中で検出している。遺物の出土はなく、プランも確認できていない。人為的な所産である遺構ではなく、自然発生的なものである可能性もある。ただやや南東方向に数個の大礫があるものの、周辺には集中する礫群は見あたらず、現地で確認した際にはやや不自然な感じを受けた。従ってわずかな可能性を含みつつここに報告することにした。詳細は不明である。ＳＸ09は幅約１～1.8ｍ、長さ約18.5ｍにわたる溝状遺構である（第40図）。断面は浅く20～30㎝程度である。遺物はほとんど出土しておらず、自然流路である可能性が高い。

２．その他の遺構と遺物の分布〈第42図〉

ここで報告する遺構は、ＳＸ10とＳＸ11の２基である。両者はともに大きな礫が混入している大土坑である。検出箇所は隔たっているが共通する点は多々ある。ＳＸ10はＪ′65グリッド第Ⅱ層最上部で検出した。南北方向に主軸を持つ風倒木痕の北端部を破壊する形で掘り込まれている。長径約1.8ｍ短径約１ｍの楕円形プランを有する（第42図）。内部には径約70㎝ほどの大礫が２個、やや小さめの中礫が４個混入していた。検出面より20㎝ほど掘削したところで大礫に突き当たったので掘削を断念せざるを得なくなった。礫はさらに下方へと続いており、底面までは確認できなかったが、かなりな大きさであると推定される。ただ下方の隙間にも埋土である黒褐色土が確認できるので、土坑を掘削後に礫を投入したと考えられる。ＳＸ11はＷ′66～67グリッド第Ⅱ層中で検出した。検出した箇所は段丘縁の最も川に近い位置で、第Ⅱ層の黒褐色土がやや厚くなり段丘礫層が川に向かうにつれて下方へ潜り込んでいくようになっている。そうした状況から考えると、憶測の域をでないところもあるが、この範囲は本来の段丘上にあるのではなく、土砂の堆積によって川側へ突き出した部分に相当するのではないかと考えられる。そうした位置に構築されていることも加味して考えると、構築年代をさかのぼらせるのに抵抗を感じざるを得ない。ＳＸ11自体は長径約４ｍ短径約２ｍとかなり大きめのプランを有しており、掘形はほぼ垂直に切り立っている（第42図）。内部には大中の礫が多く混入しており、その礫群は西側に集中している。まず大きめの土坑を掘り、その後西側から礫を投入したように見える。礫は大きいもので径約70㎝ほどあるものもある。ＳＸ10・ＳＸ11はともに遺物は包含しておらず、帰属時期・性格等については不詳である。明確なプランを検出したのはともに第Ⅱ層の上部であるが、掘削以前の第Ⅰ層表土面の段階から上層の土が安定していなかったり、検出したレベルが同じ第Ⅱ層



第42図　その他の遺構関連実測図

中でも他の縄文時代の遺構面より上方であったりした。従ってあえて時期を設定するならば縄文時代以降ということになる。現地でこれらを実見した所見としては、近現代の土地利用の際に構築された土坑である可能性が高いと思われる。本遺跡における現代の土地利用状況をよく知る人たちによると、耕作の際に不必要である大きな礫は穴を掘って埋めていたことがよくあったと言われる。ＳＸ10・ＳＸ11がそれに相当するかどうかは確証にかけるが、その可能性は高い。

また、本地点からは約500点ほどの縄文時代以降の遺物が出土している。個々の遺物については後に記するが、どれも遺構に伴うものではなく、出土状況は明確ではない。また、ほとんどの遺物が第Ⅰ層表土（耕作土）もしくは第Ⅱ層最上部より出土している。平面的な分布状況は、川側に近い段丘縁では少なく山側では比較的多い。後世の土地利用状況や他地点との関係が注目される。遺物の出土に関して特記すべきことは、徳山地区の発掘調査で初めて弥生時代中期の土器が出土したことである。出土したのは破片が３点のみであるが、そのうち２点は口縁部であり、その土器の特徴をよく示している。U′67グリッド第Ⅱ層中より出土した。徳山地区の歴史の中では未解明な時代の遺物であるため、特にその出土箇所周辺を念入りに精査し、遺構の有無の確認に集中した。出土箇所は川側に突き出した中位段丘の縁に近いところであった。第４地点へと連なる段丘礫層の最上流部分に位置することから、その周辺では大小の礫が無数に密集していた。出土地点でもこの弥生土器を囲むようにして礫が点在していたため、遺構が存在する可能性を想定して慎重に調査を進めた。しかし、人為的な礫の配置や掘り込みは認められず、最終的には遺物のみの確認となった（第42図）。

弥生土器出土状況

第3節　遺物

第1地点からは22,513点の遺物が出土した。その内訳は縄文土器片が11,804点、石器類が10,183点、弥生土器や陶器類を含むその他が526点である。それぞれの数値は接合前の出土点数であり、特に土器についてはその数値が実際の出土個体数を反映しているとは言い難い。しかし他に出土量を示す指標がなく、便宜的に発掘現場で取り上げた点数を記した。

縄文土器は小片が多く、器種・器形が判明するものはわずか数点である。有文土器の特徴によって分類すると、突帯を有するものが多く、突帯上の施文には縄文・押し引き・指頭による成形など多種多様である。そうした特徴から帰属する時期を探ると、ほとんどのものが縄文時代前期後葉である。その他の時期のものとしては、早期・中期～晩期の土器が若干見られる。早期の土器は、山形の押し型文を有する土器が3片と数個体分の高山寺式土器がある。ほとんどが包含層からの出土で、明確に遺構に伴うものではない。中期～晩期の土器は、上原遺跡の他の地点でも出土例があり、第1地点固有のものではなく、第2地点（『上原遺跡Ⅰ』で報告済み）からの流入と考えて支障はない。尚、これらの縄文土器の内、遺構から出土したものは3,241点、包含層から出土は8,563点である。

第1表　上原遺跡第1地点出土石器類一覧表

	SB01	SB02	SB03	SB04	SB05	SB06	SB07	SB08	その他の遺構	遺構計	包含層計	合　計
石鏃		1	1	4	9		2		2	19	180	199
石鏃未製品					2		2			4	41	45
石槍											11	11
有舌尖頭器											1	1
石錐					4	1				5	92	97
つまみ部付きスクレイパー					1	3			2	6	20	26
削器			1		7	1	5		2	16	56	72
掻器Ⅰ				1	2				1	4	37	41
掻器Ⅱ											13	13
掻器Ⅲ							1	1		2	14	16
ノッチドスクレイパー											20	20
複合スクレイパー					2		2			4	6	10
石篦					1					1	12	13
ヘラ形石器		1								1	10	11
くさび形石器											6	6
両側縁調整剝片石器					1	1				2	41	43
打製石斧					2				3	5	199	204
磨製石斧					2					3	46	49
石核・剝片類	40	18	21	23	233	82	67	10	87	581	6,912	7,493
調整剝離を施された剝片			1	2	9	3	3		7	25	397	422
微細な剝離痕を有する剝片	1	1	1	5	13	3	2		7	33	223	256
打欠石錘	4	4	1	1	21	8	7		4	50	540	590
切目石錘	3	7	2	2	14	6	6		8	48	273	321
凹・敲・叩・磨石類	4	5	3	3	4	4	1	1	7	32	270	302
石皿	2		1		2					5	20	25
異形石器											2	2
玦状耳飾											10	10
垂飾									1	1		1
合　計	54	37	32	41	327	109	97	12	128	837	9,346	10,183

石器類は10,183点が出土した。そのうち、遺構からの出土は837点、包含層からの出土は9,346点である。主な遺構から出土した器種と点数は第１表のとおりである。

石器は、その形態から時期を判別することは困難であり、伴出する土器型式から時期決定をすることが必要とされる。これによると、早期から晩期、さらには弥生時代をも含んでの製作、使用、廃棄が考えられる。しかし、遺構との関連や出土した土器から判断するとその多くが前期に属するものと想定される。

なお、各器種の定義や使用用途、分類、出土点数、石材などについては、第３節で若干の考察を加えることにする。

その他の遺物には、弥生土器、古代以降の土器、鉄製品、炭化物、玩具などがある。ここでは紙面の関係上、そのすべてを包括的に分類し、尚かつ弥生土器と古代以降の土器のみの報告に留める。なおそれぞれの出土点数は弥生土器６点、古代以降の土器302点、鉄製品４点、炭化物187点、玩具等27点である。弥生土器で特記すべきは、中期に属すると考えられる櫛描き文土器である。今まで徳山地区の発掘調査で出土した弥生土器は、前期（遠賀川系）のものがほとんどであった。「はいづめ遺跡」でわずかな小片である貝田町式土器が出土しているようであるが、器種・器形が推測できるような個体の出土は初めてであり、徳山地区における先史時代の最も新しい資料と言える。詳細は後に記述する。

１．縄文土器

第１地点で出土した約11,804点の縄文土器片を、有文土器の特徴に従い、帰属する時期区分を設定し、以下のように分類した。

第１群　縄文時代早期に属する土器群
　Ⅰ類　山形の押し型文を有する土器
　Ⅱ類　楕円文・格子目文を有する土器
第２群　縄文時代前期後葉に属する土器群
　Ⅰ類　口縁部が内側へ「く」の字状に湾曲するか、もしくは強く屈折する一群
　Ⅱ類　突帯を有する一群
　　Ａ　縄文が施された突帯を有する一群
　　ａ　口縁部外側に平行する２～３条の縄文突帯を有するもの
　　ｂ　口縁部外側に数条の縄文突帯を有し、口縁部～胴部にかけて文様帯を形成しているもの
　　ｃ　その他の縄文突帯を有するもの
　　Ｂ　半截竹管状工具による押し引きやナデ引きが施された突帯、いわゆる「特殊突帯」を有する一群
　　ａ　突帯の断面が半円状で、突帯上の文様が平面で「Ｃ」字状を呈しているもの
　　ｂ　突帯の断面が半円状で、突帯上の文様が平面で逆「Ｃ」字状を呈しているもの
　　ｃ　突帯の断面は砲弾状で、突帯上の文様が平面で逆「く」の字状～「Σ」字状を呈しているもの

d　突帯の断面は三角状で、突帯上の文様が平面で「Σ」字状を呈しているもの

e　その他の形状の押し引きやナデ引きが施された突帯を有するもの

C　指頭により断面三角状に成形された突帯を有する一群

D　その他の技法によって成形された突帯を有する一群

a　貝殻背圧痕で施文されたもの

b　刺突で施文されたもの

c　ヘラ刻みで施文されたもの

Ⅲ類　縄文が施された一群

Ⅳ類　沈線文を有する一群

Ⅴ類　底部片の一群

A　底部側縁が張り出している一群

a　刻みが施されているもの

b　指頭の押圧による凹みが施されているもの

c　棒状工具の押圧による凹みが施されているもの

d　貝殻背圧痕が施されているもの

e　その他

B　底部側縁が張り出していない一群

a　刻みが施されているもの

b　指頭の押圧による凹みが施されているもの

c　棒状工具の押圧による凹みが施されているもの

d　貝殻背圧痕が施されているもの

e　その他

Ⅵ類　東日本系土器の一群

Ⅶ類　その他の土器

第3群　縄文時代中期～晩期に属する土器群

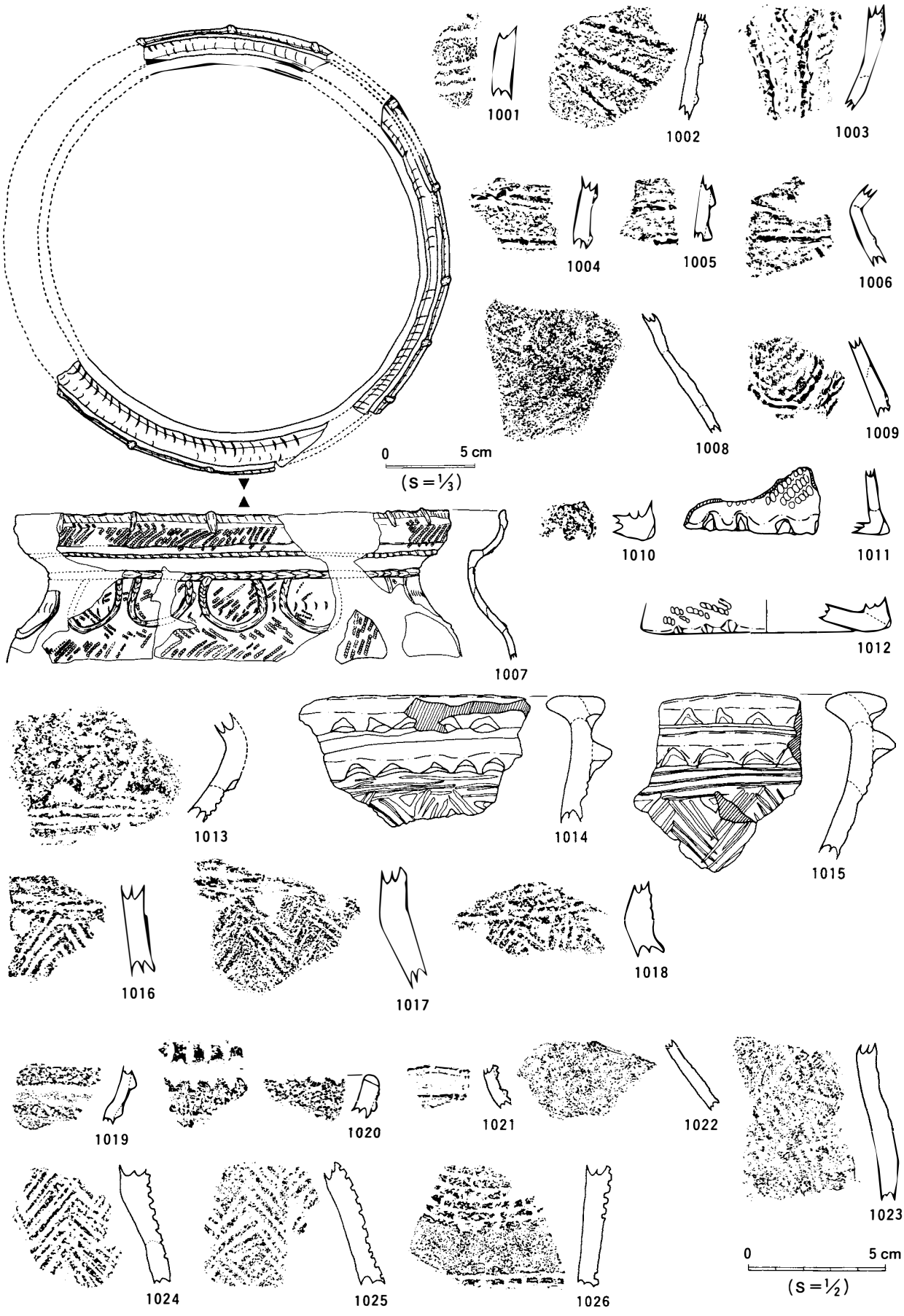
第4群　詳細不明の土器群

土器の分類にあたっては、『縄文土器大観』を参考とした。また第3群に属する中期以降の縄文土器については既刊の報告書『上原遺跡Ⅰ』の分類基準に依拠した。本書ではP163～164に掲載した。

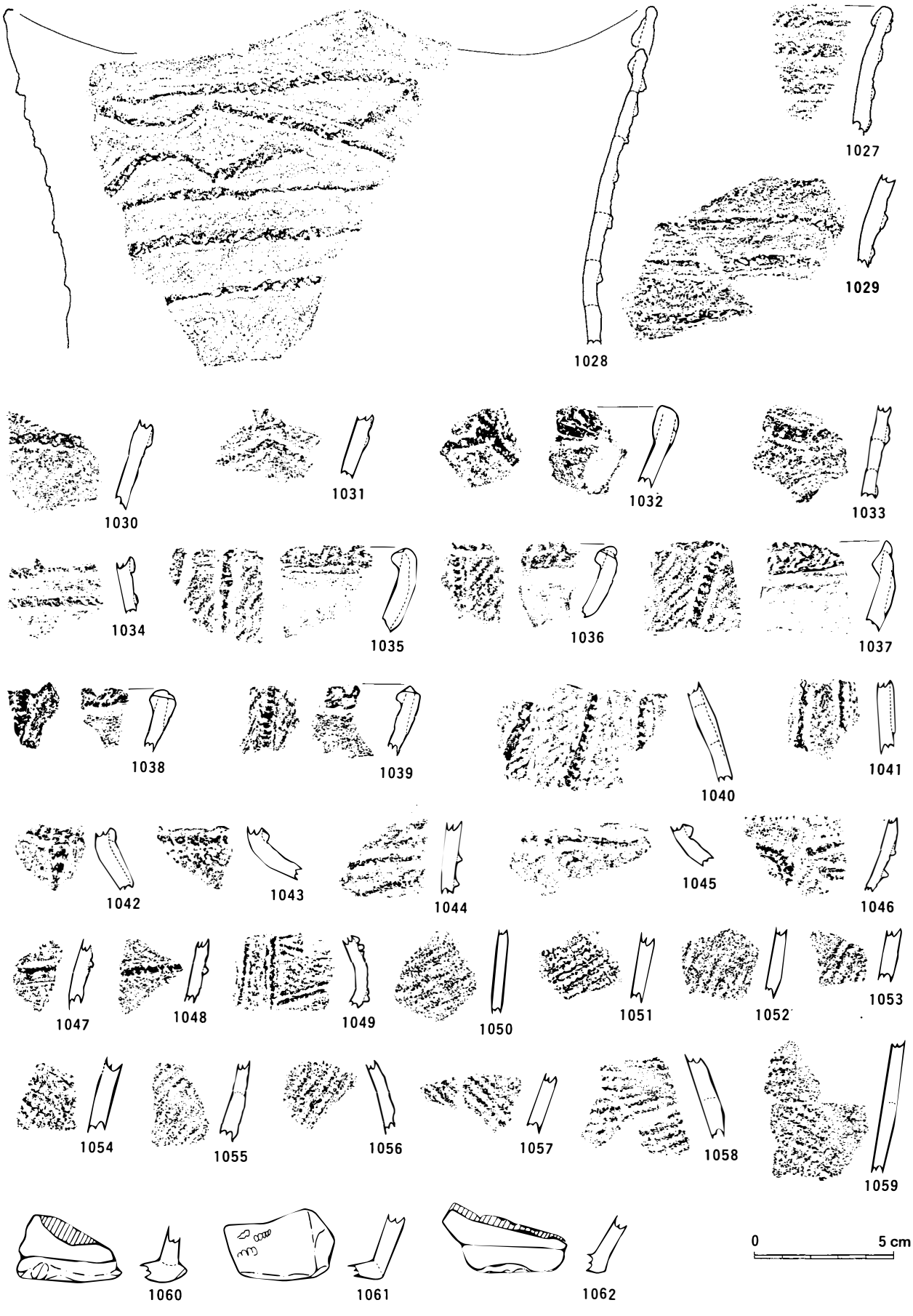
以降、順を追って説明を加えていくが、縄文土器の実測図はそれぞれの出土状況に基づき掲載しているので、遺物番号に分類ごとのまとまりがない。各項目で番号を羅列するのは煩雑であるため、別表にした（第2表）。なお各項目での詳細な説明は観察表（第二分冊第6表）に譲り、本章では特記すべき点を中心に記載した。

第2表　第1地点出土縄文土器分類別一覧表

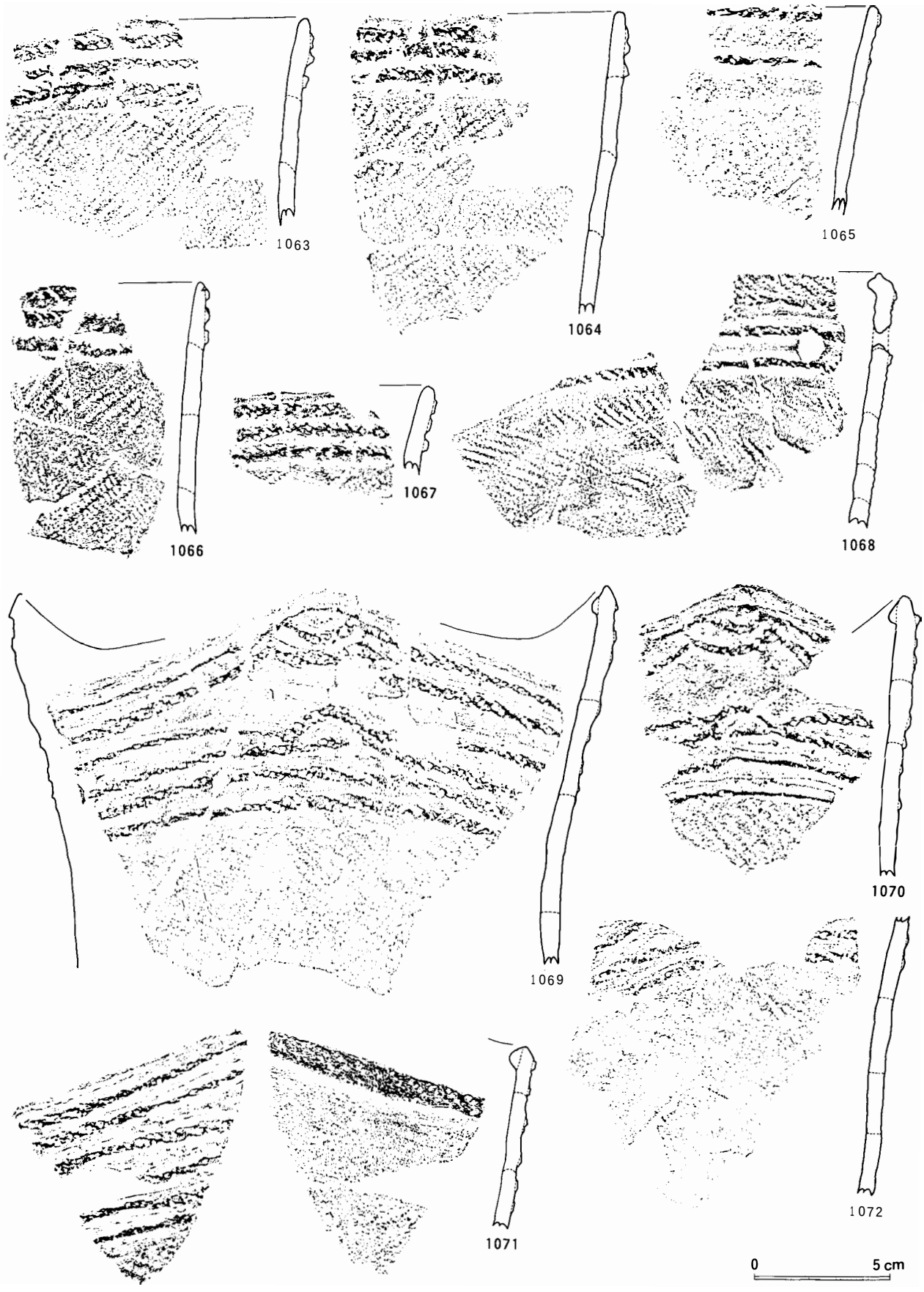
分類	挿図	出土区	遺物番号	点数
1 I	43	SB01	1001	1
	83	包含層	1465・1466	2
1 II	62	SU03	1410～1414	5
	63	SU03	1415～1421	7
	83	包含層	1467～1472	6
2 I	56	SB07	1341	1
	59	SK05	1400	1
	84	包含層	1473～1486	14
2 II Aa	44	SB02	1027	1
	45	SB03	1063～1068	6
	56	SB07	1342～1347	6
	85	包含層	1487～1495	9
2 II Ab	43	SB01	1002	1
	44	SB02	1028～1034	7
	45	SB03	1069～1072	4
	48	SB04	1104・1105	2
	49	SB05	1124～1152	29
	50	SB05	1153・1154	2
	55	SB06	1330～1332	3
	56	SB07	1348～1358	11
	43	SB08	1109	1
	58	SK02	1396	1
	59	SK06	1401	1
	59	P03	1402	1
	66	SX03	1462	1
	86	包含層	1496～1511	16
	87	包含層	1512～1532	21
	88	包含層	1533～1559	27
	89	包含層	1560～1590	31
	90	包含層	1591～1629	39
	91	包含層	1630～1637	8
2 II Ac	91	包含層	1638～1655	18
2 II Ba	43	SB01	1003～1006	4
	43	SB08	1020・1021	2
	44	SB02	1035～1044	10
	46	SB03	1073～1084	12
	48	SB04	1106	1
	50	SB05	1183～1189	7
	51	SB05	1190～1199・1201・1203	12
	55	SB06	1301・1302・1304～1306	5
	56	SB07	1359～1362	4
	57	SB07	1363～1368・1370	7
	58	SK03	1397～1399	3
	59	P11	1403	1
	60	SU01	1404・1405	2
	64	SX02	1422～1426	5
	93	包含層	1656～1695	40
	94	包含層	1696～1730	35
	95	包含層	1731～1755	25
2 II Bb	44	SB02	1045～1048	4
	46	SB03	1085～1088	4
	48	SB04	1107～1114	8
	50	SB05	1155～1182	28
	55	SB06	1307～1317	11
	57	SB07	1371～1380	10
	95	包含層	1756～1765	10
	96	包含層	1766～1794	29
	97	包含層	1795～1823	29
2 II Bc	43	SB01	1007～1009	3
	43	SB08	1022	1
	44	SB02	1049	1
	46	SB03	1089	1
	48	SB04	1115・1116	2
	51	SB05	1204～1216	13
	52	SB05	1217～1242	26
	55	SB06	1303・1318～1324	8
	60	SU01	1406	1
	64	SX02	1427～1429	3
	66	SX03	1463	1
	97	包含層	1824～1827	4
	98	包含層	1828～1853	26
	99	包含層	1854～1897	44
	100	包含層	1898～1934	37
	101	包含層	1935～1973	39
2 II Bd	46	SB03	1090	1
	52	SB05	1243・1244	2
2 II Bd	101	包含層	1974～1980	7
	102	包含層	1981～2006	26
2 II Be	51	SB05	1200・1202	2
	57	SB07	1369	1
	102・103	包含層	2007～2027	21
2 II C	52	SB05	1245～1247・1253	4
	64	SX02	1430～1443	14
	65	SX02	1444～1453	10
	104	包含層	2028～2039	12
2 II Da	104	包含層	2040～2048	9
2 II Db	53	SB05	1276	1
	55	SB06	1325～1327	3
	66	SX02	1454	1
	105	包含層	2049～2060	12
2 II Dc	46	SB03	1091	1
	55	SB06	1328・1329	2
	57	SB07	1381	1
	105	包含層	2061～2074	14
2 III	43	SB08	1023	1
	44	SB02	1050～1059	10
	46	SB03	1092～1095	4
	47	SB03	1096～1100	5
	48	SB04	1117～1120	4
	52	SB05	1248・1250～1252・1254	5
	53	SB05	1255～1275	21
	55	SB06	1333～1338	6
	57	SB07	1382～1391	10
	61	SU02	1408	1
	66	SX02	1455～1460	6
	66	SX03	1464	1
	106	包含層	2075～2093	19
	107	包含層	2094～2112	19
	108	包含層	2113～2146	34
2 IV	53	SB05	1277	1
	55	SB06	1339	1
	66	SX02	1461	1
	108	包含層	2147～2152	6
2 V Aa	53	SB05	1278～1280	3
	57	SB07	1393	1
	109	包含層	2153～2161	9
2 V Ab	109	包含層	2162～2166	5
2 V Ac	43	SB01	1010～1012	3
	44	SB02	1060	1
	53	SB05	1281・1282	2
	54	SB05	1283・1284	2
	57	SB07	1394	1
	109・111	包含層	2167～2170・2172～2177・2201～22	13
2 V Ad	109	包含層	2178・2179	2
2 V Ae	47	SB03	1101～1103	3
	54	SB05	1285～1294	10
	57	SB07	1395	1
	110	包含層	2180～2189	10
2 V Ba	55	SB06	1340	1
	110	包含層	2190・2191	2
2 V Bb	54	SB05	1295	1
	110	包含層	2192～2200	9
2 V Bc	44	SB02	1061・1062	2
	109	包含層	2171	1
2 V Bd	111	包含層	2204	1
2 V Be	111	包含層	2205～2208	4
2 VI	43	SB01	1013～1018	6
	43	SB08	1024～1026	3
	54	SB05	1296～1298	3
	60	SU01	1407	1
	112	包含層	2209～2229	21
2 VII	52	SB05	1249	1
	54	SB05	1299	1
	57	SB07	1392	1
	61	SU02	1409	1
	113	包含層	2230～2237	8
3	48	SB04	1121	1
	54	SB05	1300	1
	114	包含層	2238～2252	15
	115	包含層	2253・2254	2
4	48	SB04	1122・1123	2
			合計	1254



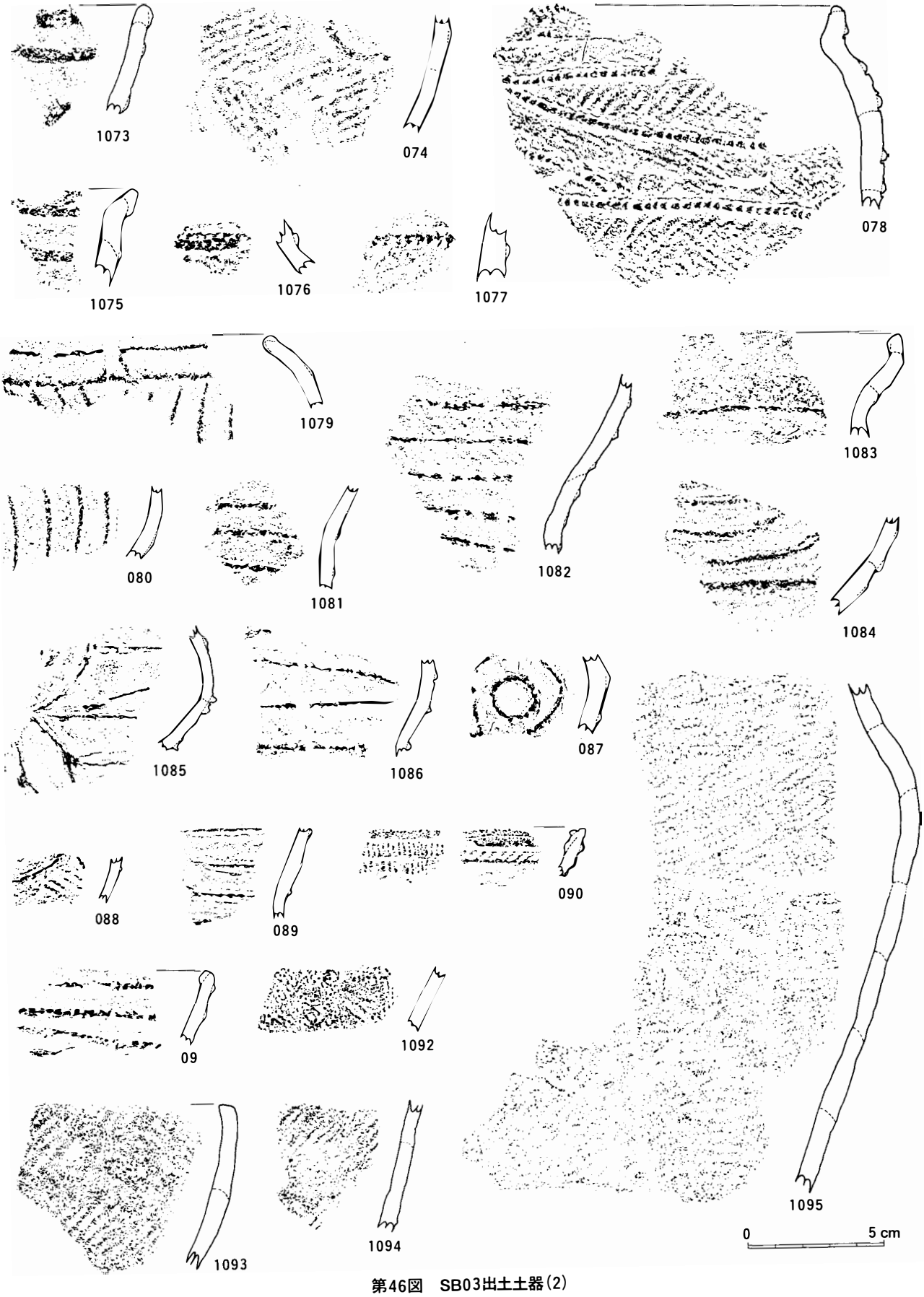
第43図　SB01・08出土土器



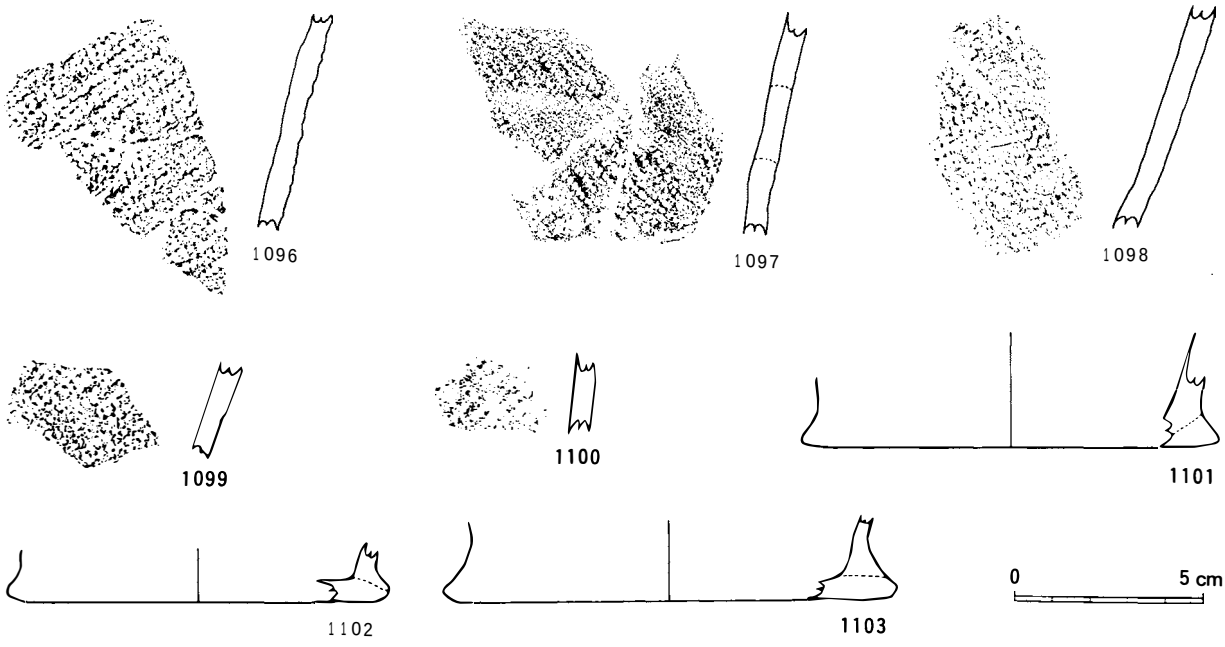
第44図　SB02出土土器



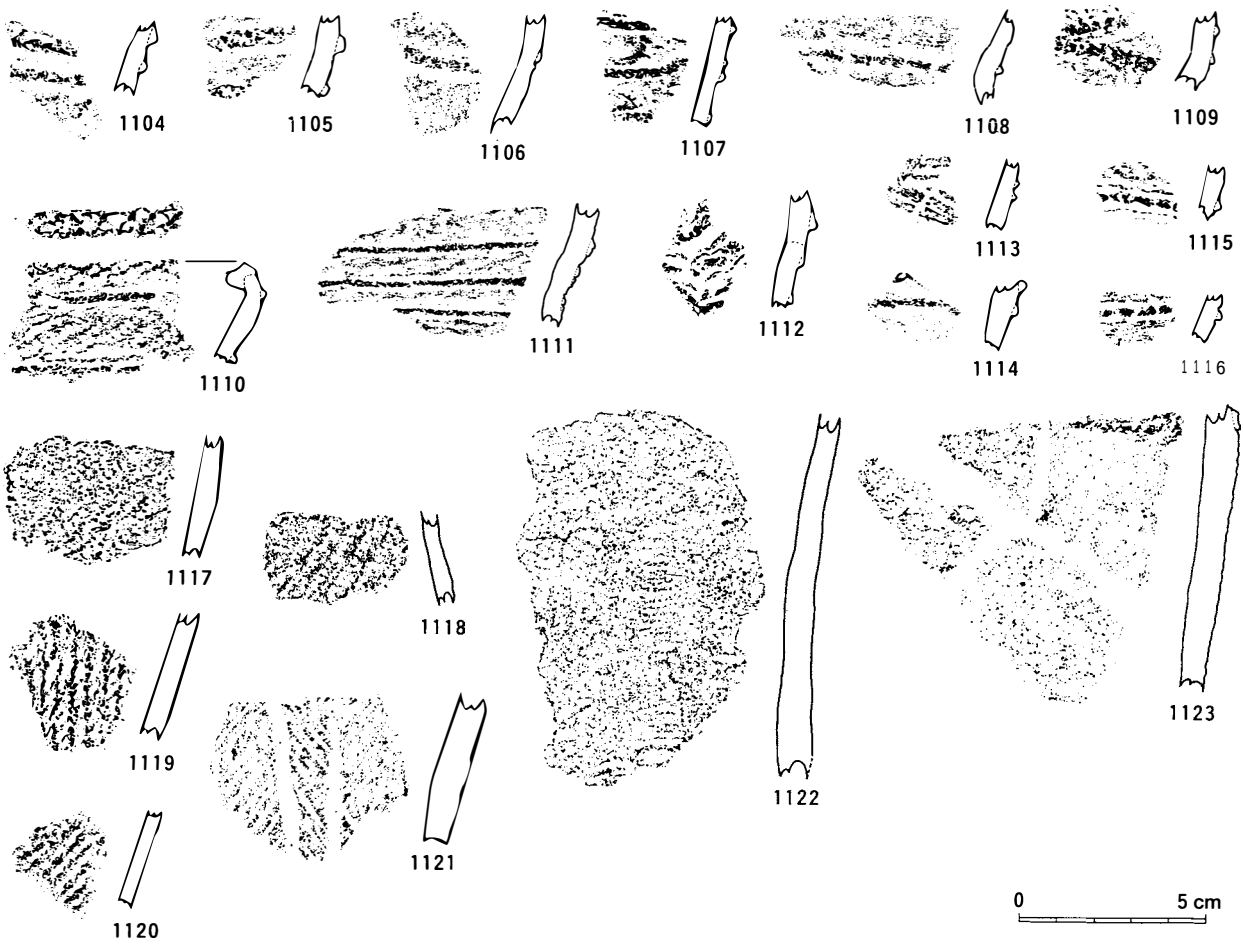
第45図　SB03出土土器(1)



第46図　SB03出土土器(2)

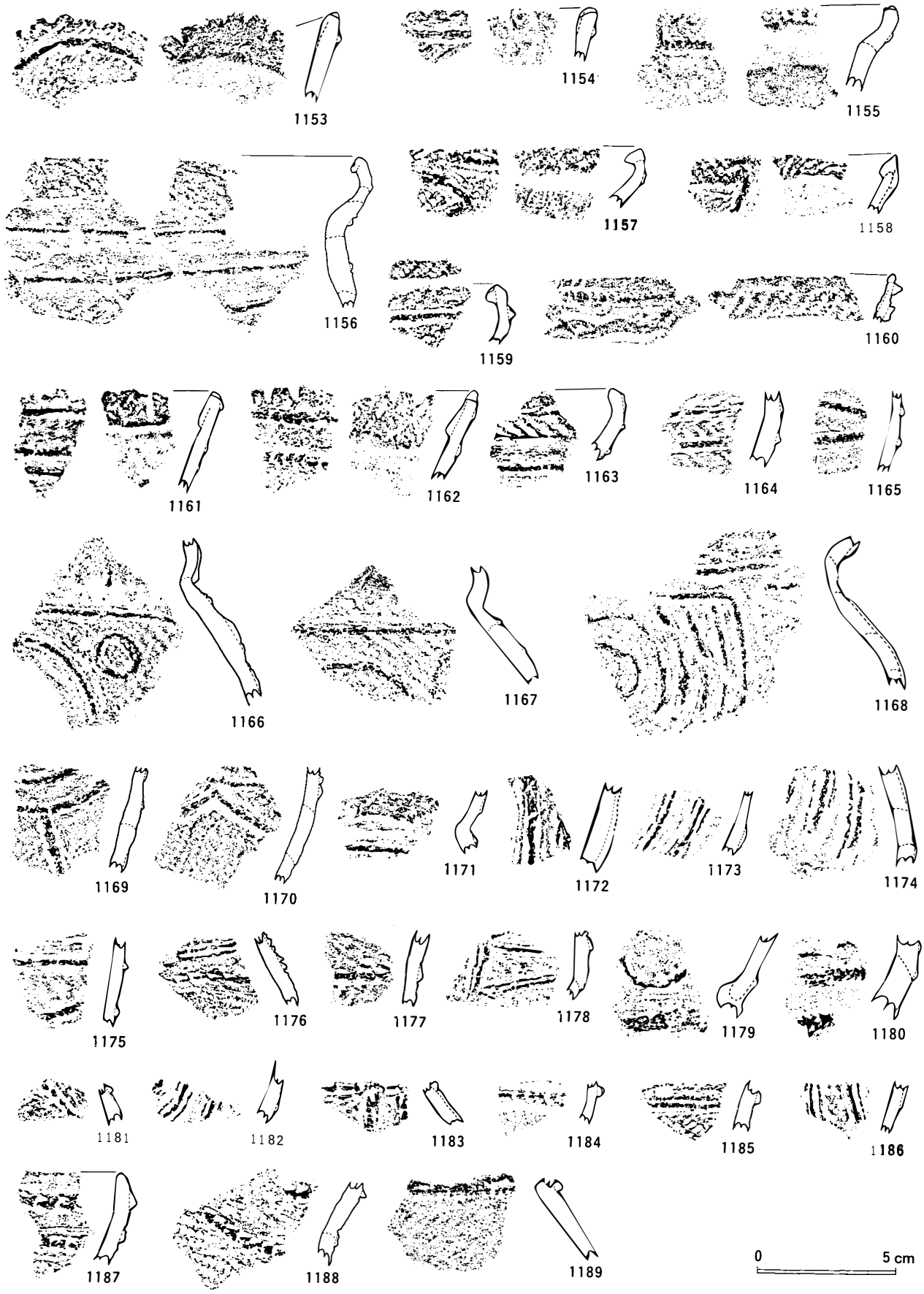


第47図　SB03出土土器(3)



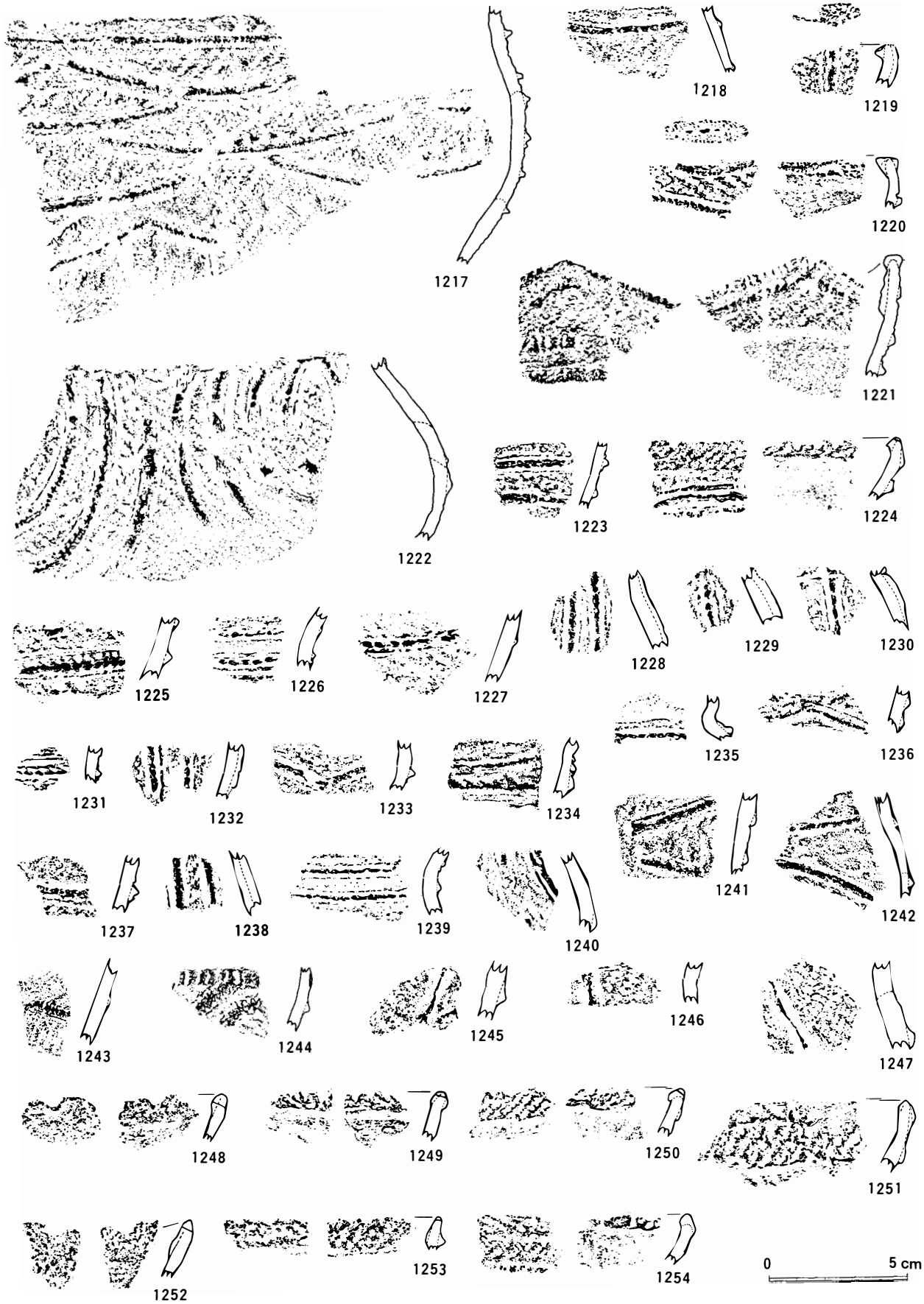
第48図　SB04出土土器

第49図　SB05出土土器(1)

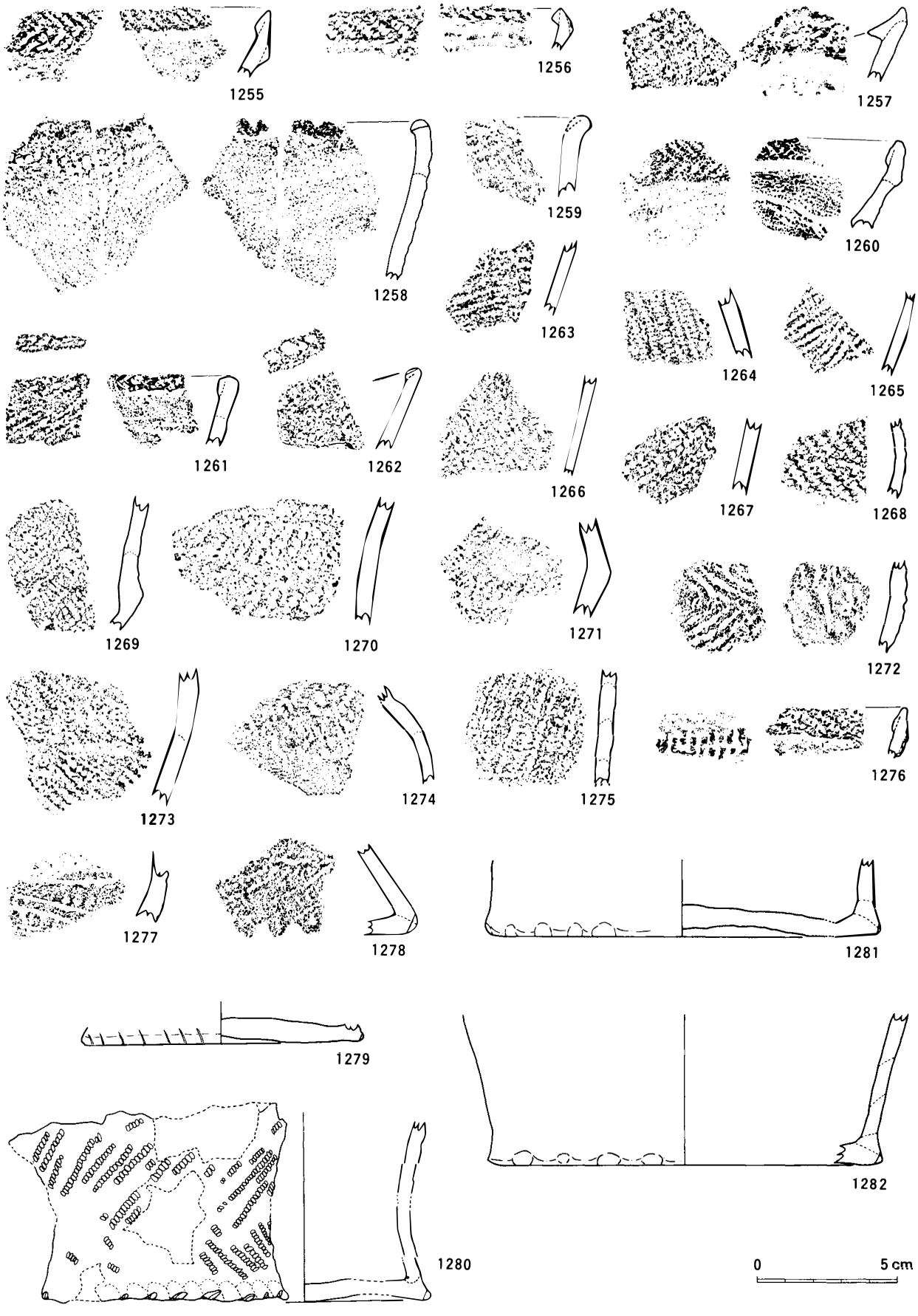


第50図　SB05出土土器(2)

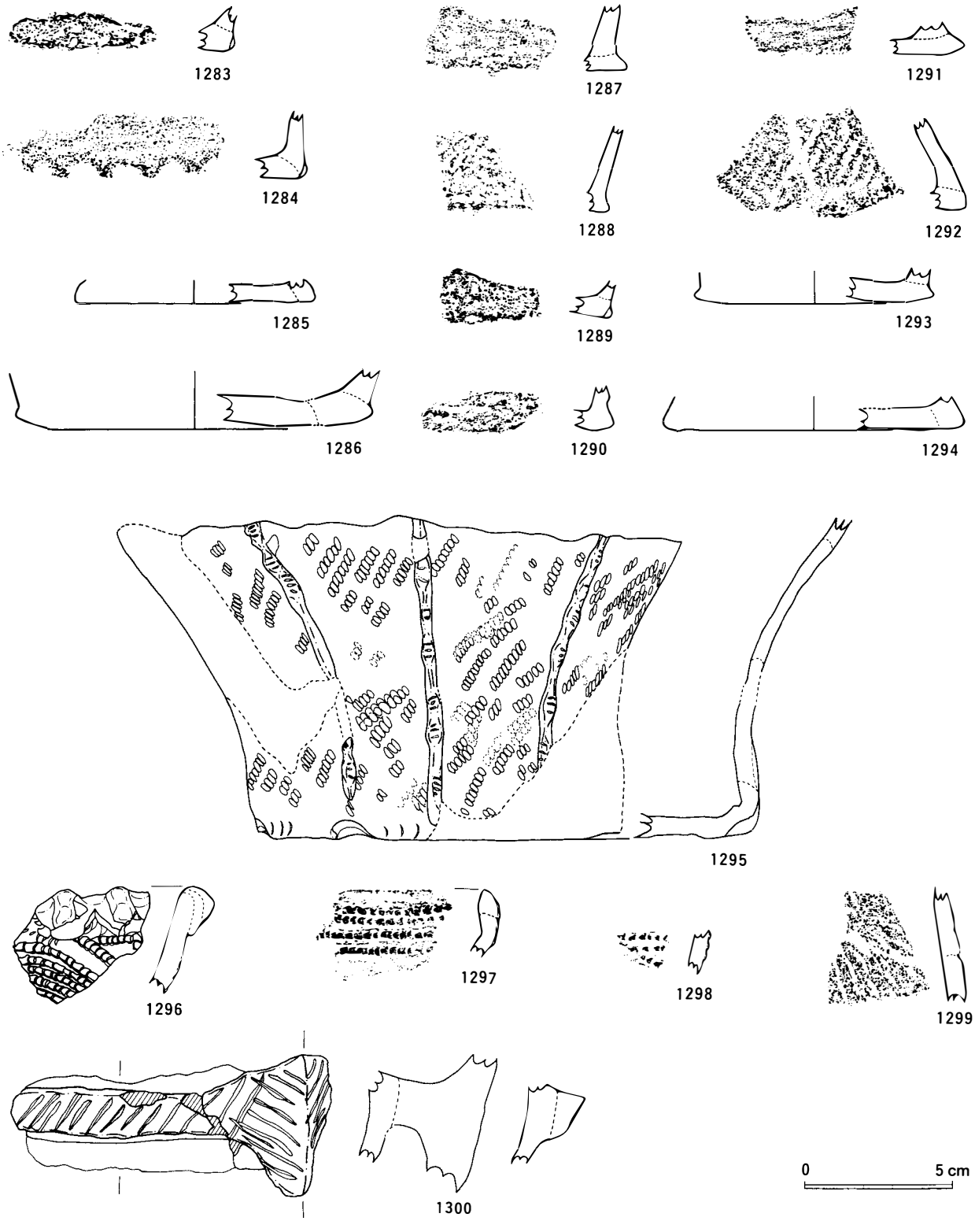
第51図　SB05出土土器(3)



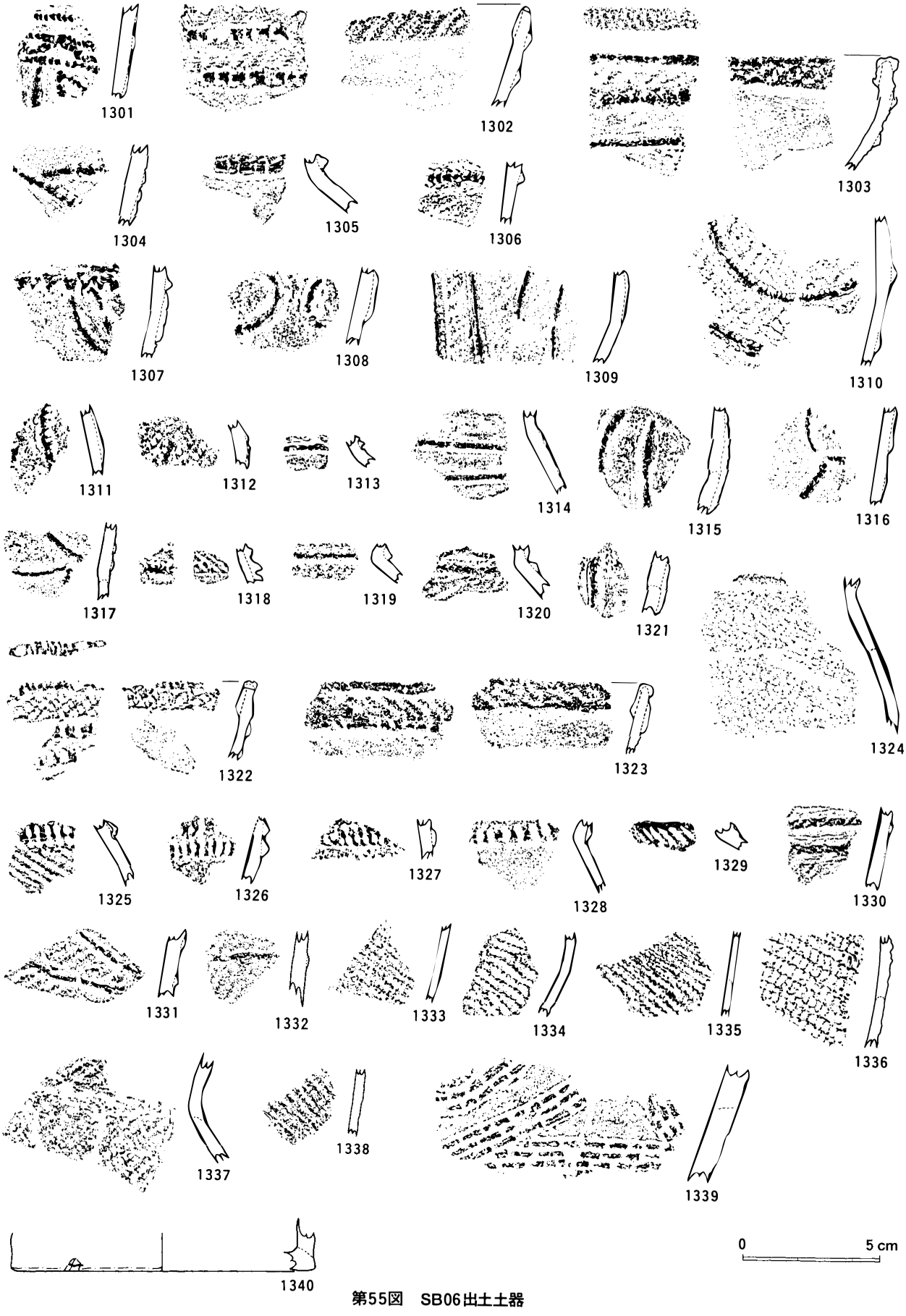
第52図　SB05出土土器(4)



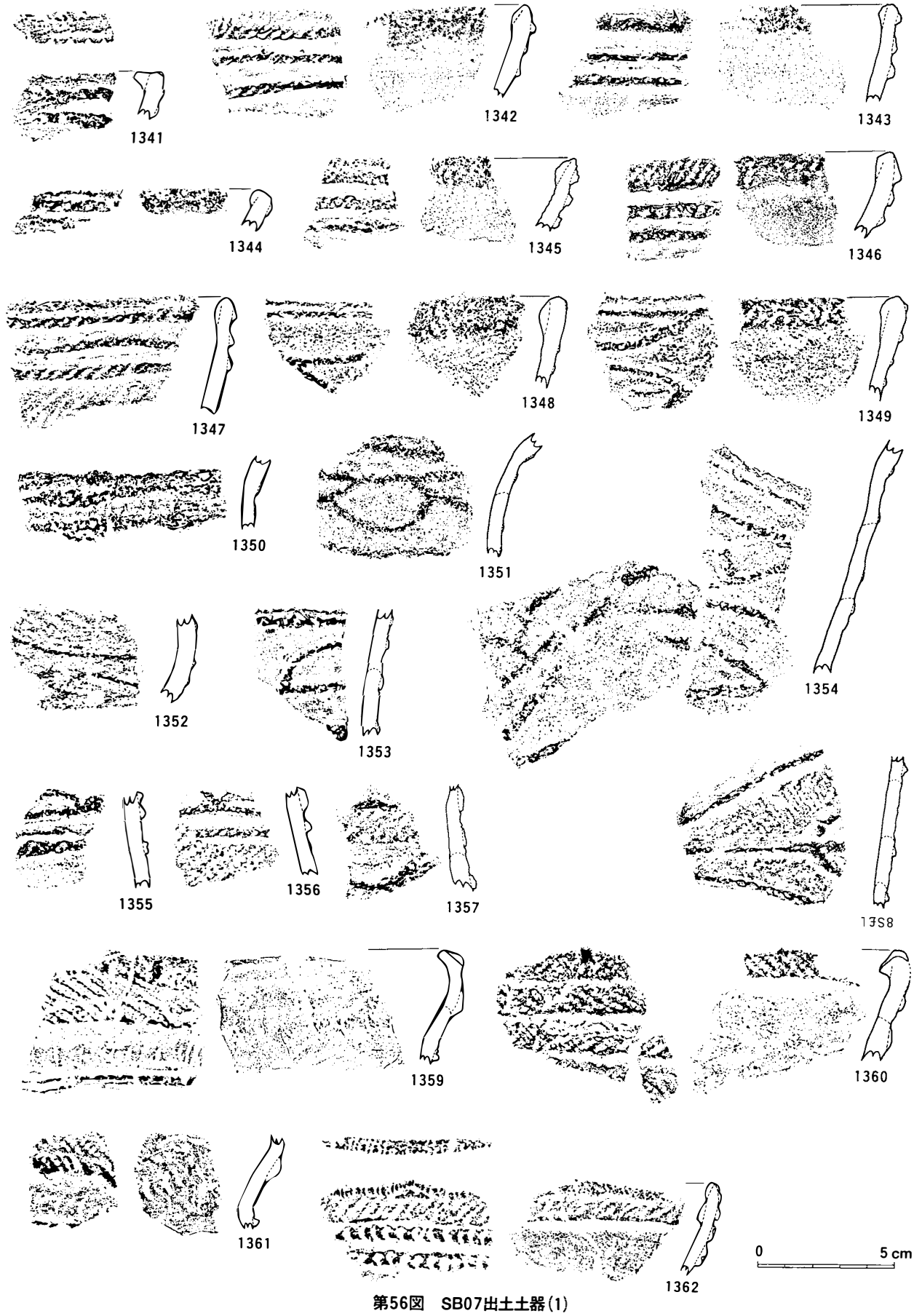
第53図　SB05出土土器(5)



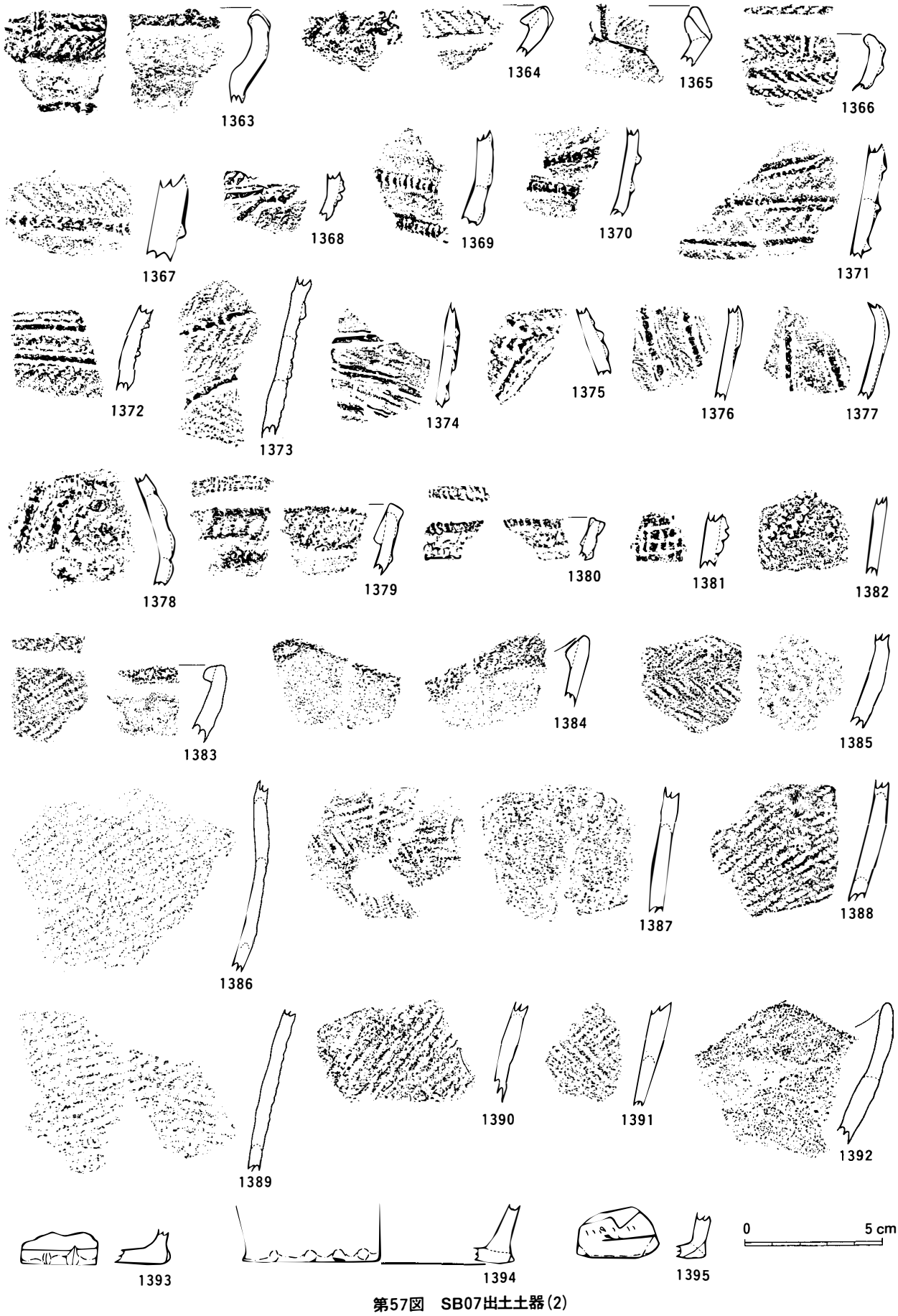
第54図　SB05出土土器(6)



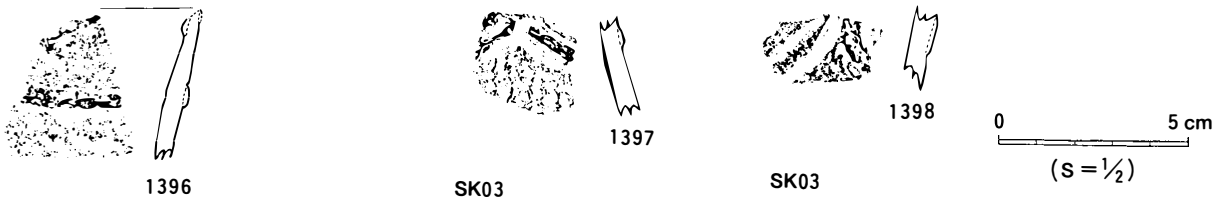
第55図　SB06出土土器



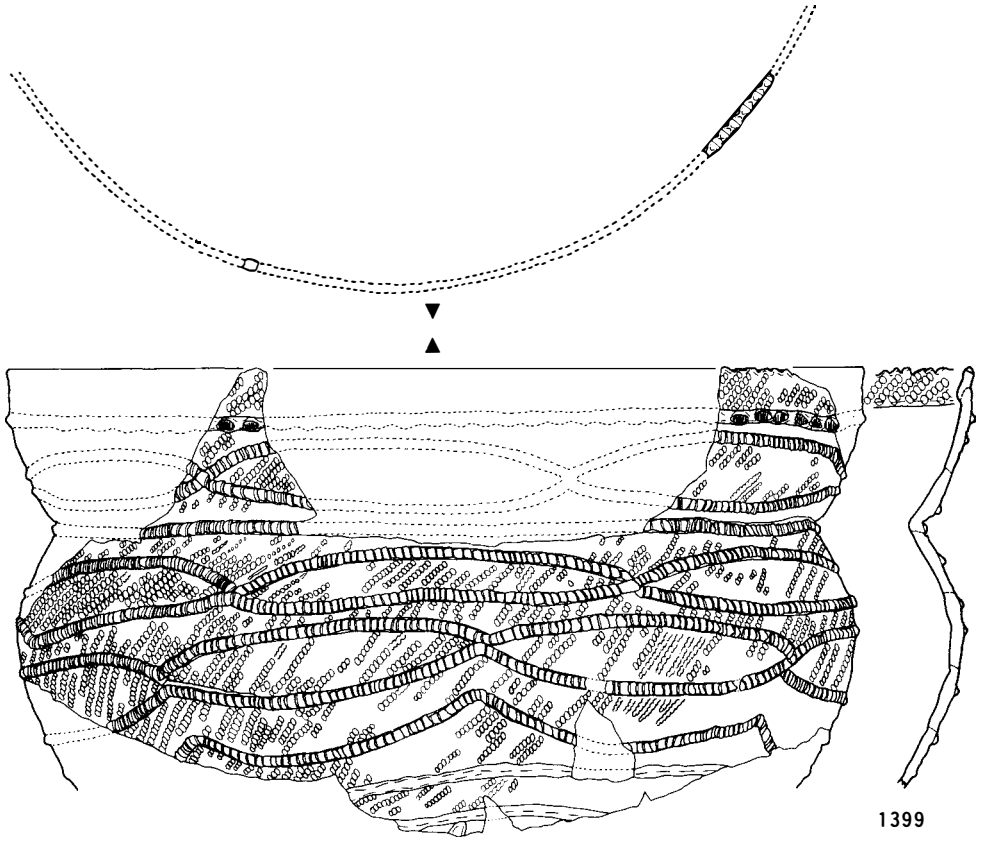
第56図　SB07出土土器(1)



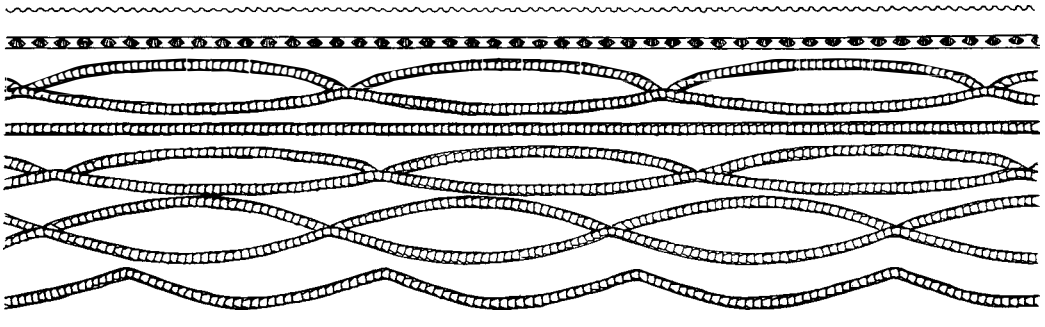
第57図　SB07出土土器(2)



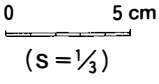
SK02



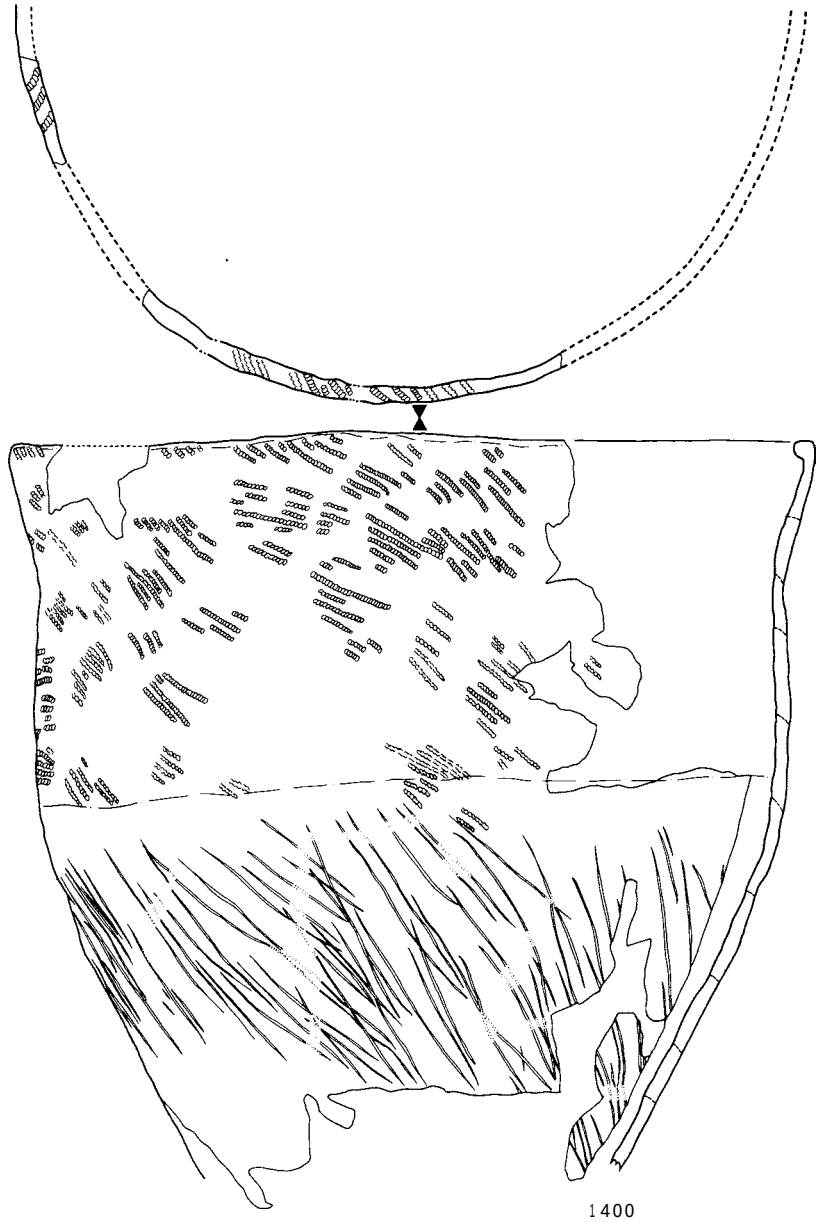
SK03



文様模式図



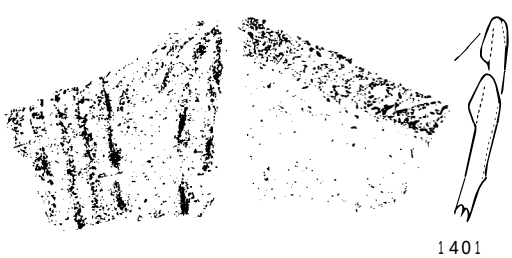
第58図　SK02･03出土土器



1400

SK06

0　5 cm
(S＝1/3)

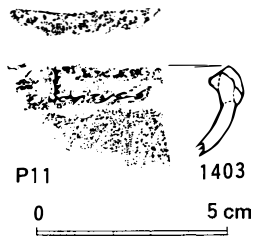


1401

SK05

1402

P03

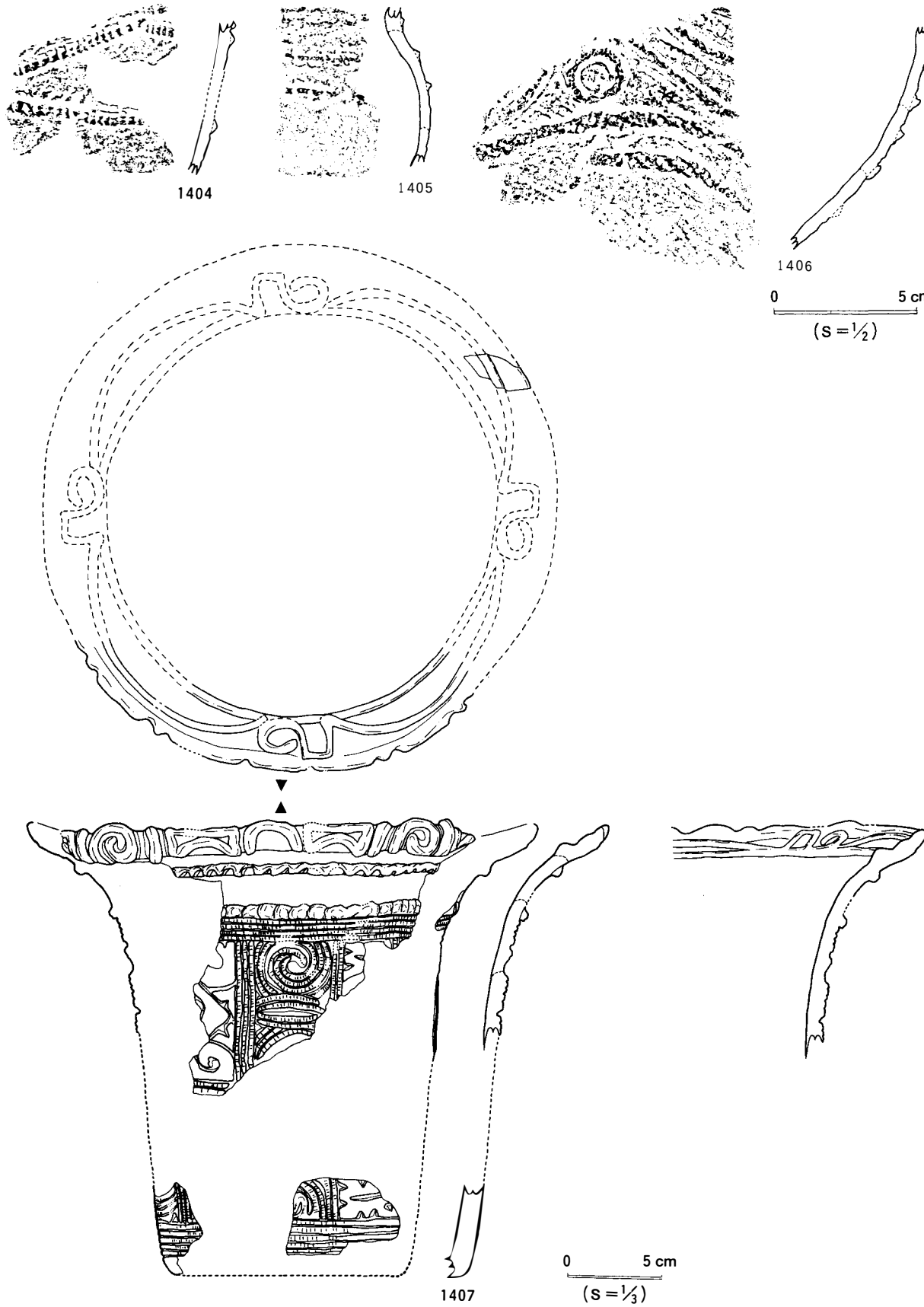


P11

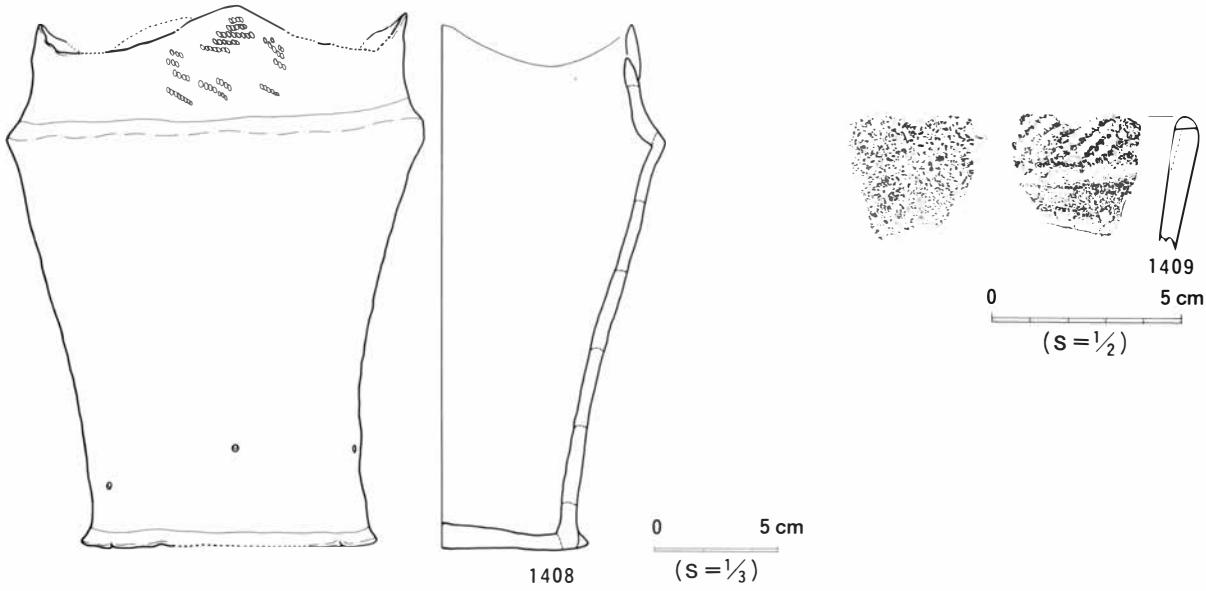
1403

0　5 cm
(s = Y)

59　SK05•SK06•P03•P11



第60図　SU01土器

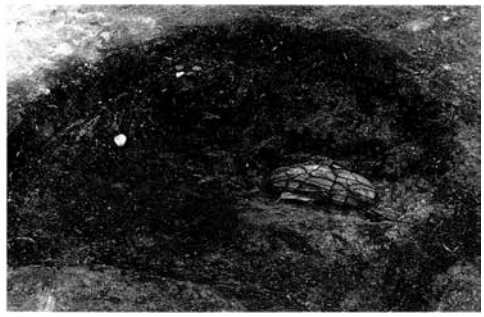


第61図　SU02土器

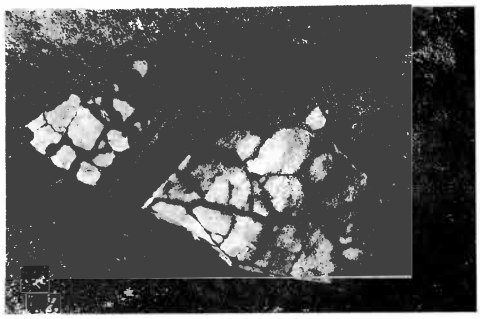
SB02出土土器（1028）

SB03出土土器（1078他）

SB05出土土器（1280）

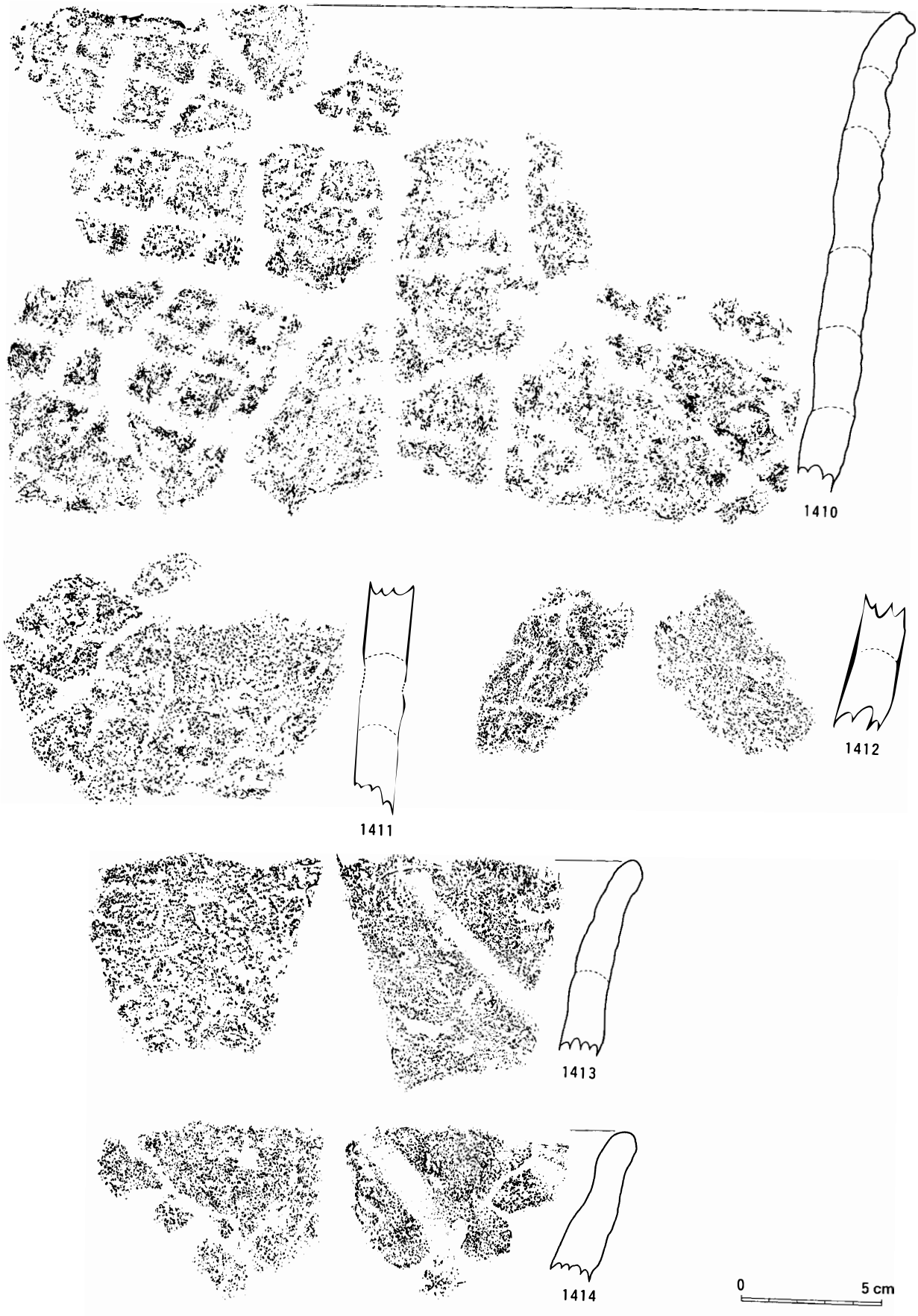


SK03出土土器（1399）

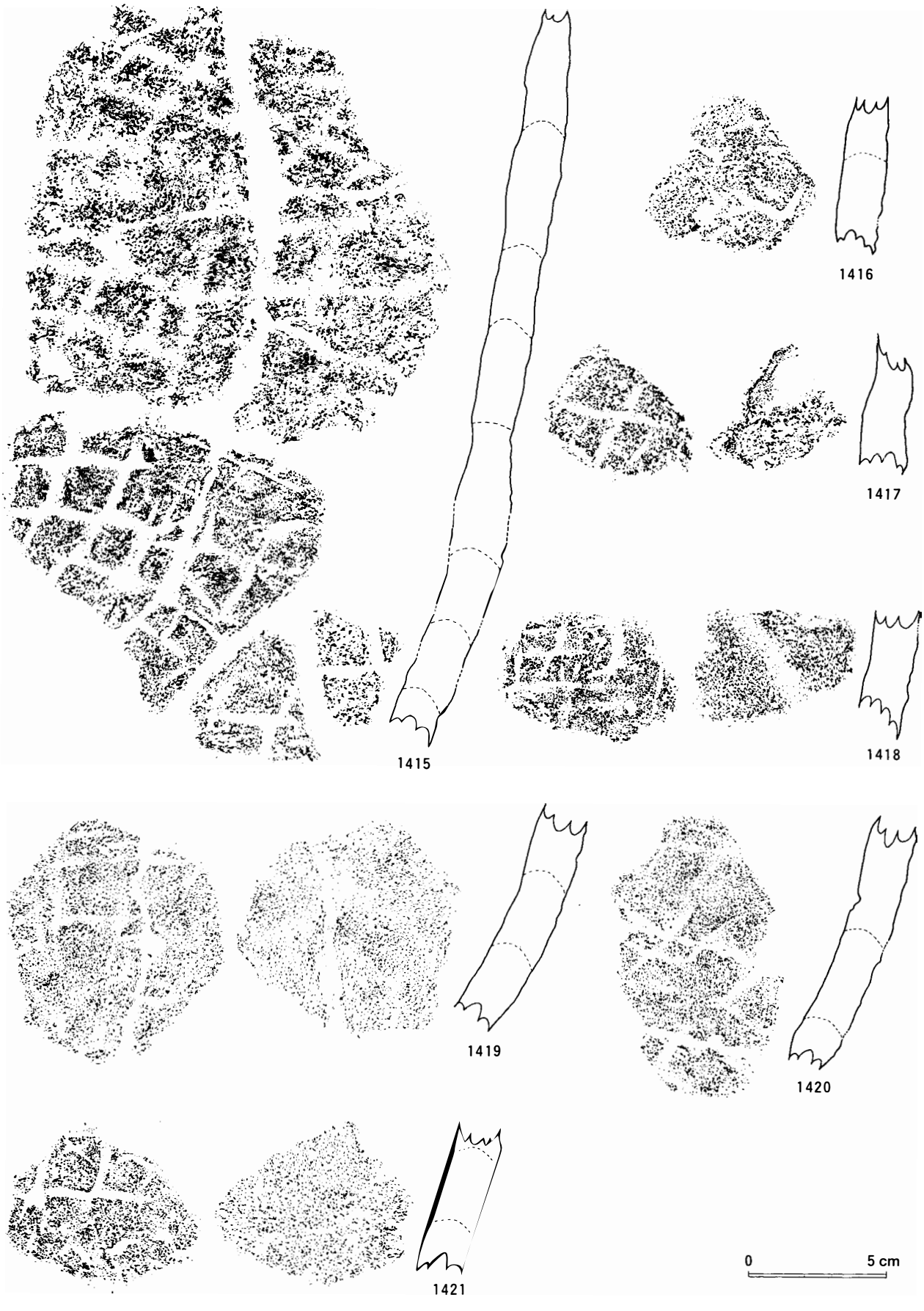


SK05出土土器（1400）

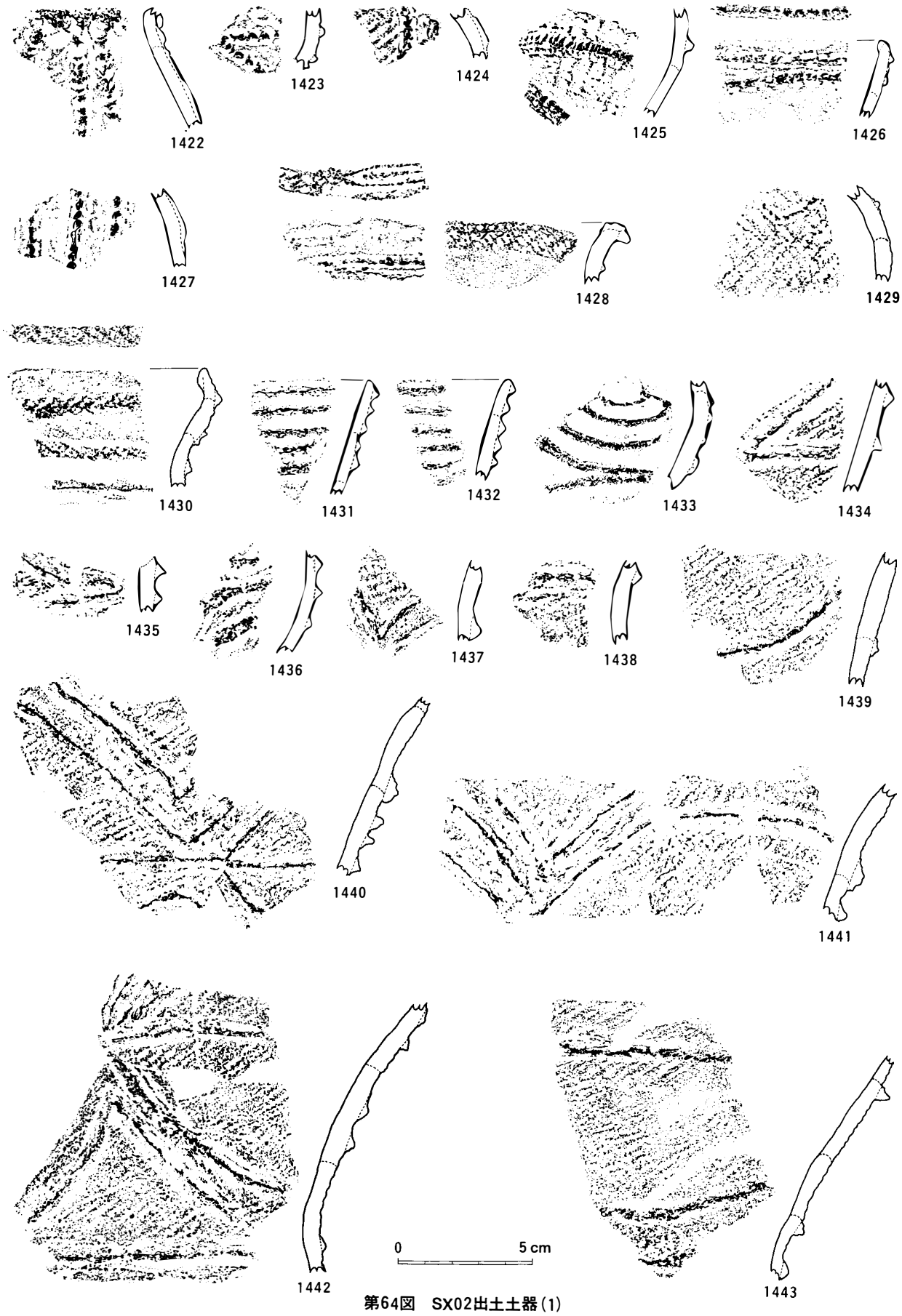
SU01土器（1407）



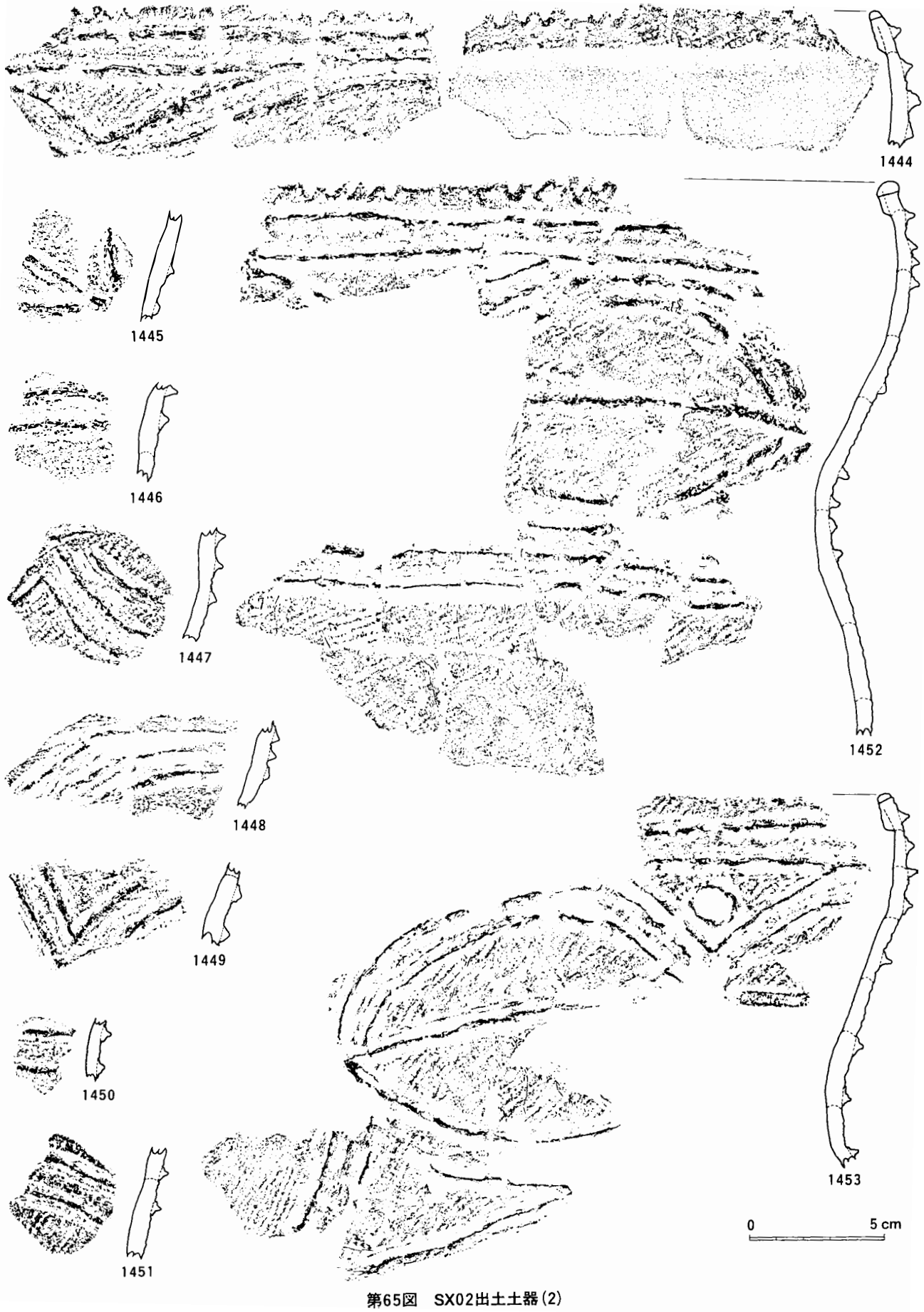
第62図　SU03土器(1)



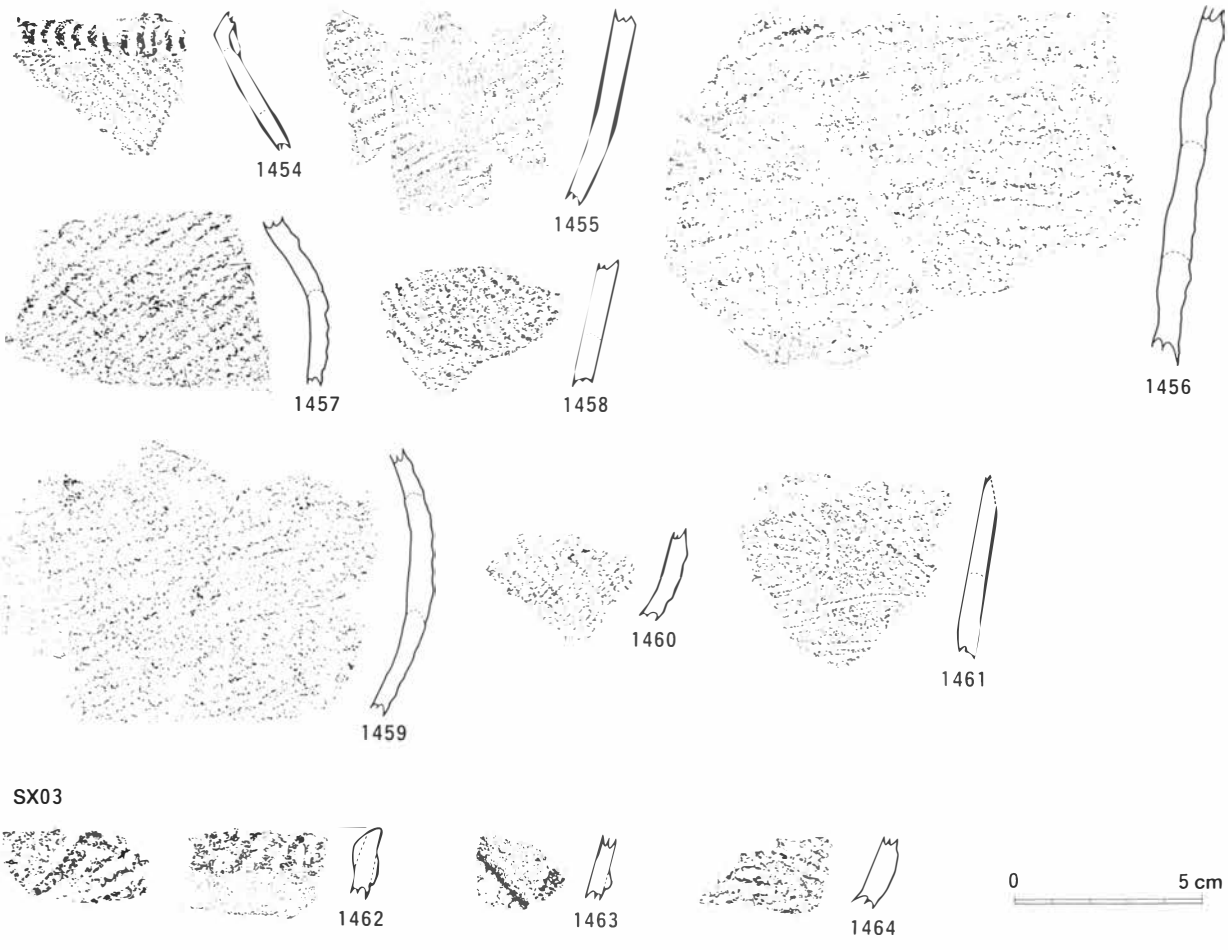
第63図　SU03土器(2)



第64図　SX02出土土器(1)



第65図　SX02出土土器(2)



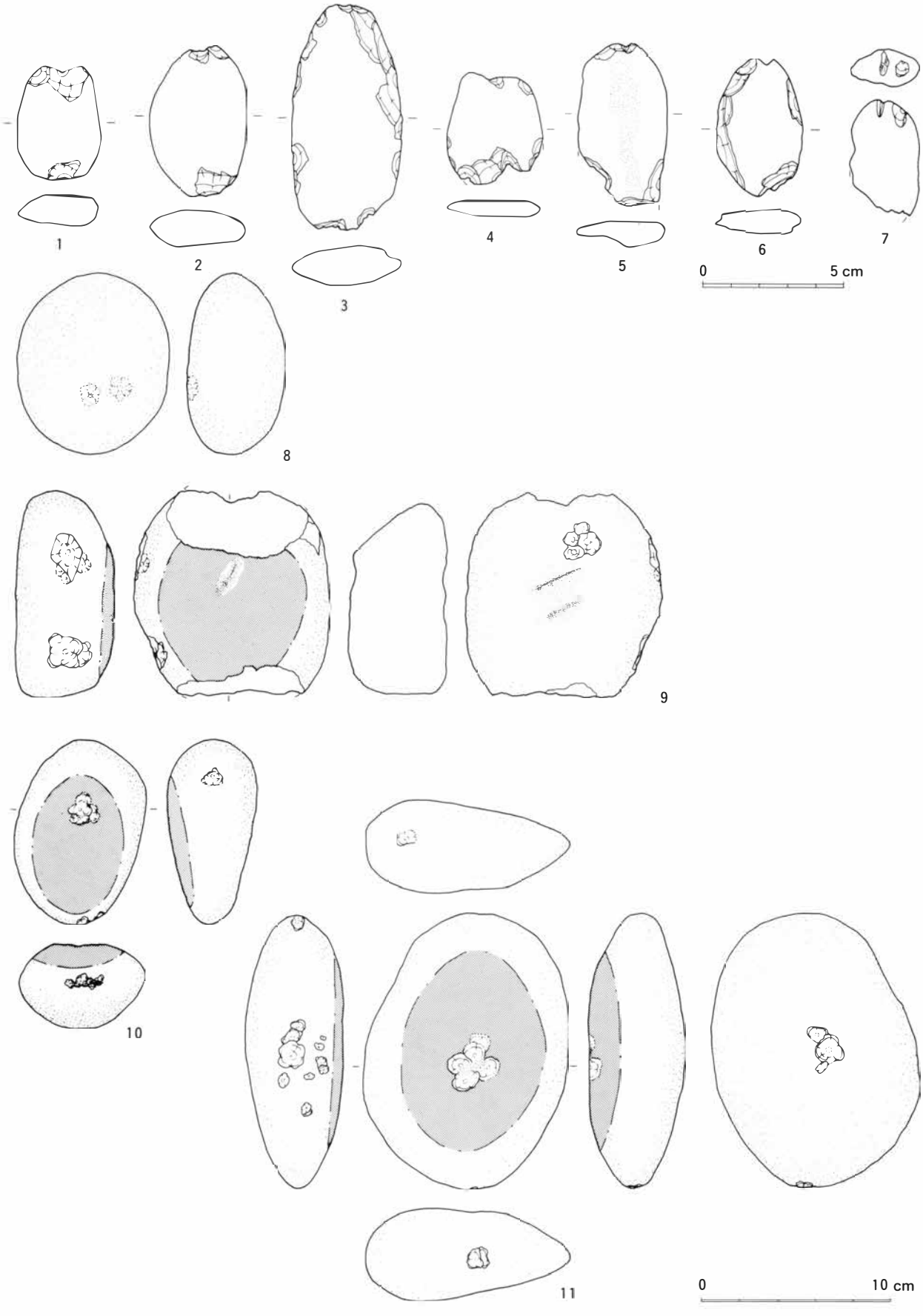
第66図　SX02・03出土土器

SU02土器（1408）

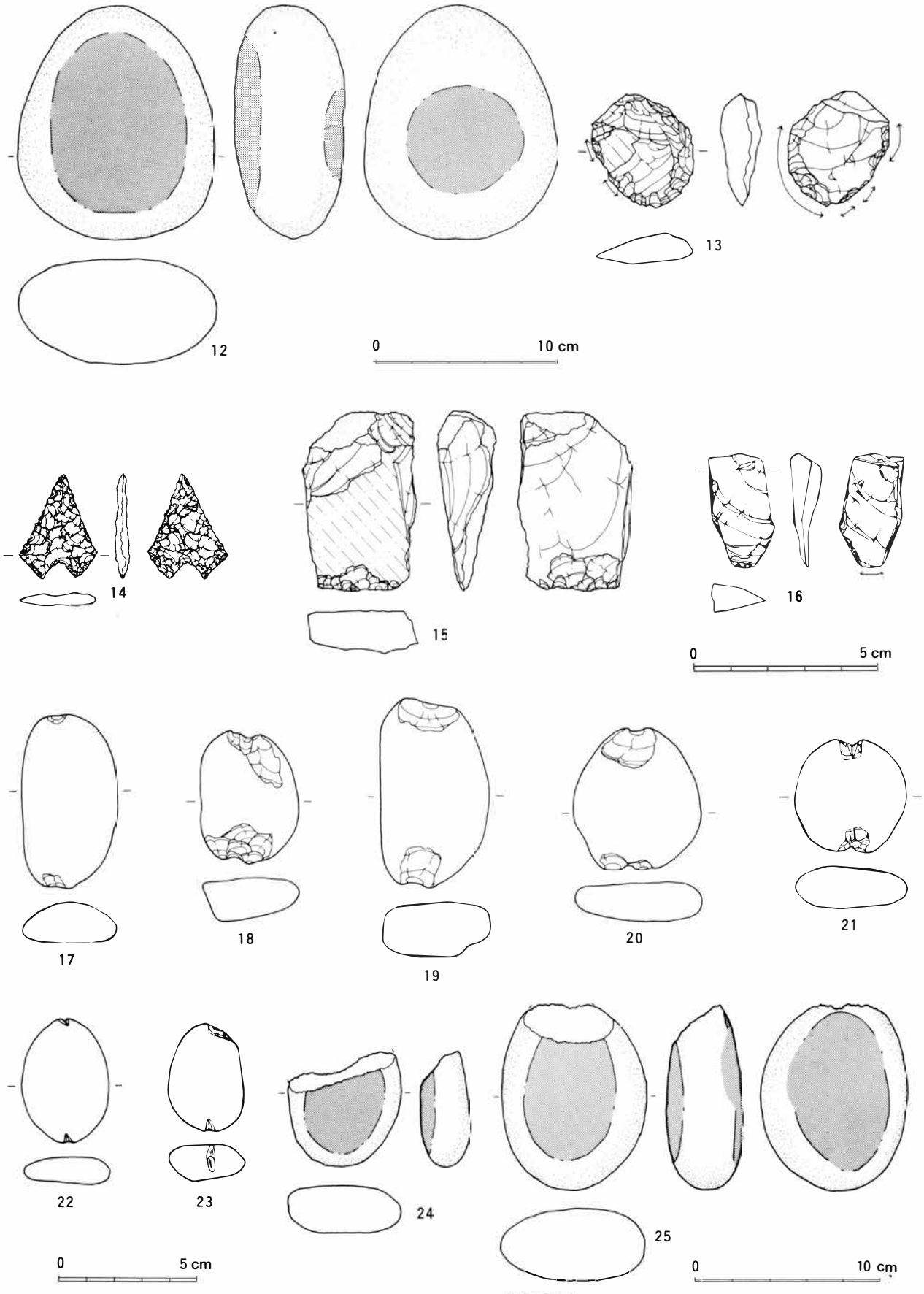
SX02出土土器（1444他）

SX02出土土器（1452他）

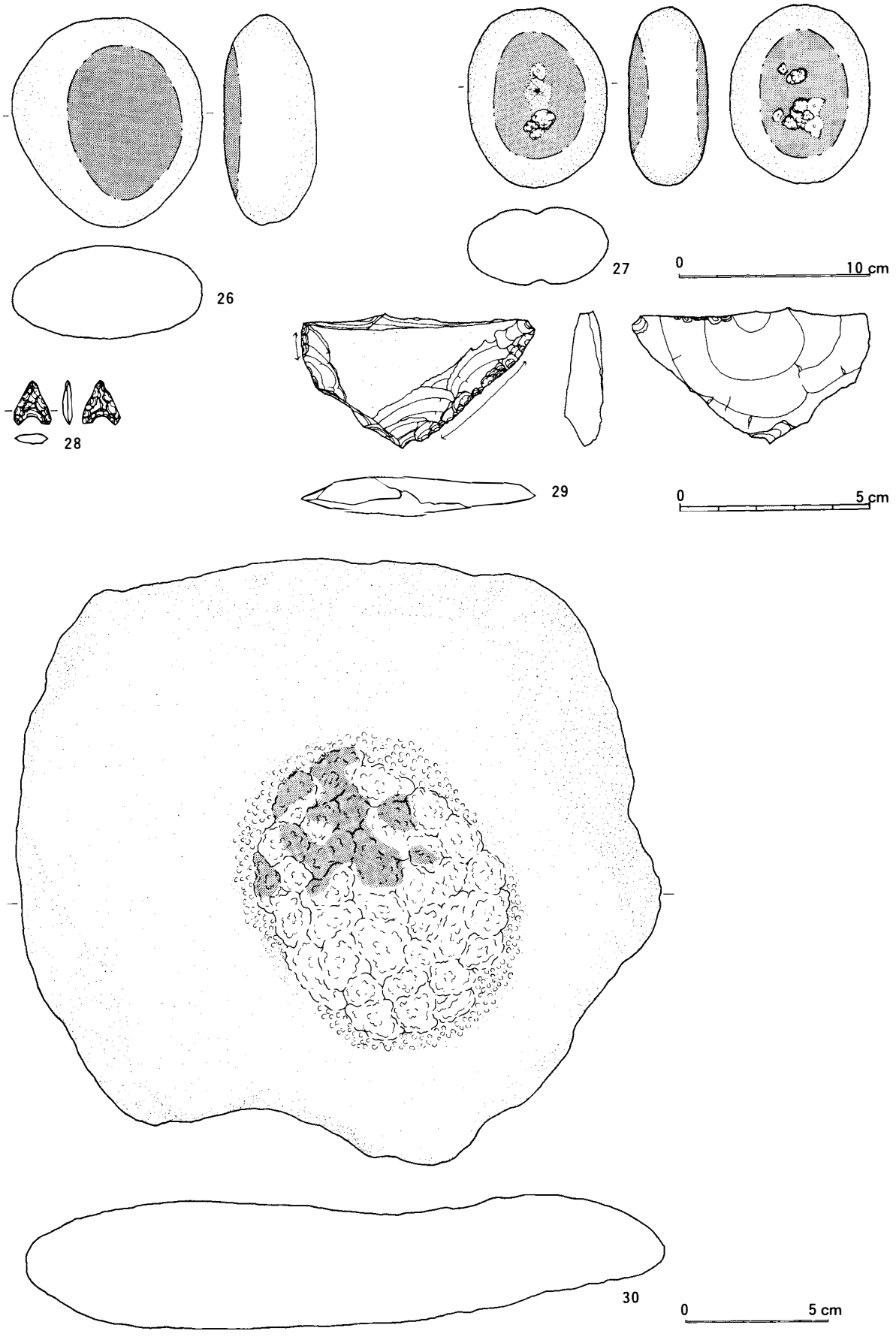
SX02出土土器（1453他）



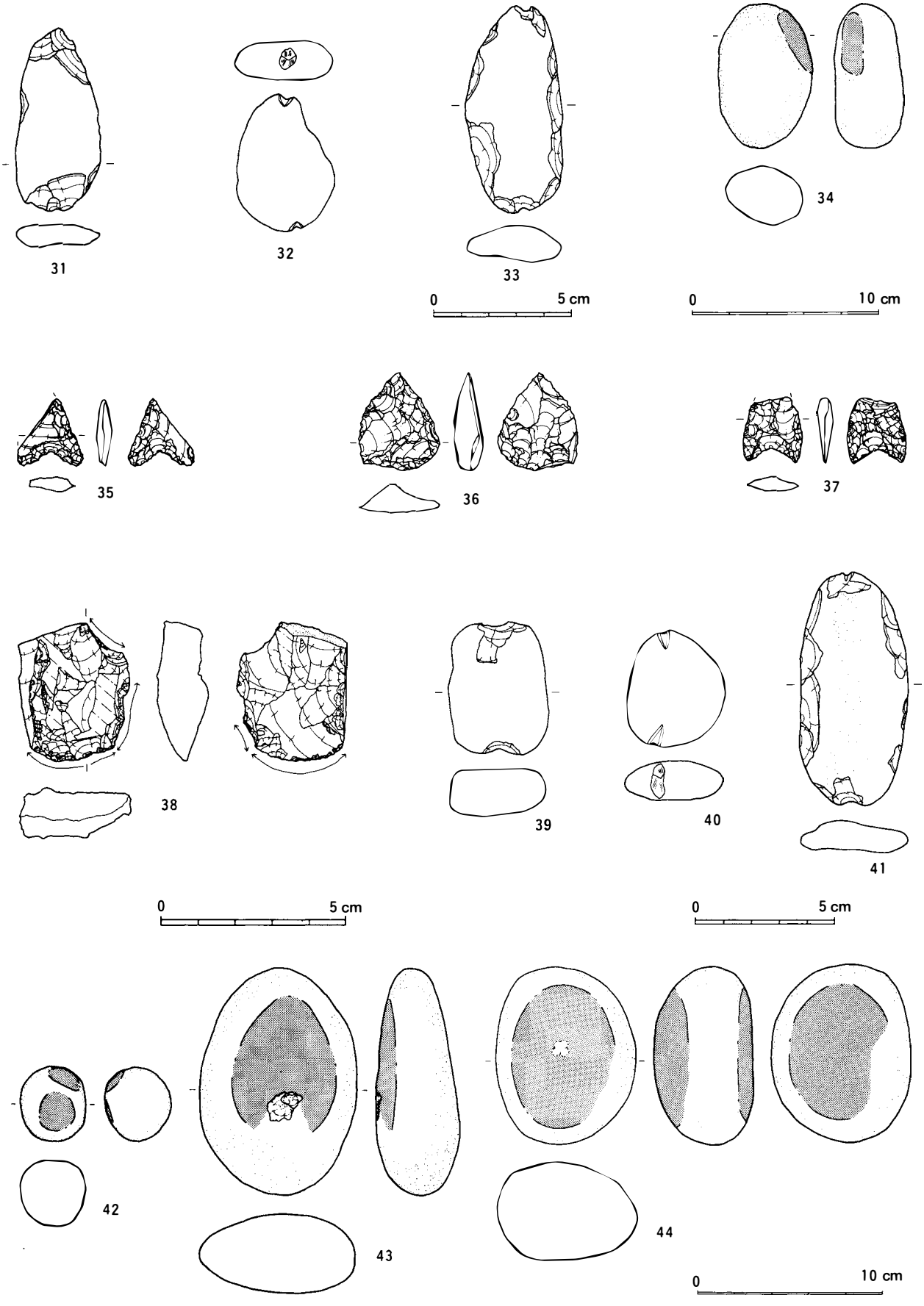
第67図　SB01石器実測図



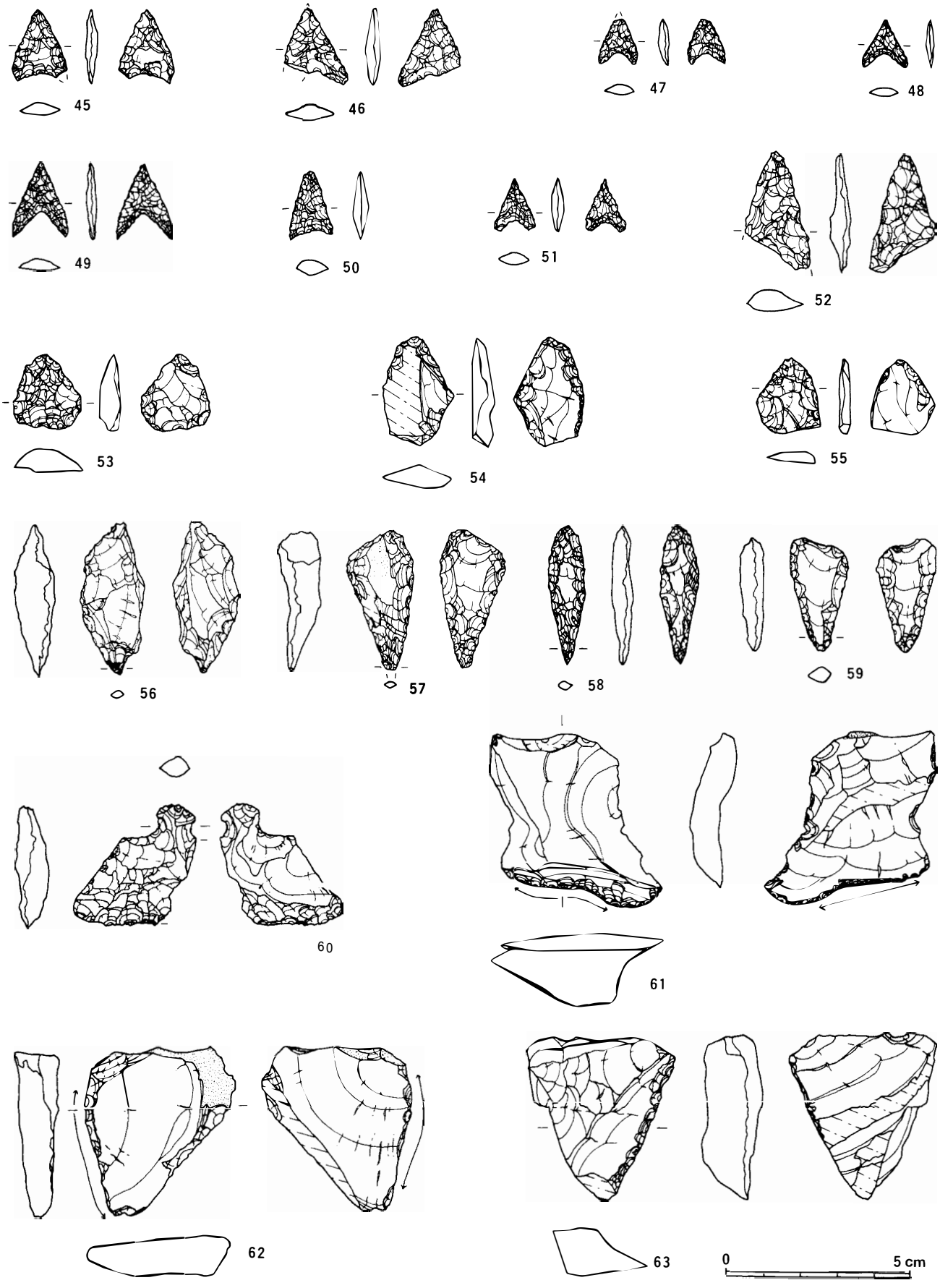
第68図　SB08・02石器実測図



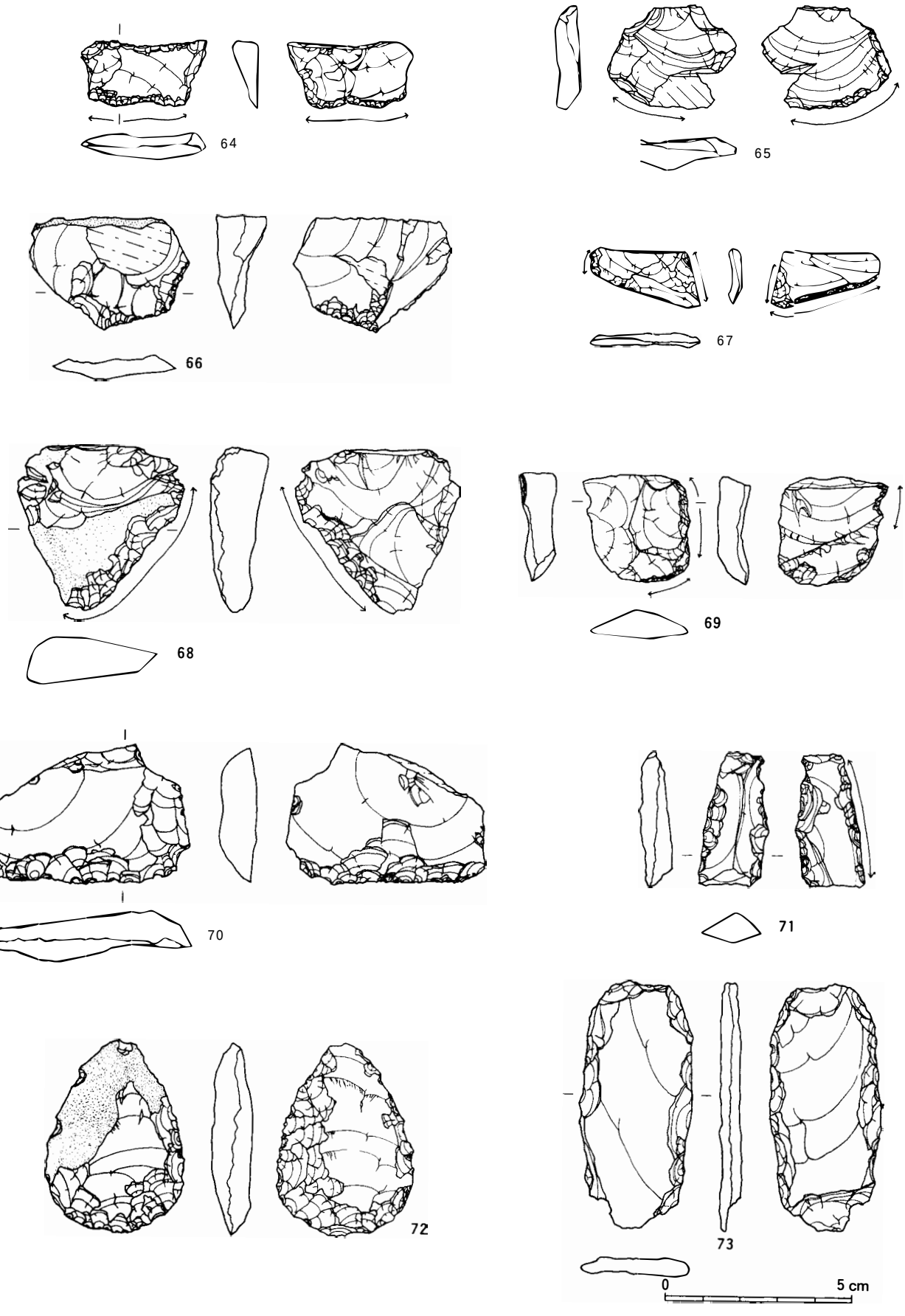
第69図　SB02・03石器実測図



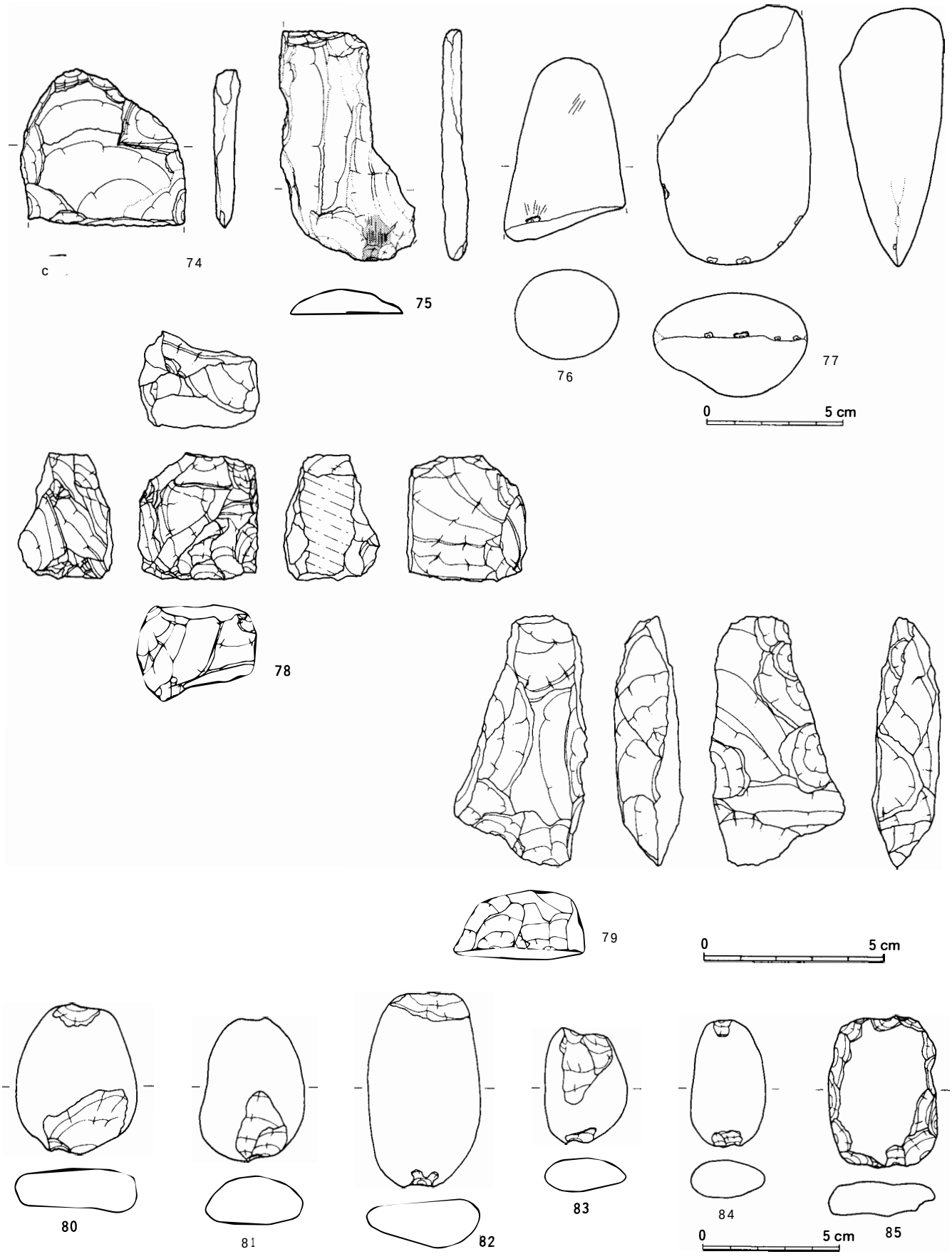
第70図　SB03・04石器実測図



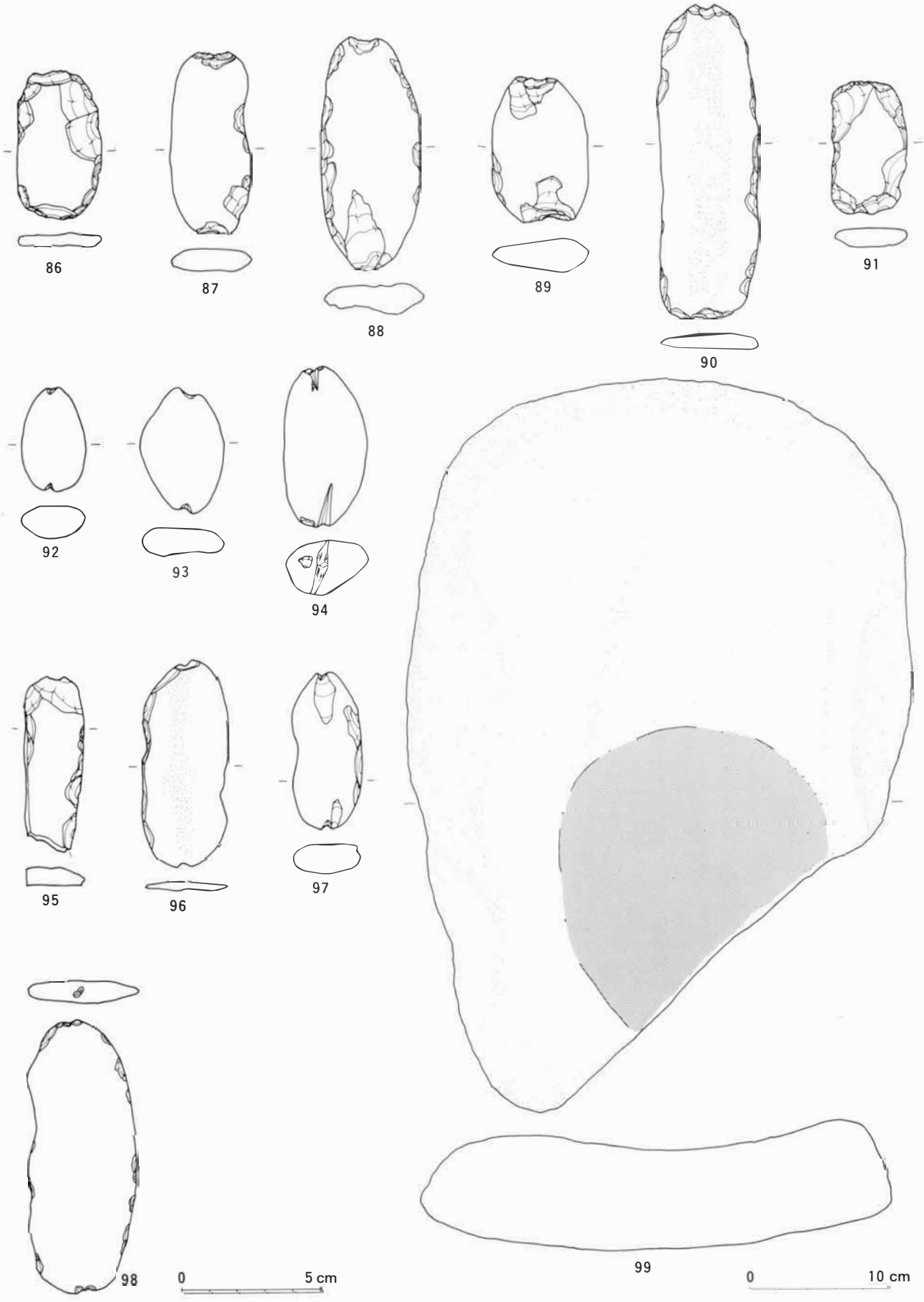
第71図　SB05石器実測図(1)



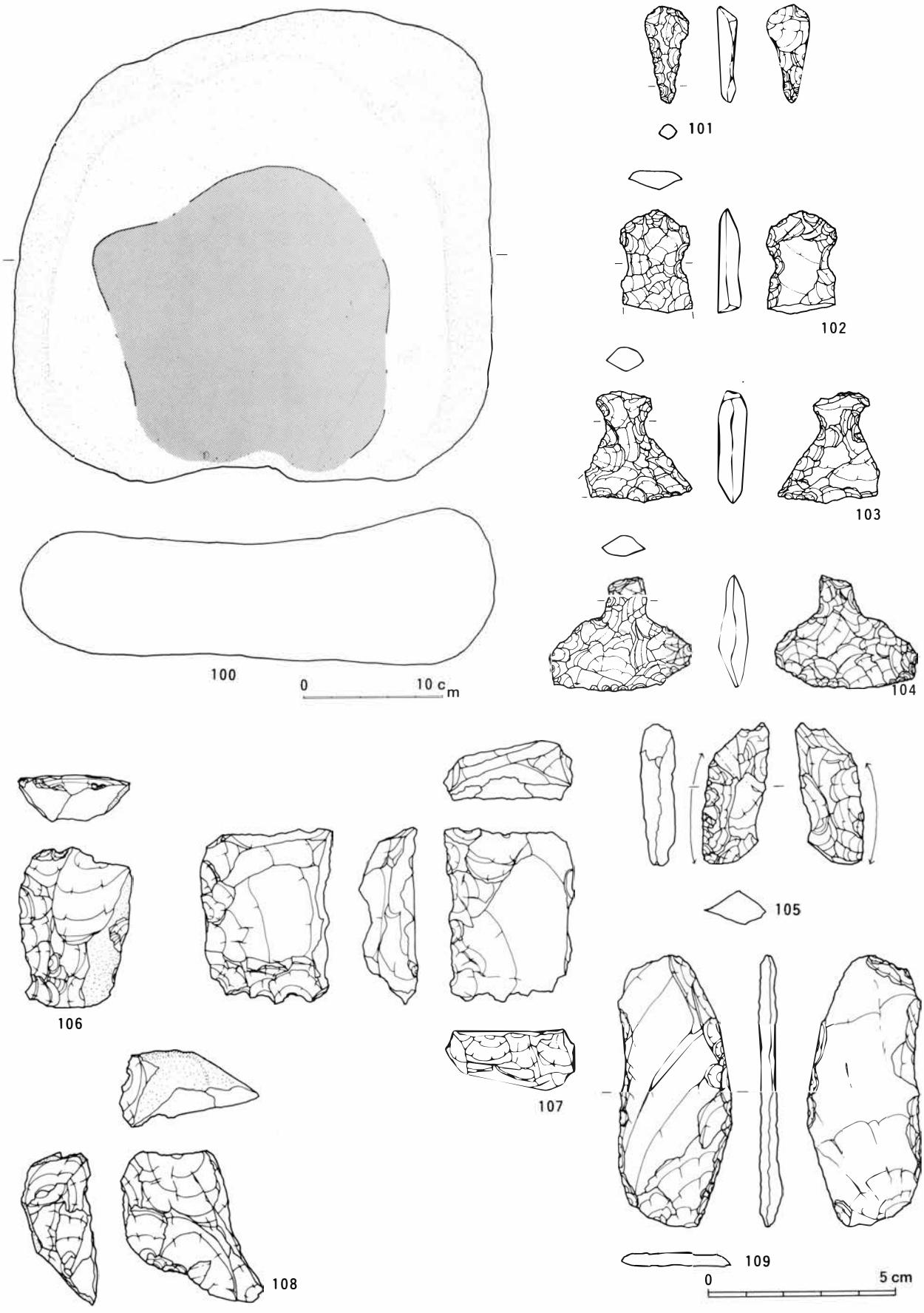
第72図　SB05石器実測図(2)



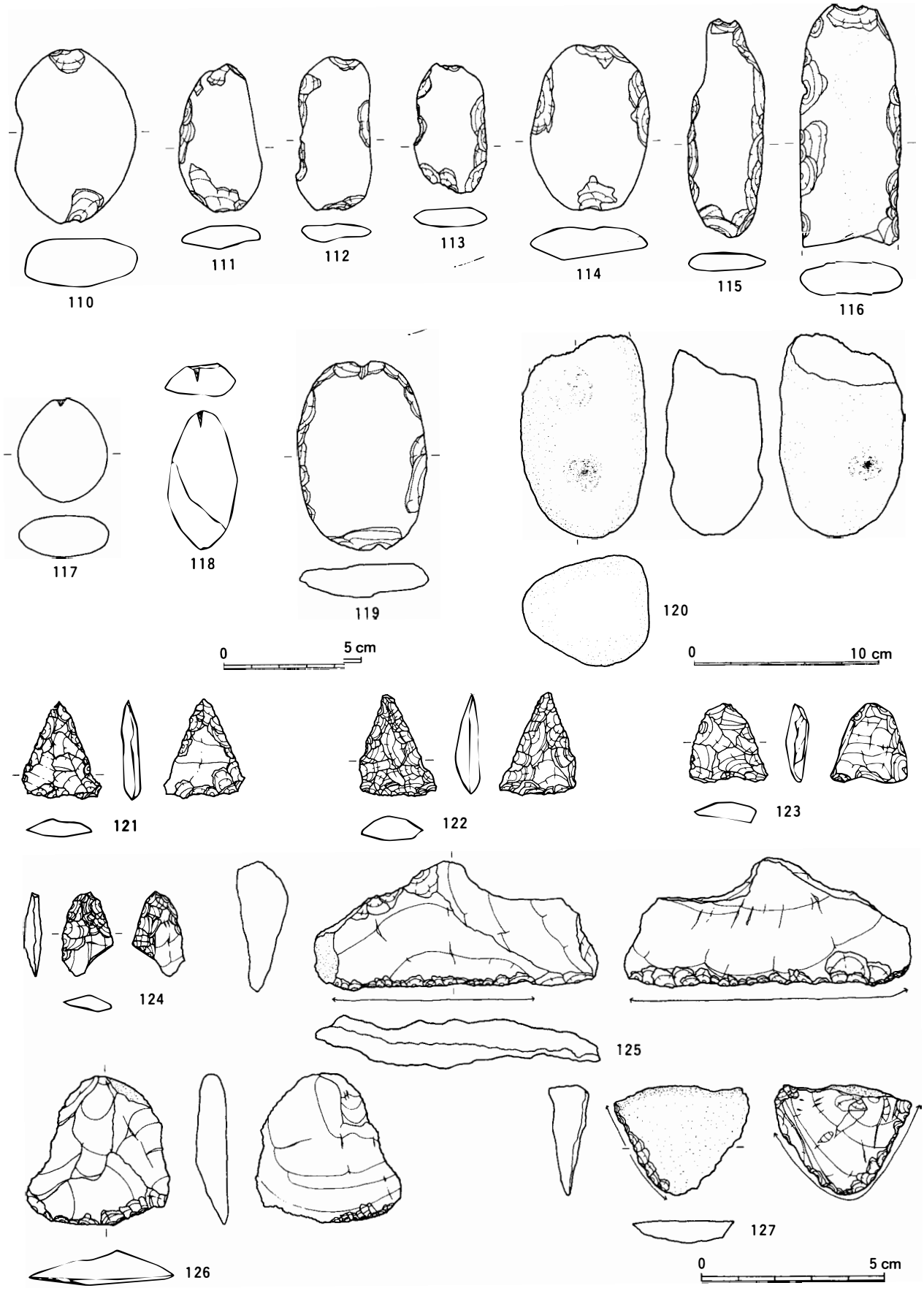
第73図　SB05石器実測図(3)



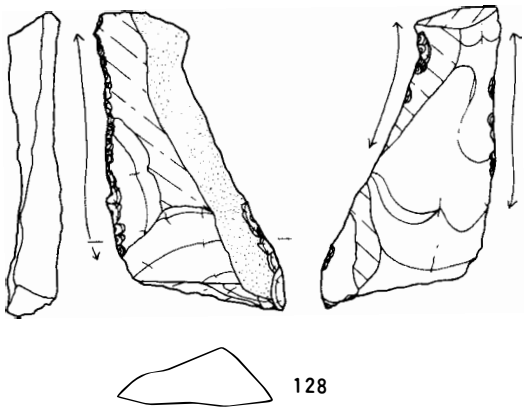
第74図　SB05石器実測図(4)

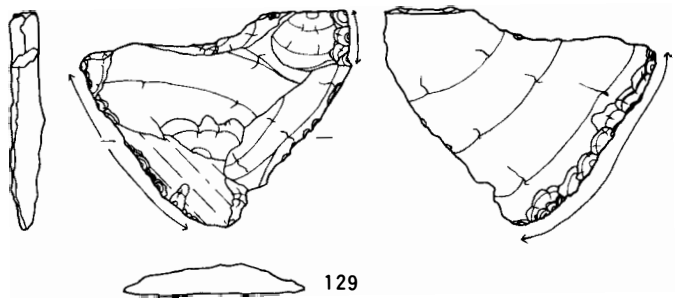


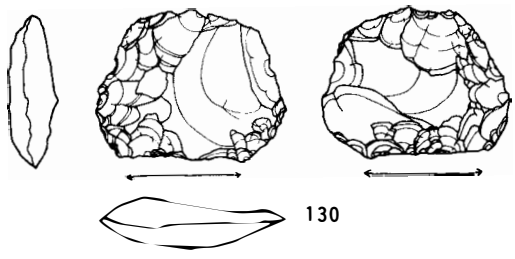
第75図　SB05・06石器実測図

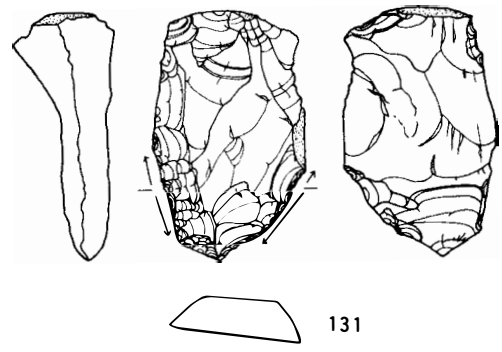


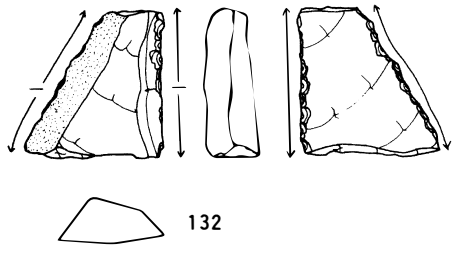
第76図　SB06・07石器実測図

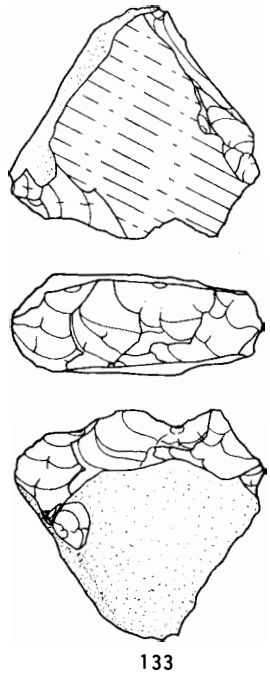


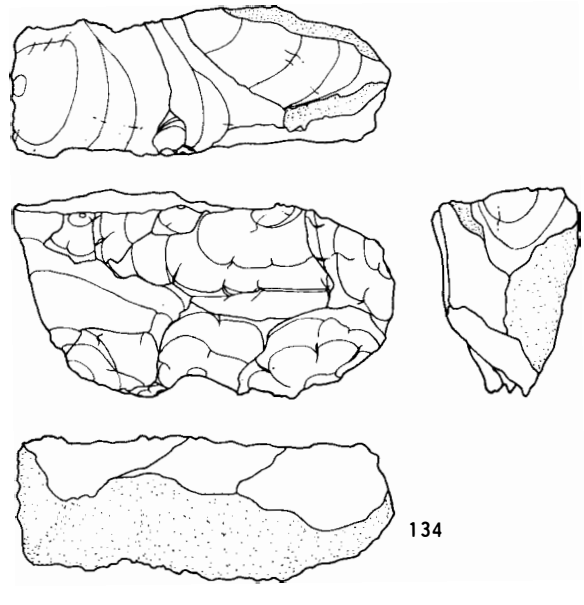




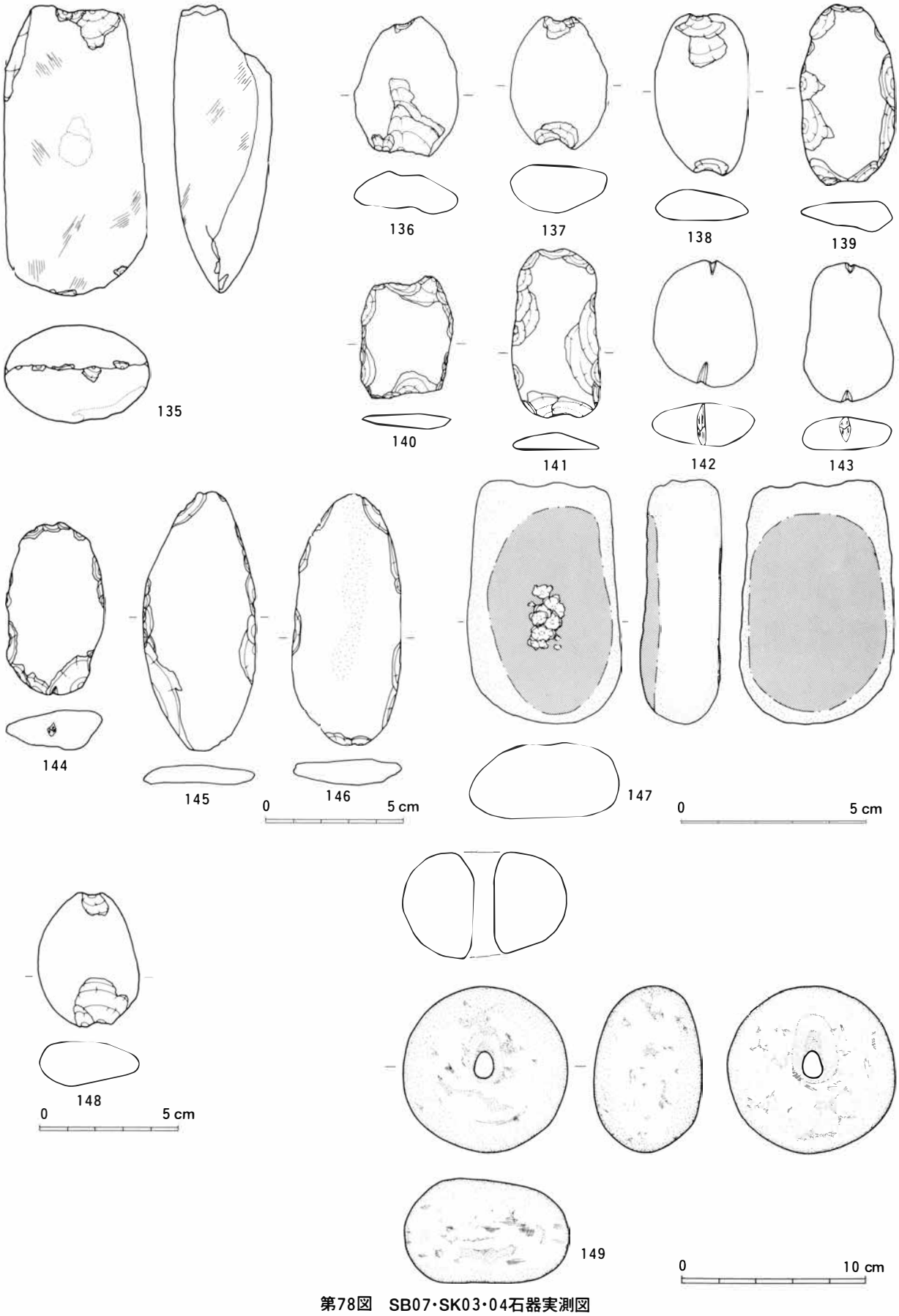




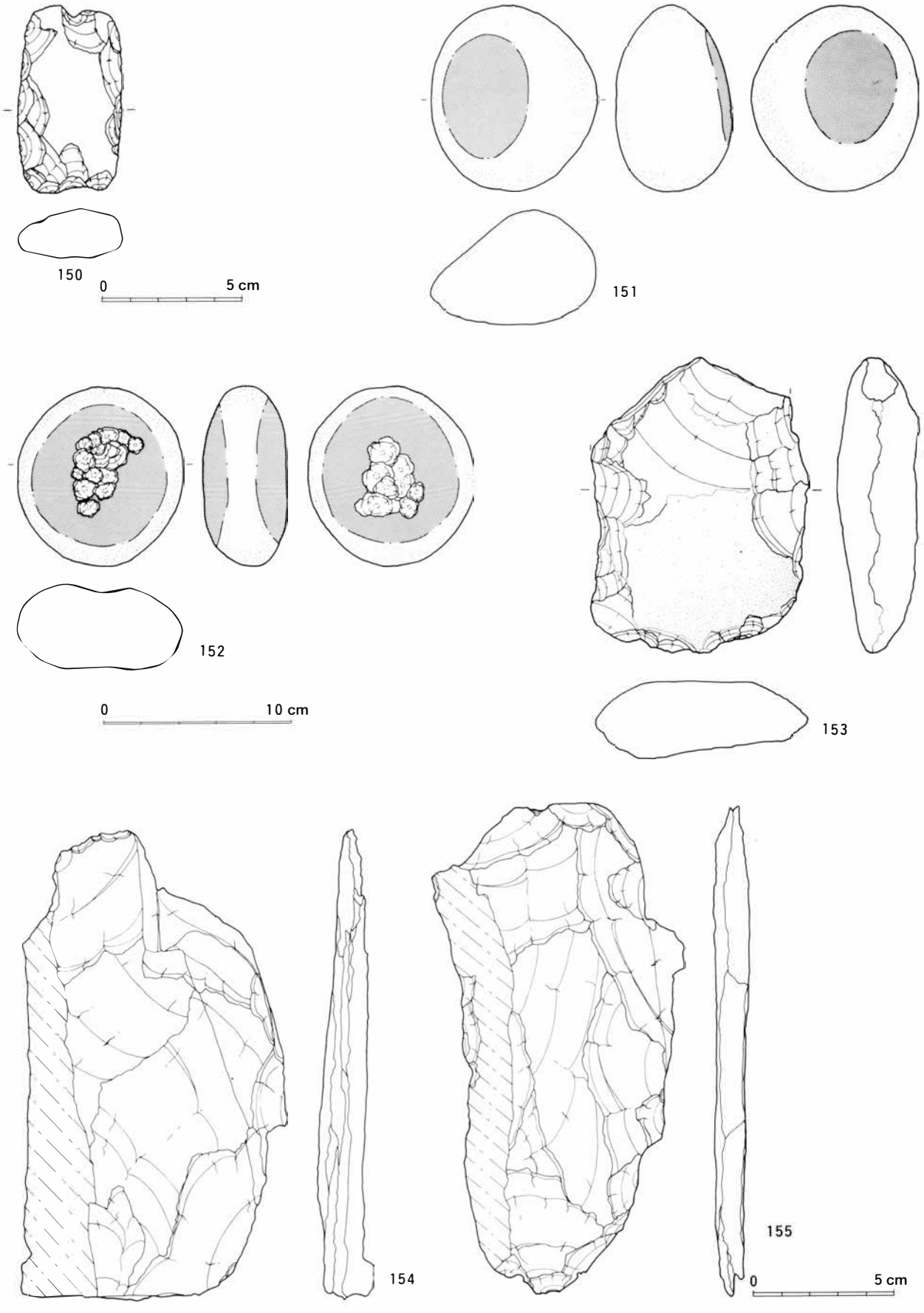




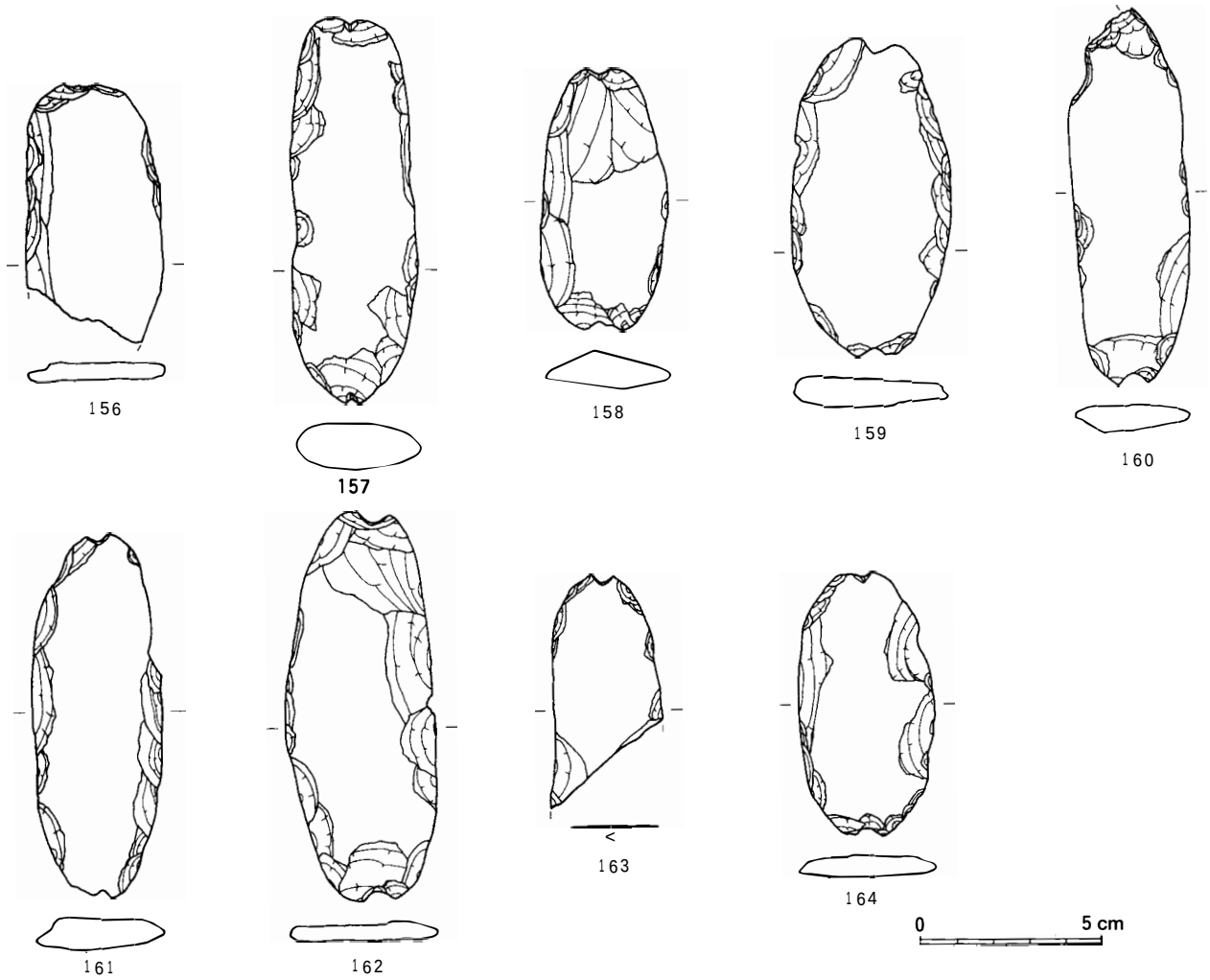
第77図　SB07石器実測図

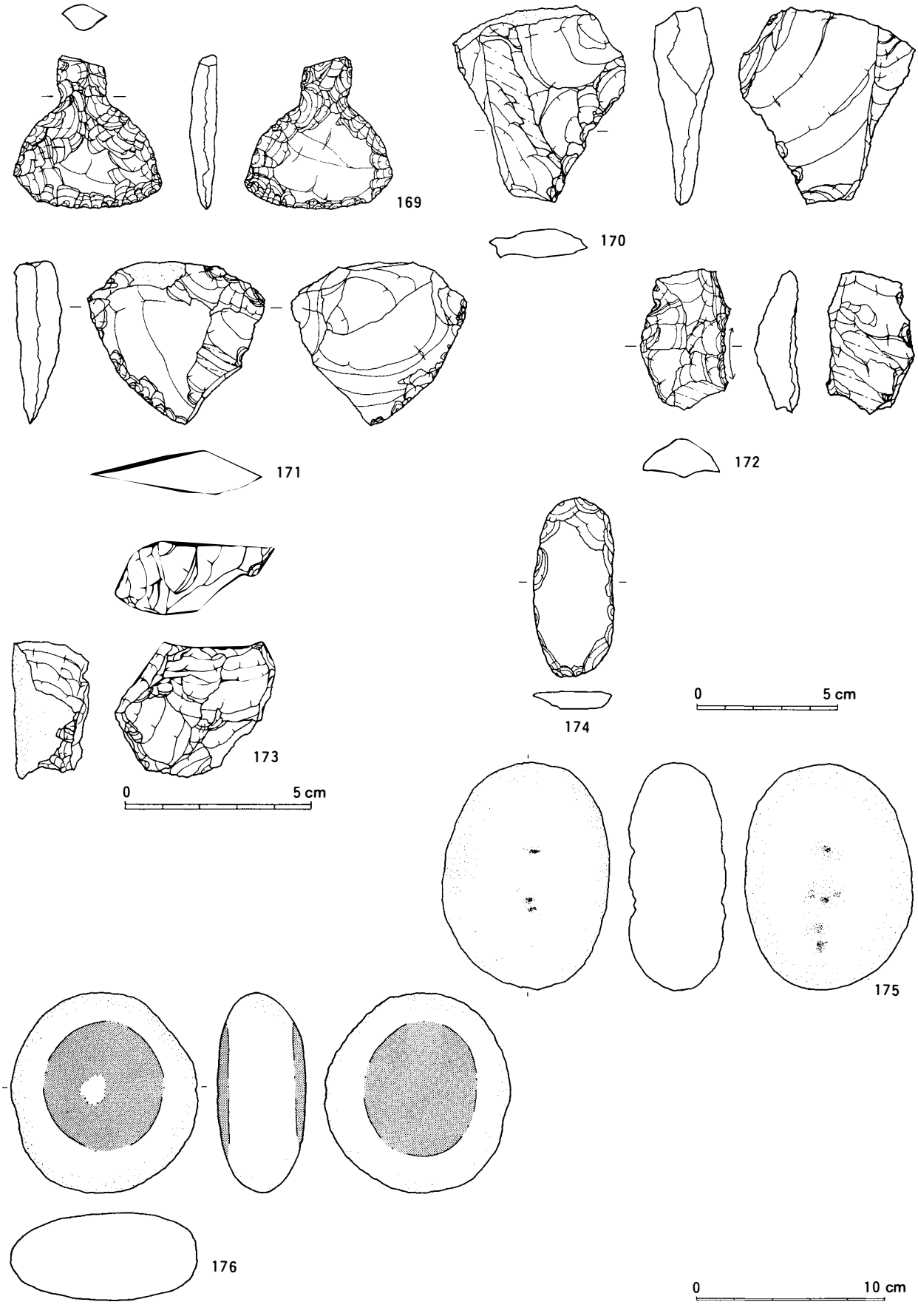


第78図　SB07・SK03・04石器実測図

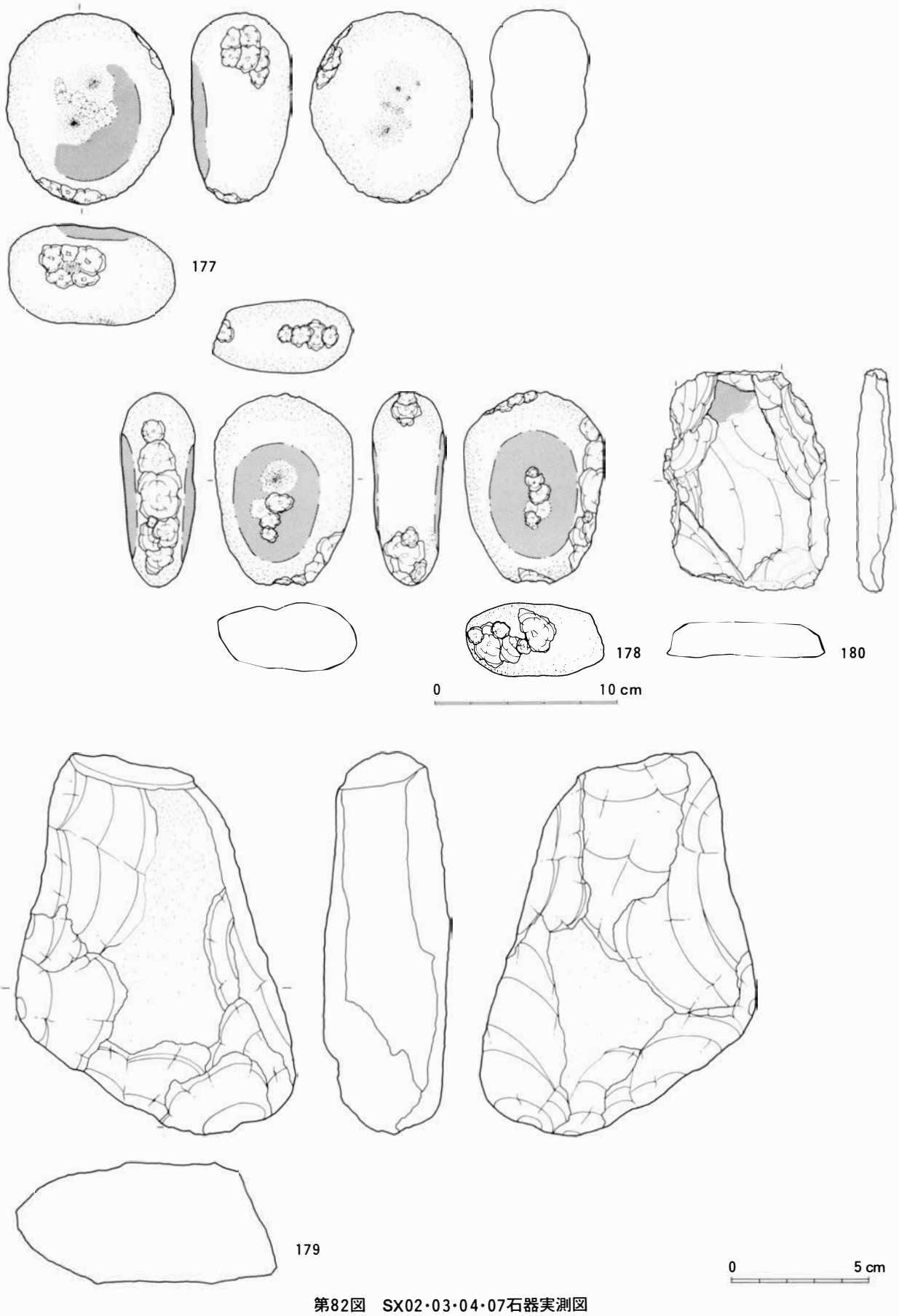


第79図　SK05・SI02・03・SU04石器実測図


156
157
158
159
160
161
162
163
164
0
5 cm
165
166
167
168
0
5 cm



第81図　SX02石器実測図



第82図　SX02・03・04・07石器実測図

第1群Ⅰ類

早期に属するネガティブな山形の押型文を有する土器群を本類とした。3点図示した。いずれも胴部の小片で文様は横位である。1001は上部に1条、下部に3条の押型文が確認できる。両者の間には若干の無文帯が見られる。山形は振幅が少なく崩れており、横線に近い。1465も3条の押型文が確認できるが、やはり山形は崩れている。一方1466は同じ横位の押型であるが、山形はしっかりしている。

第1群Ⅱ類

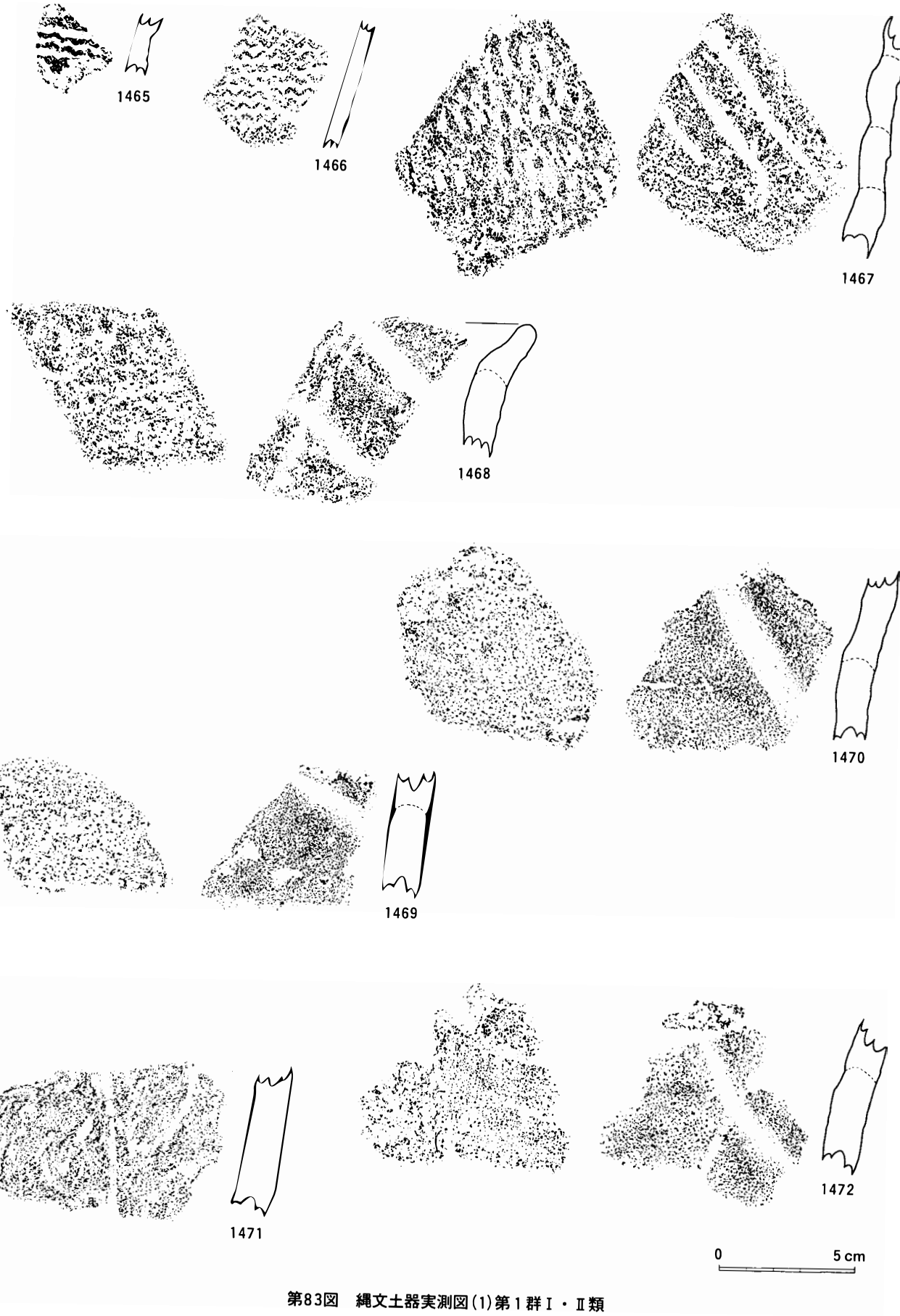
早期に属する楕円状または格子目状の押型文を有する土器群を本類とした。本地点で出土したこの類の土器はすべて高山寺式土器である。18点図示した。1410～1421についてはまとまって出土しているのでおそらく同一個体と考えられる。器壁は厚く13～16㎜ほどある。摩滅している破片もあるが外面に格子目状の押型文が見られる。1410・1413・1414は口縁部片であり、内面に指頭によって施された斜行沈線が確認できる。1467～1472はそれぞれ別個体である。1467は口縁部に近い部分の胴部片で内面に斜行沈線が見られる。1410～1421とは異なり、縦長の楕円状の押型文が施されている。本地点および隣接する第4地点でも押型文土器は出土しているが､楕円状のものは確認できなかった｡1468～1472は摩滅しており、外面の詳細な観察は困難であるが、格子目状である可能性が高い。

第2群Ⅰ類

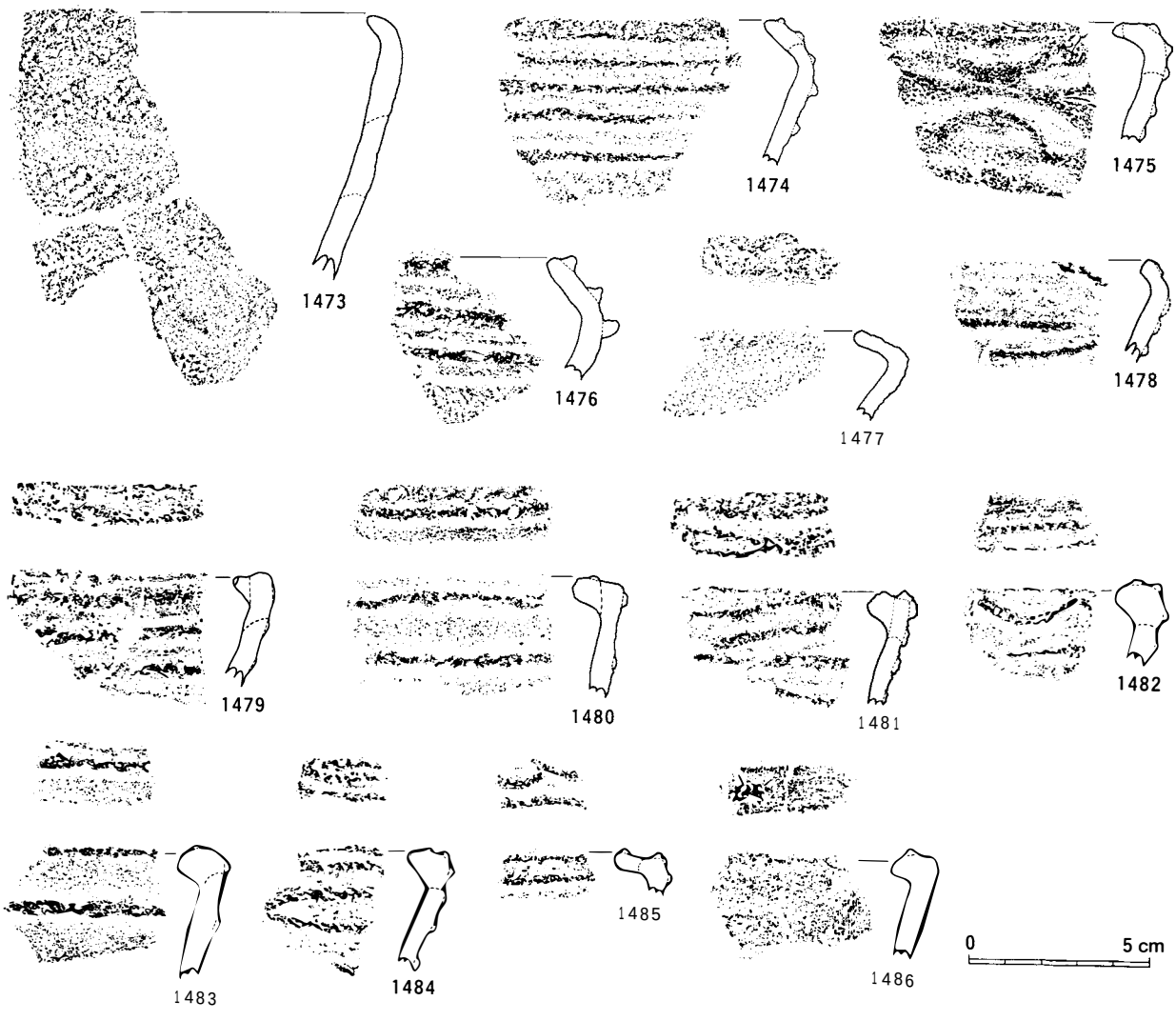
口縁端部が内側へ湾曲および内折する土器群を本類とした。16点図示した。1473～1478は「く」の字状に内側へ湾曲するもの、1341・1400・1479～1486は強く内折するものである。1473・1478は内側へ曲げられた部分が短いが、1474～1477は比較的長い。1473は口縁部片で外面には縄文のみ確認できる。1477は無文である。1474・1476は横位に数条の突帯が貼付られている。1474は縄文突帯、1476は高い指頭成形突帯である。1475・1478は摩滅しており詳細は不明であるが、弧状を描く縄文突帯である可能性が高い。突帯による文様構成は強く内折するものでも二通り見られ、1479・1480・1483は横位に平行であり、1481・1482・1484・1485は弧状を描く。いずれも縄文突帯である。1486は無文地に若干の突帯らしき痕跡があるが詳細は不明である。1400は本類中唯一器形がわかるものである。口縁端部を短く内側へ内折させ、端部には縄文を施している。膨らんだ胴部から口縁部下でややくびれ、端部に向かって直線的に開く器形を呈する。主文様は縄文であるが、胴部下半には無数の条線が不規則に施されている。底部は欠損しているため不明である。

第2群Ⅱ類

突帯を有する個体もしくは破片を本類とした。本地点からの出土土器の大半が本類に属し、その中核をなす。出土量も比較的多く様相が多岐にわたるので、一括せずに突帯の成形技法および施文技法を中心に細分した。一個体中に複数種の突帯を有する個体については、主となる突帯を基に分類した。なおＢａ～Ｂｄについては突帯上に半截竹管状工具による押し引きおよび撫で引きが施されているので、推定可能な工具とその工具によってできる押し引きの平断面図を第92図に示した。以下各項について説明を加えていくが、便宜上、第2群第Ⅱ類Ａａを2ⅡＡａと記し、他も同様に表現する。



第83図　縄文土器実測図(1)第１群Ⅰ・Ⅱ類



第84図　縄文土器実測図(2)第2群Ⅰ類

2 II A

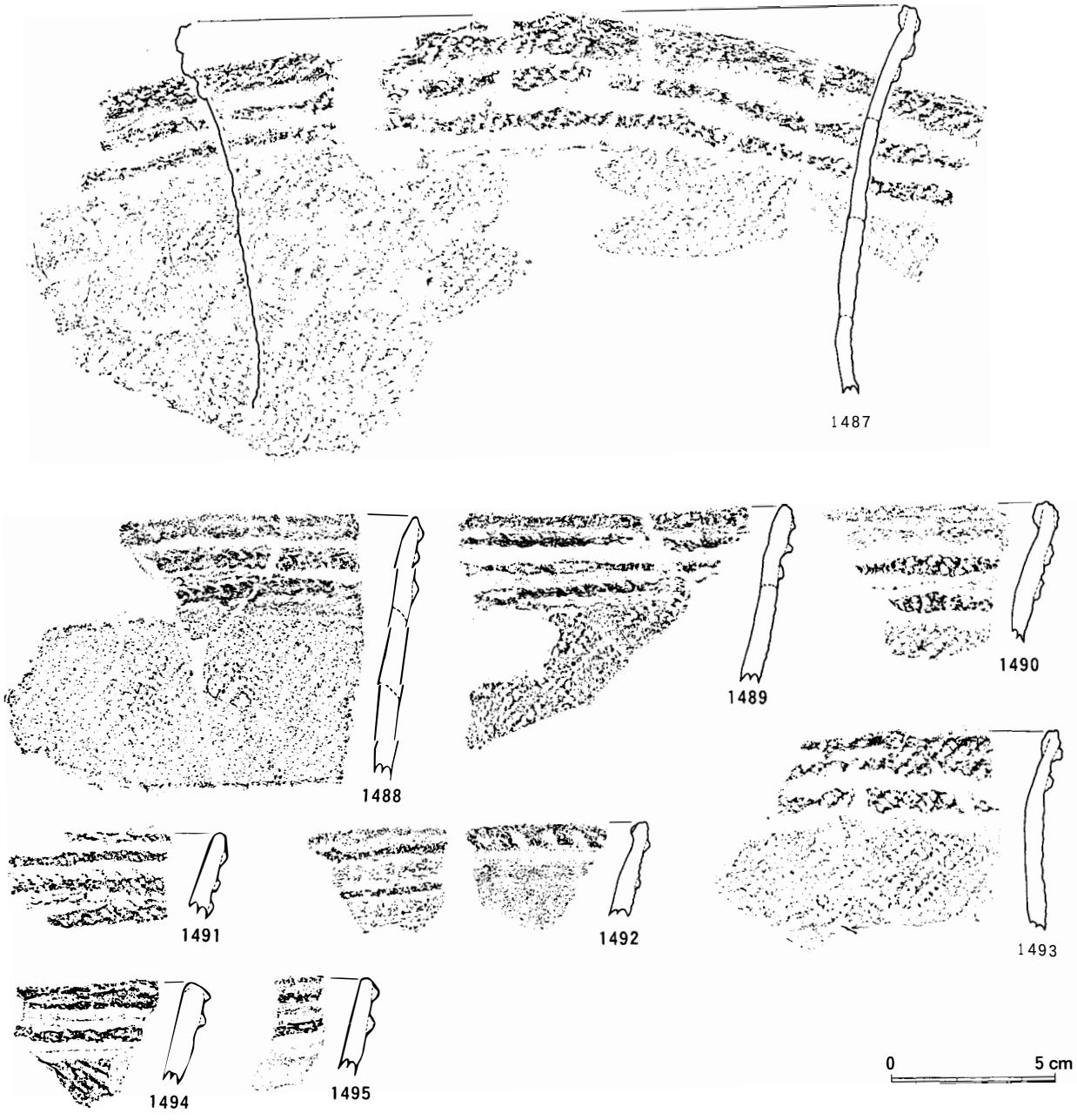
本類のAは突帯を有する土器群のうち、縄文が施された突帯（縄文突帯）を主とするものである。突帯上の施文技法は共通するが、文様構成の違いでａとｂに細分した。

2 II A a

口縁部に平行する2～3条の突帯を有するものを本類とした。22点図示した。突帯文土器の中では出土量は少なく、ここに掲載したものがそのほとんどにあたる。ａは口縁部のみに特徴があり、他の部位での判別が困難であることも確認できた数の少ない要因であろうと思われる。

1027は口縁部片はやや外反した口縁部片で3条の平行する縄文突帯を有する。

1063～1067も同様で突帯以下は地文の縄文が施されている。ただ1065だけはやや異なり、突帯は2条で突帯間が広い。1068も3条の縄文突帯を持つが、口縁端部が内側に向けられている。また外面最上部が縄文帯になっており、一番上に貼付られた突帯につながっている。補修孔がある。



第85図　縄文土器実測図(3)第2群Ⅱ類①

1342～1347も同様に口縁部外側に3条の縄文突帯を持つが、1027・1063～1068までが外反気味であるのに対してやや内湾している。また突帯の断面もやや高く、様相が異なる。

1487～1495も基本的には同じであるが、1488と1489は突帯上に縄文だけでなく刻みも施されている。また1492は内面を肥厚させたところへ刺突を加えている。1487は比較的遺存状態がよく全周の3分の1ほどある。やや外反しながら朝顔状に開く器形を呈する。一番上の突帯は口縁端部へ広がるように貼付られている。1493は1487と同一個体である。1494は縄文突帯だが、断面が高く他と異なる。以上記した22点は若干の差異は認められるものの基本的な要素は同じであると考えられる。ただ比較して考えていきたいのは内面肥厚の有無である。この差が器形その他に関連するかどうかは現状では不明である。

２ＩＩＡｂ

ｂは縄文突帯を数条有し、口縁部から胴部にかけて文様帯を形成するものを一括した。突帯文土器のうちでは比較的まとまっており、量的にも占める割合は高い。201点図示した。なお小片で詳細が不明である縄文突帯を有する破片の多くを本類に含めた。

1002は低い突帯を持つ胴部片と思われる。1019も胴部片である。

1028は緩やかな波状口縁で、やや外反しながら朝顔状に開く器形を呈する。横位の突帯を基本とし、Ｘ字状・弧状のモチーフが描かれている。1029は文様帯の下部に該当する部位であろうと思われる。1030・1031・1033・1034は胴部片、1032は内面肥厚のある口縁部片である。

1069～1072は同一個体である。器形は1028に似ている。横位の突帯を基本とし、波頂部下には弧状の文様が加えられる。1028とともに短く内面肥厚され縄文が施されている。この1028・1069～1072が２ＩＩＡｂの典型的な例である。他の小片でも文様構成その他において共通する点が多い。

1104・1105は胴部片である。

1124は縦位の突帯を持つ。1127は内面肥厚した口縁端部に棒状工具による押圧が加えられ、さざ波状を呈している。内面肥厚部には縄文が施されている。1128・1131～1134・1136は波状口縁で文様もよく似ている。突帯は低くつぶれた感じである。1138～1151は胴部片で低い突帯が多い。1152も低い突帯だが、突帯上に直行する浅い刻みが見られる。1153は緩やかな波状口縁で端部に刻みが施されさざ波状を呈している。

1348・1349は内面肥厚された口縁部片、1330～1332・1350～1358は胴部片である。

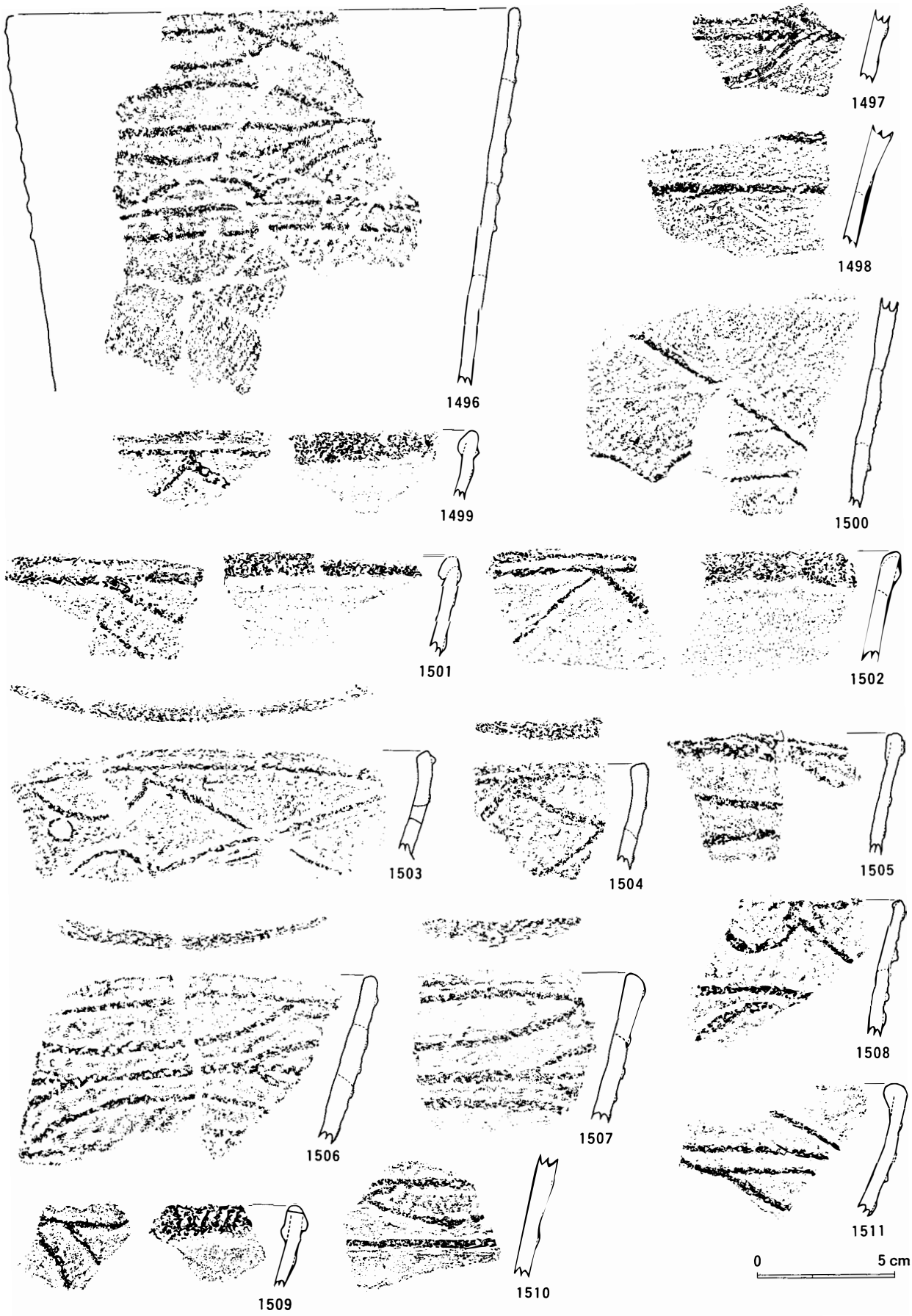
1462は口縁部片である。短く斜めの縄文突帯が見える。多くの口縁部片が口縁に沿って１条ないし数条の横位突帯が貼付られているのに対して、本例はそれに該当しない。他にも1528のように数点確認できる。

1496は比較的文様構成がわかる資料である。横位の突帯間に弧状文を組み合わせ連弧もしくは楕円状文等を描いている。文様帯最下部には横位の１条の突帯を貼付し、口縁部文様帯と胴部地文帯とを区画している。1028等が波状口縁であるのに対して、平口縁であり内面肥厚もない。器形においても異なり、口縁端部に向かって湾曲せずほぼ直線的に立ち上がる器形を呈する。同様に内面肥厚のない口縁部片を見ると、1503・1504は端部がやや内側に傾いているが、1506～1507は直線的である。文様の点では1503は1028と酷似している。1496・1497・1506・1507は横位突帯の間に弧を合わせたようなラグビーボール状のモチーフを描き出している点で共通する。

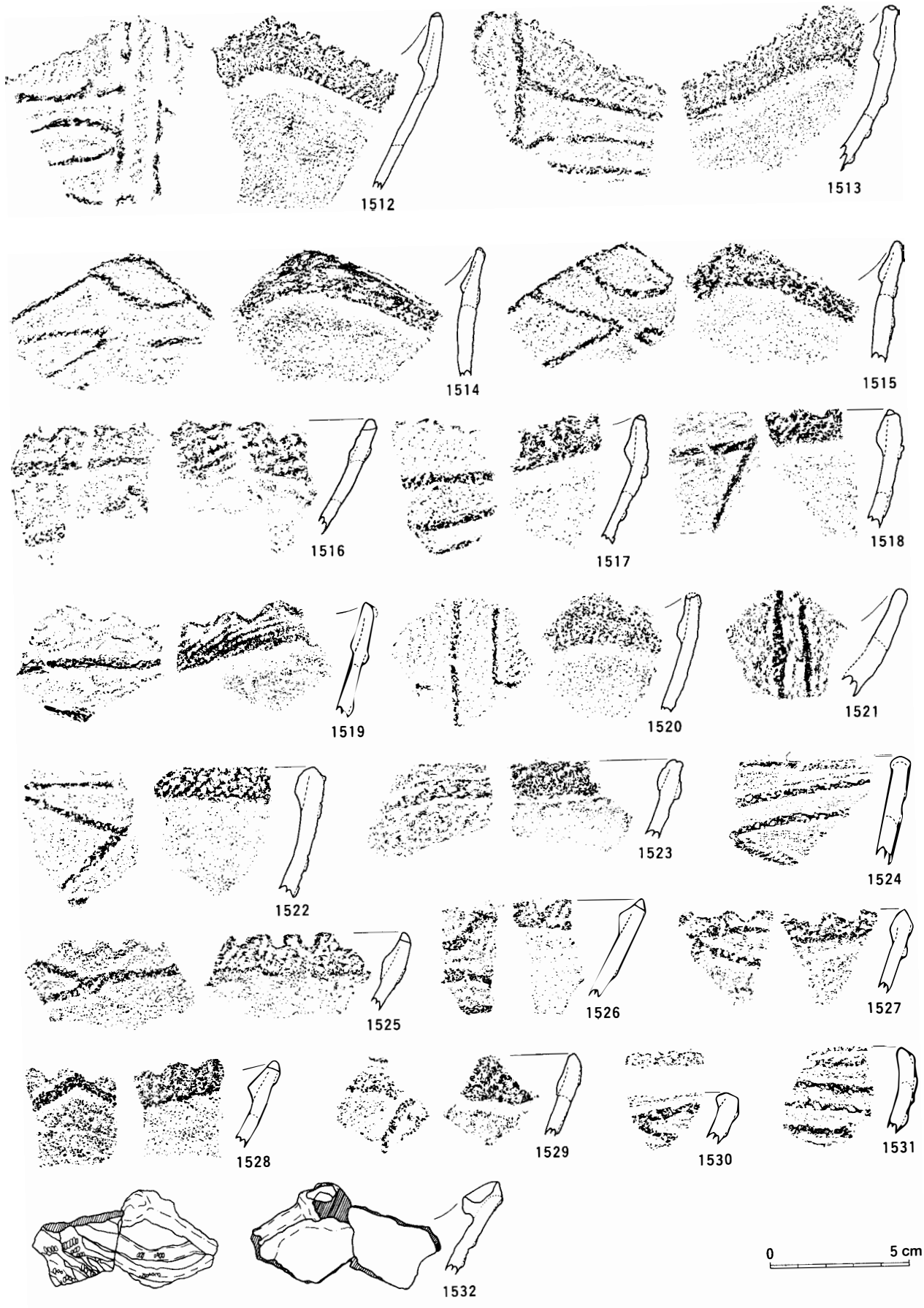
1512と1513は同一個体である。波状口縁で段状の内面肥厚が施され、端部には棒状工具の押圧による凹みがあり、さざ波状である。外面の文様には縦位の突帯が加わる点で他と異なる。

1514と1515も同一個体である。内面肥厚のある口縁部片だが、端部はつまみ上げられている。1516～1531も口縁部片である。波状のものは1517・1519・1520・1521・1528である。端部に凹みがあるものは1516～1519・1525～1528、内面肥厚されているものは1516～1520・1522・1523・1525～1530である。1532は同じく縄文突帯を有する口縁部片だが、波頂部に酒杯状突起を持つ。突帯は低くつぶれている。

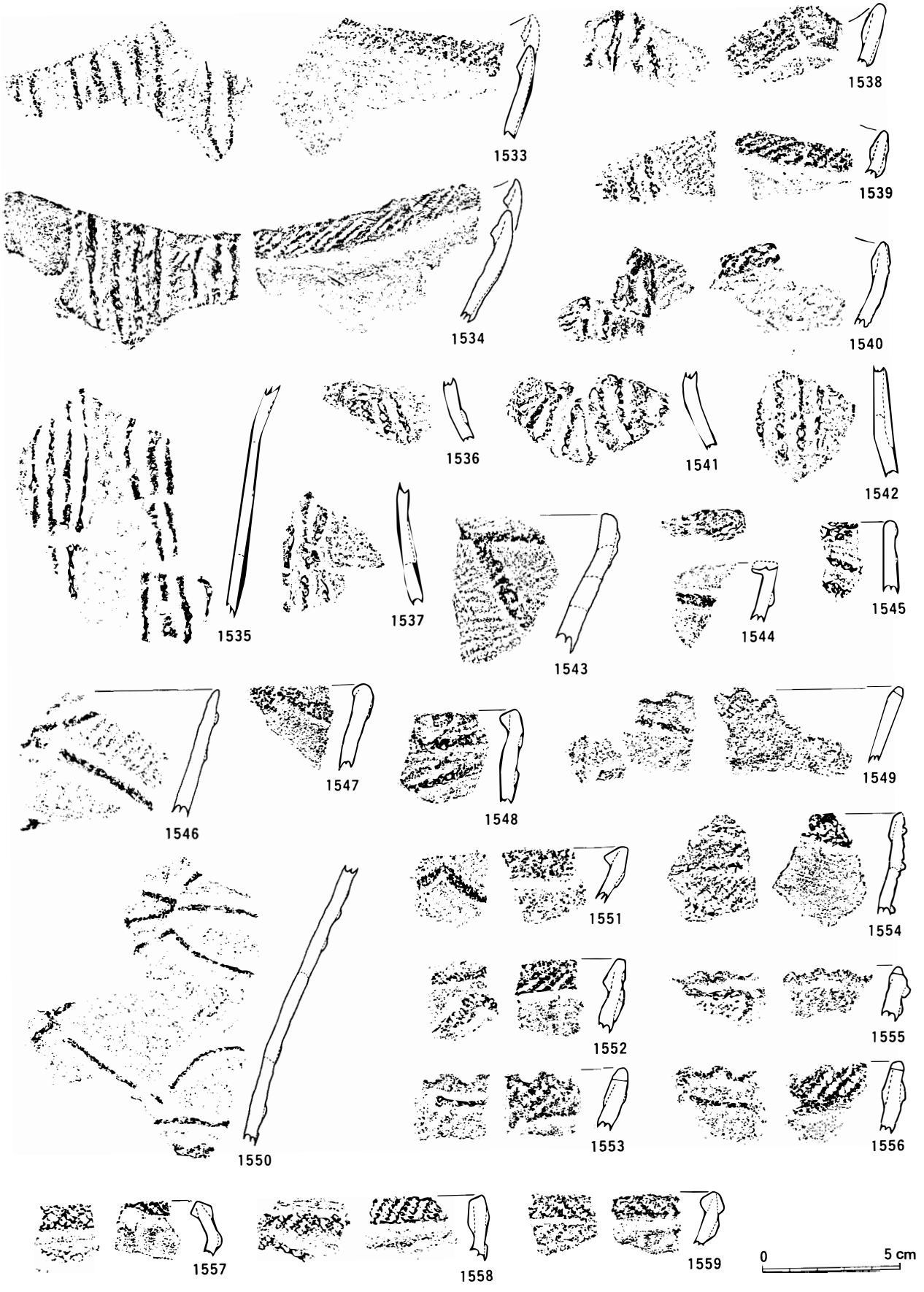
1533～1542は同一個体である。波状口縁で、内面肥厚され縄文が施されている。やや摩滅しているせいもあるが突帯は低い。４～５条の縦位の長い突帯を貼付している。胴部下半は不明だが、横位の



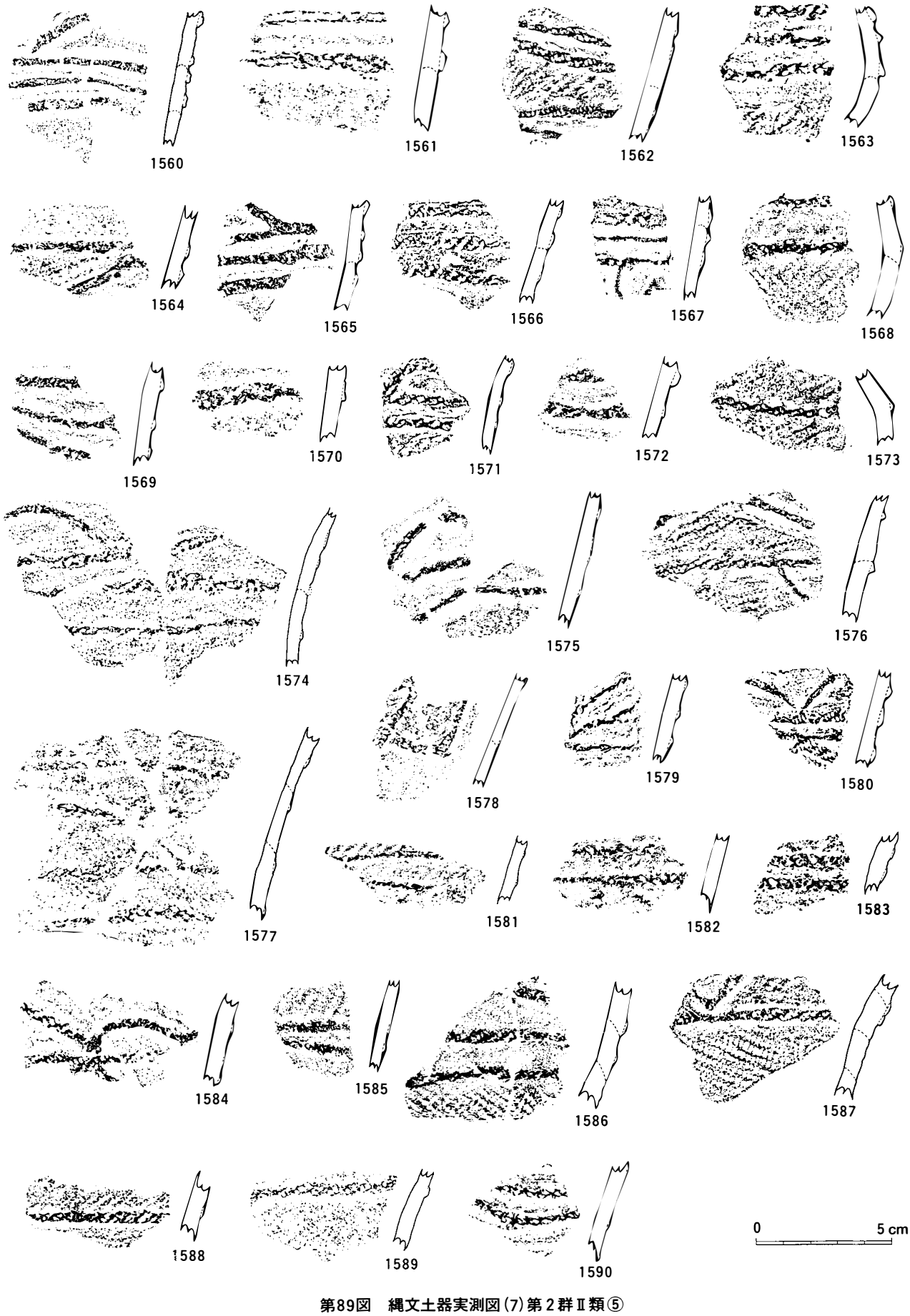
第86図　縄文土器実測図(4)第２群Ⅱ類②



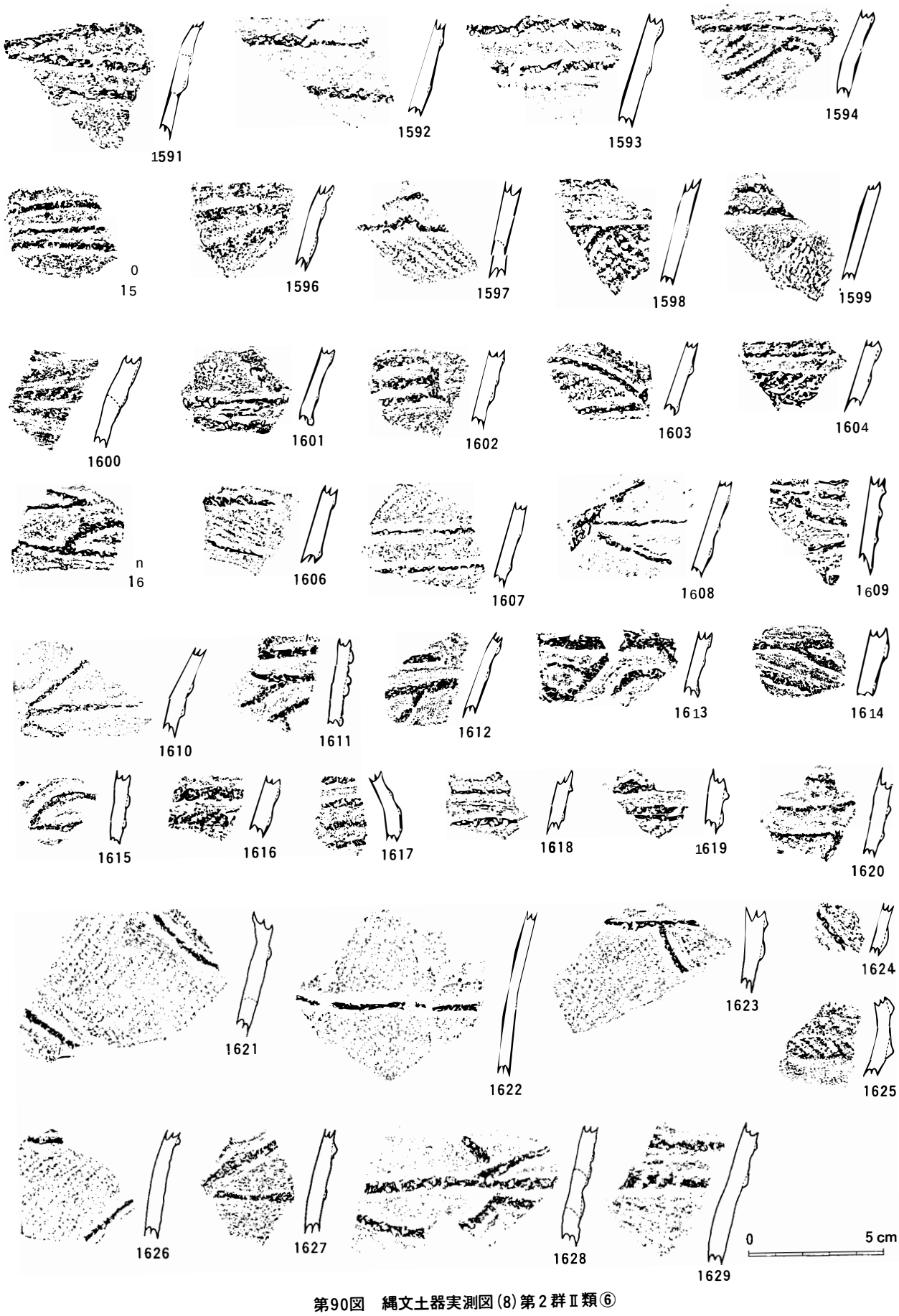
第87図　縄文土器実測図(5)第2群Ⅱ類③



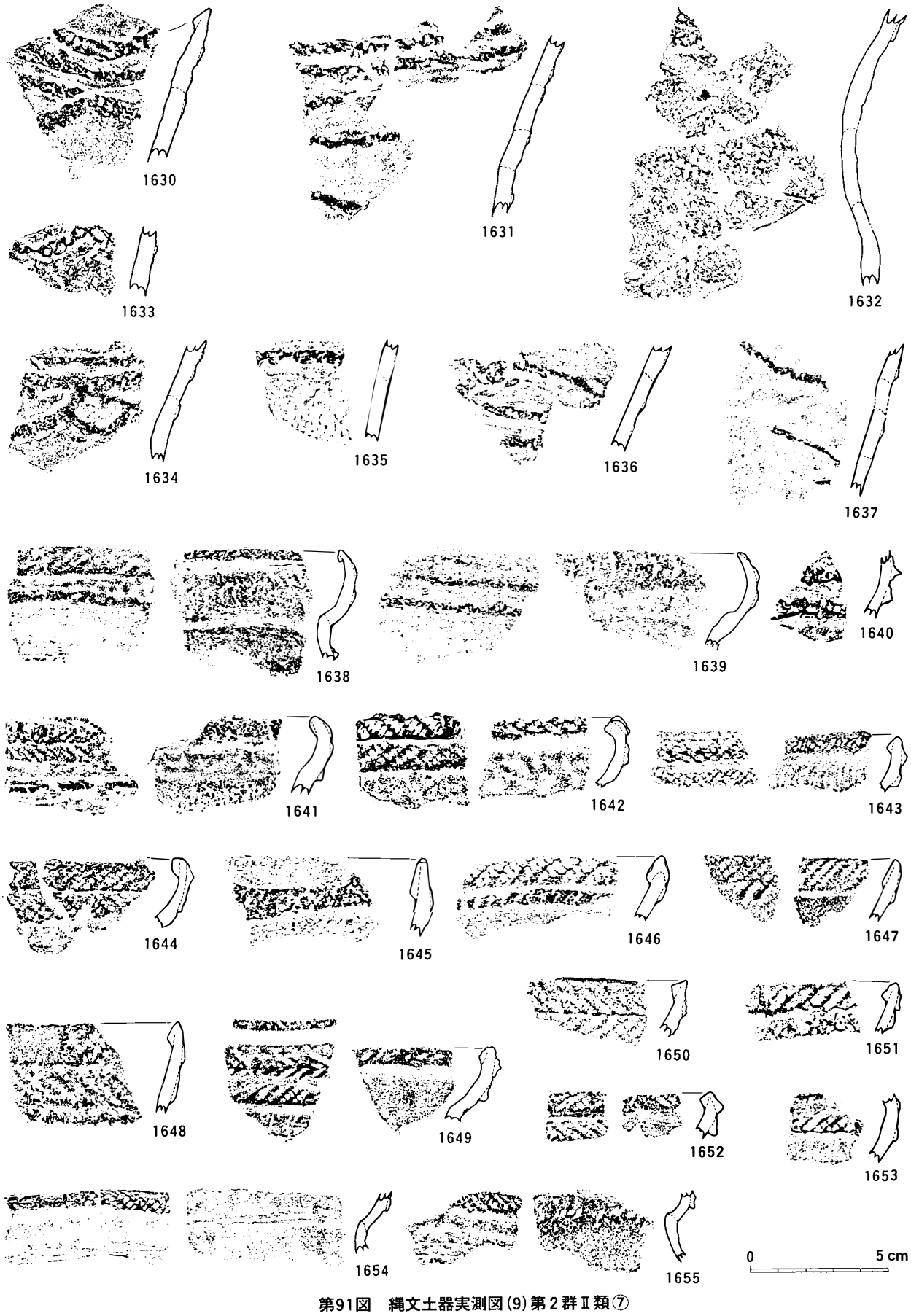
第88図　縄文土器実測図(6)第2群Ⅱ類④



第89図　縄文土器実測図(7)第２群Ⅱ類⑤



第90図　縄文土器実測図(8)第2群Ⅱ類⑥



第91図　縄文土器実測図(9)第2群Ⅱ類⑦

突帯が見あたらないという点において本遺跡では珍しい例である。ＳＫ06より出土している1401も同一個体と思われる。

1543～1549・1551～1559は口縁部片である。内面肥厚されているものが多い。

1550・1560～1629は胴部片である。いずれも小片で中には摩滅が激しく判別困難なものもある。文様構成は基本的に横位である。1550は1512と同一個体である可能性が高い。1550が1512の胴部であるとしたなら、口縁部の文様モチーフが胴部まで繰り返し施文されていることになる。1560と1565は同一個体と思われる。突帯がしっかりしており、断面が四角形を呈している。1561も同様である。1563の突帯は比較的高く摩滅がほとんどない。1586～1588は同一個体である。1621～1623・1626は同一個体で、突帯が細い。1630～1635は同一個体である。包含層中ではあるがまとまって出土した。接合はしないがそれぞれの破片から類推すると、波状口縁で内面肥厚され、胴部で少しくびれ下半でやや膨らみ、口縁部は外側へ直線的に開く器形を呈する。突帯は幅広で低い。胴部下半は縄文地のみである。

２ＩＩＡｃ

ｃはその他の縄文突帯を有するものを一括した。18点図示した。包含層からの出土ばかりである。主に口縁部の形状の違うものをまとめた。中には他類との判別が困難なものも含まれる。

1638～1653は口縁部片である。比較的短い口縁部でやや内湾する器形である。外側には縄文突帯が１～２条貼付られている。縄文突帯は幅広で低く器面にはりつくように施されている。1640・1653は端部が欠損しているので不明だが、1639以外は内面肥厚されている。1638・1639・1641は湾曲した部分の内側に連続する生爪痕が確認できる。1641の一番下の突帯は半截竹管状工具による成形の可能性もあるが不明である。1642の端部外側に短隆線と思われる貼付がある。２ＩＩＢｂに分類したものの中にもよく似たものがあるが、縄文突帯の様相がやや異なり、むしろ1644や1649に近い感じを呈しているのであえて本類に含めた。

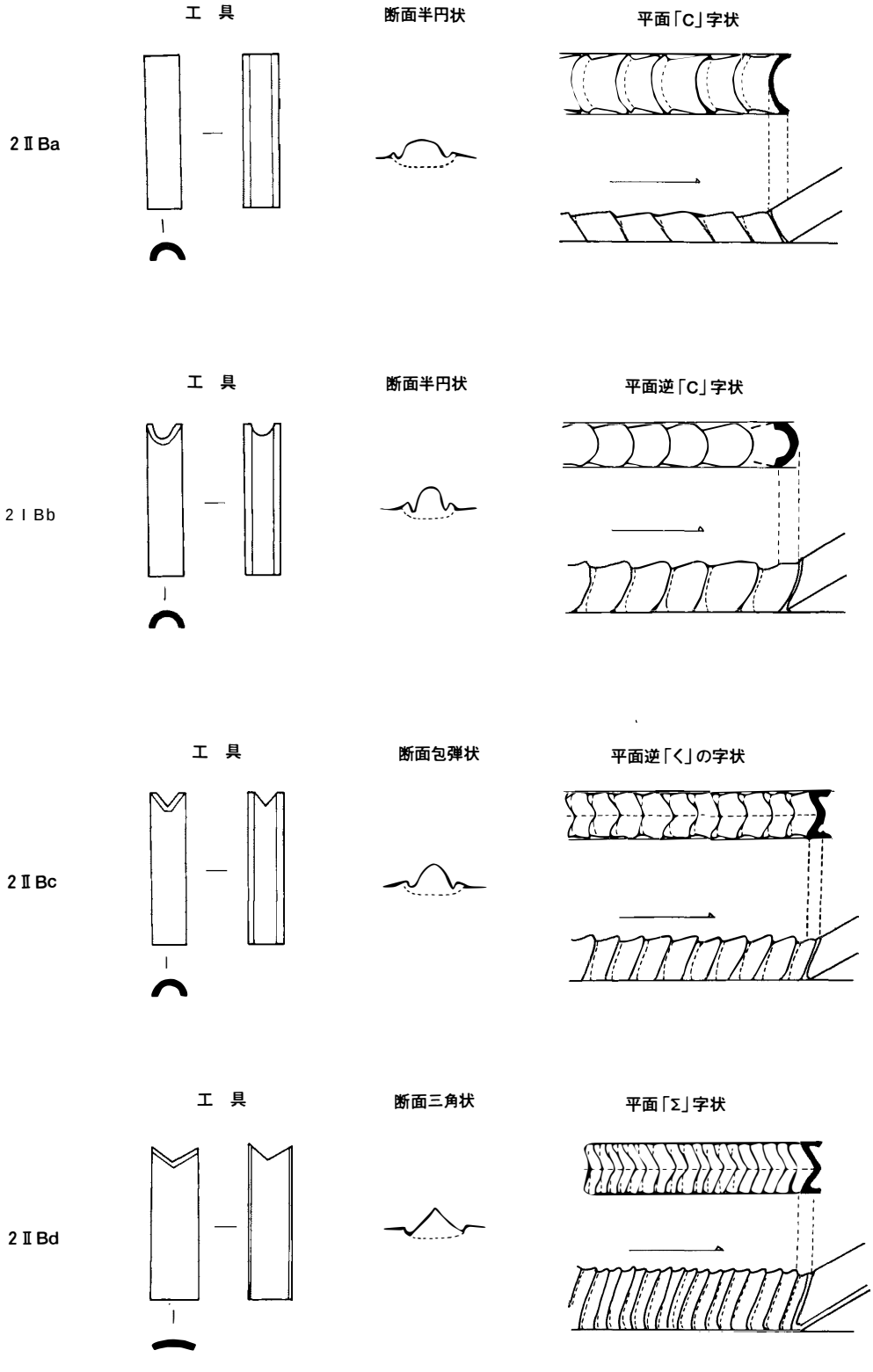
1654・1655は頸部である。口縁部にかけて湾曲する部分の内側に生爪痕が確認できる。

２ＩＩＢ

本類のＢはいわゆる特殊突帯を有するものをまとめた。本地点では最も出土量が多い部類に属する。そのため「特殊突帯」という概念で一括するのではなく、突帯の平断面形もしくは推定できる工具に焦点をあて細分を試みた。それが前に示したａ～ｅである。報告者の理解は特殊突帯ａはｂ・ｃを経てｄへと変化していくというものである。しかもその変化は極めて連続的であり、細分は困難な面もあると考えている。実際に細分していく上で、摩滅しておらず良好な状況で遺存しているものでも、どの分類に含めるか苦慮したものもあった。基本的には第92図に示したような平断面形の違いがみられるものの、それぞれの中間的な様相を示すものもいくつかあった。そうした土器をあえてどちらかの分類に含めてしまった点については報告者の意図が働いていることをあらかじめ明記しておく。詳細は以下個々に記す。

２ＩＩＢａ

175点図示した。遺構関係出土分75点、包含層出土分100点である。良好な状況のものも多いが、突



※本図は山岸洋一氏の案（山岸1996）を参考にして作成した

第92図　特殊突帯分類模式図

帯という器面より外側へ出ているという性格上、摩滅しているものも多い。本類では突帯上の施文である押し引きの平面形が「C」字状で断面形が半円形であるものを一括した。しかし判然としないものが多いため成果は上がっていないかもしれない。報告者の観察に基づき本類に含まれると思われるもののうち、特徴的なもののみ個々の状況に応じて説明を加えていくことにした。

1003～1005は胴部片ではみ出しがあるが、頸部片である1006にははみ出しがない。1003は縦位の突帯を持ち、やや粗めの押し引きがしっかりと施されている。それに比べ1004は押し引きが軽く施されているので、撫で引きのようにも見える。1006の突帯は摩滅しているが、突帯の両脇には工具で撫で引いた痕が認められる。

1020・1021は両者とも小片で詳細は不明だが、1020ははみ出しがなく、1021にははみ出しがある。

1035～1044は同一住居跡からの出土である。そのうち1035～1040は同一個体の可能性があり、どれも若干のはみ出しが見られる。1035～1039は口縁部片で、端部を内側へ向けるように短く内面肥厚し縄文を施している。突帯は縦位である。1041・1043はくびれた頸部に1条の横位突帯が貼付られているタイプである。1041～1043にははみ出しがあるが、1044はほとんどなく突帯も比較的細い。

1073～1084も同一住居跡からの出土である。1073・1075・1078・1079・1083は口縁部片、その他は胴部片である。1078は口縁部が短く立ち上がる器形である。端部にも押し引きが施され、胴部突帯の施文工具と同一ではないかと思われる。地文は羽状縄文である。突帯脇にははみ出しが見られ、押し引きの間隔もほぼ均等である。大変丁寧な作りである。この1078の突帯は、平面形が「C」字状で断面形が半円形を呈すという2IIBaの典型的な例である。

1084は胴部下半の破片で、文様モチーフは同心円文の可能性がある。第4地点SB01で出土している膨らんだ胴部を持つ個体と同じで、特殊突帯で主文様を構成し、一番下には文様帯の下限を示すように1条の縄文突帯が貼付られる。1084は突帯がやや摩滅してわかりにくい部分もあるが、押し引きの間隔も均等で基本的に丁寧な作りである。突帯脇にはやや多めのはみ出しがある。

1076にははみ出しがあり、1077ははみ出しがない。他の詳細は不明である。

1187・1188の押し引きはしっかりしたもので、器面に食い込むように引かれている。1187にははみ出しがあるが、1188はほとんどない。

1190・1191は突帯の幅が比較的狭く、脇のはみ出しが多い。押し引きの間隔もやや長めである。

1201は3条の突帯が接して貼付られている。押し引きの間隔は密であるが、使用している工具が肉厚な感じで、はみ出さずに突帯脇で押しつぶされている。1203は器壁がやや厚い。押し引きの間隔もかなり密で、他と様相を異にする。

1301の突帯は密に押し引かれ、つぶれた感じである。包含層より出土している1752～1755とよく似ている。突帯幅はやや細めではみ出しがない。平面形は「C」字状であるが、断面はつぶれているため、半円形より低い。その点では2IIBeに分類してもよい。1302は2条の突帯が見えるが、上の突帯は「C」字状だが、下の突帯の一部は逆「C」字状にも見える箇所がある。内面肥厚されたさざ波口縁である。1305は1041等と同じく頸部に1条の横位突帯を貼付するタイプである。突帯は高く盛り上がっている感じである。ややはみ出しが見られる。

1359は端部に短隆線を有し、外面に肥厚されたと思われる縄文帯がある。その下は無文帯で生爪痕がほぼ等間隔ではっきりと施されている。やや摩滅しているが、器形が変化する頸部近くに1条の横位突

帯が貼付られている。1360・1362～1364・1366も外面肥厚された縄文帯を有する。1360は摩滅しておりわかりにくい部分もあるが、外面に二段の縄文帯があり、その上に内面肥厚部分からまたがるように短隆線が１条貼付されている。外面縄文帯の下には少し離れて幅の広い縄文突帯が１条ある。短隆線はその断面等より２ⅡＢａの工具で撫で引かれていると思われる。1363～1366も同様である。1362は外面縄文帯の下に２条の突帯が貼付られている。２条の突帯上には刺突に近い押し引きがあり、その平面形は「Ｃ」字状である。また端部の内外面に細い粘土紐をそれぞれ１条ずつ貼付し密に押し引いている。その平面形も「Ｃ」字状で、同一工具である可能性もある。1367は比較的器壁が厚い。

1399はＳＫ03からの出土である。全周のほぼ３分の１ほどあり、胴部下半から底部を欠く。本類の中では器形および文様構成等がわかる貴重な資料である。口縁部はやや長めに内面肥厚され、縄文が施されている。端部には棒状工具の押圧による凹みが施されさざ波状を呈している。端部はごく一部しか遺存していないため、凹みが連続しているのか、一定の単位で施されているのかは不明である。やや膨らんだ胴部から頸部でいったんくびれ、口縁端部に向かって湾曲しながら開いていく器形を呈する。主文様は平面形が「Ｃ」字状の押し引き突帯で構成される。口縁端部の外面やや下に１条の横位突帯が貼付られているが、突帯上の施文は貝殻背圧痕である。くびれた頸部には１条の突帯があり、貝殻背圧痕突帯との間に眼鏡状のモチーフが連続して描かれている。頸部以下でも２組描かれている。胴部下半には文様帯の下限を示すように横位の突帯が２条あるが、それらの突帯は押し引きではなく、指頭成形によるものである可能性がある。地文は縄文である。

1404・1405は胴部片である。1404はあまり摩滅しておらず良好な状況である。突帯脇にはみ出しはなく、押し引きも等間隔で丁寧に作られている。平面「Ｃ」字状、断面半円状の好例と言える。1405はやや摩滅しているが、押し引きは確認できる。ただ一番上の突帯はやや逆「Ｃ」字状に近い様相もある。下２条は「Ｃ」字状である。両者は後述する1407と共伴関係にある。併行関係についての記述はここでは避けるが、検討の余地はあると思われる。

1422は頸部～胴部に胴部にかけての破片である。縦位の突帯には、刺突に近い押し引きが器面に食い込むように引かれている。押し引き前に貼付られた粘土紐はかなり細く工具幅の方が広い。1425は比較的密に押し引かれた突帯を持つ胴部片である。突帯上の押し引きの平面形は「Ｃ」字状であるが、逆「Ｃ」字状に近い感じもみられる。断面も高くはみ出しもほとんどない。1426は口縁部外側に横位２条の突帯を持つ破片である。突帯は低く貼付られた粘土紐も細い。工具幅は広く、突帯脇には溝状に押し引きの痕が器面に残っている。口縁端部内側にも押し引きが施されているが、その幅は狭く、外面の突帯に使用したものとは別である可能性が高い。

1656～1755は包含層からの出土である。突帯幅、押し引き・撫で引き、押し引き間隔の粗密、粘土紐幅と工具幅の関係、つまり押し引きまたは撫で引きの際に生じた突帯脇のはみ出しの有無等に着目し、さらなる細分化を試みた。しかし、判断基準は数値などを設定したわけではなく、視覚的なものであるがゆえにあいまいさは払拭できないことをあらかじめ記しておきたい。

1656～1678は、突帯が太く押し引きが粗いもので、はみ出しがほとんどない。1656・1657は同一個体である。押し引きは器面に食い込むようにしっかりと施されている。ほどんど摩滅しておらず突帯の形状がよく観察できる。本類の突帯を考える上で好資料である。1658・1659の突帯は幅広でやや低めである。1658には若干のはみ出しが見られる箇所もある。1659のくびれた頸部に貼付られた突帯の

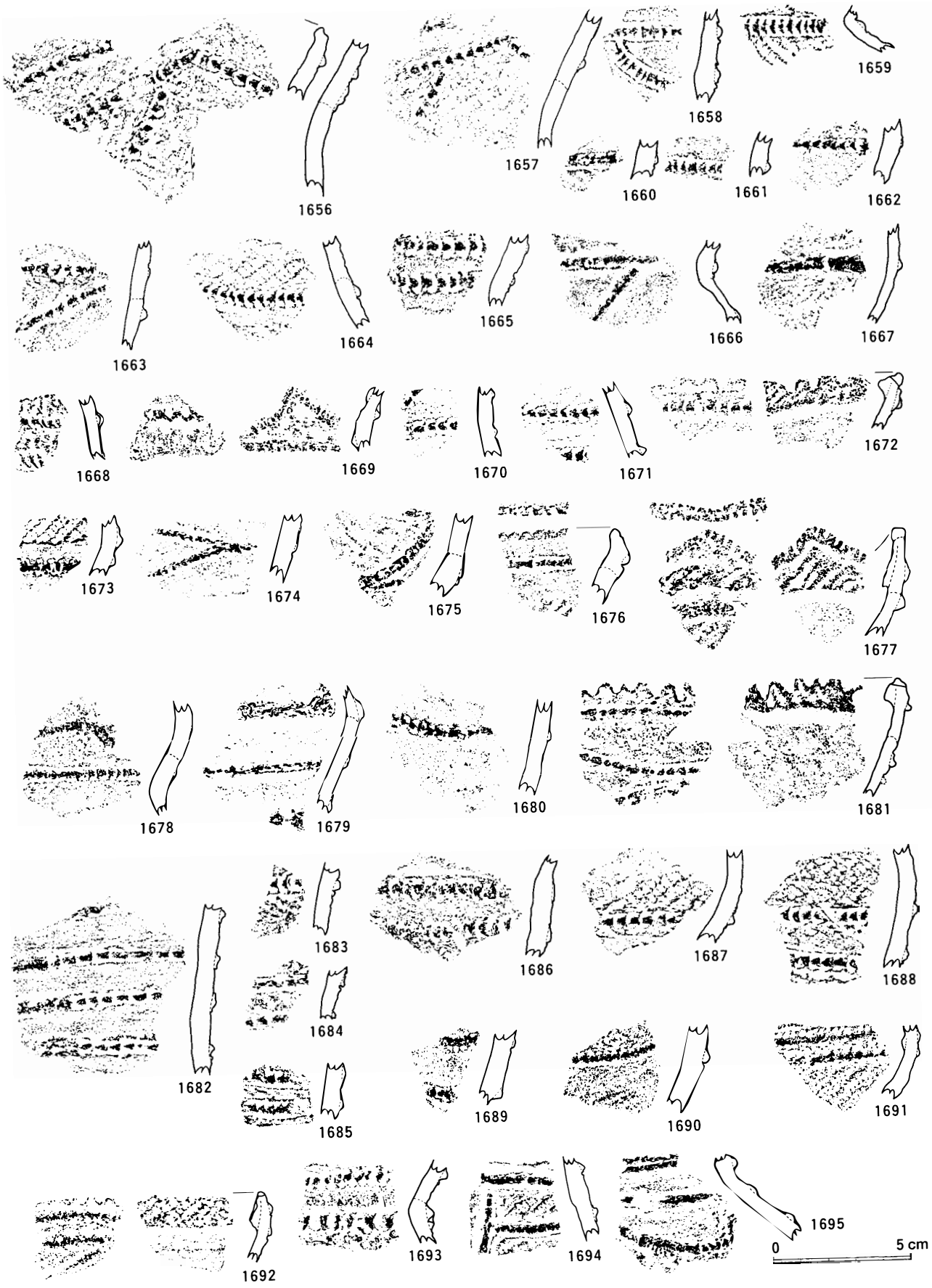
押し引きにはまったくはみ出しがなく、間隔も均等で非常に丁寧な作りである。1664・1665もきちんと押し引きが施され、工具先端の状況がよくわかる。1669は端部を欠損している口縁部である。内面肥厚した端部内側に粘土紐を貼付し押し引いている。さらに内面肥厚部下端にも粘土紐を貼付し押し引きを施している。本遺跡では他に類例を見ない珍しい例である。外面には刻みのある突帯が1条見えるだけであるが、端部は半截竹管状工具で押し引かれている。1676は端部をつまみ上げて内側に向け、押し引きを施している口縁部片である。1677は波状の口縁部片である。内面肥厚されている部分は比較的長い。端部内外面には粘土紐が貼付され、半截竹管状工具による押し引きがなされている。外面に2条見える突帯は上が縄文突帯、下が特殊突帯である。

1679～1695は、突帯が太く押し引きが粗いもので、はみ出しがある。1681は短く内面肥厚した部分に縄文を施した口縁部片である。端部はさざ波状を呈している。外面には2条の突帯がある。突帯先端がやや摩滅しているので正確さに欠けるが、下の突帯の平面形はやや逆「C」字状に近い。1682は横位に貼付られた3条の突帯を持つ胴部片である。突帯上の押し引きは比較的間隔が広い。平面形が「C」字状、断面形が半円状で本類の典型的な例と言える。1687・1688も好例である。1693は頸部片で、くびれ部の突帯上には、突帯を切断するような深い刺突が施されている。その突帯から胴部へ向かい縦位に突帯が貼付られている。頸部の突帯以外は特殊突帯である。頸部上にある横位1条の突帯をみると、やや逆「C」字状に近く、工具の先端に若干の加工が施されているようにも見える。1694の突帯はやや高めで、押し引きは浅い。1695は摩滅しているので詳細は不明だが、撫で引きの可能性もある。

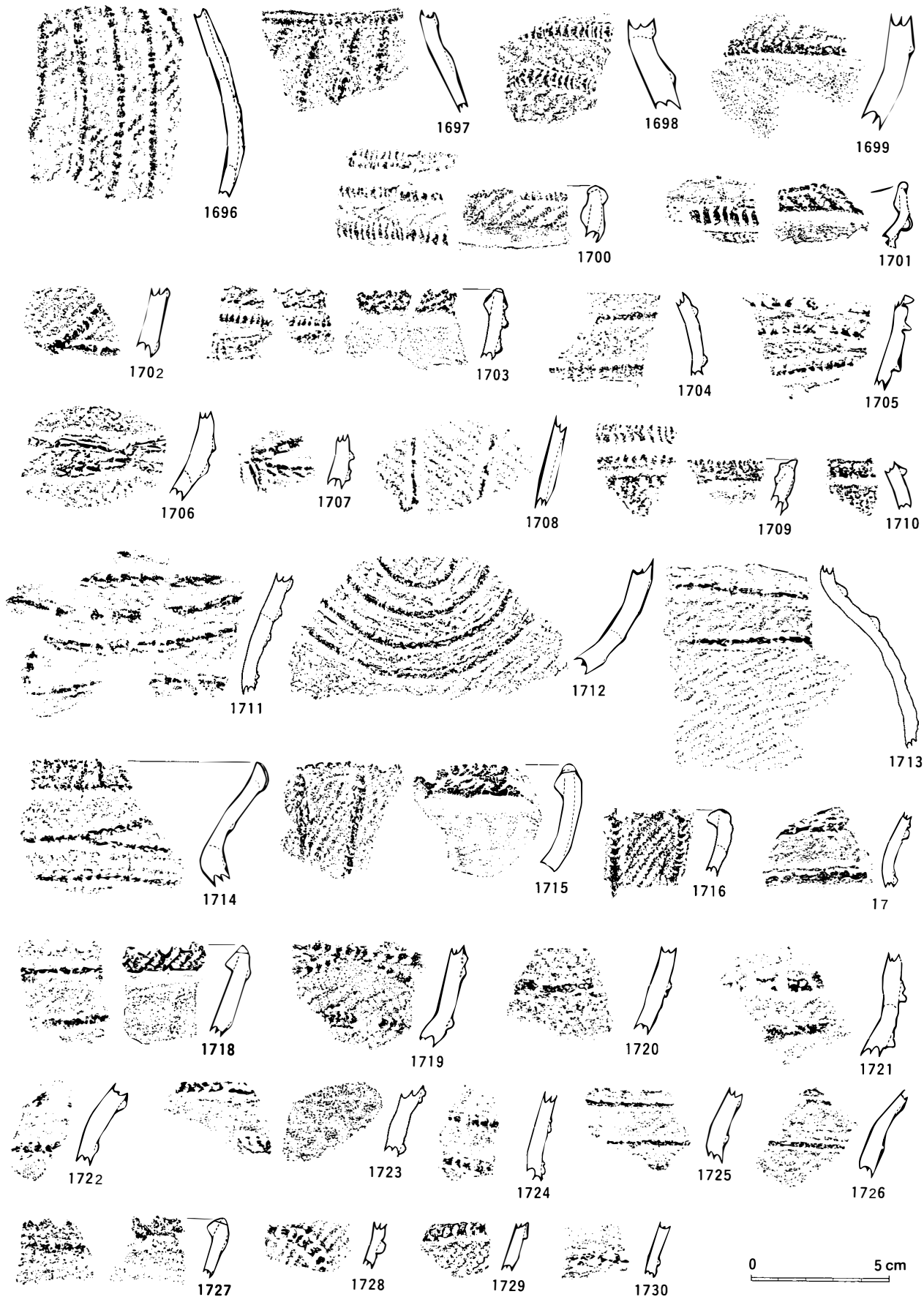
1696～1704は、突帯が太く押し引きが密なもので、はみ出しがほとんどない。1696は張り出した胴部片で、弧状モチーフが描かれている。モチーフ自体は特殊突帯文土器によく見られるものである。縦位に貼付られた突帯上には、押し引きが上から下に向かって引かれている。押し引きの間隔は上が密で、下へ行くほど粗になる。平面形も上部では「C」字状であるのに対して、下部では逆「C」字状～逆「く」の字状に近い形へと変化している。これは押し引き時の工具と突帯の角度の違いから生じる変化であろうと思われる。本例の場合でいえば、使用している工具は2IIBcないしは2IIBdのもので、上部では突帯に対してほぼ垂直方向から、下部では右斜め方向から押し引いたために、同一突帯内で前述のような差異が認められる形状になったと考えられる。本例は工具から分類するのであれば2IIBcか2IIBdに含める方が妥当であるかもしれない。1700は端部内外面に押し引きがある口縁部片である。口縁下外面に1条の突帯があるが、断面はかなり低く扁平である。しかし端部に引かれている押し引きは断面が半円状を呈している。1703は短く内面肥厚した口縁部片である。外面の突帯は押し引きの平面形が「C」字状である部分とほぼ直線的な部分がある。1696と同様の理由であろうと思われる。

1705・1708～1710は、突帯が細く押し引きが粗いもので、はみ出しがほとんどない。1705の突帯は、断面が高い上に押し引きで分断されているので、ワニの背中のようにごつごつした感じである。一番上の突帯が最も高い。突帯幅は狭くはみ出しもない。1709は端部の押し引きの断面が半円状である。

1706・1707・1711～1739は、突帯が細く押し引きが粗いもので、はみ出しがある。1706のはみ出しはとても多く、工具の内径つまり突帯幅と同じぐらい広さではみ出している。1707のはみ出しも多い。1707の押し引きは少し逆「C」字状に近い感じに見える部分もある。工具先端に若干の加工が施されている可能性もある。やや摩滅しているが1711も同様である。1712は撫で引きかもしれない。1716の



第93図　縄文土器実測図(10)第2群Ⅱ類⑧



第94図　縄文土器実測図(11)第2群Ⅱ類⑨

縦位の突帯は下から押し引かれている。1719の突帯はやや摩滅し確認しにくいが、平面形は「Ｃ」字状である。1724の突帯は本類の中ではやや太く感じるが、工具が肉厚で突帯脇に生じる凹みの幅が太い。はみ出しはあるが少ない。1725は撫で引きのように見えるが、突帯脇の凹みから押し引きと判別できる。1731は波状口縁で内面肥厚部分が長めである。内外面の端部には刺突に近い押し引きが施されている。1735の押し引きの間隔は比較的長い。

1740～1742は、突帯が細く押し引きが密なもので、はみ出しがある。1740の突帯の断面は高い。はみ出しはあるが決して多い方ではなくささやかなものである。1742はくびれた頸部に１条の突帯を貼付するタイプである。

1743～1746は、突帯が細く押し引きが密なもので、はみ出しがほとんどない。いずれも突帯の断面は高い方であるが、特に1743・1744は高く、1705同様にワニの背中のようである。

1747～1750は、突帯が細く撫で引きで、はみ出しがある。1749は端部を欠いているが、外面肥厚した縄文帯を持つ口縁部片である。口縁下の突帯は撫で引かれている。

1751は、突帯が太く撫で引きで、はみ出しがほとんどない。

1752～1755は、突帯が細く押し引きが密で、はみ出しがほとんどないもののうち、突帯がつぶれてしまっているように見えるものである。1753は鋸歯状文である。

２ＩＩＢｂ

133点図示した。突帯上の押し引きの平面形が逆「Ｃ」字状で、断面形が半円形を呈するものを一括した。先行した２ＩＩＢａや２ＩＩＢｃと混乱が生じている可能性もあるが、できる限り具体的な状況を個々に記していくことにした。

1045はくびれた頸部に突帯を貼付するタイプである。押し引きは右から左へ施されている。工具は若干肉厚な感じではあるが、押し引きの平面形から判断すると先端がえぐれている感じである。1046・1048はやや摩滅しているが、突帯側縁に残る痕跡から本類であることがうかがえる。

1085・1086は突帯頂部がやや摩滅しており、最初押し引きか撫で引きかの判別に苦しんだ。しかしわずかに残る押し引きの痕跡から本類であると判断した。1087は同心円文の中心部である。

1107～1109・1112～1114も同様でわずかに残る痕跡から判断した。1111も突帯頂部は摩滅しているが、押し引きが比較的深いために平面でも確認できた。1110は口縁部片である。端部に粘土紐を貼付し肥厚させている。面取りし縄文が施された端部はやや内側に向けられている。外面の押し引きは一部はがれてしまっているが、残存している部分の平断面形から本類と判断した。

1156～1163は口縁部片である。1156～1159は端部を肥厚させ内側に向けている。縄文も施されている。1156は内側に向けられた端部に縄文を施しており、外面肥厚もしている。くびれた頸部以下には３条の突帯が見えるが、撫で引き突帯である。1159の突帯は高く断面形は砲弾状に近い。1160～1162は内面肥厚されている。1160の端部には棒状工具の押圧による凹みが見られる。外面に貼付られた下の突帯には貝殻背圧痕が施されている。上の突帯の断面は高い。1163は外面に二段の縄文帯がある。

1166～1168は摩滅している。円形のモチーフが描かれた頸部～胴部片である。突帯幅は狭くはみ出しがある。1169・1170も同様なモチーフを持つ胴部片である。ともに突帯幅は狭くはみ出しがある。

1171は頸部片で外面肥厚された縄文帯を持つ。1172～1178・1180～1182は胴部片である。1180以外

第95図　縄文土器実測図(12)第2群Ⅱ類⑩

は突帯幅が細くはみ出しがある。1180はやや太めの突帯ではみ出しはほとんどない。

1307～1312・1314～1317は胴部片である。1307～1311は主に円形状・弧状のモチーフが描かれている破片である。突帯上の押し引きは密で、程度の差はあるがいずれもはみ出しがある。1313はくびれた頸部である。1315の突帯は高い。

1371～1378は胴部片である。1376・1377は同一個体である。灰黄褐～褐灰色の器壁に橙色の突帯が貼付られている。1372の突帯の断面は高く、平面では逆「Ｃ」字形が確認できる。さらにはっきりしているのは1373で、上の突帯の平面形は逆「Ｃ」字状～逆「く」の字状である。1378は摩滅しており詳細は不明だが、張り出した胴部に施された同心円文の中心であろうと思われる。

1756～1823は包含層からの出土である。２ＩＩＢａに準じて細分した。

1756～1770は、突帯が太く押し引きが粗いもので、はみ出しがある。1756は若干摩滅しているが、比較的逆「Ｃ」字状がわかる資料である。押し引きの間隔がさほど粗くなく突帯も比較的高いので、瘤状に見える。張り出した胴部片である。胴部に描かれるモチーフは1757・1758同様に弧状である。1759も押し引きの様子がよくわかるものだが、かなり逆「く」の字状に近くなってきている。1761はくびれた頸部に刺突が施された横位突帯を持つタイプである。1762・1764は口縁部片でともに内面肥厚されているが、1762は短く内側へ突きだし気味である。1764の外面に貼付られた上の突帯はやや幅広の「Ｃ」字状刺突が施されている。1767の突帯は比較的高い。

1771～1784は、突帯が太く押し引きが粗いもので、はみ出しがほとんどない。1771～1779は同一個体である。1773・1775～1777は緩やかに波状を描く口縁部である。内面肥厚した後に波頂部に楕円状突起を貼付している様子が、1776からよくわかる。接合はできなかったが、口縁部の1773から1774や1778の頸部へ、さらにその下に1779の胴部が続くと考えられる。

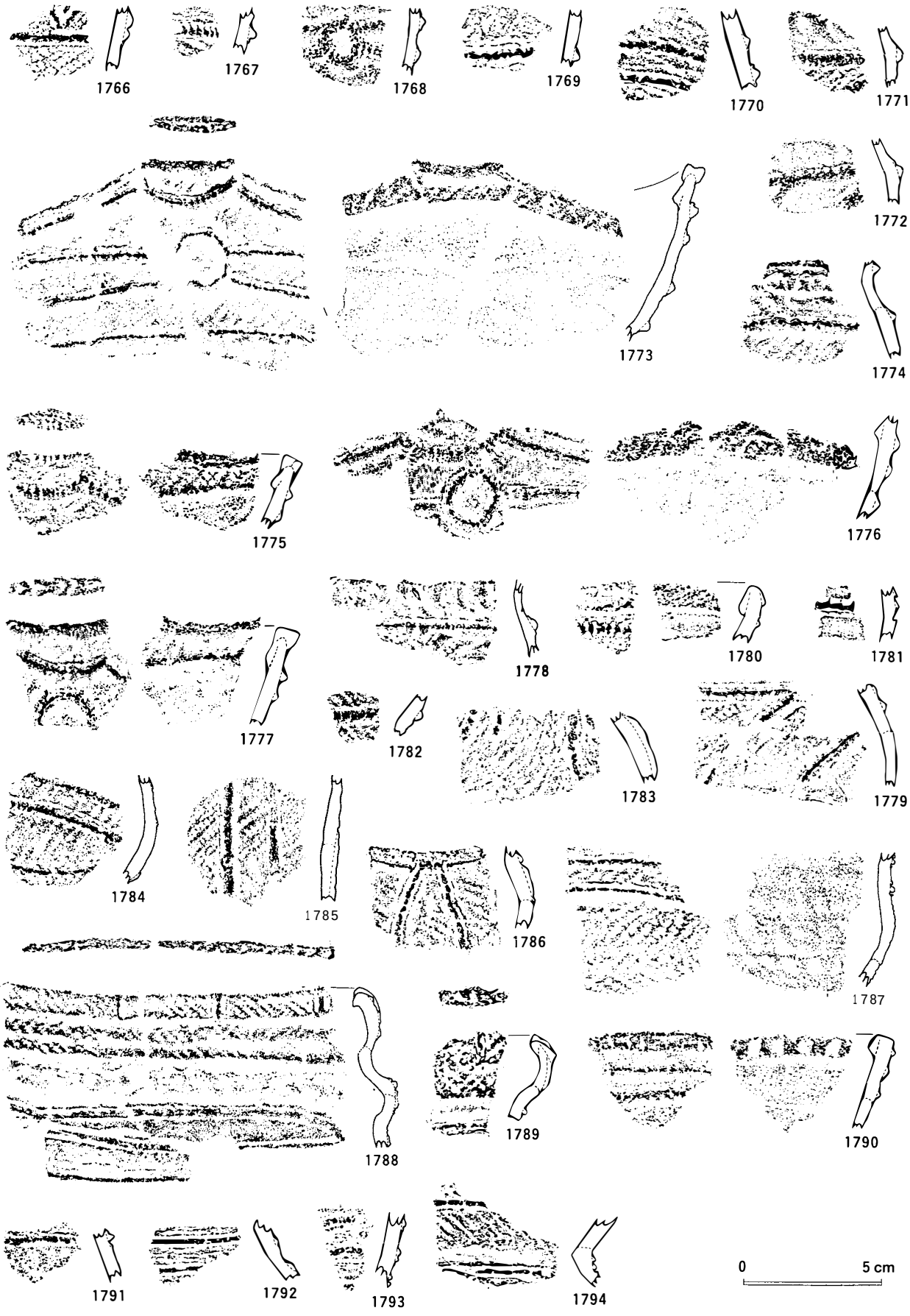
1785は２条の縦位突帯を持つ胴部片である。摩滅してしまっているが、突帯は太く撫で引きで、はみ出しはほとんどない。

1786～1800は、突帯が細く押し引きが粗いもので、はみ出しがある。1788は二段に湾曲した口縁部である。本遺跡では他に例を見ない。端部を内側に向け面取りし縄文を施している。外面にも縄文帯を持つ。口縁下のくびれ部は無文である。短隆線を垂下している。1789も似ているが、二段になっているかどうかは不明である。1790も口縁部である。1492と同様に内面肥厚した上に刺突が施されている。一見両者は非常によく似ているが、よく観察すると1790は突帯上に押し引きと思われる突帯の分断が見られる。しかしやや摩滅しているので正確さに欠ける点はある。1796は緩やかに外反した胴部片である。押し引きの平面形はやや崩れ気味だが、逆「く」の字状に近い。

1801～1807は、突帯が細く押し引きが粗いもので、はみ出しがほとんどない。その中でも1806やや幅広で、突帯は低くつぶれた感じである。平面形は「Ｃ」字状にも近く過渡的な存在の可能性もある。

1808は摩滅しているが、突帯は細く押し引きは密で、はみ出しがほとんどない胴部片である。

1809～1814と1816～1822は口縁部外面に貼付られた細い短隆線上を撫で引いている。前者にははみ出しがあり、後者にははみ出しがない。いずれも端部を内側に向け縄文を施している。外面に短隆線や縄文突帯・特殊突帯を持つ。２ＩＩＡｃに分類した口縁部片の多くとよく似ており、ただ単に短隆線の有無の違いにすぎない可能性もある。1814は外側へ突き出した波状口縁の波頂部で、口縁部が上から見ると四角形になっているタイプではないかと思われる。1815・1823は撫で引き突帯を持つ胴部片



第96図　縄文土器実測図(13)第2群Ⅱ類⑪

である。

２ＩＩＢｃ

210点図示した。本類に含めた土器群は２ＩＩＢａや２ＩＩＢｂに比べて突帯の断面が高く、半円状より縦に長い砲弾状で、突帯中央部に緩やかな稜ができている。平面形も２ＩＩＢｂよりやや直線的になり、逆「Ｃ」字状から逆「く」の字状へと変化し、いわゆる「Σ」字状に近づきつつある。前述したように２ＩＩＢｂ～２ＩＩＢｄへの変化は連続的であり、典型的な例は示せても明確な基準を定めることは不可能である。従って他者の判断によると２ＩＩＢｂもしくは２ＩＩＢｄに含められるようなものも本類に属している可能性もある。

1007～1009・1022は同一個体である。1008・1022に突帯はないが、1007の胴部片であることが明らかであるため、本類に含めた。1007は受け口状の口縁部からやや膨らみかけた胴部までの破片である。つまみ上げられた端部外側に、ほぼ等間隔に短隆線を垂下させている。口縁部は約３分の２遺存しているが、欠損箇所があるために単位は不明である。内湾した口縁部から頸部でくびれ、胴部が膨らむ器形を呈する。胴部下半は欠損しているため詳細は不明だが、膨らんだ胴部は底部に向けて収束し、底部は平底であると思われる。口縁部外面には縄文が施されるが、頸部は無文になり２条の突帯が貼付られている。下の突帯はその下にＵ字状に描かれた突帯とつながっている。突帯の押し引きの平面形は逆「く」の字状で、１つ１つの単位はハート形にも見える。摩滅しているせいもあるが突帯の断面はあまり高く感じない。受け口状になった口縁部の内面下部にはほぼ連続する生爪痕がある。外面にもＵ字状文付近にある。胴部の地文は羽状縄文である。器壁は薄く軽い感じがする。この個体は後述する1014その他の東日本系土器とＳＢ01より渾然一体となって出土した。床面からではなく埋土からの出土ではあるが、調査者の所見では極めて同時性が高いと考えられる。今後検討を要する。

1049は胴部片である。押し引きは器面に食い込むようにしっかりと引かれている。断面はやや高めである。突帯は細めではみ出しがある。1089も同様である。

1115・1116は胴部片である。1116は逆「く」の字がはっきりしており、矢羽根状に見える。

1204～1211・1213～1217は同一個体である。接合はできなかったが口縁部から胴部下半までの個体である。口縁端部はつまみ上げられ、棒状工具の押圧によりさざ波状を呈している。また内面肥厚され縄文も施されている。膨らんだ胴部から頸部でいったんくびれ、湾曲しながら端部に向かって立ち上がる器形を呈する。くびれた頸部には１条の横位突帯が貼付られている。文様は上に向かって開いた弧状文が口縁部から胴部にかけて幾重にも描かれている。突帯は比較的細めで、断面は高い。押し引きの間隔はほぼ均等で丁寧に成形されている。はみ出しはやや多めである。器壁は薄目で繊細な感じを与える。ＳＫ03より出土している1399に通じるものがある。

1219～1221・1224は口縁部片である。1220はまるめた口縁端部に楕円状突起が貼付られている。突起の両端部には密な押し引きが施されている。1221は波状口縁である。まるめた端部の内外面には粘土紐が貼付られ押し引きが施されている。外面にも３条の突帯があったようであるが、はがれていたり摩滅していたりするので、詳細は不明である。1224は外面肥厚された縄文帯を持つ。

1222も1221同様に突帯がはがれている。しかし遺存している部分は良好で突帯の形状がよくわかる。押し引きは上から下へ向かってほぼ等間隔にきちんと引かれている。少しはみ出しがある。突帯の平

面形は逆「く」の字状で、断面は高く中央部に緩やかな稜ができている。そうした点からすると、文様構成や押し引きの平面形から似ていると思われた1696とは一線を画する。

1225～1242は胴部および頸部片である。1225以外は細い突帯ではみ出しがある。1225の突帯はやや太めだが、平面で逆「く」の字状がよくわかる資料である。

1303・1322・1323は内面肥厚された口縁部片である。1318～1321は胴部および頸部片であるが、小片のため詳細不明である。

1406は張り出した胴部下半の破片である。比較的断面の高い突帯で円形もしくは弧状に文様モチーフを描き出している。下2条は幅広の縄文突帯である。このように1個体内に2種類の突帯を持つ張り出した胴部片は他にもいくつか出土している。共通する点は、文様帯の下限を示すと思われる横位1～2条の突帯は、主文様を構成する突帯とは別技法で施文されているということである。主文様は特殊突帯であるが、下限を示す突帯は縄文突帯であったり、指頭成形突帯であったりする。また本例は1404・1405の記述でも若干ふれたが、後述する東日本系土器である1407と一緒に出土している。出土地はＳＢ06近くの風倒木痕の黒褐色土中である。明確な遺構に伴うものではないが、同時性が高い可能性がある。

1427・1429は胴部片、1428は口縁部片である。1428は端部がめくれあがるように外反している。面取りした端部から内面上部には縄文が施され、さらに楕円状突起が貼付られている。突起の両端部には押し引きが施されている。

1824～1973は包含層からの出土である。２ⅡＢａに準じて細分を試みたが、多くの突帯が細めで、しかも押し引きの間隔は比較的密である。それ故にあえて細分せずに個々に説明を加えることにした。

1824～1892・1894・1909～1917・1923～1947・1952～1956は突帯脇にはみ出しがある。

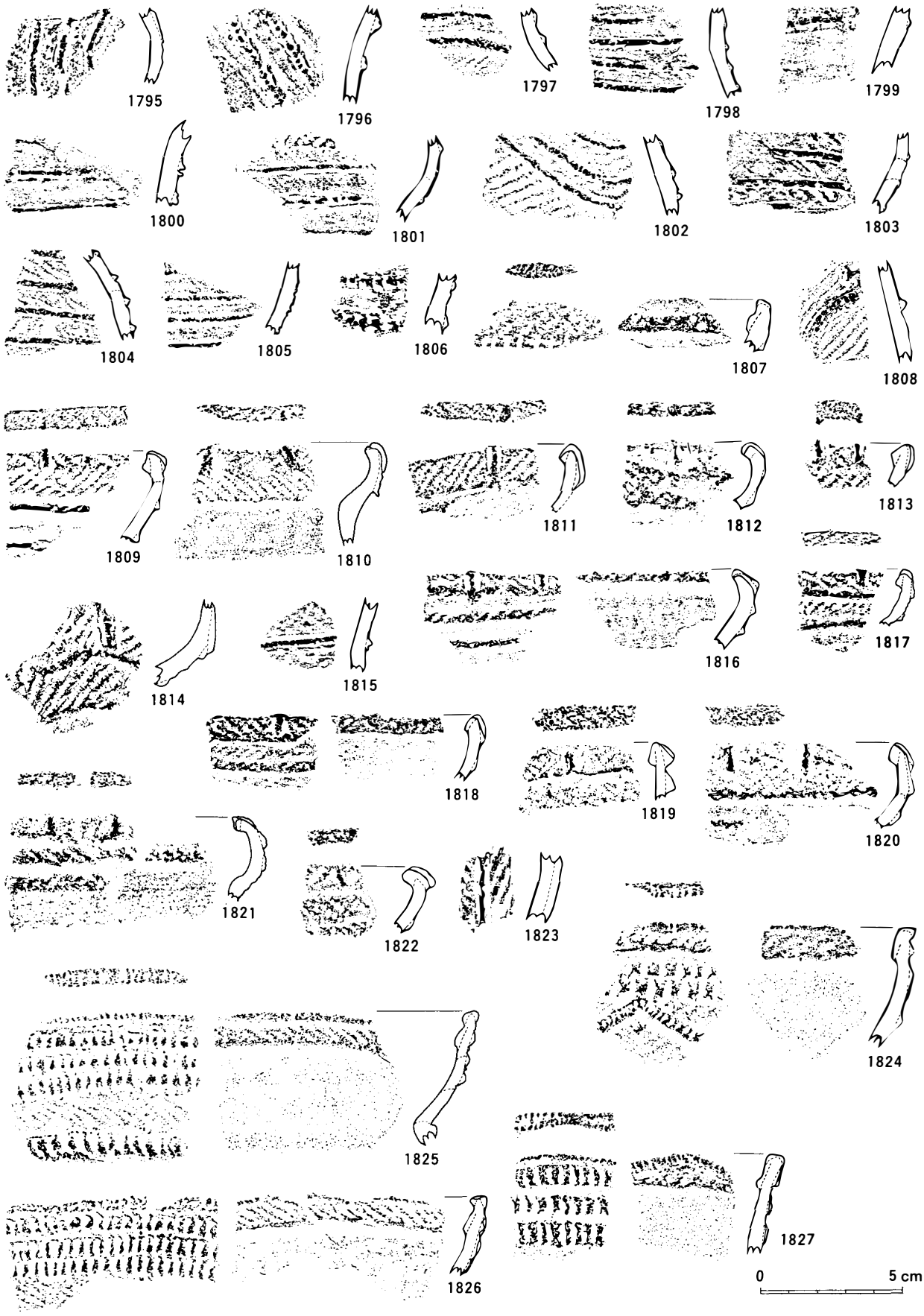
1824～1829・1831は内面肥厚し細い粘土紐を端部の内外に貼付し、押し引きを施している口縁部片である。1834も端部内側を欠損しているが、同様であると思われる。特に1825～1829は外面に貼付られた突帯の感じも似ており、中でも1825と1826は同一個体である可能性が高い。外面の突帯はやや幅広で、押し引きの平面形が「Ｃ」字状で断面は半円形である。その点からいえば２ⅡＢａに属することになるが、端部の押し引きは逆「く」の字状であるので、本類に含めることにした。口縁部外面には3条、くびれた頸部には1条の押し引き突帯がある。

1827～1829も同様な特徴を持つが、決定的に違うのは外面の突帯上の施文で、押し引きというよりはむしろ刺突に近い。特に1827は押し引きの平面形が「Ｃ」字状でも逆「く」の字状でもなく、ほぼ直線に近い。工具も半截竹管状ではなく多截竹管状であろうと思われる。1828・1829は1825と1827の中間的な感じである。

1824・1834は外面肥厚された縄文帯も持つ。その下には刺突が施された2条の突帯がある。さらに下に山形に連なる突帯の押し引きは逆「く」の字状のものである。断面は高い。本類に含めたものの中では押し引きの間隔はやや密でなほうである。

1832・1833・1835はＳＢ05から出土している1204等と酷似しており、同一個体の可能性もある。出土位置も近い。1837～1839も類似した様相の個体である。

1841～1843は1696や1222と同様の膨らんだ胴部に弧状のモチーフが描かれた破片である。突帯の頂部はやや摩滅しているが、断面は高く緩やかな稜を持つ。押し引きは上から下へ向かってほぼ等間隔



第97図　縄文土器実測図(14)第２群Ⅱ類⑫

に丁寧に力強く引かれている。

1844は内面肥厚した上に粘土紐を貼付し押し引きしている。突帯を見ると、施文の工具はやや肉厚で先端のえぐりが深い。平面形はやや崩れた逆「く」の字状を呈している。頸部以下は地文の縄文のみである。

1845～1848はくびれた頸部片である。1848は胴部に1条の突帯が見えるが、逆「く」の字状がよくわかる好資料である。くびれ部の突帯上には刺突が施されている。

1850は円形文に縦位突帯で文様が描かれている胴部片である。縦位の突帯の様子は1824や1830に似ており、密な押し引きである。押し引きの平面形は逆「く」の字状というより直線的で、工具を立てて押し引いた感じである。突帯幅はやや広めで、断面はあまり高くない。

1853・1895は、内外面肥厚し端部に粘土紐を貼付している口縁部片である。外面に貼付された突帯上には刻みないし刺突が施されている。

1854・1859は頸部～胴部片である。1222等に見られる弧状文である。

1855～1858・1860～1864は胴部片である。1855は1条の横位押し引き突帯の下に山形の刺突突帯を配する。横位の突帯は押し引きの平面形が「Σ」字状に近い。1862の押し引きはかなり密である。同心円文の中心であろうと思われる。1856～1858・1860～1864・1878～1880も弧状ないし同心円文を有する胴部片であろうと思われる。

1865・1868・1870・1900は端部に刻みや押圧によって凹みを持つ口縁部である。外面には比較的高い断面の押し引き突帯がある。1868・1900は端部の刻みが深く切り込まれている。いずれも長短はあるが内面肥厚されている。

1866・1867も内面肥厚された口縁部である。端部に粘土紐を貼付し押し引いている。内面肥厚部はやや内側に張り出している。1866は波状口縁の可能性もある。

1869は頸部、1871～1877・1881・1882は胴部片である。1869は、くびれ部外面にほぼ等間隔に連続する生爪痕がある。生爪痕は比較的幅広である。1872の押し引きは密で、工具をやや立たたせ気味に押し引いた感じである。1875・1877は押し引きが逆「く」の字状であることがよくわかる。両者とも突帯の頂部にややきつい稜がある。1877はかなり大胆にはみ出している。

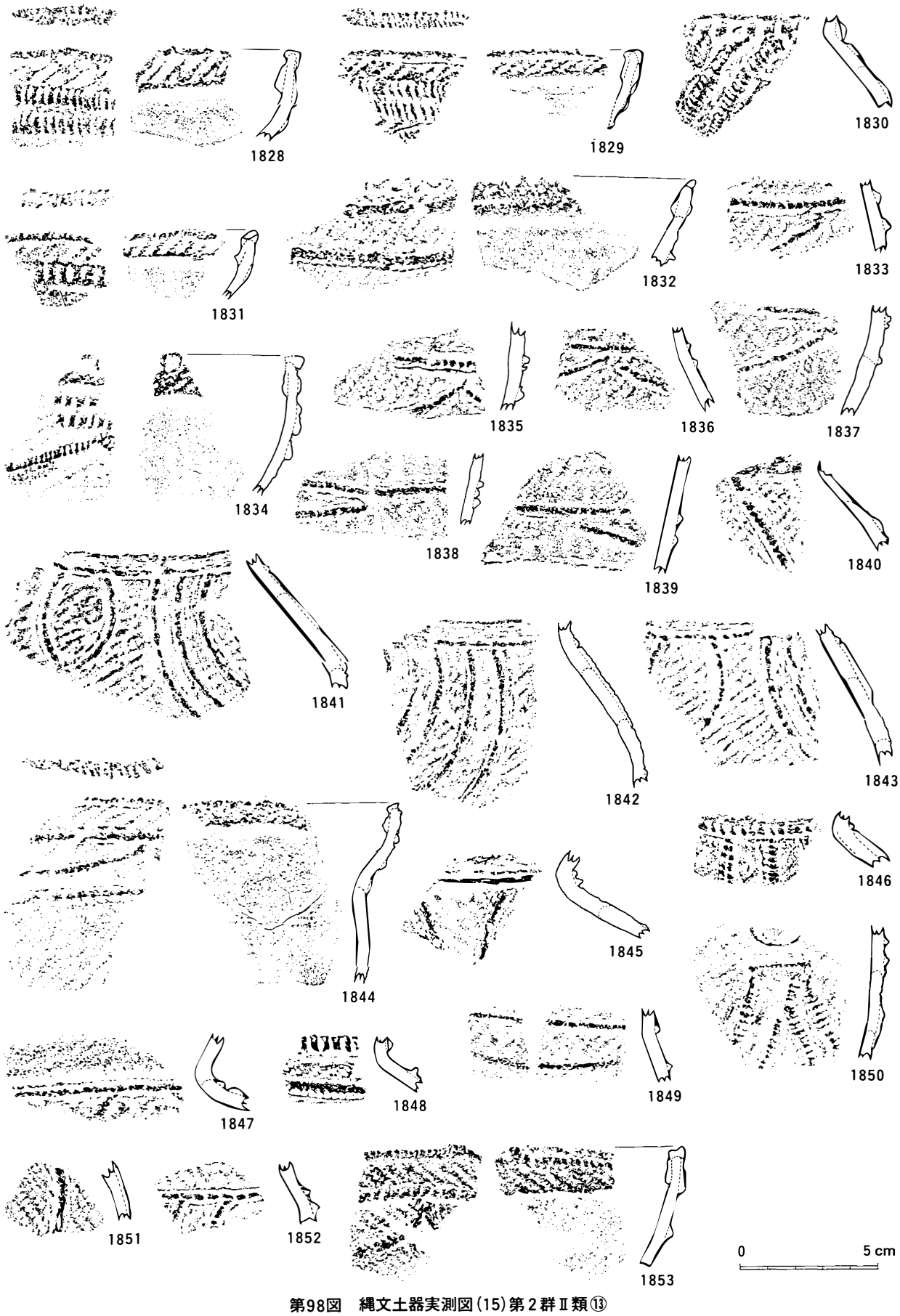
1881～1892は胴部片であるが、小片であるために詳細は不明である。1894は内外面肥厚された口縁端部付近のみの破片である。

1909～1917は頸部ないし円形文や弧状文を持つ胴部片で、いずれも押し引きはかなり密である。

1923～1925は口縁部ないし口縁部～頸部である。1923は楕円状突起の貼付がある。1924の突帯は撫で引きの可能性がある。口縁部は外面肥厚されているが、一部はがれてしまっている。1925は外面肥厚した縄文帯の上に横位1条の押し引き突帯を貼付している。頸部は無文で1条の突帯がある。

1928・1930・1932・1933・1936は平面形逆「く」の字状であることがよくわかる好資料である。いずれも突帯幅は狭い。1936の押し引きの間隔は密である。それに比べ1931は突帯も太めで押し引きの間隔はかなり粗い。1934も比較的粗いほうである。1937～1947も頸部ないし胴部片である。小片である上に摩滅しているものもあり、詳細は不明である。

1952～1956は胴部片である。1953は一部突帯がはがれてしまっているが、同心円文の中心部である。他例と違い湾曲しておらず、張り出した胴部ではない。突帯上には逆「く」の字状の押し引きが密に



第98図　縄文土器実測図(15)第2群Ⅱ類⑬

施されているのがよくわかる好例である。1954も同様である。文様は1222等に代表されるような弧状文であるが、押し引きの間隔がより密なだけでなく、全体に小振りな感じを与える破片である。

1893・1895～1908・1918～1922・1948～1951・1957～1961は突帯脇にはみ出しがほとんどない。

1893・1896は小片であるが、摩滅しておらず突帯の様子がよくわかる。平面形が逆「く」の字状～「Σ」字状で、断面は高く突帯頂部には緩やかな稜が見られる。本類の典型的な例で、まさに第92図に示すような状況である。はみ出しは全くなく、器面に食い込むようにしっかりと押し引かれている。

1898・1899は、内面肥厚し端部に粘土紐を貼付した口縁部片である。

1902・1903は頸部片である。1222等と同様に縦位の突帯は上から下に向かって押し引かれている。

1904～1908は胴部片である。縦位の弧状文と思われるものがある。

1918・1919は内面肥厚だけでなく、外面にも肥厚された縄文帯を持つ口縁部片である。ともに端部内外面に粘土紐を貼付し押し引いているが、1918の端部にはその粘土紐のつなぎによって生じたと思われる小突起がある。また端部に施された押し引きの断面は三角形状に近く、平面形も「Σ」字状にかなり近い。外面の突帯は摩滅しているが、逆「く」の字状に近い感じなので本類に含めた。1919も内外面の様子が1918に酷似しており、出土区は若干離れているが、同一個体の可能性もある。一番下の突帯は押し引きである。

1920は刺突突帯を2条有する頸部片と思われるが、他例のようにはくびれていない。

1949は口縁部、1948・1951は胴部、1950は頸部～胴部片である。1949は欠損部が多く詳細不明である。1950は頸部やや下に横位1条の突帯を有するが、押し引きはほぼ等間隔で丁寧に力強く引かれている。平断面の様子はよく観察できる。

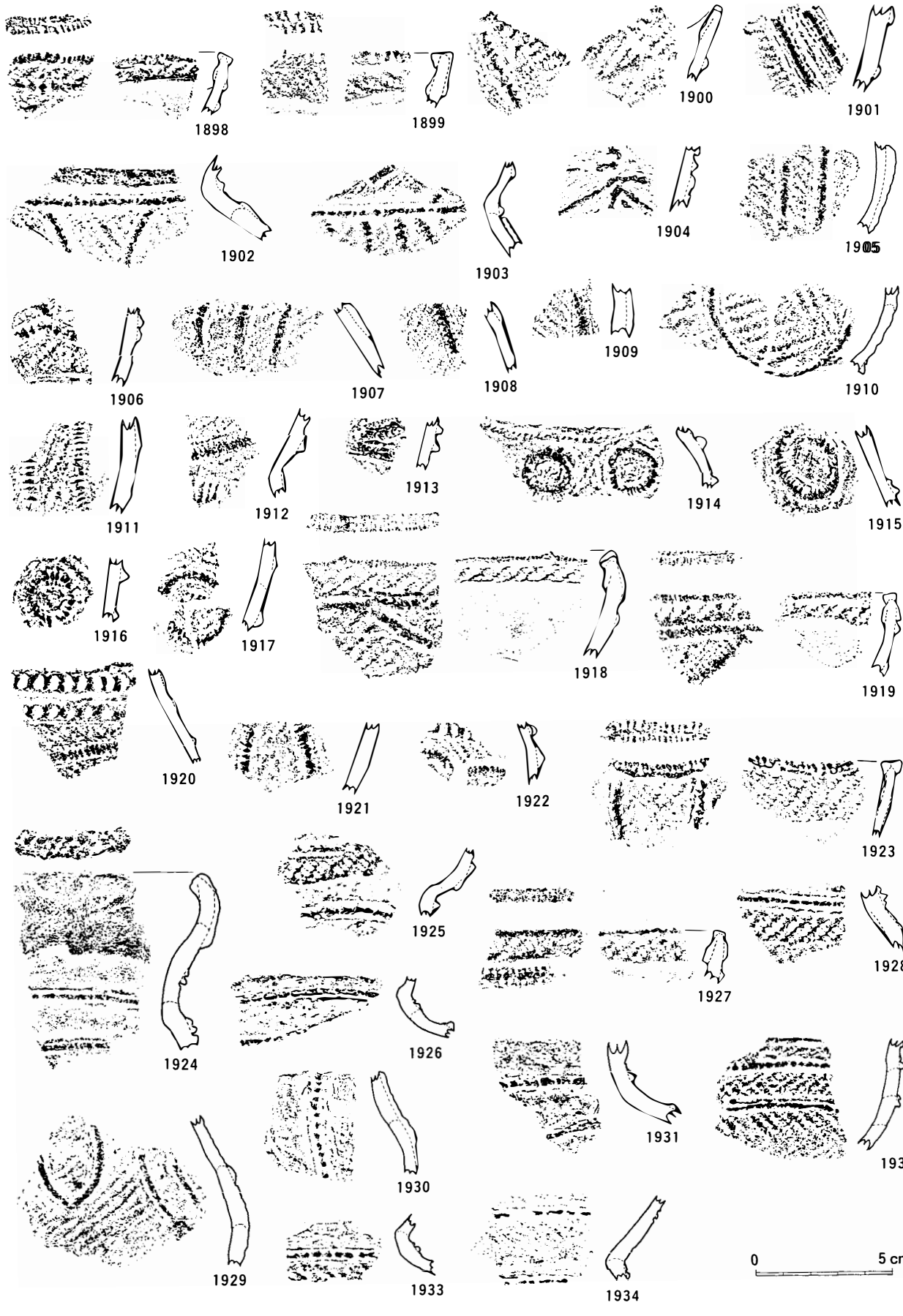
1958は内外面肥厚された口縁部片である。端部に近い部分しか遺存していないのでその他については不明だが、端部と折損部に押し引き突帯が見られる。それぞれはかなり密に押し引かれ、断面形は高く頂部に緩やかな稜ができている。平面形は逆「く」の字状ではあるが、「Σ」字状というところまでは至っていない。口縁外面の縄文帯下には、刺突に近い押し引きが施された突帯があるが、その平面形は「C」字状に近い。突帯はかなりしっかりしており、幅広である。1960も残りがよく突帯の様子がわかる好資料である。

1962～1973は、突帯が細く撫で引きではみ出しがある。押し引きではなく撫で引きであるために、突帯上の平面形は不明である。従って突帯の断面のみで工具及び種別を判断した。突帯の断面が砲弾型もしくは比較的高く、突帯頂部に緩やかな稜が認められると思うものを一括した。

1962は横位の弧状文が連続する胴部片である。1965は弧状文を持つ胴部片である。突帯はやや摩滅しているが、突帯脇の工具による溝状の凹みが分断されておらず連続しているように見えることから撫で引きと判断した。1966は2IIBbに属する1809等に酷似している。ただ1809等よりやや断面が高く稜があるように見えたので、本類に含めた。

1967の焼成はかなり良好である。頸部から大きく外側へ張り出す口縁部である。端部を若干肥厚させ、面取りした上で縄文を施している。外面は二段に肥厚させて縄文帯を形成している。上段は短く下段はその二倍ほどの長さである。端部から縄文帯の下端までやや長めの短隆線を垂下し、半截竹管状工具で撫で引いている。工具幅は狭く突帯幅の半分ほどしかない。突帯の断面は砲弾状である。頸部に貼付られた横位1条の突帯も撫で引きである。縄文帯から頸部の突帯までは無文である。1973も頸部から大きく外へ張り出す口縁部である。端部が欠損しているため詳細は不明だが、外面肥厚されている可

第99図　縄文土器実測図(16)第2群Ⅱ類⑭



第100図　縄文土器実測図(17)第２群Ⅱ類⑮

能性もある。内外面には不規則な生爪痕がある。頸部外面にはやや乱雑な撫で引き突帯が１条ある。

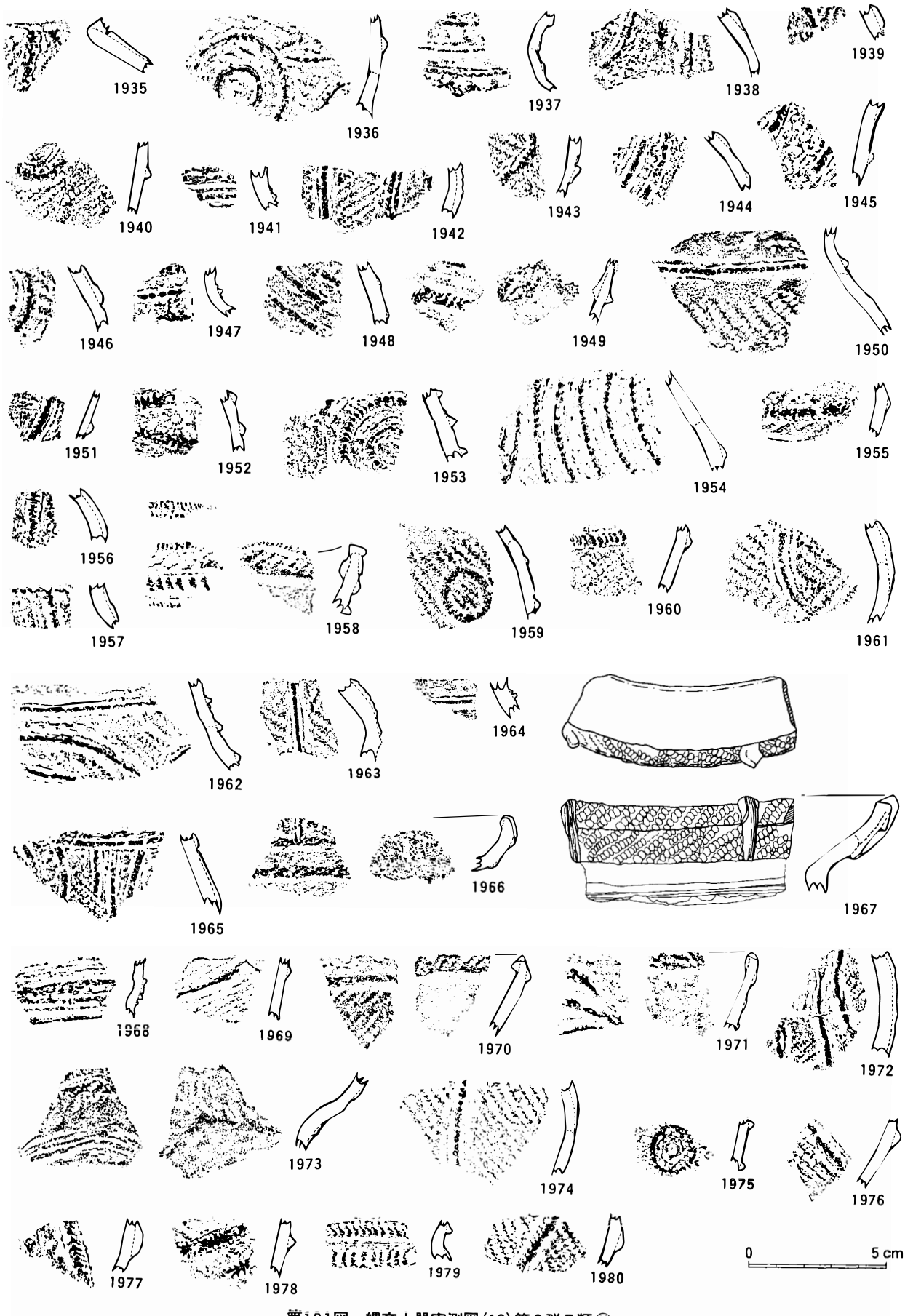
２ＩＩＢｄ

36点図示した。本類に含めた土器は、突帯の平面形がやや丸みを帯びた逆「く」の字状からより鋭角的な「Σ」字状に変化したものである。断面形も三角形状になり、突帯の頂部には比較的はっきりした稜がある。突帯幅はやや広めな感じのものが多い。ただ押し引きの間隔については密なものばかりではなく、やや粗めのものもある。押し引きではなく撫で引きかと思われるものは少ない。押し引きの粗密によって細分を試みた。

1974～1981は、押し引きが比較的粗い。粗いといっても前述した２ＩＩＢａ～２ＩＩＢｃに含まれるものと比較すれば密なほうである。1974～1978・1980は胴部、1979は頸部片である。いずれも突帯が高くその断面形は三角形状である。特に1977・1979は良好な資料である。1979は突帯の頂部がやや丸みを帯びているが、平面上で斜めに入る押し引きが直線的であるので本類とした。２ＩＩＢｃとの過渡的な様相を示すものと考えられる。1848と似ている。1974・1978はややはみ出しがあるが、他はまったくといってよいほどない。1978の突帯はやや低めで、工具を立てて押し引いた感じである。1981はきつくくびれた頸部から胴部にかけての破片である。頸部に１条の刺突突帯が貼付されそこから底部に向かって広がるように縦位の押し引き突帯が３条見られる。押し引きの間隔は比較的粗く、３～４㎜ほどある。平面形の「Σ」字状はやや丸みを帯びているような感じであるが、突帯頂部にはきつい稜があり、断面は三角形状であるため本類に含めた。押し引きは他の例に漏れず上から下へと引かれており、はみ出しはほとんどない。良好な資料である。

1090・1243・1244・1982～2010は、押し引きが比較的密である。1243・1244の突帯はやや低めで、はみ出しがある。1978と感じが似ている。1982は頸部から胴部にかけての破片である。胴部には弧状を描く押し引き突帯が２条見られる。やや摩滅しているが、押し引きの様子はよく観察できる。間隔は密で２㎜以下である。くびれた頸部には横位１条の突帯が貼付されているが、1981・1993～1996等のように突帯上の施文は刺突ではなく押し引きである。

1090・1983～1992は口縁部片である。共通する特徴は、内面肥厚した上に縄文を施文し、端部には粘土紐を貼付し、押し引いていることである。本地点から出土した押し引き突帯を持つ土器群の口縁部によく見られるタイプである。1983は外面に幅広の突帯を持つ。突帯上は押し引きではなく刺突で、工具も湾曲の少ない多截竹管状と思われる。1827～1829とよく似ている。口縁端部の押し引きは密でしっかりしている。1918と同様に、端部には粘土紐のつなぎによる小突起がある。内側に湾曲する口縁部で、焼成は極めて良好である。1985の端部にも同様の小突起があると思われる。ちょうど小突起部分は欠損しているので確証はないが、その付近の粘土紐の湾曲状態から類推できる。端部の押し引きは断面が高く頂部が鋭くとがっている。押し引きは密でその間隔は２㎜以下である。外面には２条の押し引き突帯がある。ややはみ出しがあるが器面に食い込むようにしっかりと押し引かれている。押し引きは端部と異なり、平面形が丸みを帯びた逆「く」の字状で、逆「３」状に見える。写真Ｇの1896の形に似ている。２種類以上の工具を使う例は他にもあるが、本例もそれに該当する。1988も端部と外面の押し引きが異なる。端部は「Σ」字状の押し引きがなされているのに対して、外面の突帯の押し引きは、幅広で扁平な「Ｃ」字状であり、その下は逆「く」の字状である。端部に小突起を持



第101図　縄文土器実測図(18)第２群Ⅱ類⑯

ち、内側に湾曲するという点では1983・1985と似ている。1989も外面に幅広の「Ｃ」字状の押し引きを持つ。1988同様にその下は逆「く」の字状であるが、1988より断面は三角形状に近い。端部に使用したものと同一工具の可能性もある。1986の外面の突帯も1983同様に刺突に近いが、突帯幅は1983に比べやや狭い。1987の外面の突帯は、平面形が逆「く」の字状である。1985の外面の押し引きよりは鋭角的であるが、頂部の稜はやや緩やかである。

1993～2003は、頸部～胴部もしくは胴部の破片である。1993の押し引きはかなり密で、その間隔は約１㎜である。ほぼ等間隔に上から下へまたは右から左へ押し引かれている。頸部に貼付られた幅の広い突帯上の「Ｃ」字状刺突も右から左へ施されている。突帯の断面は高く三角形状である。突帯脇にはみ出しはほとんどない。1981のようにきつく頸部でくびれるタイプである。1994～1996も同じタイプである。ただ1995の押し引きは若干頂部に丸みがあり、２ＩＩＢｃ～２ＩＩＢｄの過渡的な感じを受ける。1997も同じである。それに比べ1996の突帯の断面は高く、頂部の稜はかなり鋭い。

1998の突帯は摩滅しているせいもあるが、若干柔らかい感じを受ける。しかし断面は高く、形状は正三角形である。押し引きはかなり密で、その間隔は約１㎜である。やや膨らんだ胴部に斜行する突帯や円形文で文様が描かれている。2001～2003は円形文である。密な押し引きが施されている。2004は内面肥厚された口縁部片で、外面には幅広の「Ｃ」字状刺突が施された突帯と、断面が低い二等辺三角形を思わせるような押し引き突帯を持つ。2005は外面肥厚の可能性がある口縁部付近の破片で、内面には生爪痕を持つ。外面の突帯は軽く押し引かれているか、撫で引いている。断面は三角形状である。2006は外面に貼付られた短隆線上を撫で引くのではなく押し引いている。

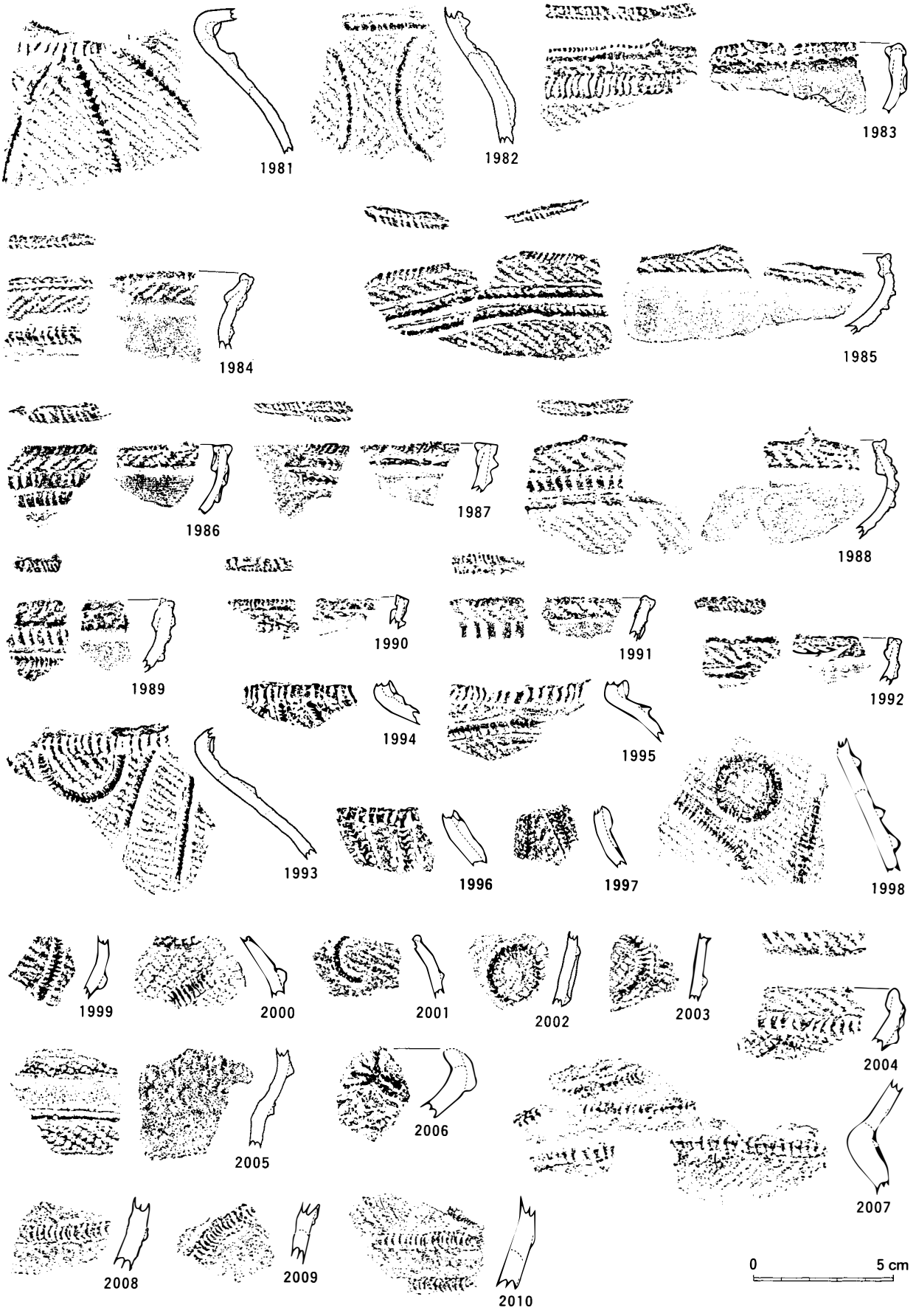
２ＩＩＢｅ

24点図示した。分類上はその他の形状の押し引きや撫で引きが施されたものとしたが、押し引きおよび撫で引きされた突帯のほとんどが、前述した２ＩＩＢａ～２ＩＩＢｄに分類できる。本類に含まれるものには、突帯が比較的扁平で断面の低いものが多い。平面形は「Ｃ」字状で２ＩＩＢａに通じるが、断面の形状の違いからあえて本類に含めることとした。

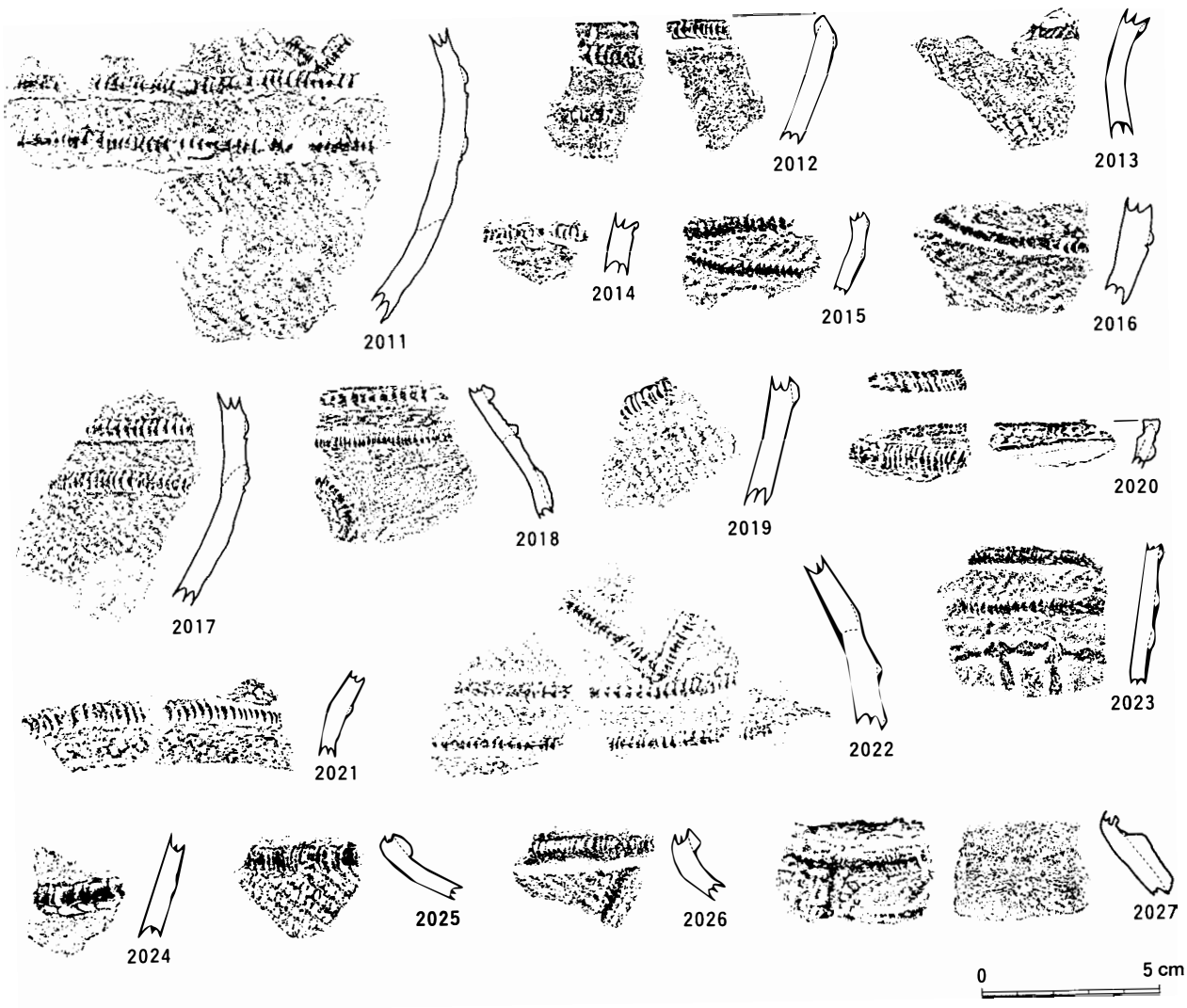
1200・1202・1369は胴部片である。摩滅していることを考慮に入れたとしても突帯はかなり低い。平面形は「Ｃ」字状でやや幅広である。はみ出しはなく器面に食い込むようにしっかりと押し引かれている。間隔は密である。

2007～2014・2017・2019・2022は同一個体である。膨らんだ胴部に横位２条の押し引き突帯を下限とし、文様帯を構成している。頸部でいったんくびれ、やや湾曲しながら口縁部が開く器形を呈すると思われる。2012が本個体の口縁部であるとするならば、端部は短く内側に向け、細い粘土紐を貼付し押し引いている。2007から頸部の地文は撫で消され、無文であることがわかる。口縁部～胴部にかけて施されている突帯上の押し引きはかなり低く、器面よりわずかに高まりがあるだけである。平面形は「Ｃ」字状であることから、工具は２ＩＩＢａに使用しているものに近いと思われるが、多截竹管状である可能性もある。押し引きの間隔は密で、約２㎜ほどである。

2015・2016・2021・2023～2025は胴部片である。2015・2016・2023は突帯がやや幅が狭い。押し引きは密で、その間隔は約１～２㎜である。2023の下の突帯上には貝殻背圧痕が施されている。2021・2024・2025はやや幅広の突帯である。2024の押し引きはあまり丁寧でない。



第102図　縄文土器実測図(19)第2群Ⅱ類⑪

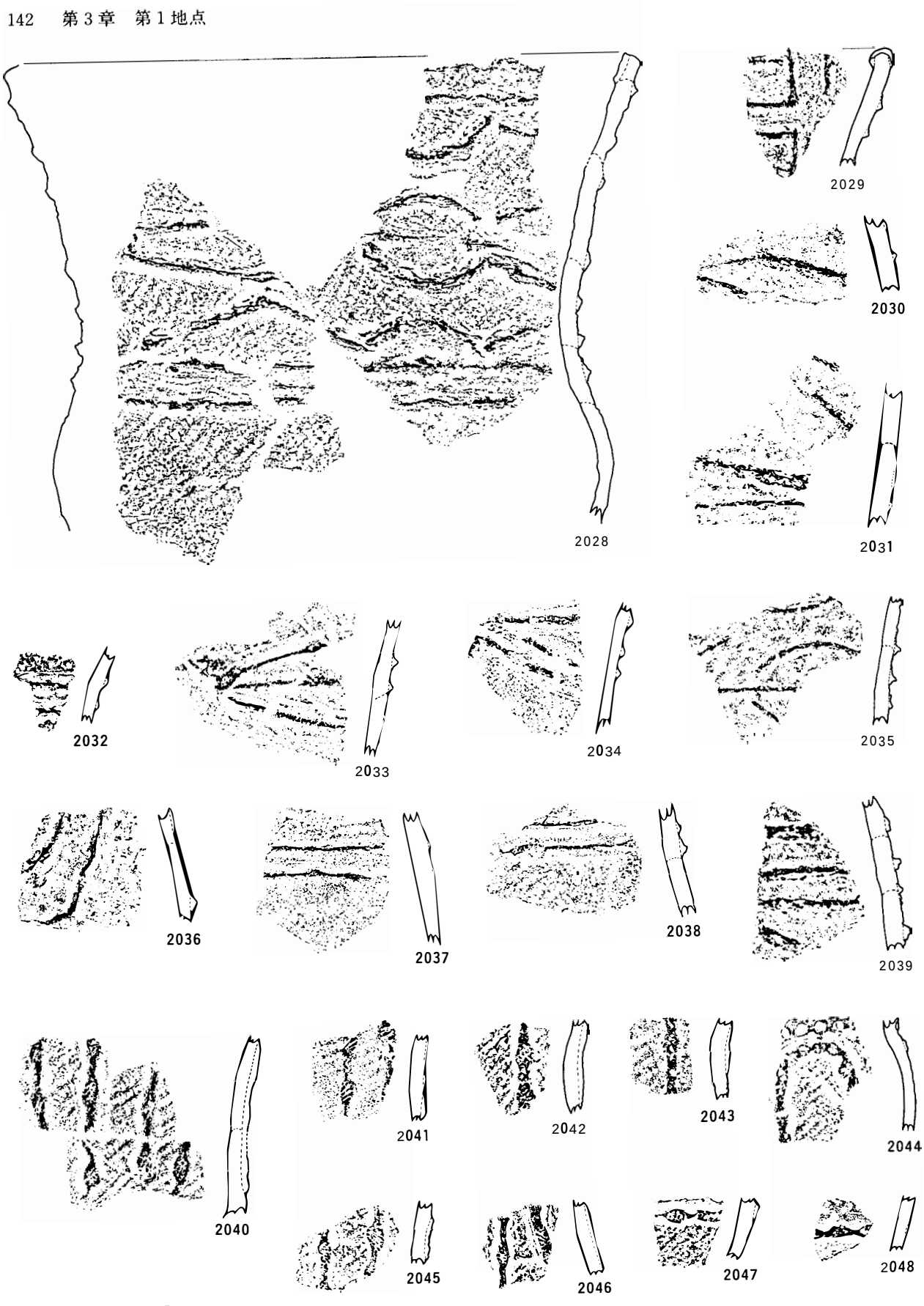


第103図　縄文土器実測図(20)第２群Ⅱ類⑱

2018・2020・2025～2027はさほど突帯が低いわけではない。ただ押し引きはかなり密である。2025は最も密な箇所は突帯の長さ２cm分のところに14回の押し引きが施されている。2026・2027も同様である。2018は長さ４cm分のところに30回押し引かれている。見た目はかなり細かく、明らかに他と様相を異にする。2020は端部に逆「く」の字状の押し引きが施されている。その点でいえば２ⅡＢｃに属するが、外面の突帯の押し引きがかなり密であるがために本類に含めた。２ⅡＢｃに含めても問題はない。

２ⅡＣ

本類のＣは、指頭により断面三角形状に成形された突帯を有する土器を一括した。40点図示したが、同一個体もあり出土点数はさほど多くない。器形や文様構成等で押し引き突帯を有する個体と類似する点は多いが、突帯は特徴的である。ＳＸ０２・包含層から出土したものでそれぞれ１点ずつ、器形その他がわかる個体が確認できたことが成果として挙げられる。個々の説明は後述する。



104図　縄文土器実測図(21)　2群Ⅱ類⑲

1245～1247は同一個体の胴部片である。突帯の断面形は三角形状で比較的高く撫でられている。

1253は口縁部外面に１条の突帯を持つ。やや摩滅しており詳細は不明だが、押し引きとは判断できず、また突帯の断面が三角形状であるため本類に含めた。

1430は内面肥厚された口縁部片である。外面に２条の縄文突帯を持つ。頸部に近い部位に施された突帯は指頭によって成形されている。1431・1432は同一個体である。突帯は断面三角形状ではあるが幅は狭い。摩滅しているので詳細は不明である。1433も同様に摩滅している。突帯の断面は三角形状ではなく、むしろ台形状である。押し引きでも撫で引きでもないと判断し本類に含めた。詳細は不明である。

1434～1453は同一個体である。すべてＳＸ02からの出土である。ＳＸ02は竪穴状遺構として報告したが、住居跡の可能性が高い遺構である。その床面近くからこの土器は出土している。他にあまり類例を見ないために、時期その他については不明だが、共伴している1425・1426などが手がかりとなるかもしれない。1434～1453は、部分的にしか接合できなかったため全容を解明することは困難であるが、幸いにも1452・1453は接合率が高く、口縁部から胴部上半までの様子はつかめる。膨らんだ胴部から頸部でいったんややくびれ、口縁部では再び膨らみ、内側に向かって湾曲しながら端部に向かう器形である。口縁部は内面肥厚し縄文を施している。端部には棒状工具の押圧による凹みがある。凹みは端部全周にわたってあるわけではなく、規則的な単位で施されている。しかし現存する破片ではその単位を知ることはできない。口縁下外面に横位２条の突帯を貼付し、文様帯の上限としている。下限も同様に横位２条の突帯を頸部に貼付している。そのほぼ中央部にある横位１条の突帯を境に、上下対称の弧状を描く文様を２～３条の突帯で構成している。1453にはその連弧文の間に円形文が貼付されているが、その規則性も不明である。突帯は指頭成形によるものである。断面は三角形状で、高くつまみ上げるように撫で引いている。器形や口縁端部の様子は、1204他や1399に代表されるような押し引き突帯を持つ個体に類似するが、文様構成自体はむしろ1494等の縄文突帯を持つ個体に通じるものがある。文様帯が口縁部からややくびれた頸部までに広がるという点でも、1399等より1494等に近いが、後述する第４地点Ｐ01から出土しているＡＨ4-119のように、文様帯が頸部までにとどまる押し引き突帯を持つ個体もある。ただＡＨ4-119は文様帯の地文は撫で消され、無文である点は異なる。詳細については今後検討の余地がある。

2028～2039は包含層からの出土である。2028も比較的器形がわかる個体である。1452等と同様に膨らんだ胴部からいったん頸部でくびれる。口縁部の形状はは1452等と異なり、外側に向かって直線的に開く器形を呈する。口縁部は内面肥厚され、端部には棒状工具の押圧による凹みがある。端部はわずかしか遺存しておらず、凹みが全周にわたるものかどうかは不明である。口縁部から頸部にかけて指頭成形突帯によって文様帯が形成される。文様モチーフはほぼ中央部にある横位１条の突帯を挟んで、上下対称に弧状・山形の文様が描かれる。文様帯は横位２条の突帯を下限とし、胴部地文帯と画する。文様モチーフは同じ指頭成形突帯を持つ1452等に通じるものがある。

2029は口縁部、2030～2039は胴部である。2031・2034・2038・2039の突帯は幅広である。そのため断面はさほど高くないように見える。他は突帯幅が狭い分だけ高く見える。2029は短隆線のように端部から貼付られており、下方へ延びる。横位２条の突帯で分断され、十字を描く。他にあまり類例を見ないモチーフである。2031はやや摩滅しており、突帯の断面が台形状に近い。縄文突帯のようにも

見えるが、突帯脇の様子や一番上の突帯から指頭成形によるものと判断した。2033・2035の文様モチーフは1452等や2028に似ている。2038は突帯の残りはほとんど摩滅しておらず、指頭成形の様子がよく観察できる。

2IID

本地点から出土した前期後葉の土器群の多くが突帯を有するものであることは前述した。ここまで縄文、押し引き、撫で引きなど突帯上に施された文様によって、分類し説明を加えてきた。本類のDではそれ以外の文様が施された突帯を有する土器群をa～cに細分した。しかしここに属する土器はいずれも小片であり、その個体の全容を明らかにするものではない。それ故にa～cの分類基準はその破片の部位のみに該当するものでしかない。おそらく個々の破片が本来あるべき個体は、本類の基準となる突帯のみで文様が構成されているのではなく、その他の特徴も持つものであろうと考えられる。そうした点からすると、他の個体との関連を探り最も適切な分類を構築するべきであるが、報告者の力量不足のために小片の特徴のみを列挙することにとどまることをあらかじめ記しておきたい。

2IIDa

9点図示した。本類には突帯上に貝殻背圧痕が施されたものを一括した。

2040～2043・2045・2046は縦位に突帯が貼付られた胴部片である。この他にも縦位突帯上に貝殻背圧痕を持つ個体がある、後述する底部片に含めた1295である。本類の縦位突帯の破片が1295に類似するか否かは判断が困難であるが、仮にそうであるとしたら胴部片の中でも底部に近い部位に該当し、傾きは掲載した状態よりさらに上部が外側へ傾いていることになる。いずれも小片であるために詳細は不明である。

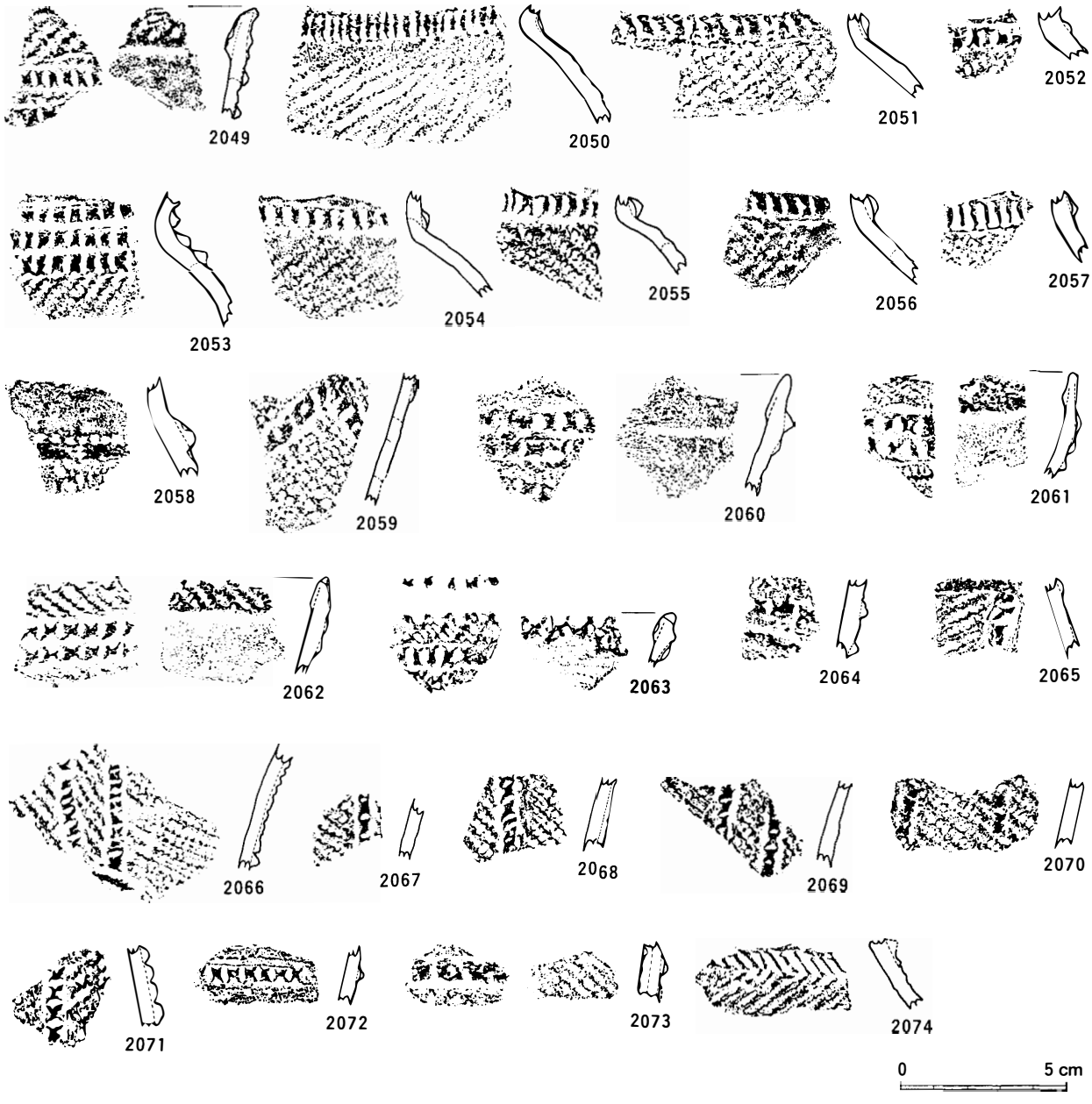
2044は頸部～胴部片である。ややくびれた頸部には粘土紐が1条貼付され刺突が施されている。その下には貝殻背圧痕のある突帯で円形文が描かれている。2047・2048は小片のため部位は判然としないが、胴部である可能性が高い。

2IIDb

16点図示した。本類は突帯上に刺突が施されたものを一括した。

1276は内面肥厚された口縁部片である。外面には幅広で低めの突帯が貼付され、その幅いっぱいに刺突が施されている。1325～1327は頸部または胴部片である。3点とも押し引きの近い刺突で、1325・1326は2IIBa、1327は2IIBcに使用した工具で刺突されたように見える。1454はくびれた頸部に横位1条の突帯を貼付するタイプで、突帯上にはやや幅広の「C」字状刺突が施されている。刻みのように見える直線的な刺突に比べ「C」字状のものは少ない。

2049は口縁部である。内面肥厚されている。外面の突帯上には、ほぼ直線的だが若干「C」字状に湾曲したように見える刺突が施されている。2050～2058は頸部片で、2058以外はくびれ部外面に横位1条ないし3条の突帯がある。2050はほぼ直線的な刺突が比較的密に施されている。使用された工具は多截竹管状の可能性もある。突帯こそ3条あるが2053も同様である。3条の突帯は隣接しているので、縦方向へ一度に刻んだようにも見える。しかしよく観察すると凹みに若干のずれがある。そのた



第105図　縄文土器実測図(22)第２群Ⅱ類⑳

め刻みではなく刺突と判断した。

2051・2054～2057は、突帯上の刺突の平面形が「Ｃ」字状に近い。2051・2056の工具は比較的薄く、2054・2055・2057は肉厚である。2058～2060は摩滅しており、詳細は不明である。

２ＩＩＤｃ

18点図示した。本類には突帯上に刻みを施したものを一括した。報告者は、刺突は工具を突き刺すことによって施された凹み、刻みは突帯を分断するもの切れ目と理解しているが、判別が困難なものもあり、混乱している可能性がある。

1091は摩滅しており、器面に亀裂が生じている。突帯も低く判別しにくい状態ではあるが、真ん中の突帯上には明らかな刻みが確認できる。1328・1329は頸部に刻みのある突帯を貼付している。1381は摩滅した小片のため詳細は不明であるが、接している4条の低い突帯上に、ほぼ垂直方向から一度に刻みを施している。

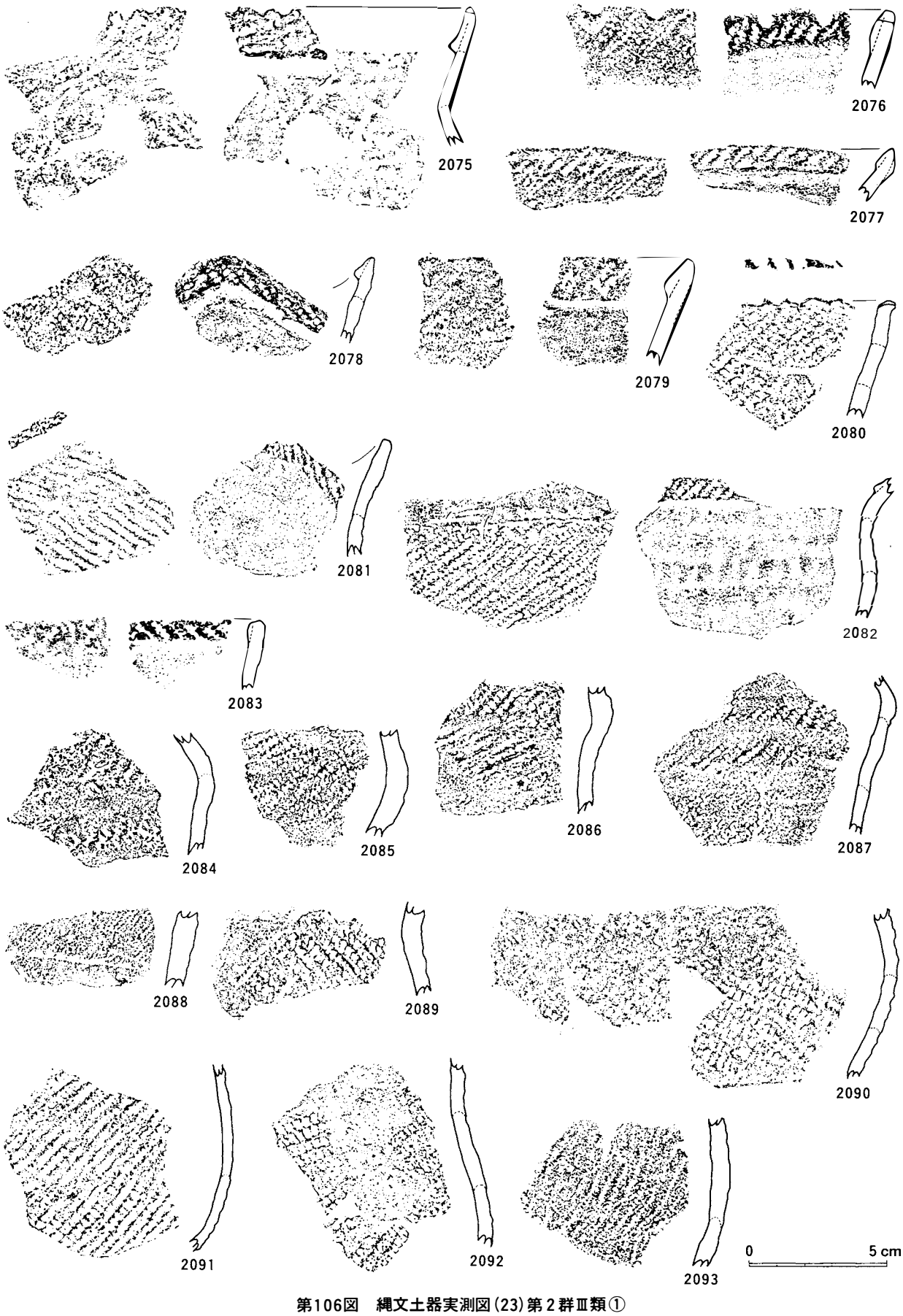
2061～2063は口縁部片である。いずれも内面肥厚されているが、2062・2063は端部に凹みを持ちさざ波状を呈している。口縁下外面に貼付られた突帯上に刻みがある。2064～1073は胴部片であると思われるが、2065は頸部直下の可能性もある。2065～2071の突帯は縦位であり、胴部下半とも考えられる。2074は頸部で1329と似ている。

第2群Ⅲ類

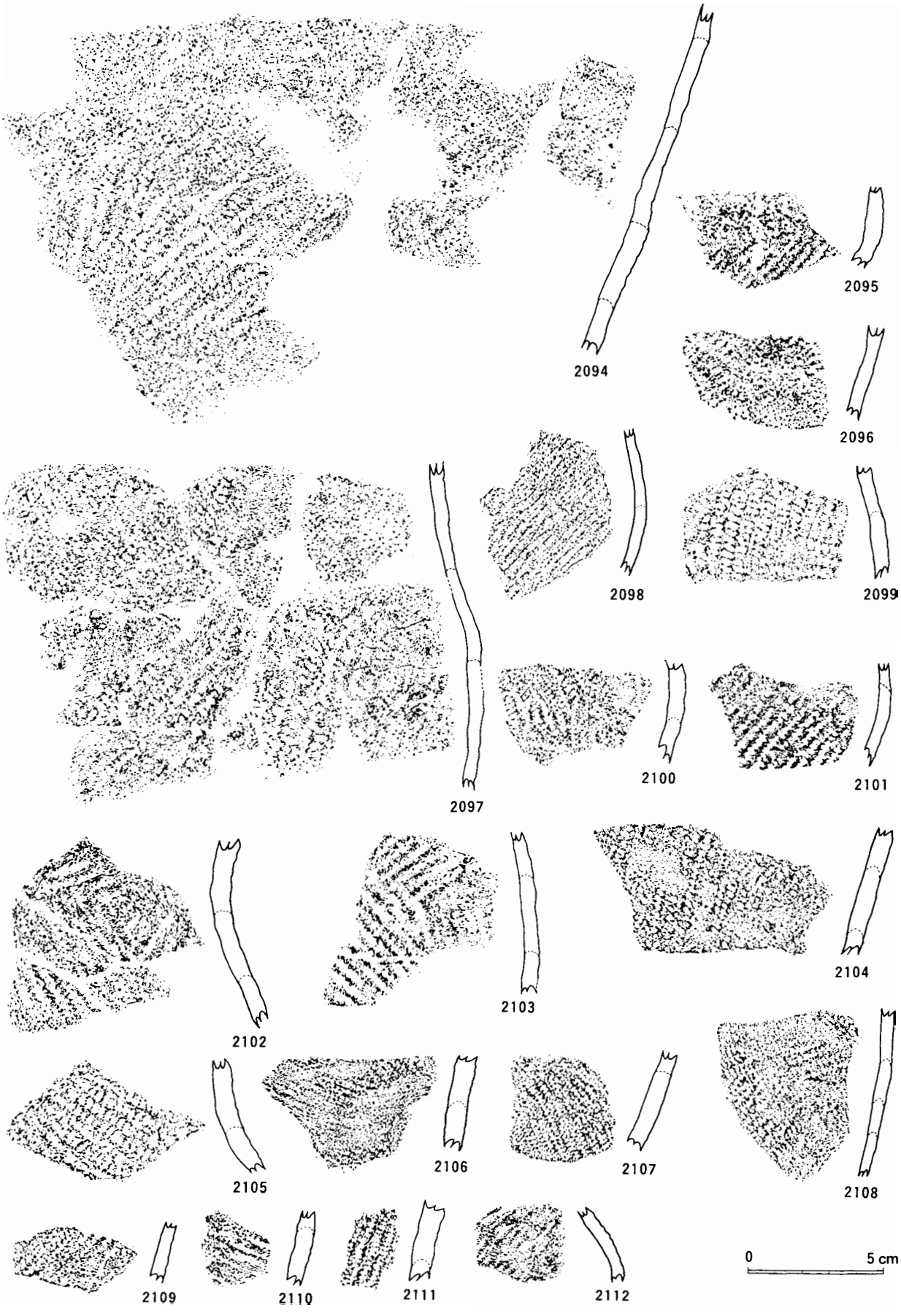
本類は縄文のみの破片もしくは個体を一括した。その多くは胴部片である。それらの破片が口縁部その他に特徴を持つ個体であるのか、そうではなく縄文のみを全面に施す粗製土器であるかは不明である。比較的摩滅が少なく縄文の状態がわかるものを選別し多めに掲載した。特別なもの以外は個々の記述は避け、まとめて記すことにした。

152点図示した。そのうち口縁部から底部まであり、その全容がつかめるものはわずか1点しかない。ＳＵ０２として報告した1408である。また明らかに頸部であると思われるものも1337の1点しかない。口縁部は24点確認できた。1248・1250～1252・1255～1262・1383・1384・2075～2083である。最も多かったのは胴部片で、1023・1051～1059・1092～1100・1117～1120・1263～1275・1333～1336・1338・1382・1385～1391・1455～1460・1464・2084～2146の120点である。

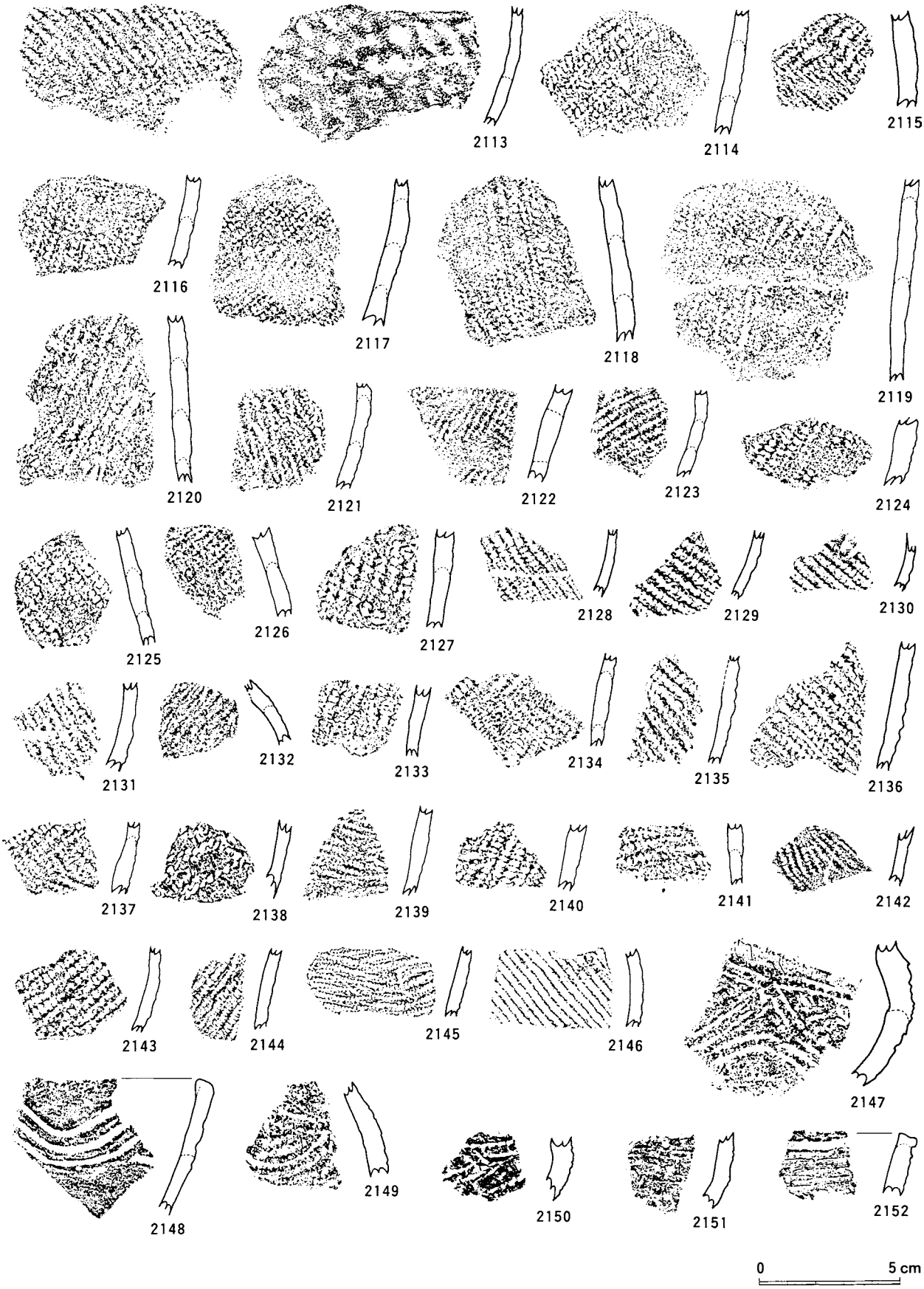
1408は4単位の波状口縁で、端部はつまみ上げられている。口縁下には張り出した肩部を持ち、胴部は肩部から緩やかに湾曲しながら底部に向かう器形を呈する。底部は側縁端部が突き出ており、端部には刻みがある。明瞭な縄文は口縁部外面しか確認できなかった。胴部には炭化物が一面に付着しており詳細に器面を観察できる箇所は少ない。従って施文を確認することは容易ではなかったが、炭化物が剝がれているところでは若干の縄文が確認できた。そのことから類推すると、胴部全体に縄文が施されている感じであるが、底部付近では縄文が見られない。撫で消されてしまっている可能性がある。底部近くでは数個の小さな円形の凹みが確認できる。詳細は不明だが、近くに繊維状の痕跡が見られることから胎土中の小礫が抜け落ちた痕の可能性もある。



第106図　縄文土器実測図(23)第2群Ⅲ類①



第107図　縄文土器実測図(24)第2群Ⅲ類②



第108図　縄文土器実測図(25)第2群Ⅲ・Ⅳ類

第2群Ⅳ類

本類は沈線文を有する土器を一括した。出土数は多くなく、良好な状態のものは少ない。従って前期に属さないものである可能性も否定できない部分はある。9点図示した。個々に説明を加える。

1277はやや厚めの胴部片である。摩滅しているが、半截竹管状工具によるものと思われる平行沈線が見られる。1339もやや厚めの胴部片である。半截竹管状工具による押し引きが3条1単位として施されている。押し引きは突帯などを貼付せず、器面に直接引いている。押し引きはやや粗く、その間隔は長めである。若干様相は異にするが、後述する東日本系土器と思われる2216に似た感じもある。詳細は不明なので本類に含めた。1461は弧状文が描かれている胴部片である。摩滅しているせいもあるが、沈線は浅い。

2147・2149・2150の施文は半截竹管状工具による平行沈線で、酷似していることから同一個体である可能性がある。それぞれ胴部片である。2151も半截竹管状工具による平行沈線が施された胴部片である。2148・2152は口縁部片である。2148の沈線は比較的はっきりしている。2152は口縁下に工具によるものと思われる沈線が1条ある。

第2群Ⅴ類

本類は底部のみの破片を一括した。2ⅡDの記述と同様に、本類の土器を説明していく上で、本来は上部の口縁部～胴部との関係を考慮しなければならないであろう。しかし本地点から出土した土器の中で口縁部から底部に至るまで現存している個体は1408のわずか1点である。また接合性が高く推定復原が可能であった個体も1407の1点しかない。この2点の例を持って、全容を語るのは危険であるばかりでなく、この2点は本地点から出土した土器の典型的な例でないため、参考資料とはならない。従って、本類の底部片を上部と関連させて説明することは困難であると判断し、底部片という範疇の中で、その破片が持つ特徴に着目して分類した。大きくは器形によって二分し、それぞれを施文によってａ～ｅの5つに細分した。底面の形状は丸底や尖底は確認できず、平底と上げ底のみのようであるが、判別できない破片が多いため、あえて分類の基準とはしなかった。

２ⅤＡ

第2群Ⅴ類のＡは底部側縁が張り出しているもの、または突き出しているものである。本地点から出土した底部片の中では多い方で、高い割合を占める。底部側縁が張り出しているとは、底面の直径が胴部の最小径より大きいもので、胴部下半より湾曲しながら底面に向かって広がっていくものである。側縁が突き出しているとは、底面の端が器面より著しく突出しているものである。底面のみで側面が欠損しているために判別しにくい破片もある。側縁端部に見られる施文等でａ～ｅに細分した。

２ⅤＡａ

13点図示した。本類に属する底部片は、底部側縁が張り出したり突き出したりしたもののうち、端部に刻みが施されているものを一括した。

1278は正面左側から刻みが入れられている。図では棒状工具の押圧による凹みにも見えるが、凹んだ部分を上からみると、直角三角形状になっていることから刻みと判断した。底面と側面との角度か

ら考えると、くびれた胴部下半から円錐状に底面に向かって開く器形かと思われる。1279は側面が欠損しているため正確さには欠けるが、底面端部の角度から本類とした。端部には細かい刻みが斜め方向に入れられている。1280はＳＢ05の床面近くから出土している。側面は緩やかに湾曲しており、端部には指頭の押圧かと思われる圧痕が認められる。端部は若干突き出しているので、調整の際に生じた圧痕の可能性もある。端部には比較的浅い刻みが斜め方向に施され、裏面まで至る。土器を逆位にして刻みを入れたとも考えられる。

1393は少し突き出した端部にほぼ垂直方向に刻みを入れている。小片のため詳細は不明である。

2153～2157は比較的細い刻みであまり深くない。2153～2155は突き出しがあまり著しくない。2154は摩滅しているため詳細は不明であるが、端部をよく観察するとわずかに刻みらしきものが確認できたので本類に含めた。正確さに欠けるのであえて図示していない。2156・2157は少し突き出している。

2158～2161はやや幅広の刻みである。工具が肉厚であった可能性がある。いずれも端部は突き出している。

２ＶＡｂ

５点図示した。本類は側縁端部に指頭の押圧による凹みを持つものである。軽く凹んでいるものもあれば、かなり深いものもある。

2163は側面がまったくないので、Ａに属するのかＢに属するのか判断できない。その他の基準を設けていないため便宜上本類に含めた。2163は端部の凹みが比較的深く、裏面から見ると歯車状に見えるほどである。2166は小片であるが、2163よりさらに深く凹んでいる。図ではわかりにくいが、凹んでいない部分が四角く残るほど深く押圧している。それに比べ2164・2165は浅く、軽い押圧である。

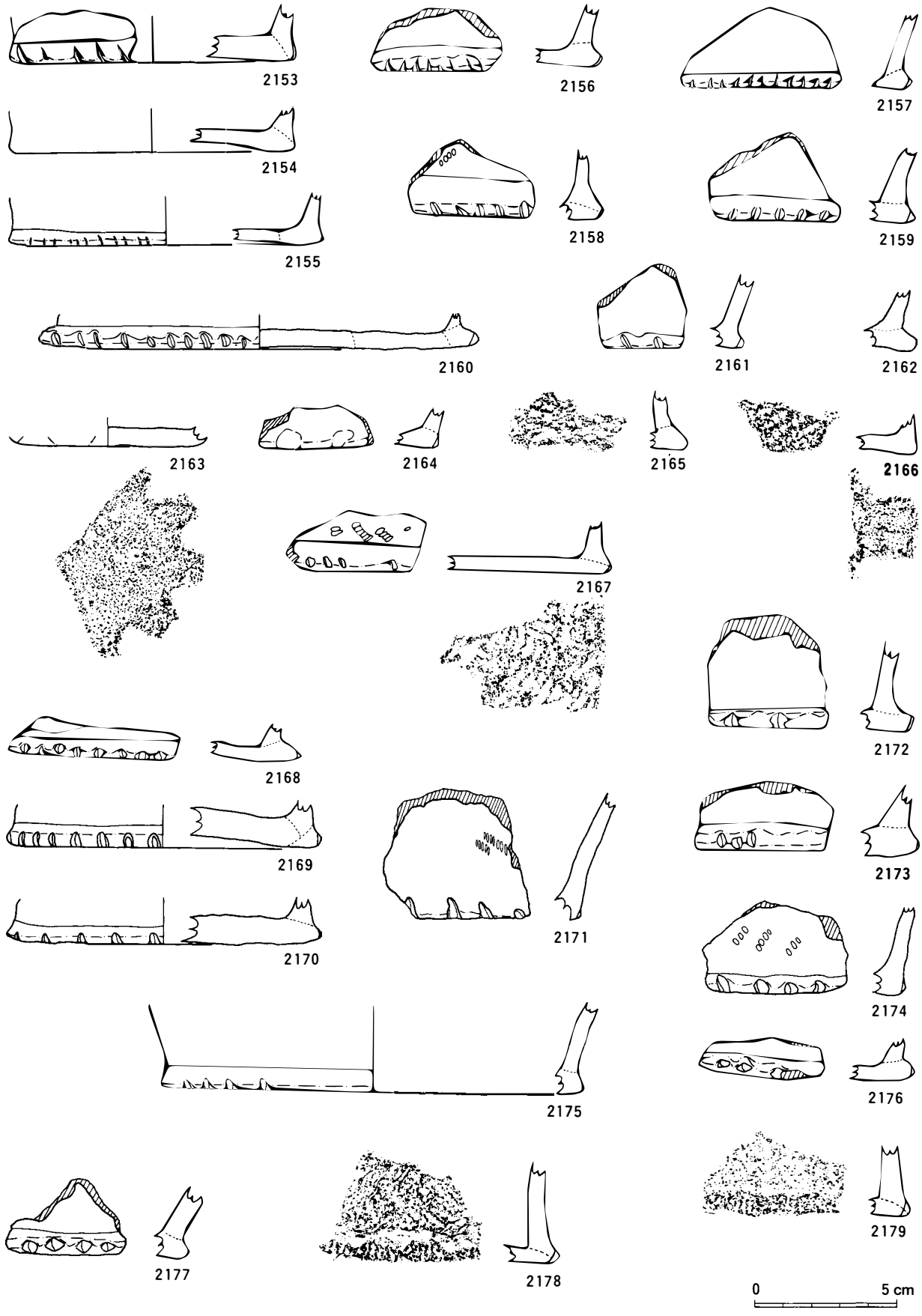
２ＶＡｃ

22点図示した。本類は端部を棒状工具の押圧による凹みを持つものを一括した。工具はおそらく棒状であろうと思われるが確証はなく、中には刻みと判別が困難なものもある。凹みが比較的丸みを帯びているものを本類に含めたが、やや鋭角的なものも含めているので、刻みと混乱している可能性も否定できない。

1010・1011はやや深めの凹みである。1010はほぼ垂直に、1011はやや斜めに工具があてられている。1012は凹みが浅く軽い押圧である。底面中央部は欠損しているが、上げ底であると思われる。

1060・1281・1282・1283の凹みも浅い。1060・1283は斜め方向から、1281・1282はほぼ垂直方向からの押圧である。1284の凹みも図で見るほど深くない。1394はやや上げ底気味である。

2167は端部を軽く凹ませている。若干摩滅しているので十分観察しにくいが、かすかに凹んでいる。底面にはやや崩れた「Ｃ」字状痕がある。生爪痕のようにも見えるが詳細は不明である。2168・2169は上げ底で、端部の凹みの間隔は比較的密である。それに対して2170・2172は平底で端部の凹みの間隔はやや粗めである。2173・2175は摩滅しているため確認できないだけで、規則的に凹みがあるものと思われる。2167～2170・2172～2177は底面端部が突き出しているタイプに属するが、いずれも凹みは浅い。しかし両者の因果関係ははっきりしておらず不明である。2201の凹みははっきりしているが、断面がやや鋭角的な感じもあり、刻みの可能性もある。2203は底面中央部がかなり盛り上がった上げ



第109図　縄文土器実測図(26)第2群Ⅴ類①

底である。

２ＶＡｄ

本類は貝殻背圧痕が施されたものを一括した。端部が突き出したＡでは、2178・2179の２点を図示した。両者とも突き出した側縁端部に縦位の貝殻背圧痕を連続して施している。

２ＶＡｅ

本類は端部が張り出したり、突き出したりしたもののうち上記のａ～ｄに分類できなかったものや詳細が不明なものを一括した。ほとんどが側縁端部に何も施されていない。24点図示した。

1101～1103は端部に何も施されていない。底面は欠損しており、ほとんどない。いずれも端部は突き出している。

1285～1294のうち1292以外は端部が突き出している。突き出しの多少はあり、1286等はかなり短い。1292はくびれた胴部下半から底面に向かって開く器形である。２ＶＡａの1278に似ている。後述する第４地点のＳＢ01から出土している底部片が、このタイプの器形がよくわかる好資料である。1286・1290・1293は上げ底であろうと思われる。いずれも側縁端部には何も施されていない。

1395は若干突き出しているように見えるので本類に含めた。破片の両端を見るとわずかに凹み始めているのがわかる。側縁端部の一部が大きく凹み、底面が五角形状になるものの凹んでいない部分のようにも見える。その点では２ＶＡｂに含めた方がよいかもしれないが、小片で詳細不明なため本類に含めることにした。

2180・2182～2184は端部に刻みのようなものが見られる。工具による押圧や摩滅・亀裂の可能性もある。いずれもはっきりせず詳細不明であるので、本類に含めて報告することにした。2184は裏面に縄文のような痕跡が認められるが、よくわからない。

2185～2187・2189はくびれた胴部下半から底面に向かって開く、1278等の器形を呈する底部片である。2185は器壁が厚めである。2187はやや上げ底気味である。

２ＶＢ

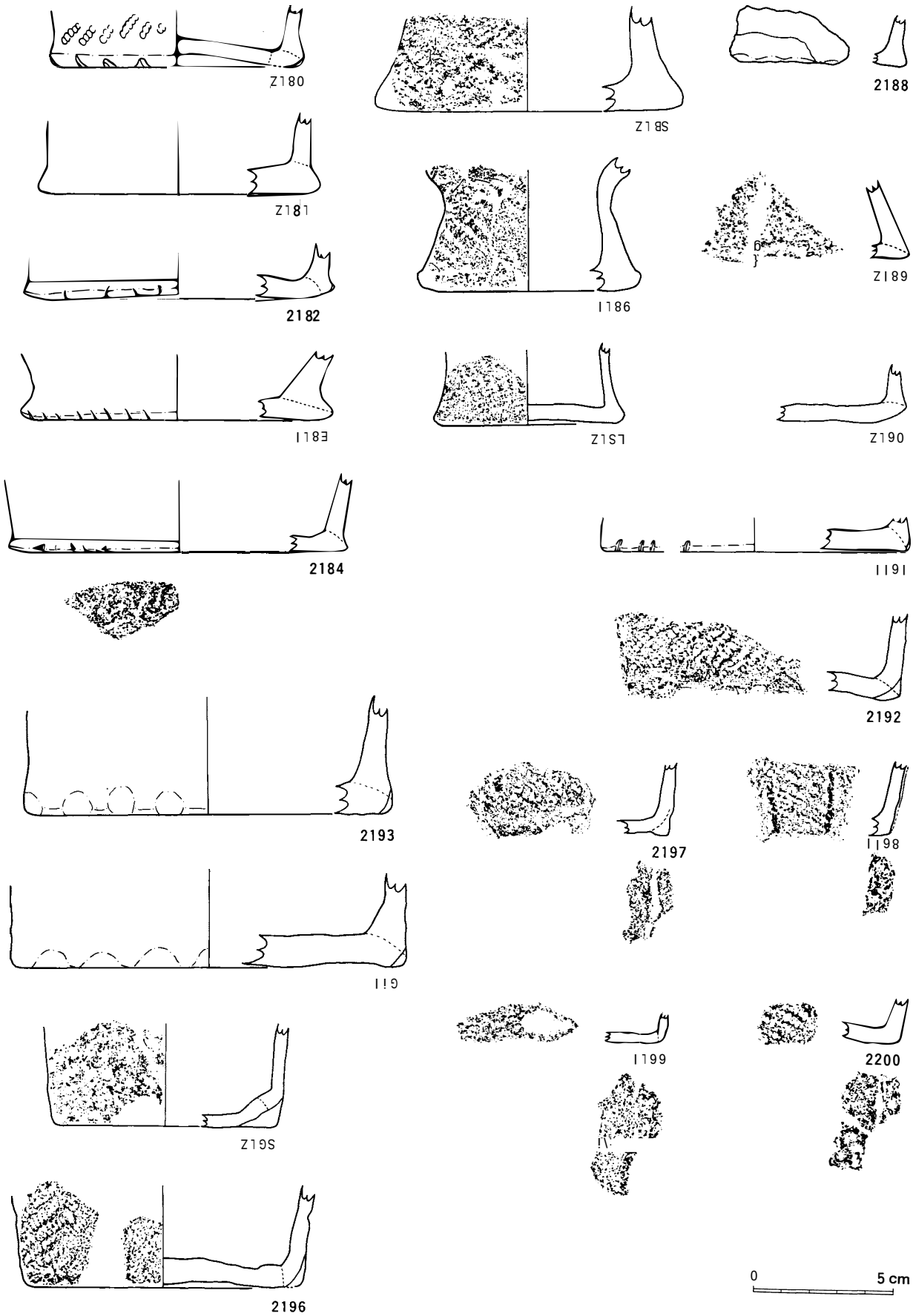
第２群Ｖ類のＢは側縁端部が張り出したり、突き出したりしていないものである。基本的には胴部から底部に向かって収束していく器形であると思われる。第２群Ｖ類のＡ以外のものを本類に含めた。施文等により２ＶＡと同様、ａ～ｅに細分した。

２ＶＢａ

本類は側縁端部が張り出していない底部片のうち、端部に刻みを施しているものを一括した。３点図示した。

1340は底面を欠損している。側面はほぼ垂直に立ち上がる。本例は端部に１カ所だけ刻み状の痕跡が認められた。摩滅しているため確認できない部分もある。2190も摩滅している。内面に指頭圧痕らしきものが見られる。

2191も1340同様に側面がほぼ垂直に立ち上がる。端部の刻みはところどころ確認できる。


2180
2181
2182
2183
2184
2185
2186
2187
2188
2189
2190
2191
2192
2193
2196
2197
2198
2199
2200
0
5 cm

２ＶＢｂ

本類は側縁端部が張り出していないもので、端部に指頭の押圧による凹みを持つ底部片を一括した。10点図示した。２ＶＡ同様、凹みにはかなり差がある。

1295はやや膨らんだ胴部を持つ深鉢の底部である。胴部下半から底部へと連なる破片である。側面には縦位の突帯が貼付られている。現存する破片では4条しか確認できず、単位その他は不明である。縦位突帯上には横位の貝殻背圧痕が施されている。地文は縄文である。側縁端部には指頭の押圧によるやや深めの凹みがある。現存する破片で2カ所確認できる。1カ所は縦位突帯の直下であるが、もう1カ所はそうではなく、単位・規則性は不明である。端部に凹みが施されていない部分には生爪痕がほぼ連続して残されている。器形はややゆがんでいるが、比較的丁寧に作られた感じがする。

2192～2194・2199はやや浅めの押圧である。数㎜程度の凹みのものもある。それに比べ2195～2198・2200の凹みはやや深めである。2195は斜めにやや深めの凹みがある。報告者の左手親指を横にしてあててみると、ちょうど3分の1ほどが埋まる。2196の凹みも深いが2195に比べ長めである。報告者の右手親指が第一関節まであたるほどである。2197は小片で凹みの規模は不明であるが、破片の両端に凹みが確認できる。2198と2200は同一個体であると思われる。2196同様、深めの長い凹みが見られる。

２ＶＢｃ

本類は側縁端部が張り出していないもので、端部に棒状工具の押圧による凹みを持つ底部片である。3点図示した。

1061・1062は小片であるため詳細は不明であるが、かすかに残る痕跡から本類に含めた。

2171は側面から見ると三角形状の凹みがある。凹みの内面がやや丸みを帯びているので、棒状工具の押圧による凹みであろうと判断した。底面は欠損しており、まったく現存していない。

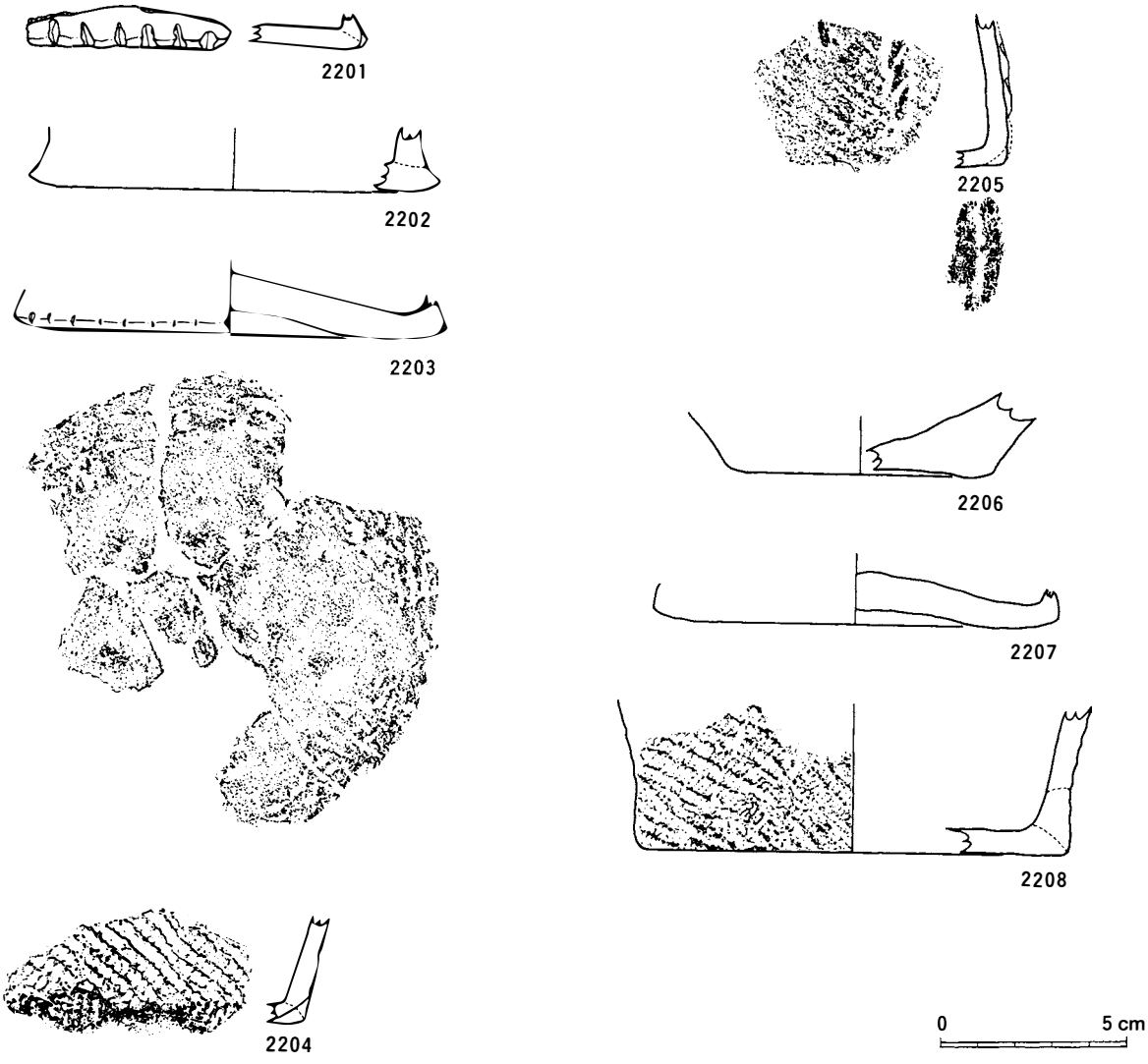
２ＶＢｄ

本類は張り出しのない側縁端部に貝殻背圧痕を持つものであるが、2204の1点のみ図示した。端部の貝殻背圧痕は縦位である。

２ＶＢｅ

本類は上記の２ＶＢａ～２ＶＢｄに含めることができなかった底部片である。4点図示した。

2205は縦位の縄文突帯が2条確認できる。2206は底部から外側に向かってかなり開きながら立ち上がっていく器形のようである。底面部の器壁は厚い。2207は上げ底である。2208は底部下端まで縄文が施されている。



第111図　縄文土器実測図(28)第2群Ⅴ類③

第2群Ⅵ類

本類は東日本系土器と思われるものを一括した。本地点からの出土点数は多くなく、客体的な存在であると報告者は理解している。それゆえあえて細分せずに順次個々に説明を加えていくことにする。34点図示した。強いて大きく分けるとすれば、中央高地で発達したタイプと北陸方面に広く分布するタイプがある。

1013～1018は同一個体であると思われる。1013～1015が口縁部、1016～1018が胴部である。これらはすべてＳＢ01からの出土であるが、隣接するＳＢ08からも1024・1025の2点が出土している。また包含層扱いとしたが、2211～2213もＳＢ01周辺から出土しており、同一個体である可能性が高い。いずれにしても共通する特徴が多いので、ここではまとめて説明を加えることにする。

口縁端部は水平に面取りされている。口縁部外面は二段になった突き出し部がある。その突き出しの下側には頂部を上に向けた三角印刻文が上下呼応するように施されている。突き出し部は外面肥厚

する形で成形されていることが、端部が剝がれた1013からうかがえる。三角印刻が施された突き出しの下部には横位数条の沈線があり、さらにその下には左右交互に引かれた矢羽根状沈線がある。以下の胴部については1016～1018・1024・1025・2211～2213の破片があるが、やや湾曲した部位もありその器形は判然としない。2210もＳＢ01近くで出土していることを加味すると、同様の個体である可能性もあるが、かなり摩滅しているため詳細は不明である。

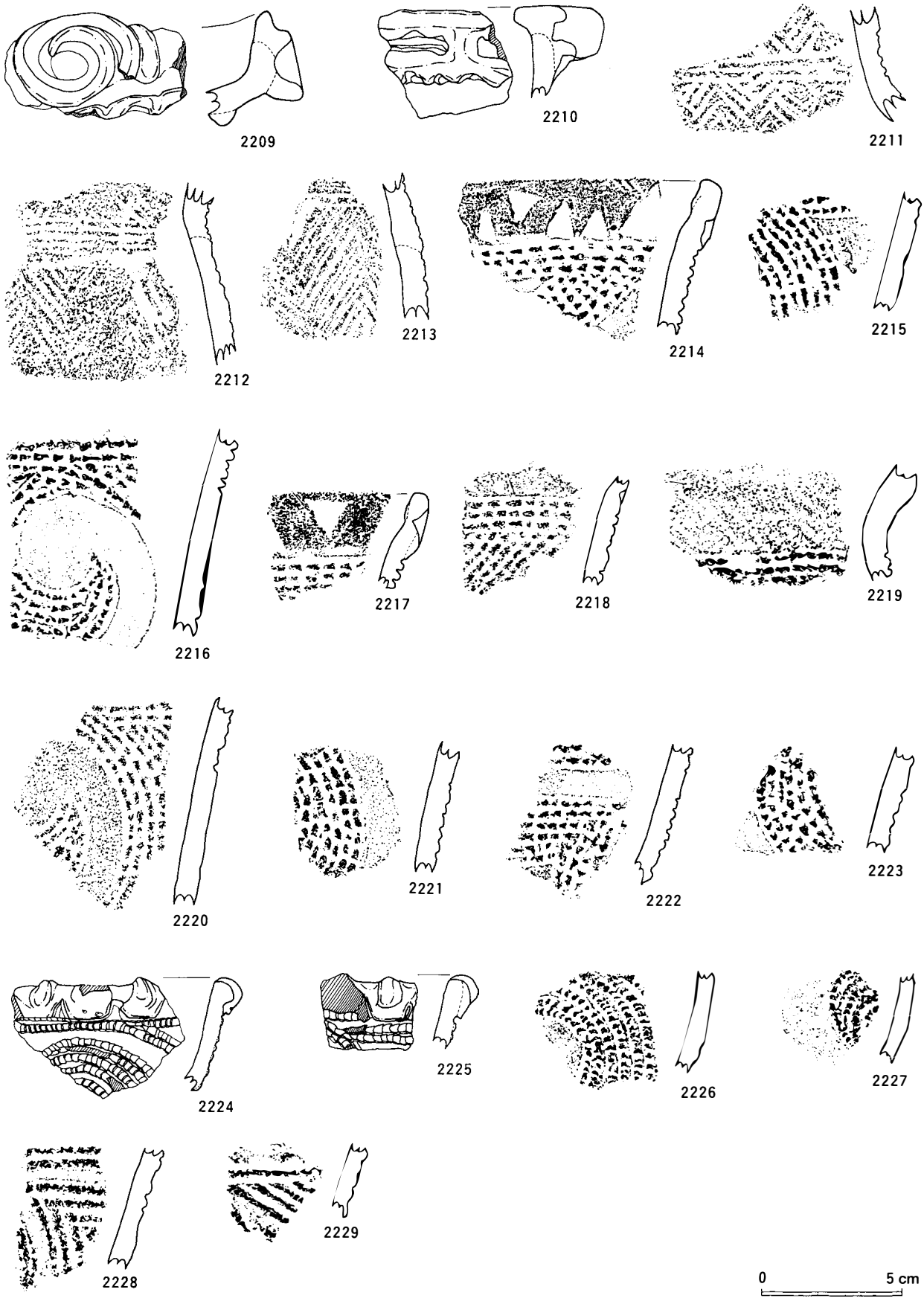
1296は2224・2225同様、端部外面に瘤状の突起を持つ口縁部片である。外面には結節浮線によって同心円文が描き出されている。これらの結節浮線は細い粘土紐を貼付し、丁寧に細かく押し引いている。はみ出しはない。2226は胴部であるが、浮線の感じから1296等に類似するものであろうと思われる。1297・1298も結節浮線文を持つ個体である。1297は口縁部で、端部がやや内側へ向けられている。1298は細片のため詳細不明である。

1407は中央高地で発達したタイプである。口縁端部から胴部中央までの破片と胴部下半から底部に至るまでの破片であったが、文様構成から器高を推定し復原した。底部は平底で胴部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反しながら開いていく器形を呈する。やや深めの花瓶のような形である。口縁部外面には蝶ネクタイ状・半円状・耳状の突起が貼付られている。現存する口縁部を見る限りでは、半円状突起を中心に、その両脇には蝶ネクタイ状突起が、またその外側には耳状突起が左右対称に配されている。これらの口縁部外面の突起は、長野県を中心とした中央高地で多く出土している晴ケ峰式土器によく見られる。1407の耳状突起は逆「の」の字状であるが、同様の耳状突起を持つ口縁部と思われる2209は「の」の字状である。口縁部外面の突起は粘土紐の貼付によるものであるが、外面だけでなく内面にも粘土紐の貼付がある。内面は突起ではなく隆帯である。上から見た文様構成は、内径部分に1条貼付し、その隆帯を基に4単位の弧状文が描かれる。弧状文が内径の隆帯と交わる部分には筆記体小文字の「ｒ」に似た文様がある。器形その他の点で類似する土器はあるが、内面に装飾隆帯を持つ例はないように思われる。頸部は無文帯で、横位2条の隆帯が貼付られている。それらの隆帯は指頭によってつまみ上げられている。胴部には非常に緻密な装飾が施されている。周りをえぐり取ることによって浮き上がらせた半隆起線や無文帯で幾何学的な文様を描き出している。３～５条の半隆起線を縦位・横位に施すことによって縦長の文様区画を形成している。縦位方向は二段であるが横位方向は不明である。文様の小単位を見ると「の」の字状のものが多いように思われる。半隆起線上には細かな刻みが無数に施されている。

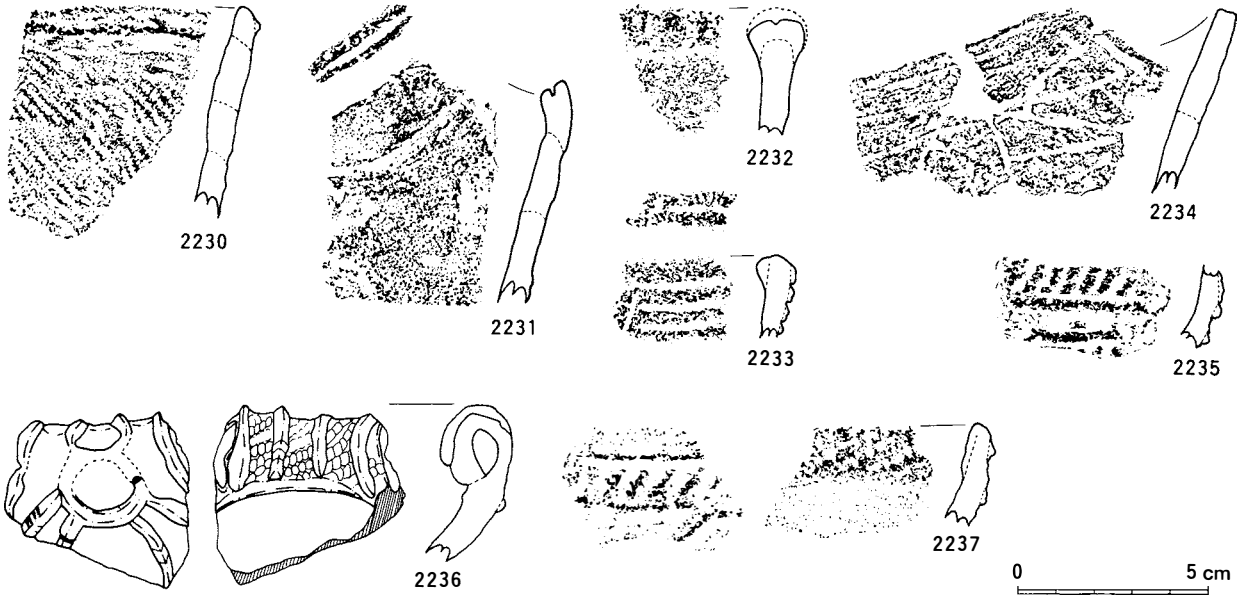
2214～2223は北陸方面に広く分布するタイプである。同一個体ではないが、同様の特徴を有するのでまとめて説明する。2214・2217は口縁部である。やや内面肥厚している。口縁部外面は無文帯に三角印刻文が施されている。2214を見る限りでは、三角印刻文の頂部の上下には規則性がないようであるが、2214の三角印刻は乱雑な感じがするので、参考とならないかもしれない。三角印刻文が施された無文帯の下にはしっかりとした押し引きが直接器面に施されている。押し引きによって描き出されている文様は2216・2220に見られるような蕨手状であるが、その蕨手部分は無文である。2215・2218・2221～2223も同様である。

2226・2227は1296等と同様に結節浮線文を持つ胴部片である。2214等の直接器面に押し引いているものに比べると1条の幅は狭い。

2228・2229は同一個体の可能性がある。摩滅しており詳細は不明である。



第112図　縄文土器実測図(29)第2群Ⅵ類



第113図　縄文土器実測図(30)第２群Ⅶ類

第２群Ⅶ類

本類は、縄文土器のうち前期後葉に帰属すると思われるが、詳細が不明なものや、上記の第Ⅰ～Ⅵ類に含めることができなかったものを一括した。12点図示した。

1249は内面肥厚し端部に刻みがある。口縁部片である。内面肥厚やさざ波口縁という点では、他に類似するものは多いが、口縁下外面に横位１条の沈線がある。工具によるものであると思われるが、意図的な沈線であるのか、調整等の際に生じたものなのかは不明である。そのため本類に含めた。

1299は外面に不連続な生爪痕を持つ胴部片である。他にも数点確認したがそのうちの１点のみを図示した。

1392は無文の口縁部片である。波状口縁の波頂部である。

2230は口縁部外面に１条の突帯を貼付している。突帯は摩滅しており不明である。

2231・2232・2233は肥厚した口縁端部に１条の沈線を施している。2231の沈線は深く、2232は浅い。2231は波状口縁である。2233は口縁部外面に３条の沈線が見える。

2234は端部をきちんと面取りした口縁部片で、波状である。外面には成形の際に生じた工具らしき痕跡と比較的新しい痕がある。2235・2237はともに口縁部片である。詳細は不明である。

2236は端部を内側に湾曲させ、空洞を設けている口縁部片である。数条の突帯が貼付られており、文様は円形文を中心に２条１組で放射状に配されている。突帯の断面は比較的高く、突帯上には押し引き状に見える部分もある。波状口縁の波頂部である可能性がある。本地点から出土した土器群の中には類例はないため本類に含めた。

（堀田一浩）

第3群

第1地点で確認できた本群の土器は全部で156点で、その内訳は遺構からの出土が7点、包含層からの出土は149点である。遺構出土2点、包含層出土17点の19点を図示した。

2238は口端部を欠くが、口縁部から頸部にかけて破片である。貝殻背圧痕が施される。内面において、頸部の屈曲部に明瞭な稜をもつ。船元Ⅰ式に類似した特徴を持つ。船元・里木式土器様式の第2様式期に併行するものと考えられる。類似資料は上原遺跡ではこの1点のみである。

2239・2241～2246は、縄文地で刻みを施した隆帯によって文様を描くもので、C1群土器（『上原遺跡Ⅰ』にある。以下、同じ）に分類できる。2241～2243は同一個体と考えられる。波状口縁である。2239は口端部を欠く口縁部片で剝離した隆帯の痕跡が認められる。2246は口端部を欠く口縁部片で、高い隆帯を貼る。2244・2245は胴部片である。船元・里木式土器様式の第3様式に併行すると考えられる。

2240は、周りをえぐった半隆起線で「W」字状もしくは鋸歯状の文様を描き出している。きつく外反する口縁部～頸部の破片である。中期初頭に帰属する東日本系土器と思われる。

2248は、口端部付近をやや内側に屈曲させた無文地のもので、棒状工具を斜めに刺突をして文様を描く。C5群B類に分類できる。

2249・2250・2251は、いずれも胴部片である。C11群に相当する。2250は頸部に横方向にコンパス文を、胴部には縦位帯縄文を施す。

2247は、中期のものと思われる。

2252は、胴部片で、後期の可能性が考えられる。

2253は、晩期馬見塚式土器の壺と思われる。

2254は、口端部を欠く口縁部片で、凸帯を横方向に貼り、その上に貝殻背圧痕を施す。B4群に分類できる。東海地方の編年の馬見塚式に併行すると考えられる。

（近藤大典）

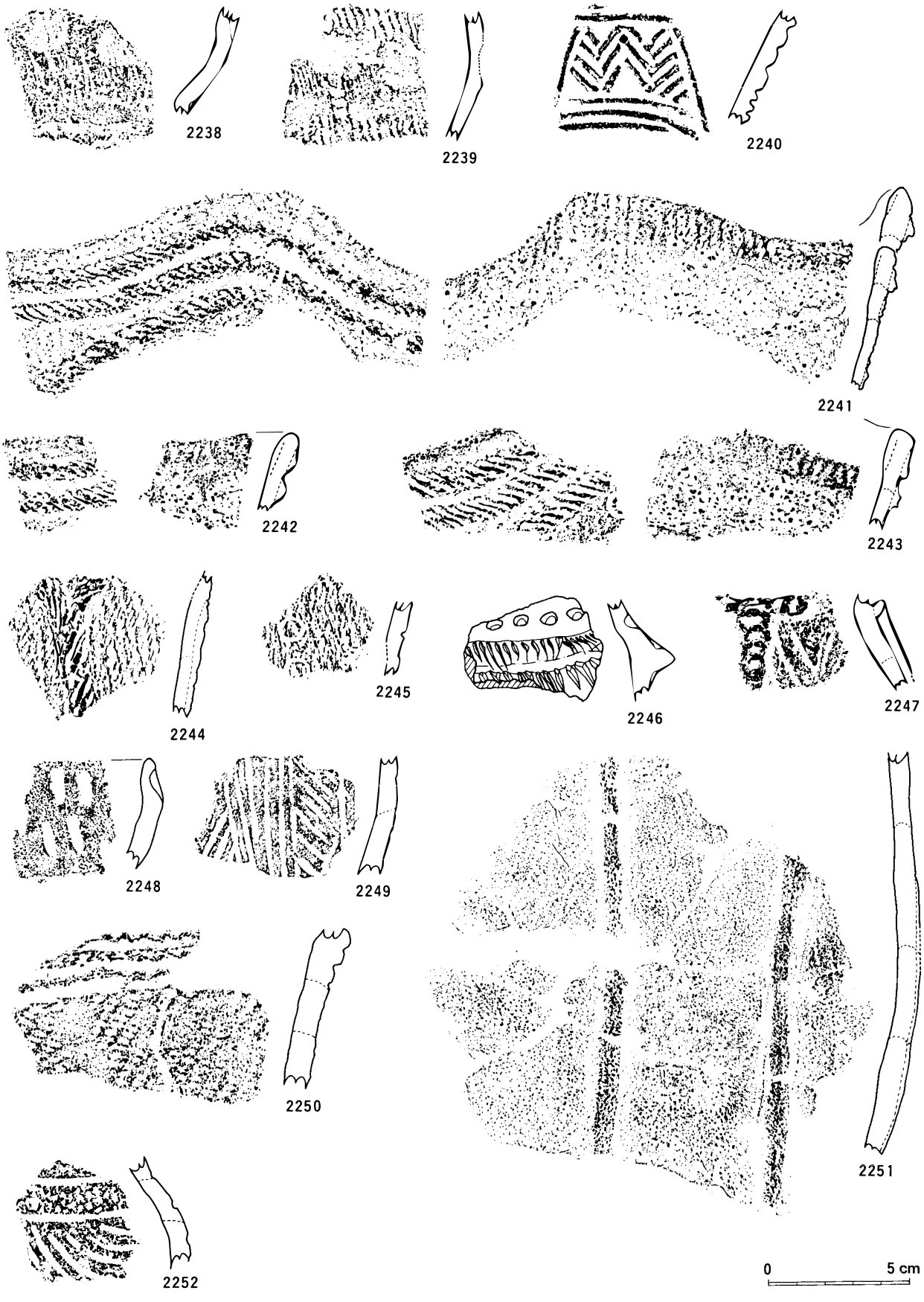
第4群

遺構出土の2点のみを図示した。詳細は不明である。

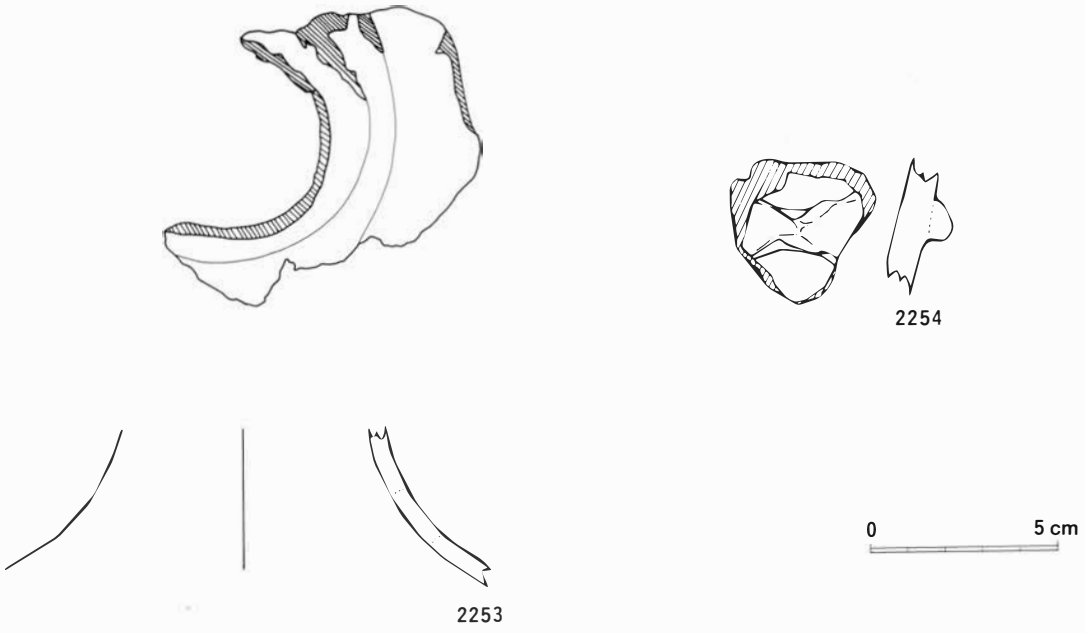
第2地点出土の釣り手土器

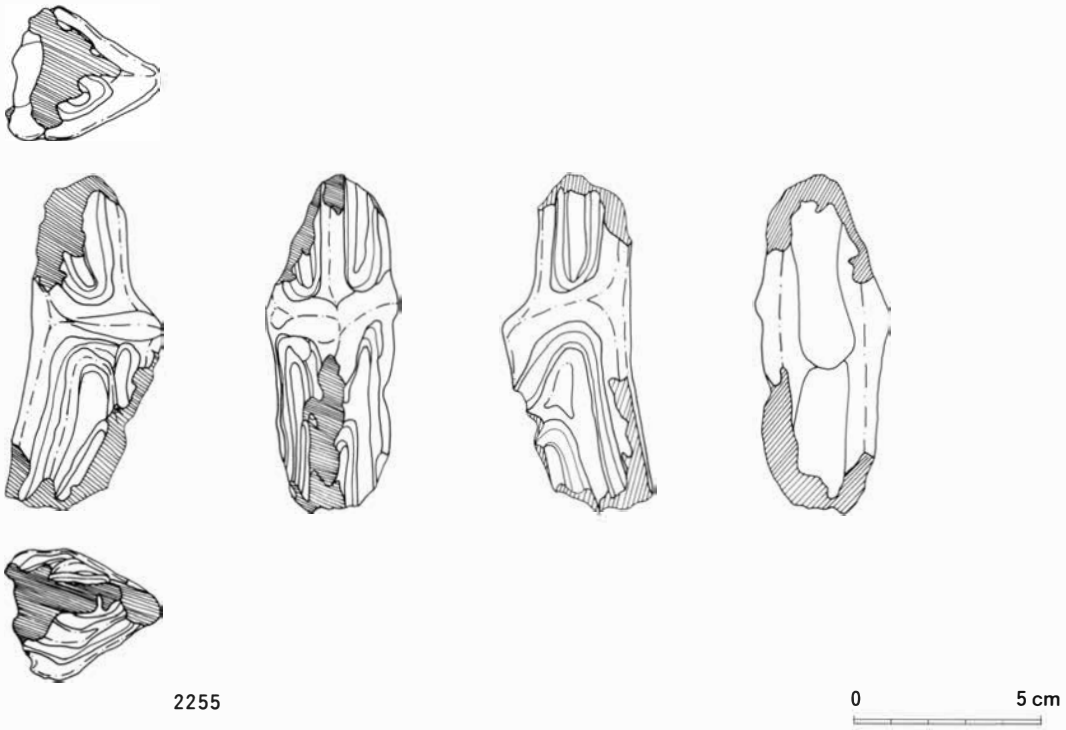
2255は、第2地点で出土したもので、信州唐草文系の釣り手土器の釣り手部分である。本来、『上原遺跡Ⅰ』に掲載するべきものであったが、編集上の都合によりここで報告することになった。

（近藤大典）



第114図　縄文土器実測図(31)第3群





第115図　縄文土器実測図(32)第3群土器・AH2出土土器

『上原遺跡Ⅰ』における土器分類

中期

Ｃ１群　地文に縄文を施し隆帯を主文様とした土器群。

Ｃ２群　地文に縄文を施し半截竹管状工具による平行沈線を主文様とする土器群。

Ⅰ類　地文に縄文を施し平行沈線文を主文様とするもの。

Ⅱ類　地文に縄巻縄文を施し平行沈線文を主文様とするもの。

Ｃ３群　地文に撚り糸文を施し、平行沈線、または棒状工具による沈線を主文様とする土器群。

Ｃ４群　Ｃ１群からＣ３群に分類することができないが、同様な特徴を持つ土器群。

Ｃ５群　大きく外反し端部付近で屈曲した口縁部を持つものとそれに類する器形で、無文地に隆帯や沈線を主文様として多用した土器群。

Ⅰ類　隆帯を多用するもの。

Ａ　口縁端部の屈曲部に横位に隆帯を貼り、それ以下の口縁部に縦位の隆帯を多条に施したものとそれに類するもの。

Ｂ　器形・文様構成などＡに似るが文様の施文パターンが違うもの。

Ⅱ類　沈線を多用するもの。

Ｃ６群　無文地にく字状の押し引きを施したものとそれに類する土器群。

Ｃ７群　無文地に隆帯や沈線で文様を施す土器群。

Ａ　口縁直下に交互刺突あるいは刺突列を施すもの。

Ｂ　隆帯を主に用いるもののうち、細い素麺状隆帯による格子目状文を施すもの。

Ｃ　隆帯を主に用いて文様を施すもの。

Ｄ　沈線を主に用いて文様を施したもの。

Ｅ　口縁端部が高く立ち上がる器形で、文様に主に隆帯を用いるもの。

Ｆ　Ｅと同様の器形で、沈線を主文様とするもの。

Ｇ　把手を持つもの。

Ｃ８群　口縁部に方形ないし楕円の区画を持つ土器群。

Ｃ９群　隆帯あるいは沈線を用いて渦巻き文や区画文を施す土器群。

Ａ　区画内に縄文を充填するもの及び縄文を地文とするもの。

Ｂ　区画内に沈線を充填するもの。

Ｃ　区画内が無文のもの。

Ｄ　区画内あるいは沈線内に刺突を施すもの。

Ｅ　器形・文様においてＡ～Ｄに分類できないが、本群と判断したもの。

Ｃ10群　把手や発達した山形口縁を持つ土器群。

Ｃ11群　Ｃ９群・Ｃ10群の胴部片。

Ｃ12群　Ｃ１～Ｃ11群に分類できないが、中期の深鉢であると判断した土器。

後期

Ｋ1群　幅広の磨消縄文によって文様を描く土器群。

Ｋ2群　Ｋ1群に比較して幅の狭いあるいは3本沈線の磨消縄文によって文様を描く土器群。

Ｋ3群　口縁部の肥厚や屈曲部が強く文様帯化した土器群。

Ｋ4群　屈曲あるいは肥厚した口縁部に文様を集中した土器群。

Ⅰ類　口縁部の屈曲や肥厚が強いもの。

Ⅱ類　口縁部の屈曲や肥厚が弱いもの。

Ｋ5群　堀之内・加曾利Ｂ式土器に類似する土器群。

Ⅰ類　堀之内式に類似するもの。

Ａ　内側に少し折り曲げた口縁部に沈線を1条施すもの。

Ｂ　磨消縄文を用いるものとそれに類するもの。

Ｃ　口縁部を屈曲あるいは肥厚させて文様を施すもの。

Ｄ　口縁部内側に縄文・沈線を施すもの。

Ｅ　Ａ～Ｄに含まれないが本類と思われるもの。

Ⅱ類　加曾利Ｂ式に類似するもの。

Ⅲ類　内面施文したもの。

Ｋ6群　Ｋ1～Ｋ5群に分類できない後期の土器。

Ｋ7群　後期土器の胴部片。

晩期

Ｂ1群　Ｂ2群以前の晩期の土器。

Ｂ2群　口縁部が短く外傾する深鉢。

Ｂ3群　口縁部が強く外反し、面とりされた口縁端部に刻み目及び押し引きが施される無突帯刻目系深鉢。

Ｂ4群　Ｂ3群の器形に突帯文を有するもの。

Ｂ5群　砲弾形ないしはバケツ形を呈する粗製の深鉢。

Ｂ6群　有文精製土器および晩期と判断される分類不能の土器。

中期以降の浅鉢・注口土器・壺・その他

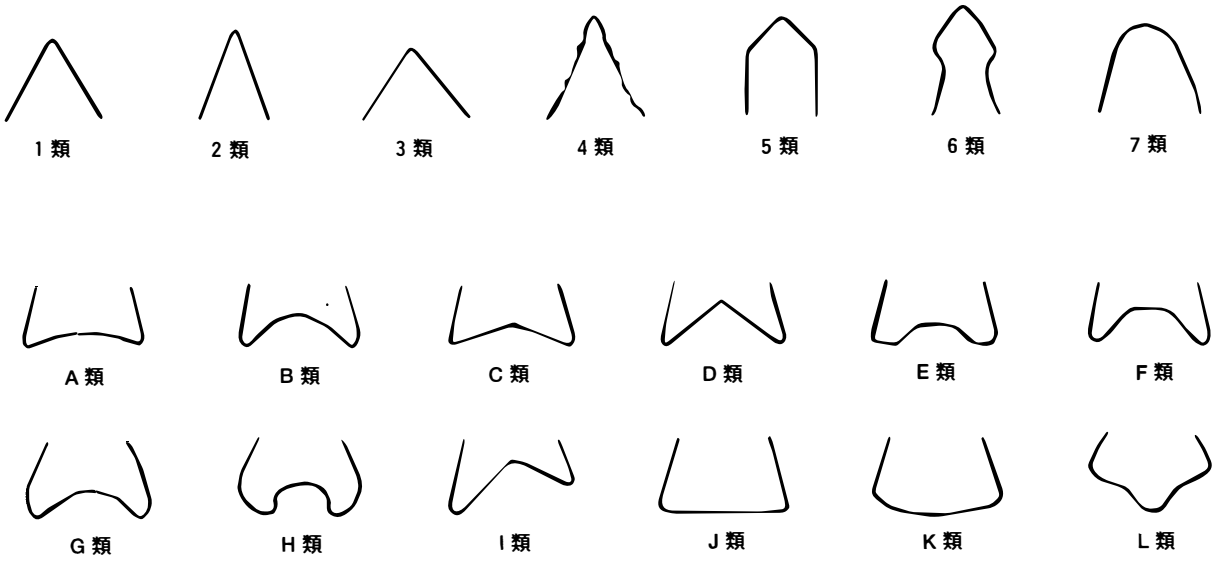
２．石　器

本地点からは10,183点の石器が出土した。各器種の定義や使用用途、分類、出土点数、石材などについて順に述べることにする。

１．石　鏃（14･28･35～37･45～53･121･122･166･167･181～215）

刺突による殺傷が想定できる石器。199点出土。その多くが貝殻状の剝片および横長剝片の縁辺に調整を加え、形状を整えたものである。石材は、チャートが183点で全体の92％を占め、残りの部分を他地域からの搬入石材である流紋岩質溶岩（下呂石）６点、黒曜石５点、サヌカイト５点が充塡している。

刺突の度合いを示唆する先端部と、矢柄との装着を示唆し、石鏃の形態を最も特徴づける基部の形態をもとに次のように分類した。



第116図　石鏃の平面形による分類

〈鏃身部を含む先端部の分類〉

１類：鋭角な先端部をもつもの。（平面形先端角≒60°前後）

２類：１類より鋭角な先端部をもつもの。（平面形先端角≒40°前後）

３類：鈍角な先端部をもつもの。（平面形先端角≒70°以上）

４類：鋸歯状の側縁部をもつもの。

５類：側縁部に肩をもち、その下は直線状になるもの。

６類：先端は尖り、側縁部に肩が張った形状をもつもの。

７類：先端が丸いカーブを描くもの。

〈基部の分類〉

Ａ類：凹状のわずかな抉りが入るもの。

Ｂ類：丸みを帯びた深い抉りが入るもの。

Ｃ類：「く」の字状の浅い抉りが入るもの。

D類：「く」の字状の深い抉りが入るもの。

E類：U字状の抉りが入り、脚端部が丸みを帯びるもの。または、脚端部が直線状になるもの。

F類：抉りの部分が直線状になるもの。

G類：脚部にあたる部分が外反し、抉りが入るもの。

H類：G類と同様の脚部をもつが、脚部先端がやや内側に入るもの。

I類：いわゆる片足鏃で、基部の片方にしか脚部がないもの。または、片方の脚部が、もう一方に比べ小さいもの。

J類：いわゆる平基鏃で、基部が直線状になるもの。

K類：いわゆる円基鏃で、基部が丸みを帯びて突出するもの。

L類：いわゆる有茎鏃で、基部に茎部をもつもの。

各類の出土点数と遺物番号を第3表に示した。H類は、第1地点ではみられなかったが、他の地点では出土例があるため、参考として掲載した。

形態的、あるいは製作方法について特徴のあるものについて説明することにする。195・206は、基部にU字形の大きな抉りが入り、角状の大きな脚部をもつ凹基無茎鏃である。これらは押型文土器に伴う早期の指標的な石鏃に類似している。212は、剥片の縁部のみに調整を施した剥片鏃で、抉り入りの

第3表　石鏃の分類別出土点数　（　）内は遺物番号

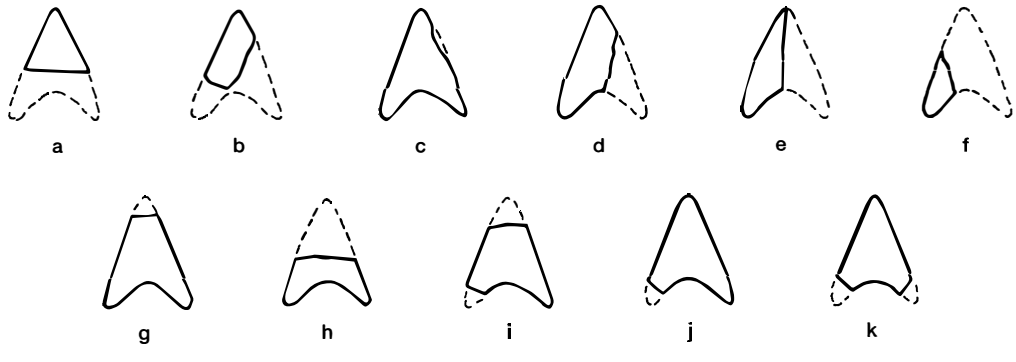
	1　類	2　類	3　類	4　類	5　類	6　類	7　類	不　明	計
A　類	5 (45・181)	5 (50)	6 (167)		5 (212・213)		2	4	27
B　類	11 (46・47・182)	3 (28・51・166)	4					3 (37)	21
C　類	2 (183)	4	2 (205)					3	11
D　類	9 (48・184)	13 (49・193・194)	3					1	26
E　類	6 (185)	1 (195)	1 (206)	1 (14)			1		10
F　類	1 (186)								1
G　類	11 (35・187～189)	8 (196・197)	6 (207)	2 (211)		1 (214)	1 (215)	5	34
I　類	4 (190)	9 (198～203)							13
J　類	9 (121・122・191)		5 (208・209)				4	3	21
K　類	2		6 (36・53・210)		1		1		10
L　類	1 (192)	1 (204)							2
不　明	7	7 (52)	1	1	2		1	4	23
計	68	51	34	4	8	1	10	23	199

浅い三角形状の凹基無茎鏃である。早期に属する可能性をもつ。213は、両側縁が段をなし、五角形となるものである。早期後半のものとも思われる。121・122・191・208・209も、早期に伴う三角形あるいは長三角形状の平基無茎鏃と思われる。48・184・196・205・207は基部の抉り入りが深く、比較的幅の広い凹基鏃であり、前期の特徴的な石鏃といえる。これらはいずれも基部の両端が鋭くなっている。192・204は有茎鏃であるが、後者は薄手で細身のものである。198・199は片脚の石鏃であるが、脚部のない方もよく調整されている。200から203は片方の脚部がもう一方に比べ小さく作出されているが、201は黒曜石製で、素材剥片の形状に左右された結果この形態になったと思われる。202・203は、先端部の断面や基部の形態から考慮すると石錐の可能性も含む。211は、表裏から交互に押圧剥離を加えた鋸歯状の側縁を有するものである。

53点を図示したが、主要剥離面が確認できるものは両面を図化し、確認できなかったものは片面のみを図化した。

また、合計199点のうち、折損のみられるものは111点であった。その部位によって第117図のように分類した。それぞれの点数は次のとおりである。

a　2点、　b　1点、　c　1点、　d　18点、　e　3点、　f　5点、　g　21点、
h　5点、　i　18点、　j　29点、　k　8点、



第117図　石鏃の折損部位

折損部位をみる限り、先端部と脚部をわずかに折損するものが圧倒的に多いことがわかる。

次に、石鏃未製品について述べることにする。素材となる剥片のサイズや調整方法などから、石鏃の製作途中と判断できるものや、石鏃の製作を途中で断念したと思われるものを石鏃未製品とした(54・55・123・124・216～225)。45点出土。そのうち14点について、製作工程や製作進度を示すため表裏とも図示した。石材はすべてチャートである。

〈製作中止の理由などによる分類〉

1類：厚みや急角度のエッジなどによる整形・調整剥離の困難さから、製作を途中で中止したと考えられるもの。25点出土。(54・123・216～221・223・224)

2類：折損のため、製作を途中で中止したと考えられるもの。20点出土。(55・124・222・225)

石鏃未製品か否かの判断は難しく、まずは、調整加工が可能な素材剥片の大きさと厚みを有することを前提条件とした。節理も剥片取りの際には配慮したかもしれないが、調整の段階ではそれほど影

響を与えたとは思えないため無視されたものと考えた。また、平面形が寸詰まりのものは、折損品の再利用と考え、未製品から除外した。

54・216は、いずれもバルブ付近の厚みを減ずることができず、製作の続行を断念したものと推測される。54は、厚みを減じようとして一部剝離を試みた痕跡が認められる。216は、未調整部分が多く残ることから、製作の初期段階のものと推測される。217も、素材の厚みが障害となって製作を中止せざるを得なかったと思われる。これらは、コアの段階で打面を整えずに剝片をとった結果ともいえる。打面調整を施しておれば、もう少し良好な剝片素材となる薄手の剝片が得られたはずである。221は、厚みに加えエッジが急角度であったのが中断の原因と思われる。55・225は、折損による中断と思われるが、55には折損後に再び調整を試みた痕跡がみられる。

2　石　槍（226～230）

刺突の作業が想定できる石器。平坦な器体の深部に至る調整剝離と周辺の調整加工によって整形され、凸状の断面を有している。石鏃よりサイズ的に大きく、尖頭部と基部を作出し、木の葉形や柳葉形を呈する。11点出土。そのうち5点が折損品であり、尖頭部を折損するものが2点、基部を折損するものが3点である。5点図示した。

使用に際しては、主に柄に装着し、投げて刺す、手持ちで突くといった状況が想定される。石材は、チャートが8点、サヌカイトが2点、泥岩が1点である。

尖頭部と基部の形態的視点から分類すると次のとおりである。

〈尖頭部の形態による分類〉

1類：両側縁を弧状に整形するもの。5点。(226、227)

2類：両側縁を弧状、直線状の両者に整形するもの。4点。(228～230)

〈基部の形態による分類〉

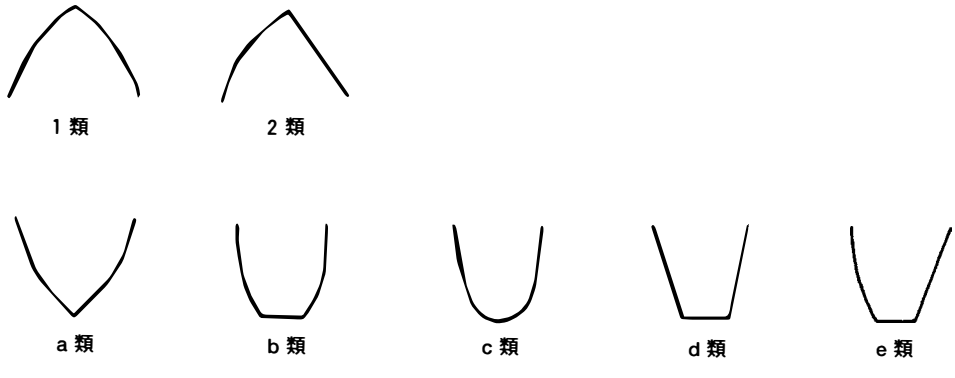
a類：両側縁を弧状に整形し、基端が尖頭状になるもの。2点。(226)

b類：両側縁を弧状に整形し、基端が直線状になるもの。1点。

c類：両側縁を弧状に整形し、基端が半円状になるもの。3点。(229)

d類：両側縁を直線状に整形し、基端が直線状になるもの。1点。(227)

e類：両側縁を弧状と直線状の両者によって整形し、基端が直線状になるもの。1点。(230)



第118図　石槍の尖頭部および基部の形態による分類

折損により基部の形態が不明の228を除いて、図示したものの多くは木の葉形を呈している。226は、尖頭部・基部ともに両側縁を弧状に整形し、側縁には細かな調整加工が施されている。基端部をわずかに折損するが、折損前は尖頭状になっていたものと思われる。227は、泥岩を使用し、長さ7.7cmという大きなサイズを有するものである。軟質な石材であることに加え、表面の風化がはげしく、わずかに稜線が観察できるのみである。228は、半月形の形態を呈し、折損により基部の形態は不明であるが、尖頭部の両側縁を弧状・直線状の両者に整形している。石材はサヌカイトである。229は、尖頭部の両側縁を弧状と直線状に整形し、基部は両側縁を弧状に整形することによって基端部が半円状を呈している。230は、本来226とほぼ同様の形態やサイズであったと推測されるが、尖頭部の折損により再調整された結果、右側縁が直線状になったと考えられる。基端部は一見折損しているようにみえるが、折れ面にも調整痕が観察できることから意図的に直線状にしたものと思われる。

石鏃が狩猟具の主力となってからも、先行していた石槍や後述の有舌尖頭器がなお存在することは、それらは形状を変化させながらもその機能を発揮していたと考えることができる。両者とも早期の土器に伴うものであるが、中でも石槍の比重は決して低いものではなかったといえよう。

３．有舌尖頭器（231）

刺突による作業が想定される石器。１点出土。石材はサヌカイトを使用。素材剥片の一端に舌状の柄（茎）を作出したもの。この柄は装着を目的にしたものと思われ、樹皮等によって縛られたと推測される。

231は、長さが8.9cmという大型のもので、全周に両面調整による鋭いエッジを作出している。尖頭部と基部とは抉りを入れることで、その区分を意識しているが、舌部の返しは未発達である。時代的には、弥生時代のものの可能性もあり、詳細については不明である。

４．石　錐（56～59･101･232～248）

穿孔および刺突の作業が想定される石器。両側縁からの調整により、錐状の突出した機能部を作出している。97点出土。このうち22点を図示した。石材には、チャートを多く使用し96点、残り１点は花こう岩（アプライト）である。

機能部の形態や数などにより、次のように分類した。

１類：不定形な剥片を素材とし、その端部に簡単な調整を加え、錐部を作出したもの。11点出土。（232～234）

２類：錐部作出しのための調整が１類より進み、基部（つまみ部）を有し、錐部と基部が区分されるもの。２点出土。

ａ類：１カ所の錐部をもつもの。１点出土。(235)

ｂ類：２カ所の錐部をもつもの。１点出土。(236)

３類：平面形が概ね三角形または菱形で、錐部と基部との境が不明瞭なもの。58点出土。

ａ類：１カ所の錐部をもつもの。56点出土。(56･57･101･237～241)

ｂ類：２カ所の錐部をもつもの。２点出土。(242)

４類：素材となる剥片のほぼ全面に調整剥離が施され、細身棒状に仕上げられたもの。24点出土。

a類：1カ所の錐部をもつもの。22点出土。(58･243～246)

b類：2カ所の錐部をもつもの。2点出土。(247)

5類：その他。2点出土。

a類：他の器種からの転用品。1点出土。(248)

b類：他の器種の機能をも有するもの。1点出土。(59)

素材の選択にあたっては、縦長剥片を素材とするものが54点、横長剥片を素材とするものが13点であり、その多くが3a類の形態を呈している（第4表参照)。これらのことから、稜線の残る角礫から縦長剥片をとり、打面に対して直交方向にある幅の薄い縁辺部に調整を加えるという製作方法をうかがうことができる。

錐部は、出土数97点で102カ所を数える。このうち、25カ所において錐部の折損がみられる。また、錐部に使用による磨耗が観察されるものは、折損による25カ所を除く77カ所のうち8カ所で、全体の10%である。

232～234は、不定形な剥片を素材とし、その一端に簡単な調整を加えて錐部を作出したものである。232は短い錐部を有するものであり、これに対して233は長い錐部を有するものである。錐部の長短は穿孔しようとする対象物の違いといえよう。234は表裏両面から調整加工が施されている。基部（つまみ部）は、錐としての機能を発揮する際に機能部を補助するものとなるが、235・236は基部を有する部類に属する。235は、錐部の作出が1類より進んだものとなっている。236は錐部を2カ所有している。57・237～241は、平面形が概ね三角形を呈する部類に入り、上端に打面が認められる。57・237は錐部の断面形は菱形、238の断面形は三角形である。57・237は、側面形が「く」の字状に屈曲するが、素材剥片の形状に左右された結果であろう。239の錐部は、やや短めで、五角形の断面形を有するが、使用による磨耗で先端が丸みを帯びている。241は、背面に自然面を残す初期剥片を素材としている。242は、平面形が概ね菱形で、長軸の両端部にそれぞれ錐部を作出している。56は半円形に近い形状を示し、長軸の端部に錐部を作出している。58・243～247は、素材剥片のほぼ全面にわたって調整加工が施されており、サイズに規格性がみられる。58・243は、細身のもので断面形は菱形を呈している。244の錐部は、比較的厚みと幅を有するものである。245・246は、錐部と基部とで調整の角度を変え、その区分を明確にしている。59は左側縁に折れ面を利用した片面調整を施すことにより急角度の刃部を作出し、さらに、右側縁には緩い角度の連続調整を施した刃部を作出しており、スクレイパー類との複合品と推測される。248は、石鏃からの転用品と思われ、その先端部分を再利用して錐部を作出している。

第4表　石錐の分類別素材剥片点数

	縦長剥片	横長剥片	不　明
1　類	8	3	0
2 a類	0	0	1
2 b類	1	0	0
3 a類	35	8	13
3 b類	0	0	2
4 a類	9	1	12
4 b類	0	1	1
5 a類	0	0	1
5 b類	1	0	0
計	54	13	30

５．スクレイパー類（13･29･38･60～71･102～105･125～132･168～172･249～281）

切削、または掻くなどの作業が想定される石器。出土総数198点。

素材となる剝片の形態は多岐にわたり、素材剝片の縁辺に緩い角度、または急な角度の剝離を施した石器群をスクレイパー類とした。石材は、ほとんどがチャートで、節理が入る粗雑なものを素材にする例が多い。形態、刃部の位置、刃部調整方法などにより、次の７種に器種分類した。なお、図化にあたっては、つまみ部付きスクレイパーと掻器IIは刃部を下にし、他は基本的に素材となる剝片の打点を上にして表現した。

（１）つまみ部付きスクレイパー（石匙）（60･102～104･168･169･249～261）

素材剝片の一部に２カ所から抉り込みを入れることによって、つまみ状の小突起を作出し、片面もしくは両面からの調整により刃部を作出した石器。26点出土。そのうち19点を図示した。石材は、サヌカイトがわずかに２点で、残りはすべてチャートである。全体に急角度の刃部を有している。

つまみ部（茎部）と刃部との位置関係により、次のように分類した。

１類：つまみ部を上にしたとき、器形が縦長で側縁部に刃部を有するもの。３点出土。（102･249）

２類：つまみ部を上にしたとき、器形が横長で下端の側縁部に刃部を有するもの。23点出土。（60･103･104･168･169･250～261）

249は、縦形のものであるが、小型で、つまみ部の抉り込みは粗雑である。102は、つまみ部周辺にタール状の付着物が認められる。刃部のほとんどを折損するが、縦形のものである。横形の形態を呈するものの多くは、素材剝片の打点付近につまみ部を作出しているが、254のように打点付近に刃部を作出したものも存在する。身部の形態は、整った三角形（103・250～253）のものを主体に、肩の張った台形（255～259）、楕円形（104・168・260）のものがみられる。これらは、北白川下層IIｂ・ｃ式期の土器に伴うものと思われる。この時期のものは、ほぼ左右対称な平面形をもち、つまみ部も中軸線上に位置することが多いが、つまみ部が中軸に対して斜交するもの（168・261）や、中軸と平行だが左右どちらかにずれるもの（258）もみられる。261は、身部の各辺が外彎する半月形を呈している。

（２）削　器（29･61～67･105･125～129･170･171･262～269）

不定形な剝片の縁辺に、概ね60°以下の緩い角度の連続調整（縁辺の長さの２分の１以上）を施して刃部を作出した石器。72点出土。このうち24点を図示した。石材は、チャートが67点、花こう岩が２点、流紋岩質溶岩（下呂石）１点、流紋岩質火砕岩１点、泥岩１点である。

なお、刃部の角度は、一部において60°以上の箇所がみられても刃部全体の傾向として判断した。このことは、他のスクレイパー類でも同様に判断した。

刃部数および調整方法により次のように分類した。

１類：１カ所の刃部を有するもの。

ａ類：片面調整により刃部を作出したもの。16点出土。（170・262～264）

ｂ類：両面調整により刃部を作出したもの。37点出土。（61～64・105・125・126・171・265～267）

２類：２カ所の刃部を有するもの。

a類：片面調整により作出した刃部を同一面（背面または腹面）の2カ所に有するもの。2点出土。(29・65)

b類：片面調整により作出した刃部を背面・腹面に1カ所ずつ有するもの。1点出土。

c類：片面調整により作出した刃部と、両面調整により作出した刃部を1カ所ずつ有するもの。7点出土。(66・127～129・268)

d類：2カ所とも両面調整により作出した刃部を有するもの。4点出土。

3類：3カ所の刃部を有するもの。

a類：片面調整により作出した刃部1カ所と、両面調整により作出した刃部2カ所を有するもの。1点出土。

b類：片面調整により作出した刃部2カ所と、両面調整により作出した刃部1カ所を有するもの。1点出土。(67)

c類：3カ所とも両面調整により作出した刃部を有するもの。2点出土。(269)

d類：3カ所とも片面調整により作出した刃部を有するもの。1点出土。

合計72点の削器には、96カ所の刃部が確認できた。刃部の平面形については、直線状のものが43カ所で全体の45%、凸状のものが41カ所で43%、凹状のものが8カ所で8%、その他が4カ所で4%であった。

平面形に注目すると、縦長剥片の側縁部に刃部をもつ縦形削器（262・265）と、横長剥片の末端部に刃部をもつ横形削器（263・266）がみられる。刃部は、直線状と凸状、凹状に分けられ、さらに、刃部の数によって単刃と複刃に分けられる。269は、押圧剥離によって表裏両面に全面調整が施され、3カ所の直線状刃部を有するものである。

（3）掻　器　I（38･68･70･172･270～272）

素材となる剥片の縁辺に、急角度（概ね60°以上）による調整を施して刃部を作出した石器のうち、不定形な剥片を素材として用い、刃部の位置や刃部の平面形、刃部作出方法がランダムなものを掻器Iとした。41点出土。そのうち7点を図示した。石材は、すべてチャートを用いている。

刃部数と調整方法により、次のように分類した。

1類：刃部数1のもの。

a類：片面調整により刃部を作出したもの。9点出土。(172・270)

b類：両面調整により刃部を作出したもの。17点出土。(68・70・271)

2類：刃部数2のもの。13点出土。(272)

3類：刃部数3のもの。2点出土。(38)

刃部は、全部で58カ所。刃部平面形は、直線状のものが19カ所で全体の33%、凸状のものが30カ所で51%、凹状のものが3カ所で5%、その他が6カ所で11%であった。

（4）掻　器　II（エンドスクレイパー）(273～275)

やや厚めの剥片を素材に使い、素材剥片の側縁部または末端部に規則的な急角度の連続調整を施し、凸状の刃部を有する石器。13点出土。そのうち3点を図示した。石材はチャート12点、サヌカイト

1点を使用している。

刃部の幅や平面形、調整方法などにより、次のように分類した。

1類：刃部の幅が比較的広く、ズレの少ない丸みを帯びた刃部を有するもの。

a類：片面調整により刃部を作出したもの。1点出土。

b類：両面調整により刃部を作出したもの。6点出土。(273)

2類：主に、縦長剥片を素材に用い、その末端部に丸みを帯びた刃部を作出したもの。刃部の幅は、1類に比べ必然的に狭いものになる。片面調整により刃部を作出し、主要剥離面からの調整が施されたもの。1点出土。(274)

3類：刃部の幅が広く、平面形はやや直線状で、刃部のほぼ中央で角度をもって折れ曲がり、先が尖るタイプのもの。

a類：片面調整により刃部を作出したもの。1点出土。

b類：両面調整により刃部を作出したもの。3点出土。(275)

4類：主に、縦長剥片を素材に用い、刃部位置は2類と同様で、刃部平面形はその中央部で尖るタイプのもの。両面調整により刃部を作出したものが1点出土した。

13点とも1カ所の刃部を有し、刃部の位置は素材剥片の末端部が9点で全体の69%、基端部が1点で8%、側縁部が3点で23%であった。調整方法は、両面調整が77%、片面調整が23%であった。調整は素材の側縁に及ぶことが多いが、端部の調整とは異なり、調整の角度は小さくなっている。全体の形態は、刃部側に最大幅があって基部側に狭くなるものが多い。

(5)掻　器　III(ラウンドスクレイパー)(13･130･276･277)

素材となる剥片のほぼ全周に急角度の連続調整による刃部を作出し、石器の平面形を円形または楕円形に仕上げた石器。16点出土。そのうち4点を図示した。石材は、チャート15点、花こう岩(アプライト)1点を使用している。

刃部の調整方法により次のように分類した。

1類：片面調整により刃部を作出したもの。2点出土。(276)

2類：両面調整により刃部を作出したもの。14点出土。(13・130・277)

(6)ノッチドスクレイパー(278)

不定形な剥片の縁辺に、片面からの細部調整によるノッチ(抉り)状の刃部を作出した石器。20点出土。そのうち1点を図示した。石材はすべてチャートを使用。どれも1カ所の刃部を有するもので、複数の刃部を有するものはみられなかった。刃部の調整は、表から裏へは15カ所で全体の71%、裏から表へは6カ所で29%であった。

278は、不定形な素材剥片に細かい調整を連続して刃部を作出している。

(7)複合スクレイパー(69･71･131･132･279～281)

素材となる剥片の縁辺に、削器・掻器I・ノッチドスクレイパーのうち、複数器種の刃部を併せもつ石器。10点出土。そのうち7点を図示した。石材はすべてチャートを用いている。

刃部の種類により次のように分類した。

1類：削器にあたる刃部と掻器Ⅰにあたる刃部を併せもつもの。5点出土。(71・131・132・279)

2類：削器にあたる刃部とノッチドスクレイパーにあたる刃部を併せもつもの。2点出土。(69・280)

3類：掻器Ⅰにあたる刃部とノッチドスクレイパーにあたる刃部を併せもつもの。3点出土。(281)

6．石　箆（72･282～288）

切削・掻くなどの作業が想定される石器。13点出土。そのうち8点を図示した。石材は、チャート12点と花こう岩（アプライト）1点を使用している。平面形は、ほぼ左右対称で、上方が狭く収束し、下方が広がる。全周にわたって調整が施されており、断面形は凸レンズ状を呈している。掻器や削器より厚みがあり、側面形も直線的である。両側縁は交互剥離によって稜が波打ち、急角度調整された刃部は半円状あるいは直線状である。小型の打製石斧に似るが、硬質の石材を選択していることや、使用による磨耗がほとんどみられないことから、石斧とは別の用途が想定されるため器種を分けることにした。

72は、ＳＢ05の床面と思われる地点から出土した。チャート製で、背面上方に自然面が残っている。腹面には主要剥離面が大きく残り、素材となる剥片の打点は末端部（刃部）付近と考えられる。刃部には、微細な剥離痕が認められ、使用痕の可能性もある。282はチャート製で、背面右側縁下部から中央部にかけて大きな節理面が斜走している。背面中央下部には自然面が残る。二次調整が全面にわたるため、素材となる剥片を作出した打撃方向は明らかでない。末端部だけでなく側縁部も刃部としての使用は可能であるが、わずかではあるが末端部の磨耗が他の部位より度合いが高い。整形および刃部作出のための剥離は、二次調整により比較的大きめの剥離を施し、その後細かい三次調整によって仕上げている。283はチャート製で、背面中央部に大きく自然面を残している。素材となる剥片は末端部付近に打点をもつと想定されるが、ていねいな二次調整によって失われている。腹面中央に残る面が主要剥離面と思われる。刃部は両側縁部および末端部と考えられ、ラウンドスクレイパー的な機能が考えられる。284は、節理の多い粗悪な石質のチャートを使用しているため、剥離も不明瞭である。末端部のみ比較的ていねいに調整し、刃部を作出している。285は、花こう岩（アプライト）製。平面形はほぼ長方形であるが、上端の稜と末端の稜はわずかに「ねじれの位置」になっている。上端の調整はやや粗く、末端部は細かい三次調整を施して直線状の刃部を作出している。286～288は、どれもチャート製で、腹面中央部に主要剥離面を残している。刃部もていねいに調整されており、287の刃部表面がわずかに磨耗している。

7．ヘラ形石器（15･289･290）

切削、あるいは掻くなどの作業が想定される石器。11点出土。そのうち3点を、すべて刃部を下にして図示した。石材は、すべてチャートを使用するが、節理面に覆われるものが多い。やや縦長の素材剥片の長軸の一端に刃部を有し、その両（片）側縁に截断面をもつヘラ形状を呈している。先端部（末端部）には、微細な使用痕や調整痕がみられ、側縁部は背面側からの截断が施されている。

15は、厚手の剥片を素材とし、両側縁部は截断面となっている。刃部には細かい剥離がみられる。289は、背面の多くが節理面となっている。腹面のほとんどが主要剥離面であるが、バルバー・スカー

の上部に節理が一部入り込んでいる。腹面末端部には、背面からの応力によって二次調整が加えられているが、末端部右側の部分は主要剥離面がステップ状になっており、それを利用した刃部を作出している。290は、比較的節理の多いチャートを使用している。素材となる剥片の打面は腹面左側縁部の節理面である。背面の中央部も節理面である。背面末端部は念入りに調整されているが、その他の部位はほとんど調整がなされていない。腹面右側縁部は背面からの応力によって折り取られている。

８．くさび形石器（291～293）

被加工物を割るためのクサビとしての使用が想定される石器。６点出土。そのうち３点を潰れ状の剥離痕が上下になるようにして図示した。石材は、すべてチャートを使用。平面形は四辺形を基本とし、向かい合った二辺の縁辺部に加撃と衝撃による階段状の剥離痕が対になって存在する。いわゆる挟み撃ちによって形成された端部をもち、剥片剥離以外の意図的な作出を有している。６点とも一対の潰れ状の剥離痕が発達しており、二対の潰れ状の剥離痕が発達するものはみられなかった。

291は、チャート製で、背面右側縁付近に大きな節理が縦走するが、それを除けば良好な材質といえる。背面右下および腹面左下には自然面を残し、左右両側縁の面は折り取られている。両極打法による二次調整が施され、上方部と下方部に潰れが認められる。292は良質なチャート製で、上端および下端に両極打法による剥離が進み、潰れもみられる。腹面右側縁部は折り取りによるものと思われる。293は、節理はあるものの緻密な石質のチャート製である。背面右側縁の剥離が激しいが、上下端からの剥離によって稜線が切られているため上下端の剥離の方が新しく、両極打法によって小型化、あるいは破損して使用に適さなくなったものと思われる。

９．両側縁調整剥片石器（73･109･294～296）

作業は想定できないが、薄く長い剥片の両側縁に調整剥離を施した石器。泥岩や砂岩といった比較的軟質の石材を素材に使用している。泥岩製42点、砂岩製１点の合計43点が出土した。そのうち５点を図示した。素材に用いる石材や、その形状から判断すると打欠石錘のようであるが、紐掛かりの部位がはっきりせず、詳細は不明である。石錘を製作する前段階のものの作り置きかもしれない。あるいは、二次調整をみる限り打製石斧、スクレイパー類の可能性も有するが、使用痕が認められないことから使用用途についても不明な部分が多い。

109は、ＳＢ06から出土したもので、泥岩の薄い素材剥片の両側縁に粗い調整剥離を施している。側縁の一方が凹状に内彎し、もう一方が凸状に外彎するが、外彎する方の調整剥離が比較的ていねいである。収穫用具としての粗製刃器と推測される。294は泥岩製で、最も長大なものである。表面には自然面が残り、両側縁には細かい調整がみられる。295は泥岩製で、小型のものである。上端部に打面が残り、両側縁から末端部にかけての調整がみられる。296は砂岩製で、表面に自然面を残す。長軸の両端に打ち欠いた痕跡らしきものが認められるが、上端部の方は縁が鋭く、紐を掛けた痕跡は見当たらない。右側縁を刃部として使用した粗製刃器の可能性をもっている。実際に手に持ってみると、左下方の剥離に親指が丁度うまくフィットし、摘む作業や掻く作業に適しているように思われる。両側縁ともにわずかな磨耗がみられる。

10. 打製石斧（石製土掘具）（74・75・153・179・180・297～317）

名称は石斧というものの、主に掘削などの作業が想定される石器。原礫や剝片を素材とし、縁辺から粗めの調整を施して形状を整え、長軸の一端に刃部を作出している。204点出土したうち、26点を図示した。

石材は、泥岩や砂岩などの堆積岩を多く用いている（第5表参照）。どれも徳山地内で採集できる川原石を素材としているが、これらの石材のフレイクは遺跡内から出土することは少ないため、この石器の製作は採集地付近の川原で行われたものと推測される。

製作方法は、次の2種に大別される。

1．自然面を表裏両面に有する素材剝片を用い、その縁辺部に調整を加えて形状を整えるもの。

2．自然面を表面に残す横長剝片を用い、その縁辺部に調整を加えて形状を整えるもの。

さらに、柄部分との着装を意識し、素材の厚みを調整するための剝離や折り取りを施している。

また、形態的視点から類別を行うと次の3分類となる。

1類：両側縁がほぼ平行するもの。または両側縁が外彎し、最大幅が胴部に位置するもの。72点出土。（75・153・297～303）

2類：両側縁が基部に向かって収束するもので、刃部が最大幅を有するもの。69点出土。（179・180・304～311）

3類：両側縁に、抉りを作出したもの。35点出土。（312～317）

なお、折損により分類不明のものは28点であった。

表面または両面に自然面を有するものは121点あり、全体の59%である。刃部に磨耗が認められるものは111点で、折損により不明の84点を除くと全体の93%になる。基部に装着等によると考えられる潰れが認められるものは175点で、折損により不明の15点を除くと全体の93%ほどを占める。

図化するにあたっては、素材の背面側を正面とし、側面および最大厚部位の断面を示した。刃部および基部の磨耗はその範囲をドットのスクリーントーンで表し、稜線やリング・フィッシャーがわずかに観察できるものは点描した。また、装着によってエッジ部分にできたと思われる潰れも同様に点描した。

75・153・297～303は、1類に属する部類である。297は安山岩製、298・299は砂岩製で、表面に自然面を有する横長剝片を使用している。297・298は、正面からみて右側縁に打点を有している。299は、打製石斧にしては小型であり、形状的には石箆に似たものであるが、刃部に刃こぼれ状の使用痕がみられること、さらに、軟質の石材を選択していることから打製石斧の部類に入れた。300～303は、石材に泥岩を用いている。300は泥岩を板状に剝離し、典型的な短冊形に形状を整えている。上・下端に、ほぼ平行に節理面を残しており、刃部の節理面は掘削の作業の妨げになると思われるが鋭利な刃部にしなかったということは短冊形の平面形を優先させたものと思われる。301・302は、いずれも刃部が激しく磨耗し、線状痕が観察できる。301は表面にくらべ裏面の磨耗はわずかである。

第5表　打製石斧の石材別出土点数

石　材	出土点数
泥　岩	99
砂　岩	72
安山岩	18
花こう閃緑斑岩	8
流紋岩質火砕岩	4
ホルンフェルス	1
安山岩質火砕岩	1
はんれい岩	1
合　計	204

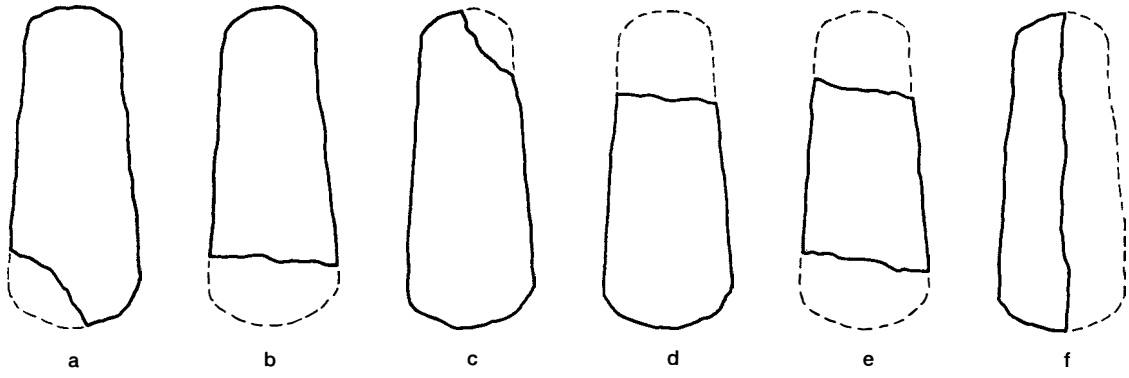
302は基部側の端部にも線状痕が観察できる。303も泥岩製であるが、表裏ともに自然面を有する礫を使用し、その周囲に粗い調整を施して形状を整えている。

179・180・304～311は、撥形をしており、2類に属するものである。304～308は、砂岩製で表面に自然面を有する。正面からみて右側に打点をもつ横長剝片を使用している。306は、正面からみて左側に打点を有する横長剝片を使用している。307は、自然面が両側面まで回っており、転石に簡単な加工を加え刃部と基部を作出したにとどまっている。308は、正面からみて右側に打点をもつ横長剝片を使用するが、打点部分の厚みを減ずるために裏面から折り取っている。おそらく、装着を安定させるためのものであろう。309は、流紋岩質火砕岩を石材とする小型の製品である。299と同様、軟質な石材を用い、使用によると思われる刃こぼれが観察できることから打製石斧の部類に入れた。310は砂岩製で、表裏ともに自然面を有する礫を使用し、側縁に簡単な調整を加えている。なお、刃部は折損している。

312～317は、分銅形をしており、3類に属するものである。312～316は砂岩製で、正面に自然面を有する横長剝片を使用している。312は、両側縁が潰れている。素材となる剝片を得る際の打点となったためと考えられる。313は、312にくらべ、両側縁が鋭くなっている。裏面からの調整剝離のためであろう。314は砂岩製で、正面右側に打点を有する横長剝片を使用しているが、打点付近の厚みを減ずるために裏側からの折り取りがなされている。316は砂岩製で、厚みのある剝片を素材とし、刃部よりも基部の調整が密になされている。317は泥岩製であり、刃部と基部のバランスはよくないが、基部側に激しい折損の痕跡が残り、刃部側には光沢がみられることから、もともとの刃部が折損したため、新たに基部を刃部として使用したものと思われる。

なお、折損が認められるものは149点で、全体の73%となる。その部位によって第119図のように分類した。それぞれの出土点数は次のとおりである。

a　10点　　b　66点　　c　9点　　d　44点　　e　19点　　f　1点



第119図　打製石斧の折損部位

11. 磨製石斧（76･77･135･318～328）

伐採・切断・加工の作業が想定される石器。対象物は木材と推定される。49点出土。そのうち14点を図示した。石材は、火成岩を主体とし、安山岩が82%以上を占める40点で、その他の石材はわずかに1～3点というように限定される傾向が強い。（第6表参照）これらの川原石を用い、大割りした剝片を整形し、その後研磨を加えている。

平面形、および断面形、サイズにより次のように分類した。

〈平面形による分類〉

1類：最大幅が刃部に位置し、両側縁が基部に向かって収束するタイプのもの。34点出土。(76・135・319・321・323～325)

2類：両側縁がほぼ平行になるタイプのもの。7点出土。(77・326)

3類：最大幅が胴部に位置し、両側縁がわずかに外彎するタイプのもの。8点出土。(318・320・322・327・328)

〈断面形とサイズによる分類〉

a類：基部断面形が楕円形で、乳棒状と呼ばれる分厚い斧身を有するのもの。22点出土。(76・77・135・318～320・327)

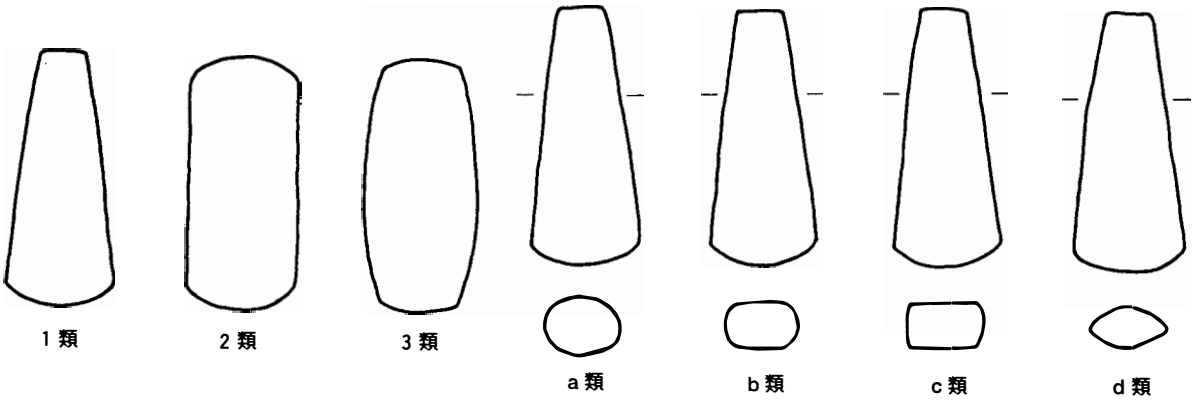
b類：基部断面形が丸みを帯びた長方形で、定角式の稜が不明瞭なもの。17点出土。(321・328)

c類：基部断面形が丸みを帯びた長方形で、定角式の稜が明瞭なもの。8点出土。(322・323・326)

d類：基部断面形が凸レンズ状を呈するもの。2点出土。(324・325)

分類別の出土点数は第7表の通りである。乳棒状の分厚い斧身をもつものが圧倒的に多く、1類の平面形をもつものは、a・b・c・d各類の断面形を有している。刃部の形態は、円刃が318・325～327など14点で、直刃は、322など5点であった。使用によって片減りし、偏刃となっているものは、77・135・319～321・323・328など15点であった。安山岩など軟質な石材に加え、石質が風化を受けやすいこともあり、刃部に線状痕の残るものはみられなかった。また、装着痕の残るものも確認できなかった。

製作手法をみると、はじめに調整剥離によって概ねの形状を整え、その後に研磨を施した痕跡のあるものは321・323～325など6点。調整剥離後に細かい敲打を加えることによって概ねの形状を整え、その後研磨を施した痕跡のあるものは319～320・326～328など18点であった。なお、玦状耳飾にみられるような擦切り手法によるものは確認できなかった。



第120図　磨製石斧の形態による分類

第6表　磨製石斧の石材別出土点数

石　材	出土点数
安山岩	40
砂　岩	3
泥　岩	2
安山岩質火砕岩	2
安山岩質溶岩	1
蛇紋岩	1
計	49

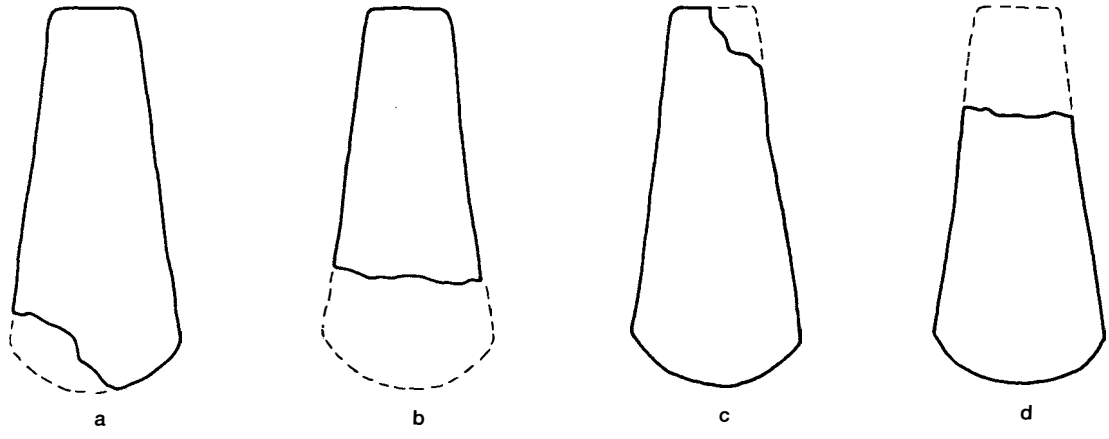
第7表　磨製石斧の分類別出土点数

分　類	出土点数	遺物番号
1 a 類	18	76・135・319
1 b 類	7	321
1 c 類	6	323
1 d 類	2	324・325
2 a 類	1	77
2 b 類	6	
2 c 類	1	326
3 a 類	3	318・320・327
3 b 類	4	328
3 c 類	1	322
計	49	

135は、ＳＢ07から出土したもので、砂岩製である。念入りに研磨を施しているが、基部の一部を折損している。基部の中央付近には敲打痕が認められ、折損後、敲石に転用されたものと思われる。318は安山岩製で、比較的小型のわりに厚みがあり、やや寸詰まりの印象を受ける。刃部付近に折損した痕跡がわずかに残り、折損した刃部を再び研磨して再利用したものと思われる。322は蛇紋岩製で、全面にわたって研磨を施している。刃部は直刃であるが、使用による片減りもみられる。324・325は、調整剝離を施して形状を整えた後に、数方向から研磨を加えている。両者ともに剝離痕がはっきりと残り、半磨製石斧と呼ぶべきものとなっている。

なお、折損が認められるものは29点で、全体の59％にのぼる。折損の部位によって第121図のように分類した。それぞれの点数は次のとおりであり、刃部や基部の折損が多いことがわかる。

a　5点　　b　11点　　c　2点　　d　11点



第121図　磨製石斧の折損部位

12. 石　核（78・79・106～108・133・134・165・173・329～338）

素材剥片を剥離した残核を総称し、石器の製作方法や仕事量を考察する要素となり得るものである。116点出土。このうち19点を図示した。

石材は、チャートが113点。花こう岩（アプライト）が2点、水晶が1点である。

石核の最終的な形態をもとに、素材の選択や剥片の剥ぎ取り方を類型化した。

1類：剥片を素材とし、その縁辺の平坦部（背面、腹面でない部分）を打面とするタイプ。

a類：作業面が背面のみとなるもの。4点出土。（329）

b類：作業面が腹面のみとなるもの。9点出土。（330）

c類：作業面が背面・腹面の両面に及ぶもの。5点出土。

2類：剥片を素材とし、その背面または腹面を打面とするタイプ。

a類：腹面を打面とし、背面が作業面となるもの。7点出土。（106・331）

b類：背面を打面とし、腹面が作業面となるもの。4点出土。

c類：背面・腹面の両面を打面とするもの。27点出土。（165・332）

3類：剥片を素材とし、その縁辺の平坦部と腹面を打面とするタイプ。縁辺の平坦部と腹面とが作業面となるもの。1点出土。（107）

4類：厚手の分割礫、または原礫を素材とし、打面調整を行わず、平坦な面を打面とするタイプ。作業面は、ほとんどが1面に固定され、剥離された剥片も1～2枚と少ない。24点出土。（108・133・173・333・335）

5類：やや厚手の分割礫、または原礫を素材とし、一つの稜をはさみ、その左右の面を打面とするタイプ。一方の打面が他方の作業面となる。一方の作業面が他方の剥片剥離作業における打面調整的役割を結果的に兼ねることになる。なお、この二つ以外にも打面が存在し、剥片剥離が行われたものもある。9点出土。（334）

6類：厚手の分割礫、または原礫を素材に用い、4～5枚以上の剥片を剥離しているが、打面、作業面の設定に規則性が乏しく、打面、作業面転移が90°または180°でないため、不定形の残核となるタイプ。14点出土。（78・337）

7類：6類と同様の素材を用い、作業面を一つに固定し、打面のみ90°または180°と転移するタイプ。3点出土。（134・336）

8類：厚手の剥片、または大きな平坦面をもつ分割礫や原礫を素材とし、大きな平坦面（節理面、自然面、主要剥離面等）を打面として、その縁辺から剥片剥離作業を行うタイプ。作業面が全周におよび、亀甲状になるものが多い。打面転移は行わない。5点出土。（338）

9類：8類と同様の剥片剥離法を用い、大きな平坦面も作業面となるタイプ。打面転移は行わない。4点出土。（79）

出土した116点の石核を素材からみると、剥片を素材としたものは68点、分割礫を素材としたものは46点、原礫を素材としたものは2点であった。

これらのうち、自然面を有するものは71点、節理面を有するものは83点であった。

確認できる打面や作業面の数は、次のとおりである。

・打面数1……49点　　・作業面数1……49点
・打面数2……37点　　・作業面数2……59点
・打面数3……17点　　・作業面数3……7点
・打面数4……11点　　・作業面数4……1点
・打面数5……1点
・打面数6……1点

石核1個当たりの平均打面数は2.0面、平均作業面は1.7面となった。

335は、角柱状の形態を呈する水晶の結晶を用いている。石核としては小型で、剥片剥離の結果得られた剥片はサイズ的にも小さいものであったことが推察できる。

13. 剥片類（154・155）

剥片剥離によって生産された素材を間接的に推定できる要素となり、原石・石核として遺跡内に残された資料の限界を補う資料となり得るものである。出土総数は7,000点を超えるが、ここでは石材別の出土数を報告するに留めた。

154・155はSU04から出土した泥岩の板状剥片である。155は、右側縁に3カ所の調整痕が認められ、おおまかな整形が施されている。サイズや石材から判断すると、打製石斧の素材として保存しておいたものとも思われる。3カ所の調整痕が素材剥片を取った痕跡であるならば、石錘を製作したものかもしれない。これらの板状剥片とともに、同一母岩から剥離したと思われる剥片がまとまって出土している。

第8表　剥片の石材別出土点数

石　材	点　数　（個）		質　量　（g）	
	遺　構	包含層	遺　構	包含層
チャート	426	4,906	2,184.5	21,708.2
サヌカイト	1	19	0.2	71.9
流紋岩質溶岩	0	13	0	84.2
流紋岩質火砕岩	0	15	0	331.1
石　英	0	23	0	72.3
黒曜石	0	31	0	20.8
安山岩	1	14	25.5	683.6
花こう閃緑斑岩	0	6	0	146.8
花こう岩	2	11	30.8	214.6
砂　岩	3	91	48.3	2,217.1
泥　岩	138	1,677	853.7	14,021.6
計	571	6,806	3,143.0	39,572.2

14. 調整剝離を施された剝片（ＲＦ）(339～346)

素材となる不定形な剝片の縁辺に、二次加工を施して刃部を形成するが、連続性・統一性に乏しく、定形的な刃部をもたないものを総称した。出土総数422点。このうち８点を図示した。石材の内訳は、チャート420点、花こう岩（アプライト）１点、黒曜石１点である。チャートが圧倒的に多いが、節理を多く含む良質でないものを使用している。

第９表　ＲＦ分類別出土点数

刃部のタイプ	刃部数	刃部箇所の平面形と調整方法	出土点数	遺物番号	刃部のタイプ	刃部数	刃部箇所の平面形と調整方法	出土点数	遺物番号
掻器的	1	不定形(片面)	34		削器的	2	不定形(片・両)	10	
		不定形(両面)	14	343			凸・不定形(片)	7	
		凸状(片)	15	339			凹・不定形(片)	1	
		凹状(片)	1	344			直(片)・不定(片)	2	
		直線状(片)	17				凸(片)・直(片)	3	
		計	81				凸(片・両)	2	
	2	不定形(片)	10				直線(片・両)	3	341
		不定形(片・両)	3				計	42	
		凹・直線状(片)	1	342		3	凸・直・不定形(片・両)	1	
		不定形・直(両)	6	346			凹・直・不定形(片・両)	1	
		凸・直線状(片)	1				計	2	
		計	21		複　合	2	掻(不)・削(不)	8	345
	3	凸・凹・直線状(両)	1				掻(不)・削(凸・片)	2	
		直(2)・不定形(両)	1				掻(不)・削(直・片)	2	
		計	2				掻(不)・ノッチ	2	
削器的	1	不定形(片)	75				掻(直)・削(直)	2	
		不定形(両)	23				掻(直)・削(不)	3	
		不定形(一部両)	17				掻(直)・ノッチ	1	
		凸状(片)	17	340			掻(凹)・削(不)	1	
		凸状(両)	11				削(不)・ノッチ	1	
		凸状(交互)	2				計	22	
		凹状(片)	11			3	掻(直)・削(不2)	2	
		凹状(両)	1				掻(直・凸)・削(直)	1	
		直線状(片)	17				掻(凸)・削(直・不)	1	
		直線状(両)	10				削(不2)・ノッチ	4	
		計	184				計	8	
	2	不定形(片)	9						
		不定形(両)	5				合計	362	

これら362点のほか、ドリル的なもの11点、エンド・スクレイパー的なもの17点、ラウンド・スクレイパー的なもの10点、ノッチド・スクレイパー的なもの６点、その他16点がみられた。総計422点のＲＦには、合計471カ所の刃部が確認できた。刃部の種類は、削器的な緩い角度の刃部が307カ所、掻器的な急角度の刃部が156カ所、ノッチドスクレイパー的刃部が８カ所であった。

素材剥片は、339や344のように横長剥片を用いるものと、341や342のように縦長剥片を用いるものがみられる。片面調整されたもの（339・340・342）、あるいは両面調整されたもの（341･346）が存在するが、調整剥離の大きさや箇所、順序などはランダムである。また、外彎する凸状の刃部を有するもの（339・340）、直線状の刃部を有するもの（341・342）、内彎する凹状の刃部を有するもの（344）がみられる。

15.微細な剥離痕を有する剥片（ＵＦ）（16･347～354）

素材となる剥片の鋭い縁辺を刃部に用い、その結果として、ある程度連続的に刃こぼれ状の微細な剥離痕を有するものを総称する。総計256点出土。そのうち９点を図示した。石材は、すべてチャートである。微細な剥離痕は、全部で290カ所確認できた。このうち、側縁部には181カ所で全体の62％、末端部には46カ所、その他が63カ所であった。また、素材剥片は、横長剥片を使用するもの(347)と縦長剥片を使用するもの(348～350）がみられ、351・352・354は、剥離痕が直線状を呈するものである。347～349・351・354は、背面と腹面のなす角が剥片の末端部で、急角度である。348は、背面左側縁部および腹面右側縁部に微細な剥離痕がみられ、半月形に外彎するものである。353も緩やかに外彎する。349は、背面左側縁部に不連続な剥離痕がみられ緩やかに半月形に外彎する。351は、背面右側側縁部および腹面左側に微細な剥離痕が観察できる。352は、背面の下部と右側縁部に微細な剥離痕がある。354は、背面側縁部に微細な剥離痕がみられる。

第10表　ＵＦ分類別点数

剥離痕の箇所	縁辺の角度	剥離痕箇所の平面形	出土点数	箇所数	遺物番号
側縁部	緩	直線状	60	69	16
		凸状	21	23	353
		凹状	15	16	
		不定形	32	39	
		計	128	147	
	急	直線状	13	17	351･354
		凸状	8	9	
		不定形	7	8	
		計	28	34	
末端部	緩	直線状	16	20	
		凸状	6	7	350
		凹状	2	4	
		不定形	7	9	
		計	31	40	
	急	凸状	2	2	348･349
		凹状	4	4	347
		計	6	6	
その他	緩	直線･凸･凹･不定形	46	46	
	急	直線･凸	17	17	352
		計	63	63	
総計			256	290	

16. 打欠石錘（1～4・17～20・31・39・80～91・110～116・136～141・148・150・156・174・355～424）

礫の長軸または短軸の両端を打ち欠き、紐掛かりの部位を作出した石器を打欠石錘とした。590点出土した（出土状況別点数は第11表参照）。このうち109点図示した。片面（表裏は任意とした）と最も特徴的な部位の断面形を図示した。上下は、重心が全長の半分より下にくるようにして決めた。90・116・356・360・373・405・406・412などのように紐を掛けたと考えられる部分が磨滅せずに帯状に残っており、その両側は磨滅している、いわゆる「帯状痕跡」が表面に確認できるものについては、その範囲を点描した。

第11表　打欠石錘出土状況別点数

	遺　構	包含層	計(%)
完形品	36(6.1)	397(67.3)	433(73.4)
欠損品	14(2.4)	143(24.2)	157(26.6)
計(%)	50(8.5)	540(91.5)	590(100)

石材は、砂岩・泥岩・花こう閃緑斑岩・花こう斑岩・花こう岩・安山岩である（石材別点数は第12表参照）。どの石材も、上原遺跡のすぐ下を流れる揖斐川本流の川原などで、現在でも採集できるものばかりである。

打欠石錘全体をながめてみると、素材の使用法の違いによって2種類に大別できる。その点に着目し、以下のように分類した。

〈素材の使用法による分類〉

1類：入手した素材をそのまま使用したもの。(1・2・17～20・39・80～84・110・111・136～138・148・355～393)

2類：入手した素材の全体に加工を施して使用したもの。(3・4・31・85～91・112～116・139～141・150・156・174・394～424)

1類に属するものは、川原で容易に採集できる小型楕円礫の長軸の両端に数枚の剝離を施し、紐掛かり部を作出している。素材となる礫に加工を施しているのは、紐掛かりの部位だけであり、基本的に素材の形・質量をほぼそのまま利用している。従って石材は様々である。ほとんどが長軸方向に紐を掛けたと考えられるが、392は短軸方向に、393は長軸・短軸両方向に紐を掛けた痕跡がみられる。帯状痕跡が確認できるのは11点（1類中4.3%）である。

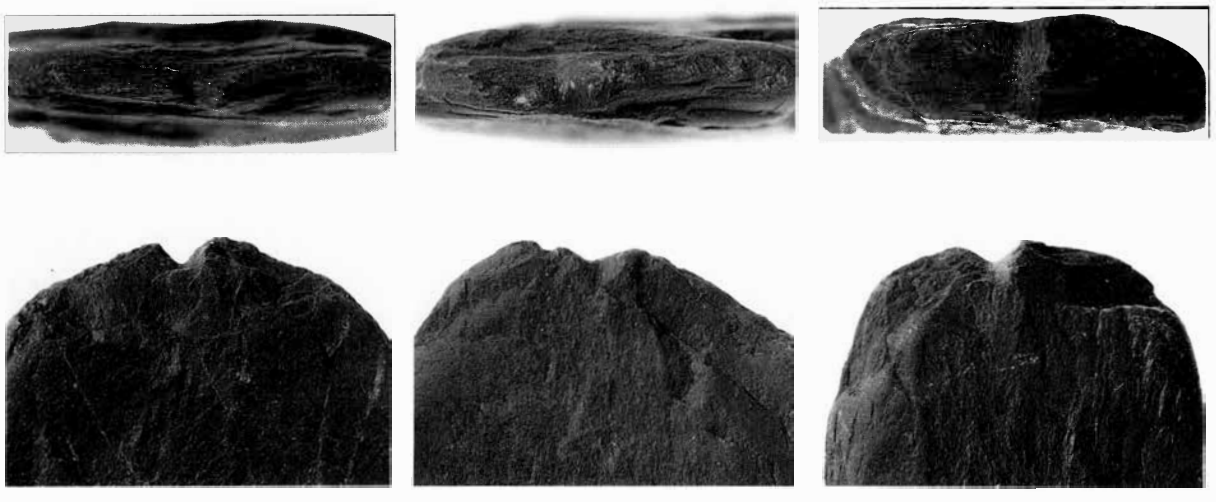
2類に属するものは、比較的薄手のものが多く、素材の全体に加工を施している。石材は泥岩が主体であるが、一部砂岩のものもある。石材集積遺構（SI02・03）で報告したような比較的大きな剝片から、必要な形や質量の素材を作出し、製品化したという可能性も指摘されている。分類にあたっては、素材の縁辺が板状に剝離していたり、石材自身が比較的軟質であったりするため、一部切目石錘との識別が困難なものもあった。端部を打ち欠いただけの機能部に紐を掛けて使用するだけで自然に切り込みが入り、平面形だけでは切目石錘と同様にみえる。切り込み部を観察し、素材に対して直交方向に明瞭な擦痕が確認できないもの（第122図参照）は紐ずれによる切り込みが生じたと判断し、打欠石錘に含めた。本類の石錘は、すべて長軸方向に紐を掛けて使用したと考えられる。ただ421～424だけは短軸方向にも紐

第12表　打欠石錘石材別出土点数

石　材	点数(%)
砂　岩	227(38.5)
泥　岩	328(55.6)
花こう閃緑斑岩	16(2.7)
花こう斑岩	5(0.8)
花こう岩	3(0.5)
安山岩	11(1.9)
計	590(100)

掛かり部位の痕跡が確認できる。明瞭な帯状痕跡が確認できるのは59点であり、2類全体の30.9%にあたる。また、本類の中には、398・405にような長さ14～16cm、幅3～5cm、厚さ1cm前後という従来の石錘らしからぬ形を呈したものがある。それだけを抽出して見ると、とても石錘とは考えにくく、収穫用具としての粗製刃器とも思われる。しかし、側縁部に明瞭な磨滅は確認できないし、サイズ的にはそれらに準ずるものも多くある。また、長軸の両端には機能部を作出しており、石錘以外の用途は考えにくい。従って、前述した用途不明の両側縁調整剝片石器には含めず、本類の石錘とした。

〈打欠石錘としたもの〉　〈切目石錘としたもの〉　〈切目石錘としたもの〉



第122図　石錘の紐掛かり部の状態

（堀田一浩）

17. 切目石錘（5～7・21～23・32・33・40・41・92～98・117～119・142～146・157～164・425～472）

礫の長軸または短軸の両端に切目を入れることにより紐掛かり部を作出した石器を切目石錘とした。全部で321点出土した（出土状況別点数は第13表参照）。このうち81点図示した。図化の方法は打欠石錘と同様である。石材は、砂岩・泥岩・花こう閃緑斑岩・花こう岩・安山岩・閃緑岩であり（石材別点数は第15表参照）、打欠石錘と同様の傾向を示している。これらの石材も当時の上原遺跡では入手が比較的容易であったろうと考えられる。

切目石錘についても打欠石錘と同じように素材の使用法によって2つに大別できる。さらに機能部の加工方法や切目作出法にも特徴が見い出せるので、それらの違いによって分類した。その基準については以下に示すとおりである。

第13表　切目石錘出土状況別点数

	遺　構	包含層	計(%)
完形品	30(9.4)	197(61.3)	227(70.7)
欠損品	18(5.6)	76(23.7)	94(29.3)
計(%)	48(15.0)	273(85.0)	321(100)

〈素材の使用法による分類〉

1類：入手した素材をそのまま使用したもの。

2類：入手した素材の全体に加工を施して使用したもの。

〈機能部の加工方法による分類〉

A種：端部を打ち欠いた後、切目を作出している。

B種：打ち欠かずに、端部に直接切目を作出している。

〈切目作出法による分類〉

1項：ほぼ垂直方向に擦り切る。

2項：斜め方向に片側だけ擦り切る。

3項：斜め方向に両側から擦り切る。

第14表　切目石錘分類別出土点数

分類	点数	分類	点数
1A1	14	2A1	70
1A2	1	2A2	3
1A3	10	2A3	5
1B1	40	2B1	81
1B2	0	2B2	6
1B3	62	2B3	29

分類が細分化するため、個々の説明については計測表の備考欄に記すに留めるが、特徴的なものについてのみ簡単な説明を加える（分類別点数は第14表照）。打欠石錘の2類でも説明したが、切目石錘の中にも長さが10cm以上もある扁平なものがある。機能部の擦痕から判断しても紐を掛け、石錘として使用した可能性が考えられるが、他のサイズの石錘と同じように使用していたかなど、その機能・用途については問題が残っており、今後検討の余地がある。また、2類のものは打欠石錘のところでも記したが、その石材や素材の加工法の問題があり、機能部の擦痕による打欠石錘との判別が困難であった。1類については機能部の加工方法が明確であり、判別には労を要さなかったが、2類については混乱を来たしているおそれがあると思われる。今回採用した判別法もしくは分類については今後の課題としたい。

（堀田一浩）

第15表　切目石錘石材別出土点数

石　材	点数(%)
砂　岩	89(27.7)
泥　岩	219(68.2)
花こう閃緑斑岩	7(2.2)
花こう岩	3(1.0)
安山岩	2(0.6)
閃緑岩	1(0.3)
計(%)	321(100)

18.凹石・敲石・叩石・磨石類（8～12･24～27･34･42～44･120･147･151･152･175～178･473～490）

磨る、敲く（叩く）などの作業が想定できる石器群。

円形・楕円形、さらに、棒状の礫の表面に凹み・敲打・叩き・磨りなどの痕跡がみられる石器を、それぞれ凹石・敲石・叩石・磨石とした。出土総数302点。そのうち39点を図示した。

石材は、砂岩が212点で全体の70.2%を占め、安山岩が78点で25.8%、礫岩が11点で3.7%、流紋岩質火砕岩が1点で0.5%であった。

これらのうち、単一の機能をもつものは136点（全体の45%）、複数の機能を併せもつものは166点（全体の55%）であった。単一の機能を有するもの、および複数の機能を有するものにおいて、凹み・敲き・叩き・磨りの組み合わせをすべて網羅すると第16表のように21通りにまとめられる。単一の機能を有するものの中では磨りが92点で最も多く、複数の機能を有するものの中では敲きと磨りの組み合わせが77点で最も多かった。

図示するにあたっては、凹みの範囲と形状は点描で表し、敲打痕・叩きはその程度によって通常の剥離痕を表わす実線および破線で表現した。また、磨痕と思われる箇所は、ドットのスクリーントーンを用いて表現した。

第16表　凹・敲・叩・磨石類の機能一覧表

	凹表	凹裏	敲	叩	磨	出土点数	遺物番号
1	○					2	473
2	○	○				5	175・474・475
3			○			25	8・120・476
4				○		12	477・478
5					○	92	12・24～26・34・42・151
6	○		○			4	479・481
7	○			○		1	480
8	○				○	8	
9	○	○	○			3	482
10	○	○		○		1	
11	○	○			○	2	483
12			○	○		4	
13			○		○	77	43・44・147・152・176・484・485
14				○	○	4	
15	○		○	○		1	486
16	○		○		○	16	27
17	○	○	○		○	11	9・487・488・490
18	○	○		○	○	2	
19			○	○	○	20	10・489
20	○		○	○	○	9	11・178
21	○	○	○	○	○	3	177
					計	302	

（1）凹石（9･11･27･175･177･178･473～475･479～483･486～488･490）

表面に凹みがみられる石器を凹石とした。その凹みは、観察できる敲打痕が使用結果としての状態というよりも、整形時の加工痕と判断した。68点出土。

凹みの形態や位置は、それぞれに個性をもっており、凹み部分の使用用途も一様ではないと考える。

〈凹みの形態による分類〉

1類：口唇状で、断面がV字形を呈する凹みを有するもの。凹み部分に細かい敲打痕が集中するタイプ。（9･480･487）

2類：円形で、断面がすり鉢状を呈する凹みを有するもの。凹み部分には細かい敲打痕に加え、磨りがみられるタイプ。（175･178･474･475･481～483･486～488･490）

3類：円形で、断面が鍋底状を呈する凹みを有するもの。凹み部分に敲打痕が集中するタイプ。（11･27･175･177･473･474･479･483）

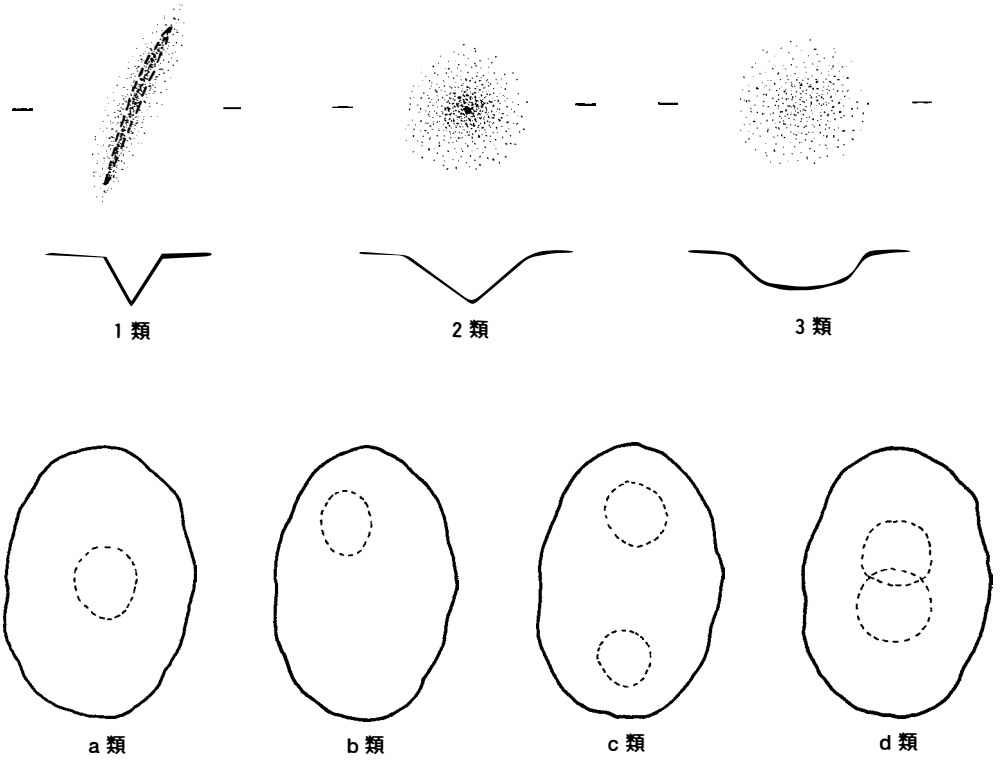
〈凹みの位置による分類〉

a類：円礫のほぼ中心に凹みを有するもの。

b類：中心から離れたところに凹みを有するもの。

c類：2つ以上の単独の凹みを有するもの。

d類：2つ以上の凹みが重なり合って、ほぼ一列に並ぶ形態を有するもの。



第123図　凹みの形態と位置による分類

出土した68点のうち、片面のみに凹みを有するものは41点。表裏両面に凹みを有するものは27点であった。そのうち、表裏両面に同じ形態の凹みを有するものは23点であり、両面とも1類のものが1点、同じく両面とも2類のものが7点、3類のものが15点であった。表面と裏面で凹みの種類が異なるものは6点みられ、1類と2類の組み合わせが1点、2類と3類の組み合わせが5点であった。

（2）敲石（8～11･27･43･44･120･147･152･176～178･476･479･481･482･484～490）

敲く作業が想定される石器。整形時の加工痕が残る凹石とは違って、使用結果としての使用痕が残るものを敲石とした。173点出土。

敲打痕の位置は様々であり、485のように側縁を全周するものや、481のように、複数の箇所に集中するものがみられる。後者は、対象物に対して円礫を持った掌の手首に近いところで敲打を加え、ある程度の凹みに達して使用に耐えられなくなると、天地を替えて再び使用されたと推測される。この方法は、対象物への加撃に際して的確な衝撃を与えたと思われる。礫の同一面に2つ以上の敲打痕がほぼ一列に並ぶものは、このような使用によるものと思われる。敲石を観察された渡辺誠先生は、オ

ニグルミのような堅果類の殻割り作業に使用された可能性を指摘された。

（3）叩石（10・11・177・178・477・478・480・486・489）

叩く作業が想定される石器。敲石と類別するため、棒状の礫、あるいは円礫の長軸の一端または両端に激しい敲打痕が認められるものを叩石とした。57点出土。敲打痕が長軸の一端に集中するものは34点、両端に集中するものは23点である。

477・478にみられるような、長軸の一端による手首の回転運動を伴わない垂直方向への打撃は、石器の製作に使用されたもののようである。また、長軸の端部に残る激しい敲打痕と潰れは、堅果類を打ち割る作業の際に台石を敲打してしまった結果としての痕跡とも考えることができる。10・11は敲打痕が小さく、石を割るハンマーとしての機能は果たし辛いであろう。178・489のように長軸の一端から稜線に沿って少し離れた箇所に打撃痕が残存するものもみられるが、より強烈な打撃を必要とする場合には有効であったと思われる。手で握って、対象物に垂直方向の加撃を施すよりも、手首と肘を使って長軸の上端を振り下ろす形での加撃の方がより有力を発揮したと思われる。

これらのほかに、平面形は楕円状で断面形が円を描くものの長軸の一端に叩きのみられるものが3点出土した。石材は、どれも安山岩を用いている。サイズ・質量はさまざまであるが、1点のみ4kgほどの質量を有し、両手で持たないと作業できないものである。これらは丸石と呼ぶべきものかもしれないが詳細は不明である。

（4）磨石（9～11・13・24～27・34・42～44・147・151・152・176～178・483～485・487～490）

磨る作業が想定される石器。244点出土。

磨面の有無は、ルーペによる観察に拠ったが、転石による自然の磨耗と使用痕としての磨耗との判別は難しく、やや不明確なものでも可能性を有するものは取り敢えず含むことにした。

磨面は、どれも自然面を加工することなく、そのまま使用している。敲打によって平坦な面を作出してから、または、凹凸のある面を作出した後に使用したと思われる磨面をもつものはみられなかった。磨面は、必ずしも平坦になるとは限らず、製粉作業のためには凸状の引っかかり部分があったり、凹状の部分があった方が有効な場合があったと思われる。42は小型の磨石であるが、サンショウの実など小粒のものを磨ったものかもしれない。片面の一部と側面が磨られている。484は、手持ちで磨るのではなく、対象物を限られた一部の磨面に押しつけるようにして磨ったものと推測される。

磨面の位置は様々であり、次のように分類した。

〈磨面の位置による分類〉

a類：片面の一部、または、ほぼ全面が磨られているもの。99点出土。（9～11・24・26・43・177・483・488～490）

b類：両面の一部、または、ほぼ全面が磨られているもの。137点出土。（12・25・27・44・147・151・152・176・178・484・485・487）

c類：長軸の側面が磨られているもの。31点出土。（34）

d類：その他。9点。（42）

磨面の位置はb類が中心であるが、その中でも、両面の一部を活用しているものが多い。しかし、

これらは凹みの激しい石皿とは合致せず、平滑に使用が続けられるタイプか、または、わずかな凹みを有するタイプの石皿とのセット関係が考えられる。

19. 石　皿（30・99・100・491）

磨る・敲く（叩く）などの作業が想定され、扁平な形状で器面に凹部や磨面を有する石器。堅果類の製粉具としての用途が考えられる。25点出土。そのうち4点を図示した。石材には、砂岩および多孔質の安山岩を用いているが、その多くは入手が容易な円礫を使用しており、平面形は円形または楕円形を呈している。砂岩の板状剝離材を用いたものは1点のみであった。

これらは皿部の断面形から、凹状を呈するタイプと平板な形状を呈するタイプの2種に分類できるが、凹状のものは15点で、平板状のものは10点であった。平板タイプのものには磨痕や擦痕が認められず、その上、折損などによって機能部が詳しく観察できないため、その性格を明らかにすることはできなかった。中には、川原石と区別がつけ難いものもあった。

断面が凹状を呈するものには、器面を加工して使用するものは少なく、自然の凹みを利用して礫面をそのまま使用している。

30は、細かい敲打による凹部を一度作出した後に、再度、粗い敲打によってより深い凹部を作出している。おそらく、最初に作出した凹部では、期待通りの機能を果たせなかったのであろう。二度目の作出による凹部も、じゅうぶんに活用されておらず、磨面も狭い範囲に限られている。これに対応する磨石は、小型のものであったと思われ、堅果類の細粉化の作業を想定することができる。

99・100は安山岩製で、いずれも自然の凹みを利用している。99は加工しやすい軟質の安山岩を用いており、全体に風化も進んでいるため詳しく観察することはできないが、裏面を被熱しており炉石からの転用または炉石への転用をうかがうことができる。100には磨痕がはっきりと残り、掃き出し口らしき箇所も認められる。

491は、本遺跡における最も大きなサイズと質量を有するものである。裏面が扁平な形状ではないことから、地面に直接埋め込んで安定させたものと思われる。同様に、凹部の断面形が三角形で安定性を欠くものが2点存在するが、これらも地面に埋め込んでの使用と思われる。

遺構から出土した石皿は、すべて完形品であったが、包含層から出土したものは20点中7点が折損しており、さらにそのうちの6点がほぼ中央部で折れている。これら折損品の機能部には，敲打痕や叩きはみられず、敲石や叩石に対応するものではないため、使用による折損とは判断しにくい。廃棄に際しての儀礼を示唆するものかもしれない。

第1地点出土の石皿は、磨石と対応する磨りの機能を果たしたものと思われるが、その多くが凹状を呈することから堅果類の細粉化あるいは根茎類の液状化のための道具と考えられる。今後、数多く出土した打製石斧とのセット関係で考察を加えねばならないであろう。

20. 異形石器（492・493）

両側縁が角状突起の下で少しくびれる形態をもつ石器。2点出土。

492は、乳白色のチャートを使用。主要剝離面を確認することができず、表裏は任意である。裏面は研磨したのちに縁辺部より調整を加え形状を整えているようにみえるが、風化面あるいは節理面とも

考えられる。小型できわめて薄いことから、用途的に切削や掻く作業には適さない。先端の尖り具合やサイズ、そして、縁辺を鋭く連続調整していることから推察すれば、石鏃としての機能も考えられる。異形部分磨製石器であれば、早期の押型文土器と伴出することが多い石器のひとつとされるが、形態的にも早期の石鏃に類似するものである。493もチャート製で、灰白色の色調をもつ。研磨は確認できないが、492以上に先端を尖らせ、エッジも鋭利である。断面形は凸レンズ状を呈し、角状突起も念入りに調整している。

図示するにあたって、研磨面の可能性を含む部分はドットのスクリーントーンで表した。

21．玦状耳飾（494～503）

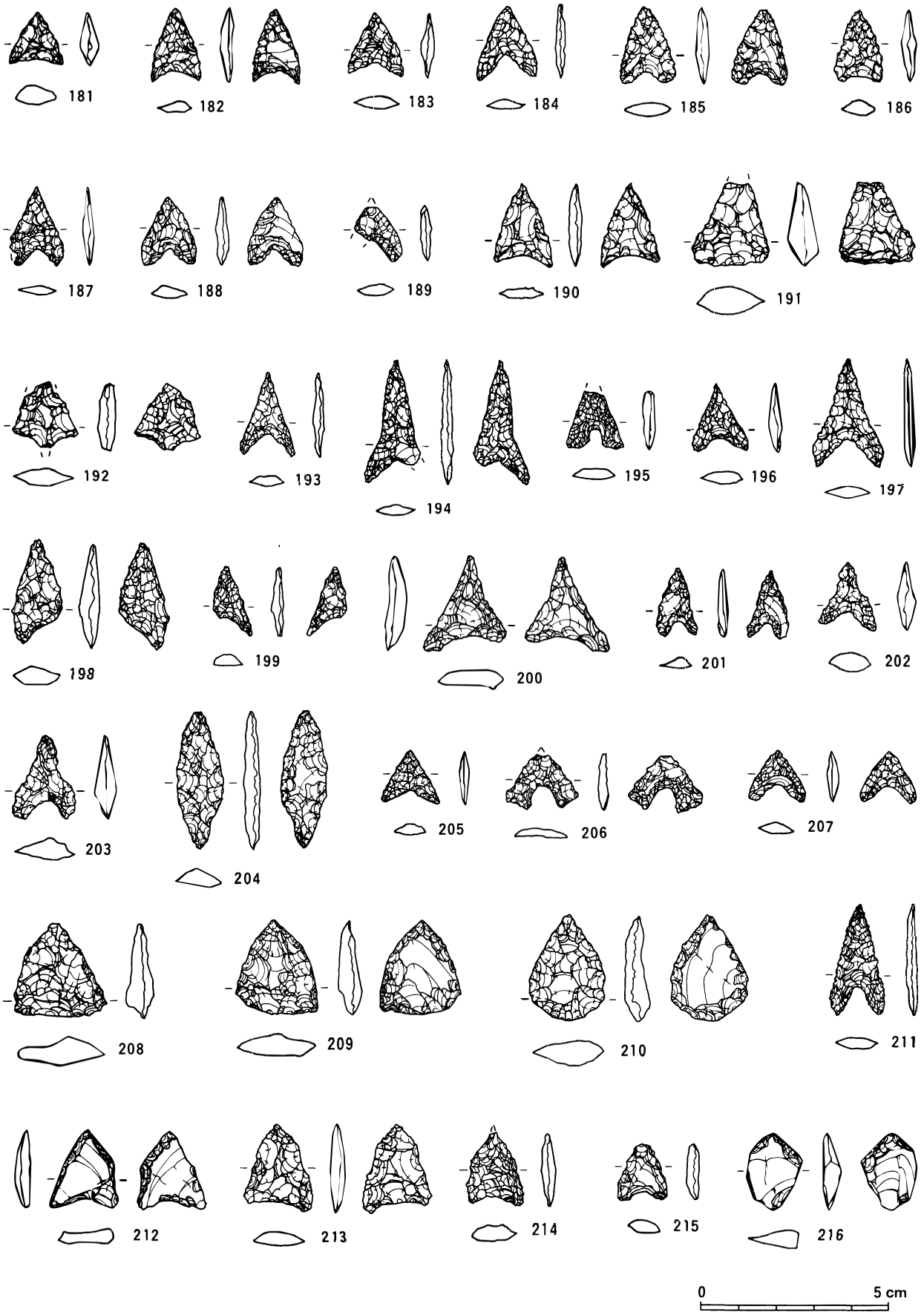
欠損品ばかりであるが、10点出土している。そのうちの２点は同一個体で、接合が可能である。従って９個体分の出土となる。いずれも遺構外からの出土であり、その帰属時期を明確に示すことはできないが、地点の性格上、縄文時代前期後葉から末葉にかけてのものと考えられる。494は、滑石製で白色を呈している。欠損しており全体の1/2ほどしかないが、想定できる全体の形は縦長の矩形であろうと思われる。穿孔は表裏面両側から行われており、擦痕の状況からドリル状工具の回転運動による技法であろうと考えられる。孔の上部には切目突出が認められ、孔内側の擦痕との切り合い関係から推察すると、穿孔後に切目を作出している。表裏面の研磨は基本的には素材に対して縦方向に行われている。丹念に磨かれてはいるが、粗削り段階のものと考えられる擦痕が確認できる。495は玉髄製で、その材質は緻密で堅い。しかし折損部付近の質はもろく粗雑な感じである。そのためか製品自体もその部位はやや厚めである。折損しているが全体の1/3強あり、推察できる全体の形は正円形に近いと思われる。全体的によく研磨されており、つるつるした感触がする。製作過程で生じたと思われる擦痕が確認できる。中心部から外側へ向かったものが多い。補修孔が１つあり、糸で縛って再利用したと考えられる糸擦れ痕が確認できる。穿孔は表裏面両側から行われているが、ドリル状工具で穿孔した後、斜め方向に掻き上げている擦痕が裏面のみにみられる。切目作出は表面側のみから行われている。側面形は裏面側が平らで表面側が緩やかに凸形に彎曲する蒲鉾形を呈している。496は滑石製で白色を呈している。これも494同様に欠損品で全体の1/2弱しかないが、本来の形は縦長の矩形であろうと思われる。上端部を欠いているため不十分ではあるが、現存している孔内側の擦痕から判断すると、穿孔はドリル状工具の回転運動によるものと考えられる。切目作出は素材の縦方向に表裏面両側から擦り切るように行われており、意図的に面取りも行っている。表裏面の研磨は横方向に行われている。丁寧な仕上げが施されている。折損後、再利用するために補修孔をあけようとしているが、途中でやめている。497はやや変質しているが流紋岩製である。材質は緻密で堅い。欠損品でさらに小破片であるがために正確な部位は不明だが、わずかに残る孔の一部より左上方であろうと思われる。孔の一部が存在するとはいえ、わずかであるため穿孔時に生じる擦痕は確認できず、穿孔技法も不明である。表裏面ともよく研磨されているが、粗削り段階で生じたと考えられる擦痕が縁辺から孔に向かうものを中心に縦横に認められる。側面形は裏面側が平らで表面側が凸形に緩やかに彎曲する、いわゆる蒲鉾形を呈している。498は玉髄製で、推定最大長2.1㎝と９個体中最小である。表裏面はよく研磨されているが、その方向は一様ではない。穿孔は表裏面両側から行われているが、孔内側の擦痕が螺旋状になっていることから回転運動の中心軸が素材に対して垂直でなかったことをうかがわせる。切目作

出に伴う擦痕はあまり顕著ではなく、技法の詳細は不明である。推察できる全体の形は、やや横軸方向に長い楕円形を呈していたと考えられる。折損部近くに表裏両面から穿孔された補修孔が1つあけられているが、再利用のための糸擦れ痕は確認できない。499は蛇紋岩製。風化が進んでいるせいか、黒く変色しているところや鉄分が付着しているところもみられ、本来その素材が持つ良質な感じが失われている。ちょうど中心となる縦軸あたりで折損しており、全体の約1/2が現存している。推定最大長6.7cmとかなり縦に長く、9個体中最長である。孔部分以外は明確に面を作出しようとしているところが少なく、全体に丸みを帯びた整形が施されている。側面形をみると、孔付近は比較的肉厚であるが、下半分は薄く加工されている。折損後、再利用するために補修孔を2つあけている。穿孔は表裏面両側から行われているが、擦痕から推察すると、基本的には両面ともドリル状工具の回転運動によるものと考えられるが、裏面側は直線的に面取りが行われているようにみえ、詳細は不明である。切目作出は素材の縦方向に擦り切って行われているが、面取りは施されておらず、下方へ向かうほど丸みを帯びた仕上げになっている。孔上部には切目突出が認められる。切目突出と孔内側の擦痕の切り合いをルーペによって肉眼観察したところ、切目突出の方が新しくみえた。穿孔後に切目を作出した可能性もある。500は、頁岩（泥岩）製で、折損部からは素材の層状構造が確認できる。軟質であり、欠損してはいるが全体の1/2強あり、本来は頂点がやや丸みを帯びた横長の三角形であっただろうと推測できる。表裏面の磨研は縦横両方向から行われている。孔内側の擦痕からドリル状工具の回転運動による穿孔であったことがうかがえる。表面には穿孔時に生じたと思われる孔外周と同心になる弧状の擦痕が認められる。厚さは3㎜と薄く、側面から見るとわずかに歪んでいる。501は玉髄製で堅い。折損により多くを失っているので、全体の形を推察するのは困難を来すが、側縁が凸形に緩やかに彎曲することから円形に近い形であった可能性がある。穿孔は表裏面両側から行われているが、孔内側と確認できる部位がわずかなため穿孔技法の詳細は不明である。切目作出も表裏面両側から行われているが、明確に面取りをせずにやや丸みを帯びた仕上げがなされている。側縁部は丹念に磨き上げられているが、その他は比較的粗い研磨である。側面形は裏面側が平らで表面側が緩やかに凸形に彎曲する蒲鉾形を呈している。502は蛇紋岩製だが、風化が激しく、きらきらと光る物質が肉眼でも観察できる。しかし表面だけをみる限りではその質感が損なわれている。孔の一部が残存しており、その内側の擦痕も確認できる。穿孔は表裏両面側から行われており、ドリル状工具の回転運動による技法と考えられる。この502にも再利用のための補修孔が3つ確認できる。そのうち2つは完全に穿孔されているが（A・B）、もう1つは貫通はしているが1/2弱が確認できるに過ぎない（C）。裏面からの穿孔途中で折損してしまった可能性がある。503も同じく蛇紋岩製で、風化が進んでいる。孔の一部から切目部にかけての部位が残存しており、502の下方に接合する。両者は約12.8m離れて出土している。右側縁部は切目部に相当するが、丹念に磨き上げられているためか切目作出のための擦痕は顕著ではない。孔の一部も確認できるが、わずかであるためその穿孔技法をうかがい知ることはできない。表裏面に合わせて3つの補修孔がみられる。1つは完全に穿孔されているが（D）、他の2つは完全に穿孔されていない（E・F）。Eは裏面側から穿孔途中でやめているし、Fは表面側から貫通させているが折損している。502と接合させ、それぞれの補修孔の位置関係を見てみると、AはFと、BはDと対応する。C・Eの対応先は不明である。503は502と接合することから本来は玦状耳飾として使用されていたのであろうが、左側縁部の補修孔にかかる折損部位から下方にかけて調整を施した痕跡が確認で

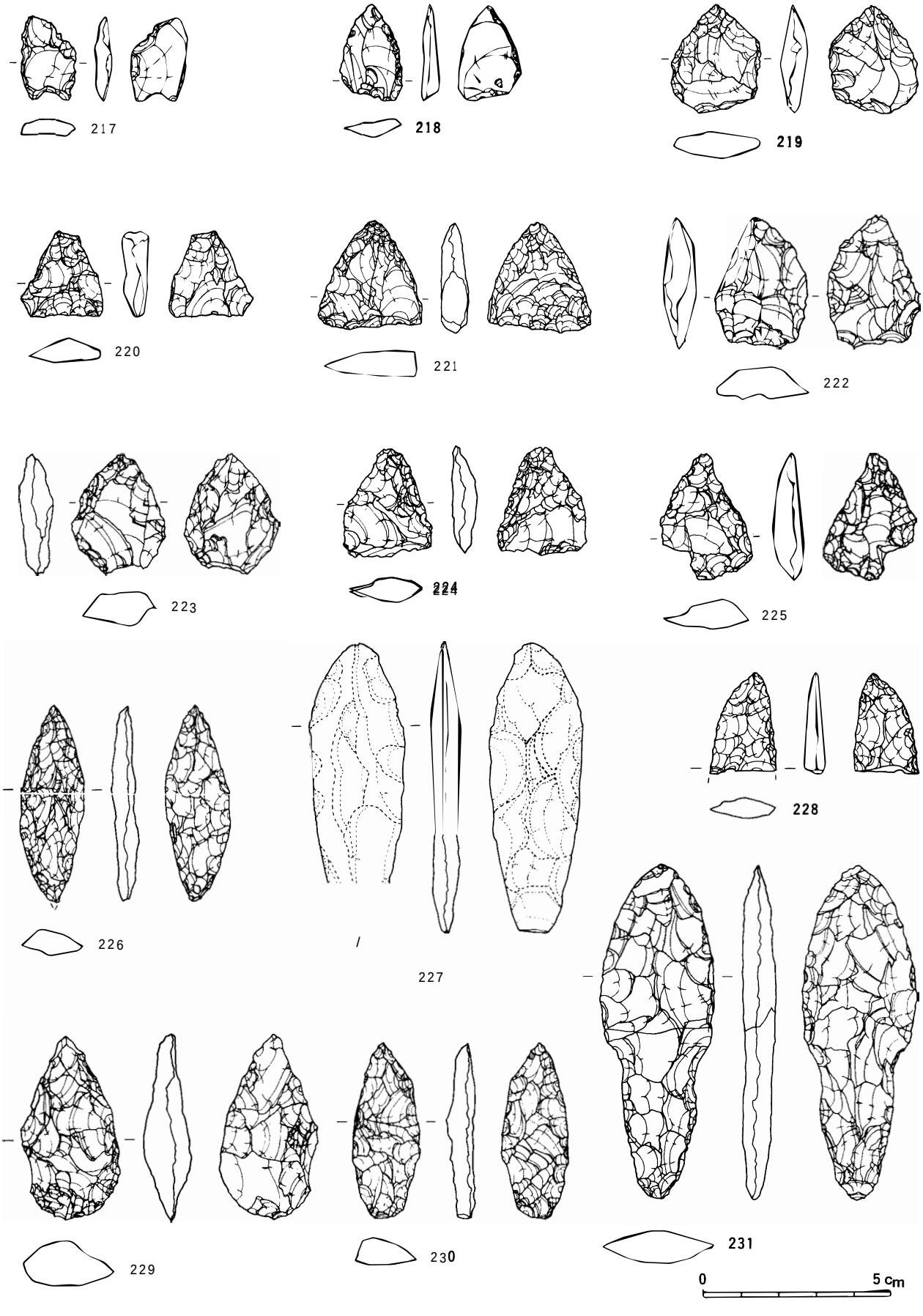
きる。折損後、単体で垂飾として転用した可能性もある。（堀田一浩）

22．垂　飾（149）

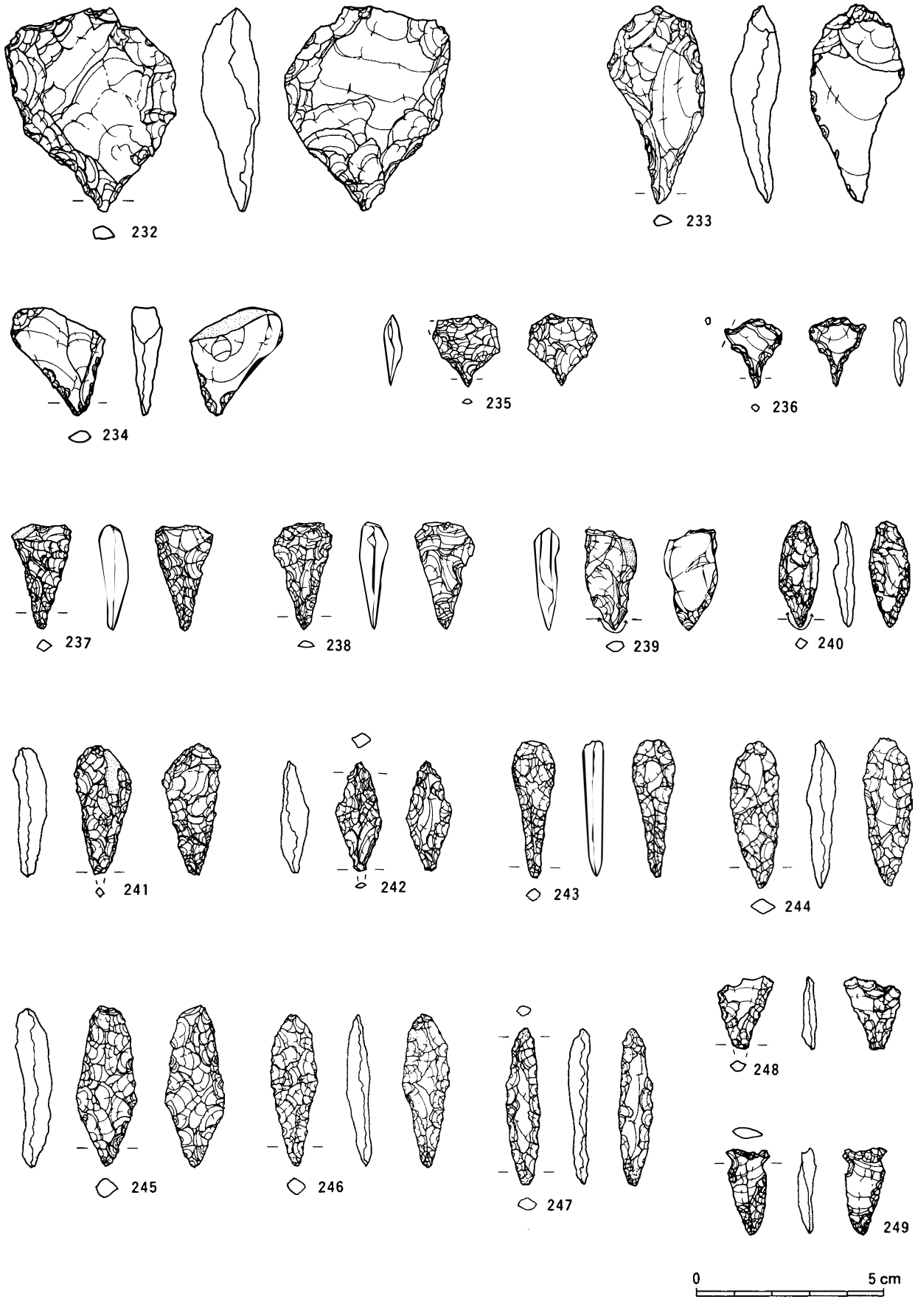
ＳＫ04より１点出土している。149は玉髄製の完形品である。平面形は正円形だが、側面形はややいびつな形を呈しており、中心より左方および下方がやや厚くなっている。表面全体が丹念に研磨されており、つるつるした感触がする。表面側の孔付近にやや粗雑な質感の部分がみられるが、他は緻密で堅く、良質な感じがする。製作時に生じたと考えられる擦痕が所々みられるが、その方向は一様ではない。穿孔も表裏面両側から行われたと考えられるが、孔内側の擦痕が顕著でなく、詳細は不明である。ただ孔の断面をみると、中心部分がほぼ直線的であることから、穿孔には棒状もしくは管状工具が使用された可能性がある。表裏面両側とも孔の口が上方に向かって細長く開いているのは、糸擦れによるものと考えられる。（堀田一浩）



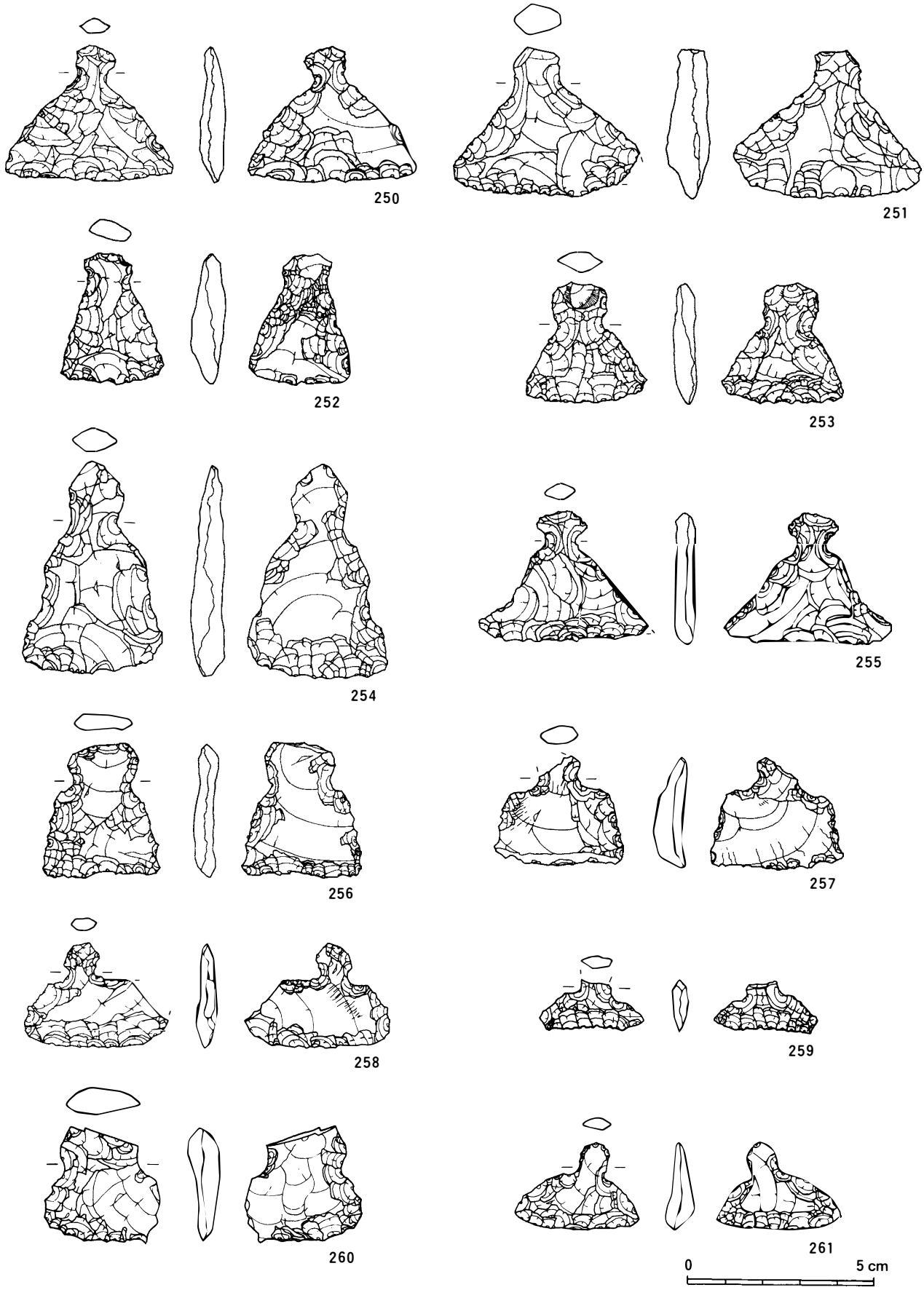
第124図　石器実測図(1)　石鏃・石鏃未製品(1)



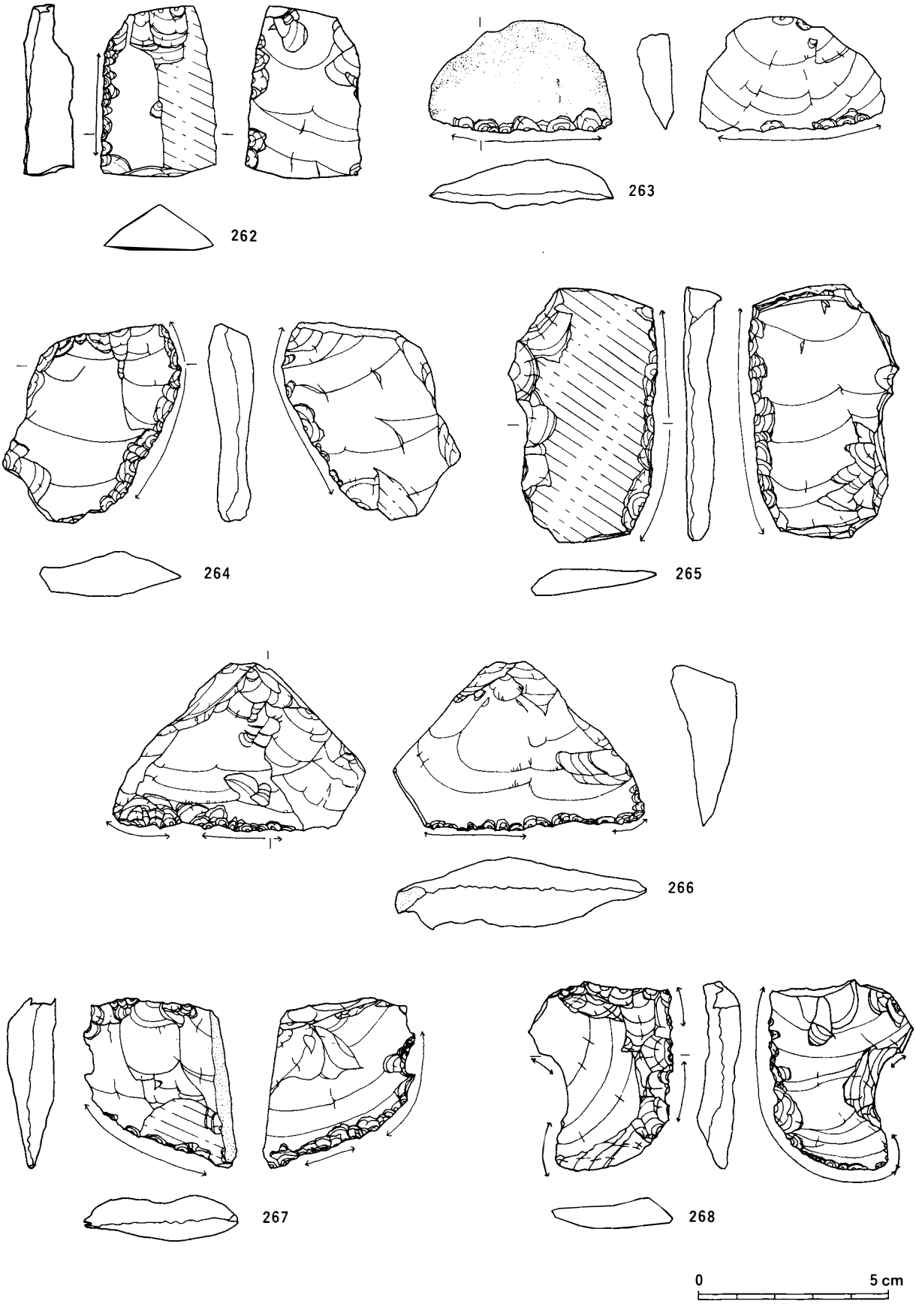
125　(2)　(2).　・



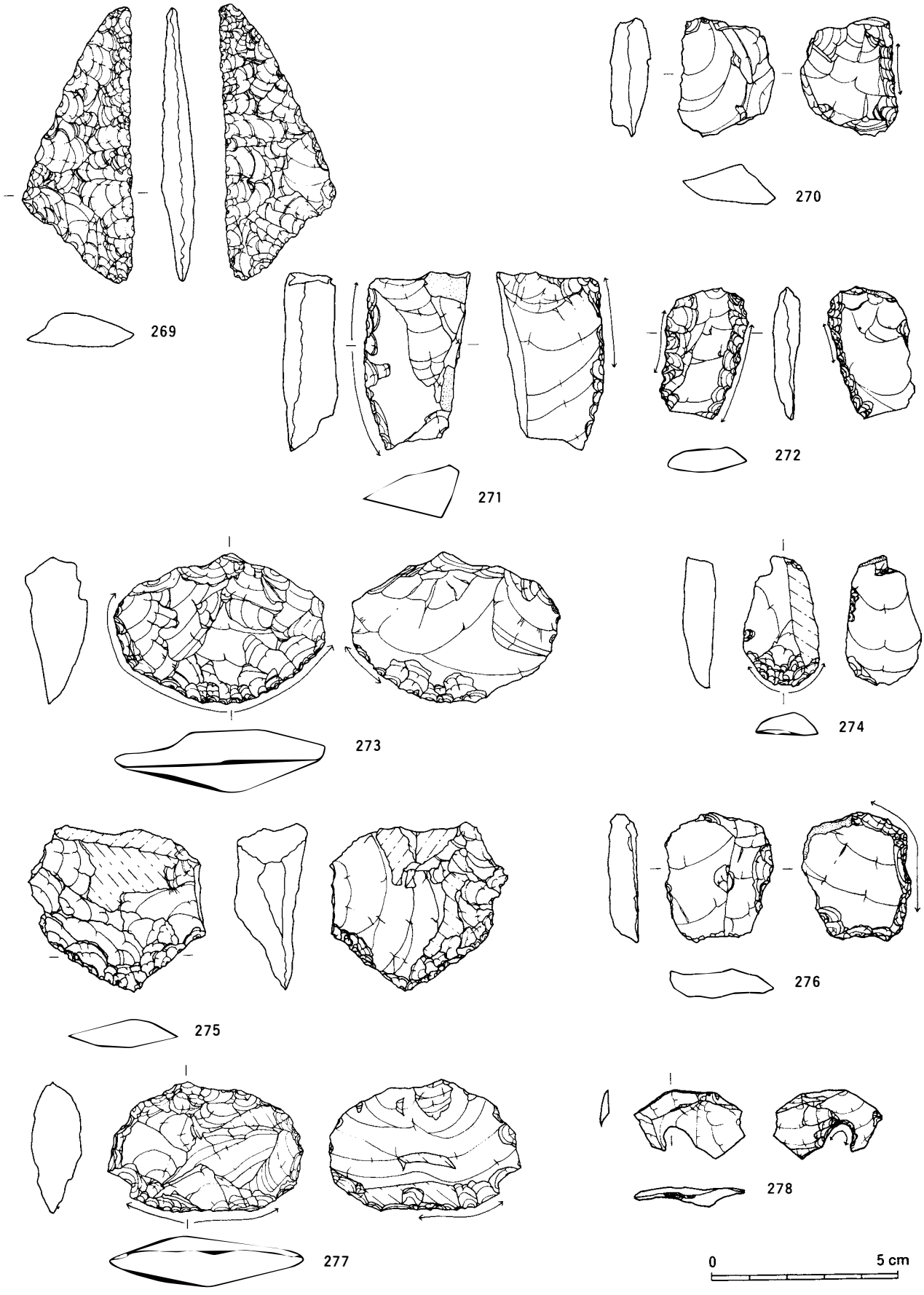
第126図　石器実測図(3)　石錐・つまみ部付きスクレイパー(1)



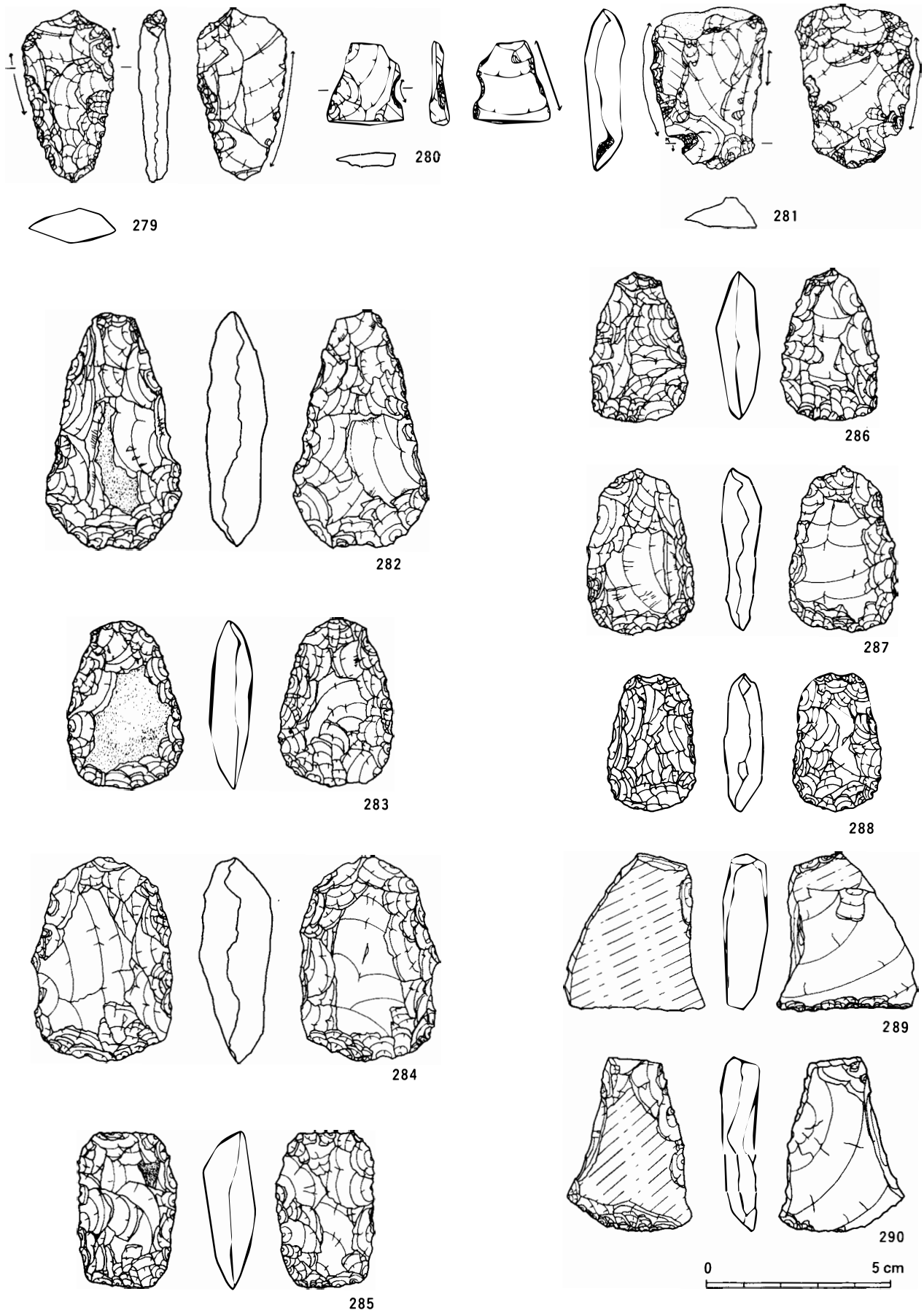
第127図　石器実測図(4)　つまみ部付きスクレイパー(2)



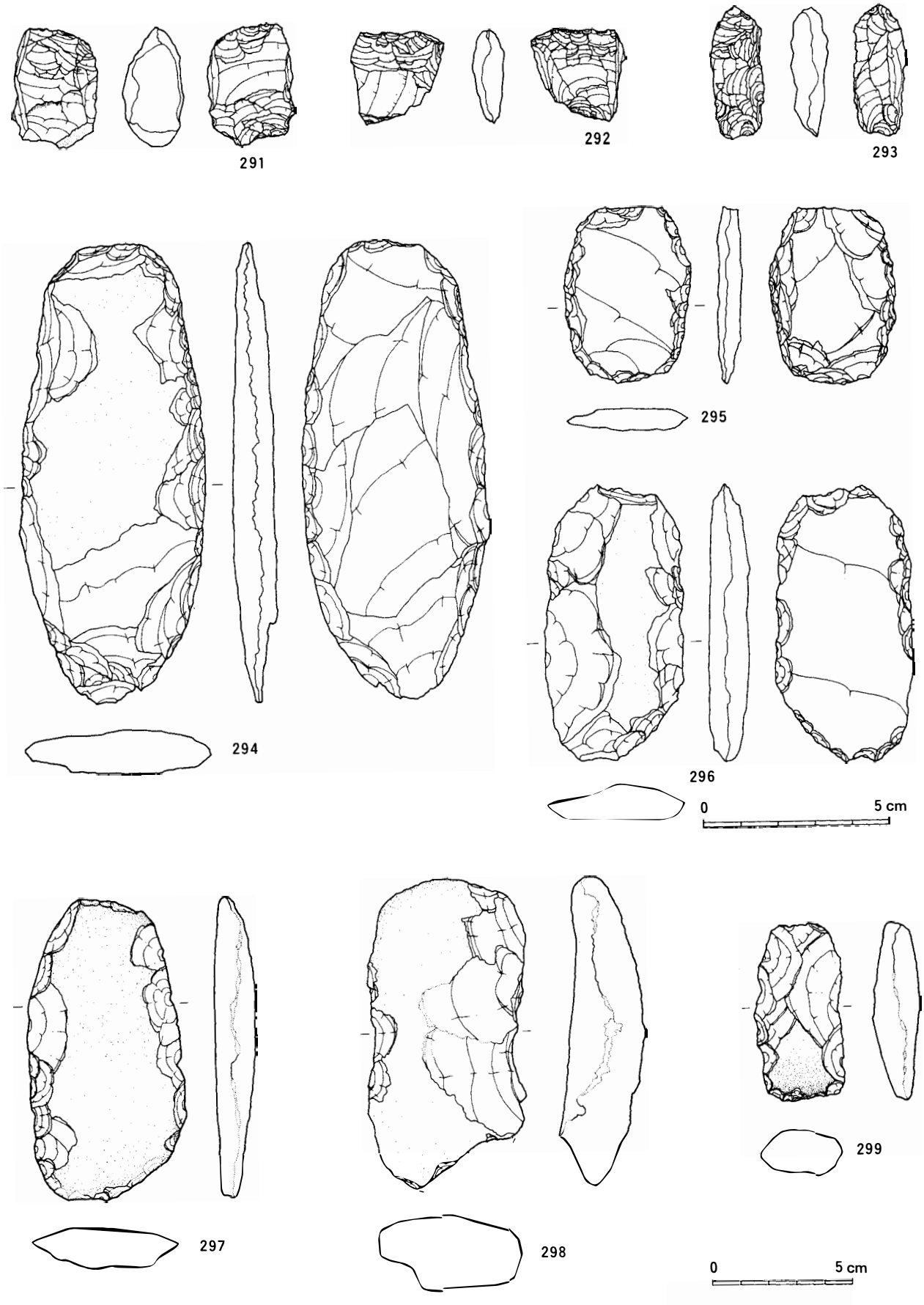
第128図　石器実測図(5)　削器(1)



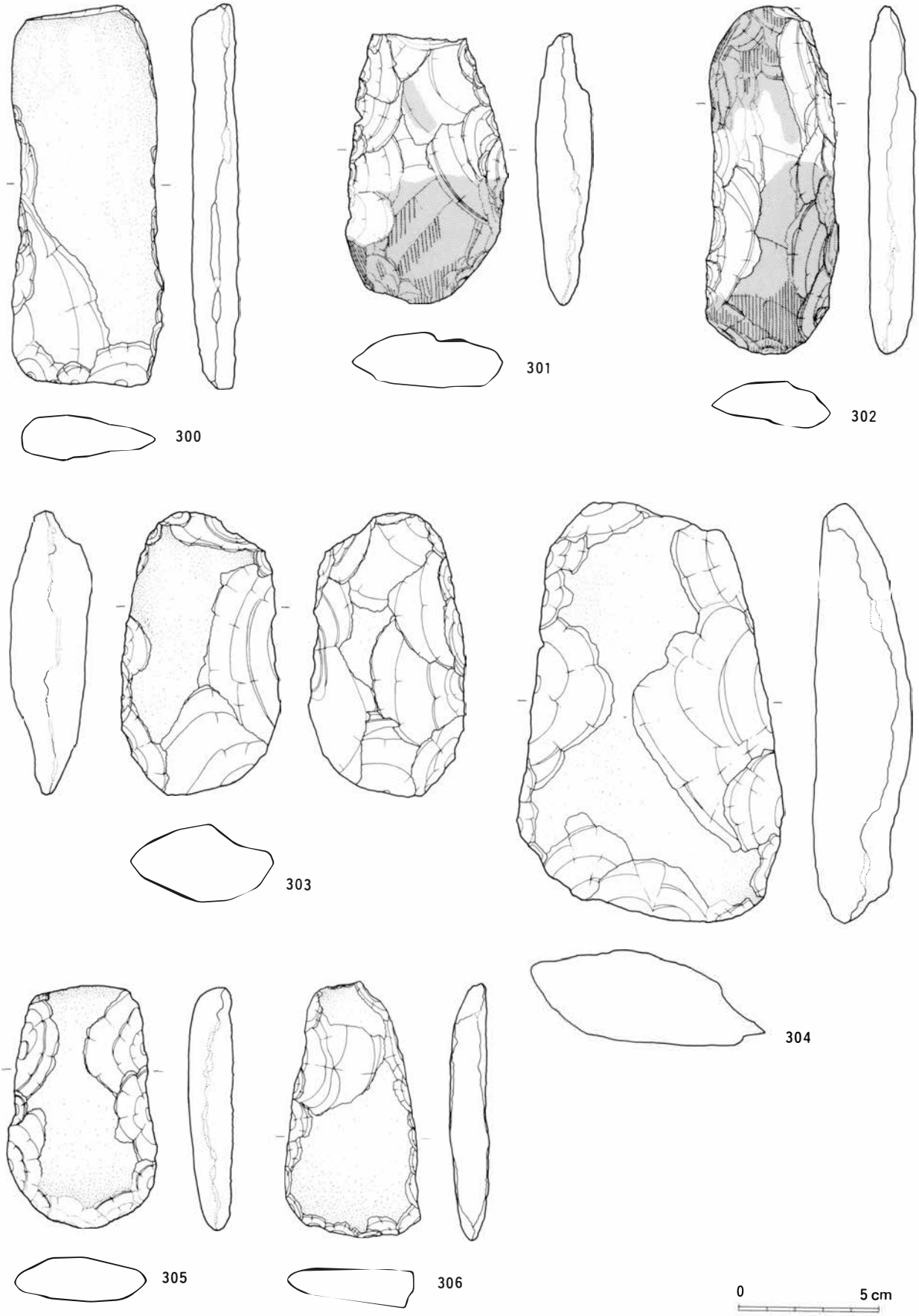
第129図　石器実測図(6)　削器(2)・掻器Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・ノッチドスクレイパー



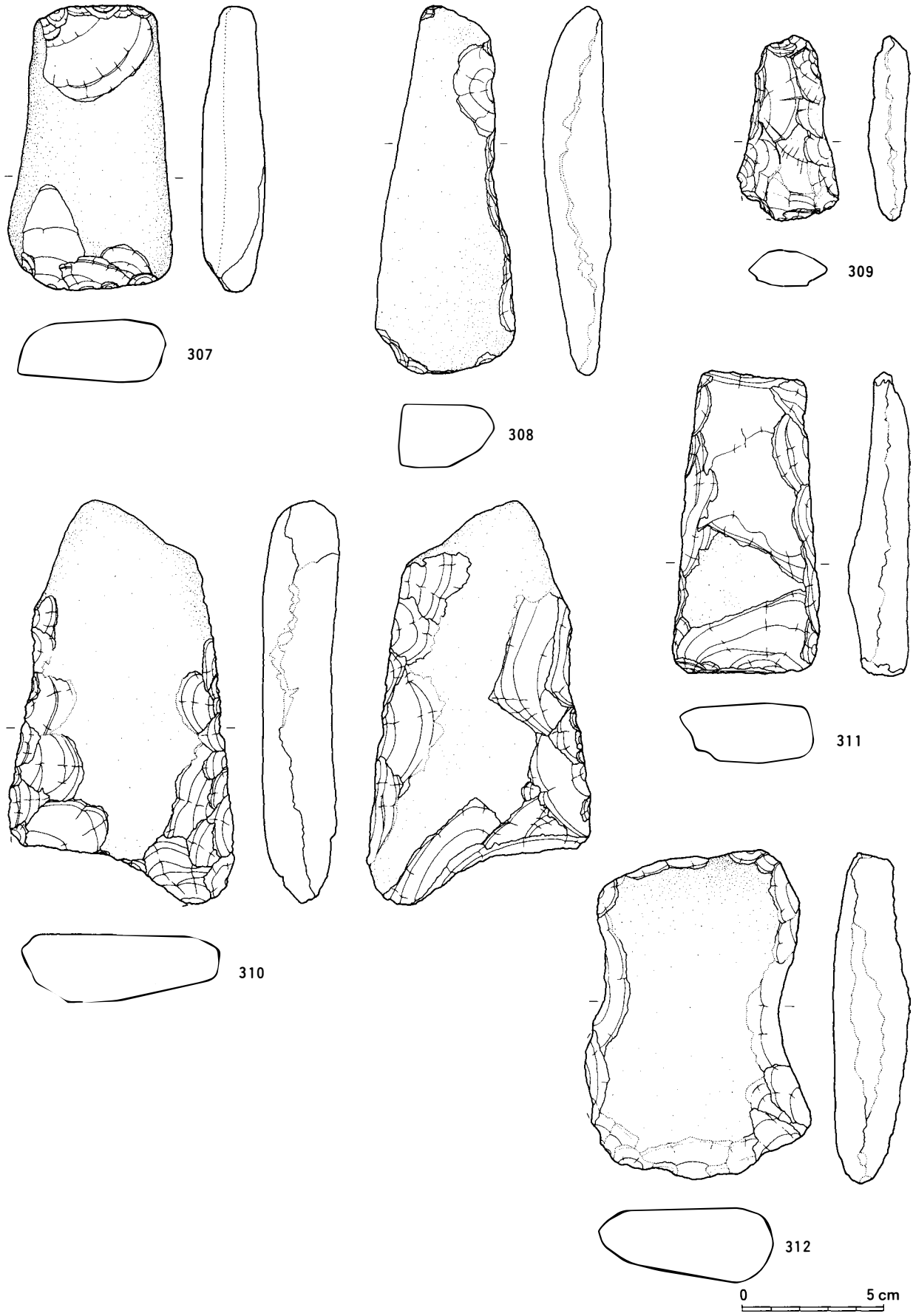
第130図　石器実測図(7)　複合スクレイパー・石篦・ヘラ形石器



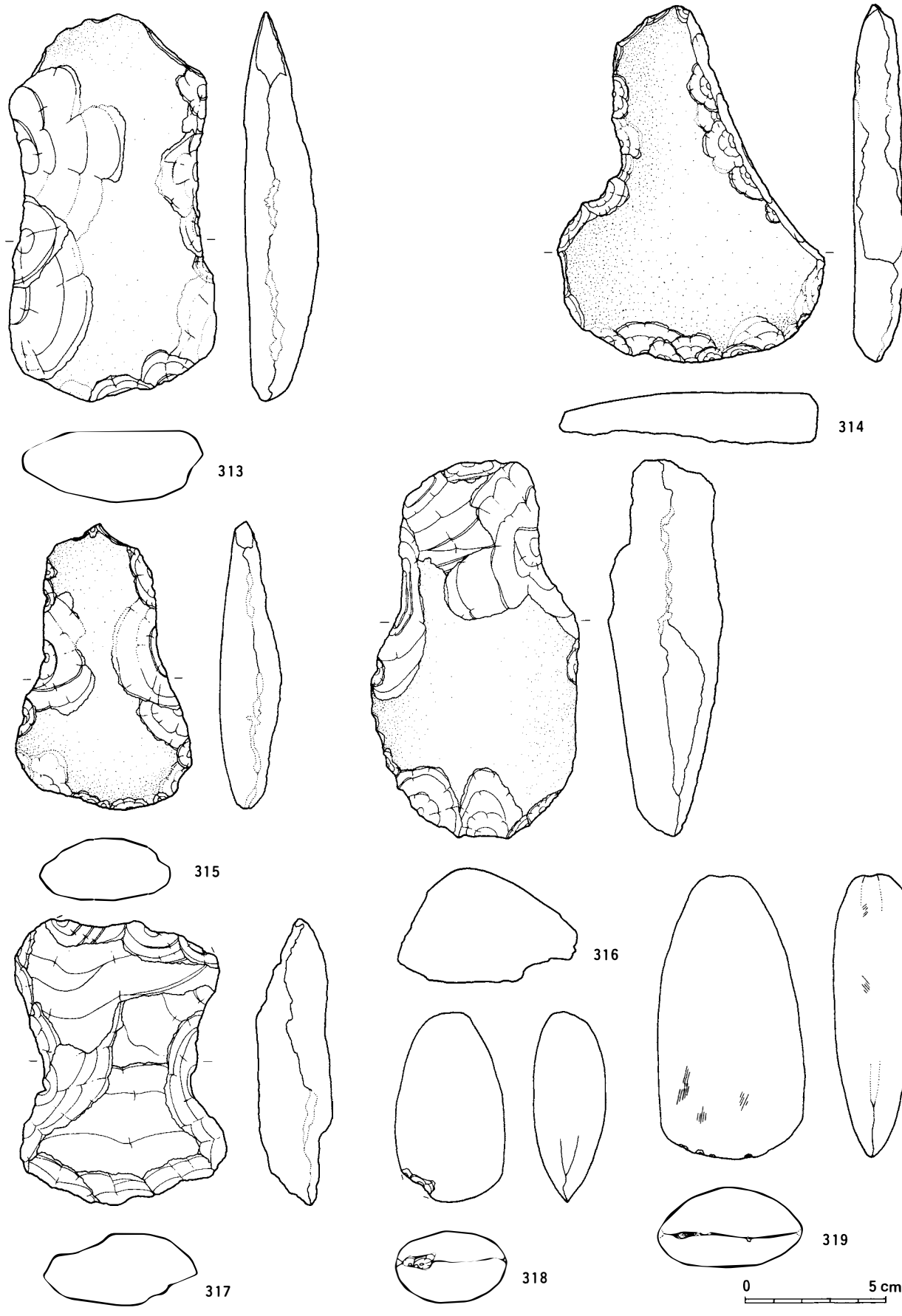
第131図　石器実測図(8)　くさび形石器・両側縁調整剝片石器・打製石斧(1)



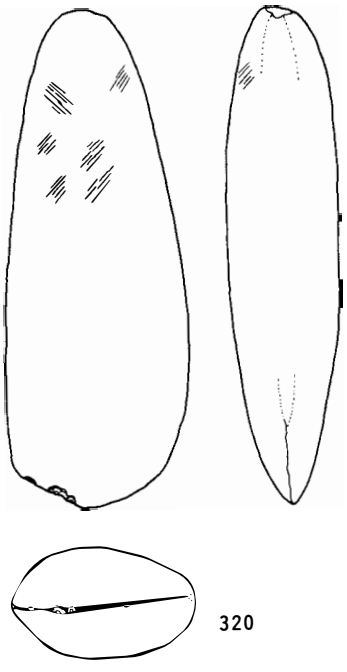
第132図　石器実測図(9)　打製石斧(2)

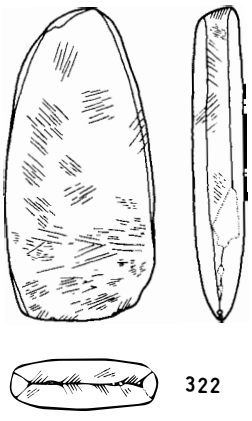


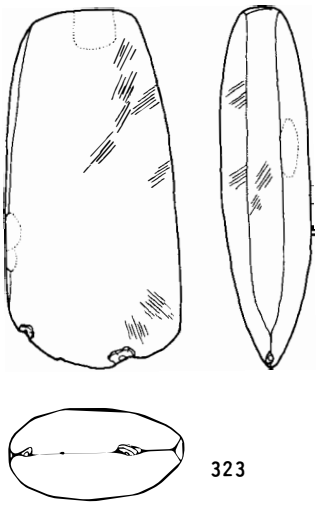
第133図　石器実測図(10)　打製石斧(3)

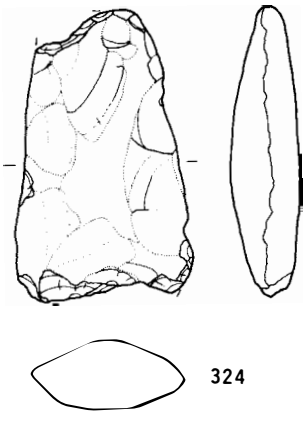


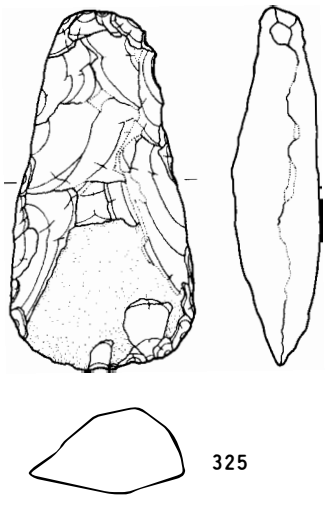
第134図　石器実測図(11)　打製石斧(4)・磨製石斧(1)

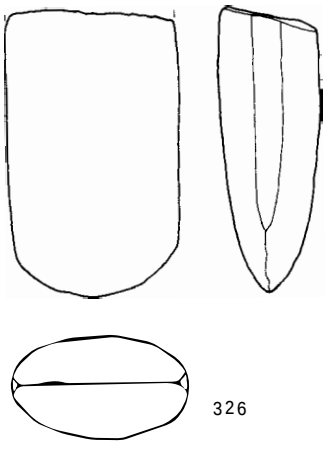


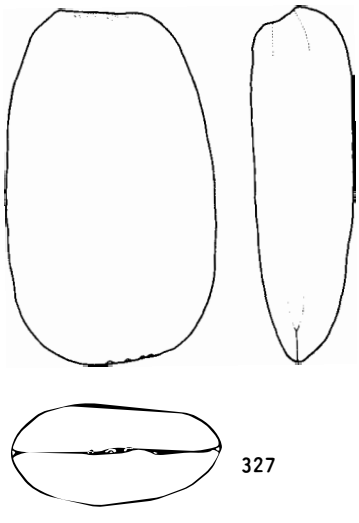


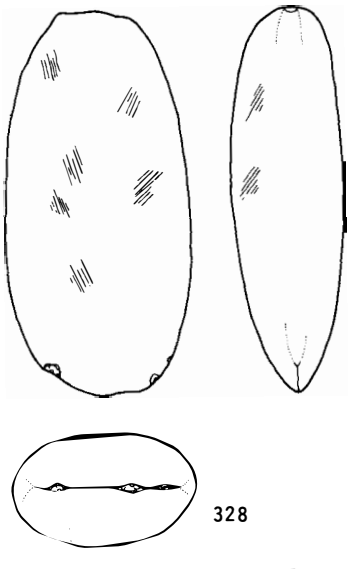




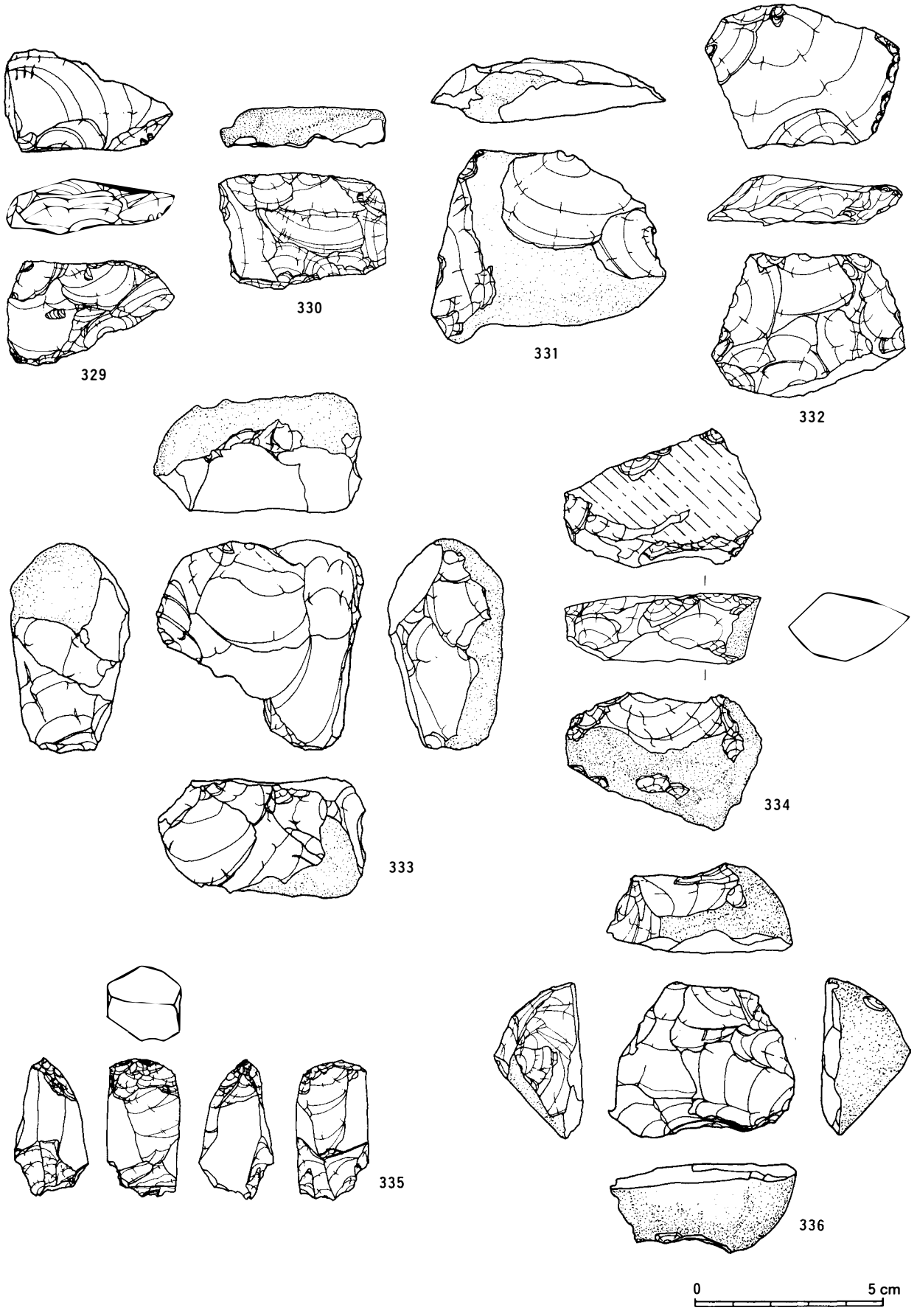




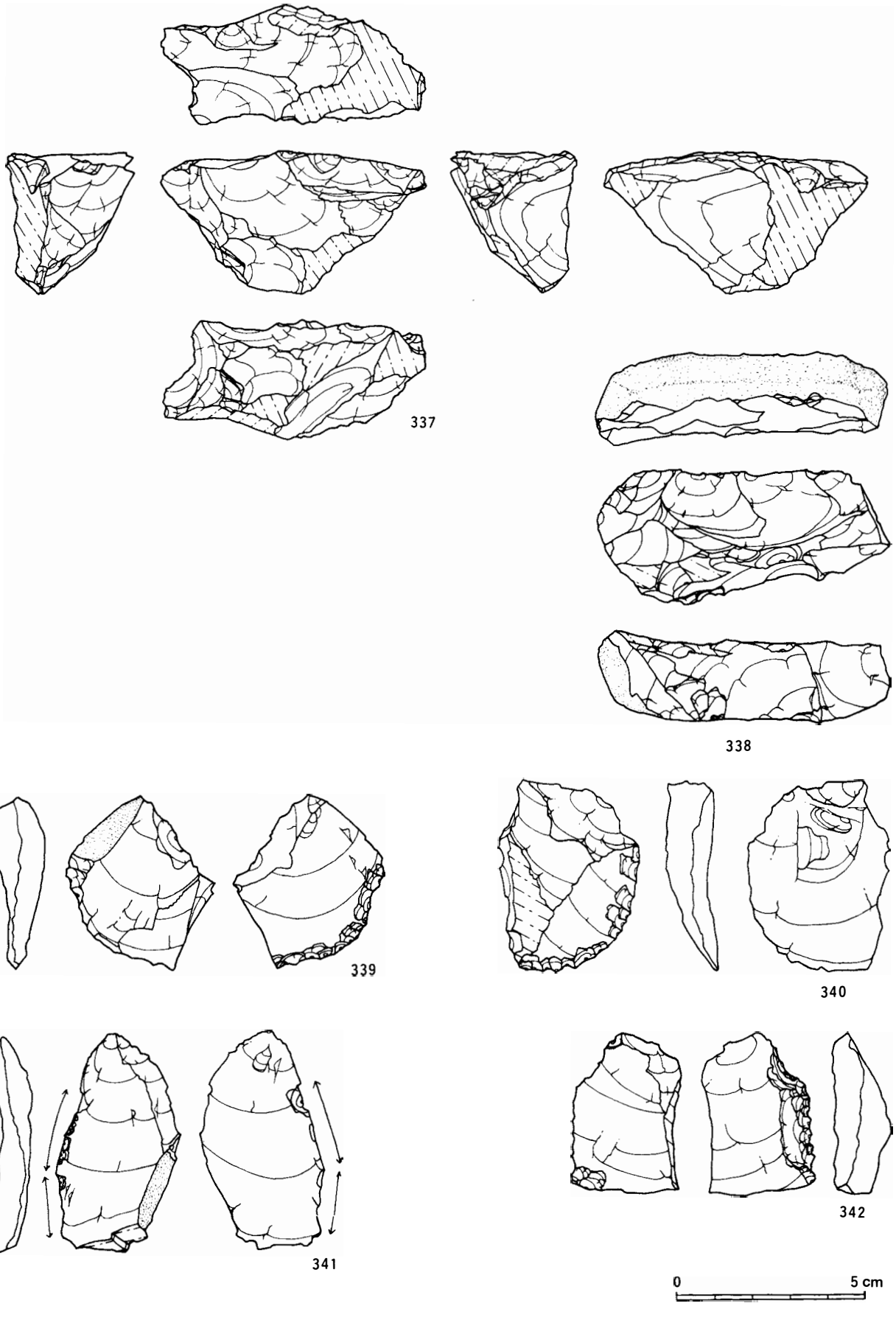




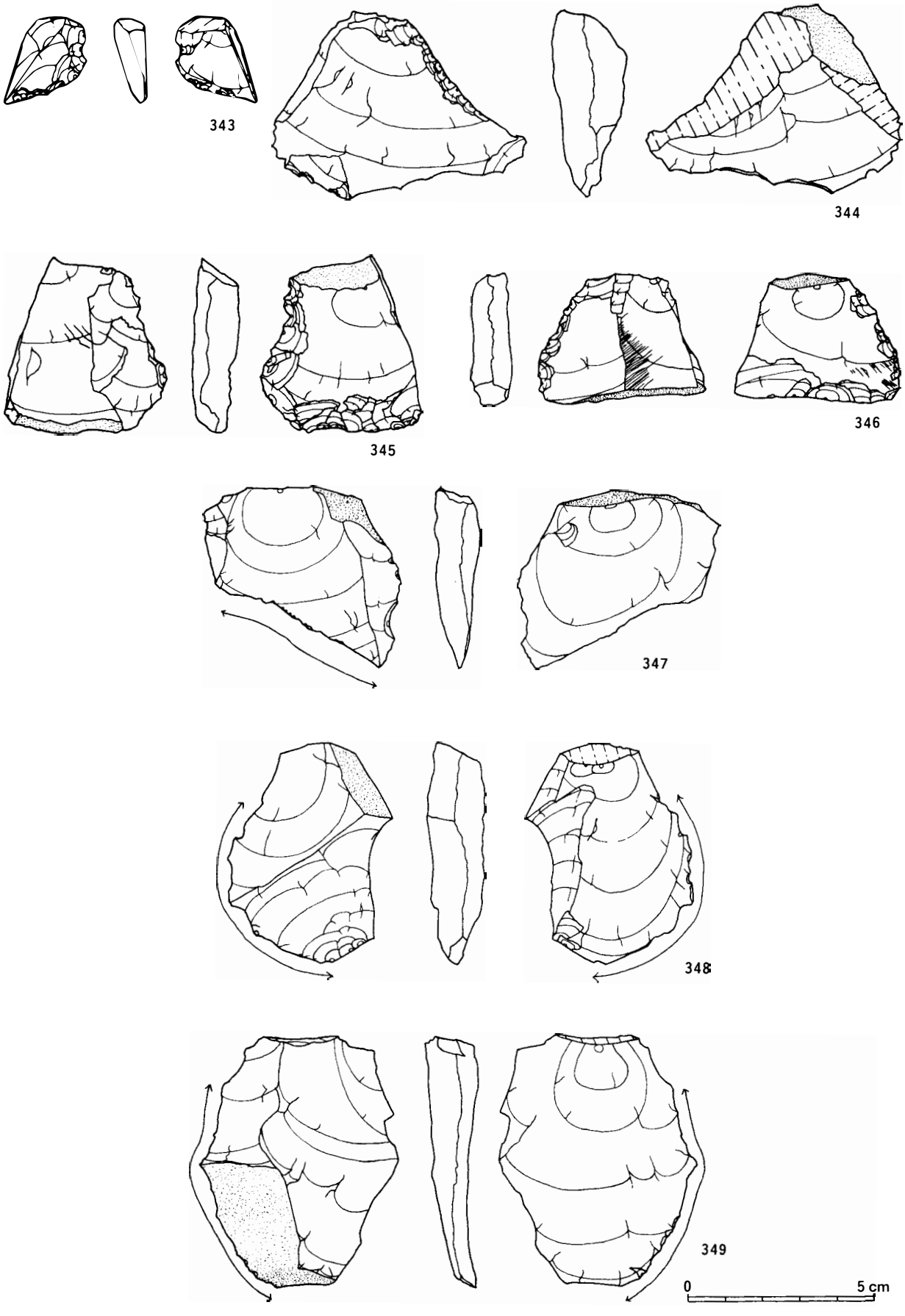
第135図　石器実測図(12)　打製石斧(2)



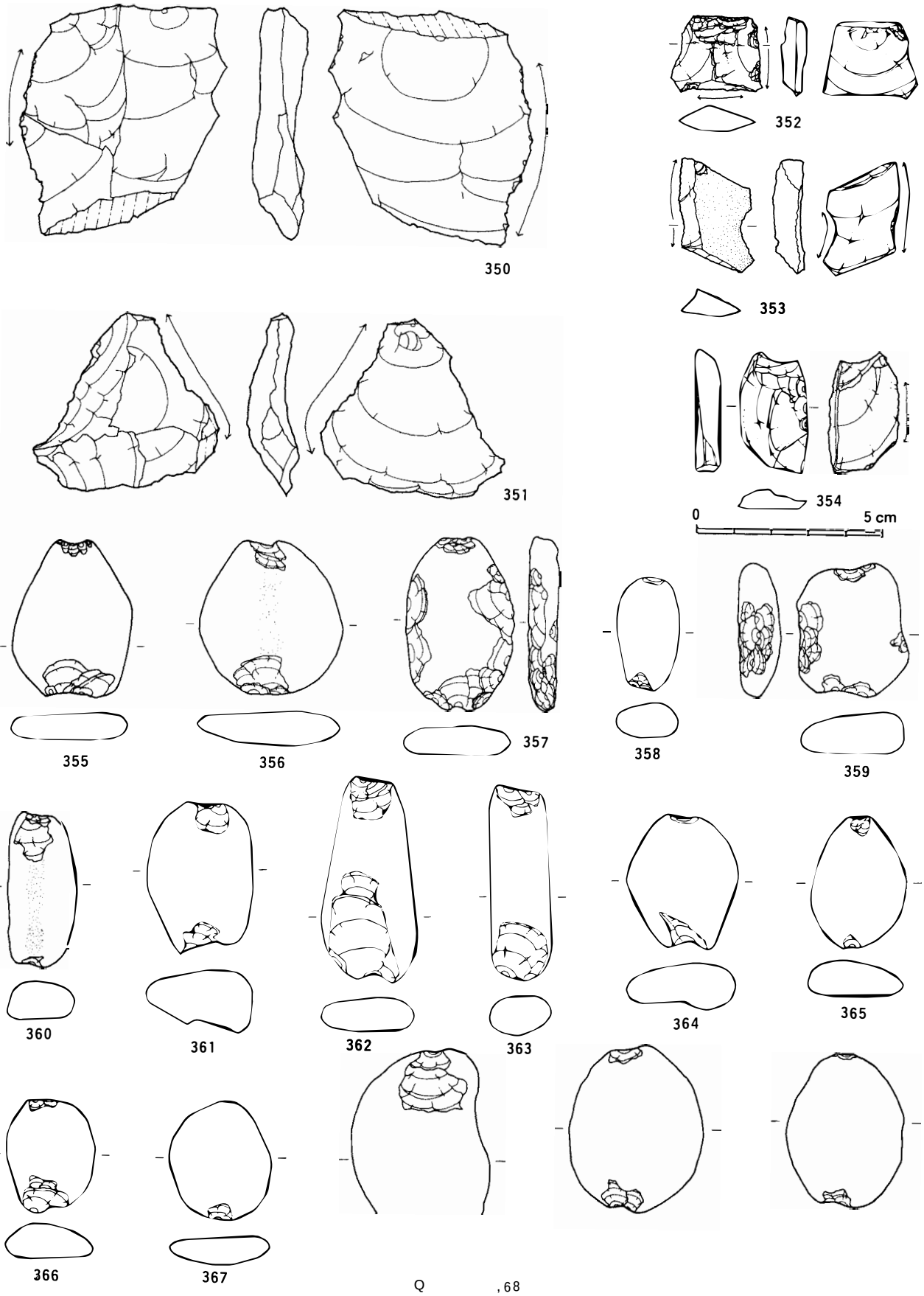
第136図　石器実測図(13)　石核(1)



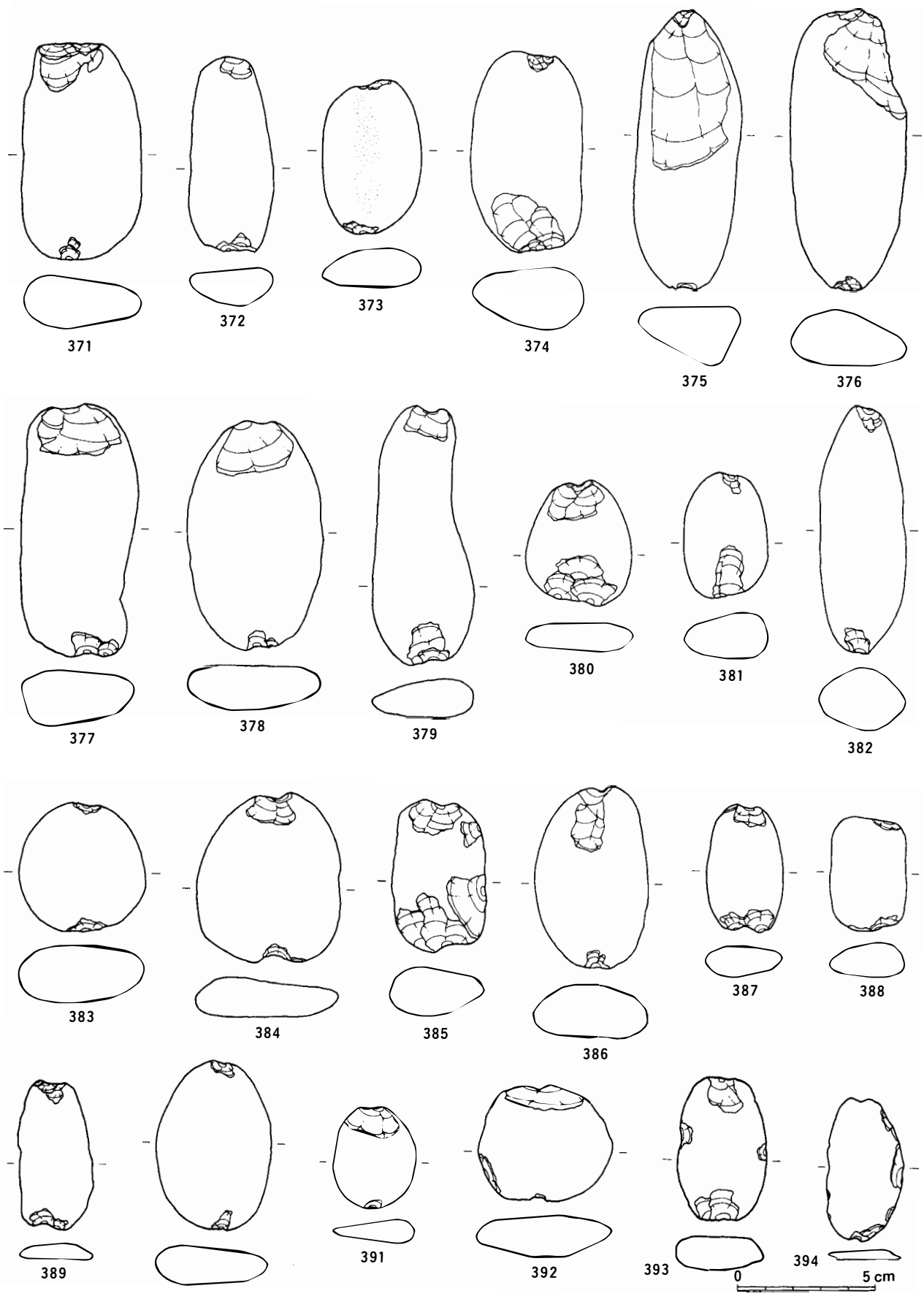
第137図　石器実測図(14)　石核(2)・調整剝離を施された剝片(1)



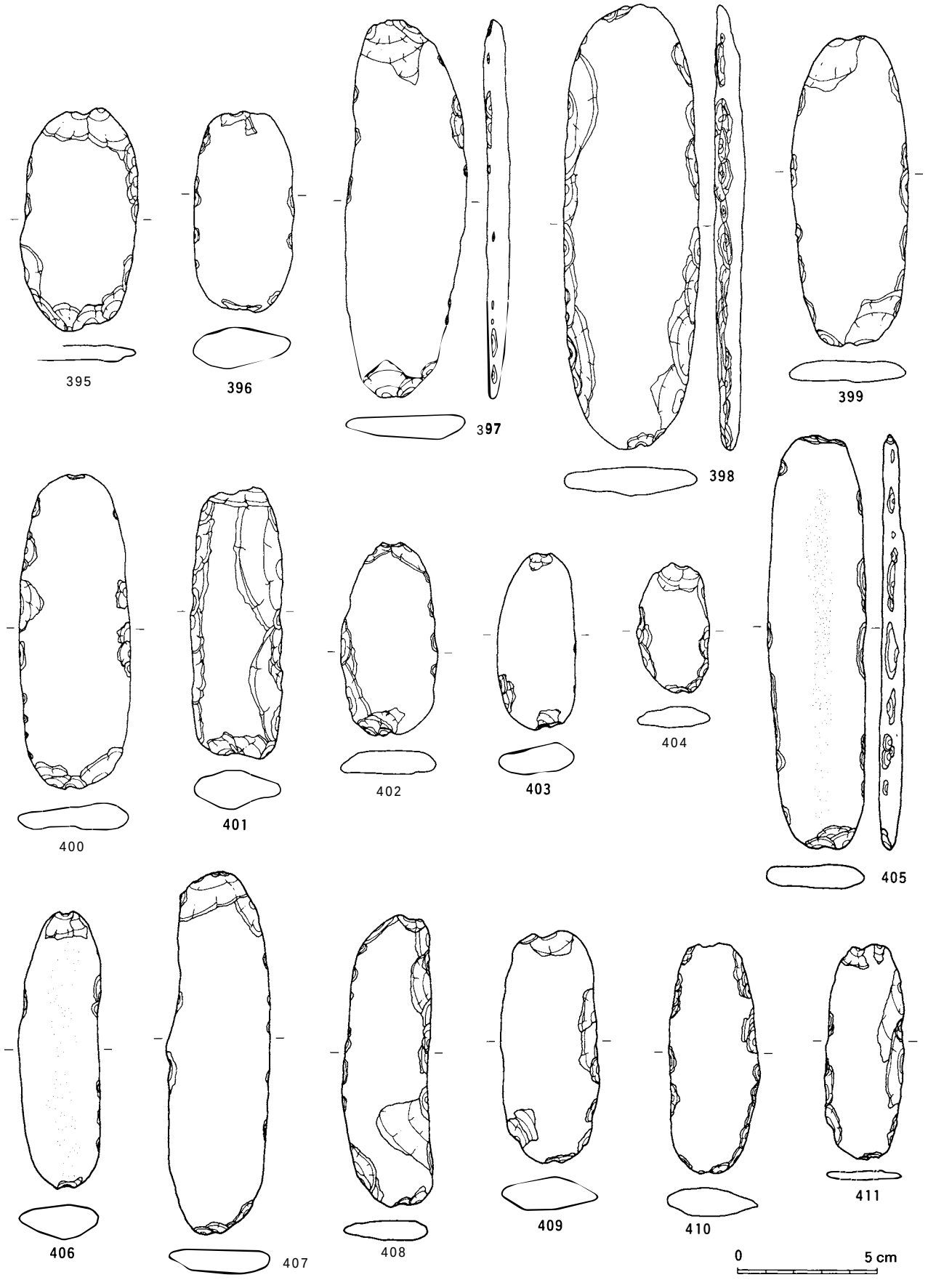
第138図　石器実測図(15)　調整剥離を施された剥片(2)・微細な剥離痕を有する剥片(1)



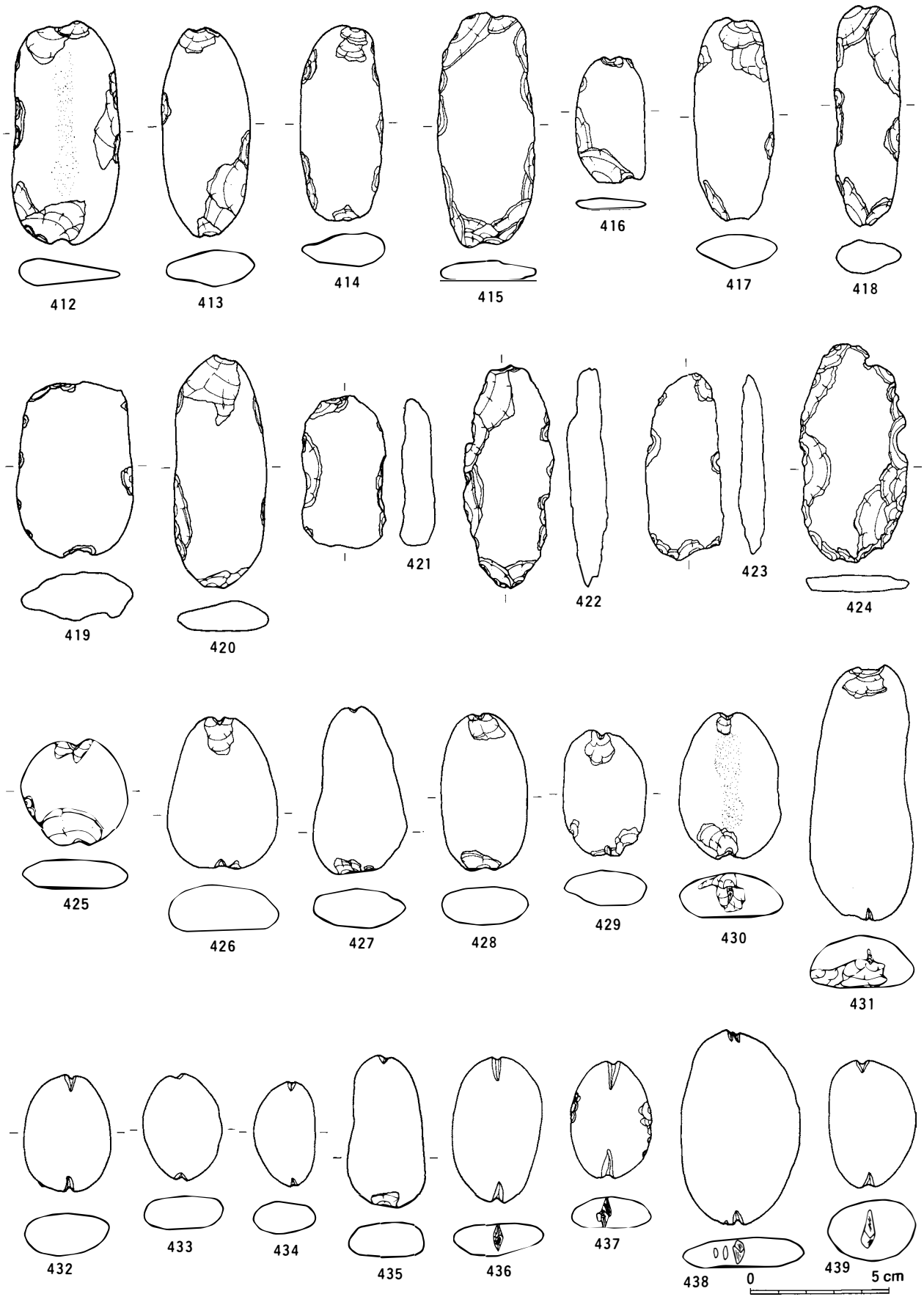
第139図　石器実測図(16)　微細な剝離痕を有する剝片(2)・打欠石錘(1)



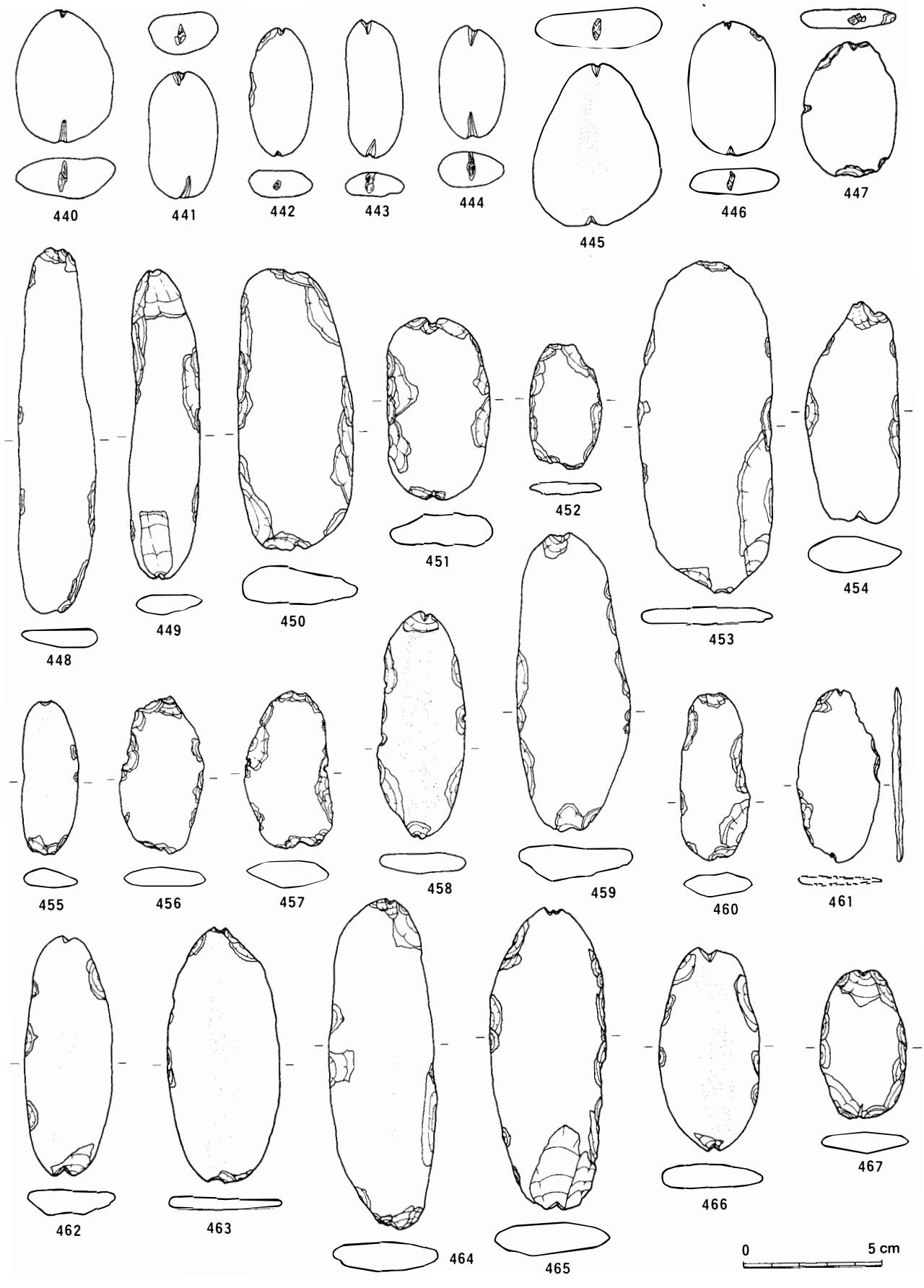
第140図　石器実測図(17)　打欠石錘(2)



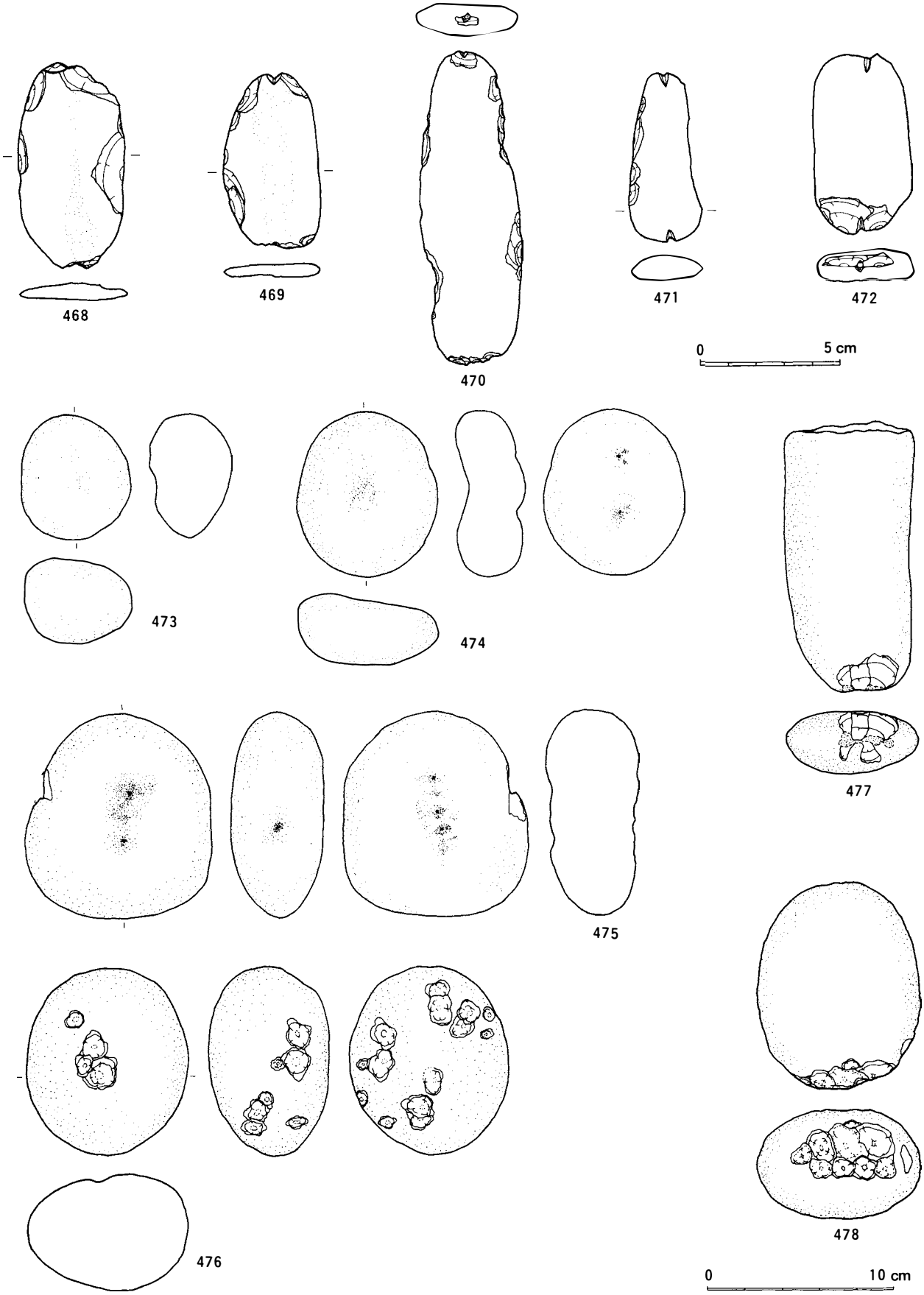
第141図　石器実測図(18)　打欠石錘(3)



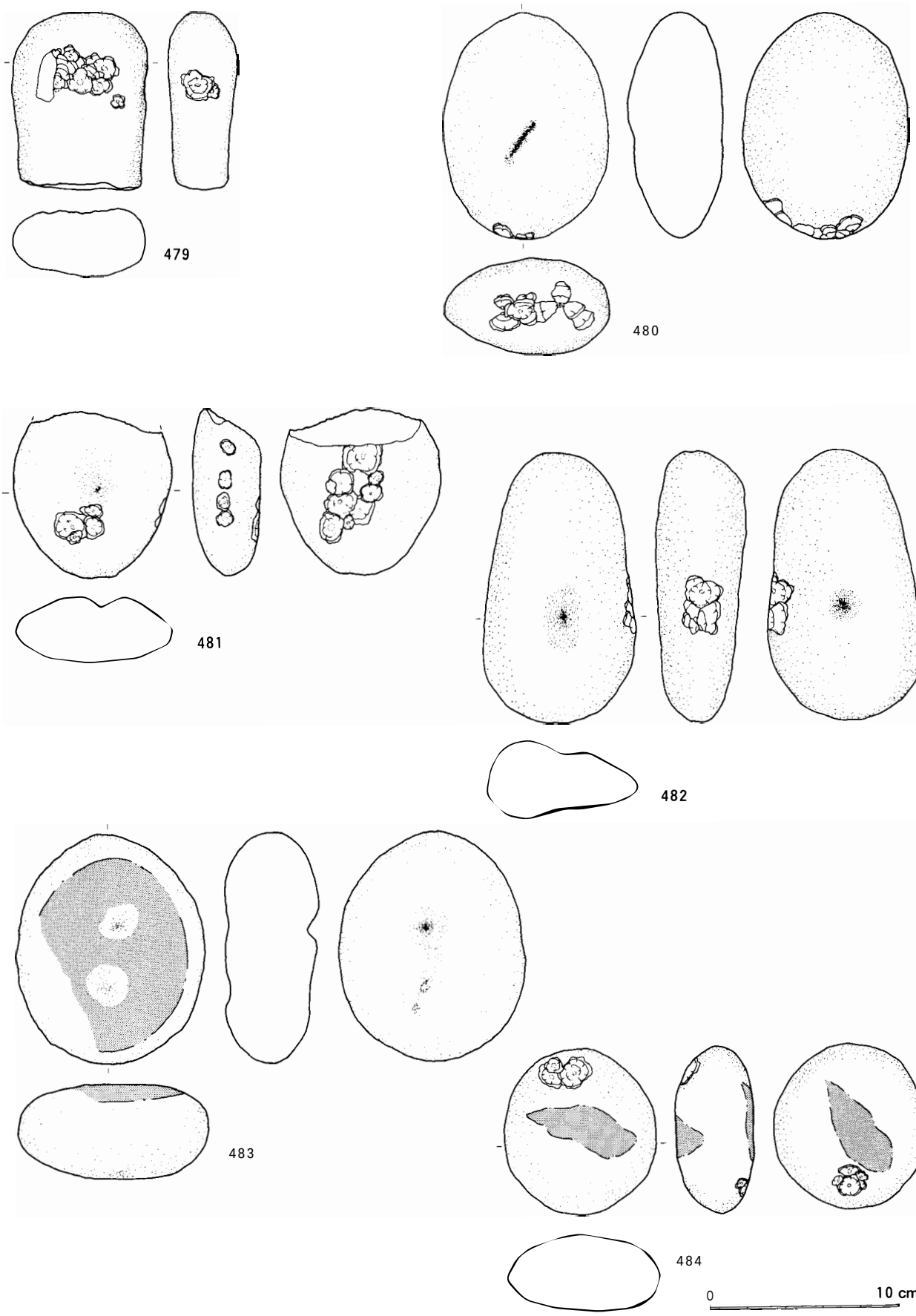
第142図　石器実測図(19)　打欠石錘(4)・切目石錘(1)



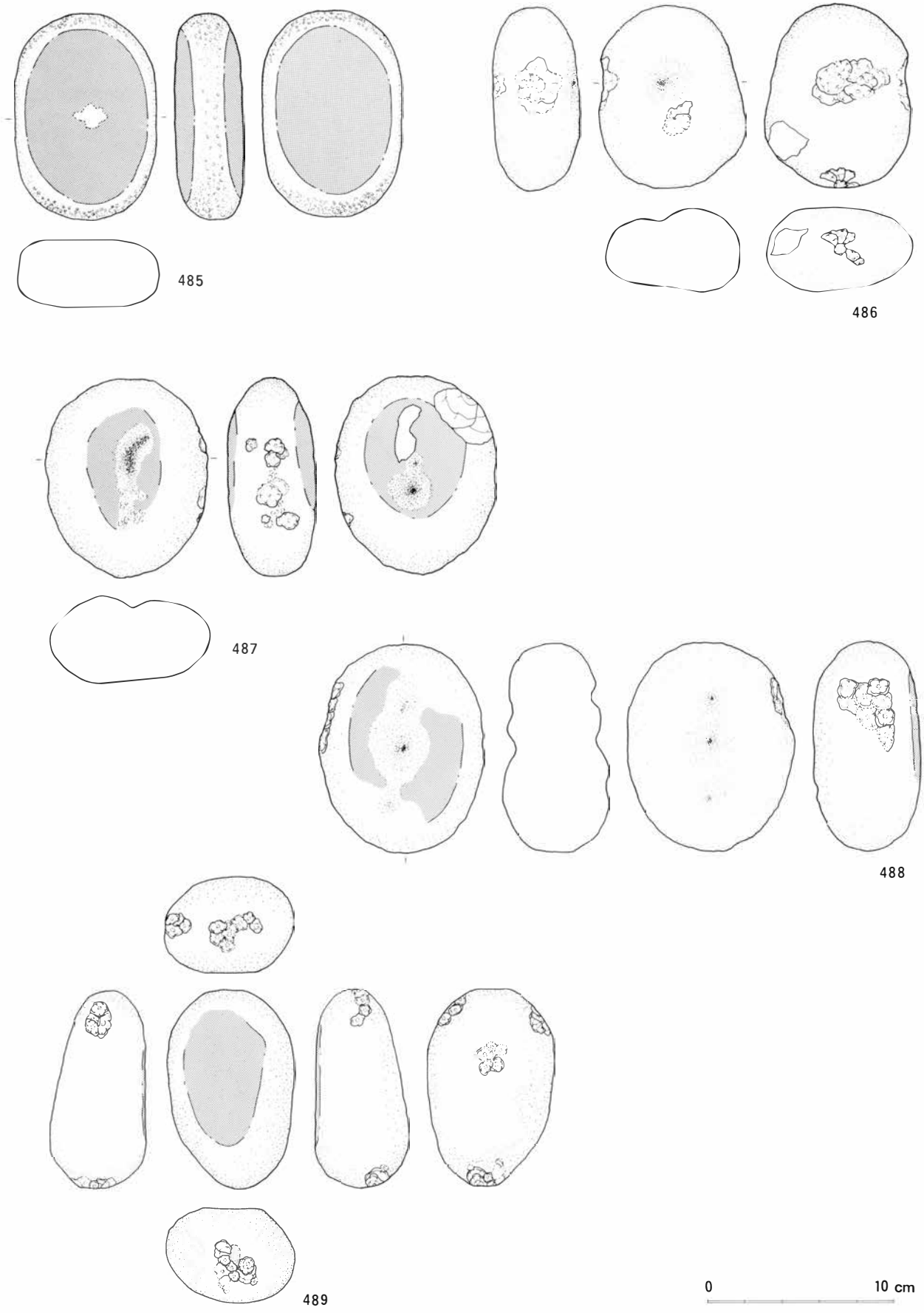
第143図　石器実測図(20)　切目石錘(2)



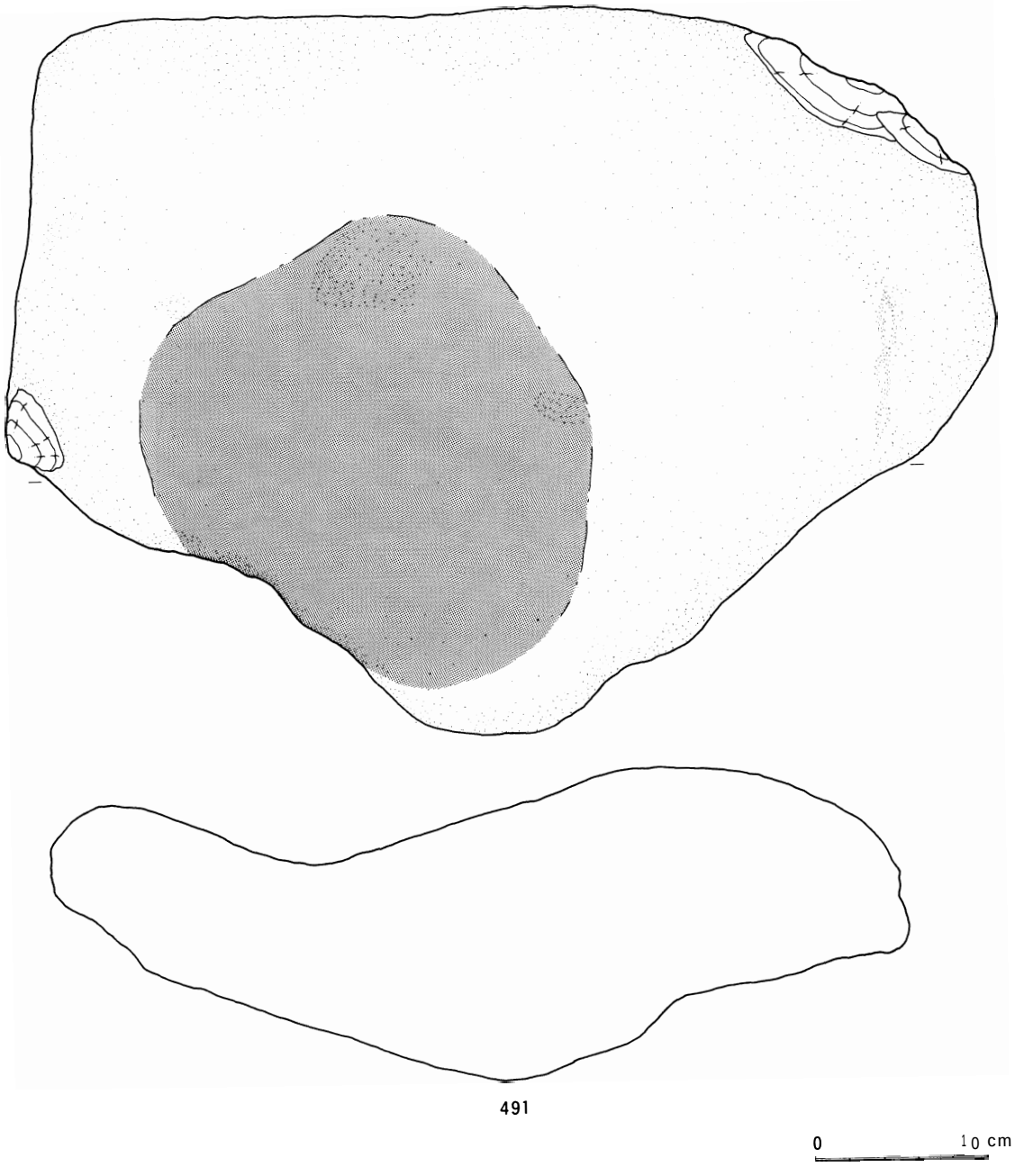
第144図　石器実測図(21)　切目石錘(3)・凹・敲・叩・磨石類(1)



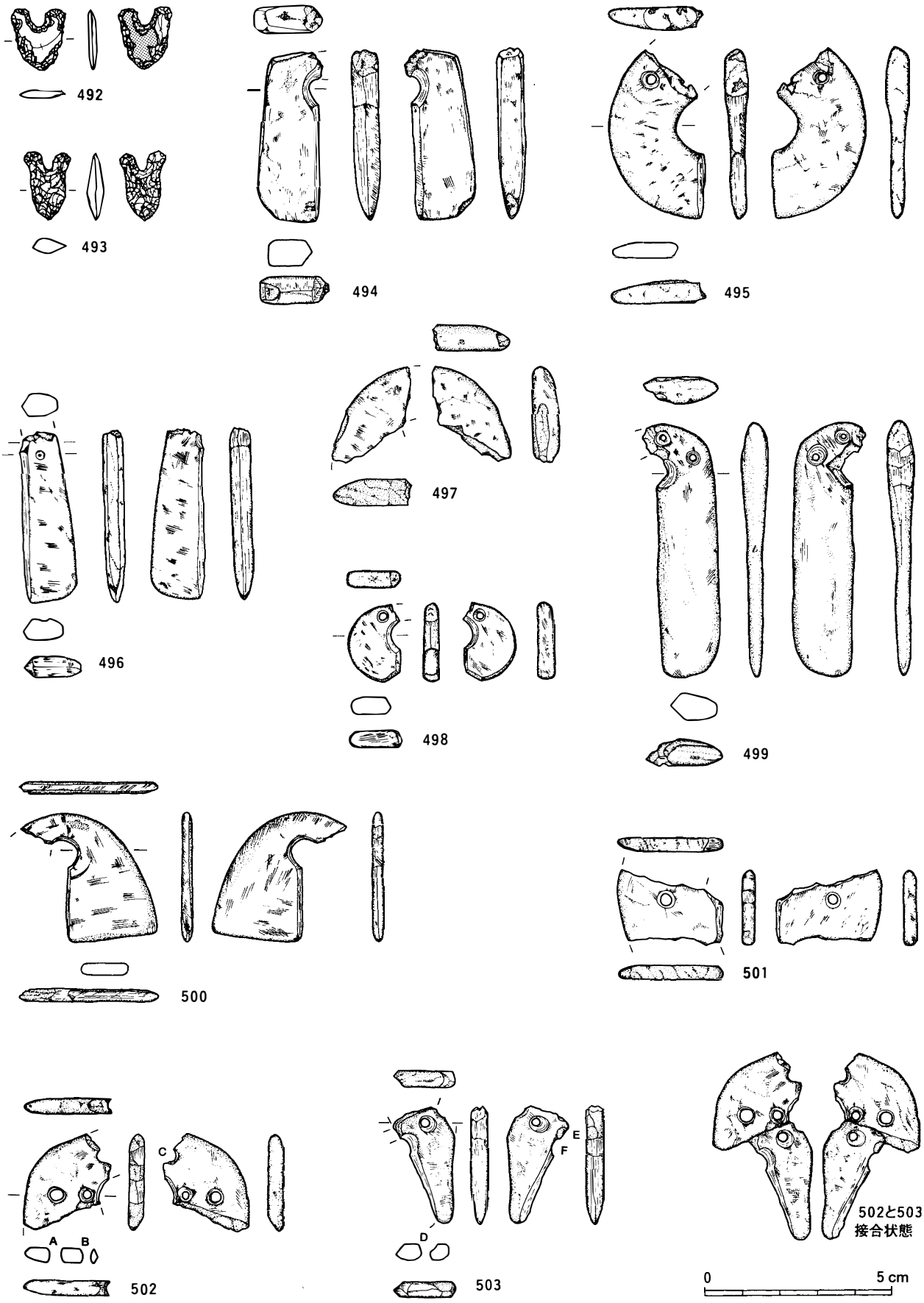
第145図　石器実測図(22)　凹・敲・叩・磨石類(2)



第146図　石器実測図(23)　凹・敲・叩・磨石類(3)



第147図　石器実測図(24)　凹・敲・叩・磨石類(4)・石皿



第148図　石器実測図(25)　異形石器・玦状耳飾

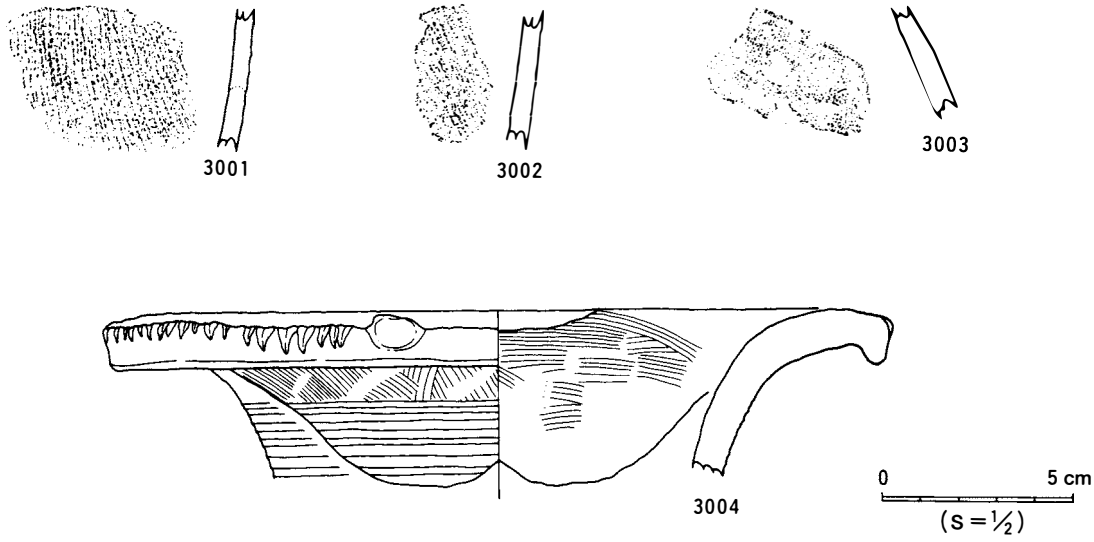
３．その他の遺物

弥生土器

第１地点からは、弥生土器と思われるものが４点出土している（3001～3004）。そのうち3001～3003は小片である。3003は外面に赤色塗彩の痕跡が残る。壺の一部かと思われる。弥生土器の可能性が高いと判断しここで報告するが、確証はない。3001・3002は外面に斜めのハケメが観察される。調整・胎土など第２地点で出土した亜流遠賀川式の甕に似ているので、弥生土器と判断した。

3004は口縁が大きく開く壺である。端部を肥厚させて、これを垂下している。端部上面には、刻みによる文様が加えら、瘤状突起（１ケ所）が認められる。この突起は口縁の２ケ所に施されたものと考えられる。頸部には沈線５条が現存する。内外ともハケ調整である。従来の朝日式の範疇に含まれるが、朝日式～貝田町式をつなぐ形式となる可能性もある。

（近藤大典）



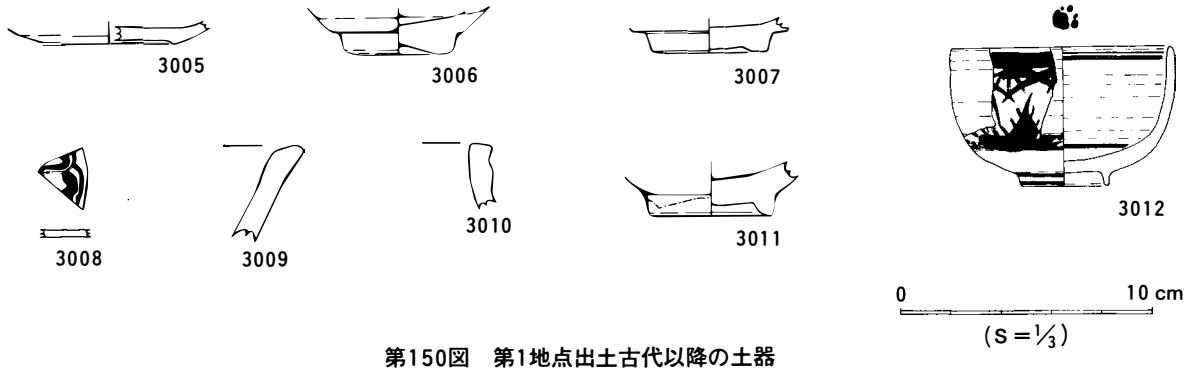
第149図　第1地点出土弥生土器

古代以降の土器

本地区からは灰釉陶器４点、古瀬戸３点、大窯19点、青磁３点、白磁１点、染付１点、瓷器系陶器３点、古瀬戸～瀬戸美濃２点、瀬戸美濃236点、肥前15点、不明３点、合計290点が出土し、そのうち８点（3005～3012）を図示した。

3005～3007は大窯であり、3005は丸皿、3006と3007は天目茶碗である。3005は碁笥底であり、底部外面にピン痕が残る。3006は内反り高台、3007は輪高台の天目茶碗であり、3006は高台周辺に錆化粧が施されている。3008は染付皿であり、内面に十字花文が描かれている。3009と3010は産地と時期不明の鉢と甕としたが、胎土と器面の色調から越前産の可能性も考えられる。3011と3012は瀬戸美濃で

あり、3011は飴釉丸碗、3012は染付湯呑である。3012は口縁部内面に圏線2条、底部内面に圏線1条と花文、体部外面に竹林と圏線1条が呉須で描かれている。　（小野木　学）



第150図　第1地点出土古代以降の土器

第　3　地　点

第4章　第3地点

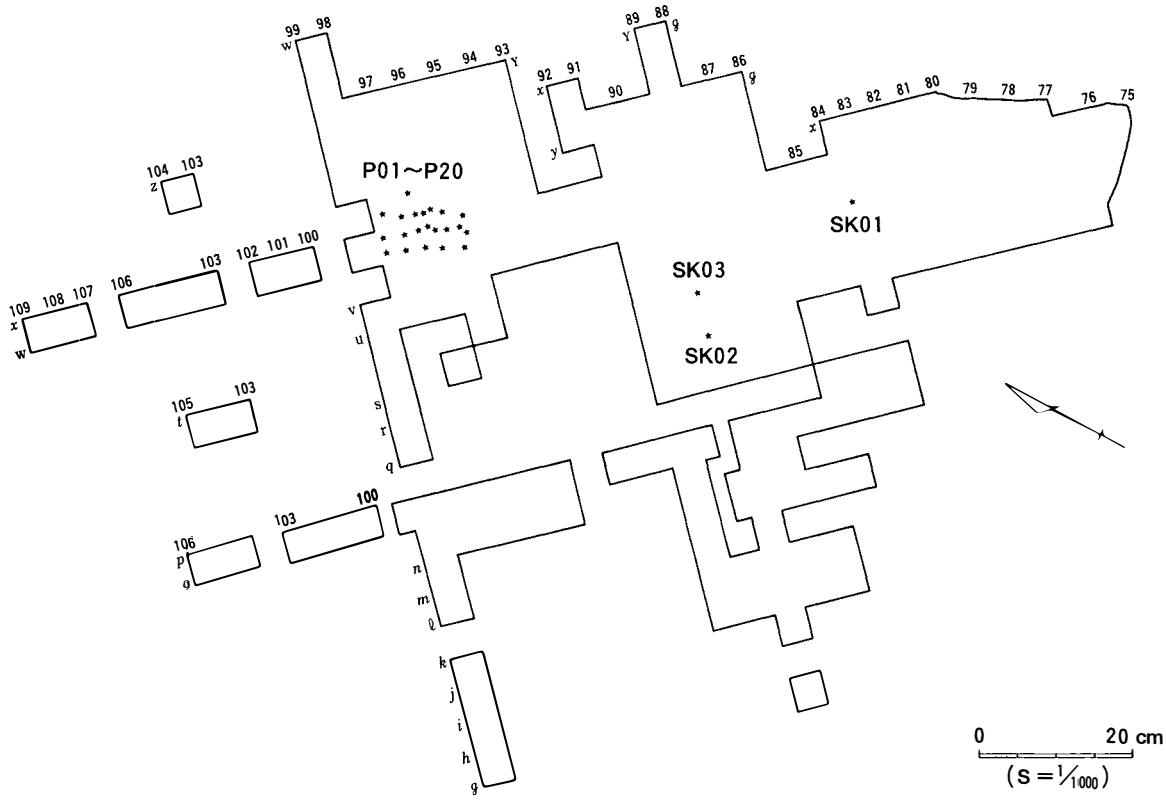
上原遺跡の第1・2・4・5地点の広がる中位段丘（標高307～310m）よりもさらに20mあがった高位段丘（標高330～332m）上に位置するのが第3地点である。背後に迫る山斜面から中位段丘に向かって舌状に突き出した形をしている。地形はほぼ平坦であるが、山側は斜面に近づくにつれて高まりをみせる。本地点の南東には谷があり、第5地点を経て第2・4地点へと扇状に広がる。本地点は上原遺跡の中ではやや奥まった位置にあるが、段丘の縁に立つと最上流部にある低位段丘上の第6地点から下流部の第2地点まで、上原遺跡のほぼ全体を見渡すことができる。また遠くを望めば、揖斐川を挟み対岸の本郷集落まで見渡せる。段丘の北端は断崖になっており、数10m下に揖斐川を見下ろすことができる。また斜面をやや上れば、上流部の山手宮前遺跡や尾元遺跡も見える。対岸の尾元遺跡とはまさに「指呼の間」であるといえる。

本地点は古来、「長者が平」と呼ばれ、白蛇にまつわる長者伝説がある。また明治～昭和初期の様子についての聞き取り調査によると、狐がよく出没したとか、たくさん栗が拾える、井戸などの水溜施設があったなど、いつの時代でも人々の訪れがあったことがうかがえた。本調査前に行った伐採によって、近現代の耕作に伴うと考えられる石列や土坑が確認できた。

第1節　層序

本地点の基本的な層序は、第Ⅰ～Ⅳ層で構成されており、上原遺跡全体を貫く基本層序にほぼ該当する。第Ⅰ層は暗褐色土である。現地形の表土で、堆積は比較的浅い。植物の根などが多く入り込んでいる。第Ⅱ層は黒褐色土で、段丘の中央部付近では厚く堆積している。本層中では他地点と同様にアカホヤ火山灰（K-Ah）が確認できた。段丘端部および石段の上では盛り土もみられる。この盛り

第3地点
89列北壁セクション
（南より）

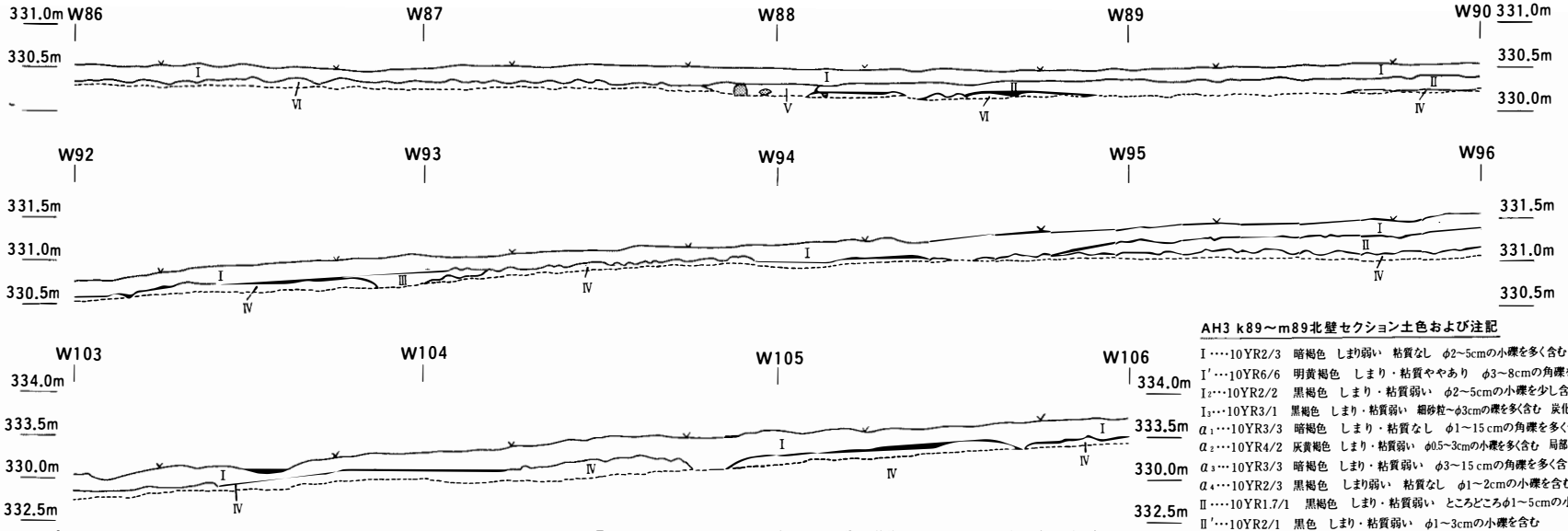


第151図　第3地点遺構配置図

土は不明な点もあるが、本層に近似した層と判断した。また段丘南東部に位置する谷に近いところでは、埋没浅谷が確認でき、複数の崩積性堆積物がみられる。第Ⅲ層は第Ⅰ層に近い暗褐色土である。土色は近似しているが土質は異なり、粘質である。第Ⅳ層は黄褐色土で、大きく粘質土層と砂礫層に分けられる。砂礫層は下部で段丘礫を含む。

以上の４層が本地点で確認できるが、段丘全体の堆積状況は一様でなく、場所によってかなり複雑な堆積状況のところもある。第152図に示したｋ89～ｍ89はその典型例である。89列に限らず特に山側はかなり厚く複雑に堆積している。一方それに比べ段丘端部に近い川側の堆積はかなり浅く、第Ⅰ層直下に第Ⅳ層が堆積している箇所も珍しくない。その様子は第152図のｗ列土層図から見てとれる。現地形はほぼ平坦であるが、そこに至る過程は複雑なものであることがわかる。

遺物を包含している層は、第Ⅰ～Ⅲ層である。明確でない部分もあるが、第Ⅰ・Ⅱ層からは灰釉陶器などの古代以降の土器や縄文土器が、第Ⅲ層からは縄文土器・石器が多く出土している。また第Ⅱ層から出土した遺物のほとんどが、アカホヤ火山灰（Ｋ-Ａｈ）が確認できる位置より上部で出土している。



AH3 w86～w90 w92～w96 w103～w106西壁セクション土色および注記

Ⅰ……10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質弱い　φ0.5～1cm前後の礫を少量含む　木根多い

Ⅱ……10YR4/3　にぶい黄褐色　しまりややあり　粘質ややあり　木根少量含む　φ1cm前後の礫を少量含む　漸移層か

Ⅲ……10YR3/3 暗褐色～10YR3/4 暗褐色　しまり弱い　粘質ほとんどなし　φ1cm前後のをごく少量含む　木根・木根痕が若干見られる　基本的にはⅠ層に類似するがⅥ層がやや混じる　PかSKもしくは風倒木痕の可能性が高い

Ⅳ……10YR3/4　暗褐色　しまりなし　粘質弱い　φ1～10cm前後の円礫などをやや多く含む　木根やや多い　Ⅰ層と非常によく似るが、Ⅵ層の混入がやや多い

Ⅴ……10YR5/4 にぶい黄褐色～10YR6/6 明黄褐色　しまり・粘質ややあり　φ0.5～3cm前後の礫を含む

AH3 k89～m89北壁セクション土色および注記

Ⅰ……10YR2/3　暗褐色　しまり弱い　粘質なし　φ2~5cmの小礫を多く含む　木根多い

Ⅰ′…10YR6/6　明黄褐色　しまり・粘質ややあり　φ3～8cmの角礫を含む

I_2…10YR2/2　黒褐色　しまり・粘質弱い　φ2～5cmの小礫を少し含む

I_3…10YR3/1　黒褐色　しまり・粘質弱い　細砂粒～φ3cmの礫を多く含む　炭化物を若干含む

α_1…10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質なし　φ1～15cmの角礫を多く含む

α_2…10YR4/2　灰黄褐色　しまり・粘質弱い　φ0.5~3cmの小礫を多く含む　局部的に砂層あり

α_3…10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質弱い　φ3～15cmの角礫を多く含む

α_4…10YR2/3　黒褐色　しまり弱い　粘質なし　φ1～2cmの小礫を含む

Ⅱ……10YR1.7/1　黒褐色　しまり・粘質弱い　ところどころφ1～5cmの小礫含む

Ⅱ′…10YR2/1　黒色　しまり・粘質弱い　φ1～3cmの小礫を含む

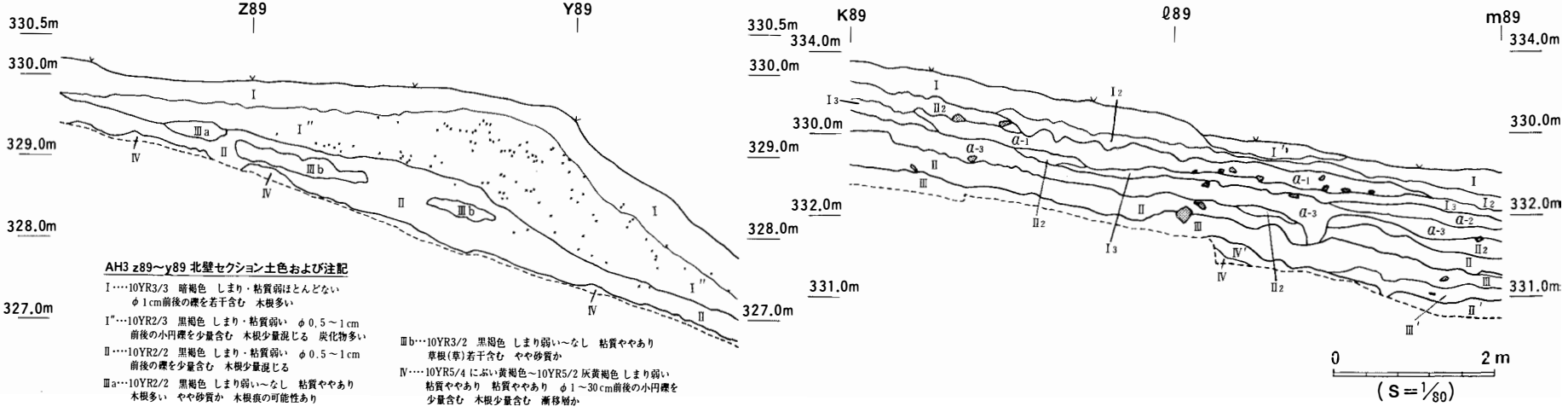
II_2…10YR3/1　黒褐色　しまり・粘質弱い　礫はほとんど含まない

Ⅲ……10YR3/4　暗褐色　しまりややあり　粘質ややあり　礫をほとんど含まない

Ⅲ′…10YR3/3　暗褐色　しまりややあり　粘質弱い　φ1~2cmの小礫を少し含む

Ⅳ……10YR3/2　黒褐色　しまりあり　粘質ややあり　礫を含まない

Ⅳ′…10YR7/6　明黄褐色　しまり・粘質あり



AH3 z89～y89 北壁セクション土色および注記

Ⅰ……10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質弱ほとんどない　φ1cm前後の礫を若干含む　木根多い

Ⅰ″…10YR2/3　黒褐色　しまり・粘質弱い　φ0.5～1cm前後の小円礫を少量含む　木根少量混じる　炭化物多い

Ⅱ……10YR2/2　黒褐色　しまり・粘質弱い　φ0.5～1cm前後の礫を少量含む　木根少量混じる

Ⅲa…10YR2/2　黒褐色　しまり弱い～なし　粘質ややあり　木根多い　やや砂質か　木根痕の可能性あり

Ⅲb…10YR3/2　黒褐色　しまり弱い～なし　粘質ややあり　草根(草)若干含む　やや砂質か

Ⅳ……10YR5/4 にぶい黄褐色～10YR5/2 灰黄褐色 しまり弱い　粘質ややあり　粘質ややあり　φ1～30cm前後の小円礫を少量含む　木根少量含む　漸移層か

第152図　第3地点w列・89列土層図

第２節　遺構

本地点の中央部南よりに埋没谷に伴う凹地があり、西側の斜面から崩れてきた崩積性堆積物に混じって黒褐色土が厚さ２ｍ以上も堆積していた。さらにこの下には、灰黄褐色の粘質土が堆積している。このあたりは水がたまりやすい場所で、第３地点の段丘が近現代に畑として利用された際にも、水溜場として使われていた。第３地点の東端から南端にかけての段丘端部では、逆に崩積性堆積物や黒褐色土層の堆積はなく比較的平坦な地形となり、地山である第Ⅳ層の上に薄く表土が堆積するのみである。よって、遺構の検出には西側では困難を極め、東側ではすでに削平等により失われていることがあった。第Ⅳ層に残されていた土坑の可能性のある堀り込みはいくつか検出されたが、遺物を伴うものはほとんどなく、またその時代や性格を確認できるものはごくまれであった。明確に確認できたのは、土坑３基（内１基は土坑墓）、焼土１基と焼礫遺構１基及びこの周辺のピット群のみである。

第１号土坑墓（ＳＫ01）〈第153図　図版５〉

ｕ84グリッド内の第Ⅳ層直上で検出した。地山と考える第Ⅳ層の黄褐色土層に堀り込み、土坑以外に特別な施設は確認できなかった。土坑は、長径約200㎝、短径約110㎝の楕円形を呈している。深さ15㎝で底面はほぼ平らである。長軸は磁北からはずれるがほぼ北を向いている。土坑内の埋土には、多くの細かな炭化物が含まれていた。特に南北の両端から多く見つかっている。埋土の中には数個の10㎝大の亜円礫を除いて、礫は見られない。土坑墓に伴う遺物として灰釉陶器の碗（第161図　図版87）と不明土器（図版88）がある。ともに土坑墓内の北部、特に不明土器の鉢は北端から出土し、埋土の最下層中で見つかっている。特にこの土坑墓周辺の撹乱層からは、灰釉陶器片が多く出土しており、その数は第３地点から出土した総量の３分の１を占める。この土坑墓内出土の灰釉陶器は、11世紀後半にに比定され、土坑墓もこの時代のものと推定される。この土坑墓は段丘の南東部端近くで検出された。眼下には揖斐川の流れから本郷地区の集落が一望に広がり、眺望の良好な地である。

第２号土坑（ＳＫ02）〈第154図　図版５〉

ｒ89～ｒ90グリッドにかけての第Ⅳ'層（灰黄褐色粘質土層）直上で検出した。土坑は半径約70㎝の円形で、深さ約50㎝の底部はほぼ平らである。底部には15～20㎝大の数個の砂岩質の角礫が見られた。土坑の側面には、幅約２㎝の黒褐色土の帯が10㎝間隔でほぼ平行に２条検出された。この黒褐色土には植物質の腐植物が含まれていた。また側面の土は粘性の強い暗灰褐色土で、たたきしめたようにかなりしまりがあった。以上のことから２本のたがをはめた桶状の木製品をすえ付け、周囲の隙間を粘質の土で埋めていたのではないかと推測される。時期を確定する遺物等は出土せず、不明である。

第３号土坑（ＳＫ03）〈第154図　図版５〉

ｓ90～ｔ89グリッドの第Ⅳ'層（灰黄褐色粘質土層）直上で検出した。土坑は、半径約60㎝の円形で、深さ約50㎝の底部はほぼ平らである。土坑の底の中心やや西よりに、砥石の可能性もある磨痕のある立石が検出された。時期を確定する遺物等は出土せず、不明である。ＳＫ02及び03が検出されたｑ90～ｕ89にかけては、第Ⅳ'層（灰黄褐色粘質土層）に多くの堀り込みが存在した。前述したようにこの辺り

は水がたまりやすく、遺構検出後さらにこの付近の下部の土層を確認したが、厚さ数十cmにわたって粘性の強い灰黄白色土層が堆積していた。これらの掘り込みの大半は、不定型なもので土坑とは判定しがたい。何かを入れる穴ではなく、土を掘ること自体に目的があるような様子がうかがえる。この第3地点から多く出土した打製石斧と考えあわせると、植物性の食料としての根茎類を採集したことに加え、粘土を採掘した場として想定できないだろうか、可能性として記しておきたい。

第1号ピット（P01)～第20号ピット（P20）のピット群〈第155図〉

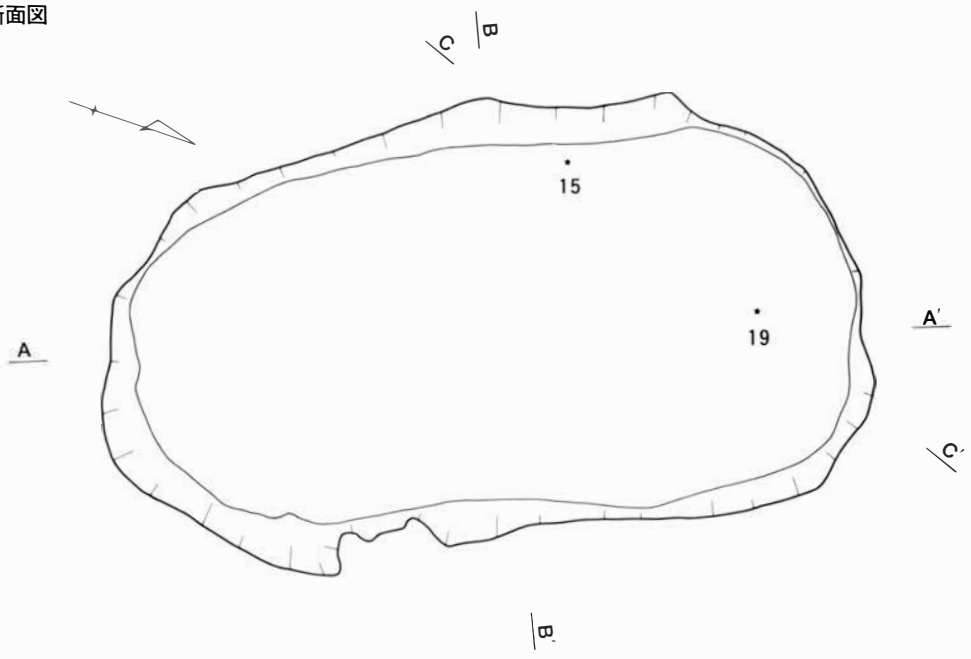
u95～w98グリッドの、第II層の黒褐色土層から第Ⅳ層の黄褐色土層にかけて堀り込まれたピット群を検出した。20基のピット群は、平行な3列から成り、磁北とはずれるがほぼ北を向き、斜面の方向に対して直行している。部分的に撹乱を受けていたこともあり、ピット個々の堀込まれた高さや、埋土の様子は明確にできなかった。ピットの底の高さは、地山である第Ⅳ層の緩やかな傾斜に従って、ほぼ同じ高さを示しており、同一の目的で掘られている可能性がある。なお、20基のピットの他に、検出できなかったピットがあった可能性もある。また、この周辺では、第II層の黒褐色土層から、炭化物とともに多くの焼土と焼礫を検出した。数カ所の焼土が集まるv97グリッドの中で、特に第1号焼土（SF01）は長径約50cmと最も大きく、明確な焼成の様子（赤褐色土5YR4/8）が見て取れる。付近には多くの炭化物に混じって焼礫が点在する中、灰釉陶器片や管状土錘が出土した。この付近で出土した灰釉陶器片は、第3地点出土総数の3分の2を占める。この付近で検出された焼土と焼礫は、出土した灰釉陶器の時期に関係する可能性が大きい。上記のピット群は、これらの焼土や焼礫をその範囲内に含み、焼土や焼礫を取り除いてすぐ検出されている。ピット内から時期を確定する遺物は出土していないが、これらの焼土・焼礫に伴う灰釉陶器に関連する可能性がある。ピット群は、第3地点の中でも西側の山から続く斜面がほぼ平坦になった段丘の東端近くに見られる。明確な建物跡を確定するまでには資料不足は否めないが、3列のピット群が数軒の立て替えを行った掘建柱建物跡である可能性は捨てきれない。前に記した土坑墓とも考えあわせ、出土した灰釉陶器の時期の平安時代後期に、この地が利用された証の一つではないかと考える。

なお、これより下の中位段丘に位置する第2地点には、平安時代の掘立柱建物跡などの遺構と須恵器・灰釉陶器などの遺物を400点ほど確認している。この第2地点との関連はまだ充分解明されていないが、いずれにしても平安時代において上原遺跡に「長者伝説」にまつわるような人々の活動をうかがわせる可能性が指摘できる。

第1号焼土（SF01）〈第155図〉

v95～x97グリッドの第II層の黒褐色土層中で、炭化物とともに多くの焼土と焼礫を検出した。数カ所の焼土が集まるv97グリッドの中で、特に第1号焼土は長径約50cmと最も大きく、明確な焼成の様子（赤褐色土5YR4/8）が見てとれる。付近には多くの炭化物・焼礫に混じって、灰釉陶器片や管状土錘が出土している。第1号焼礫にも灰釉陶器片は含まれ、この付近で検出された焼土と焼礫は灰釉陶器の時期に関係する可能性が大きい。これらの焼土や焼礫の直下から、上述のⅣ層の黄褐色土層まで堀り込まれた20基以上のピットを確認した。（竹中一秋）

SK01平断面図



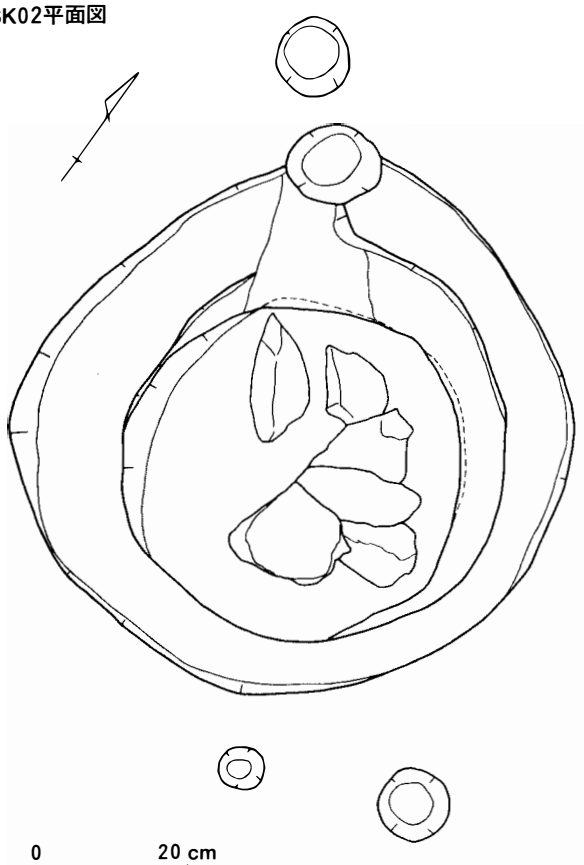
1　10YR2/3　黒褐色　しまり・粘質ともになし
2　10YR2/1　黒　色　しまり・粘質ともになし
3　10YR2/2　黒褐色　しまり・粘質ともになし
4　10YR3/2　黒褐色　しまり・粘質ともになし
5　10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質ともになし
6　10YR6/6　明黄褐色　しまり・粘質ともにあり
7　5に10YR3/4　暗褐色土を含む
8　6に10YR2/2　黒褐色土を含む　やや粘質あり
9　4に10YR6/6　明黄褐色土を含む
10　10YR3/2 黒褐色～10YR2/1黒色
しまり・粘質ともややあり
11　5に10YR6/6　明黄褐色土を含む
やや粘質あり
12　3に10YR6/6　明黄褐色土を含む
やや粘質あり

遺物出土状況

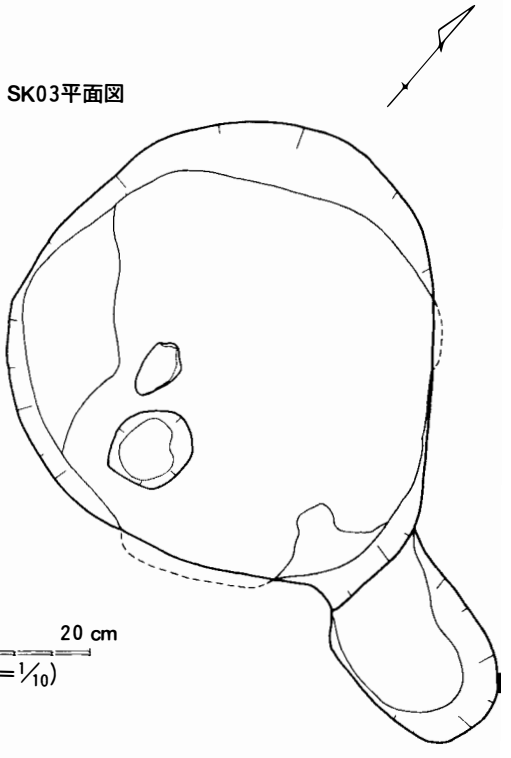
0　50 cm
(S＝1/20)

第153図　SK01実測図

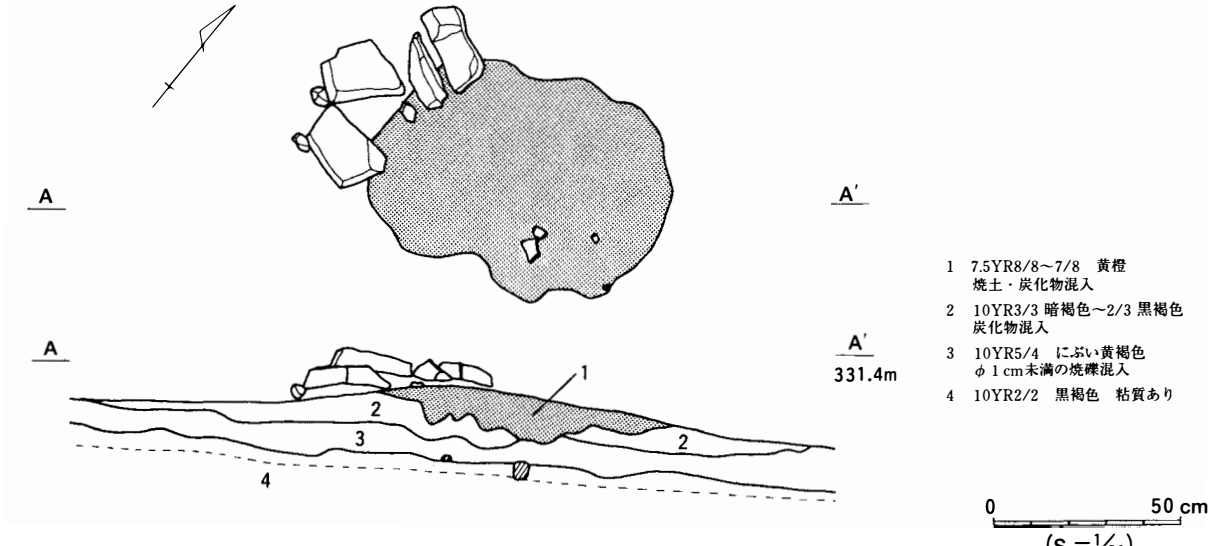
SK02平面図



SK03平面図

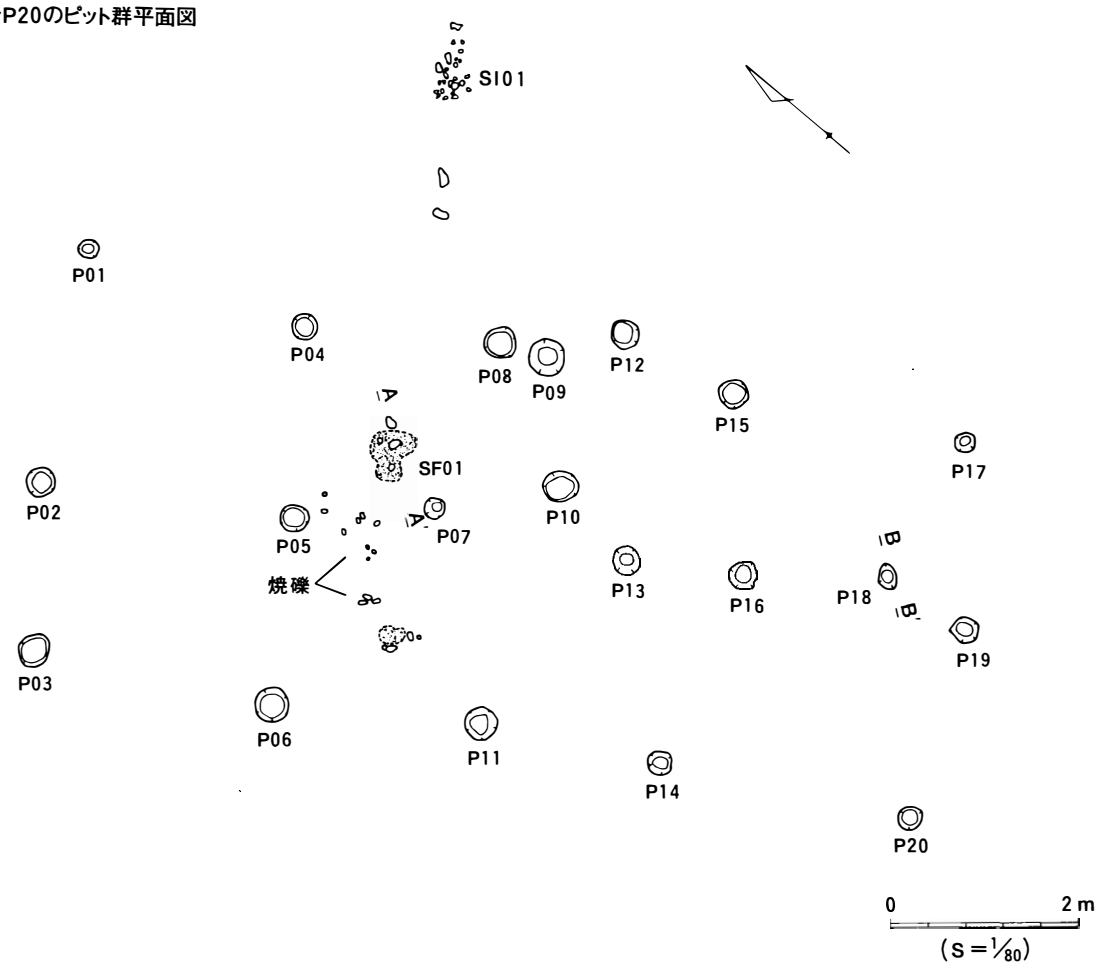


第3地点で検出した焼土の平断面図

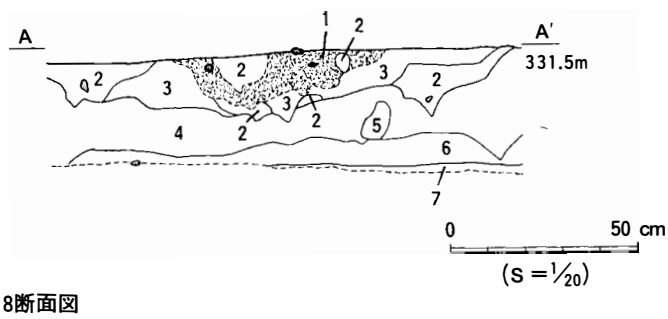


第154図　SK・焼土実測図

P01～P20のピット群平面図

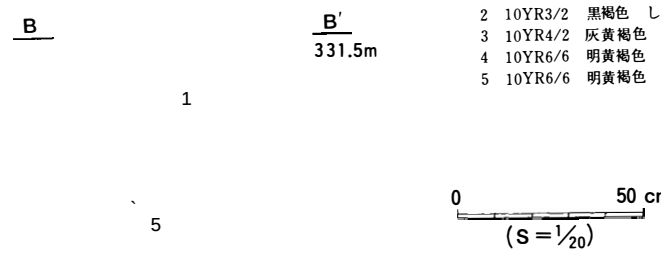


第1号焼土(SF01)断面図



1　5YR4/8　赤褐色　しまりややあり　粘質あり
小礫を含む
2　10YR3/2　黒褐色　しまり・粘質ともになし
植物根による撹乱
3　10YR4/2　灰黄褐色　しまりややあり　粘質なし
被熱　小礫含まず
4　10YR3/1　黒褐色　しまりややあり　粘質なし
炭化物を若干含む
5　10YR3/1　黒褐色　しまり・粘質ともになし
植物根による撹乱
6　10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質ともにややあり
7　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり・粘質ともに
ややあり

P18断面図



1　10YR2/1　黒　色　しまり・粘質ともになし　植物の根が多く入りこむ
2　10YR3/2　黒褐色　しまりややあり　粘質なし　φ1～2cm大の小礫を少し含む
3　10YR4/2　灰黄褐色　しまりややあり　粘質あまりない　小礫を含まない
4　10YR6/6　明黄褐色　しまり・粘質ともにややあり　小礫を含まない
5　10YR6/6　明黄褐色　しまり・粘質ともにあり　小礫を含まない

第155図　P01～P20のピット群実測図

第3節　遺物

第3地点からは1,739点の遺物が出土した。その内訳は縄文土器片が262点、石器類が1,287点、陶器類・金属片などを含むその他が82点である。第1地点同様、接合前の数値であるので純粋な個体数を反映していない部分もある。それぞれの出土点数は多くないので、種類別の概観についての記述は避け、以下個々に説明を加えていく。

1．縄文土器

小片も含め全部で262点出土した。縄文時代の所産であると特定できる遺構がないので、すべて包含層からの出土となる。出土した土器のうち10点図示した。ここに掲載した土器はすべて縄文時代中期以降であると考えられるものであるため、第1地点同様に、既刊の報告書『上原遺跡Ⅰ』の分類に依拠した。分類基準については本書P163～164に掲載したので参照されたし。

101・102・103はC9群の口縁部片で、無文地に沈線を主文様として文様を施す。

104・105は隆帯による縦の区画内に沈線で羽状文を施すもので、C11群に分類できる。

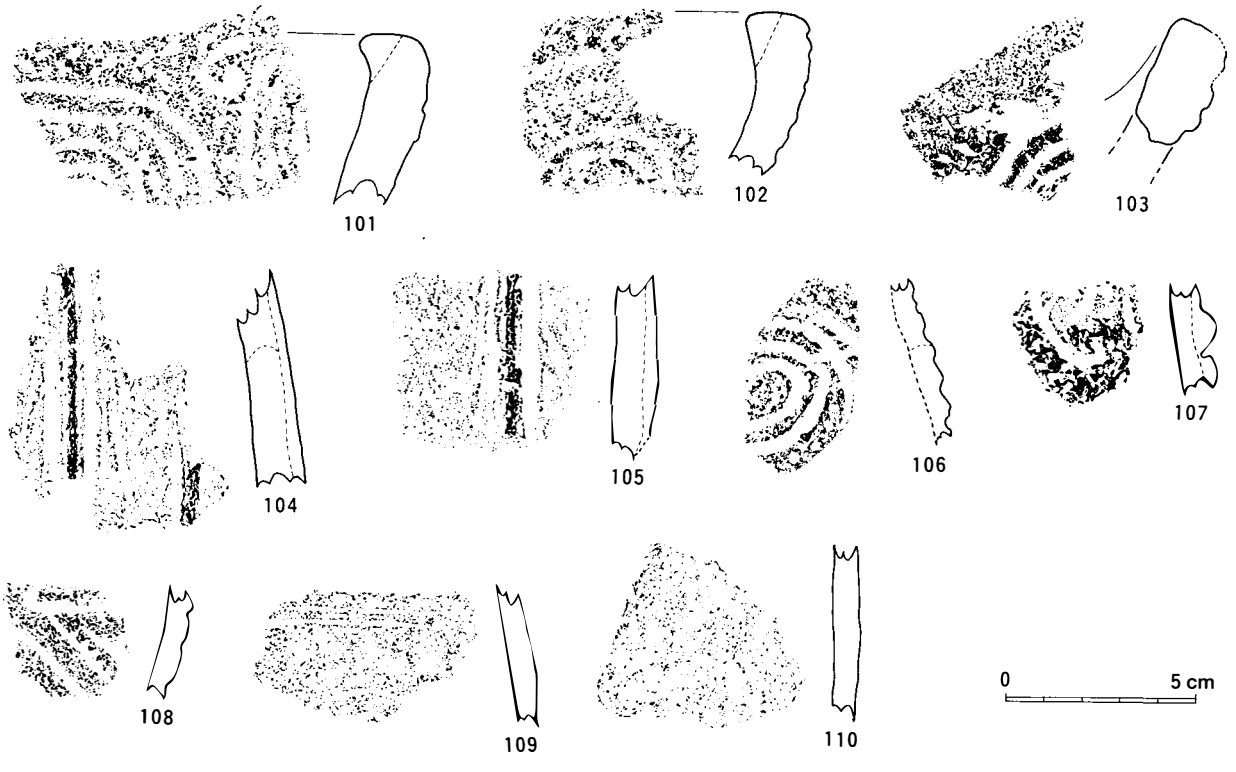
106は沈線で同心円を描いた胴部片である。

107は隆帯とその脇に沈線を引いて渦巻き文を描く破片である。中期に属すると考えられる。

108は半隆起線文で文様を施した破片で、中期に属すると考えられる。

109は無文地に平行沈線で文様を施す胴部片である。

106・109・110は小片のため帰属する時期は明らかにし得ない。　（近藤大典）



第156図　第3地点出土縄文土器

２．石器

第３地点からは1,287点の石器が出土した。以下、各器種ごとに説明を加えることにする。

１．石鏃（１）

31点出土。そのうち15点が折損品である。

１はチャート製。鋭角な先端部をもち、脚部にあたる部分は外反し、抉りが入っている。未製品は１点出土したが、バルブ付近の厚みを減ずることができず中断したものと推測される。

２．有舌尖頭器（２）

チャート製のものが１点出土した。２は表裏両面ともに二次調整におおわれ、素材となった剥片の元来の剥離面は観察できないため、表裏面の決定は任意である。全体に寸詰まりの印象を受けるが、これは尖頭部を折損した後、再調整を加えたためである。製作にあたっては、まず、表面側の尖頭部に調整を施し、さらに、裏面からの調整を加え形状を整えている。表面の中央部に残る剥離面は、尖頭部折損の際のものである。そのため、下半分の側縁部から施されていた二次調整の剥離面を切っている。在地のチャートは節理を多く含み良質のものは稀少なため、折損品も使い捨てではなかったことをうかがうことができる。舌部の作出が明らかであり、基部の返しも鋭く、有舌尖頭器の形態が確立された時期のものと思われる。

３．ナイフ形石器（３）

切削の作業が想定される石器。剥片がもつ鋭利な縁辺の一部を刃部として残しながら他の縁辺に刃潰し加工を施し、尖った先端部と基部とを作出したもの。１点出土。チャートを使用している。

３は、両側縁調整ナイフ形石器で、片側縁のすべてと残りの縁の胴部以下が調整されている。縦長剥片を素材とするが、打面・打点は失われている。正面左側縁部は全体に刃潰しのための二次調整が加えられている。刃部の鋭い縁辺には、使用痕と思われる微細な剥離痕が認められる。刃角度は40°である。

４．石錐

チャート製のものが３点出土した。不定形な剥片を素材とし、その端部に簡単な調整を加え短い錐部を作出したものが２点、折損したスクレイパーの転用品と思われるものが１点である。

５．スクレイパー類

削器が３点、つまみ部付きスクレイパー・掻器Ⅰ・掻器Ⅲが各１点ずつ出土した。石材は、すべてチャートである。つまみ付きスクレイパーは横形のもので、素材剥片の打点は折損するつまみ部付近にあったと思われる。両面調整によって刃部を作出しており、身部の形態は概ね三角形を呈している。削器はどれも不定形な剥片を素材とし、刃部数１のものが２点、刃部数１のものが１点である。

6．ヘラ形石器

3点出土した。チャート製が2点で、残り1点は泥岩製である。縦長剥片の長軸の一端に刃部を作出し、両側縁または片方の側縁を折り取っている。

7．くさび形石器

チャート製のものが1点出土した。一部を折損するため詳細は不明であるが、向かい合う二辺に階段状の剥離痕がみられる。

8．打製石斧（4～13）

68点出土。形態的に分類すると、1類の両側縁がほぼ平行する短冊形が13点、2類の両側縁が基部に向かって収束する撥形が35点、3類の両側縁に抉りの入る分銅形が5点出土した。分類不能なものは15点であった。背面または腹面に自然面を有するものは28点で全体の41％となり、折損により不明の26点を除くと全体の97％を占める。折損が認められるものは52点で全体の76％である。刃部を折損するものは25点、基部を折損するものは17点、刃部と基部の両方を折損するものは1点、残り9点は刃部または基部のどちらかを一部折損するものである。

第17表　打製石斧の石材別出土点数

石　材	出土点数
泥　岩	33
砂　岩	29
安山岩	2
花こう閃緑岩	1
花こう閃緑斑岩	1
ホルンフェルス	1
花こう岩(アプライト)	1
合　計	68

4は泥岩製で、基部を折損するが、両側縁に大きな調整剥離を施し、短冊形に形状を整えている。5は砂岩製。表面左側に打点をもつ横長剥片に粗い調整を加え使用している。打点付近には、激しい潰れがみられる。6は砂岩製で、基部を折損している。刃部は使用によって激しく磨耗する。打点のあったと思われる左側縁部は、折り取りによって形状を整えている。7も砂岩製で、表面と両側縁部に自然面の残る縦長剥片を用いている。刃部には使用によると思われる刃こぼれがみられる。8は泥岩製で、表面刃部は使用により激しく磨耗している。裏面刃部の磨耗はわずかである。9も泥岩製で、表面刃部および基部に磨耗がみられる。裏面刃部はわずかに磨耗する。10は安山岩製で、分厚い刃部を有し、その表面は激しく磨耗している。11は泥岩製。素材剥片の両側縁に調整を加え、やや分銅形の形状を整えている。表裏面とも刃部は激しく磨耗する。12は扁平な砂岩の周囲に粗い調整を施し、形状を整えている。基部に装着によると思われる潰れがみられる。13は砂岩を使用。正面右側縁部に打点をもつ横長剥片を素材とし、周囲に粗い調整を施している。刃部右側を折損するが、分銅形のものと思われる。

9．磨製石斧（14･15）

2点出土。14は砂岩製で、基部を折損する。念入りに研磨が施され、両側縁と主面との間に稜がつくられている。刃部は、両面からの研磨により削器的な緩い角度に作出している。15は蛇紋岩製で、全面を研磨している。基部と刃部の一部を折損するが、基部の折損部には階段状剥離もみられ、折損後くさび形石器に転用したとも考えられる。

10. 石核・剥片類

1,040点出土した。そのうち15点が石核である。石材は、チャートで14点（770.8ｇ）で、泥岩が1点（59.2ｇ）であった。

11. 調整剥離を施された剥片（ＲＦ）（16）

24点出土した。その内訳は次のとおりである。

第18表　ＲＦ分類別出土点数

刃部のタイプ	刃部数	刃部箇所の平面形と調整方法	出土点数	遺物番号
削器的	1	直線状(片面)	6	16
		直線状(両面)	1	
		不定形(片)	3	
掻器的	1	直線状(片)	3	
		凹　状(片)	1	
	2	直線状(片)	1	
		直線状(片)・不定形(片)	1	
	3	直線状(片・両)2・不定形(片)	1	
複合(掻器的・削器的)	2	直線状(片)・直線状(片)	1	
		計	18	

これら18点のほか、刃部がドリル的なもの3点、エンドスクレイパー的なもの1点、ラウンドスクレイパー的なもの2点がみられた。

16はチャート製。不定形の剥片を素材とし、その縁辺にランダムな調整剥離を加えている。

12. 微細な剥離痕を有する剥片（ＵＦ）

17点出土した。剥離痕の箇所は側縁部と末端部・その他に分けられる。側縁部には急角度による不定形な剥離痕がみられるものが1点、緩い角度による直線状のものが6点・凸状のものが5点・不定形のものが3点認められた。末端部には急角度による不定形な剥離痕を有するものが1点みられた。また、その他の箇所として、基端部に急角度による不定形な剥離痕をもつものが1点確認できた。

13. 打欠石錘（17～22）

6点出土した。すべて遺構外からの出土である。石材は砂岩5点、泥岩1点と本遺跡の他地点から出土したものと同様の傾向を示している。6点中5点が完形品であり、欠損している1点も側縁部がやや欠けているだけで、ほぼ全形が確認できる。出土数が少ないため、欠損品も含め全点図示した。

17は比較的小さく扁平な平面形をもつ。機能部の打欠は両端とも同一方向だけから施されている。18も小さい方である。扁平な円礫の両端を両側から加工し、機能部を作出している。19も小さくやや細長い平面形をもち、帯状痕跡が確認できる。21は機能部を作出する際に、片側からは比較的大きく、その裏側はやや小さめに剥離を施している。帯状痕跡が確認できる。20も21と同様に側縁部付近は磨滅しており、中央部の縦位に帯状痕跡が確認できる。22は唯一の泥岩製で、第1地点出土石錘の分類（以下「第1分類」）でいう2類に属するものである。欠損しているため、片方の機能部ははっきりしない。

（堀田一浩）

14．切目石錘（23～25）

4点出土した。すべて遺構外からの出土である。石材はすべて砂岩である。どの石錘も甲乙つけがたかったが、欠損の激しい1点を除き、3点を図示した。

23は帯状痕跡が確認できる。比較的小さく薄い。機能部は打ち欠かずに直接切目を施して作出している。第1分類でいう1Ｂ1に属する。24は平面形は丸いが、中央部付近はやや厚くいびつな形をしている。切目は長軸の両端にわりと浅めに作出されている。第1分類の1Ｂ1に属する。25は片方の機能部を欠損しているが、残存している片方の機能部である切目はしっかりと作出されている。斜め方向に両側から切目を施し、その切り合い関係がつかめる。第1分類の1Ｂ3に属する。

（堀田一浩）

15．凹石・敲石・叩石・磨石類（26）

出土総数10点。石材は砂岩製が6点、安山岩製が2点、流紋岩質火砕岩と閃緑岩が各1点ずつであった。機能の組み合わせは、敲きのみが2点、叩きのみが1点、磨りのみが2点、敲きと叩きが1点、凹み（表面）と敲き・叩きが1点、敲きと叩き・磨りが3点であった。敲打痕の位置は、中心からずれる位置にあるものが2点、2つ以上の敲打痕が重なるものが2点であった。敲打痕が長軸の一端または両端に集中する叩石は6点みられた。また、磨面を有するものは5点確認できた。そのうち磨面が両面に確認できるものは1点、片面のみに確認できるものは2点、全面が磨られているものは1点、その他、片面と長軸および短軸の側面に確認できるものが1点であった。

26は砂岩製の敲石である。側面に沿って敲打痕が連続している。下部がわずかに凹み、その周囲に敲打痕が集中している。

16．石皿

4点出土。安山岩製のものが3点で、皿部がわずかに凹むタイプが2点、平板状をなすタイプが1点出土した。残り1点は砂岩製で、皿部はわずかに凹むタイプである。

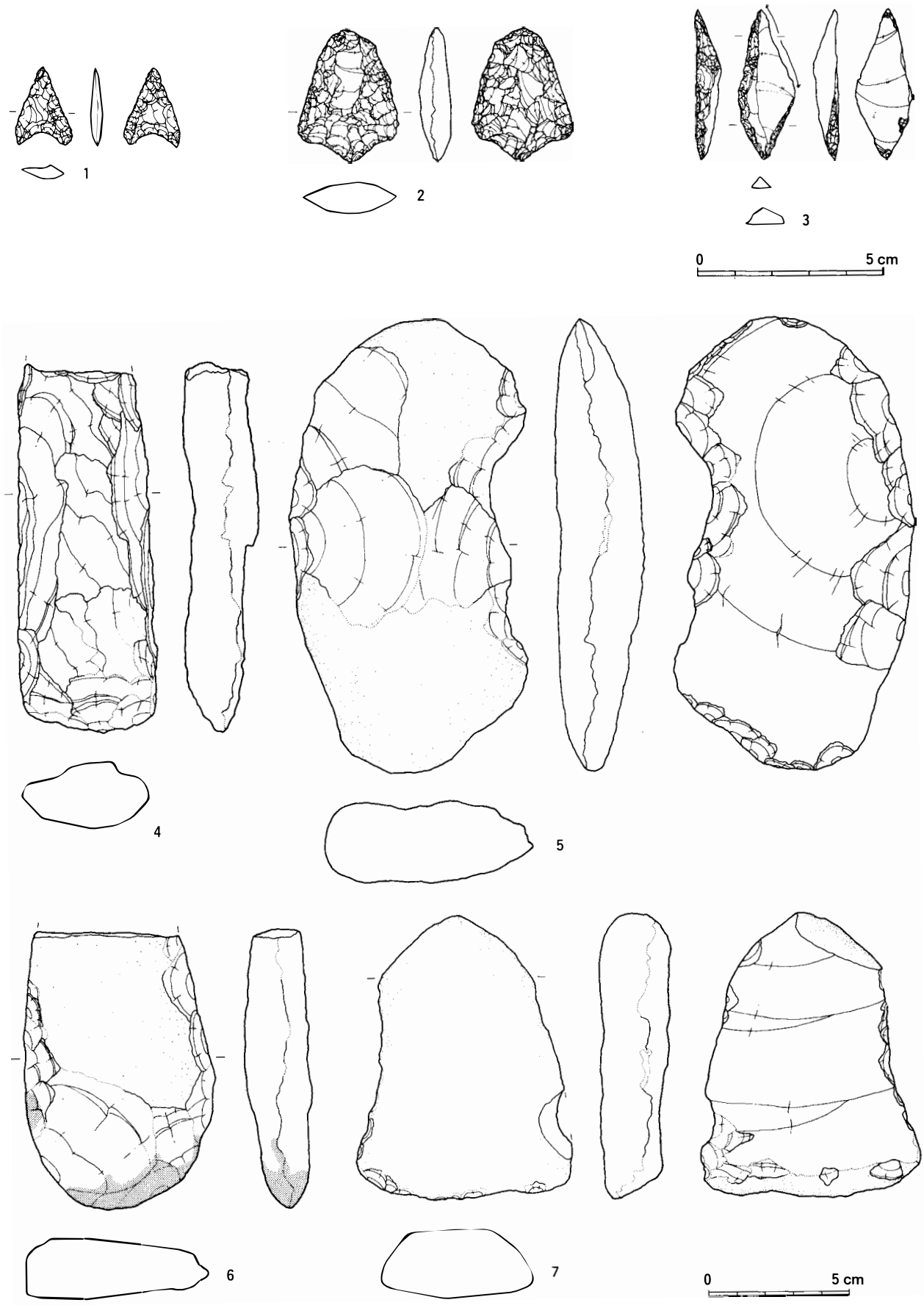
17．異形石器（27･28）

2点出土。平面形は異形部分磨製石器に似るが、研磨部分が明確に認められないため異形石器とした。

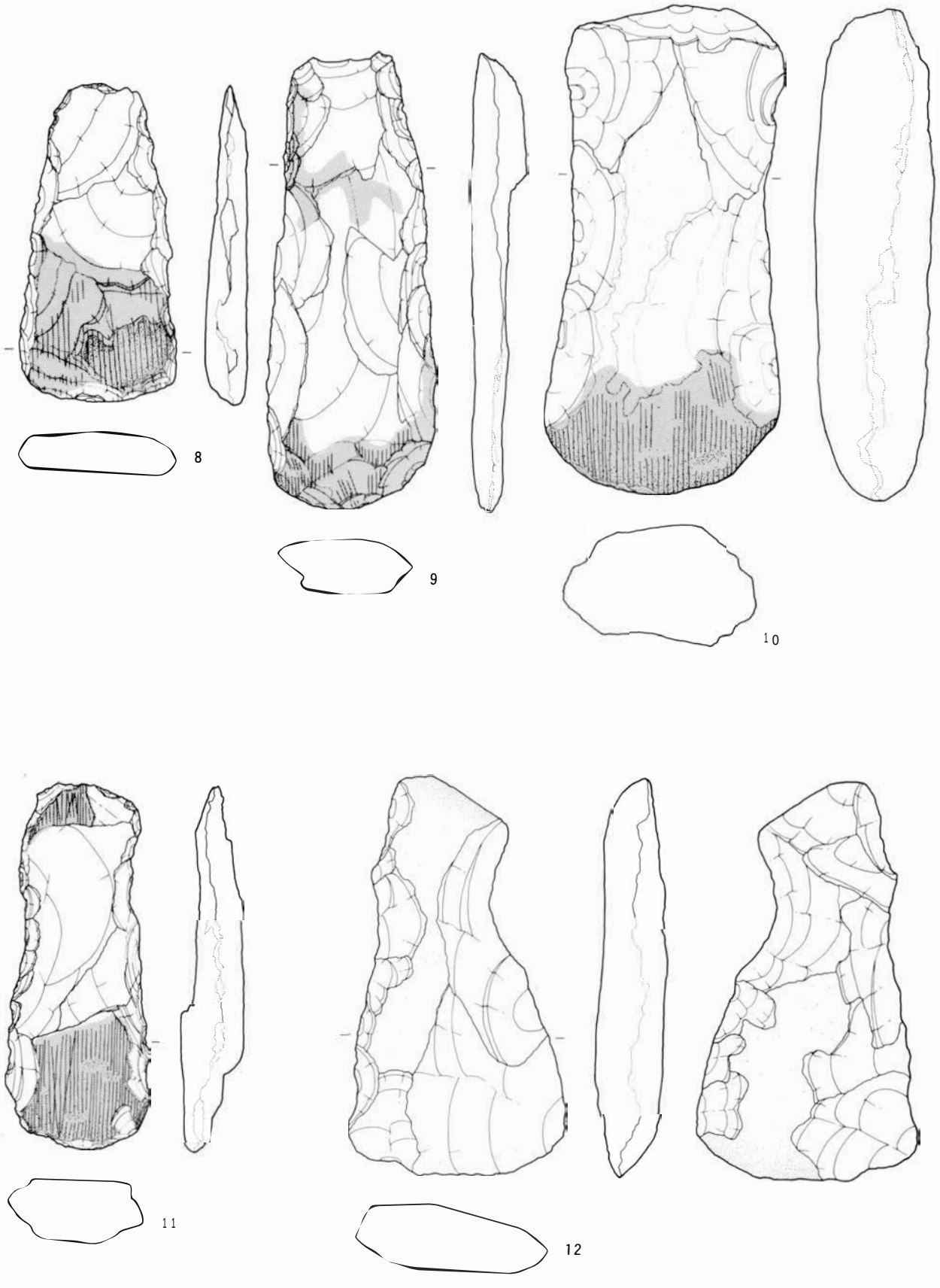
27は、チャートを使用。部分的に長い剝離が入り、断面は凸状である。脚は外へ反り気味に開く。左脚部を折損する。下端部を折損した際の大きな折れ面が表面に残り、後に丸く再調整している。28は良質のチャートを使用している。平面形は下端部が丸く、縁辺部は鋭く調整されている。表面左側の脚部を一部折損する。

18．石刀（29）

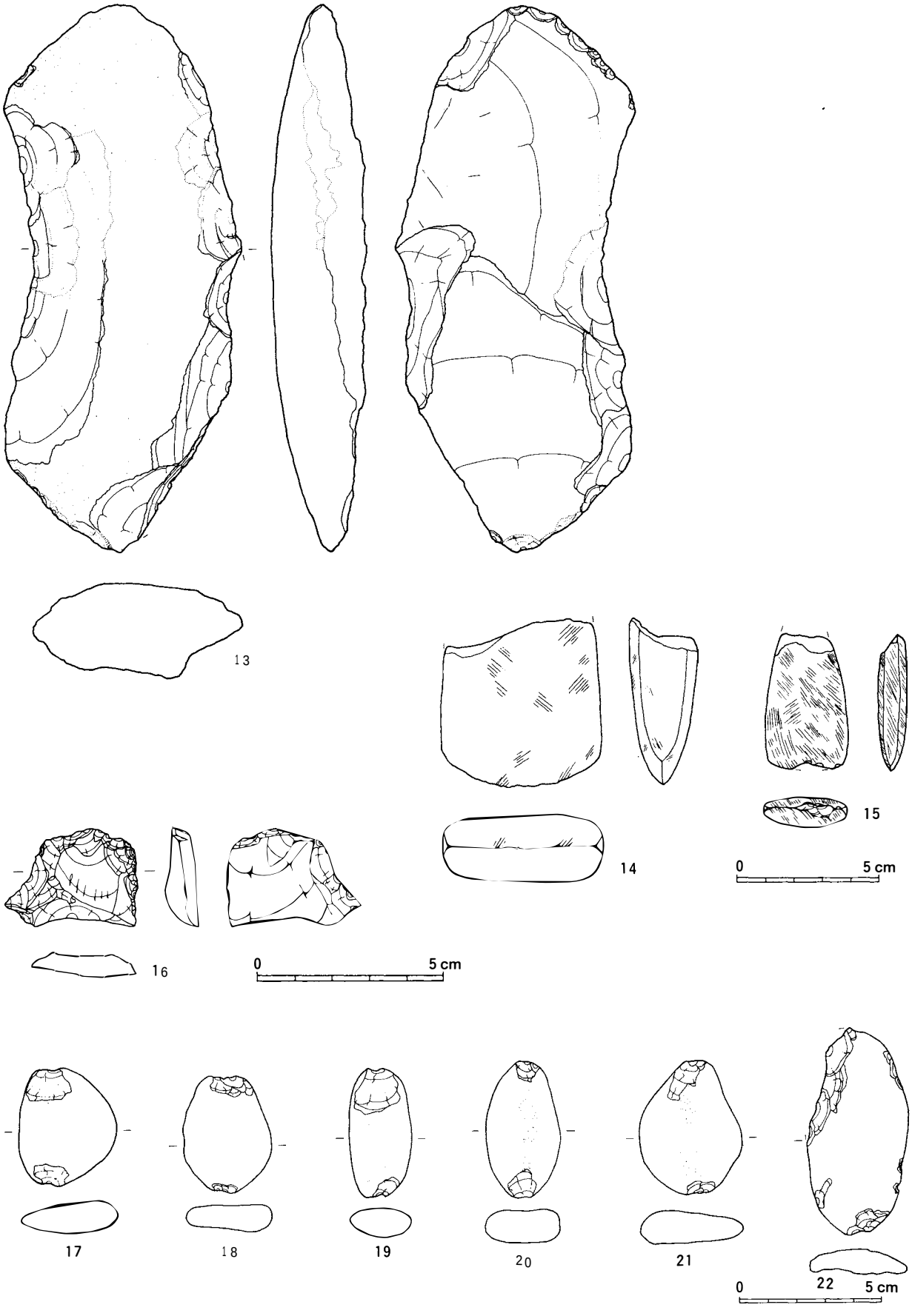
実用に供したとは思えないが、片刃で棟のある刀状に全面を研磨している。1点出土。石材は泥岩を使用している。途中で折損するが、整形の際にできたと思われる線状痕が認められる。



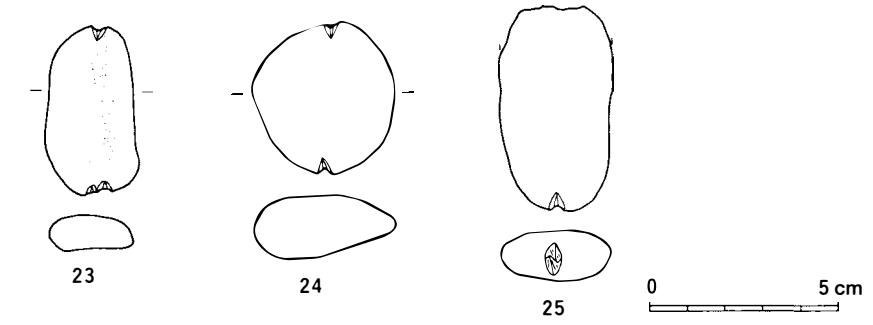
第157図　石器実測図（1）　石鏃・有舌尖頭器・ナイフ形石器・打製石斧（1）

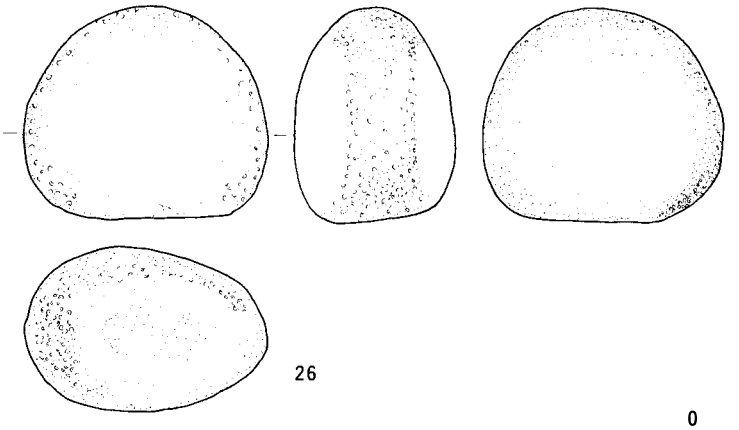


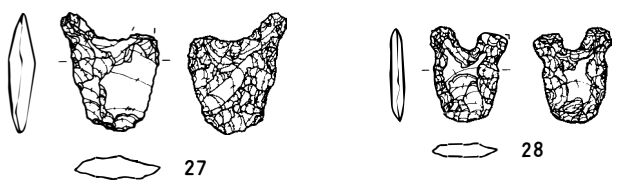
第158図　石器実測図(2)　打製石斧(2)

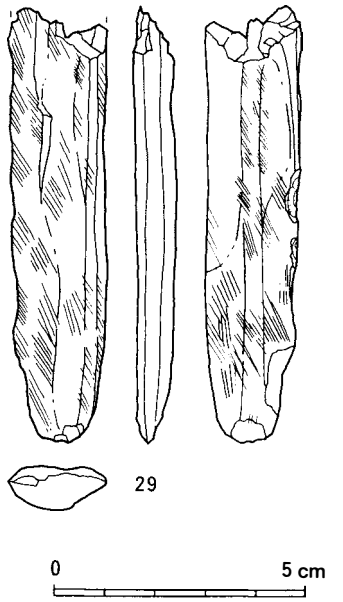


第159図　石器実測図(3)　打製石斧(3)・調整剝離を施された剝片・磨製石斧・打欠石錘









第160図　石器実測図(4)　切目石錘・敲石・異形石器・石刀

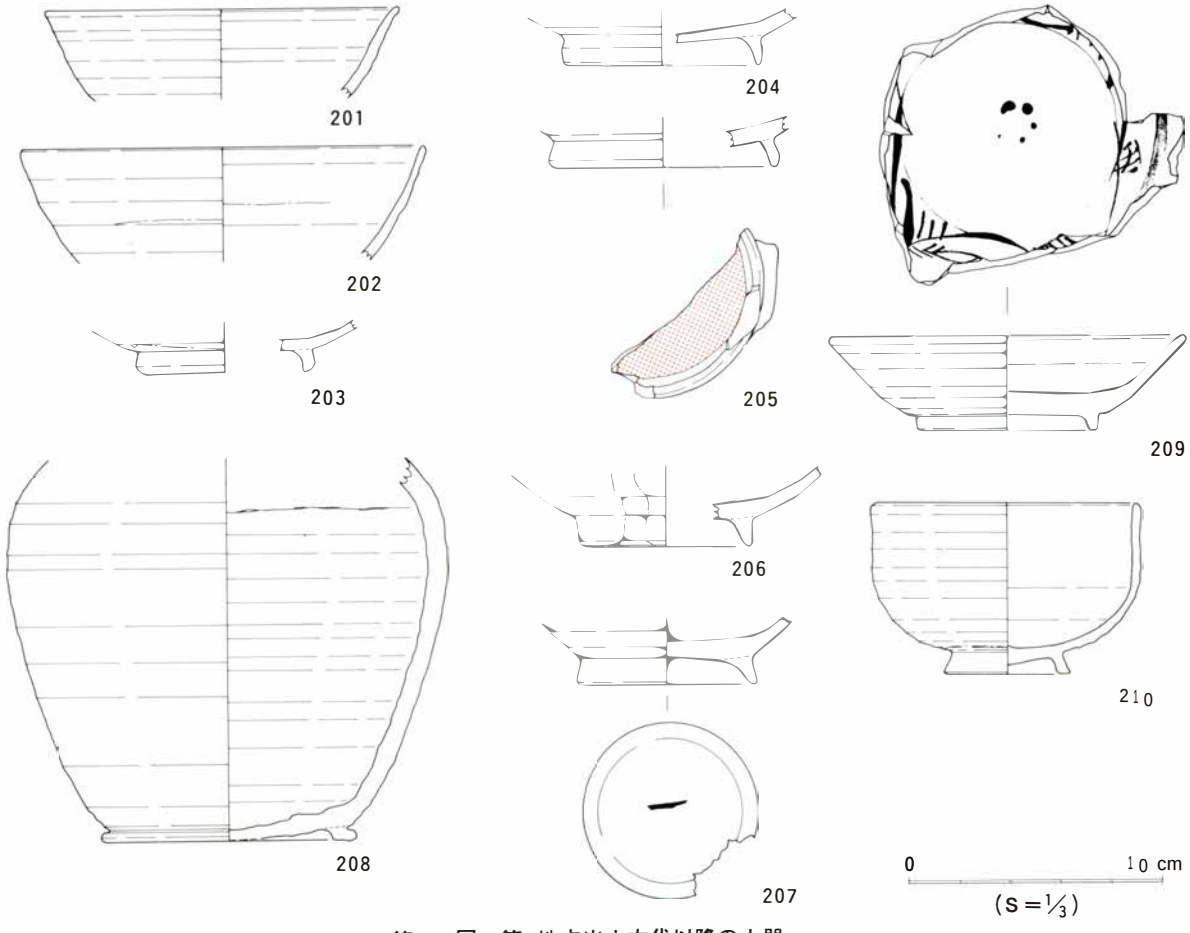
３．その他の遺物

古代以降の土器

本地区からは灰釉陶器77点、古瀬戸１点、大窯５点、白磁１点、瓷器系陶器２点、古瀬戸～瀬戸美濃11点、瀬戸美濃81点、肥前６点、土人形１点、合計185点が出土し、そのうち10点（201～210）を図示した。

201～208は灰釉陶器であり、201～207は碗、208は壷である。碗のうち胎土が肌理細かいものは201～203、207で東濃産の可能性が高く、他は胎土中に空隙がみられ砂粒が幾つか混在し、やや粗い印象を受ける。205は底部外面が平滑で赤色有機物がしみ込んでいることから転用硯の可能性が高いが、器面全体が平滑であるため断定はできない。207は底部外面に回転糸切り痕が残る碗であり、体部内面と高台周辺を除く体部外面が炭化しており、底部内面は極めて平滑である。また、底部外面に墨書で「一」と描かれている。208の壷の外面は灰釉が一部しか残存していないが、本来は全面に刷毛塗りされていたと思われる。高台は扁平で外側に張り出しており、体部はわずかに丸みを帯びて立ち上がる。肩部内面には粘土接合痕がみられ、肩部外面より下方は回転ヘラ削り調整が行われている。

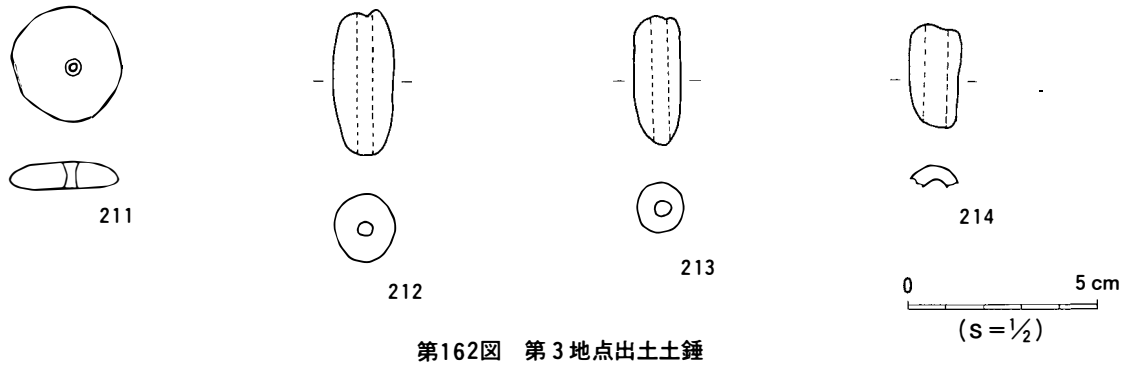
（小野木　学）



第161図　第3地点出土古代以降の土器

土錘

本地点から4点出土した。すべて包含層からの出土である。4点（211～214）とも図示した。



第162図　第3地点出土土錘

不明土器

本地点で検出したＳＫ01より、灰釉陶器の碗207とともに詳細不明な土器215が出土している。出土した段階で原形をとどめていなかったので、周辺の土ごと現場より運び込んだ。二次整理の段階で慎重に付着した土を除去したが、一部の器壁は欠損した。実測は不可能であったため、写真のみ掲載することにした（図版88）。以下、推測も含めて可能な限りの情報を記載する。

土器の内側には土が堆積しているが、土だけでなく、黄色もしくは白色の物質が混入している。黄色の物質は植物質のものである可能性がある。白色の物質は、炭化物か焼土と思われる。他例の火葬墓と比較してもこの白い物質は不明な点が多い。土器自体は粘土紐を輪積みにして製作しているようであるが、被熱しているか否かは不明である。本例については、木製の器が腐食したもの、別の場所で火葬し、その骨を布で巻いたもの、坩堝の焼き損じ、などの指摘がある。

第　4　地　点

第５章　第４地点

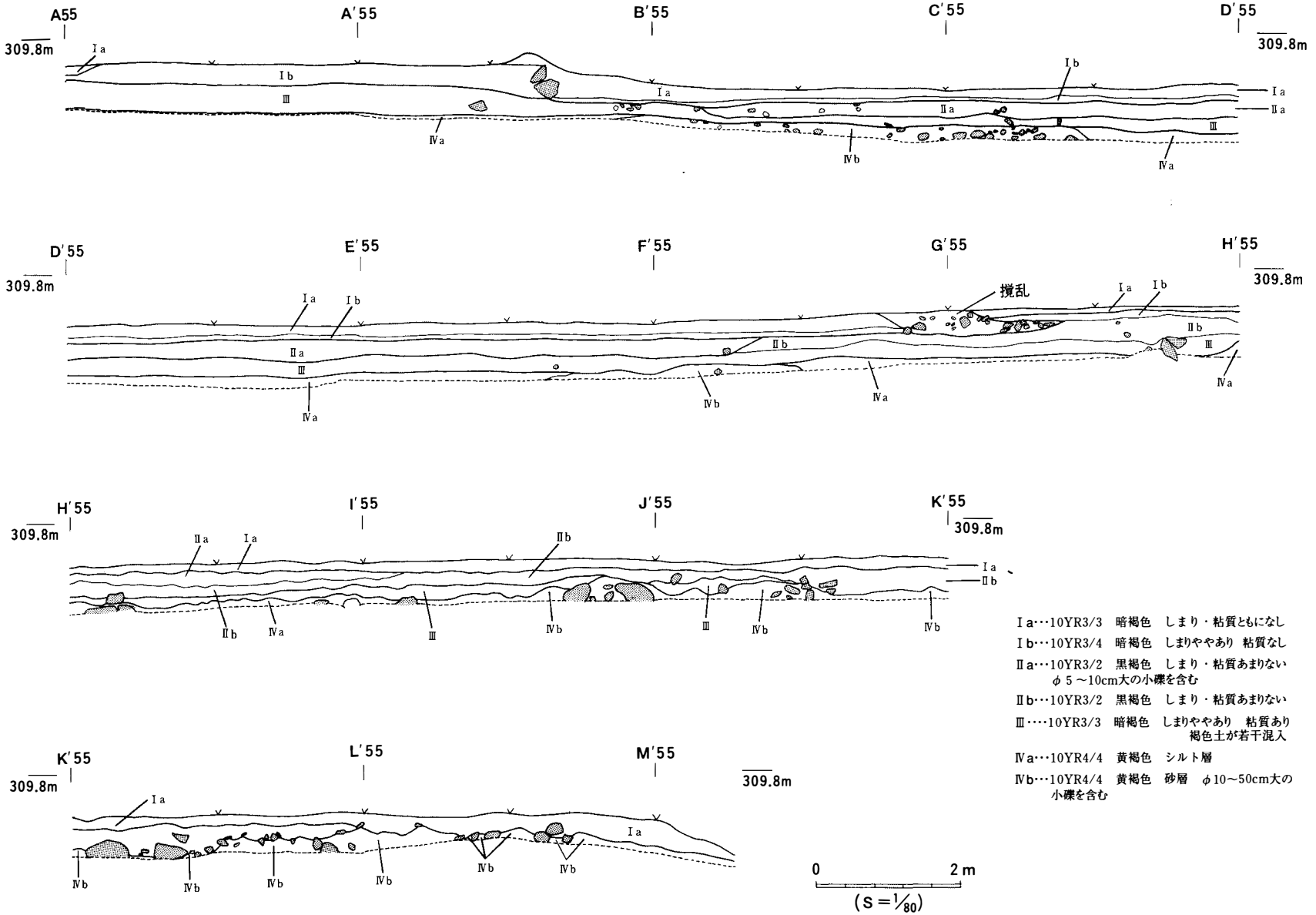
第４地点は上原遺跡で最も広い中位段丘上にある。上流側には第１地点があり、下流側には平成２～６年に調査が行われた第２地点がある。本地点はちょうど両者の中間点に位置する。また背後には高位段丘上にある第３地点がひかえており、高位段丘東側の谷下に広がる第５地点に隣接している。

本地点の調査区は第１地点への通路を挟み、大きく山側と川側に分かれる。山側の調査区は第５地点につながり、川側は第１地点に隣接する。山側調査区は表土を重機で除去し、以下を手掘りで慎重に掘削したが、遺物・遺構は確認できなかった。一方、川側は後述するように数基の遺構と約1,000点の遺物を確認した。従って本地点の記述は川側調査区が中心となる。

第１節　層序

第４地点の層序は、既刊の報告書『上原遺跡Ⅰ』に記載した上原遺跡全体を貫く基本的層序に近い状況である。本地点の堆積は、基本的に第Ⅰ層～Ⅳ層で構成され、それぞれ第Ⅰ層暗褐色土、第Ⅱ層黒褐色土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層黄褐色土である。さらに本地点の場合、土色・しまり・粘質・礫混入の度合い等によって、第Ⅰ層がⅠａとⅠｂに、第Ⅱ層がⅡａとⅡｂに、第Ⅳ層がⅣａとⅣｂに分けられる。第Ⅰ層は表土でしまり・粘質ともになく、細かい植物の根が多く入り込んでいる。特にⅠａがそれに該当する。また本地点の近現代における土地利用は主に水田であったため、その水田耕作に伴う敷土が確認できた。それがⅠｂである。第Ⅱ・Ⅲ層は遺物包含層であり、堆積状況は両者とも山側が厚く川側へ向かうほど薄い。ところどころ撹乱を受けているが、比較的安定した堆積状況である。第Ⅳ層は黄褐色シルト層および砂礫層で、川に近い中位段丘の縁ではやや大きめの円礫で構成されている段丘礫群が広がる。礫群はほぼ一定方向に傾いており、かつての川の流れを示すインブリゲーションが確認できる。本地点の川側調査区は、ほぼ中央部を横切るようにＳＢ01からピット群あたりにかけて第Ⅳ層がレベル的にやや低い。旧地形は緩やかな谷状を呈しており、第１地点のある北側が高く、第２地点に向かって低くなっている。調査中も南端にあるピット群付近は雨水がたまりやすい状況であった。本地点は現地形も旧地形もほぼ平坦であり、それに呼応するように各層もほぼ平坦な堆積状況を示している。背後の高位段丘からの影響をあまり受けず、安定した堆積を繰り返していたと思われる。

第４地点
55列南壁土層堆積状況
（北東より）



第163図　第4地点55列南壁土層図

Ⅰa…10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質ともになし
Ⅰb…10YR3/4　暗褐色　しまりややあり　粘質なし
Ⅱa…10YR3/2　黒褐色　しまり・粘質あまりない
φ5～10cm大の小礫を含む
Ⅱb…10YR3/2　黒褐色　しまり・粘質あまりない
Ⅲ……10YR3/3　暗褐色　しまりややあり　粘質あり
褐色土が若干混入
Ⅳa…10YR4/4　黄褐色　シルト層
Ⅳb…10YR4/4　黄褐色　砂層　φ10～50cm大の
小礫を含む

第２節　遺構

第４地点は隣接する第１地点に先行して調査が行われた。第１地点と本地点の別は、年度ごとに設定された調査区が異なるだけである。従って当然隣接しているため、共通点も多い。第１地点では近現代の土地利用に伴う撹乱を受けていることや、多くの風倒木痕があることを記したが、本地点でも同様な状況である。しかし第Ⅱ・Ⅲ層は本地点の広い範囲で安定した堆積を示しており、特に旧地形がやや低くなる中央部南北方向で良好な堆積状況であるといえる。安定して堆積しているのは上原遺跡に限らず、徳山地区の遺跡でよく確認される黒褐色土である。この黒褐色土中に構築された遺構の検出は、第１地点でも記したように困難を極めた。幾分掘りすぎてしまった箇所もあるが、最終的に竪穴住居跡１軒、土坑28基（ＳＫ６基・ピット22基）、焼礫集積遺構１基を検出することができた。竪穴住居跡・焼礫集積遺構と特記すべき事項のある土坑については後に詳細を記す。他は知り得た情報をデータとして表にまとめておく（第二分冊第３表参照）。

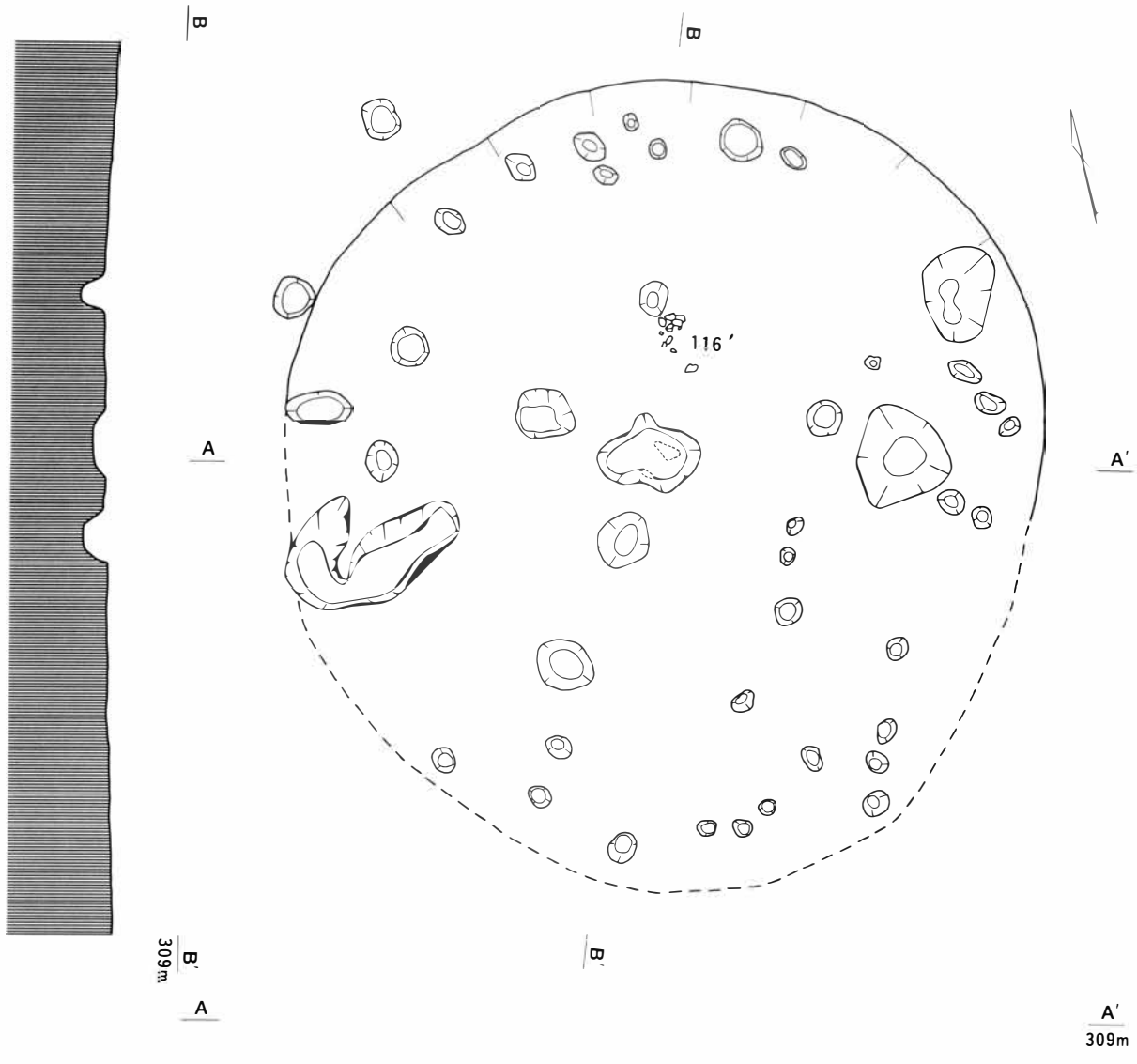
竪穴住居跡（ＳＢ01）〈第164図　図版６〉

E′57～F′58グリッド第Ⅳ層中で検出した。本来の掘形が存在すると考えられる第Ⅱ～Ⅲ層中では検出できず、第Ⅳ層黄褐色土への掘り込みで初めて確認できた。しかも北側の一部を検出できただけで、南側は明確でない部分がある。しかし上層での遺物出土状態は比較的良好であり、遺構が存在する可能性も考えられた。E′57グリッド第Ⅲ層暗褐色土中で同一個体と思われる遺物集積を確認している（第164図参照）。土器片は約20点ほどの北白川下層Ⅲ式土器である。復原した個体が116である。また同様にF′57グリッド第Ⅲ層暗褐色土中でも遺物集積を検出した。117（第169図）に復原できた土器底部である。本住居跡のプランは明確に検出できなかったが、遺物の出土した範囲や点在するピット群の位置から考えて、径約5.2～5.6ｍの円形プランを有すると考えられる。本来の掘形が不明であるため正確さに欠けるが、断面はさほど深くなく、皿状もしくは洗面器状を呈していると思われる。想定したプランのほぼ中央部で焼土の残るピットを検出した。地床炉と考えられる。精査の段階で床面と考えられた範囲からは、わずかではあるが炭化物も確認している。ピットは大小合わせて39基確認した。径約60㎝深さ約40㎝ほどのＰ３・Ｐ４以外は径10～40㎝深さ10～20㎝ほどの小ピットでプランの周縁部に列んでいる。本住居跡としての明確な床面や埋土を確認したわけではないが、関連の深い遺物は２件の遺物集積だけでなく、ほとんどが縄文時代前期後葉のものである。そのことを最大の根拠とすれば、本住居跡の帰属する時期も同様であろうと考えられる。

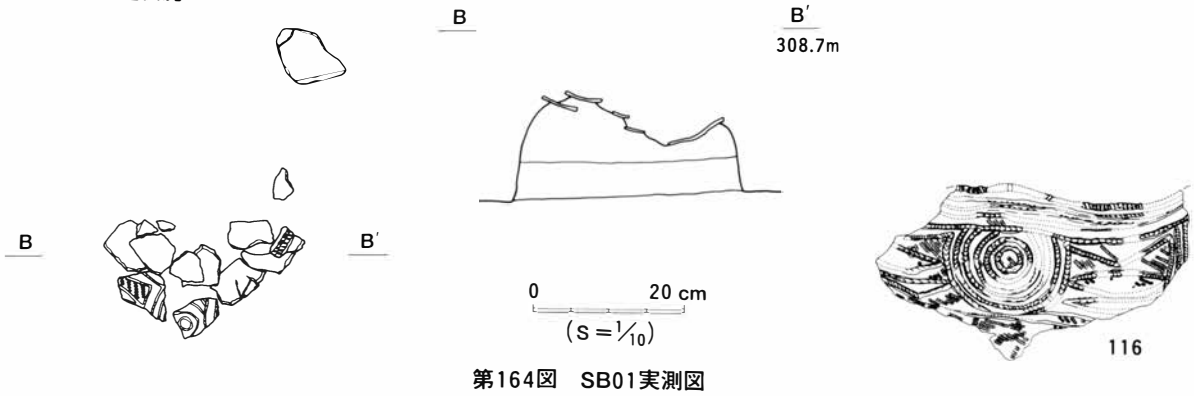
焼礫集積遺構（ＳＩ01）〈第165図　図版７〉

E′50グリッド第Ⅲ層中で検出した。拳大～径20㎝ほどの礫90個が長径約１ｍ短径約0.8ｍの楕円形に集まった状態で検出された。礫は砂岩が多く、一部チャートも認められた。亜角礫を若干含んでいるがほとんど円礫であった。またその多くは被熱しており、割れているものも目についた。完形のものの質量は、多くが500ｇ以下であったが、中には１kgを超えるものも４点確認された。礫群に伴う掘り込みは検出できなかった。広がっていた礫も一層ないしは二層までであった。礫群下層より炭化物も採集できたことも含め、この施設で火を使用した可能性は極めて高いが、何度も繰り返し使用した

SB01平断面図

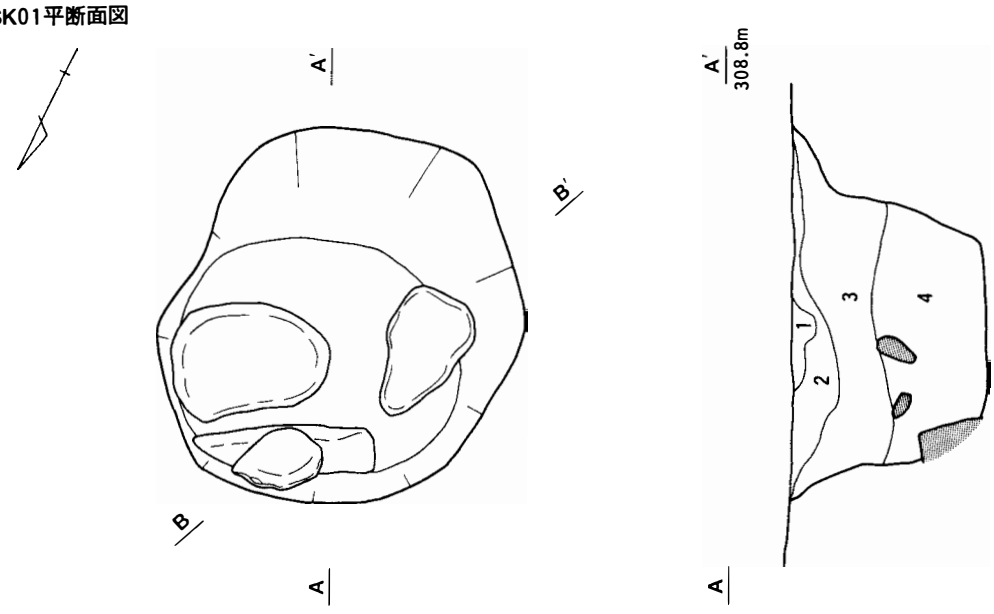


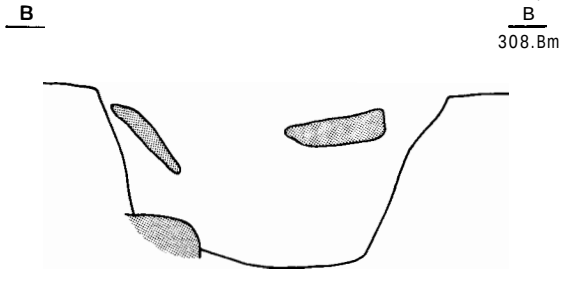
SB01内土器出土状況



第164図　SB01実測図

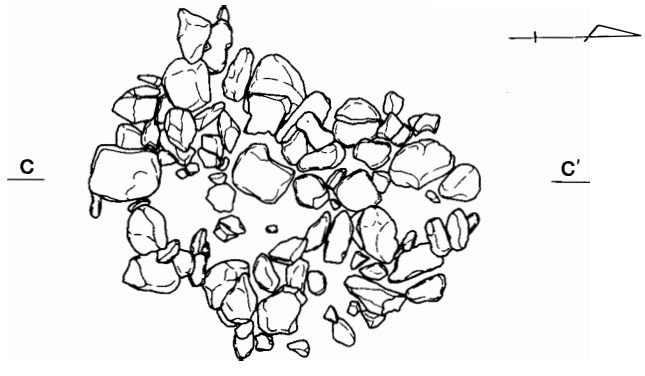
SK01平断面図



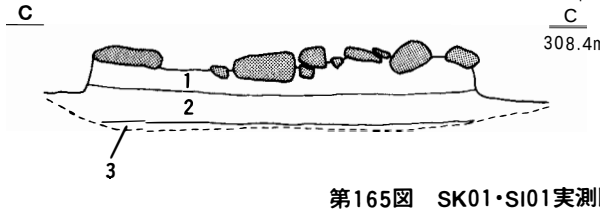


1　5YR5/6　明赤褐色　焼土か炭化物が混入
2　10YR3/3　暗褐色　炭化物が混入
3　10YR3/3　暗褐色土に黄褐色土がかなり混入
　φ1～3cm大の礫を含む
4　10YR3/3　暗褐色土に黄褐色土が少し混入
　φ10cm大の円礫を含む

SI01平断面図



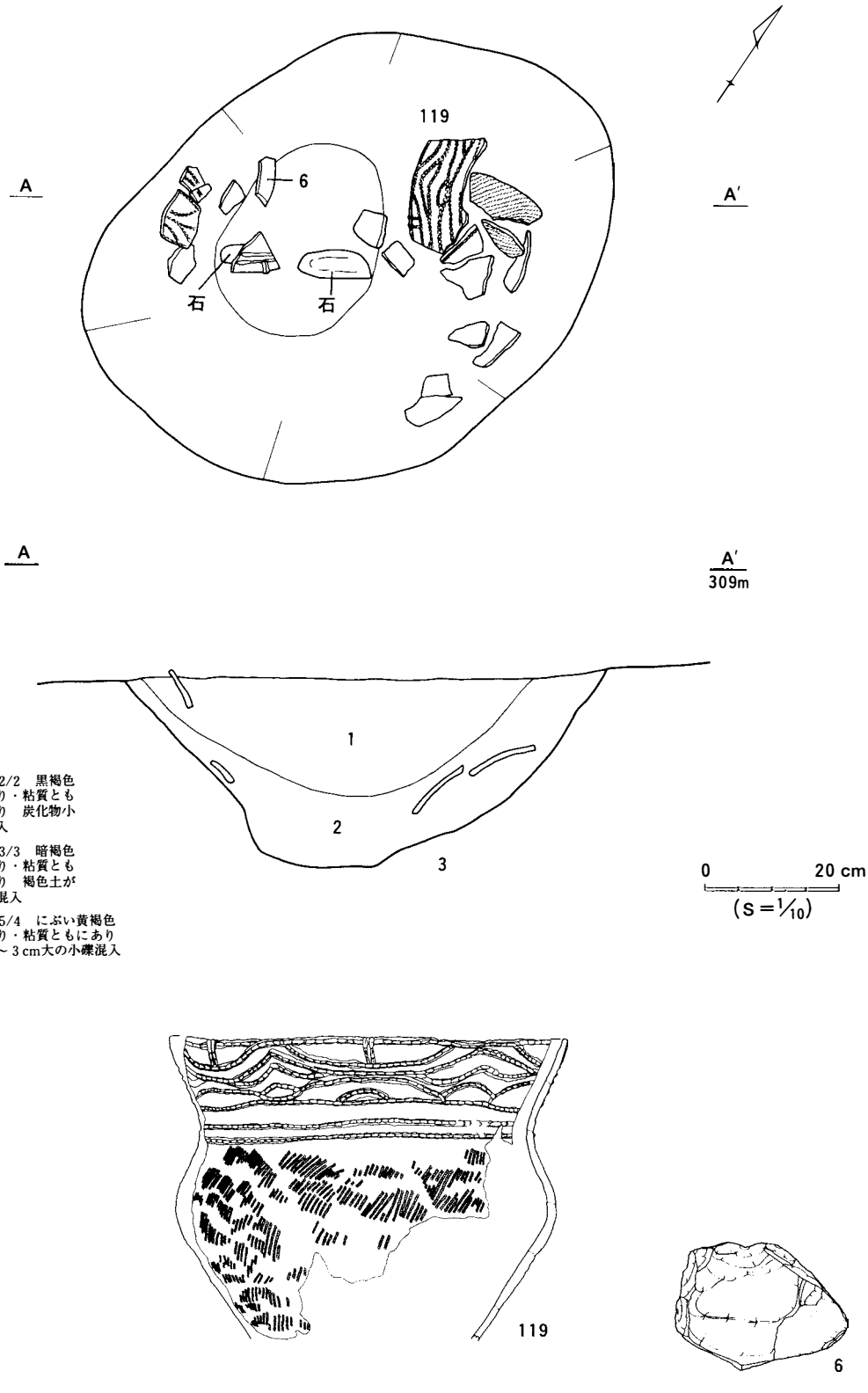
1　10YR3/3　暗褐色
2　10YR5/4　にぶい黄褐色
3　10YR5/6　黄褐色



0　50 cm
(S＝1/20)

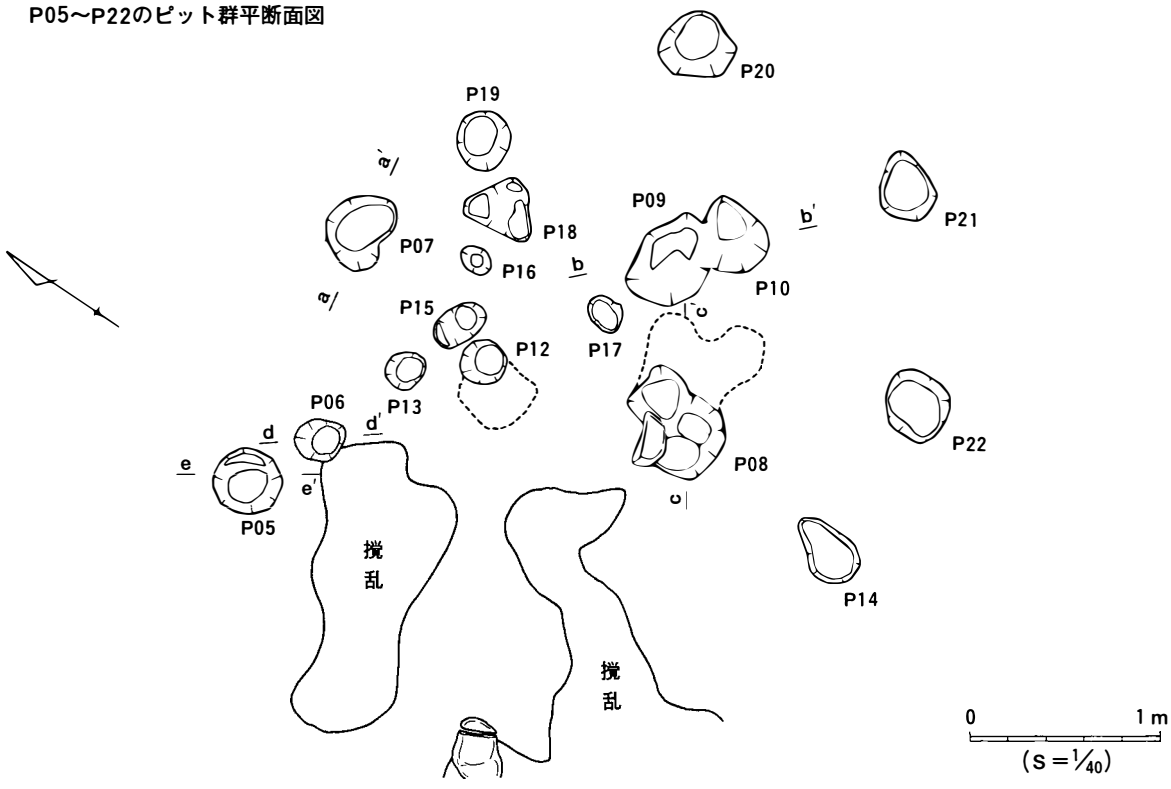
第165図　SK01・SI01実測図

P01平断面図

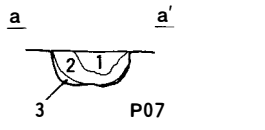


第166図　P01実測図

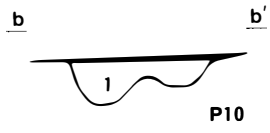
P05～P22のピット群平断面図



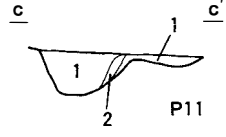
ピット断面図



1　10YR2/3　黒褐色　粘質あり
2　10YR3/4　暗褐色　粘質あり
3　10YR5/6　黄褐色　粘質あり

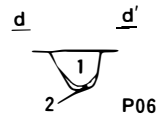


1　10YR2/2　黒褐色
　小円礫　炭化物混入

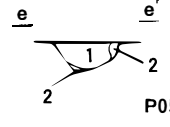


1　10YR3/3　暗褐色　粘質あり　炭化物混入

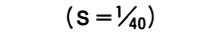
2　10YR4/4　褐　色　粘質あり



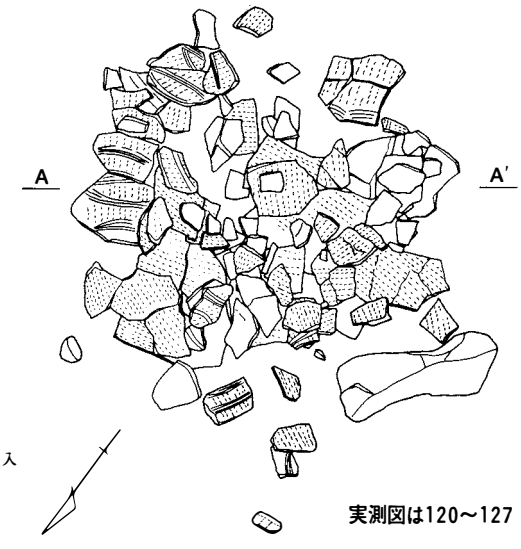
1　10YR3/2　黒褐色　粘質あり
2　10YR5/6　黄褐色　粘質あり



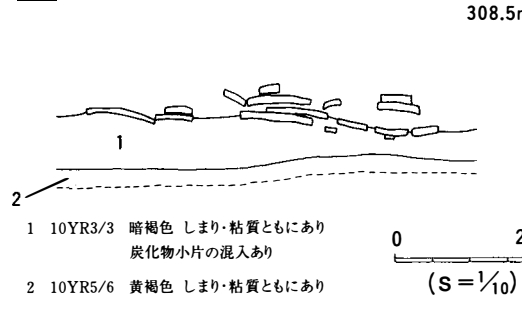
1　10YR3/2　黒褐色　粘質あり
2　10YR5/6　黄褐色　粘質あり



P05～P22ピット群上で検出した土器集積

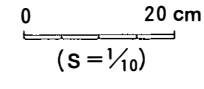


実測図は120～127



1　10YR3/3　暗褐色　しまり・粘質ともにあり
　炭化物小片の混入あり

2　10YR5/6　黄褐色　しまり・粘質ともにあり



第167図　P05～P22のピット群実測図

様子はうかがえない。遺物の出土はなく、時期を決定する根拠は希薄だが、他の類例や本地点でも早期の土器がある程度出土していることなどを合わせて考えると、早期の焼礫集積遺構である可能性が高い。なお、山側に隣接する第５地点でも焼礫集積遺構を１基検出している（第６章第２節参照）。

第１号ピット（Ｐ01）〈第166図　図版７〉

Ｉ′58グリッド第Ⅲ層で検出した。平面形は長径約80cm短径約60cmの楕円形プランを有する。断面は椀状を呈しており、深さは中央部の最も深いところで約30cmほどである。埋土は二層確認でき、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土である。第Ⅳ層黄褐色土への掘り込みが認められる。埋土からは、法面に沿うようにして同一個体と考えられる土器片（119）がまとまって出土している（第166図）。二次整理の末、その破片のほとんどが接合し、推定口径約36cmにもなる大きな深鉢土器の半周分にもなった。遺物の出土状況はＰ01の平・断面図とともに掲載した。

第５号ピット（Ｐ05）～第22号ピット（Ｐ22）のピット群〈第167図　図版７〉

Ｃ′51～Ｄ′52グリッドに点在している。試掘調査を行った際に、該当するグリッド内で１件の遺物集積を確認している。本調査ではその周辺を拡張したところ、遺物集積を確認した面で径４～５ｍの範囲に一面炭化物の広がりが見られた。しかし掘り込みやプランを確認することはできなかった。出土した遺物は洗浄の結果、半截竹管状工具による沈線文や縄巻縄文を有する中期船元式土器(120～127)であることが判明した。遺物が良好な状態で出土したことや炭化物の分布などを根拠に遺構の存在を想定し、入念な精査を繰り返したところ、Ｐ05～Ｐ22の18基のピット群を検出することができた。しかし精査の範囲を広げ、それらピット群を取り囲むようなプランを期待したが結局検出できなかった。住居跡の可能性も残しつつ現状ではピット群として報告することとした。

以上４つの遺構について詳細を記した。その他の遺構は遺物の出土もなく、帰属時期・性格等については不詳である。検出状況から判断すると、どれも縄文時代の所産である可能性が高い。しかし本地点から出土している縄文土器は多時期にわたるため、時期まで限定することは不可能である。

Ｐ05～Ｐ22のピット群（西より）

SK01半割状況（西より）

第3節　遺物

本地点からは合計1,187点の遺物が出土している。その内訳は土器が630点、石器が485点、その他が53点である。本地点は前述したように、調査のために設定した通路を挟んで川側と山側に分けられる（第4図）。山側の地区では遺構・遺物は確認できなかった。ここで報告するのは第1地点に隣接する川側調査区で出土したものである。本地点で出土した土器を概観した様相は、第1地点と第2地点の中間に位置するという立地的な条件が遺物にも反映されているというものであった。第1地点で主に生活が営まれたと考えられる縄文時代前期後葉の土器に加え、第2地点が主となる中期以降の土器も比較的良好な状況で出土している。また第1地点の中でも最も本地点よりのD′64グリッド辺りで出土している早期押型文土器も、本地点では多く出土しており、第1地点より多種多様な様相を呈している。早期に関しては焼礫集積遺構を1基検出しているが、遺構と遺物の関係は明らかではない。

石器は485点出土したうち、石核・剥片類を除いた定形石器の数は113点となる。このうち遺構から出土したものは7点であるが、定形石器はＳＫ06から出土した敲石1点のみで、残りは石核・剥片類である。これらは、伴出した土器型式から縄文時代前期後葉のものと想定される。各器種の出土点数や分類などについては、第3節で触れることにする。

その他は合計72点出土しているが、その内訳は陶器類23点、炭化物32点、鉄製品その他が17点が出土した。陶器類23点は、古瀬戸2点、瓷器系陶器1点、瀬戸美濃19点、肥前1点であるが、いずれも細片であり図示していない。

以下、土器と石器の掲載分についてのみ個々に説明する。

1．縄文土器

全部で630点出土した。多くが摩滅が激しかったり、同一個体であったりしたため、そのうちの遺構関係出土土器を中心に75点図示した。少数故にあえて細分せず、第1群を縄文時代早期に属する土器群、第2群を縄文時代前期後葉に属する土器群、第3群を縄文時代中期以降に属する土器群とした。なお第1群・第2群については第1地点の分類基準を、また第3群については既刊の報告書『上原遺跡Ⅰ』に掲載した第2地点の分類基準（本書Ｐ163～164参照）を元にした。

第1群　縄文時代早期に属する土器群（第172・173図128～147　図版56・57）

128は山形押型文を有する口縁部片である。器壁は端部に向かうにつれて薄くなっている。山形がきちんと三角形を描き、密に施されている。口縁端部には斜めの刻みを有する。波状口縁である。129は斜行沈線と刺突が施された口縁部片である。補修孔が1つ穿けられている。押型文土器終末期併行の沈線文系土器の可能性があるという指摘がある。

130～147は高山寺式土器である。高山寺式土器の出土量は決して少なくはないが、その内の多くが小片であったり摩滅していたりして、掲載に耐えうるものではなかった。よって18点のみ図示することにした。130～134は出土位置や胎土・文様その他から同一個体であると思われる。口縁部片である130・131・134の内、134には内面に斜行沈線が確認できる。口縁端部はまるめており、めくれるように外反している。外面には格子目状の押型文がみられるが、あまり深くしかっりとは施されていない。

やや摩滅している。

135～147の内、136以外は出土位置や胎土・文様等から同一個体である可能性が高い。ただ139は外面に炭化物が付着し、一見別個体のようにも見える。135・137・138は口縁部片で内面に斜行沈線が見られる。斜行沈線は134も同様であるが、指頭の押圧により施された感じで緩やかな凹み状を呈している。外面にはほぼ正方形に区画された格子目状の押型文がしっかりと施されている。口縁端部はまるめられ、やや外反している。

第２群　縄文時代前期後葉に属する土器（第169～170図101～119　図版54　第174図148～159　図版57）

101～118はＳＢ01より出土している。

101・102は縄文突帯を有する胴部片である。突帯上を縄文で施文しているが、突帯は比較的高く潰れていない。地文は縄文であるが、突帯間は撫で消されている。器壁は厚くなく、内面には指頭圧痕が認められる。両者は同一個体である可能性がある。

103は平行する３条の縄文突帯を有する口縁部片である。口縁端部は面取りし、縄文を施している。101・102同様、突帯上に縄文が施されているわりには比較的高い。はがれもしくは摩滅により突帯の詳細は不明な点が多いが、第１地点の２ＩＩＡａの土器群の多くとはやや異なった様相を呈している。地文は縄文である。内面には生爪痕らしきものも認められる。

104は縄文突帯を有する胴部片である。大きく外側へ張り出した胴部の中央あたりの部位と考えられる。地文は羽状縄文でその中心に横位の突帯を貼付し文様を構成している。突帯は摩滅しており、不明な部分も多いが、比較的低く器面に貼付いている感じである。

105・106は同一個体である。湾曲しながら外反する口縁部片で波状を呈している。端部は面取りしているが、何も施されていない。下部に平行する２条の特殊突帯を有し、それより上部で口縁部文様帯を形成している。文様は基本的に横位で上下に弧を描いているが、上下で若干単位のずれが生じている。突帯は比較的高く、あらかじめ指頭により成形されている感じである。その上に半截竹管状工具で押し引いているが、あまり丁寧ではなく間隔も均一ではない。潰れてしまっている部分もある。突帯脇にははみ出しが見られるので工具幅はあまり広くない。２ＩＩＢａに属する。

107は特殊突帯を有する胴部片である。かなり摩滅しているので判別は困難であるが、２ＩＩＢａである可能性が高い。はみ出しは少なくほとんどない。突帯間の地文は撫で消されている。

108・114は同一個体である。遺構外遺物として報告している151・153もその可能性が高い。これらの土器はやや他の土器と様相を異にしている。色調はにぶい赤褐を呈し、焼成は非常に良好である。いずれも頸部～胴部片であり、横位の特殊突帯を数条有している。突帯はあまり高くないが、半截竹管状工具による押し引きが施され断面半円形である。２ＩＩＢａに属する。押し引きの間隔は均一で丁寧に仕上げられている。突帯脇にはみ出しがやや残っているが、器面に食い込むようにしっかりと押し引かれている。地文は縄文である。

109は特殊突帯を有する胴部片である。やや張り出し気味の胴部上半にあたる。表面は摩滅しており突帯の様子は十分観察できないが、半截竹管状工具によって押し引かれている感じである。押し引きはあまり丁寧ではなく、105・106に似ている。胎土その他の違いから同一個体とは考えられない。内面には指頭圧痕が認められる。２ＩＩＢａに属する。

110も特殊突帯を有する胴部片である。張り出した胴部下半にあたる。やや摩滅しているが、突帯上には半截竹管状工具による押し引きが確認できる。突帯の頂部だけを撫でるように浅く押し引いており、108等とは対照的である。突帯脇にははみ出しが見られる。109同様に丁寧な押し引きではなく、潰れたり歪んでいたりしている。２ＩＩＢａに属する。

111は断面がＳ字状を呈している口縁部片である。焼成は良好であまり摩滅していない。口縁端部をやや内側に向け、わずかに面取りし縄文を施文している。外面最上部も面取りし縄文を施文した上に短隆線を貼付している。一番上の突帯は断面が三角形状になるように指頭で成形した後、軽く縄文を施している。二番目の突帯はやや高めのものを貼付し、その上にしっかりと縄文を施している。よって断面は四角形状である。胴部との境になると思われる三番目の突帯は平面形が「Σ」字状に見える押し引きがしっかりと施され、突帯脇の器面には工具が食い込んだ痕が残っている。２ＩＩＢｃに属する。口縁端部外側に貼付された短隆線も同様の工具で撫で引いていると考えられる。

112・113は同一個体である。外面の色調は赤褐色を呈し、他と様相を異にする。縄文を地文とし、特殊突帯によって文様帯を構成している。文様モチーフは基本的に横位と考えられるが、円形・弧状・格子状で幾何学的な感じを受ける。突帯上の押し引きは平面で逆「Ｃ」字状を呈しており、断面は半円形である。押し引きの間隔は均一で丁寧に引かれている。突帯脇にははみ出しが残る。

115は平行する３条の突帯を有する胴部片である。地文は縄文である。摩滅しており確認するのは困難であるが、突帯上に押し引きが施されている。平面形は逆「Ｃ」字状に見える部分もある。ただし、一番上の突帯の断面は三角形状を呈しており、押し引きが施されているかどうかは不明である。強いて分類するなら、２ＩＩＢｂに属する。

116は、口縁部が受け口状でくびれた頸部から胴部が張り出し、底部に向かって収束していく器形を呈する。上から見た形は、胴部はやや円形に近いが口縁部は四角形になる。口縁端部は面取りし、縄文を施している。欠損しているので正確さにかけるが、外面にはほぼ等間隔に短隆線を貼付していると思われる。口縁部外側には平行する２条の縄文突帯を貼付し、地文は撫で消されている。くびれた頸部から張り出した胴部には、平面形が逆「く」字状で断面形が砲弾状の特殊突帯を数条貼付し、胴部文様帯を形成している。最も張り出した胴部中央には６条からなる同心円状の突帯があり、それらの間を５条の直線・曲線の突帯でつないでいる。収束し始める胴部下半には平行する２条の縄文突帯があり、胴部文様帯を区画している。突帯脇には若干のはみ出しが残るが、押し引きの間隔も均一で器面に食い込むようにしっかりと貼付られている。２ＩＩＢｃに属する。

118はやや上げ底気味の底部片である。全体に縄文が施されており、端部には何も装飾を持たない。底面の部位では外側にかなり張り出しているが、上半ではくびれ細くなる。おそらく胴部では再び大きく張り出す器形を呈すると考えられる。ＳＢ01の床面近くで置かれたような状態で出土した。同ＳＢ内出土土器の中には上部にあたると思われるような破片は確認できなかった。119は口端部を欠いた口縁部片と思われる。上部に横位の沈線が５条見えるが、はっきりしているのは下３条だけである。その下には斜方向の沈線が施されている。他のＳＢ出土遺物とはかなり様相を異にするが、胎土その他の状況から前期の可能性もあるので、本群に含めた。

119はＰ01より出土している。底部を欠くが、口縁端部～胴部下半までである。復原口径は約36cmほどである。口縁端部は面取りしているように見える部分もあるが、ただ単にまるめてあるだけの部分も

ある。いずれにしても縄文が施文されている。内面肥厚はない。張り出した胴部から頸部で一旦くびれ口縁端部に向かって直線的に開く器形を呈する深鉢である。頸部以下胴部には地文である縄文が施文されているだけで、文様帯は口縁部～頸部にかけて形成されている。文様帯は横位の特殊突帯数条によって構成されている。地文は撫で消されている。文様モチーフは口縁端部外側に貼付られた1条の突帯と頸部の2条の突帯の間に、数条の突帯によって弧状・山形などが描き出されている。2条1セットになった短隆線も加えられている。文様の単位はやや不規則で、全体を想定することは困難であるが、5～6単位である可能性が高い。特殊突帯は半截竹管状工具によって押し引かれており、2IIBaに属する。突帯は摩滅している部分もあり、頂部を失っていることを加味しても断面はかなり低い。他の突帯に比べ押し引きの間隔も長いほうである。突帯脇にははみ出しも見られる。

148は特殊突帯を有する破片であるが、湾曲した断面から頸部と考えられる。地文は撫で消されている。突帯は半截竹管状工具によって押し引かれているが丁寧ではない。斜めに湾曲する突帯上を横方向に押し引いているので、ずれが生じている。突帯の断面形は半円形で、2IIBaに属する。

149も特殊突帯を有する。湾曲した器壁から胴部片であると思われる。突帯の平面形は「C」字状で半截竹管状工具による押し引きが施されている。ただ断面はかなり低くかすかな盛り上がりが見られるに過ぎない。細い粘土紐を貼付し、その上からしっかりと器面に食い込むように押し引いたために低くなったのではないかとも考えられる。本来は平行するようにもう1条の突帯が下部に貼付けられていたようであるが、はがれてしまっている。2IIBaに属する。地文は縄文である。

150は幾何学的な文様モチーフを有する胴部片である。上原遺跡では他に類例を見ず、特異な感じを受ける。粘土紐を貼付しその上を半截竹管状工具で押し引いている。器面に食い込むようにしっかりと押し引かれている。ただ粘土紐の幅も工具幅も他と比べてかなり狭く、東日本系の土器にみられる結節浮線文に酷似している。詳細は不明である。

152は口縁部片である。端部に棒状工具の押圧による凹みを有する。幅はかなり狭いが内面肥厚しており、その部分に縄文を施している。外面は縄文地に弧状を描く特殊突帯が貼付されている。突帯の平面形は逆「C」字状を呈しており、断面もやや高くなっている。押し引きの間隔は普通程度であり、突帯脇にははみ出しが見られる。2IIBbに属する。

154～156は同一個体である。摩滅しており詳細は不明だが、3条の突帯を有する胴部片である。突帯脇に突帯と平行する浅い溝状の凹みがあることから、半截竹管状工具によって撫で引かれた感じもみられるが、断面が三角形状に近いので、指頭によって成形されたとも考えられる。115と同一個体である可能性もある。

157～159は羽状縄文が施された破片である。157は口縁部でやや湾曲している。端部はまるめた後に半截竹管状工具によって押し引いている。平面形は「C」字状で断面は半円形である。158はやや厚い器壁である。

（堀田一浩）

第3群　縄文時代中期以降に属する土器群

（第171図120～127　図版55　第174図160～164　図版58　第175図165～175　図版58）

120～127は同一個体である。C′51～D′52グリッドに点在しているピット群内で出土している。C2群II類に分類される。ゆるい波状口縁である。地文は縄文の条が交互に深い浅いを繰り返す現象が観察される特殊縄文（原体は縄巻縄文と考えられている）である。内湾するキャリパー形の口縁部に平行沈線によって、横位に連弧文を描く。ただし上から二段目以下は上下の弧を逆にして眼鏡状に描いている（第171図　推定復原図参照）。船元・里木式土器様式の第4様式に該当すると考えられる。

160・165・170は撚糸文地に平行沈線で文様を描く土器群で、C3群に分類できる。160は細い隆帯を貼る。170の平行沈線の幅は比較的広い。

161は無文地に隆帯を多用して文様を施すもので、C5群I類Aに分類できる。第2地点出土例においては口縁屈曲部上面に刺突列を施す例が多かったが、本例は内面に存在する点で特徴的である。

162は無文地で、口縁部に押し引き列を施すもので、C6群に分類できる。

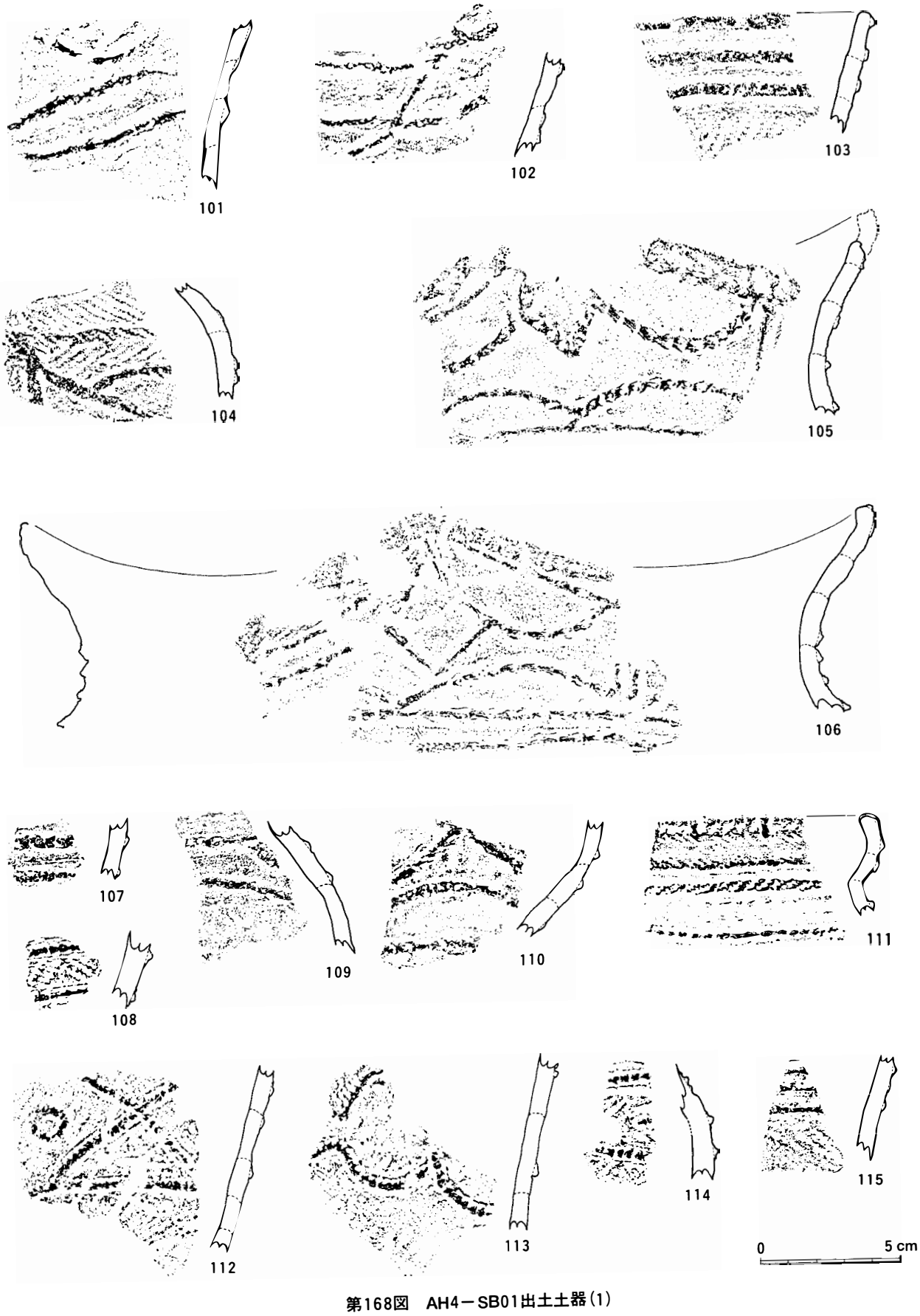
163・164は無文地に沈線で文様を施すもので、中期に属すると考えられる。169は無文地に部分的に縄文を施した粗製の深鉢で、中期のものと考えられる。168は撚糸文を施した胴部片で、中期のものと考えられる。

166は沈線で文様を施した口縁部片で、K3群に分類できると考えられるが、小片のため確証には欠ける。

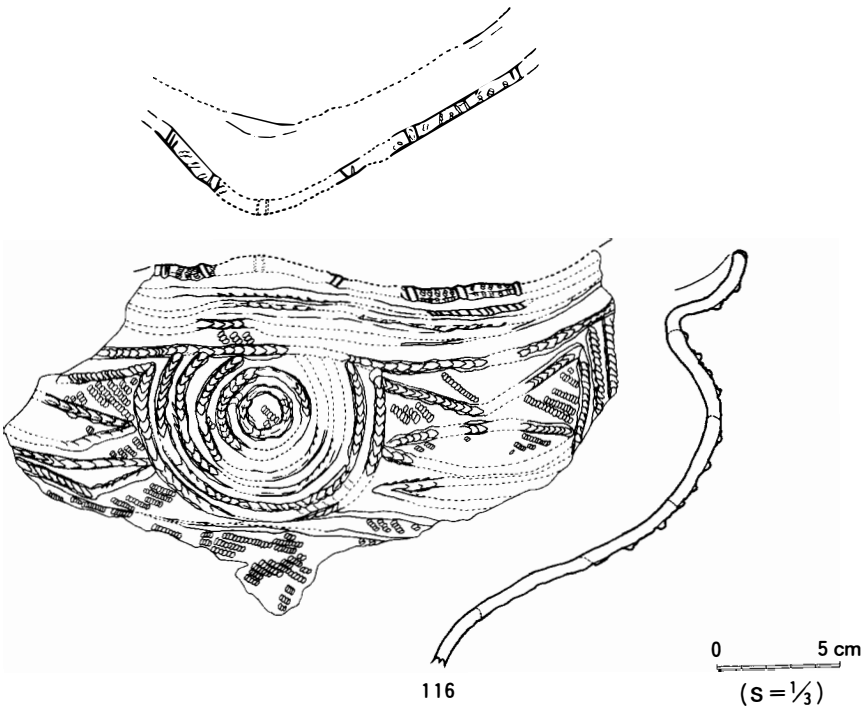
167は縄文地に隆帯を貼り、隆帯に平行して平行沈線を施す深鉢の胴部片である。C2群I類に分類できる。

171は注口土器の注口部である。後期に属すると考えられる。

172・173は口縁部に横位の沈線を施す深鉢の口縁部片で、北陸地方の編年でいう、御経塚式に併行する資料と思われる。ゆるい突起状の波状口縁をなすようである。　（近藤大典）

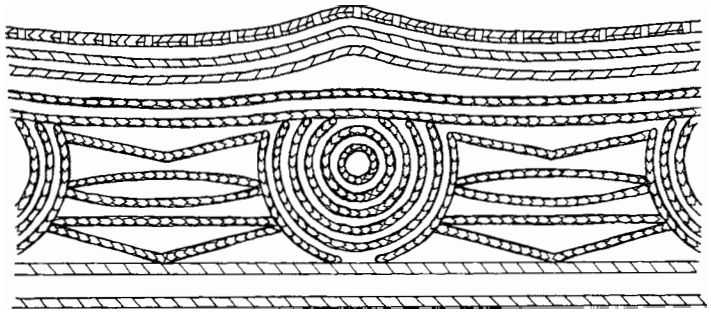


第168図　AH4－SB01出土土器(1)

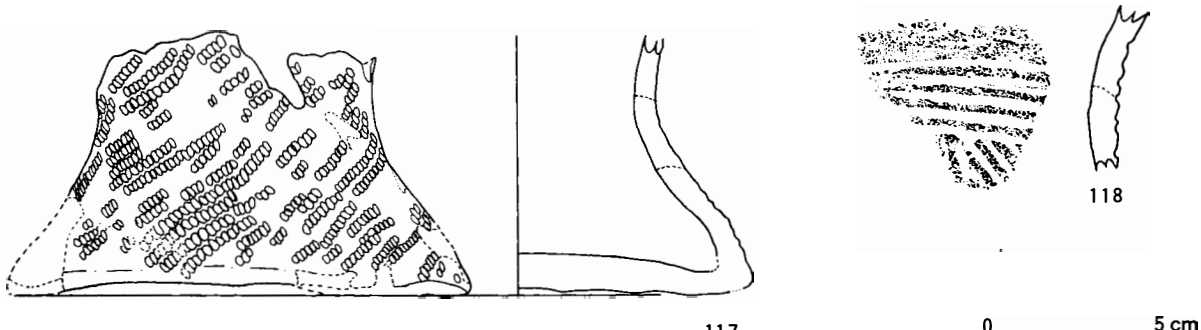


116

(S＝1/3)



文様模式図

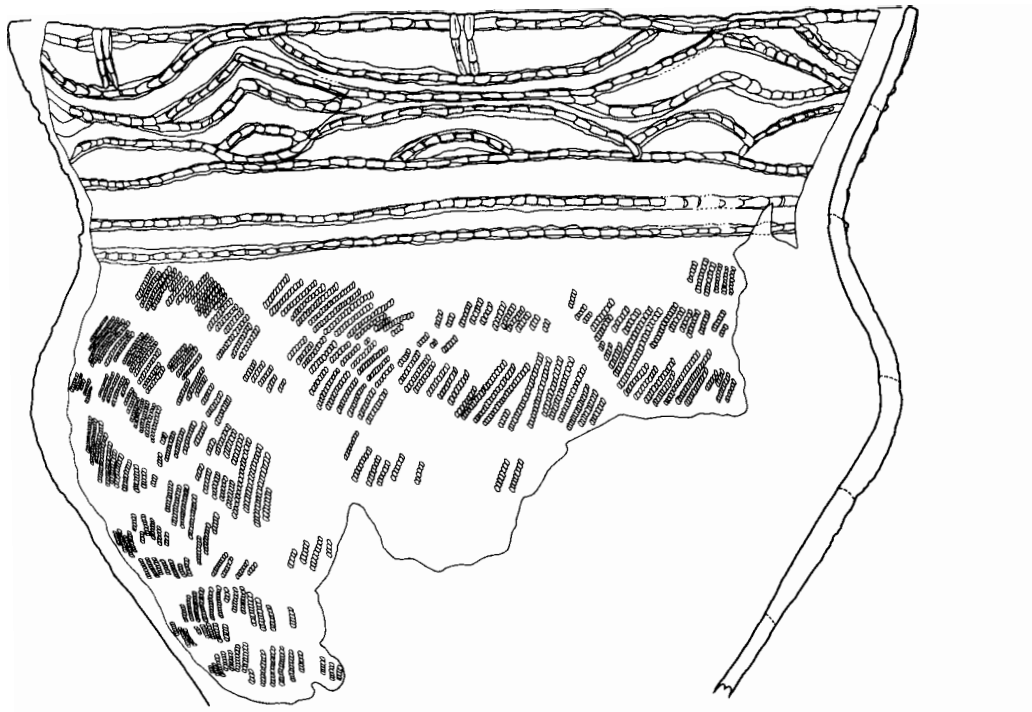


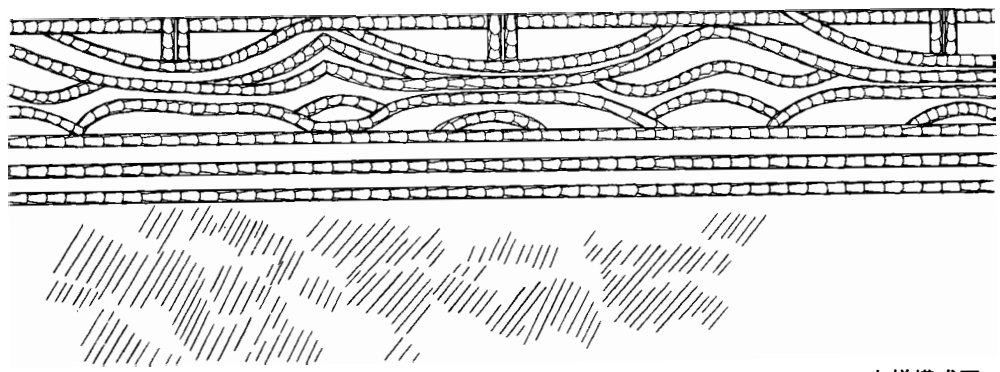
117

118

(S＝1/2)

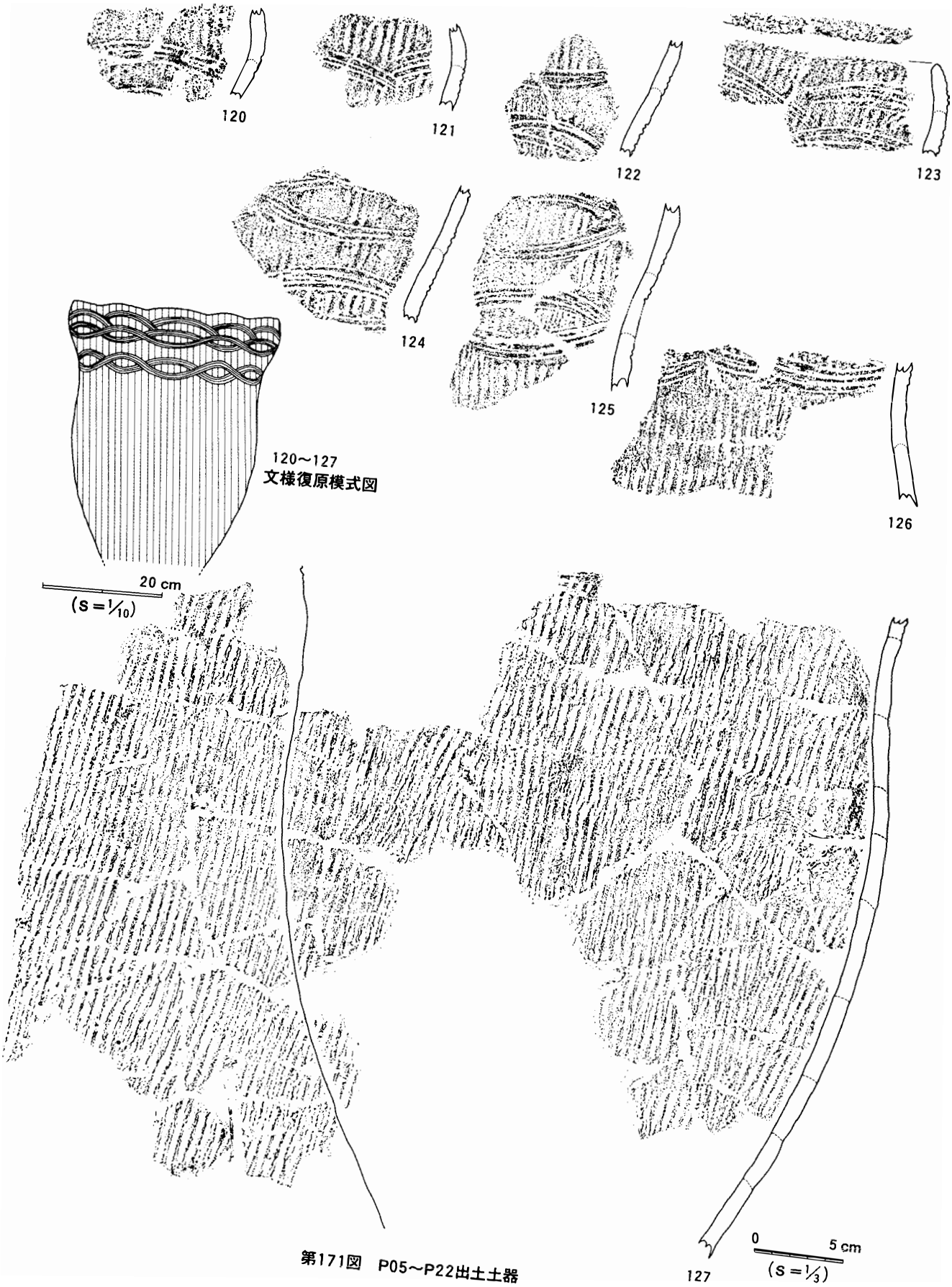
第169図　AH4－SB01出土土器(2)



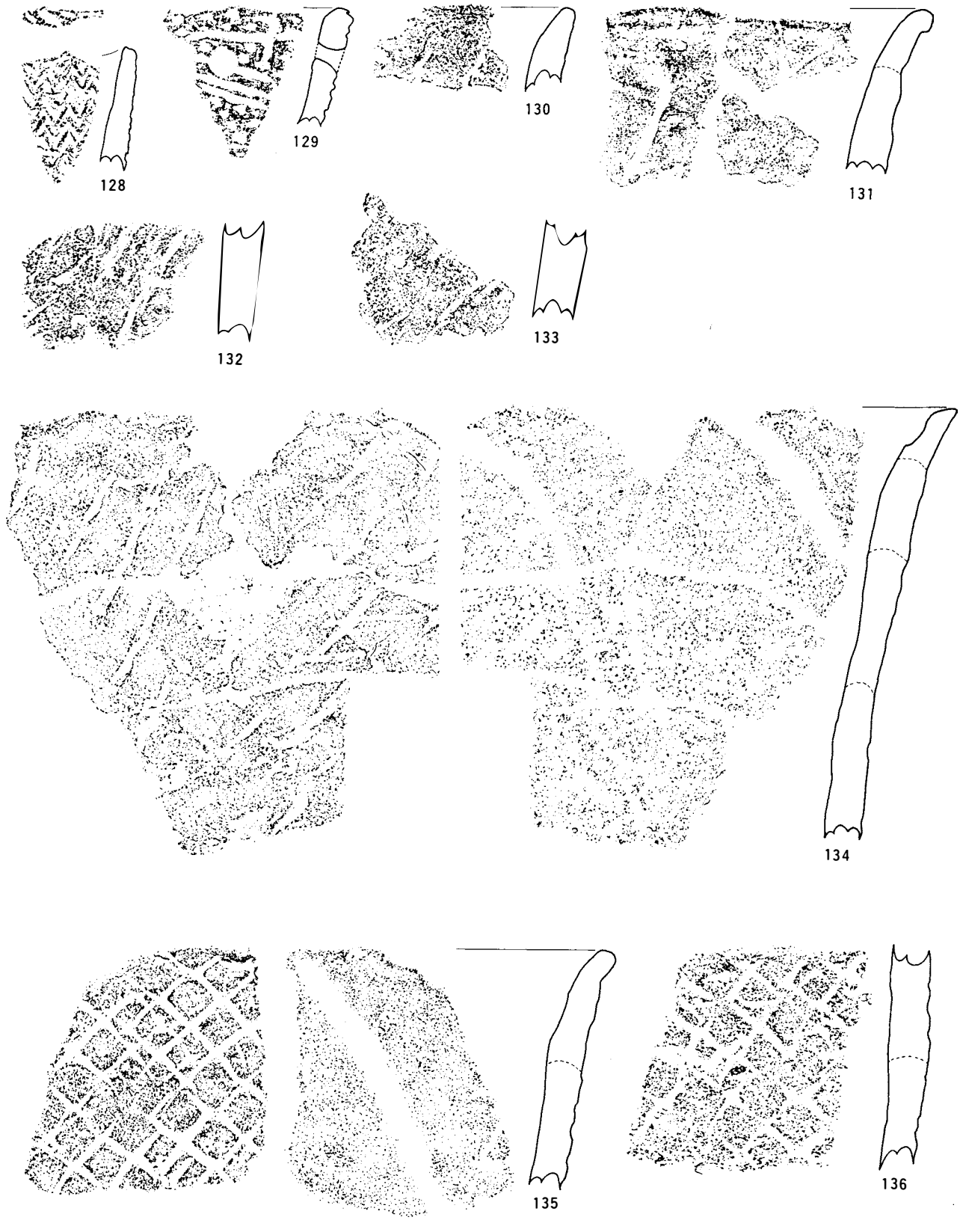


文様模式図

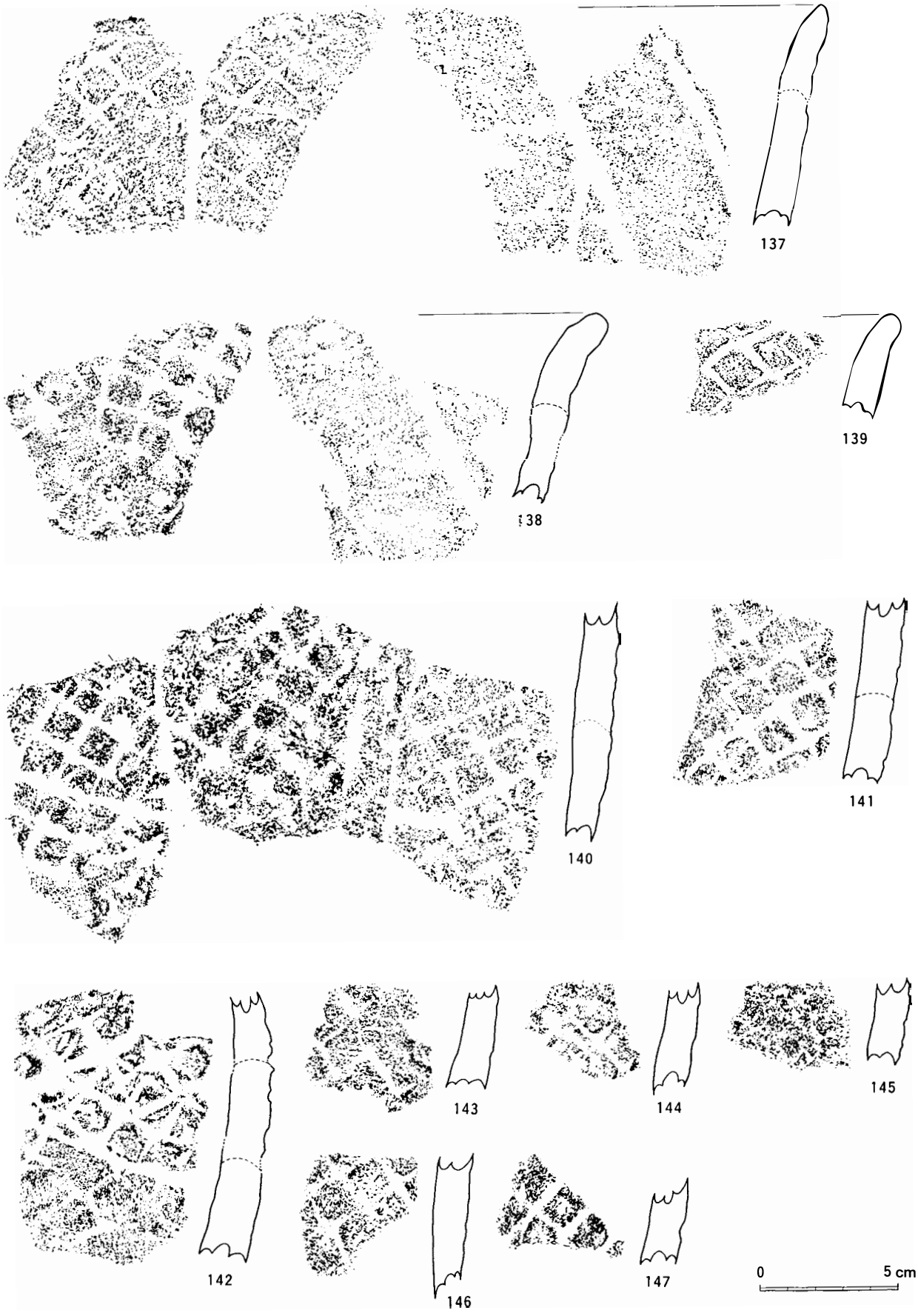
第170図　AH4－P01出土土器



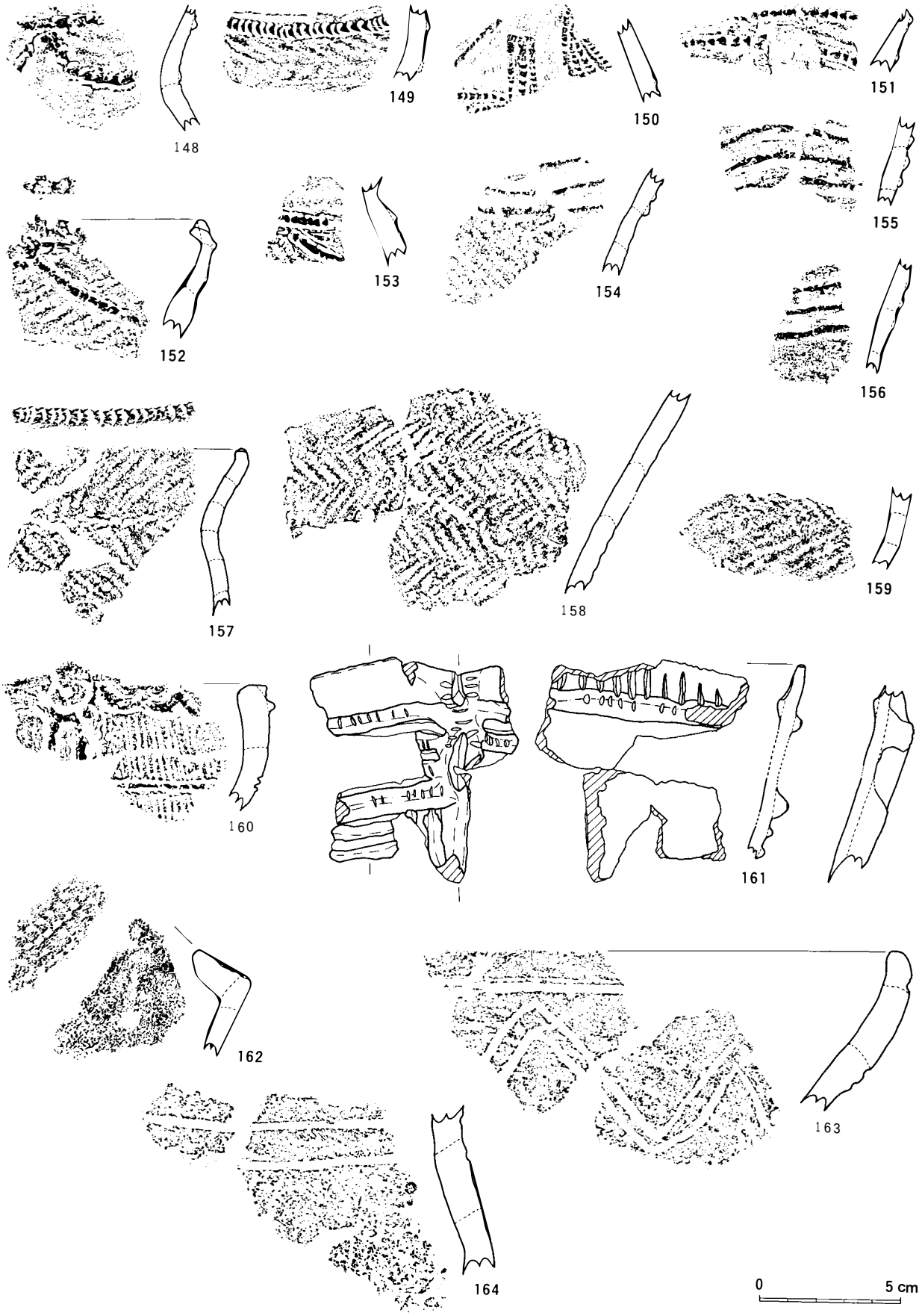
第171図　P05～P22出土土器



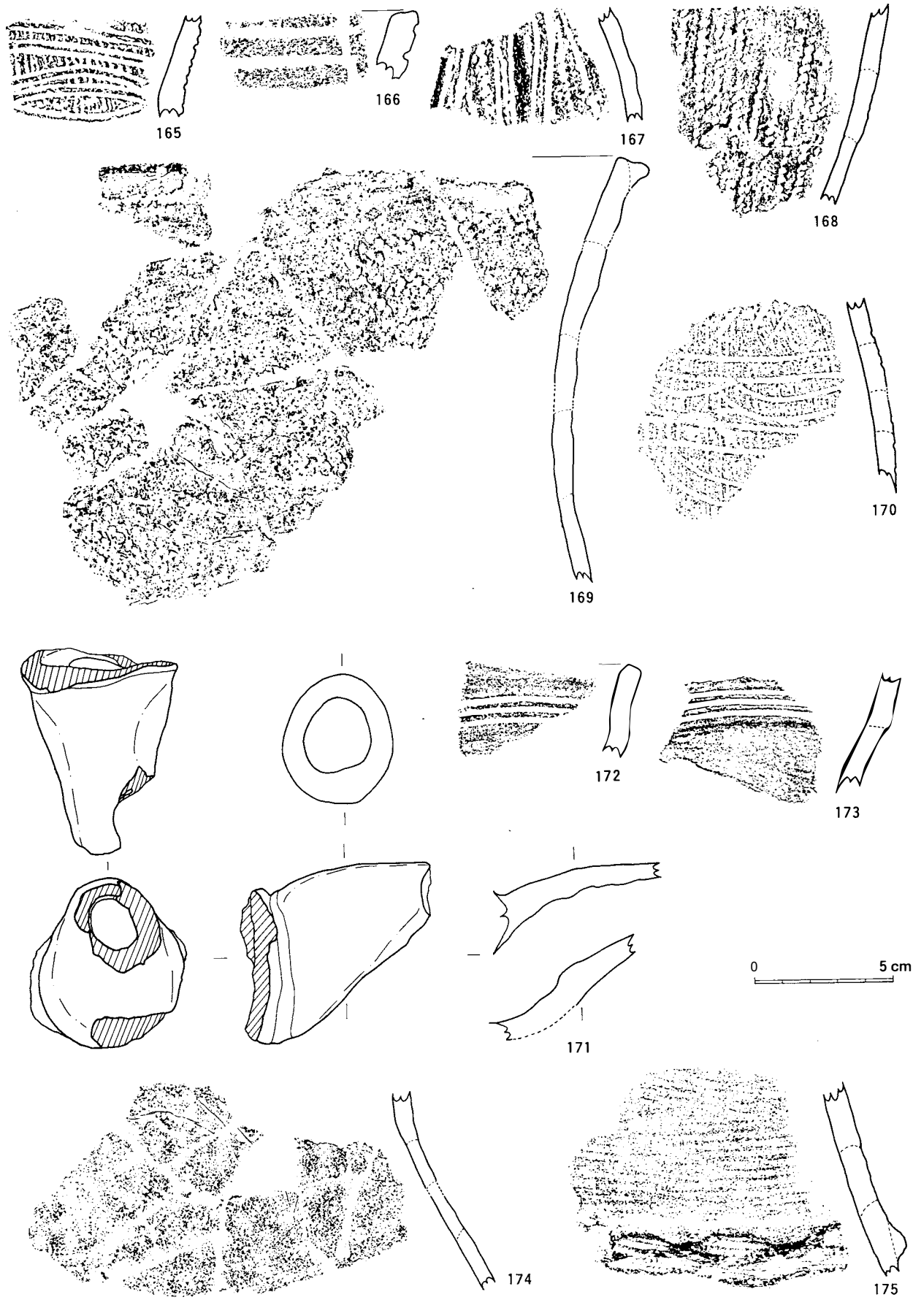
第172図　第1群土器(1)



第173図　第1群土器(2)



第174図　第2・3群土器



第175図　第3群土器

2．石器

第4地点からは485点の石器が出土した。以下、器種ごとに説明を加えることにする。

1．石鏃

6点出土したが、そのうち5点が折損品であり詳細は不明である。石材はチャートが5点、流紋岩質溶岩が1点であった。

2．石槍

1点出土したが、基部の一部を残して折損しているため詳細は不明である。石材にはチャートを用いている。

3．石錐

1点出土。チャートを使用している。錐部の断面形は菱形を呈するが、両側縁から基部にかけて調整がみられることから石鏃の可能性も含んでいる。

4．スクレイパー類

削器が4点、掻器Ⅰと掻器Ⅲ・複合スクレイパーが各1点ずつ出土した。削器はチャート製が3点、流紋岩質溶岩（サヌカイト）が1点である。刃部は両面調整によるものが1点で、片面調整によるものが3点であった。また、直線状の刃部を有するものは3点であり、凸状に外彎する刃部を有するものは1点であった。掻器Ⅰの1点はチャート製で、両面調整により1カ所の刃部を作出している。刃部平面形は凸状に外彎している。掻器Ⅲの1点はチャート製で、両面調整により刃部を作出している。複合スクレイパーの1点はチャート製で、削器的な刃部1カ所と掻器的な刃部1カ所を有するものである。削器的な刃部は裏から表への片面調整によって直線状に作出し、掻器的な刃部は両面からの調整によって凸状に作出している。

5．打製石斧（1・2）

34点出土。用いた石材は、砂岩16点、泥岩14点、安山岩3点、花こう閃緑斑岩1点である。

形態により分類すると、1類の両側縁がほぼ平行する短冊形が9点、2類の両側縁が基部に向かって収束する撥形が19点、3類の両側縁に抉りを作出した分銅形が1点、折損により分類不能なものが5点であった。背面または腹面に自然面を有するものは18点で、全体の53％になる。刃部に磨耗のみられるものは24点で、折損等により不明の8点を除くと全体の92％を占める。25点に折損が認められ、基部折損が10点、刃部折損が7点、基部と刃部の両方を折損するものが1点、残り7点は基部または刃部を一部折損するものである。

1は、石材に硬質の砂岩を用いている。表面右側に打点をもつ横長剝片の両側縁を折り取って形状を整えている。刃部は偏刃になっており、斧としての使用も考えられる。2も砂岩製で、右側縁部に打点をもつ横長剝片の両側縁に抉りを入れ、分銅形に整形している。幅広い半月形の刃部を有する。

6．磨製石斧（3・4）

2点出土。3は砂岩製、4は蛇紋岩製であり、剥離によって概ね整形した後、念入りな研磨を施している。いずれも直刃を有している。

7．石核・剥片類（5・6）

372点出土。そのうち16点が石核である。5の石材は水晶であり、五角柱状の形態を呈している。剥片剥離の痕跡がわずかに確認できることから取り敢えず石核としたが、詳細は不明である。6の石核は、剥片を素材とし、その縁辺部を打面とするタイプで、作業面が背面と腹面の両面におよぶものである。

8．剥片剥離を施された剥片（ＲＦ）

13点出土。刃部のタイプは削器的、掻器的、複合の3つに分けられる。その内訳は次の表のとおりである。

第19表　ＲＦ分類別出土点数

刃部のタイプ	刃部数	刃部箇所の平面形と調整方法	出土点数
削器的	1	直線状(片面)	4
		凸　状(両面)	1
		凹　状(両面)	1
		凹　状(片面)	1
		不定形(片面)	1
	2	不定形(片面)・直線状(交互)	1
		不定形(一部両面)・直線状(両面)	1
	3	直線状(片面・一部片面)・凹状(片面)	1
掻器的	1	凸　状(片面)	1
複合(掻・削)	2	直線状(片面)・直線状(片面)	1
		合計	13

9．微細な剥離痕を有する剥片（ＵＦ）

8点出土。剥離痕の箇所は側縁部と末端部に分けられる。側縁部には縁辺の角度が急で凸状を呈するものが1点、緩い角度で直線状のもの4点・凸状のもの1点・不定形のもの1点が認められた。末端部には緩い角度で不定形な剥離痕をもつもの1点が確認できた。

10．打欠石錘（7～13）

14点出土した。すべて遺構外からの出土である。石材は砂岩7点、泥岩6点、花こう閃緑斑岩1点と本遺跡付近で入手可能であろうと思われるものばかりである。14点中、1点のみが欠損しているが、あとの13点は完形である。完形品のうち7点を図示した。

7は断面がくさび形をしている。機能部作出のための打欠は同一方向からのみ行われている。8は卵形をした平面形をもつ。全体によく磨滅しており機能部の打欠は両端ともさほど明確ではない。中央部

の長軸方向に帯状痕跡が確認できる。９は機能部の作出法に特徴があり、片方は片側だけからの一撃で剥離を施しているが、もう片方は両側から二度にわたりやや小さめの剥離を施している。10は全体によく磨滅している。機能部は長軸の両端にわずかに設けられ、その剥離は他の石錘と比較すると小さい方である。帯状痕跡が確認できる。11は本地点出土石錘のうち最大のものである。10と同様の技法で機能部を作出している。12は当然のことながら両面に帯状痕跡が確認できるが、13は片面しか確認できず、反対側の面はあまり磨滅していない。２点とも第１分類でいう２類に属する。

また、本地点からも第１地点と同様に、打欠石錘と酷似した泥岩製の二次調整を施した剥片類も出土している。機能部が明確でないことや打製石斧にもサイズ的に不適であることなどから、あえてどこにも含めず、分類していない。ここで出土したという事実のみ記載しておく。　（堀田一浩）

11．切目石錘（14～20）

11点出土した。すべて遺構外からの出土である。石材は砂岩９点、泥岩２である。長さ・幅・厚さ・質量の最大値がそれぞれ7.4cm、3.3cm、1.5cm、41.0ｇと、隣接する第１地点の切目石錘と比較しても全体的に小さい。11点中、欠損している４点を除き、完形である７点すべてを図示した。

14は小さく丸い扁平な礫を素材としている。切目は浅く比較的短時間で製作できたことがうかがえる。第１分類の１Ｂ１に属する。15は機能部の作出法がわりとはっきりわかる。斜め方向に両側から切目を施し、端部ではその切り合いが確認できる。切目は長い。16には帯状痕跡が確認できる。平面形は19をさらに長軸方向へのばしたような均整のとれた形を呈している。機能部となる切目は、垂直方向のみからではあるが、力強い施工がなされている。第１分類の１Ｂ１に属する。17は小粒である。斜めに切目が施され、片方の切目の延長先が他方の切目につながっていない。切目は比較的長い方である。第１分類でいう１Ｂ３に属する。18も17と同様に斜めに切目が施されている。切目は長い方である。扁平な円礫を素材としている。第１分類の１Ｂ３に属する。19の平面形は均整のとれた楕円形を呈している。機能部となる切目も長くていねいに施工されている。かすかに帯状痕跡が確認できる。第１分類の１Ｂ３に属する。20は第１分類でいう２類に属する。２点しか出土していないうちの１点である。層状に剥離する材質に加え、素材自体が薄いので、片方の機能部ははっきりしない。端部を打ち欠いた後に切目を施している。第１分類の２Ａ１に属する。　（堀田一浩）

12．凹石・敲石・叩石・磨石類（21･22）

14点出土。石材は砂岩が９点、安山岩が４点、礫岩が１点であった。機能の組み合わせをみると、敲きのみが３点、叩きのみが２点、磨りのみが１点、凹み（表面）と敲きが１点、敲きと叩きが２点、敲きと磨りが１点、叩きと磨りが１点、凹み（表面）と敲き・叩きが２点、敲きと叩き・磨りが１点であった。凹みの形態は、円形ないし楕円形で鍋底状の凹みを有するものが３点で、凹みの位置は３点ともほぼ中心に凹みをもつ部類に属する。敲打痕の位置は、ほぼ中心にあるものが11点、中心からずれる箇所にあるものは２点、３つ以上の敲打痕がランダムに存在するものは３点、側面にあるものは５点であった。敲打痕が長軸の一端または両端に集中する叩石は８点出土した。磨面をもつものは４点出土し、すべて自然面を加工することなくそのまま使用している。磨面は、両面に確認できるものが３点、片面のみに確認できるものが１点であった。

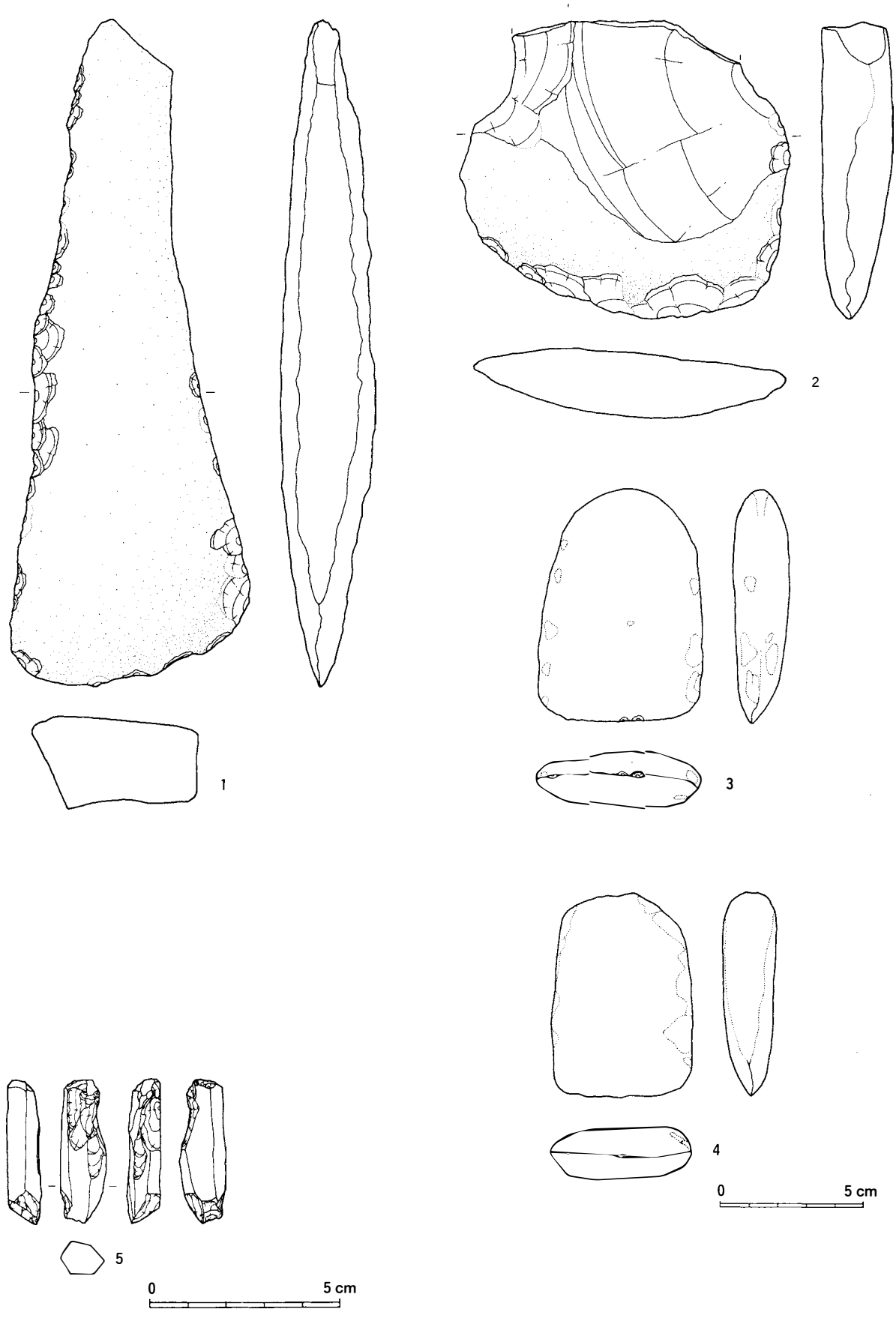
21は礫岩製で、片面のほぼ中心に敲打痕がみられる。22は砂岩製で、表裏及び側面に敲打痕がみられ、表裏両面には磨りが確認できる。

13. 石皿

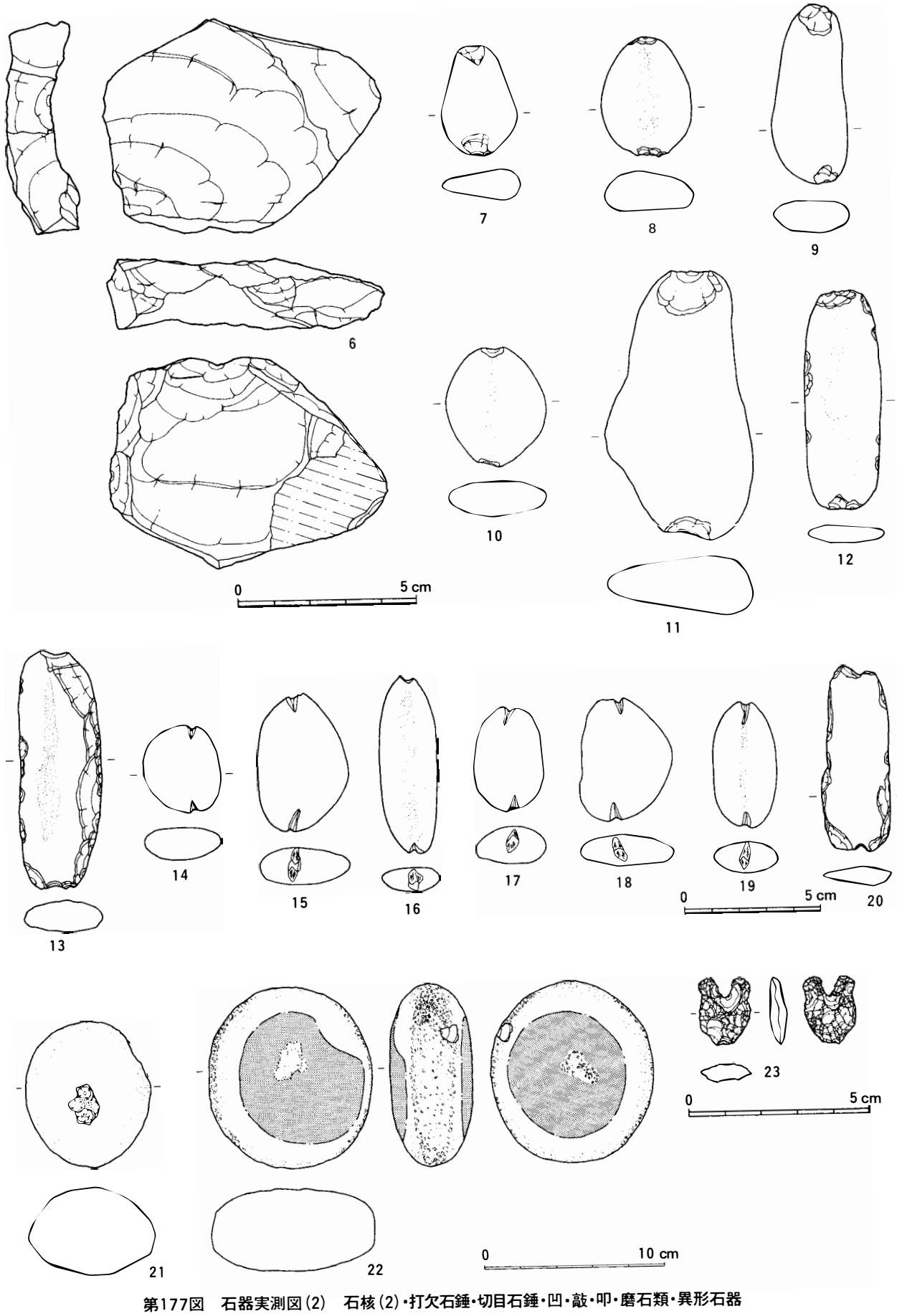
安山岩製のものが1点出土した。自然の凹みを利用し、礫面を加工することなくそのまま使用している。

14. 異形石器（23）

23は、石材にチャートを使用している。平面形は、異形部分磨製石器に似るが、研磨部分を見出すことはできないため異形石器とした。表面右側縁部と脚部に、節理による折れ面が認められる。表裏両面ともに二次調整が施され、素材剥片の剥離面を確認することはできない。



第176図　石器実測図(1)　打製石斧・磨製石斧・石核(1)



第177図　石器実測図(2)　石核(2)・打欠石錘・切目石錘・凹・敲・叩・磨石類・異形石器

第　5　地　点

第6章　第5地点

第5地点は、中位段丘中央部山側の谷下に広がる崖錘およびその下のアカホヤ火山灰（K-Ah）を含む黒褐色土が残る範囲で、約7,000㎡の広さがあると推定できる（第178図参照）。平成4年度に第2地点では範囲確認のための試掘調査を行った。その際に掘削したHトレンチのセクションで、厚さ1mほどの大規模な崖錘とその下に厚さ約30cmほど堆積した黒褐色土を確認した。その範囲を確認するために、さらにHトレンチを延長したところ、崖錘は東西方向約40mにわたって広がっていた。堆積状況は、山側へ行くほど薄くなり、山側斜面にはつながっていなかった。こうした状況からみて、この崖錘が山側（西側）より崩れてきたものとは考えられず、北西に位置する第3地点東の谷の方向より崩れてきたものであると推測できた。

崖錘下の黒褐色土の堆積状況は、さらに下層の黄褐色砂礫層に沿って背後の山側へ行くほど高くなっているのが確認できた。この黒褐色土は崖錘が堆積する直前の旧表土であると考えられる。掘削直後の段階では、その堆積状況から、かつてこの一帯に泥炭地が広がっていたのではないかと推測した。立証すべく外部業者に依頼して黒褐色土の花粉分析とプラントオパール分析を行ったところ、花粉は検出できなかったものの、ネザサ・クマザサ属そしてヨシ属のプラントオパールが検出された。分析結果から考えると、当時この一帯は泥炭地ではなく、森林の下草的存在でチシマザサなどのクマザサ属が生育しており、やや開けた陽地にはネザサが進入し、ススキなどが群生していた状況や、ヨシ属がみられる水域（湿地）も一時期存在していたことがわかってきた。

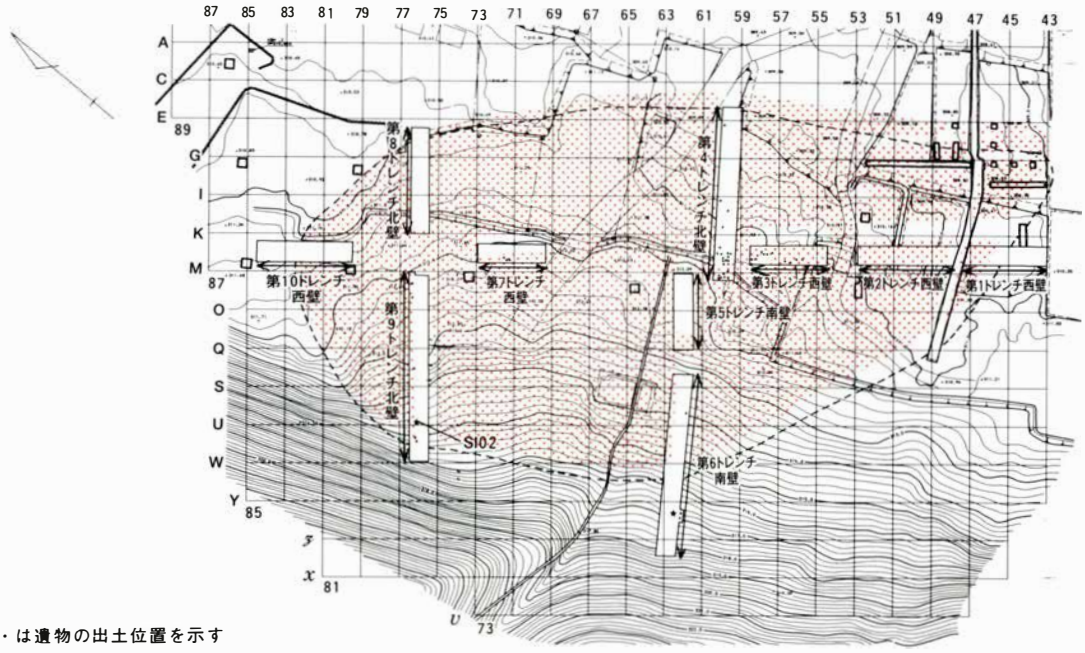
また、黒褐色土中にはきらきらと光るガラス質の物質が肉眼観察でも確認できた。この物質はテフラ分析の結果、今から約6,300年前に西日本を中心に降下した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の火山ガラスであることが判明した。このことからこの黒褐色土が堆積したのは縄文時代前期～中期にかけての時期である可能性が高くなってきた。隣接する第2地点では既にこの時期の遺物や遺構が確認されていたし、本地点の堆積状況も比較的安定していたので、遺構検出および遺物の出土が期待された。

平成5年度には、この崖錘および黒褐色土の残る範囲を推定し、「上原遺跡第5地点」とした。調査前の段階で地形測量を行い、8mメッシュのグリッドを設定した。本調査では10本のトレンチにより約958㎡を掘削した。範囲確認と黒褐色土中の遺構・遺物の検出を目的として、上層の崖錘までを重機で除去し、黒褐色土以下を手掘りで慎重に調査した。

第1節　層序

本地点の層序は第179図に示す通りである。崖錘（α）を除けば、本遺跡全体を貫く基本層序と食い違わない。ただ基本層序の第II層に相当する黒褐色土（本地点での第II層とβ）が崖錘によって分断されている。本地点の第III層暗褐色土からは、縄文時代早期の土器が出土している（第3節参照）。その土器の摩滅が少ない状況から考えると、流れ込みとは判断し難く、第III層は縄文時代早期の遺物包含層である可能性が高い。従って、その上層にあたるβは縄文時代早期以降の堆積ということになる。

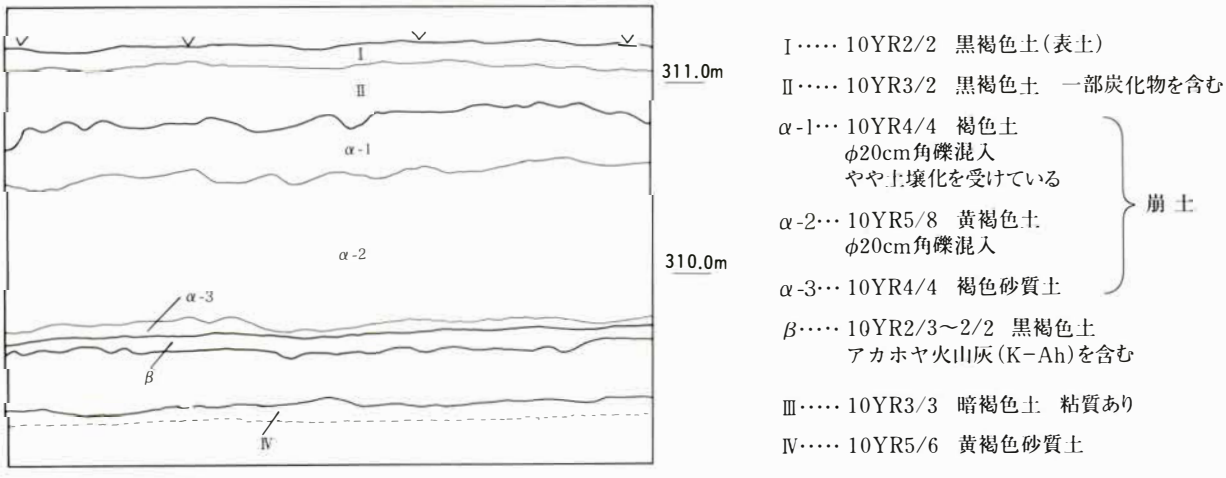
10本のトレンチのセクションから崖錘（α）および黒褐色土（β）の範囲を想定したものが第178図である。当初想定した範囲と比較してみると、東(川)側についてはほぼ同様であったが、西(山)側は



第178図　第5地点トレンチ及び遺構配置図

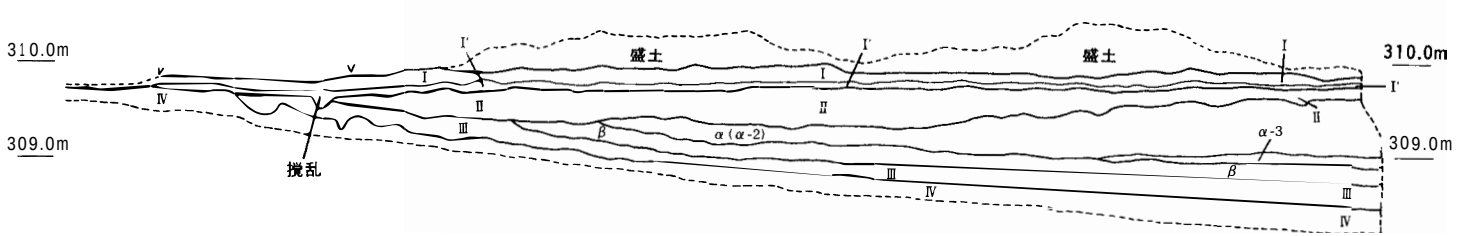
予想以上に山側斜面に近いところまで広がっていることが判明した。改めて本地点に広がる崖錐が、第３地点東谷の東上方斜面からの大規模なものであったことが確かめられた。なお第５・第６・第９トレンチでは、本地点を特徴づける大規模な崖錐（α-2）の上に別の崖錐（α-1）が複数確認できた。段丘背後に迫る山側斜面からの数度にわたる崩落の様子がうかがえる。堆積状況の詳細は各トレンチのセクション図（第000～000図）で示す。なお、セクション図は紙面の関係上制限があるので、一部を削除して掲載した。

第５地点土層模式図（第３トレンチ西壁セクション図を基に作成）

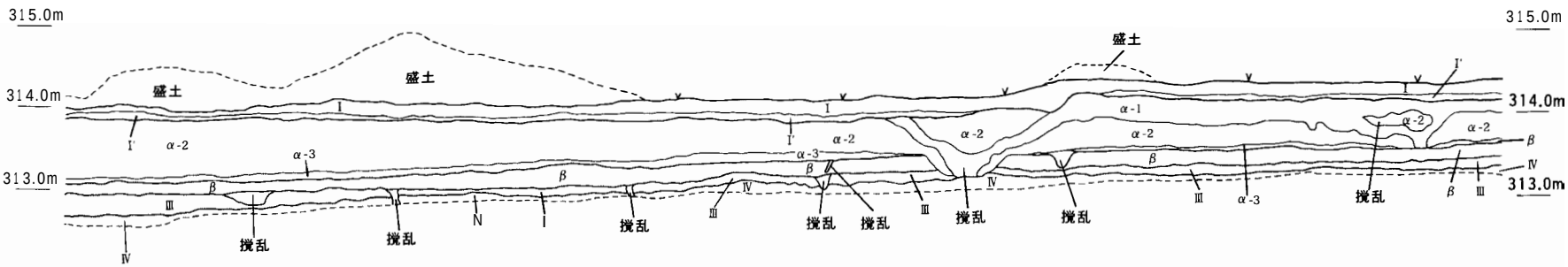


第179図　第5地点土層模式図

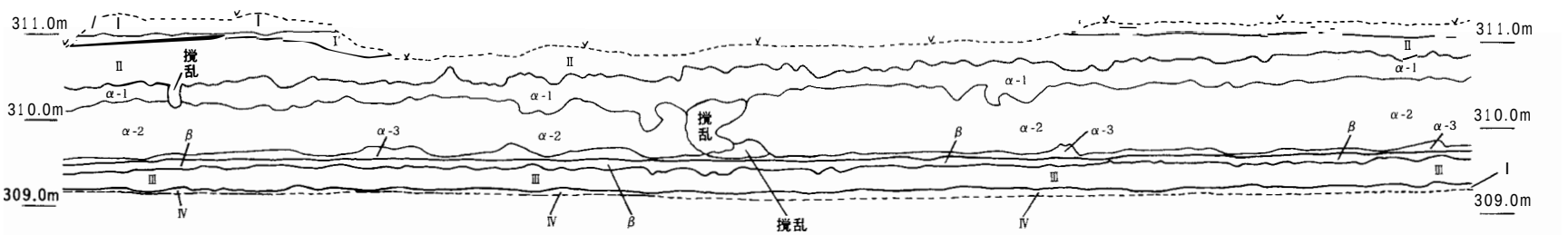
第1トレンチ西壁



第2トレンチ西壁



第3トレンチ西壁



I・II・α-1・α-2・α-3・β，III・IVの土色および注記については第179図参照

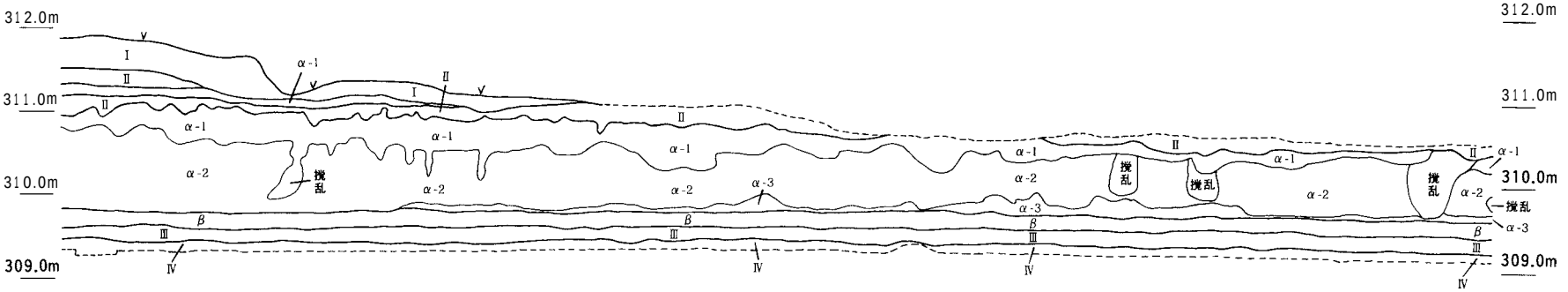
0　2m
(S＝1/80)

第180図　第5地点第1・2・3トレンチ土層図

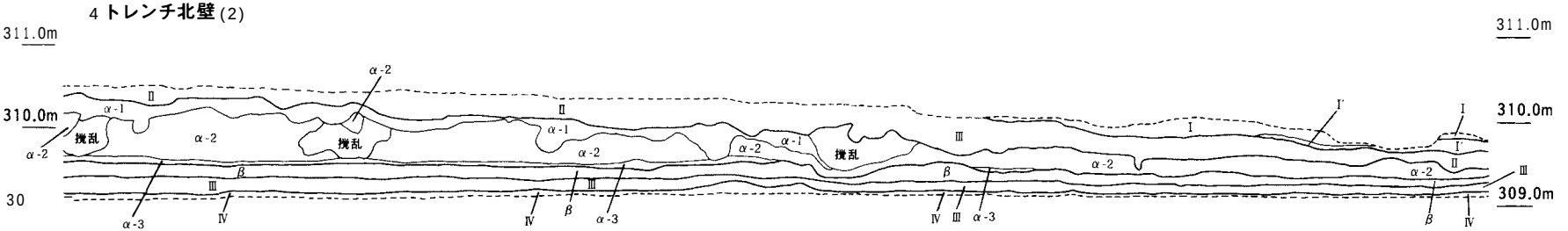
第181図 第5地点 第4・5トレンチ土層図

Ⅰ・Ⅱ・α-1・α-2・α-3・β・Ⅲ・Ⅳの土色および注記については第179図参照

4トレンチ北壁(1)

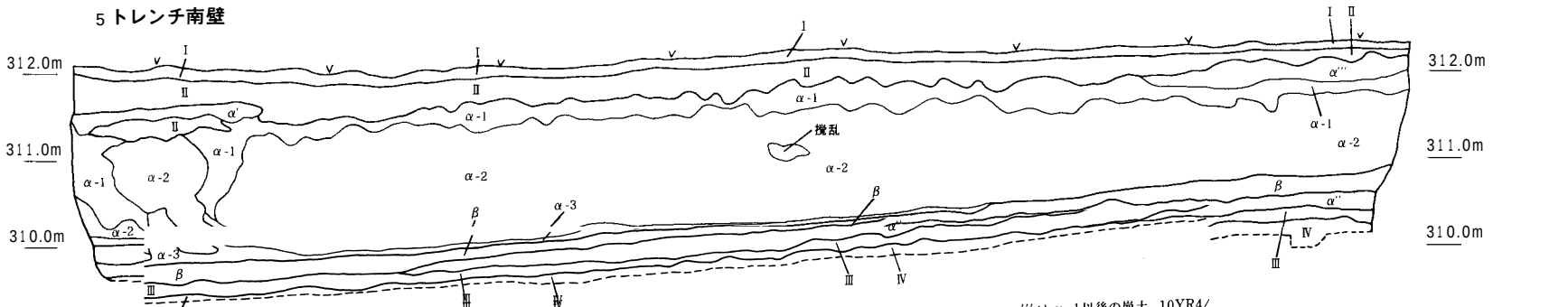


4トレンチ北壁(2)



Ⅰ' 2.5YR5/8 明赤褐色 敷土

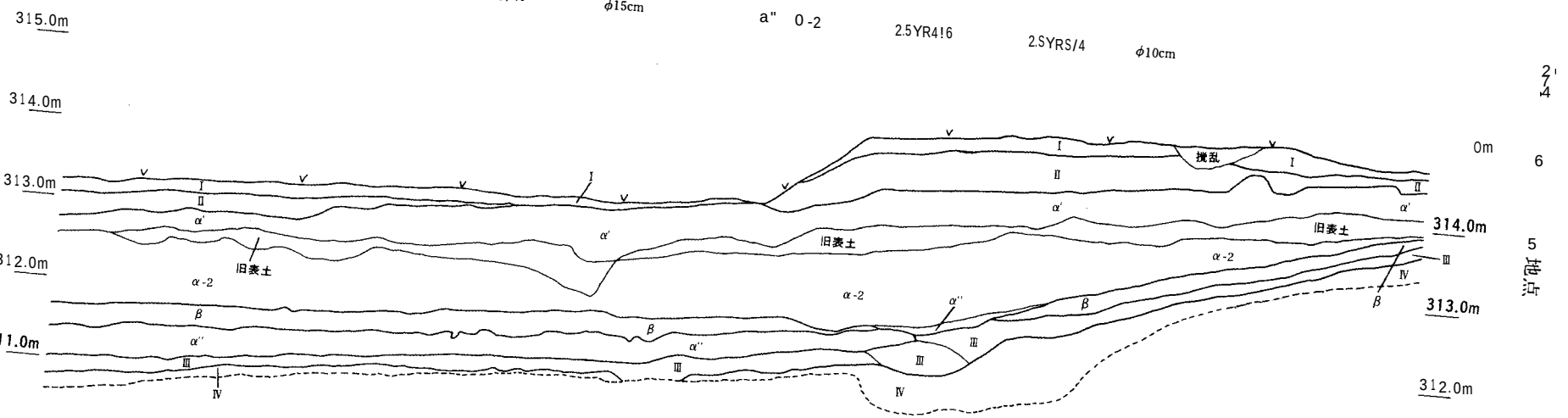
5トレンチ南壁



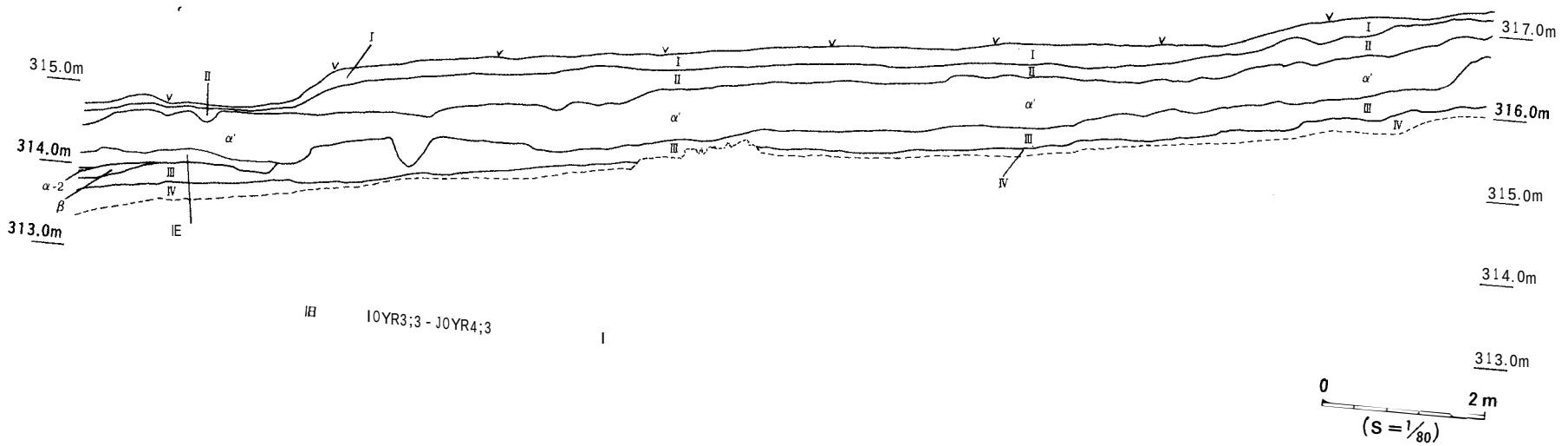
α'はα-1より後に堆積した崩土
α''はα-3以前の崩土 10YR5/6 黄褐色～10YR4/4 褐色 φ5～10cm大の角礫混入
α'''はα-1以後の崩土 10YR4/
α'''はα-1以後の崩土 10YR4/4～4/6 褐色

0 2m
(S=1/80)

第6トレンチ南壁(1)



第6トレンチ南壁(2)



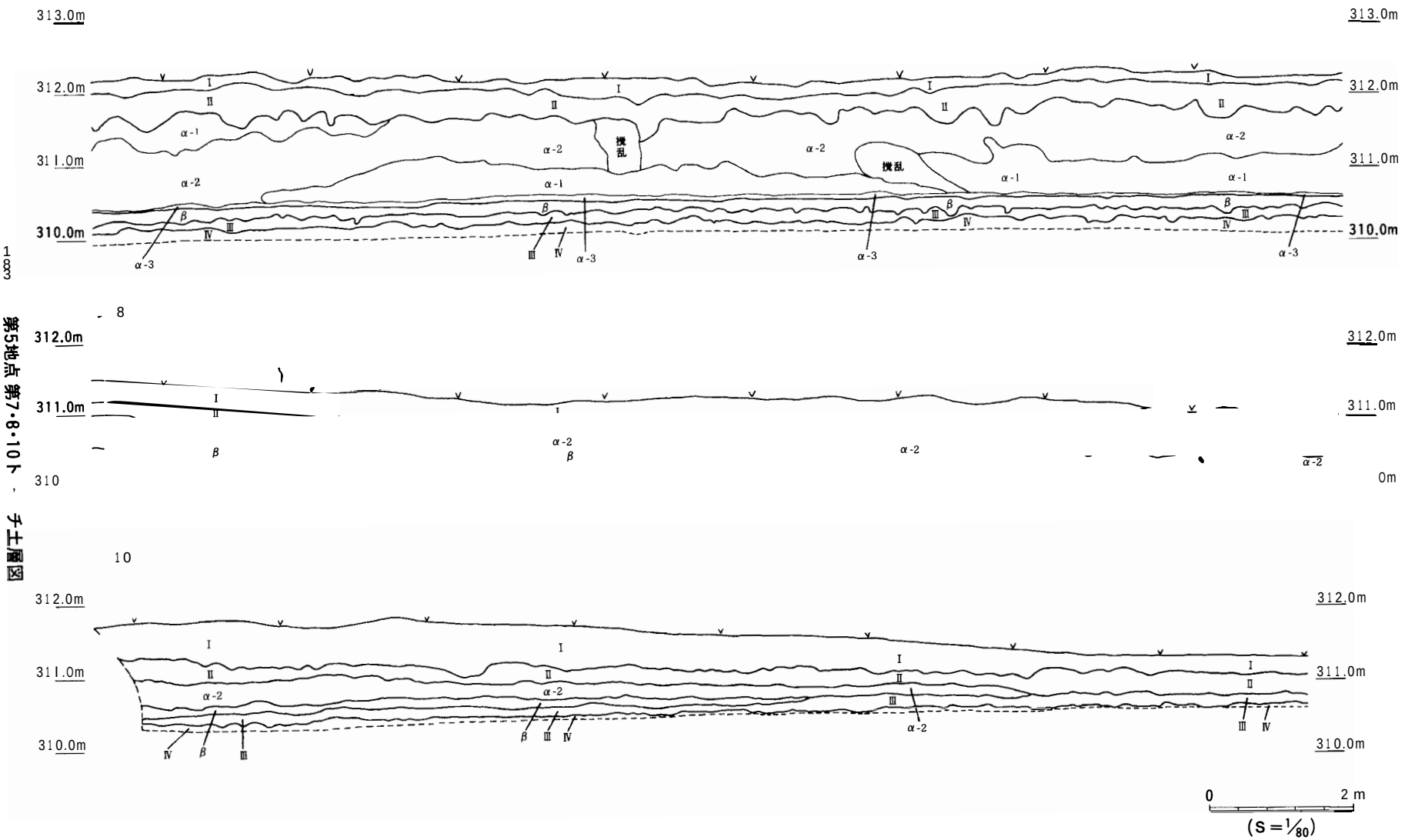
第6トレンチ土層図

ては第179図参照

旧 10YR3;3 - J0YR4;3

0 2m
(S=1/80)

I・II・α-1・α-2・α-3・β・III・IVの土色および注記については第179図参照



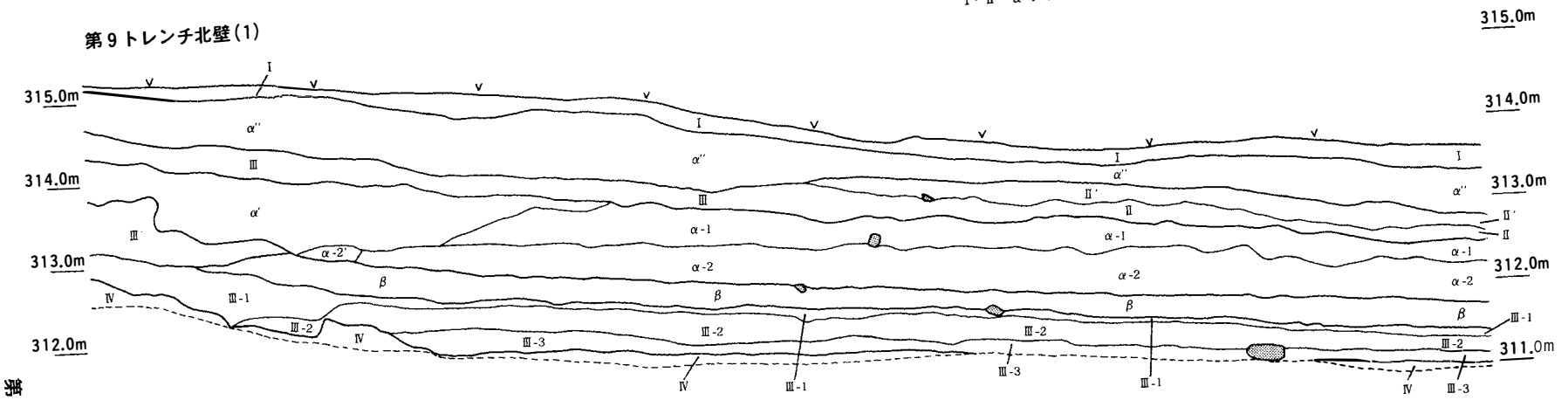
第5地点 第7・8・10トレンチ土層図

183

第184図　第5地点　第9トレンチ土層図

Ⅰ・Ⅱ・α-1・α-2・α-3・β・Ⅲ・Ⅳの土色および注記については第179図参照

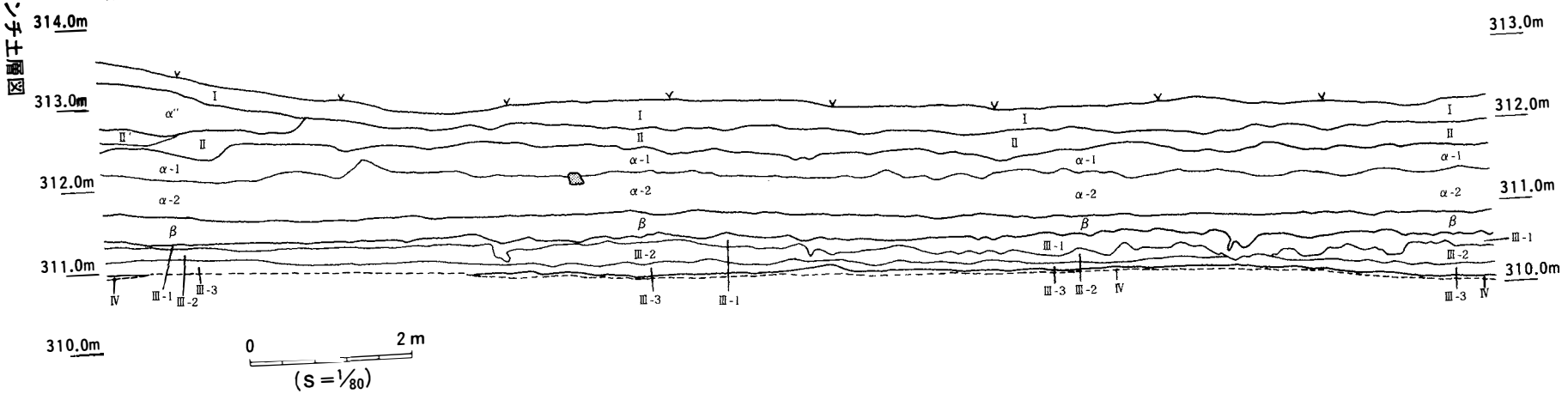
第9トレンチ北壁(1)



α'はα-1にⅡが混入　攪乱か
α''はα-1以後の崩土
α-2'はα-2にβが混入　崩土の際にβを削って堆積した可能性あり
Ⅱ''はⅡにα''が混入　崩土の際にⅡを削って堆積した可能性あり

Ⅲ'はⅢ-1とよく似ている　崩土の際にⅢ-1を削って堆積した可能性あり
Ⅲ-1・・・・・10YR5/3～10YR5/4　黄褐色　しまり・粘質あり鉄分が沈着
Ⅲ-2・・・・・10YR4/4　褐色　しまりあり
Ⅲ-3・・・・・10YR3/3～10YR3/4　暗褐色　しまりあり　小礫含む　炭化物あり

第9トレンチ北壁(2)



第２節　遺構

本地点で検出した遺構は、焼礫集積遺構１基と集石遺構の可能性がある遺構１基の２基である。

焼礫集積遺構（ＳＩ01）〈第185図　図版８〉

第６トレンチＺ63グリッド第Ⅲ層中で検出した。位置は第３地点東谷の中でもかなり山側斜面に近いところである。この辺りでは崖錘（α-2）や黒褐色土（β）が見られず、それにかわってより新しい崖錘（α-1）がかなり厚く堆積している。ＳＩ01はこの新しい崖錘（α-1）下の暗褐色土中で確認した。

平・断面での観察においても明確なプランは確認できなかったが、礫の集積範囲は長径約２ｍ短径約１ｍの楕円形を呈している。若干礫の集中にばらつきがあり、２基である可能性もある。半割したところ礫の集積は二重～三重で、土坑内に礫を積むという形態ではない。礫は全部で288個あり、そのほとんどである259個（約90％）が被熱し、割れていた。使用されていた礫は砂岩の円礫～亜円礫が多く、中にはチャートの円礫も認められた。チャートの円礫は固いためか割れているものが多かった。おそらく揖斐川本流の川原で採集できる礫を使用したものと考えられる。礫に混じり、第Ⅲ層中からは多量の炭化物が確認できた。本遺構の帰属時期は、アカホヤ火山灰を含むβ層より下層で検出されたことを根拠にすると、縄文時代早期の所産である可能性が高い。

集石遺構（ＳＩ02）〈第185図〉

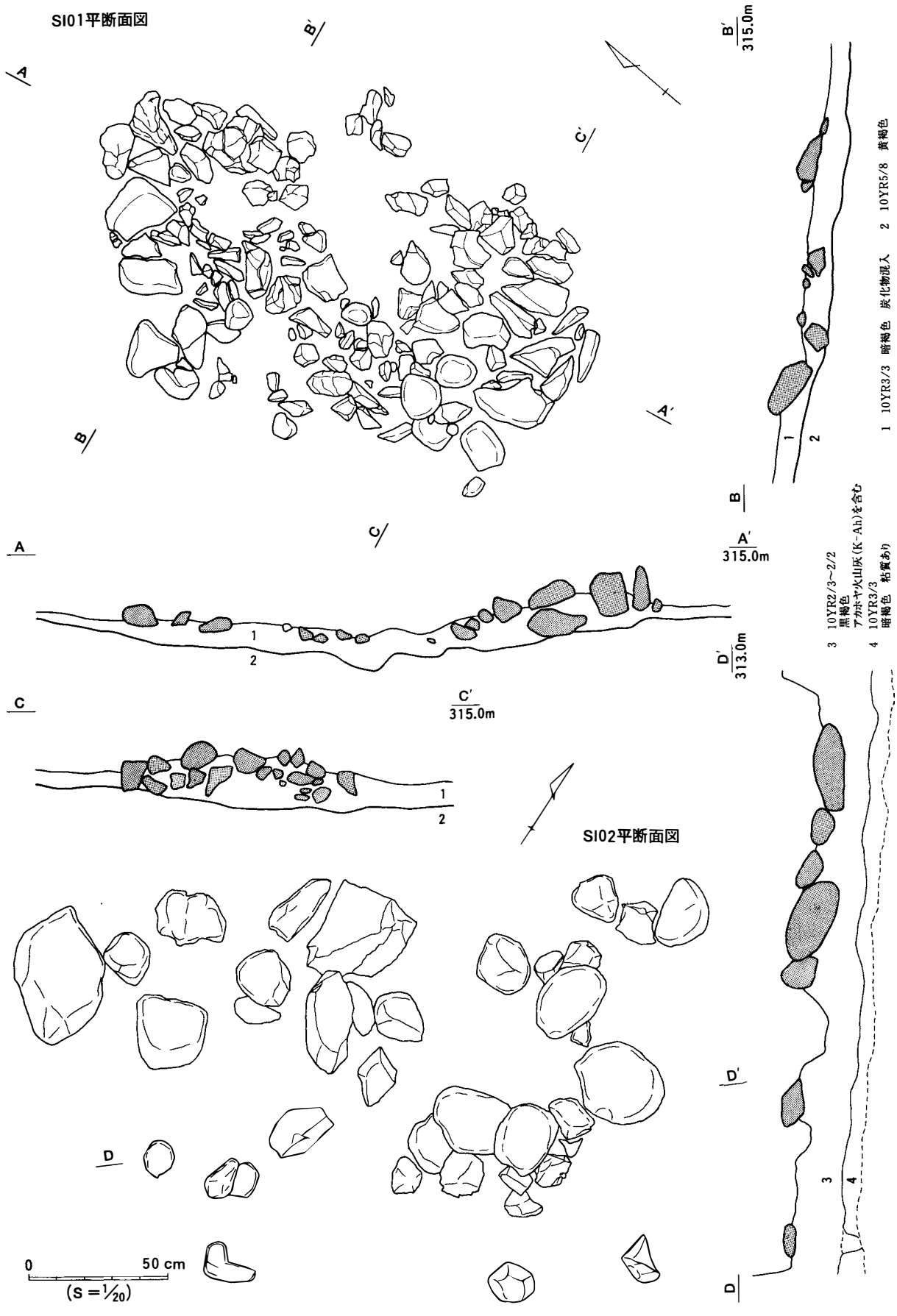
第９トレンチ第Ⅲ層中で検出した。平面的に見て、人頭大の扁平な川原石が人為的に集めてあるように見えたことから、集石遺構と判断し掲載することにした。平面観察の後に半割したが下部に礫が敷き詰められている様子はなく、検出面で確認した状況のままである。遺物の出土はなく詳細は不明であるが、ＳＩ01と同様な理由から縄文時代早期の所産である可能性がある。

第３節　遺物

本地点から出土した遺物は縄文土器12点、石器40点、その他１点の計53点である。遺物は第３・４・６・７・９・10トレンチから出土している。出土したトレンチ・グリッド・層位等は第二分冊第178図の通りである。出土した遺物を縄文土器・石器・その他に分類し、それぞれの説明を以下に記す。

１．縄文土器〈第186図３～９　図版59〉

全部で12点出土したもののうち、７点を図示した。３～６は同一個体である。５点出土している。砲弾型をした深鉢の口縁部の破片で、まず口縁部外側に左上から右下へと斜めの刻みを入れ、その後、刻みを入れた下に横位のややくずれた山形の押型文を施している。山形文があまり波打っておらず、一見平行線状にも見える。原体は４列の構成と考えられる。胎土には細砂が含まれていない。焼成は良好である。内面にミガキの痕跡があり、器壁は約７㎜ほどである。縄文時代早期の押型文土器である。東大阪市の神並遺跡出土の類例がある。７～９は摩滅が激しく、詳細は不明である。図化していない他の土器も同様である。器壁は薄いが、繊維痕が確認できる部分もあり、β層～第Ⅲ層から出土していることも加味して考えると、早期のものである可能性が高い。



第185図　SI01・SI02実測図

２．石器

第５地点からは合計40点の石器が出土した。以下、器種ごとに説明を加えることにする。

１．石鏃（１）

１点出土。石材はチャートを使用。１は鋭角な先端部をもち、脚部にあたる部分は外反し、抉りが入る。

２．打製石斧（２）

砂岩製のものが１点出土した。２は両側縁が基部に向かって収束し、刃部は一部折損するものの刃部が最大幅を有するものである。表面右側に打点をもつ横長剥片を使用している。打点付近のバルブの厚みを減じるために大きく剥離を施しているが、結果的に分銅形のような抉り込みにはならず、直線状の側縁を呈している。

３．剥片類

34点出土した。石材の内訳は、チャートが31点、泥岩が３点であった。

４．調整剥離を施された剥片（ＲＦ）

掻器的な刃部を２カ所有するものが１点、ラウンドスクレイパー的な刃部を有するものが１点の合計２点が出土した。

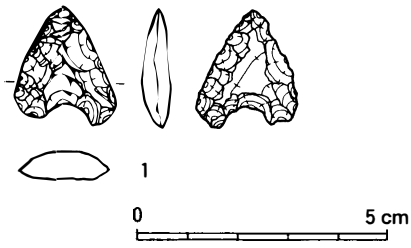
５．微細な剥離痕を有する剥片（ＵＦ）

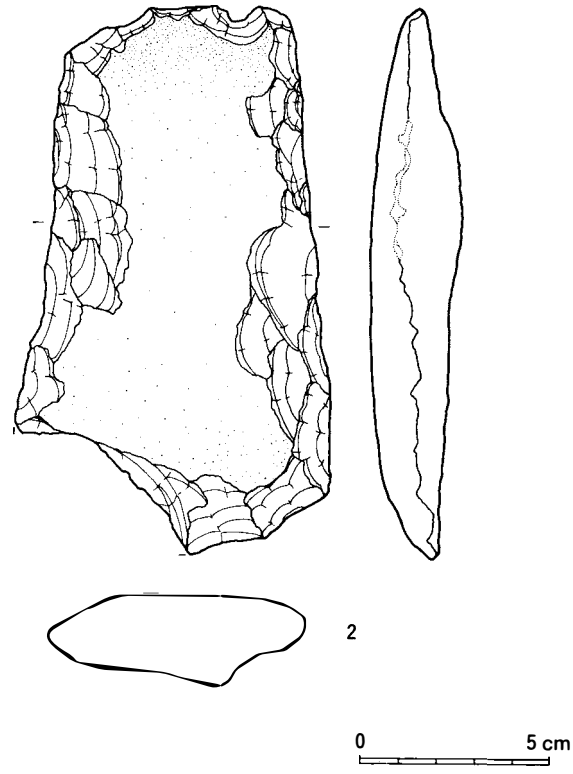
側縁部に緩い角度による直線状の剥離痕を有するものが１点と、同じく側縁部に緩い角度による不定形な剥離痕を有するものが１点の合計２点が出土した。

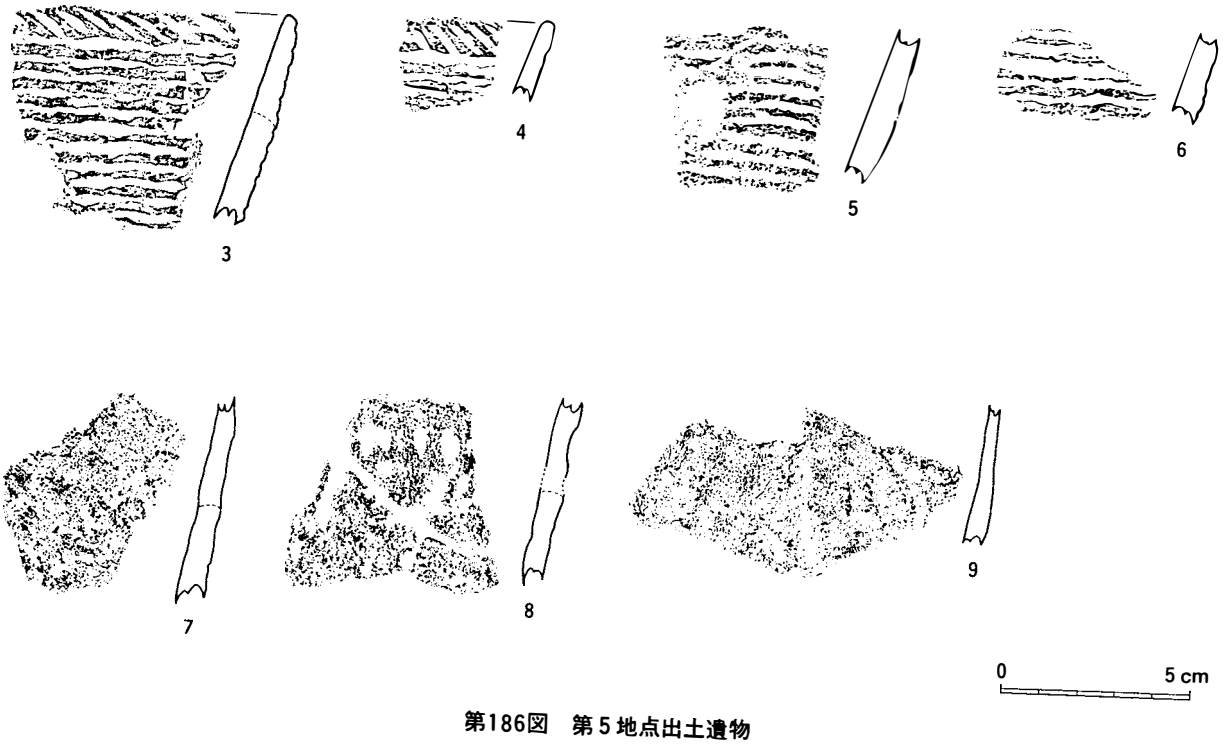
その他

第８トレンチの排土より近世陶器が１点出土している。小片故に図化せずに、出土したことのみを記載するに留めた。

以上の出土した遺物についてまとめてみると、第Ⅰ層およびα・βからの出土は打製石斧と土器小片である。アカホヤ火山灰（Ｋ-Ａｈ）を含む黒褐色土（β）からも土器小片２点と剥片１点が出土しているが、その状況を明確に示すものではない。一方、第３・４・７・９トレンチ第Ⅲ層暗褐色土中からは、土器・石鏃・剥片が出土している。特に第３トレンチからは縄文時代早期の押型文土器５点とともに石鏃１点・剥片４点が、第４トレンチでも剥片類21点が出土したことは注目に値する。第３・４トレンチの位置は本地点中央部で、第３地点東谷の下にあたり、水利に都合がよく、生活を営むのに適した場所であったとも考えられる。







第186図　第5地点出土遺物

第　6　地　点

第７章　第６地点

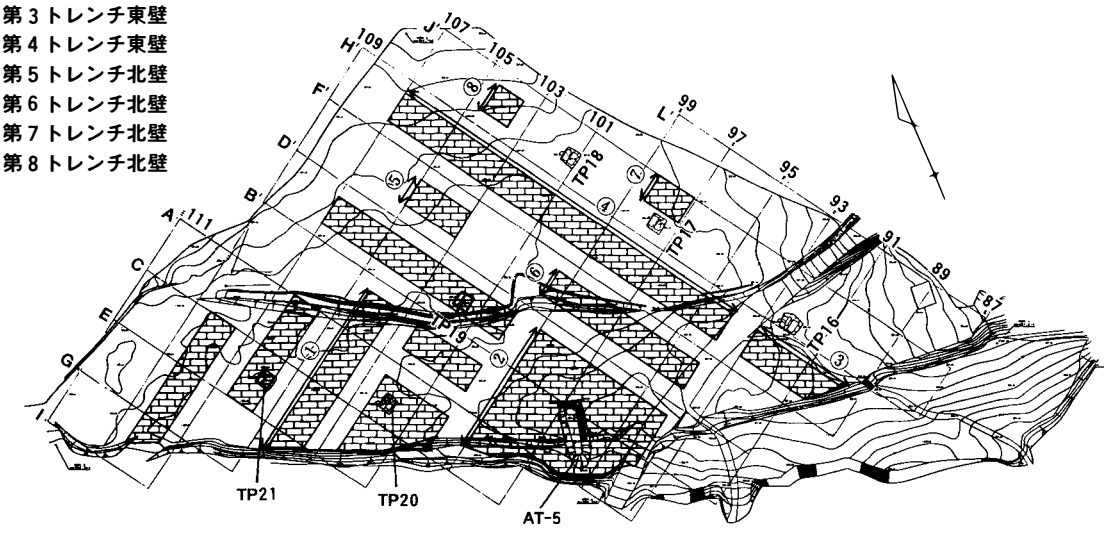
第６地点は上原遺跡が存在する段丘上では最も低い位置にある。第１地点の北側にあたり、中位段丘の縁から見渡すと、上流部の一段低い位置に東西に長く広がっている。第１地点のある中位段丘との表土面の比高差は約２ｍであるが、現地に立つとそれ以上に低く感じられる。後世の石組みや生い茂った樹木等により表土面を正確に復原することは困難であったが、伐採により明らかになった地形は全体的に平坦なものであった。上原遺跡のある段丘はどれも比較的平坦な地形であるが、本地点もその例外ではない。南北方向の地形を見ると、ほぼ平坦でありながら中央部が若干小高くなっている。表土の標高は308m前後である。一方の東西方向も変わらず平坦で中央部が少し高くなっている。後世の土盛りと考えられる部分を除けば、一様に平坦な地形であるといえる。

本地点は当初、遺跡とは認知されていなかった。一段低い立地条件や地表面での遺物採集ができなかったためである。平成４年度に水資源開発公団が上原遺跡の段丘上で地質確認のためのトレンチ調査を行った。中位段丘上の第２地点山側と高位段丘上の第３地点と本地点である。遺跡の有無の確認するため立ち会ったところ、本地点にあけたトレンチＡＴ－５の排土より遺物が出土した。出土した遺物はかなり摩滅した土器片と剥片石器であったが、遺跡である可能性が浮上してきた。翌平成５年度には遺跡の正確な範囲と土層の様子を把握するために、２ｍ四方のテストピット（以下ＴＰ）を６カ所あけた。その内のＴＰ20第II層より縄文土器小片２点、金属片１点が出土した。その結果、遺跡である可能性が高まり、本調査を行うこととなった。

第１節　層序

本地点のＡＴ－５の層序とＴＰ20の層序、そして本調査で確認した基本的な層序を模式化したものを第189図に掲載した。それぞれの層序を見比べてみると、若干の違いはあるものの基本的な部分では矛盾しない。また上原遺跡全体を貫く基本層序（第Ｉ層表土・第II層黒褐色土・第III層暗褐色土・第Ⅳ

① 第１トレンチ北壁
② 第２トレンチ北壁
③ 第３トレンチ東壁
④ 第４トレンチ東壁
⑤ 第５トレンチ北壁
⑥ 第６トレンチ北壁
⑦ 第７トレンチ北壁
⑧ 第８トレンチ北壁



第187図　第6地点トレンチおよびテスピット配置図

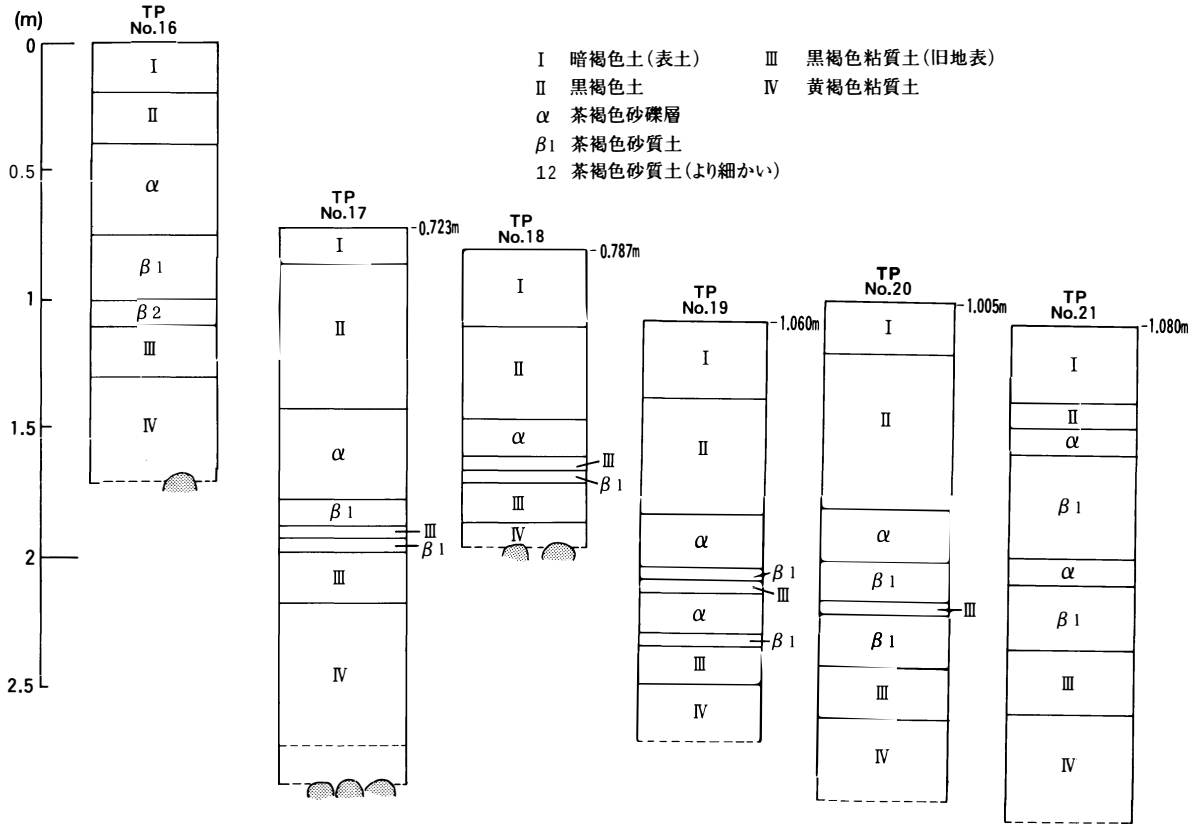
0　20m
（S＝1/1000）

層黄褐色土）にも通じている。本調査で確認した層序の模式図を元に本地点の堆積状況を考えてみる。

最下層部に堆積している黄褐色粘質土は段丘形成に伴うものである可能性が高い。ＴＰ16～ＴＰ21の土層における標高を比較すると、ＴＰ16の第Ⅳ層最上部がＴＰ21の第Ⅱ層直上に相当する（第188図参照）。多少の凹凸はあるが、基本的には東から西にかけて緩やかに傾斜していく地形であったと考えられる。なお、掘削時には大量の水がわき出し、調査の妨げとなった。

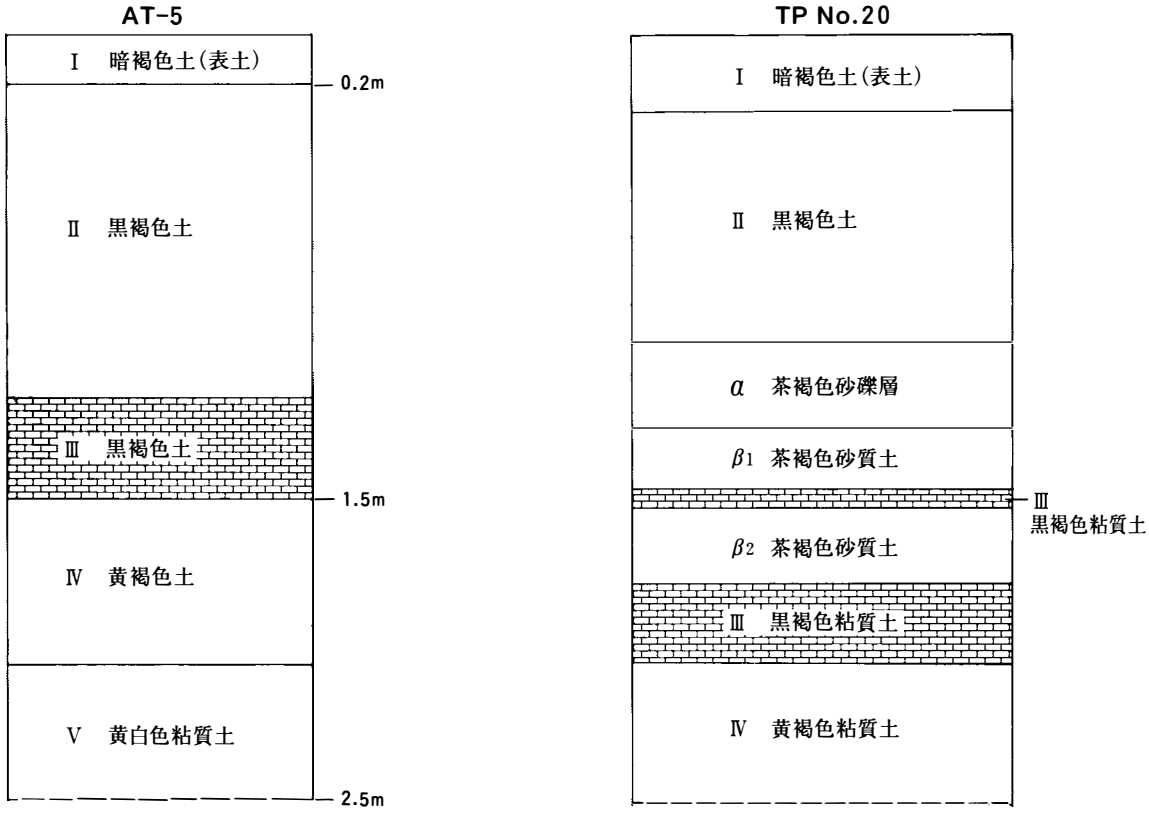
第Ⅳ層の上方には黒褐色土の第Ⅲ層が見られる。この黒褐色土が堆積している層は土壌化を受けた旧地表と考えられ、本地点が安定した状態であったことを示している。本地点内に遺物が包含されているとしたら、この層である可能性が高い。実際にＴＰ20の第Ⅲ層からは縄文時代早期と考えられる摩滅した土器片が出土している。やや離れて西側で掘削したＴＰ21の第Ⅲ層中より採取した炭化物の放射性炭素年代測定結果は、^{14}Ｃ年代値で7,640＋100ｙｒＢＰであった。この年代は縄文時代早期に該当し、ＴＰ20で出土した縄文土器の推定年代値とも矛盾しない。

その上層にあるβ層は砂礫層である。土色は茶褐～黄褐色で、小型の礫を多く含んでいる。洪水によって堆積した層と考えられる。本地点は前述のように他地点に比べ一段低いだけでなく、遺跡内最上流部に位置する。現地形では揖斐川本流は本地点に沿うように蛇行しており、最も河川の影響を受けやすい。β層はそうした立地条件下で見舞われた洪水によって、形成された可能性がある。

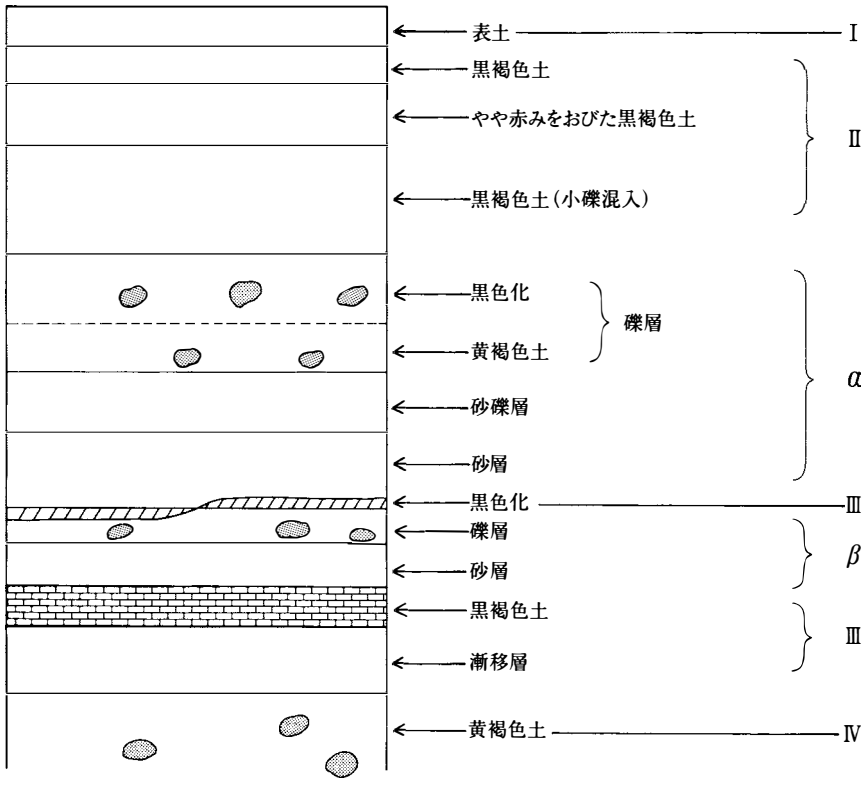


※TPNo.16の表土面を0として各TPのレベル差を考慮し、模式化して並べた

第188図　第6地点テスピット土層模式図



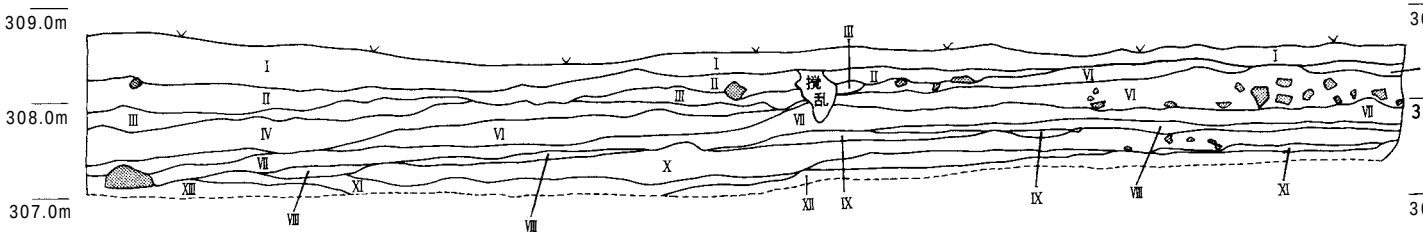
本調査で確認した土層模式図



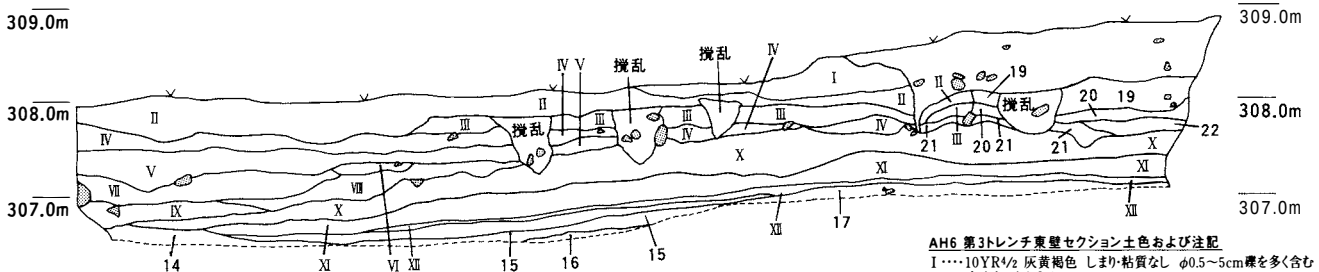
第189図　第6地点土層模式図

第190図 第6地点 第1・2・3トレンチ土層図

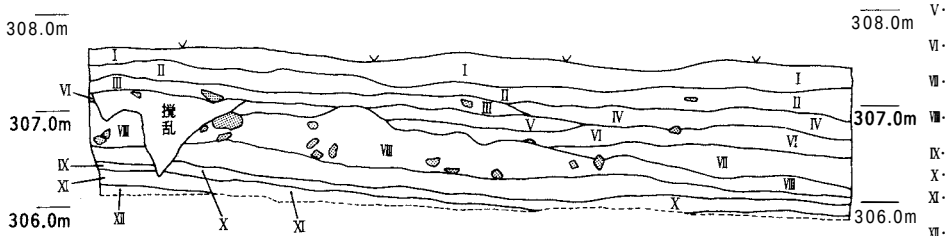
第1トレンチ北壁



第2トレンチ北壁



第3トレンチ東壁



AH6 第1トレンチ北壁セクション土色および注記

Ⅰ…7.5YR4/1 褐灰色 しまり・粘質なし φ0.3～4cmの礫を若干 含む 草根多く含む
Ⅱ…10YR 3/1 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ0.5～15cmの円礫を若干含む 草根多い
Ⅲ…7.5YR3/1 黒褐色 しまり・粘質なし φ0.3～10cmの礫を若干含む 草根多い
Ⅳ…10YR2/1 黒色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ0.5～15cmの礫がやや多い 円礫・亜円礫
Ⅴ…7.5YR3/1 黒褐色 しまり・粘質弱い φ5～7cmの礫を含む
Ⅵ…10YR5/4 にぶい黄褐色～10YR2/2黒褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫
Ⅶ…10YR5/4 にぶい黄褐色～10YR3/2黒褐色 しまりややあり～なし 粘質なし 砂礫層
Ⅷ…10YR4/3 にぶい黄褐色 砂層 しまり弱い 粘質なし φ0.5～1cmの礫をやや多い
Ⅷ…10YR4/3 にぶい黄褐色 砂層 しまり弱い 粘質なし φ0.5～1cmの礫をやや多い
Ⅸ…10YR 4/2 灰黄褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～10cmの礫がやや多い
Ⅹ…10YR 4/4 褐色 しまり・粘質なし φ0.1～10cm円礫・角礫が多い 砂礫層
Ⅺ…10YR4/6 褐色 しまり・粘質なし 礫をほとんど含まず 砂礫
Ⅻ…7.5YR2/2 黒褐色 しまり・粘質ややあり φ20cmほどの礫を少量含む 東部で黒色化
ⅩⅢ…7.5YR2/1 黒色 しまり・粘質ややあり φ1cm前後の風化した礫をやや多く含む

AH6 第2トレンチ北壁セクション土色および注記

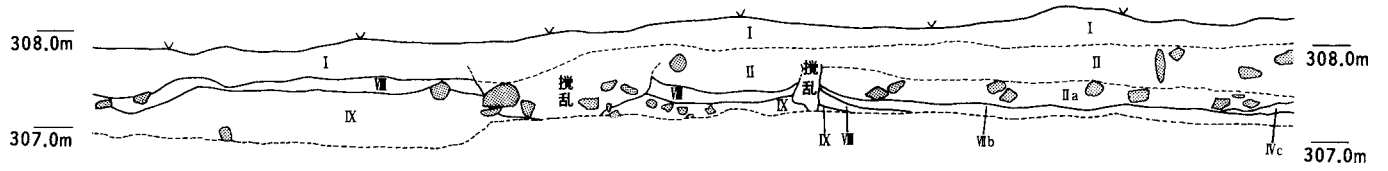
Ⅰ…10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘質なし φ0.5～5cm礫を多く含む 表土もしくは盛土
Ⅱ…7.5YR4/1 褐灰色～7.5YR3/1黒褐色 しまり・粘質なし～弱い φ0.3～7cmの礫を含む
Ⅲ…10YR3/2 黒褐色 しまり弱い 粘質なし φ0.5～3cmの礫を若干含む 木根が多い
Ⅳ…10YR3/1 黒褐色 しまり弱い 粘質なし φ0.5～3cmの円礫を若干含む 木根を少量含む
Ⅴ…7.5YR3/1 黒褐色 しまり・粘質弱い φ0.5～7cmの礫を西部で多く含む
Ⅵ…7.5YR2/1 黒色～7.5YR3/1黒褐色 しまりややあり 粘質弱い φ0.3～6cmの礫を多く含む
Ⅶ…10YR2/1 黒色 しまりややあり 粘質弱い φ0.3～20cmの礫を多く含む 風化細粒も含む
Ⅷ…10YR2/2 黒褐色 しまり・粘質弱い φ0.5～20cmの礫をやや多く含む
Ⅸ…7.5YR2/1 黒色 しまり・粘質ややあり φ0.3～20cmの礫をやや多く含む やや砂質
Ⅹ…10YR 5/4 にぶい黄褐色～10YR 2/2黒褐色 しまり・粘質なし φ0.5～15cmの礫が多い
Ⅺ…10YR5/4 にぶい黄褐色 しまりややあり～弱い 粘質なし φ0.1～0.5cmの砂礫層
Ⅻ…10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり弱い 粘質なし 礫を含まず
ⅩⅢ…7.5YR3/2 黒褐色 しまり弱い 粘質なし やや砂質
14…7.5YR2/1 黒色 しまり・粘質ややあり φ0.5～4cmの礫をやや多く含む 風化礫混入
15…7.5YR2/2 黒褐色 しまりややあり～弱い 粘質ややあり 礫は少ない
16…10YR 4/2 灰黄褐色 しまりややあり～弱い 粘質ややあり 礫は少ない
17…10YR 4/4 褐色 しまり・粘質なし φ0.1～10cmの礫が多い 砂礫層
18…7.5YR2/1 黒色 しまりあり 粘質なし φ1～12cmの礫を多く含む 黄褐色土混入
19…10YR 3/1 黒褐色 しまり・粘質ややあり φ0.5～13cmの礫をやや多く含む 黄褐色土混入
20…10YR 2/2 黒色 しまりややあり 粘質弱い φ0.5～4cmの礫を若干含む 風化礫混入
21…7.5YR3/1 黒褐色 しまり・粘質なし φ0.3～4cmの礫を多く含む
22…10YR 3/1 黒褐色 しまり弱い 粘質なし φ0.5～9cmの礫をやや多く含む 大角礫あり

AH6 第3トレンチ東壁セクション土色および注記

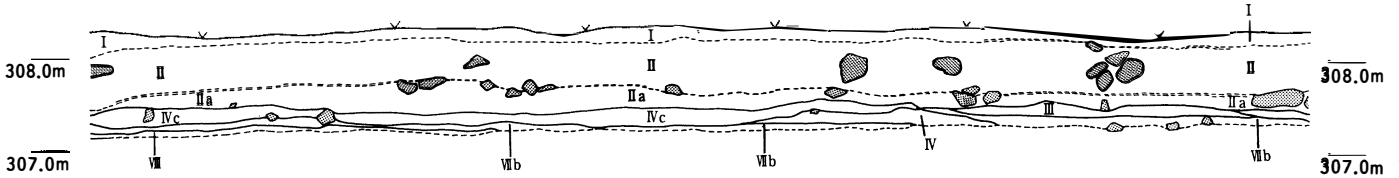
Ⅰ…10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘質なし φ0.5～5cm礫を多く含む 表土もしくは盛土
Ⅱ…7.5YR4/1 褐灰色～7.5YR3/1黒褐色 しまり・粘質なし φ0.5～5cmの礫を含む 炭化物
Ⅲ…10YR3/1 黒褐色 しまり・粘質なし φ0.3～6cmの礫をやや多く含む 円礫が多い
Ⅳ…10YR3/2 黒褐色 しまり弱い 粘質なし φ0.5～3cmの礫を若干含む 木根が多い
Ⅴ…10YR3/1 黒褐色 しまりややあり 粘質なし φ0.5～7cmの礫をやや多く含む Ⅲに近い
Ⅵ…7.5YR3/1 黒褐色 しまり弱い 粘質なし φ0.5～5cmの礫をやや多く含む
Ⅶ…10YR2/2 黒褐色 しまり・粘質弱い φ0.5～20cmの礫をやや多く含む
Ⅷ…10YR5/4 にぶい黄褐色～10YR3/1黒灰色 しまり・粘質なし φ0.5～15cmの礫が多い
Ⅸ…10YR4/6 褐色 しまり・粘質なし 礫をほとんど含まず 砂層
Ⅹ…10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり弱い 粘質なし 礫を含まず
Ⅺ…7.5YR2/2 黒褐色 しまりややあり～弱い 粘質ややあり 礫は少ない
Ⅻ…10YR4/2 灰黄褐色 しまりややあり～弱い 粘質ややあり 礫は少ない

0 2m
(S=1/80)

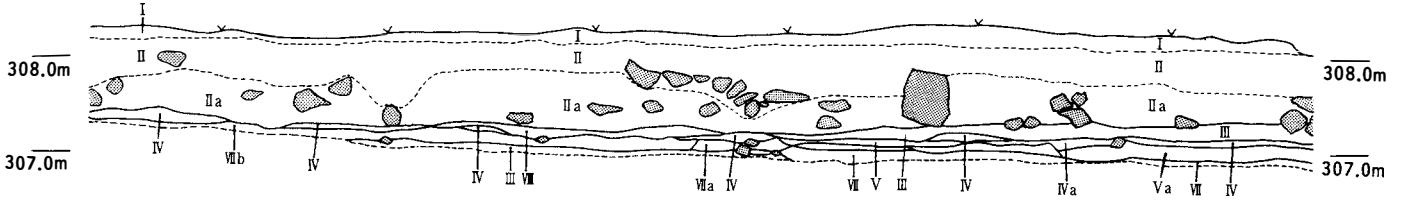
第4トレンチ東壁(1)



第4トレンチ東壁(2)



第4トレンチ東壁(3)



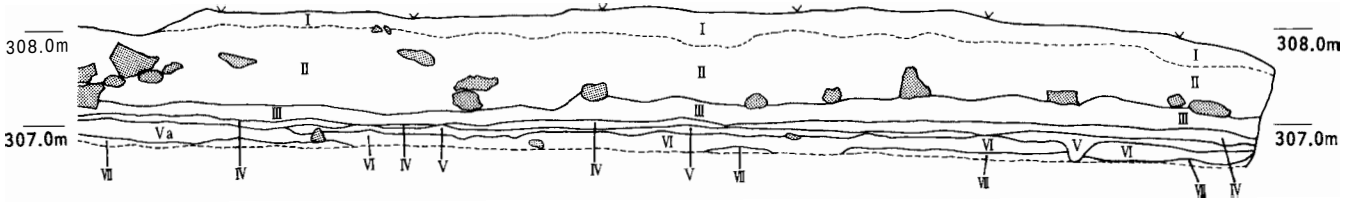
AH6 第4トレンチ東壁セクション土色および注記

Ⅰ……10YR²/₂ 黒褐色～10YR⁴/₂ 灰黄褐色　表土
Ⅱ……10YR²/₂ 黒褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫
Ⅱa…10YR⁵/₄ にぶい黄褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫
Ⅲ……10YR⁵/₄ にぶい黄褐色～10YR³/₂ 黒褐色 しまりやや有り～なし　粘質なし　砂礫層
Ⅳ……10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまり弱い 粘質なし 礫を含まず
Ⅳa…7.5YR³/₁ 黒褐色 しまりやや有り 粘質なし φ14cmほどの礫を多く含む
Ⅳb…10YR⁴/₂ 灰黄褐色 しまりやや有り 粘質弱い 砂礫層部分的に介在する
Ⅳc…10YR⁴/₃ 褐色～10YR⁴/₂ 灰黄褐色 しまり・粘質弱い 砂礫質 φ0.5～1cmの礫を多く含む
Ⅴ……10YR²/₃ 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～7cmの礫がやや多い
Ⅴa…10YR³/₃ 暗褐色～10YR⁴/₂ 灰黄褐色 しまりあり 粘質なし φ0.3～7cmの礫を多く含む
Ⅵ……10YR⁴/₂ 灰黄褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～10cmの礫がやや多い
Ⅶ……7.5YR²/₂ 黒褐色 しまり・粘質ややあり φ20cmほどの礫を少量含む
Ⅶa…10YR³/₁ 黒褐色 しまり弱い 粘質ややあり φ0.5～15cmの礫をやや多く含む
Ⅶb…10YR³/₁ 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い φ0.5～15cmの礫を若干含む 角礫が多い 砂礫層
Ⅷ……10YR⁴/₂ 灰黄褐色～10YR³/₂ 黒褐色 しまり弱い 粘質ややあり φ0.5～2cmの礫を含む
Ⅸ……10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまりやや有り 粘質弱い φ3～40cmの円礫をやや多く含む

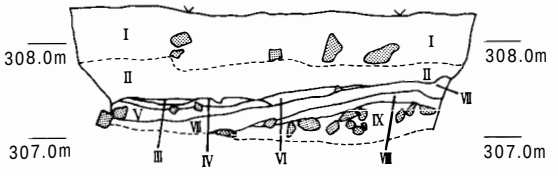
0　2 m
(S＝1/80)

第191図　第6地点 第4トレンチ土層図

第4トレンチ東壁(4)



第5トレンチ北壁



AH6 第5トレンチ北壁セクション土色および注記

Ⅰ…10YR²/₂ 黒褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫

Ⅱ…10YR⁵/₄ にぶい黄褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫

Ⅲ…10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまり弱い 粘質なし 礫を含まず

Ⅳ…10YR²/₃ 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～10cmの礫がやや多い

Ⅴ…10YR⁴/₂ 灰黄褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～10cmの礫がやや多い

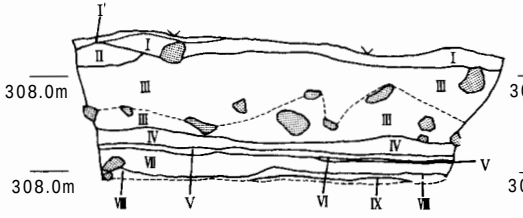
Ⅵ…10YR⁴/₃ 褐色～10YR⁴/₂灰黄褐色 しまり・粘質弱い 砂礫質 φ0.5～1cmの礫を多く含む

Ⅶ…10YR³/₁ 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い φ0.5～15cmの礫を若干含む 角礫が多い 砂礫質

Ⅷ…10YR⁴/₂ 灰黄褐色～10YR³/₂ 黒褐色 しまり弱い 粘質ややあり φ0.5～2cmの礫を含む

Ⅸ…10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまりややあり 粘質弱い φ3～40cmの円礫をやや多く含む

第6トレンチ北壁



AH6 第6トレンチ北壁セクション土色および注記

Ⅰ…7.5YR⁴/₁ 褐灰色～7.5YR⁴/₂ 黒褐色 しまり・粘質なし～弱い φ0.3～7cmの礫を含む

Ⅰ′…7.5YR²/₁ 黒色 しまりあり 粘質なし φ1～12cmの礫を多く含む 黄褐色土混入盛土

Ⅱ…10YR⁴/₂ 灰黄褐色 しまり・粘質なし φ0.5～5cmの礫を多く含む

Ⅲ…10YR⁵/₄ にぶい黄褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫

Ⅳ…10YR⁵/₄ にぶい黄褐色 しまりややあり～弱い 粘質なし 礫層 φ0.1～0.5cmの砂礫層

Ⅴ…10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまり弱い 粘質なし 礫を含まず

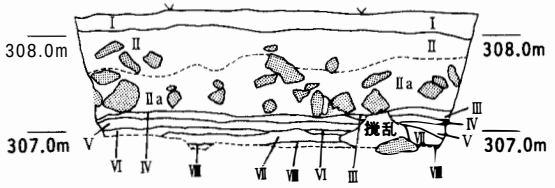
Ⅵ…10YR²/₃ 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～10cmの礫がやや多い

Ⅶ…10YR⁴/₄ 褐色 しまり・粘質なし φ0.1～10cmの礫が多い 砂礫層

Ⅷ…10YR⁴/₆ 褐色 しまり・粘質なし 礫をほとんど含まず 砂層

Ⅸ…7.5YR²/₂ 黒褐色 しまりややあり～弱い 粘質ややあり 礫は少ない

第7トレンチ北壁



AH6 第7トレンチ北壁セクション土色および注記

Ⅰ…10YR²/₂ 黒褐色～10YR⁴/₂ 灰黄褐色 表土

Ⅱ…10YR²/₂ 黒褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫

Ⅱa…10YR⁵/₄ にぶい黄褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫

Ⅲ…10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまり弱い 粘質なし 礫を含まず

Ⅳ…10YR²/₃ 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～10cmの礫がやや多い

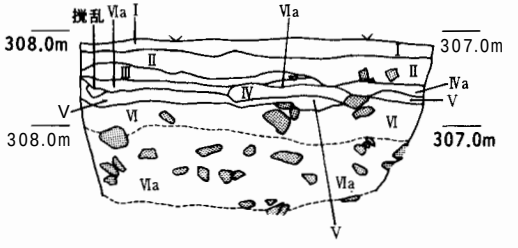
Ⅴ…10YR⁴/₂ 灰黄褐色 しまり弱い 粘質弱い～なし φ5～10cmの礫がやや多い

Ⅵ…10YR⁴/₆ 褐色 しまり・粘質なし 礫をほとんど含まず 砂層

Ⅶ…7.5YR²/₂ 黒褐色 しまり・粘質ややあり φ20cmほどの礫を少量含む

Ⅷ…10YR⁴/₂ 灰黄褐色～10YR³/₂ 黒褐色 しまり弱い 粘質ややあり φ0.5～2cmの礫を含む

第8トレンチ北壁



AH6 第8トレンチ北壁セクション土色および注記

Ⅰ…10YR²/₂ 黒褐色～10YR⁴/₂ 灰黄褐色 表土

Ⅱ…10YR²/₂ 黒褐色 しまり・粘質なし 礫層 φ3～20cmの円礫・角礫

Ⅲ…7.5YR³/₁ 黒褐色 しまりややあり 粘質なし φ0.2～4cmの礫をやや多く含む

Ⅳ…10YR³/₁ 黒褐色 しまり弱い 粘質弱い φ0.5～15cmの礫を若干含む 角礫が多い 砂礫質

Ⅳa…10YR³/₁ 黒褐色 しまり・粘質弱い φ0.3～2cmの礫を若干含む

Ⅴ…10YR⁴/₂ 灰黄褐色～10YR³/₂ 黒褐色 しまり弱い 粘質やや あり φ0.5～2cmの礫を含む

Ⅵ…10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまりややあり 粘質弱い φ3～40cmの円礫をやや多く含む

Ⅵa…10YR⁴/₃ にぶい黄褐色 しまりややあり 粘質なし φ3～40cmの円礫を多く含む 砂質

0　2 m
(S＝1/80)

β層が形成された後、しばらく安定した状況下にあったと思われる。その時期に堆積したのがα層に挟まれるようにして存在する黒褐色土である。堆積状況はかなり薄く時間的にはわずかであったと思われる。下部に堆積する第Ⅲ層に該当する。その上層のα層は黄褐色砂礫層で比較的大きな礫を含んでいる。上部はやや土壌化した様子がうかがえるが、短期間に厚く堆積したように見える。考えられる堆積の要因は二つあり、一つはβ層同様に揖斐川の氾濫による洪水である。もう一つは対岸にある小さな谷からの崖錐である。現在の情報量ではそのどちらが要因であるかは判断しがたいが、いずれにしても自然災害による堆積であろうと考えられる。

第Ⅱ層は黒褐色土で第Ⅲ層同様に安定した時期であったことを示している。上部はやや赤みを帯びている部分もある。下部は礫混じりである。本地点内の東部ではほとんど確認することができなかった。遺物の出土もなく、生活拠点であった可能性は低い。第Ⅰ層は表土である。

堆積状況の分析から、本地点は最低でも二度にわたる大規模な自然災害に見舞われていることがわかった。幾度か安定した状況下にあったようではあるが、その期間は決して長くはなくわずかであったと思われる。それに比べ隣接する中位段丘はかなり長い間安定した時期がある。そうした点から考えると、本地点を生活の場としていた可能性は低い。無理に当てはめようとするよりはむしろ生産活動の場であったとする方が妥当であるかもしれない。

第2トレンチ掘削時の作業風景

第2節　遺物

本地点では数カ所のトレンチ調査を行い合計1,190㎡を掘削したが、遺物が出土したのは第1トレンチと第2トレンチが主であった（図187参照）。その他のテストピットからも若干の出土はあったようであるが、本地点中央部を東西に貫いている石垣より北側（上流部）では全く出土していない。第1・2トレンチ内でもその出土箇所は南側（下流側）の第1地点に近い辺りである。特に第2トレンチは本調査前に遺物が確認されている箇所の付近であることを踏まえ、慎重に掘削を進めた。その結果、

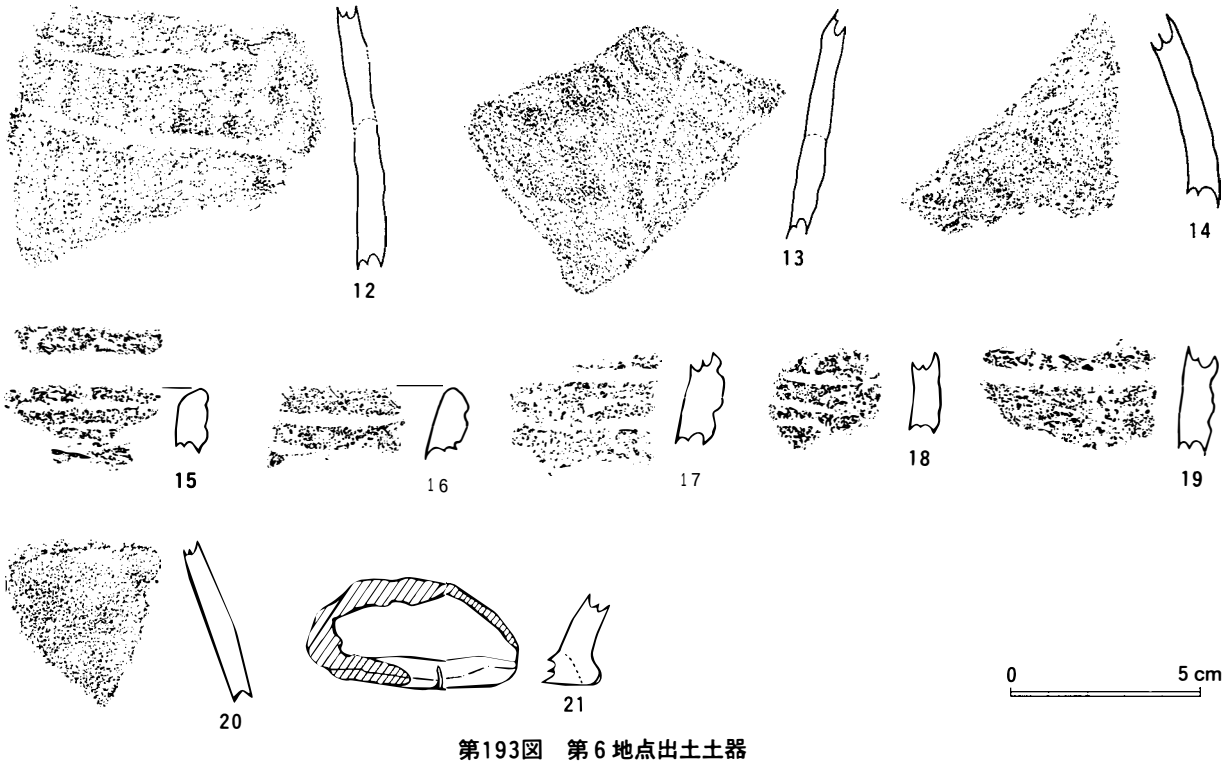
１．縄文土器

土器は出土したもののうち10点を図示した（第193図　図版59）。少量のためあえて分類せず、まとめて説明を加えていく。

12～14は表面の摩滅がかなり進んでおり、その詳細は不明である。器壁は薄く、繊維痕が確認できることから、早期末から前期初頭のいわゆる「オセンベ土器」ではないかとの指摘もある。

15～20も小片である上にかなり摩滅が激しいため、詳細は不明である。胎土その他から中期ではないかとの指摘もある。21は底部片で、その他に同様の破片が見あたらないために詳細を報告することは困難であるが、端部が張り出し、かすかな刻みが見られることから、第１地点で多く出土している前期の底部片である可能性がある。

以上10点について報告したが、どれも遺存状態が悪く、縄文土器であるという以外には時期その他を判別する手がかりを得られないような状況である。しかし本地点においては、これが実状であるためあえて図示し報告することにした。



第193図　第６地点出土土器

２．石器

第６地点からは、67点の石器が出土した。以下、器種ごとに説明を加えることにする。

１．石鏃

チャート製のものが１点出土した。大きく折損するため詳細は不明であるが、基部は丸みを帯びた深い抉りが入るＢ類の形態を呈している。

2．スクレイパー類（7）

削器が1点出土した。泥岩製で、両面調整により1カ所の刃部を作出している。

3．打製石斧（8～11）

26点出土した。そのうち4点を図示した。石材は、泥岩を用いたものが18点、砂岩が5点、安山岩と花こう閃緑斑岩、流紋岩質火砕岩が各1点であった。両側縁が基部に向かって収束し、刃部が最大幅を有する2類が13点出土した。どれも比較的分厚い刃部を有している。その刃部には使用によると思われる激しい磨耗がみられる。これは、第6地点の礫を含む土質に関係するものと思われる。両側縁がほぼ平行し短冊形を呈する1類は6点出土、両側縁に抉りを作出し分銅形を呈する3類は確認できなかった。折損等により分類不能のものは7点であった。背面に自然面を有するものは4点確認できた。刃部付近に磨耗が確認できるものは23点で、折損等により不明の3点を除くと全体の100％となる。また、基部に装着等による潰れが認められるものは19点で、折損等により不明の2点を除くと全体の79％を占める。折損が認められるものは21点で、全体の81％にのぼった。折損部位をみると、刃部を折損するものは2点、基部の一部を折損するものは5点、基部を折損するものは13点、刃部と基部の両方を折損するものは1点であった。

流紋岩質火砕岩製の8と砂岩製の11は、刃部の幅が狭く、根茎類の掘り起こし作業に適すると考えられる。

4．石核・剝片類

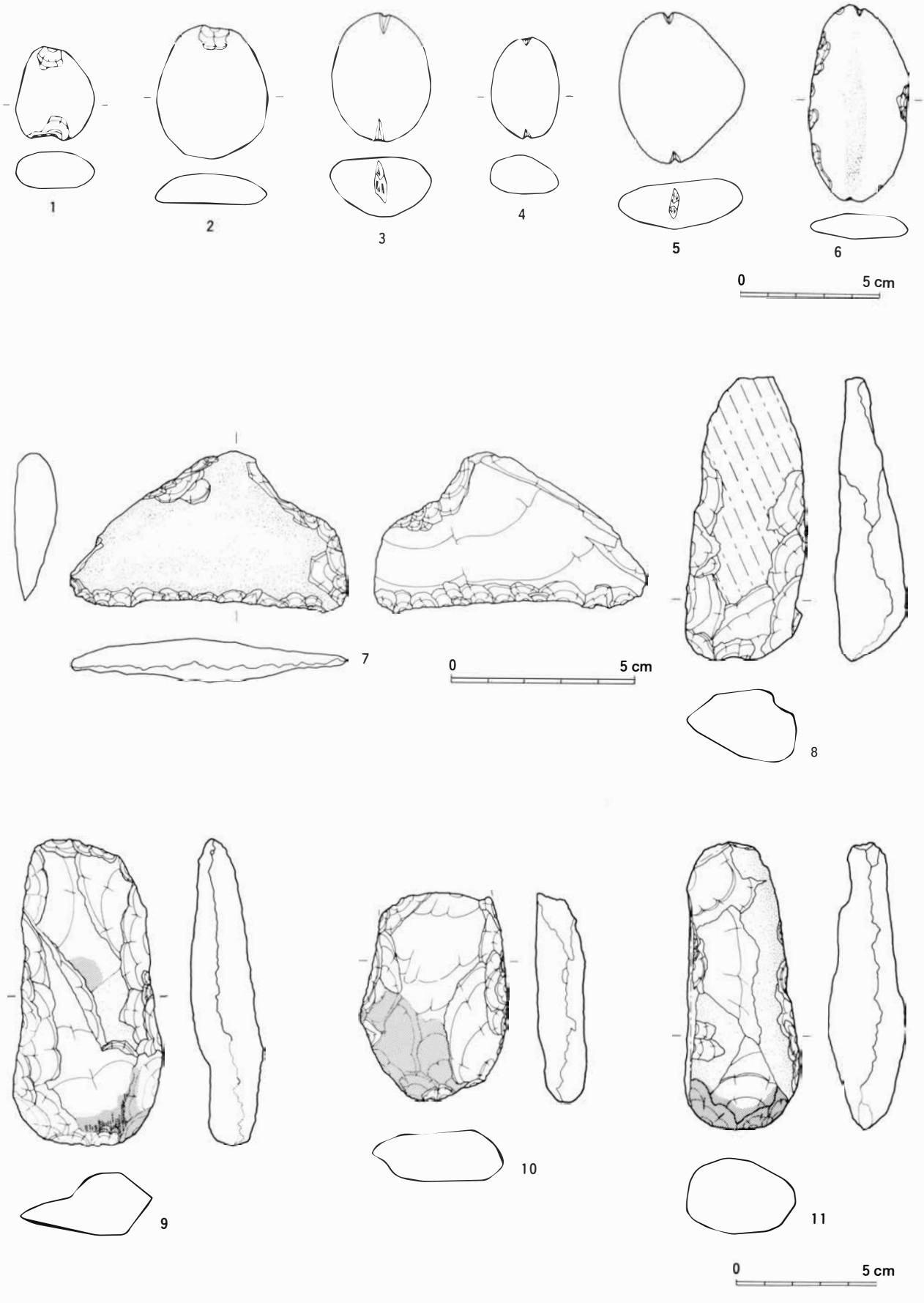
33点出土した。そのうち2点が石核であり、残りは剝片類である。石材は、チャートが21点、泥岩が12点であった。

5．打欠石錘（1・2）

2点出土した。図化の方法は第1地点の打欠石錘と同様である。1は比較的小さく丸い平面形をもつ。片方の機能部は不詳であるが、もう片方の機能部は片面からのみの打撃によって作出されている。石材は砂岩である。2は裏面側のほとんどが欠損しており、機能部その他詳細は不明である。ただ残された表面をみると、片方の機能部となる打欠部分が確認できない。表面からの打撃が裏面側だけに及び、表面には剝離が及ばなかった可能性がある。（堀田一浩）

6．切目石錘（3～6）

4点出土した。3の平面形は楕円形を呈しているが、断面は蒲鉾形である。一方の面がほぼ平らであるのに対して、他方の面は半円形を呈する。切目は比較的長くていねいに施工されている。第1分類の1Ｂ3に属する。4は小さいが均整のとれた形をしている。断面は楔形を呈する。切目は比較的浅く、簡単な作りである。砂岩製である。5はしっかりとした切目が作出されている。第1分類でいう1Ｂ3に属する。6は第1分類の2類に属する。全体に磨滅しており、帯状痕跡が確認できる。切目は垂直方向からわずかに施されており、かなり浅い。（堀田一浩）



第194図　石器実測図　打欠石錘・切目石錘・削器・打製石斧

第8章　自然化学分析

第1節　上原遺跡第1・3地点出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の原材産地分析

藁科　哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行っている[1,2,3]。サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析を行った遺物は岐阜県徳山村上原遺跡第1地点出土の縄文時代前期後葉（北白川下層式土器）～末葉（十三菩提式土器）と共伴する黒曜石製剥片15個、サヌカイト剥片14個、下呂石製剥片2個および第3地点出土の時期不詳の黒曜石製剥片5個の合計36個について産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト、黒曜石原石の分析

サヌカイト、黒曜石両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトではK/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srを、また黒曜石ではCa/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrをそれぞれ用いる。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布する。調査を終えた原産地を図195に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら国内産と外国産および原石産地不明の遺物を分類すると表20に示すように123個の原石群に分かれる。黒曜石の原産地は、北陸地方では、富山県の魚津、石川県の比那、福井県の三里山、安島の各原産地が調査されていて、比那、魚津、二上山産黒曜石が石器原材と

して使用されている。中信高原地域の黒曜石産地の中で、霧ケ峰群は、長野県下諏訪町金明水、星ヶ塔、星ヶ台の地点より採取した原石でもって作られた群で、同町観音沢の露頭の原石も、霧ケ峰群に一致する元素組成を示した。和田峠地域原産の原石は、星ヶ塔の西方の山に位置する旧和田峠トンネルを中心にした数百メートルの範囲より採取され、これらを元素組成で分類すると、和田峠第一、第二、第三、第四、第五、第六の各群に分かたれる[4]。和田峠第一、第三群に分類された原石は旧トンネル付近より北側の地点より採取され、和田峠第二群のものは、トンネルの南側の原石に多くみられる。和田峠第四群は男女倉側の新トンネルの入り口、また、和田峠第五、第六群は男女倉側新トンネル入り口左側で、和田峠第一、第三の両群の産地とは逆の方向である。男女倉原産地の原石は男女倉群にまとまり組成は和田峠第五群に似る。鷹山、星糞峠の黒曜石の中に和田峠第一群に属する物が多数みられる。麦草峠群は大石川の上流および麦草峠より採取された原石で作られ、双子池周辺も麦草峠と同じで、斑晶、球果を含む黒曜石から含まない非常に綺麗な黒曜石が採取され、これら原石で双子池群を作った。これら中信高原の原産地は、元素組成で和田峠、霧ケ峰、男女倉、麦草峠、双子池の各地域に区別される。伊豆箱根地方の原産地は笛塚、畑宿、鍛冶屋、上多賀、柏峠西の各地にあり、良質の石材は、畑宿、柏峠西で斑晶の多いやや石質の悪いものは鍛冶屋、上多賀の両原産地でみられる。笛塚産のものはピッチストーン様で、石器原材としては良くないであろう。伊豆諸島の神津島原産地は砂糠崎、長根、長浜、沢尻湾、恩馳島の各地点から黒曜石が採取され、これら原石から神津島第一群、第二群及び長根群の原石群にまとめられ、長根群の元素組成は神津島第二群に似る。浅間山の大窪沢の黒曜石は貝殻状剝離せず石器の原材料としては不適当ではあるが、考古学者の間でしばしば話題に上るため大窪沢群として遺物と比較した。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所の調査を終えている。図196にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材で善通寺市の大麻山南からも産出し、大麻山南第一、二群の２個の原石群を作り五色台産ガラス質安山岩と元素組成で区別が可能なことを明らかにした。これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると45個の原石群に分類でき、その結果を表21に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の６個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池・五色台地区産は五色台群の単群に、大麻山南産は大麻山南第一、二群の２群にそれぞれ分類された。金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表22に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92％および88％と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表23に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約１％であるが金山東群に一致する原石が採取される。表24に示

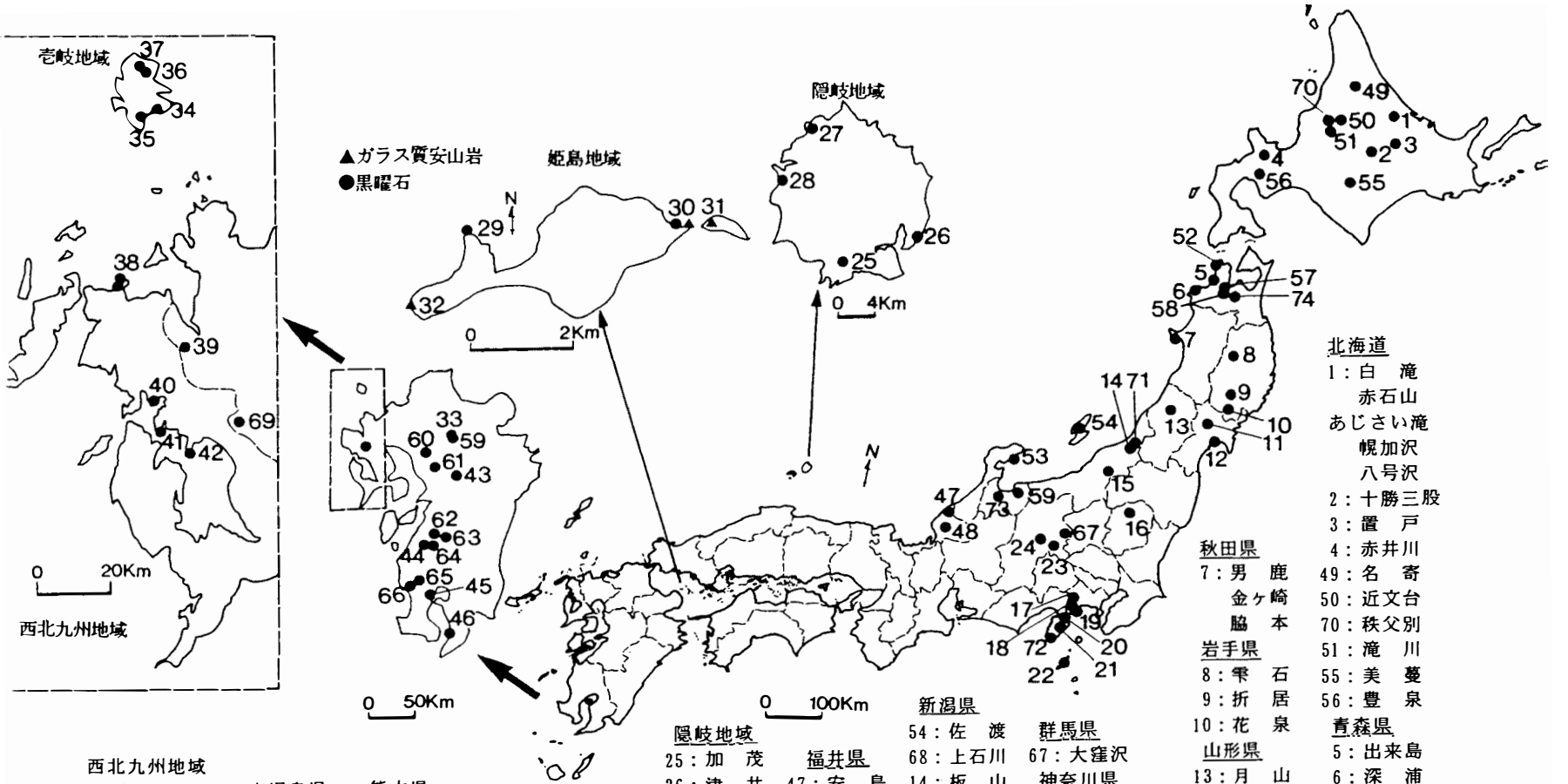
す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表22、23のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から６％の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表23のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行った。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。今回分析した遺物の結果をサヌカイト、黒曜石に分けて表25、26に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためＲｂ/Ｚｒの一変量だけを考えると、表25の試料番号50813番の遺物ではＲｂ/Ｚｒの値は1.063で、霧ケ峰群の［平均値］±［標準偏差値］は、1.076±0.047である。遺物と原石群の差を標準偏差値（σ）を基準にして考えると遺物は原石群から0.3σ離れている。ところで霧ケ峰原産地から原石100ヶを採ってきて分析すると、平均値から±0.3σのずれより大きいものが76ヶある。すなわち、この遺物が、霧ケ峰群の原石から作られていたと仮定しても、0.3σ以上離れる確率は76％であると言える。だから、霧ケ峰群の平均値から0.3σしか離れていないときには、この遺物が霧ケ峰群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を神津島第１群に比較すると、神津島第１群の平均値からの隔たりは、約20σである。これを確率の言葉で表現すると、神津島第１群産の原石を採ってきて分析したとき、平均値から20σ以上離れている確率は、千兆の十万倍分の一であると言える。このように、千兆を十万倍した個数に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、神津島第１群産の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は霧ケ峰群に76％、神津島第１群に千兆の千倍分の一％の確率でそれぞれ帰属される」。各遺物について、この判断を表20のすべての原石群について行い、低い確率で帰属された原石群を消していくと残るのは、霧ケ峰群だけとなり、霧ケ峰産地の石材が使用されていると判定される。実際はＲｂ/Ｚｒといった唯１ヶの変量だけでなく、前述した８ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならならい。例えばＡ原産地のＡ群で、Ｃａ元素とＲｂ元素との間に相関があり、Ｃａの量を計ればＲｂの量は分析しなくても分かるようなときは、Ａ群の石材で作られた遺物であれば、Ａ群と比較したとき、Ｃａ量が一致すれば当然Ｒｂ量も一致するはずである。もしＲｂ量だけが少しずれている場合には、この試料はＡ群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行

うホテリングのT²検定である[5]。産地の同定結果は１個の遺物に対して、黒曜石製では129個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、これら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる、すなわち、霧ケ峰産原石と判定された遺物について、北朝鮮の会寧遺跡で使用された原石と同じ組成の原石とか北海道産の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表27に記入した。原石群を作った原石試料は直径３㎝以上であるが、小さな遺物試料によって原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには、測定時間を長くしなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、１個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。また、検出された元素であっても、含有量の少ない元素では、得られた遺物の測定値には大きな誤差範囲が含まれ、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行ったときに、判定の信頼限界としている0.1％に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離Ｄ２の値を記した。この遺物については、記入されたＤ２の値が原石群の中で最も小さなＤ２値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。今回分析を行った遺物のなかで、１㎝以上の大きな遺物では原石群への同定確率は高く、小さい遺物は低くなっている。

今回分析を行った上原遺跡第２地点出土の縄文時代前期～晩期の黒曜石製剥片20個には信州霧ケ峰産黒曜石が使用されていることが明らかになった。また、サヌカイト剥片１４個の中で二上山産と判定された遺物は奈良県二上山産地以外に和泉・岸和田産地からも６％の確率で採取される。今回二上山産と同定された遺物全てが和泉・岸和田産地から採集される確率は十兆分の一の非常に低い確率となり、本遺跡には和泉・岸和田産地から原石が伝播しなかったと推測され、本遺跡には奈良県二上山産の原石が使用されていると判定した。下呂石と呼ばれている石材と同質の石材は、香川県金山、五色台地域、善通寺市大麻山地域で採取されるガラス質安山岩で肉眼では区別できず、兵庫県の遺跡で出土した下呂石は金山・五色台地域産の原石であった。本遺跡で出土した下呂石は地元原産地の下呂産地の原石が２個使用されいることが明らかになった。また産地が特定できなかった３個のサヌカイト製遺物の中で分析番号50835と50837は元素比組成は流紋岩系に似ることからサヌカイトでない可能性が大きい。これら石器原石の伝播に伴って原石産地地区の生活、文化情報が本遺跡に伝播したと推測すると、本遺跡には、信州霧ケ峰地域、奈良県二上山産地の情報を入手していたと結論しても、産地分析の結果と矛盾しない。



第195図　黒曜石原産地

西北九州地域

佐賀県
39：腰　岳
69：椎葉川

長崎県
38：松　浦
40：淀　姫
41：中町、古里
42：大　崎

鹿児島県
44：出　水
（日　東）
64：五女木
65：上牛鼻
66：平木場
45：竜ケ水
46：長　谷

熊本県
59：小　国
60：南　関
61：　轟
43：冠ケ岳
62：白　浜

宮崎県
63：桑ノ木津留

壱岐地域
34：久喜ノ辻
35：君ケ浦
36：角　川
37：貝　畑

大分県
13：塚　瀬

隠岐地域
25：加　茂
26：津　井
27：久　見
28：福　浦

姫島地域
29：観音崎
30：両　瀬
31：稲　積
32：オイ崎

福井県
47：安　島
48：三里山

長野県
23：麦草峠
　双子池
24：霧ケ峰
　男女倉
　和田峠

新潟県
54：佐　渡
68：上石川
14：板　山
15：大白川
71：金　津

富山県
59：魚　津
73：二上山

石川県
53：比　那

群馬県
67：大窪沢

神奈川県
17：箱根・笛塚
18：〃・畑宿
19：鍛冶屋

静岡県
20：上多賀
21：柏峠西
72：小豆峠

秋田県
7：男　鹿
　金ヶ崎
　脇　本

岩手県
8：雫　石
9：折　居
10：花　泉

山形県
13：月　山

宮城県
11：湯　倉
12：塩　釜

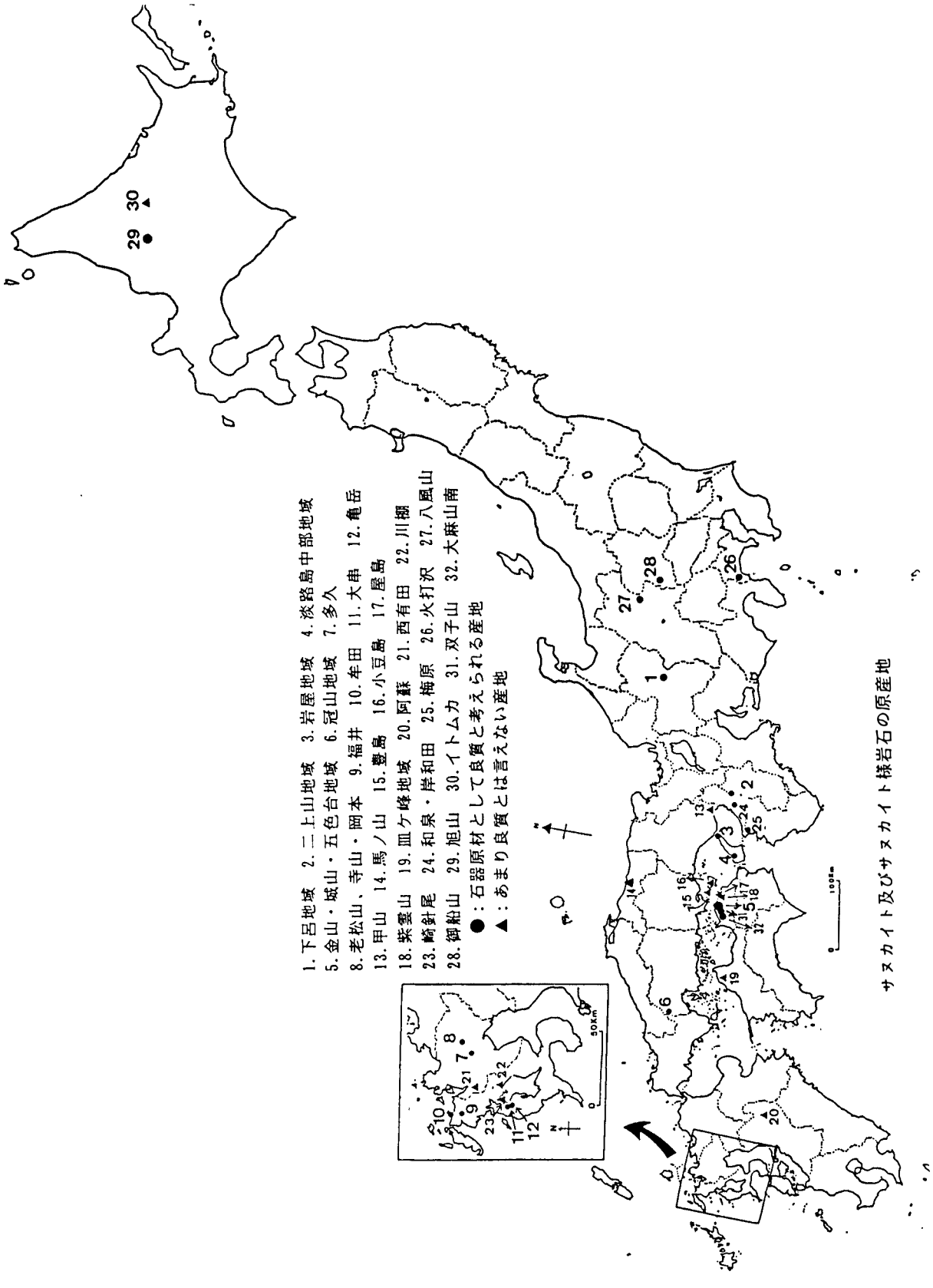
栃木県
16：高原山

東京都
22：神津島

北海道
1：白　滝
　赤石山
　あじさい滝
　幌加沢
　八号沢
2：十勝三股
3：置　戸
4：赤井川
49：名　寄
50：近文台
70：秩父別
51：滝　川
55：美　蔓
56：豊　泉

青森県
5：出来島
6：深　浦
　八森山
52：折腰内
57：戸　門
58：鶴ケ坂
　成　田
　浪　岡
74：下湯川

黒曜石原産地



第196図　サヌカイトおよびサヌカイト様岩石の原産地

参考文献

1）　藁科哲男・東村武信（1975），蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（II）。考古学と自然科学，8：61-69

2）　藁科哲男・東村武信・鎌木義昌（1977），（1978），蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（III）。（IV）。考古学と自然科学，10,11：53-81：33-47

3）　藁科哲男・東村武信（1983），石器原材の産地分析。考古学と自然科学，16：59-89

4）　東村武信（1976），産地推定における統計的手法。考古学と自然科学，9：77-90

5）　東村武信（1980），考古学と物理化学。学生社

表20－1　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	Ca／K	Ti／K	Mn／Zr	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Nb／Zr	Al／K	Si／K
北海道	名寄第一	114	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.614±0.032	0.574±0.022	0.120±0.017	0.024±0.016	0.033±0.002	0.451±0.010
	〃第二	35	0.309±0.015	0.103±0.005	0.021±0.006	1.774±0.055	0.696±0.044	0.265±0.011	0.301±0.022	0.026±0.020	0.028±0.007	0.394±0.010
白滝地区	赤石山	130	0.173±0.014	0.061±0.003	0.079±0.013	2.714±0.142	1.340±0.059	0.283±0.019	0.341±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.010
	八号沢	30	0.138±0.010	0.022±0.002	0.105±0.017	3.123±0.127	1.846±0.065	0.105±0.019	0.475±0.045	0.076±0.046	0.027±0.008	0.359±0.042
	幌加沢	23	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.015	2.975±0.102	1.794±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.103±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007
	あじさい滝	29	0.142±0.010	0.023±0.001	0.101±0.014	3.038±0.125	1.787±0.076	0.115±0.015	0.457±0.035	0.076±0.044	0.027±0.005	0.365±0.011
	近文台第一	30	0.819±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.266±0.117	0.604±0.031	0.941±0.030	0.165±0.020	0.039±0.016	0.039±0.002	0.457±0.008
	〃第二	107	0.517±0.011	0.099±0.005	0.067±0.090	2.773±0.097	0.812±0.037	0.818±0.034	0.197±0.024	0.041±0.019	0.035±0.002	0.442±0.009
	〃第三	17	0.514±0.012	0.098±0.005	0.066±0.014	2.765±0.125	0.814±0.068	0.815±0.042	0.199±0.039	0.078±0.008	0.034±0.002	0.443±0.011
	秩父別第一	51	0.249±0.017	0.122±0.006	0.078±0.011	1.614±0.068	0.995±0.037	0.458±0.023	0.235±0.024	0.023±0.021	0.022±0.004	0.334±0.013
	〃第二	25	0.506±0.016	0.098±0.005	0.070±0.011	2.750±0.099	0.805±0.042	0.808±0.032	0.197±0.026	0.027±0.016	0.027±0.003	0.371±0.010
	滝川第一	31	0.253±0.018	0.122±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.459±0.025	0.233±0.029	0.038±0.018	0.025±0.003	0.370±0.023
	〃第二	15	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.740±0.072	0.802±0.019	0.812±0.019	0.192±0.026	0.032±0.023	0.030±0.004	0.393±0.031
	置戸	65	0.326±0.008	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.062	0.824±0.034	0.454±0.020	0.179±0.023	0.044±0.020	0.030±0.002	0.412±0.010
十勝	十勝三股	60	0.256±0.018	0.074±0.005	0.068±0.010	2.281±0.087	1.097±0.055	0.434±0.023	0.334±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.396±0.013
	美蔓第一	41	0.499±0.020	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.802±0.061	0.707±0.044	0.199±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	0.442±0.015
	〃第二	28	0.593±0.036	0.144±0.012	0.056±0.010	3.028±0.251	0.762±0.040	0.764±0.051	0.197±0.026	0.038±0.022	0.034±0.002	0.449±0.009
	赤井川第一	50	0.254±0.029	0.070±0.004	0.086±0.010	2.213±0.104	0.969±0.060	0.428±0.021	0.249±0.024	0.058±0.023	0.027±0.002	0.371±0.009
	〃第二	30	0.258±0.065	0.072±0.002	0.080±0.010	2.207±0.083	0.970±0.045	0.436±0.026	0.245±0.021	0.021±0.029	0.025±0.007	0.371±0.007
	豊泉第一	75	0.473±0.019	0.148±0.007	0.060±0.015	1.764±0.072	0.438±0.027	0.607±0.028	0.157±0.020	0.025±0.017	0.032±0.002	0.469±0.013
	〃第二	40	0.377±0.009	0.133±0.006	0.055±0.008	1.723±0.066	0.516±0.019	0.513±0.018	0.177±0.016	0.007±0.015	0.030±0.005	0.431±0.010
青森県	折腰内	35	0.190±0.015	0.075±0.003	0.040±0.008	1.575±0.066	1.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.033	0.076±0.021	0.024±0.002	0.348±0.010
	出来島	27	0.346±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.268±0.085	0.865±0.044	1.106±0.056	0.399±0.038	0.179±0.031	0.038±0.003	0.499±0.013
深浦	六角沢	36	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	0.128±0.008	0.002±0.002	0.064±0.007	0.035±0.004	0.026±0.002	0.379±0.010
	八森山	41	0.077±0.005	0.098±0.003	0.013±0.002	0.701±0.018	0.134±0.005	0.002±0.002	0.070±0.005	0.034±0.006	0.027±0.005	0.384±0.009
青森市	戸門第一	28	0.250±0.024	0.069±0.003	0.068±0.012	2.358±0.257	1.168±0.062	0.521±0.063	0.277±0.065	0.076±0.025	0.026±0.002	0.362±0.015
	〃第二	28	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	0.123±0.006	0.002±0.002	0.069±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.369±0.007
	鶴ケ坂	33	0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.861±0.052	1.081±0.060	0.390±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.496±0.018
	成田	47	0.252±0.017	0.068±0.009	0.079±0.033	2.548±0.131	1.149±0.069	0.568±0.108	0.288±0.037	0.049±0.036	0.028±0.005	0.383±0.018
	下湯川	36	9.673±0.479	2.703±0.149	3.267±0.217	21.648±1.500	0.090±0.021	1.708±0.102	0.155±0.015	0.169±0.031	0.053±0.042	0.858±0.088
	浪岡	67	0.253±0.016	0.067±0.008	0.077±0.029	2.519±0.148	1.147±0.065	0.558±0.087	0.286±0.035	0.047±0.040	0.028±0.003	0.385±0.018
秋田県	男鹿 金ヶ崎	43	0.294±0.009	0.087±0.004	0.220±0.018	1.644±0.081	1.493±0.081	0.930±0.043	0.287±0.039	0.098±0.040	0.029±0.002	0.368±0.008
	脇本	45	0.295±0.008	0.087±0.004	0.219±0.017	1.671±0.077	1.503±0.072	0.939±0.054	0.286±0.045	0.108±0.034	0.028±0.006	0.367±0.009

表20－2　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	元素比 Ca／K	Ti／K	Mn／Zr	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Nb／Zr	Al／K	Si／K
岩手県	雫石	25	0.636±0.033	0.187±0.012	0.052±0.007	1.764±0.061	0.305±0.016	0.431±0.021	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	0.594±0.014
	折居	22	0.615±0.055	0.180±0.016	0.058±0.007	1.751±0.062	0.306±0.033	0.421±0.051	0.228±0.079	0.045±0.011	0.041±0.005	0.594±0.055
	花泉	30	0.596±0.046	0.177±0.018	0.056±0.008	1.742±0.072	0.314±0.019	0.420±0.025	0.220±0.016	0.044±0.013	0.041±0.003	0.586±0.030
山形県	月山	44	0.285±0.021	0.123±0.007	0.182±0.016	1.906±0.096	0.966±0.069	1.022±0.071	0.276±0.036	0.119±0.033	0.033±0.002	0.443±0.014
宮城県	湯倉	21	2.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.956±0.040
	塩釜	37	4.828±0.395	1.630±0.104	0.178±0.017	11.362±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.155±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.720±0.032
新潟県	佐渡第一	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.005	1.492±0.079	0.821±0.047	0.288±0.018	0.142±0.018	0.049±0.017	0.024±0.004	0.338±0.013
	〃第二	12	0.263±0.032	0.097±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.326±0.029	0.091±0.022	0.046±0.015	0.026±0.002	0.338±0.009
	上石川	45	0.321±0.007	0.070±0.003	0.069±0.011	2.051±0.070	0.981±0.042	0.773±0.034	0.182±0.023	0.038±0.027	0.026±0.007	0.359±0.009
	板山	44	0.232±0.011	0.068±0.003	0.169±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.772±0.046	0.374±0.047	0.154±0.034	0.027±0.002	0.359±0.009
	大白川	22	0.569±0.012	0.142±0.007	0.033±0.005	1.608±0.049	0.261±0.012	0.332±0.011	0.150±0.015	0.033±0.011	0.036±0.003	0.491±0.014
	金津	46	0.331±0.011	0.097±0.037	0.030±0.007	1.711±0.066	0.618±0.027	0.283±0.012	0.181±0.016	0.035±0.018	0.027±0.009	0.402±0.012
栃木県	高原山	40	0.738±0.067	0.200±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.002	0.516±0.012
東京都 神津島	長浜第一	56	0.381±0.014	0.136±0.005	0.102±0.011	1.729±0.079	0.471±0.027	0.689±0.037	0.247±0.021	0.090±0.026	0.036±0.003	0.504±0.012
	〃第二	23	0.317±0.016	0.120±0.008	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.656±0.050	0.303±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.009
	長根	40	0.318±0.020	0.120±0.005	0.118±0.014	1.805±0.096	0.614±0.036	0.664±0.045	0.291±0.029	0.093±0.039	0.034±0.006	0.476±0.012
神奈川県	箱根・笛塚	30	6.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.252±0.017	0.025±0.019	0.140±0.008	1.528±0.046
	〃・畑宿	41	2.056±0.064	0.669±0.019	0.076±0.007	2.912±0.104	0.062±0.007	0.680±0.029	0.202±0.011	0.011±0.010	0.080±0.005	1.126±0.031
	鍛冶屋	31	1.663±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.904±0.020
静岡県	上多賀	31	1.329±0.078	0.294±0.018	0.041±0.006	1.697±0.068	0.087±0.009	0.551±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.059±0.004	0.856±0.018
	柏峠西	35	1.213±0.164	0.314±0.028	0.031±0.004	1.699±0.167	0.113±0.007	0.391±0.022	0.143±0.007	0.009±0.009	0.047±0.004	0.663±0.020
	小豆峠	40	0.110±0.008	0.052±0.004	0.297±0.038	3.211±0.319	0.829±0.089	0.154±0.030	0.547±0.054	0.087±0.057	0.025±0.014	0.429±0.016
富山県	魚津	12	0.278±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.194±0.014	0.102±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009
高岡市	二上山第一	36	0.319±0.017	0.113±0.006	0.040±0.008	1.720±0.080	0.740±0.052	0.665±0.029	0.121±0.026	0.047±0.031	0.015±0.014	0.392±0.018
	〃第二	40	0.710±0.017	0.202±0.008	0.054±0.011	1.994±0.152	0.413±0.028	0.840±0.050	0.118±0.025	0.051±0.031	0.020±0.020	0.599±0.024
	〃第三	45	0.441±0.052	0.108±0.014	0.079±0.021	2.251±0.138	0.794±0.155	1.222±0.088	0.127±0.041	0.067±0.053	0.015±0.014	0.412±0.025
石川県	比那	17	0.370±0.014	0.087±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.052±0.018	0.032±0.002	0.396±0.017
福井県	安島	21	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.006	1.628±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
	三里山	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
群馬県	大窪沢	42	1.481±0.117	0.466±0.021	0.042±0.006	2.005±0.135	0.182±0.011	0.841±0.044	0.105±0.010	0.009±0.008	0.033±0.005	0.459±0.012

表20－3　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	元素比 Ca／K	Ti／K	Mn／Zr	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Nb／Zr	Al／K	Si／K
長野県	霧ケ峰	171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.339±0.057	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
	和田峠第一	143	0.167±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.085	1.853±0.124	0.112±0.056	0.409±0.048	0.139±0.026	0.025±0.002	0.355±0.016
	〃 第二	17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.036±0.012	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007
	〃 第三	62	0.248±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.140	0.274±0.104	0.374±0.048	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017
	〃 第四	37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.206±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019
	〃 第五	47	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.053±0.196	0.275±0.058	0.184±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.306±0.013
	〃 第六	53	0.156±0.011	0.055±0.005	0.095±0.012	1.333±0.064	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012
	鷹山・和田	53	0.138±0.004	0.042±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.010	0.442±0.039	0.142±0.022	0.026±0.002	0.360±0.010
	男女倉	119	0.223±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.081	0.701±0.109	0.409±0.052	0.128±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.008
	麦草峠	68	0.263±0.020	0.138±0.011	0.049±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017
	双子池	83	0.252±0.027	0.129±0.007	0.059±0.010	1.630±0.179	0.669±0.052	0.802±0.058	0.111±0.024	0.037±0.032	0.027±0.007	0.401±0.011
島根県	加茂	20	0.154±0.008	0.092±0.009	0.018±0.003	0.943±0.029	0.289±0.016	0.006±0.003	0.047±0.010	0.144±0.019	0.022±0.001	0.269±0.017
	津井	30	0.150±0.008	0.100±0.003	0.015±0.002	0.919±0.033	0.305±0.010	0.013±0.003	0.046±0.013	0.132±0.007	0.022±0.001	0.258±0.006
	久見	31	0.142±0.004	0.061±0.002	0.020±0.003	0.981±0.048	0.398±0.013	0.001±0.002	0.093±0.015	0.229±0.010	0.023±0.002	0.317±0.006
大分県	姫島地域 観音崎	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.829±0.220	1.572±0.180	0.325±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
	姫島地域 両瀬第一	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	7.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.057	0.669±0.105	0.035±0.002	0.419±0.009
	姫島地域 ＊〃第二	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.399±0.322	0.614±0.077	3.162±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011
	姫島地域 ＊〃第三	10	1.013±0.140	0.211±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	0.305±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.471±0.017
	姫島地域 ＊オイ崎	29	1.074±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.048	4.010±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.469±0.014
	姫島地域 ＊稲積	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	0.605±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.037±0.002	0.448±0.015
佐賀県	塚瀬	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.489±0.124	0.600±0.051	0.686±0.082	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.371±0.009
	腰岳	26	0.214±0.015	0.029±0.001	0.076±0.012	2.694±0.110	1.686±0.085	0.441±0.030	0.293±0.039	0.257±0.029	0.027±0.002	0.356±0.008
	椎葉川	59	0.414±0.009	0.071±0.003	0.101±0.017	2.947±0.142	1.253±0.081	2.015±0.099	0.147±0.035	0.255±0.040	0.030±0.007	0.388±0.009
長崎県	壱岐島 久喜ノ辻	37	0.165±0.012	0.066±0.002	0.034±0.003	1.197±0.030	0.403±0.012	0.005±0.004	0.114±0.012	0.326±0.008	0.024±0.002	0.294±0.008
	壱岐島 君ケ浦	28	0.161±0.011	0.064±0.002	0.034±0.003	1.209±0.032	0.405±0.008	0.005±0.004	0.119±0.016	0.322±0.010	0.025±0.002	0.294±0.006
	壱岐島 角川	29	0.138±0.010	0.037±0.002	0.056±0.007	1.741±0.083	1.880±0.076	0.012±0.012	0.303±0.038	0.652±0.036	0.026±0.002	0.358±0.010
	松浦第一	23	0.218±0.010	0.029±0.002	0.085±0.013	2.692±0.125	1.674±0.064	0.439±0.027	0.284±0.047	0.266±0.028	0.027±0.002	0.359±0.012
	〃 第二	17	0.176±0.016	0.030±0.004	0.062±0.022	2.364±0.389	1.607±0.245	0.308±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.026±0.002	0.361±0.010
	〃 第三	16	0.245±0.019	0.060±0.006	0.045±0.012	1.975±0.240	0.878±0.099	0.421±0.081	0.130±0.030	0.145±0.023	0.026±0.002	0.358±0.013
	〃 第四	22	0.287±0.019	0.067±0.004	0.044±0.007	1.906±0.106	0.765±0.074	0.484±0.034	0.115±0.023	0.117±0.018	0.028±0.001	0.367±0.007
	淀姫	44	0.329±0.014	0.080±0.005	0.042±0.007	1.804±0.065	0.539±0.022	0.504±0.035	0.077±0.018	0.117±0.014	0.029±0.002	0.374±0.009
	中町第一	25	0.248±0.017	0.058±0.008	0.057±0.007	1.884±0.085	0.832±0.092	0.403±0.026	0.112±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.363±0.007
	〃 第二	17	0.327±0.030	0.080±0.017	0.045±0.007	1.832±0.074	0.653±0.088	0.488±0.030	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.358±0.012
	古里第一	40	0.192±0.020	0.027±0.003	0.080±0.016	2.699±0.215	1.780±0.164	0.413±0.065	0.312±0.056	0.259±0.040	0.027±0.002	0.358±0.008
	〃 第二	22	0.414±0.012	0.073±0.006	0.102±0.015	2.898±0.204	1.221±0.094	1.951±0.124	0.133±0.047	0.261±0.034	0.031±0.002	0.383±0.010
	〃 第三	19	0.257±0.035	0.062±0.009	0.054±0.009	1.939±0.131	0.812±0.113	0.436±0.052	0.101±0.029	0.145±0.037	0.028±0.002	0.364±0.011
	大崎	25	0.161±0.011	0.051±0.002	0.037±0.006	1.718±0.056	0.948±0.030	0.179±0.018	0.191±0.026	0.137±0.019	0.024±0.002	0.340±0.006

表20－4　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	Ca／K	Ti／K	Mn／Zr	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Nb／Zr	Al／K	Si／K
熊本県	小国	30	0.317±0.023	0.127±0.005	0.063±0.007	1.441±0.070	0.611±0.032	0.703±0.044	0.175±0.233	0.097±0.017	0.023±0.002	0.320±0.007
	南関	30	0.261±0.016	0.214±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.326±0.012	0.278±0.015	0.069±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.008
	轟	44	0.258±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	0.329±0.017	0.275±0.010	0.066±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.008
	冠ケ岳	21	0.261±0.012	0.211±0.008	0.032±0.003	0.780±0.038	0.324±0.011	0.279±0.017	0.064±0.011	0.037±0.006	0.025±0.002	0.277±0.009
	白浜	78	0.208±0.021	0.101±0.009	0.024±0.006	1.382±0.086	1.021±0.099	0.351±0.037	0.162±0.027	0.027±0.022	0.022±0.007	0.317±0.009
宮崎県	桑ノ木津留											
	〃 第一群	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.070±0.009	1.521±0.075	1.080±0.048	0.418±0.020	0.266±0.034	0.063±0.024	0.020±0.003	0.314±0.011
	〃 第二群	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	0.753±0.039	0.205±0.029	0.047±0.036	0.022±0.002	0.323±0.019
鹿児島県	日東	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.712±0.028	0.408±0.025	0.100±0.018	0.029±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	五女木	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.003	1.170±0.064	0.705±0.027	0.405±0.021	0.108±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	上牛鼻	41	1.629±0.098	0.804±0.037	0.053±0.006	3.342±0.215	0.188±0.013	1.105±0.056	0.087±0.009	0.022±0.009	0.036±0.002	0.391±0.011
	平木場	34	1.944±0.054	0.912±0.028	0.062±0.005	3.975±0.182	0.184±0.011	1.266±0.049	0.093±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.010
	竜ケ水	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.063±0.009	1.524±0.079	0.619±0.038	0.719±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009
	長谷	30	0.553±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.815±0.062	0.644±0.028	0.553±0.029	0.146±0.021	0.066±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012
台湾	台東山脈	37	0.510±0.010	0.198±0.007	0.038±0.007	1.862±0.079	0.353±0.019	0.519±0.017	0.123±0.012	0.024±0.017	0.029±0.007	0.407±0.010
長野県	NK遺物群	57	0.566±0.019	0.163±0.007	0.086±0.011	1.822±0.084	0.467±0.031	1.691±0.064	0.102±0.021	0.041±0.028	0.038±0.003	0.500±0.014
青森県	HY遺物群	31	0.238±0.011	0.131±0.006	0.048±0.008	1.636±0.066	0.418±0.028	1.441±0.015	0.482±0.024	0.029±0.028	0.020±0.015	0.481±0.068
	SN1遺物群	33	0.287±0.006	0.087±0.004	0.033±0.005	1.597±0.037	0.244±0.011	0.258±0.011	0.281±0.012	0.009±0.012	0.021±0.006	0.329±0.006
	SN2遺物群	29	0.209±0.006	0.116±0.006	0.076±0.008	1.571±0.082	0.716±0.035	0.292±0.017	0.264±0.029	0.028±0.030	0.023±0.009	0.383±0.015
北朝鮮	会寧城外遺跡遺物群	70	0.135±0.012	0.062±0.006	0.017±0.003	1.118±0.051	0.585±0.036	0.068±0.019	0.150±0.022	0.372±0.035	0.025±0.004	0.319±0.012
ロシア	イリスタヤ遺跡遺物群	26	18.888±2.100	6.088±0.868	0.293±0.032	27.963±2.608	0.055±0.017	2.716±0.162	0.163±0.019	0.036±0.030	0.173±0.029	1.674±0.240
標準試料	JG－1 a)	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004

平均値±標準偏差値、　＊：ガラス質安山岩　NK遺物（NK）群：中ッ原遺跡、HY遺物（HY）群：日和山遺跡出土の産地不明の原石群

a)：Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8, 175-192.

表21－1　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	K／Ca	Ti／Ca	Mn／Sr	Fe／Sr	Rb／Sr	Y／Sr	Zr／Sr	Nb／Sr	Al／Ca	Si／Ca
北海道	イトムカ	46	0.359±0.020	0.430±0.014	0.081±0.006	5.884±0.223	0.166±0.011	0.120±0.013	0.883±0.030	0.015±0.013	0.013±0.001	0.137±0.007
	旭山	80	0.351±0.011	0.288±0.010	0.089±0.005	5.064±0.140	0.174±0.011	0.096±0.009	0.903±0.029	0.015±0.012	0.015±0.001	0.141±0.005
群馬県	荒船山	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032
長野県	八風山	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	火打沢	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
岐阜県	下呂	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025
奈良県	二上山	51	0.288±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.066±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005
大阪府	和泉	26	0.494±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.060±0.148	0.296±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.038±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009
兵庫県	岩屋第一	28	0.616±0.021	0.254±0.012	0.057±0.005	3.610±0.189	0.365±0.019	0.056±0.012	0.846±0.026	0.027±0.017	0.018±0.001	0.186±0.007
	〃 第二	24	0.535±0.020	0.263±0.005	0.053±0.005	3.438±0.103	0.340±0.015	0.042±0.012	1.069±0.030	0.026±0.014	0.017±0.001	0.173±0.008
	甲山	22	0.300±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県	五色台 国分寺	28	0.457±0.011	0.251±0.007	0.053±0.005	3.574±0.122	0.311±0.019	0.043±0.016	0.970±0.033	0.038±0.015	0.015±0.001	0.149±0.005
	五色台 蓮光寺	18	0.459±0.012	0.249±0.008	0.053±0.005	3.518±0.129	0.308±0.019	0.043±0.015	0.972±0.037	0.034±0.009	0.016±0.001	0.150±0.004
	五色台 白峰	51	0.534±0.015	0.262±0.005	0.053±0.005	3.376±0.108	0.340±0.014	0.040±0.016	1.071±0.051	0.032±0.011	0.017±0.001	0.173±0.007
	五色台 法印谷	25	0.397±0.009	0.239±0.004	0.069±0.005	4.619±0.127	0.277±0.012	0.059±0.011	1.145±0.029	0.031±0.013	0.015±0.001	0.130±0.004
	金山 金山東	24	0.488±0.012	0.222±0.004	0.079±0.005	4.617±0.126	0.316±0.017	0.057±0.011	1.186±0.033	0.020±0.015	0.017±0.001	0.155±0.005
	金山 〃 西	19	0.406±0.009	0.216±0.005	0.082±0.005	4.808±0.125	0.292±0.017	0.064±0.011	1.059±0.025	0.020±0.011	0.015±0.001	0.133±0.006
	城山	63	0.402±0.011	0.216±0.006	0.079±0.006	4.741±0.138	0.289±0.014	0.068±0.016	1.065±0.026	0.021±0.014	0.013±0.001	0.116±0.003
	双子山	54	0.350±0.007	0.233±0.005	0.074±0.006	4.898±0.169	0.261±0.012	0.061±0.014	1.093±0.035	0.023±0.016	0.011±0.002	0.105±0.004
	＊五色台	63	0.869±0.048	0.120±0.006	0.023±0.005	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.011	0.039±0.003	0.459±0.028
	＊大麻山南第一	39	0.705±0.069	0.146±0.008	0.040±0.008	2.837±0.189	0.473±0.050	0.023±0.015	0.941±0.052	0.028±0.021	0.020±0.002	0.251±0.024
	＊ 〃 第二	34	1.006±0.032	0.119±0.005	0.032±0.007	2.396±0.099	0.693±0.027	0.014±0.026	0.768±0.027	0.031±0.023	0.027±0.002	0.350±0.012
鳥取県	馬ノ山	23	0.188±0.007	0.178±0.006	0.011±0.001	0.916±0.033	0.032±0.002	0.001±0.002	0.177±0.009	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.005

表21－2　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地		原石群名	分析個数	K／Ca	Ti／Ca	Mn／Sr	Fe／Sr	Rb／Sr	Y／Sr	Zr／Sr	Nb／Sr	Al／Ca	Si／Ca
広島県	冠	冠高原	60	0.651±0.021	0.485±0.014	0.046±0.004	3.322±0.104	0.174±0.009	0.029±0.009	0.462±0.017	0.185±0.010	0.025±0.002	0.241±0.008
		冠山東	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.607±0.060	0.059±0.009	0.003±0.005	0.399±0.043	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006
	山	飯山	25	1.116±0.061	0.472±0.022	0.037±0.005	2.228±0.080	0.245±0.011	0.023±0.009	0.524±0.014	0.246±0.013	0.038±0.003	0.391±0.021
佐賀県		多久第一	53	0.831±0.047	0.404±0.013	0.056±0.007	4.718±0.225	0.510±0.037	0.062±0.019	0.850±0.033	0.222±0.018	0.016±0.003	0.201±0.011
		〃 第二	23	0.834±0.055	0.396±0.016	0.065±0.010	5.342±0.317	0.566±0.047	0.081±0.028	0.866±0.046	0.242±0.023	0.016±0.005	0.202±0.014
		〃 第三	8	1.097±0.232	0.350±0.028	0.065±0.014	4.498±0.903	0.701±0.084	0.084±0.025	0.828±0.052	0.239±0.019	0.021±0.003	0.263±0.046
		老松山	62	0.705±0.034	0.314±0.011	0.067±0.009	5.323±0.244	0.543±0.036	0.075±0.021	0.691±0.034	0.208±0.023	0.014±0.002	0.174±0.007
		寺山・岡本	30	0.629±0.043	0.310±0.010	0.070±0.008	5.600±0.323	0.489±0.029	0.066±0.017	0.644±0.032	0.192±0.018	0.013±0.001	0.157±0.010
		西有田	17	0.453±0.019	0.331±0.005	0.098±0.010	7.489±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.568±0.023	0.106±0.010	0.023±0.002	0.237±0.016
長崎県		大串	28	1.111±0.118	0.140±0.009	0.055±0.020	1.650±0.236	0.236±0.043	0.041±0.027	0.486±0.038	0.082±0.022	0.050±0.006	0.607±0.059
		亀岳	19	1.072±0.042	0.144±0.008	0.041±0.006	1.776±0.152	0.233±0.014	0.015±0.013	0.497±0.018	0.065±0.015	0.049±0.003	0.587±0.018
		牟田第一	30	0.784±0.092	0.345±0.026	0.069±0.008	4.561±0.236	0.875±0.132	0.220±0.028	0.727±0.053	0.299±0.039	0.015±0.003	0.188±0.021
		〃 第二	13	0.594±0.048	0.328±0.013	0.088±0.010	7.759±0.411	1.114±0.104	0.348±0.031	0.989±0.071	0.496±0.041	0.012±0.001	0.144±0.010
		川棚第一	59	0.498±0.030	0.302±0.011	0.067±0.005	4.225±0.181	0.220±0.018	0.076±0.010	0.814±0.048	0.035±0.012	0.012±0.002	0.133±0.008
		〃 第二	9	0.406±0.048	0.265±0.027	0.071±0.004	48543±0.374	0.203±0.029	0.081±0.012	0.714±0.048	0.034±0.017	0.011±0.001	0.109±0.011
		福井第一	15	0.630±0.012	0.329±0.005	0.090±0.011	7.531±0.315	1.211±0.040	0.365±0.035	1.028±0.047	0.534±0.033	0.013±0.001	0.154±0.003
		〃 第二	25	0.512±0.014	0.317±0.008	0.084±0.011	7.157±0.312	0.941±0.037	0.301±0.027	0.874±0.043	0.431±0.033	0.011±0.002	0.126±0.004
		崎針尾第一	68	0.382±0.026	0.252±0.023	0.052±0.006	4.106±0.227	0.160±0.018	0.057±0.009	0.434±0.039	0.056±0.011	0.010±0.001	0.107±0.007
		〃 第二	14	0.599±0.115	0.373±0.045	0.073±0.014	5.167±0.749	0.320±0.058	0.077±0.016	0.650±0.084	0.086±0.027	0.015±0.002	0.163±0.031
熊本県		阿蘇第一	15	2.006±0.258	0.646±0.052	0.064±0.011	2.085±0.320	0.481±0.068	0.106±0.028	1.647±0.197	0.063±0.012	0.057±0.010	0.597±0.099
		〃 第二	14	0.993±0.198	0.514±0.070	0.061±0.008	3.087±0.441	0.299±0.066	0.064±0.013	1.043±0.182	0.038±0.013	0.032±0.005	0.293±0.041
		菊池	42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.062±0.005	3.457±0.206	0.194±0.018	0.072±0.009	0.728±0.054	0.025±0.010	0.019±0.002	0.185±0.015
		JG－1[a)]	56	1.327±0.021	0.266±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.756±0.015	0.183±0.024	0.762±0.033	0.078±0.014	0.036±0.003	0.448±0.011

平均値±標準偏差値　　＊：ガラス質安山岩　　a)：Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8 175-192.

表22　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	２０個	３０％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	２２	３３	白峰群に一致
第三群	６	９	法印谷群に一致
〃	５	８	国分寺群に一致
〃	４	６	蓮光寺群に一致
〃	３	５	金山東群に一致
〃	２	３	和泉群に一致
〃	４	６	不明（どこの原石群にも属さない）

表23　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	１２個	１７％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和　泉　群	９	１３	〃　、　〃　、　〃
岩屋第二群	６	８	白峰群に一致
	４	６	二上山群に一致
	１	１	法印谷群に一致
	１	１	金山東群に一致
	３９	５４	不明（どこの原石群にも属さない）

表24　和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
和　泉　群	１０個	４８％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	１	５	〃　、　〃　、　〃
岩屋第二群	１０	４８	不明（どこの原石群にも属さない）

表25　上原遺跡第1・3地点出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
50813	0.159	0.070	0.107	1.371	1.063	0.366	0.315	0.109	0.028	0.365
50814	0.156	0.067	0.081	1.301	0.985	0.381	0.307	0.093	0.026	0.369
50815	0.132	0.067	0.087	1.287	0.961	0.335	0.276	0.090	0.026	0.360
50816	0.137	0.061	0.104	1.314	1.065	0.357	0.279	0.061	0.029	0.338
50817	0.160	0.065	0.112	1.362	1.086	0.358	0.240	0.046	0.027	0.359
50818	0.155	0.068	0.113	1.446	1.074	0.373	0.271	0.089	0.032	0.376
50819	0.157	0.070	0.127	1.416	1.092	0.366	0.235	0.081	0.027	0.362
50820	0.145	0.064	0.108	1.428	1.090	0.358	0.287	0.101	0.029	0.371
50821	0.144	0.069	0.110	1.337	0.958	0.365	0.264	0.102	0.029	0.377
50822	0.135	0.062	0.121	1.373	1.090	0.357	0.299	0.104	0.025	0.349
50823	0.146	0.069	0.100	1.376	1.075	0.364	0.284	0.052	0.029	0.371
50824	0.155	0.067	0.131	1.442	1.078	0.386	0.262	0.091	0.025	0.368
50825	0.154	0.069	0.120	1.361	1.024	0.351	0.251	0.106	0.029	0.364
50826	0.158	0.067	0.112	1.555	1.166	0.418	0.262	0.124	0.025	0.358
50827	0.169	0.063	0.120	1.375	0.976	0.315	0.321	0.097	0.028	0.383
50828	0.144	0.063	0.105	1.488	1.041	0.391	0.324	0.113	0.004	0.382
50829	0.153	0.067	0.098	1.272	1.021	0.369	0.262	0.052	0.022	0.347
50830	0.134	0.064	0.106	1.473	1.043	0.408	0.260	0.065	0.026	0.368
50831	0.132	0.068	0.116	1.617	1.171	0.400	0.297	0.072	0.029	0.379
50832	0.158	0.067	0.121	1.503	1.138	0.439	0.327	0.067	0.000	0.354
JG-1	0.763	0.210	0.075	3.875	1.002	1.311	0.201	0.066	0.030	0.346

JG-1：標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

表26　上原遺跡第1・3地点出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
50833	0.282	0.226	0.070	4.573	0.199	0.066	0.626	0.022	0.010	0.094
50834	0.277	0.234	0.053	4.292	0.231	0.068	0.616	0.014	0.010	0.090
50835	27.443	18.021	0.105	15.544	1.318	0.278	2.933	0.146	0.437	5.381
50836	0.282	0.222	0.074	4.602	0.200	0.065	0.575	0.041	0.010	0.089
50837	70.635	29.900	0.090	9.637	3.000	0.614	5.636	0.163	1.455	20.734
50838	0.285	0.227	0.069	4.547	0.198	0.074	0.624	0.009	0.009	0.094
50839	0.275	0.232	0.079	4.583	0.214	0.067	0.660	0.000	0.009	0.092
50840	0.278	0.233	0.077	4.465	0.201	0.068	0.614	0.027	0.008	0.084
50841	0.286	0.223	0.073	4.696	0.220	0.065	0.611	0.000	0.010	0.096
50842	0.273	0.227	0.074	4.685	0.221	0.070	0.643	0.000	0.010	0.089
50843	0.279	0.226	0.061	4.624	0.202	0.068	0.634	0.000	0.010	0.093
50844	0.273	0.222	0.067	4.552	0.220	0.071	0.643	0.010	0.011	0.093
50845	0.307	0.201	0.049	3.755	0.215	0.055	0.619	0.028	0.010	0.095
50846	0.276	0.228	0.076	4.374	0.228	0.058	0.630	0.006	0.009	0.094
50847	1.447	0.218	0.036	0.741	0.282	0.051	0.496	0.033	0.035	0.439
50848	1.467	0.205	0.039	0.772	0.301	0.036	0.510	0.038	0.029	0.423
JG-1	1.307	0.294	0.054	2.785	0.775	0.160	0.777	0.046	0.022	0.297

JG-1：標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

表27－1　上原遺跡第1・3地点出土黒曜石製遺物の原産地推定結果

分析番号	通番－注記	地点	推定年代	原石産地（確率）	判定	石材	遺物品名
50813	1-96AH1L'78Ⅱ17368	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(37%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50814	2-95AH3-83uⅠ770	第3地点		霧ケ峰(6%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50815	3-96AH1P'77Ⅲ19649	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(26%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50816	4-95AH3-80uⅠ350	第3地点		霧ケ峰(40%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50817	5-95AH3-80vⅠ368	第3地点		霧ケ峰(2%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50818	6-96AH1X'67Ⅱ15972	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(29%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50819	7-96AH1N'72Ⅱ14921	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(10%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50820	8-96AH1L'74Ⅲ17796	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(75%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50821	9-AH1G'71Ⅱ2711	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(18%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50822	10-AH1K'75Ⅱ2039	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(66%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50823	11-95AH3表採011	第3地点		霧ケ峰(40%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50824	12-AH1J'66Ⅰ006	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(16%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50825	13-95AH3-78uⅠ762	第3地点		霧ケ峰(45%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50826	14-96AH1M'74Ⅲ14869	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(1%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50827	15-96AH1M'72Ⅱ15227	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(D^2=37)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50828	16-96AH1U'68Ⅱ15880	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(2%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50829	17-AH1SB10-7625	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(15%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50830	18-96AH1L'70Ⅱ14122	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(0.4%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50831	19-AH1J'73Ⅱ1229	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(D^2=33)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク
50832	20-AH1J'74Ⅱ2957	第1地点	BC.5,300～5,000	霧ケ峰(0.3%)	霧ケ峰	黒曜石	フレイク

表27－2　上原遺跡第1・3地点出土サヌカイト・下呂石製遺物の原産地推定結果

分析番号	通番－注記	地点	推定年代	原石産地（確率）	判定	石材	遺物品名
50833	21-AH1F'63Ⅱ2129	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(99%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50834	22-AH1K'63Ⅰ002	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(12%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50835	23-96AH1N'73Ⅱ15212	第1地点	BC.5,300～5,000			サヌカイト	フレイク
50836	24-96AH1M'74Ⅱ14745	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(36%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50837	25-96AH1T'65Ⅱ16739	第1地点	BC.5,300～5,000			サヌカイト	フレイク
50838	26-96AH1K'71Ⅲ17801	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(98%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50839	27-96AH1N'76Ⅱ13951	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(36%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50840	28-96AH1M'69Ⅱ13938	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(63%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50841	29-96AH1Q'75Ⅰ001-2	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(48%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50842	30-AH1H'61Ⅱ2286	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(49%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50843	31-96AH1M'72Ⅱ14302	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(67%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50844	32-AH1G'68Ⅱ6454	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(86%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50845	33-AH1D'75Ⅰ001	第1地点	BC.5,300～5,000			サヌカイト	フレイク
50846	34-AH1I'70Ⅱ4293	第1地点	BC.5,300～5,000	二上山(73%)	二上山	サヌカイト	フレイク
50847	35-AH1I'74Ⅱ1189	第1地点	BC.5,300～5,000	下呂(33%)	下呂	下呂石	フレイク
50848	36-AH1K'77Ⅱ236	第1地点	BC.5,300～5,000	下呂(43%)	下呂	下呂石	フレイク

表28　上原遺跡第1地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の一覧表

分析番号	番号　遺物 No.，　注記	遺物名	挿図番号
	上原遺跡第1地点		
55696	1，AH1E'71Ⅱ2991	玦状耳飾	４９４
55697	2，96AH1F'68Ⅲ18436	玦状耳飾	４９６
55698	3，AH1E'65Ⅱ5127	玦状耳飾	４９７
55699	4，96AH1H'70Ⅱ19700	玦状耳飾	５００
55700	5，96AH1M'69Ⅱ13937	玦状耳飾	４９９
55701	6，96AH1Q'68Ⅱ16159	玦状耳飾	４９５
55702	7，96AH1U'66Ⅱ13797	玦状耳飾	５０１
55703	8，96AH1F'69Ⅱ19701	玦状耳飾	４９８
55705	9，AH1G'63Ⅱ7549	玦状耳飾	５０２
55706	10，AH1J'62Ⅱ4672	玦状耳飾	５０３
55707	11，97AH1SK04-20521	垂飾	１４９
	戸入村平遺跡		
55710	14，TM4KⅠ003	垂飾	
55711	15，TM8EⅢ088	垂飾	
	小の原遺跡		
55712	16，SH20K-Wsec.148-880927	管玉	
55713	17，SH20K-Wsec.黒褐色土層880908	玦状耳飾	
55714	18，SH15MⅢ78	玦状耳飾	

表29－１　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（１）

原産地名	分析個数	蛍光Ｘ線法による元素比の範囲 比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマ産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.09～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND：検出限界以下の濃度

表29－２　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（２）

原産地名	蛍光Ｘ線法による分析元素（各元素が確認できた個体数の百分率） Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND：検出限界以下　　tr：検出確認

表30－1　上原遺跡第1地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果

遺物番号	遺跡名 遺物名	分析番号	元素比 Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Si	K/Ca	Ca/Si	Ca/K	Ti/Si	Ti/K
上原遺跡第1地点											
No.1,	玦状耳飾	55696	0.024	3.057	0.010	0.286	0.010	27.216	95.274	0.246	0.863
No.2,	玦状耳飾	55697	0.019	2.790	0.010	0.184	0.007	27.624	150.270	0.150	0.817
No.3,	玦状耳飾	55698	0.068	7.960	0.235	0.258	0.959	0.269	1.043	0.276	1.071
No.4,	玦状耳飾	55699	0.014	0.427	0.176	8.324	48.886	0.170	0.020	5.237	0.629
No.5,	玦状耳飾	55700	0.028	2.991	0.033	0.355	0.014	24.914	70.215	0.234	0.660
No.6,	玦状耳飾	55701	0.027	2.960	0.330	15.363	68.157	0.225	0.015	2.521	0.164
No.7,	玦状耳飾	55702	0.028	3.216	0.311	15.832	22.507	0.703	0.044	5.674	0.358
No.8,	玦状耳飾	55703	0.018	0.774	0.367	20.593	44.132	0.467	0.023	9.962	0.484
No.9,	玦状耳飾	55705	0.021	2.908	0.231	12.934	102.938	0.126	0.010	0.919	0.071
No.10,	玦状耳飾	55706	0.018	2.342	0.239	14.428	174.027	0.083	0.006	1.247	0.086
No.11,	垂飾	55707	0.000	0.506	0.327	19.359	106.780	0.181	0.009	3.005	0.155
戸入村平遺跡											
No.14,	垂飾	55710	0.032	4.284	0.006	0.001	0.060	0.016	16.769	0.007	7.821
No.15,	垂飾	55711	0.000	3.644	0.006	0.039	0.580	0.067	1.723	0.079	2.039
小の原遺跡											
No.16,	管玉	55712	0.031	3.187	0.016	0.630	2.548	0.247	0.392	0.230	0.364
No.17,	玦状耳飾	55713	0.041	5.500	0.293	8.234	31.703	0.260	0.032	1.948	0.237
No.18,	玦状耳飾	55714	0.000	0.058	0.395	0.122	1.926	0.063	0.519	0.651	5.340
JG-1[a)]			0.000	0.040	0.063	5.788	1.284	4.509	0.779	1.344	0.232

表30－２　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果

遺物番号　遺物名	分析番号	元素比 Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Rb/Fe	Sr/Fe	Zr/Fe	Fe/Sr	Zr/Sr
上原遺跡第１地点										
No. 1, 玦状耳飾	55696	0.009	0.000	0.011	0.008	0.001	0.031	0.048	31.77	1.536
No. 2, 玦状耳飾	55697	0.005	0.004	0.024	0.012	0.000	0.008	0.002	119.30	0.203
No. 3, 玦状耳飾	55698	1.027	0.000	0.088	0.000	0.001	0.002	0.014	494.96	6.909
No. 4, 玦状耳飾	55699	30.758	0.001	0.005	0.002	0.131	0.019	0.165	52.49	8.650
No. 5, 玦状耳飾	55700	0.009	0.040	0.029	0.090	0.001	0.007	0.004	145.28	0.651
No. 6, 玦状耳飾	55701	11.186	0.000	0.059	0.007	0.910	0.641	0.598	1.55	0.932
No. 7, 玦状耳飾	55702	8.066	0.002	0.091	0.019	0.281	0.132	0.058	7.58	0.437
No. 8, 玦状耳飾	55703	21.349	0.000	0.084	0.009	0.642	0.730	0.545	1.36	0.746
No. 9, 玦状耳飾	55705	7.313	0.033	0.017	0.018	0.094	0.006	0.003	173.86	0.580
No. 10, 玦状耳飾	55706	15.043	0.040	0.016	0.017	0.126	0.007	0.005	138.24	0.752
No. 11, 垂飾	55707	16.573	0.000	0.084	0.003	2.441	0.424	0.043	2.35	0.102
戸入村平遺跡										
No. 14, 垂飾	55710	0.466	0.000	0.000	0.030	0.001	0.004	0.006	240.36	1.351
No. 15, 垂飾	55711	1.183	0.039	0.005	0.039	0.001	0.001	0.000	---	0.000
小の原遺跡										
No. 16, 管玉	55712	0.929	0.000	0.005	0.015	0.000	0.001	0.040	---	41.468
No. 17, 玦状耳飾	55713	7.500	0.000	0.093	0.003	0.196	0.065	0.359	15.48	5.558
No. 18, 玦状耳飾	55714	10.286	0.003	0.005	0.015	0.379	24.205	25.567	0.04	1.056
JG-1[a)]		0.298	0.001	0.022	0.001	0.282	0.371	0.281	2.695	0.757

表30－3　上原遺跡第1地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果

遺物番号　遺物名	分析番号	元素比 Sr/Zr	K/Fe	Ca/Fe	Ti/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Ba/Zr	Ba/Sr	Rb/Sr
上原遺跡第1地点										
No.1, 玦状耳飾	55696	0.651	0.002	0.403	0.003	20.68	0.020	0.00	0.00	0.031
No.2, 玦状耳飾	55697	4.928	0.001	0.248	0.001	587.96	0.228	0.00	0.00	0.046
No.3, 玦状耳飾	55698	0.145	0.003	0.001	0.001	71.63	0.104	1.96	13.59	0.722
No.4, 玦状耳飾	55699	0.116	0.054	0.001	0.031	6.06	0.792	9.05	78.30	6.852
No.5, 玦状耳飾	55700	1.535	0.002	0.156	0.001	223.08	0.126	0.00	0.00	0.082
No.6, 玦状耳飾	55701	1.073	0.414	0.006	0.074	1.67	1.522	16.89	15.74	1.419
No.7, 玦状耳飾	55702	2.290	0.321	0.011	0.096	17.36	4.875	---	883.65	2.129
No.8, 玦状耳飾	55703	1.340	0.741	0.015	0.340	1.83	1.178	584.93	436.37	0.879
No.9, 玦状耳飾	55705	1.724	0.068	0.000	0.005	299.72	28.114	---	598.84	16.308
No.10, 玦状耳飾	55706	1.329	0.099	0.001	0.009	183.71	23.133	527.37	396.84	17.407
No.11, 垂飾	55707	9.782	2.651	0.009	0.281	23.05	56.283	---	950.97	5.754
戸入村平遺跡										
No.14, 垂飾	55710	0.740	0.007	0.000	0.000	177.87	0.248	0.00	0.00	0.335
No.15, 垂飾	55711	---	0.002	0.000	0.000	---	---	0.00	---	0.874
小の原遺跡										
No.16, 管玉	55712	0.024	0.004	0.002	0.002	24.83	0.000	0.00	0.00	0.000
No.17, 玦状耳飾	55713	0.180	0.080	0.003	0.018	2.78	0.547	2.94	16.34	3.041
No.18, 玦状耳飾	55714	0.947	0.193	0.026	0.294	0.03	0.015	0.17	0.18	0.016
JG-1[a)]		1.321	0.114	0.091	0.023	3.561	1.005	6.977	5.280	0.761

表30－４　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の分析結果

遺物番号　遺物名	分析番号	元素比 Y/Zr	Y/Sr	Y/Fe	重量 (gr)	比重
上原遺跡第１地点						
No.1, 玦状耳飾	55696	0.041	0.063	0.002	9.92141	2.951
No.2, 玦状耳飾	55697	0.515	0.105	0.001	6.61915	3.014
No.3, 玦状耳飾	55698	0.000	0.000	0.000	3.76551	2.682
No.4, 玦状耳飾	55699	0.117	1.013	0.019	4.11383	2.604
No.5, 玦状耳飾	55700	0.313	0.204	0.001	10.40959	2.964
No.6, 玦状耳飾	55701	0.000	0.000	0.000	7.39022	2.653
No.7, 玦状耳飾	55702	0.000	0.000	0.000	3.15158	2.783
No.8, 玦状耳飾	55703	0.012	0.009	0.007	2.54897	2.856
No.9, 玦状耳飾	55705	0.850	0.493	0.003	3.18059	2.773
No.10, 玦状耳飾	55706	0.951	0.715	0.005	2.49357	2.782
No.11, 垂飾	55707	1.328	0.136	0.058	90.24370	2.832
戸入村平遺跡						
No.14, 垂飾	55710	0.000	0.000	0.000	4.90877	2.766
No.15, 垂飾	55711	9.999	0.269	0.000	2.58993	2.817
小の原遺跡						
No.16, 管玉	55712	0.000	0.000	0.000	2.89141	2.785
No.17, 玦状耳飾	55713	0.000	0.000	0.000	9.47475	2.706
No.18, 玦状耳飾	55714	0.026	0.027	0.664	2.20437	2.603
JG-1[a)]		0.220	0.167	0.062		

a):標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

表31　上原遺跡第1地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土玉類の原産地分析結果

遺物番号	遺跡名 遺物名	分析番号	各分類基準による判定 図5判定	図6判定	図7判定	比重&基準(2)	Ni/Fe判定[a)]	総合判定
上原遺跡第1地点								
No.1,	玦状耳飾	55696	HD?	HD	HD,HK	HD,IT,IN,HK,KM	0.008	不　明
No.2,	玦状耳飾	55697	--	HK	HD,HK			不　明
No.3,	玦状耳飾	55698	--	--	--			不　明
No.4,	玦状耳飾	55699	--	--	WK			不　明
No.5,	玦状耳飾	55700	HK	HK	HD,HK			不　明
No.6,	玦状耳飾	55701	IT	--	HD,HK			不　明
No.7,	玦状耳飾	55702	HK,KM	--	HD,HK			不　明
No.8,	玦状耳飾	55703	IT	--	WK			不　明
No.9,	玦状耳飾	55705	HK	--	HD,HK			不　明
No.10,	玦状耳飾	55706	HK	--	HD,HK			不　明
No.11,	垂飾	55707	IT,HK	--	--			不　明
戸入村平遺跡								
No.14,	垂飾	55710	--	--	HK			不　明
No.15,	垂飾	55711	HK	--	HK,IN			不　明
小の原遺跡								
No.16,	管玉	55712	--	--	HD,HK			不　明
No.17,	玦状耳飾	55713	--	--	--			不　明
No.18,	玦状耳飾	55714	--	--	--			不　明

IT：糸魚川 WK：若桜 OS：大佐 NG：長崎 HK：日高 IN：引佐 OY：大屋 KM：神居コタン HD：飛騨

a)：飛騨産、日高産を分類するときの指標

（飛騨産原石、42個の平均値±標準偏差）Ni/Fe=0.091±0.030

（日高産原石、14個の平均値±標準偏差）Ni/Fe=0.065±0.028

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っていますが、判定基準の異なる研究方法（土器様式の基準も研究方法で異なるように）にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係（相互チェックなし）ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察をする必要があります。

第２節　上原遺跡第１地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土の玉類の産地分析

藁科哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

今回分析を行った玉類は玦状耳飾、垂飾、管玉などで、一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウなどが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光Ｘ線分析で行う元素比法[2,3]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例４）が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。⑴石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。⑵玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類は徳山地区、上原遺跡第1地点、戸入村平遺跡、小の原遺跡出土の玉類で玦状耳飾、垂飾、管玉などで肉眼観察で岩石の種類を推測すると、滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測され、これら玉類の合計16個で、分析番号、遺物番号、出土地点などを表28に示した。これら玉類が軟玉とか碧玉製の可能性を考慮して同定を行い報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を

消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[4]非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を測り、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した[5]。

ヒスイ（硬玉・軟玉）の原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産[6]、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を図197に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリュウム（Na）、アルミニュム（Al）、珪素（Si）などの軽元素[7]で、次いで比較的含有量の多いカルシウム（Ca）、鉄（Fe）、ストロンチウム（Sr）である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム（K）、チタニウム（Ti）、クロム（Cr）、マンガン（Mn）、ルビジウム（Rb）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）、ニオビウム（Nb）、バリウム（Ba）、ランタニウム（La）、セリウム（Ce）の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリュウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出きる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Ｎａ元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、

飛驒、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛驒産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素（As）のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は３個しか分析できなかったが良質である。このうち１個は濃い緑色で、他の２個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表29に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準⑴とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準⑴により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判

定基準(1)になる。表2の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図198はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値（横軸）2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、表29の判定基準（2）に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲をもっていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより（図199）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図200）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

上原遺跡第1地点、戸入村平遺跡、小の遺跡出土の玉類の分析結果

これら玉類の比重は3.0以下（アルキメデス法）でヒスイの可能性としては軟玉に属する可能性が大きく、蛍光X線スペクトル（図10～25）には硬玉の主成分の一つのNa元素が全く観測されないことから、これら玉類が硬玉の可能性はないと推測される。これら玉類の原石産地を明らかにするために、元素比を求め表30に示した。特に比重が2.7以上の軟玉の可能性を示す玉類については、ヒスイ（硬玉・軟玉）原石産地判定のために、各原産原石の元素比量Sr/Fe対Zr/Srの分布範囲と玉類の元素比量を比較すると、55696は飛騨産ヒスイの範囲には入らないが非常に近い、日高産の範囲には55700、55702、55705、55706、55707、55711が入り、糸魚川産の範囲に55701、55703、55707が、また神居コタンには55702が入っている。これら玉類は一つまたは複数の産地の重なる範囲に入っていて、入った範囲の原石産地の可能性を示している。他の玉類はどこの産地の範囲にも入らなかった（図201）。Sr/Fe対Ca/Siでは55696は飛騨産ヒスイの範囲に入り、日高産の範囲には55697、55700に入り入った産地の可能性を示している。他の玉類はどこの産地の範囲にも入らなかった（図202）。Na/Si対Mg/Siでは飛騨、日高産ヒスイの範囲に入る玉類は55696、55697、55700、55701、55702、55705、55706、55712番で、日高、糸魚川産には55711が、若桜産の範囲に55699、55703がそれぞれ入り、入った産地の可能性を示している。他の軟玉様玉類はどこの原産地の枠にも入らない（図203）。これら図5、6、7の中で全て共通して枠内に入る可能性を示す玉は55696番が飛騨産の可能性を示しているが、他の分析した玉類

は共通して枠に入る産地はなく、調査されたヒスイ（硬玉・軟玉）原石と異なることが明らかになった。また、55696番の玉のNi/Fe量は0.008で飛騨産ヒスイの0.091±0.030と比較すると小さく飛騨産の可能性は0.6％と低く、図５で55696は飛騨産ヒスイの範囲には近いが、入らないということから、飛騨産でないと推定し、他の玉類についての結果を表４に示した。産地が特定できなかった№10の結晶片岩様緑色岩使用の玦状耳飾については、南九州で多用されている玉材である結晶片岩様緑色岩と、比較した結果を次に示す。

結晶片岩様緑色№10玦状耳飾のＥＳＲ法による産地分析

南九州地域で多用されている結晶片岩様緑色玉類のＥＳＲ分析は、玉類石材に含有されているイオンとか、玉材が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ＥＳＲの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11㎜以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。分析されたＥＳＲ信号は非常に複雑で同じ信号を示す遺物は非常に少なく遺物個々に異なるＥＳＲスペクトルを示している。これはＥＳＲ信号を出す常磁性種が一種類ではなく４種類以上あり、また、各玉とか石材毎に４種類以上の常磁性種の混合比が異なった状態の遺物をＥＳＲ分析する結果、これら各常磁性種のＥＳＲ信号を合成した形でスペクトルが得られるためと推測される。ＥＳＲ信号を出す常磁性種の個数の同定を鹿児島県加世田市上加世田遺跡出土の緑色片岩様玉類の分析結果を用いて試み図204に示した。図204－（１）のバックグラウンド信号と名付けた信号Ⅱは玉によっては信号形が異なることから複数の鉄イオンの信号で構成されている可能性が推測されるが幅広い信号である。図204－（２）は幅の広いバックグラウンド信号と上加世田遺跡出土玉類に特徴的なＹ、Ｘ、Ｗ、Ｚ、Ⅲの一組になったピーク信号を出す常磁性種とで構成され、この信号が南九州で多用される玉材の特徴となっている。信号ⅢにはＳｉ02に関係した信号が含まれている可能性が推測される。W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる小さな常磁性種は玉によっては非常に大きな信号になり、W、Y、Ⅲのピークと重なった部分は相互に変形する。また、一組になったピーク信号は、例えば一方のYが測定されれば、残りの他方のYのピークも他の信号と合成されて変形して確認が困難な場合もあるが必ず存在する。図204－（３）は幅の広いバックグラウンド信号に、マンガンイオンによると思われるＰ、Ｑ、Ｒ、Ｓ、Ｔ、Ｕの同じ信号強度の６本で一組の信号が合成されてできたＥＳＲスペクトルである。Ｍｎイオン濃度が低い状態で、（２）の信号と合成されるとＰとかＰ、Ｑ（Ｗと重なり変形）のピークのみ確認されＲ、Ｓ、Ｔ、ＵがＷ、Ⅲ、Ｘが確認できないと推測される場合が多い。図204－（４）は幅の広いバックグラウンド信号に、少量の（２）が重なっている状態が確認でき、また、信号を出す常磁性種は同定出来ていないが、Ｏ、Ｖのピーク信号は２：１の比で1000ガウス（Ｇ）間隔で対になって構成されている。以上最低４種類の常磁性種の存在が確認できた。また、W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる信号が何種類の常磁性種で構成されているか不明で、まだ上加世田遺跡出土玉類のＥＳＲ信号を完全に説明できない部分が残っている。分光学的に説明ができなくても、Ｙ、Ｘ、Ｗ、Ｚ、Ⅲのピークを出す常磁性種が上加世田遺跡出土玉類に共通して存在することを利用すれば玉類石材の産地分析に応用できる。今回分析した結晶片岩様緑色№10玦状耳飾のＥＳＲ信号を図205に示す。信号は図204－（３）に一致する信号で、南九州で多用される玉材の特徴となっているＹ、Ｘ、Ｗ、Ｚ、Ⅲの

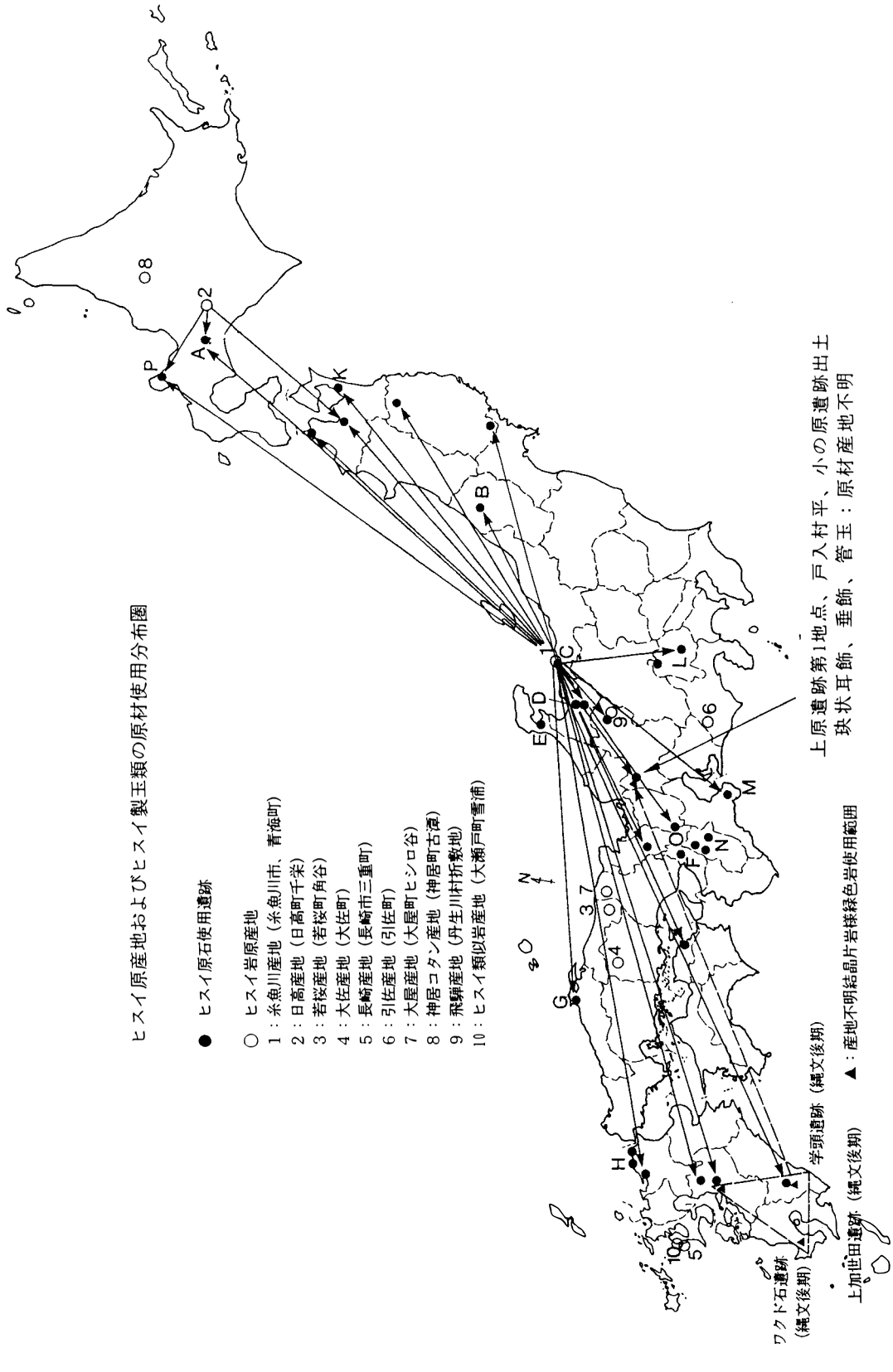
ピークが一つも観測されなかったことからＥＳＲ分析からは、南九州の玉材に限定できないが、しかし、図205の信号を示す玉は各地で見られることから、例えば、産地は不明であるが佐賀県長尾倉富遺跡出土の結晶片岩様緑色玉の信号でもＹ、Ｘ、Ｗ、Ｚ、Ⅲのピークが観測できず、分析した耳飾のＥＳＲ信号に一致し同質の玉材の可能性が推測される。産地分析では玉類の蛍光Ｘ線分析結果とＥＳＲ信号結果が同じ石材群に同定されたとき総合的に判定し、玉類がそこの群の原石と同じものが使用されていると推定する。

結　論

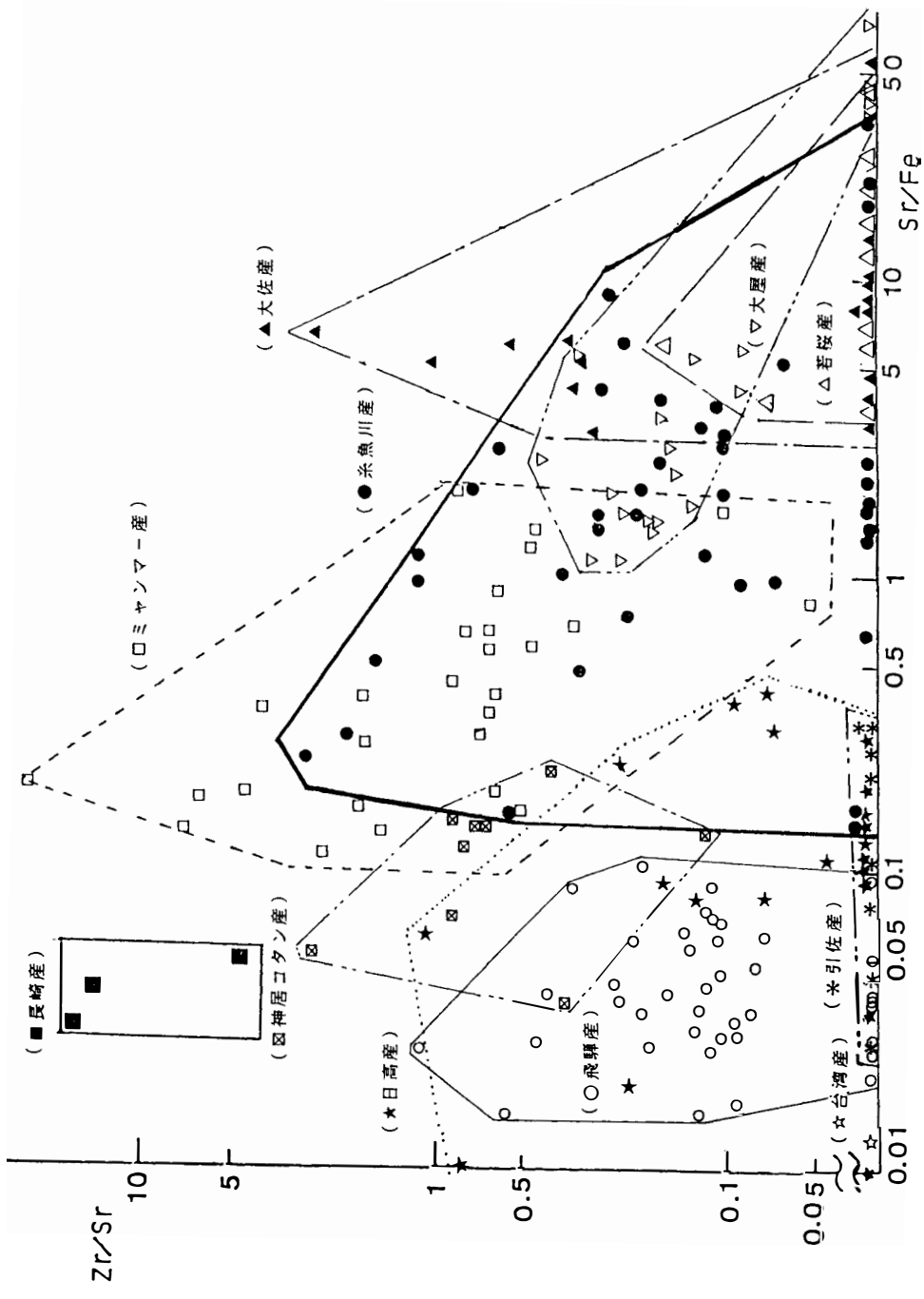
今回分析した玉類は軟玉、蛇紋岩、頁岩様の玉類で、調査されているヒスイ（硬玉、軟玉）の原石と一致しなかったことから、他の産地の岩石の可能性が推測される。蛍光Ｘ線分析の結果からMgが主成分的に含有量が多い上原遺跡第1地点出土の遺物番号1（55696）、2（55697）、5（55700）、6（55701）、7（55702）、9（55705）、10（55706）、戸入村平遺跡の14（55710）、15（55711）、小の原遺跡の16（55712）、17（55713）はカンラン岩起源の変成岩の可能性が推測されるが、他の玉類がカンラン岩起源でないとは言えない。また、Ｃａ元素の含有量が多い玉は１、２、５で、Ｂａ元素は検出限界以下を示し、これら3個の玉は同質の岩石の可能性が推測される。また、Ｋ元素の含有量の多い玉類はＢａの含有量も多い関係にあり、同じ鉱物を含有した岩石の可能性が推測される。また、緑色結晶片岩様の９、10の玉は、ＥＳＲ信号がＰ、Ｑ、Ｒ、Ｓ、Ｔ、Ｕのみであることから、南九州で使用されている結晶片岩様緑色岩の可能性は低いと思われる。今回の分析では産地は特定できなかたが、今後分析数を増やすことにより遺跡間で同じ元素組成とかＥＳＲ信号を持つ原材料の玉類が使用されているかを明らかにすることにより、遺跡間交流に関する情報を得ることができると推測される。

参考文献

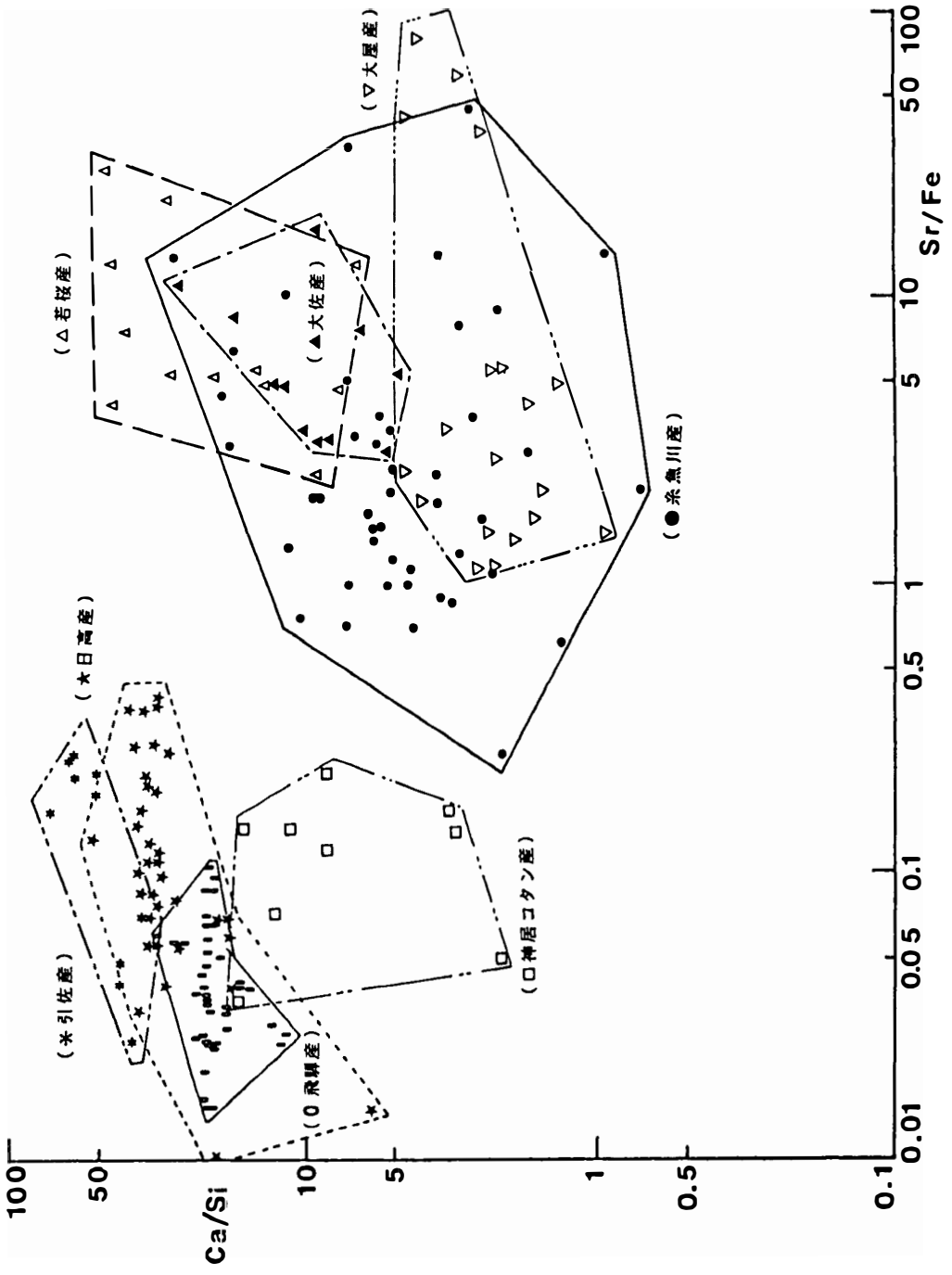
1）茅原一也（1964），長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。
長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63-73
2）藁科哲男・東村武信（1987），ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要，6：1-18
3）藁科哲男・東村武信（1990），奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。
橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』，14：95-109
4）藁科哲男・東村武信（1983），石器原材の産地分析。考古学と自然科学，16：59-89
5）Tetsuo Warashima（1992），Alloction of Jasper Archeological
Implements By Means of ESR and XRF.
Journal of Archaeological Science　19：357-373
6）番場猛夫（1967），北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　No.18：11-15
7）河野義礼（1939），本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。
岩石礦物鉱床学雑誌，22：195-201
8）東村武信（1976），産地推定における統計的手法。考古学と自然科学，9：77-90



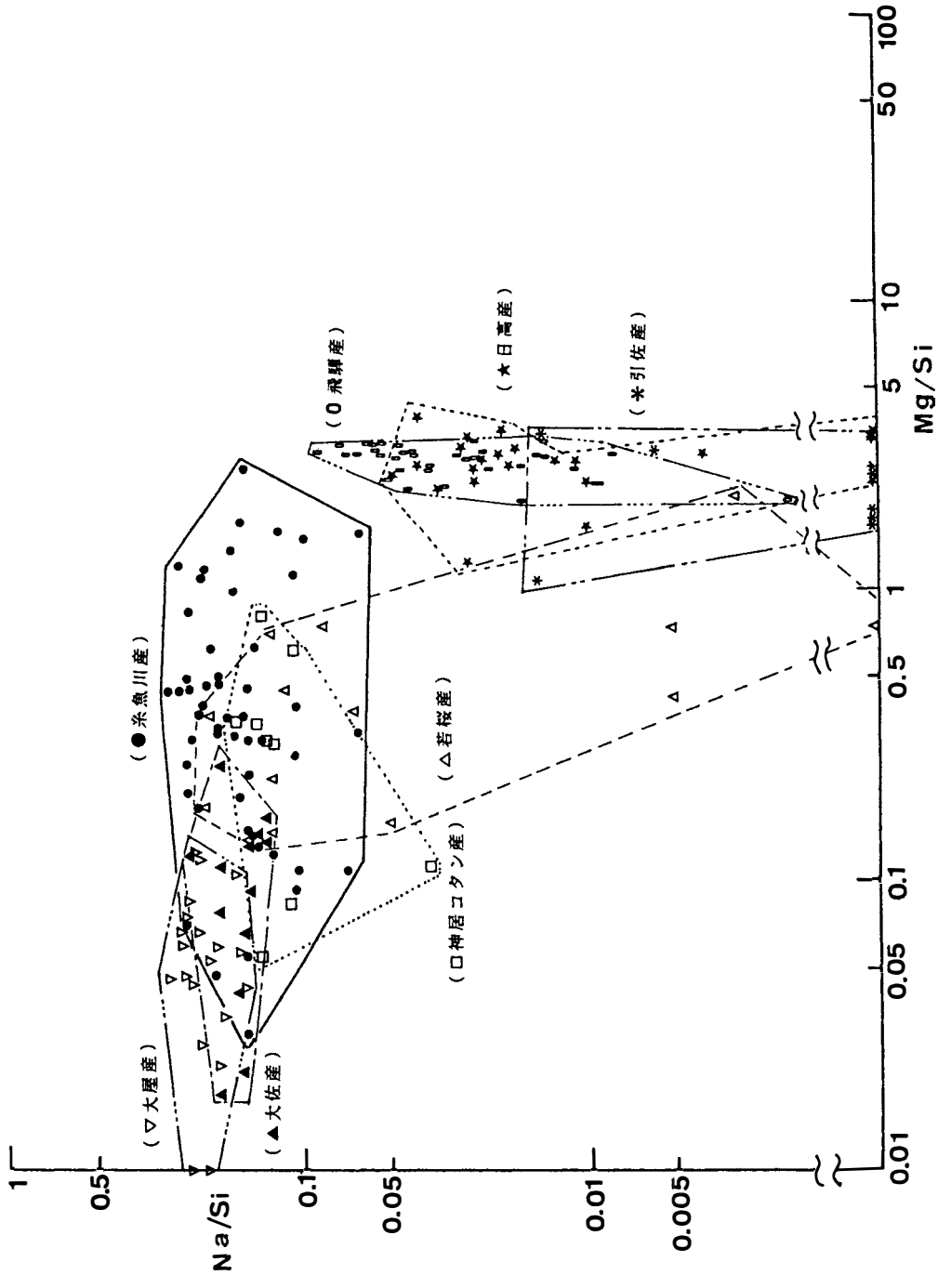
第197図　ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の原材使用分布圏



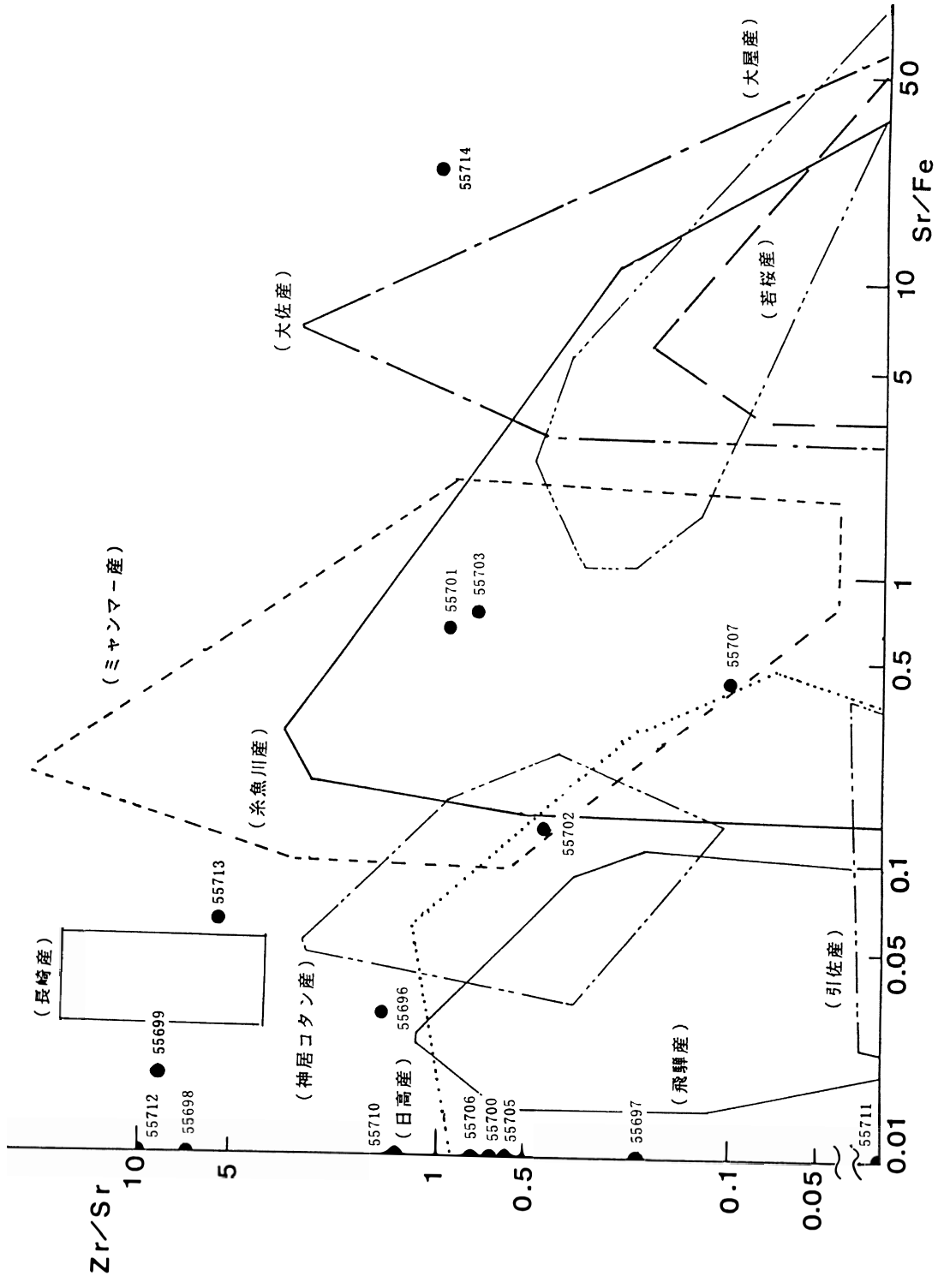
第198図　ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布および分布圏



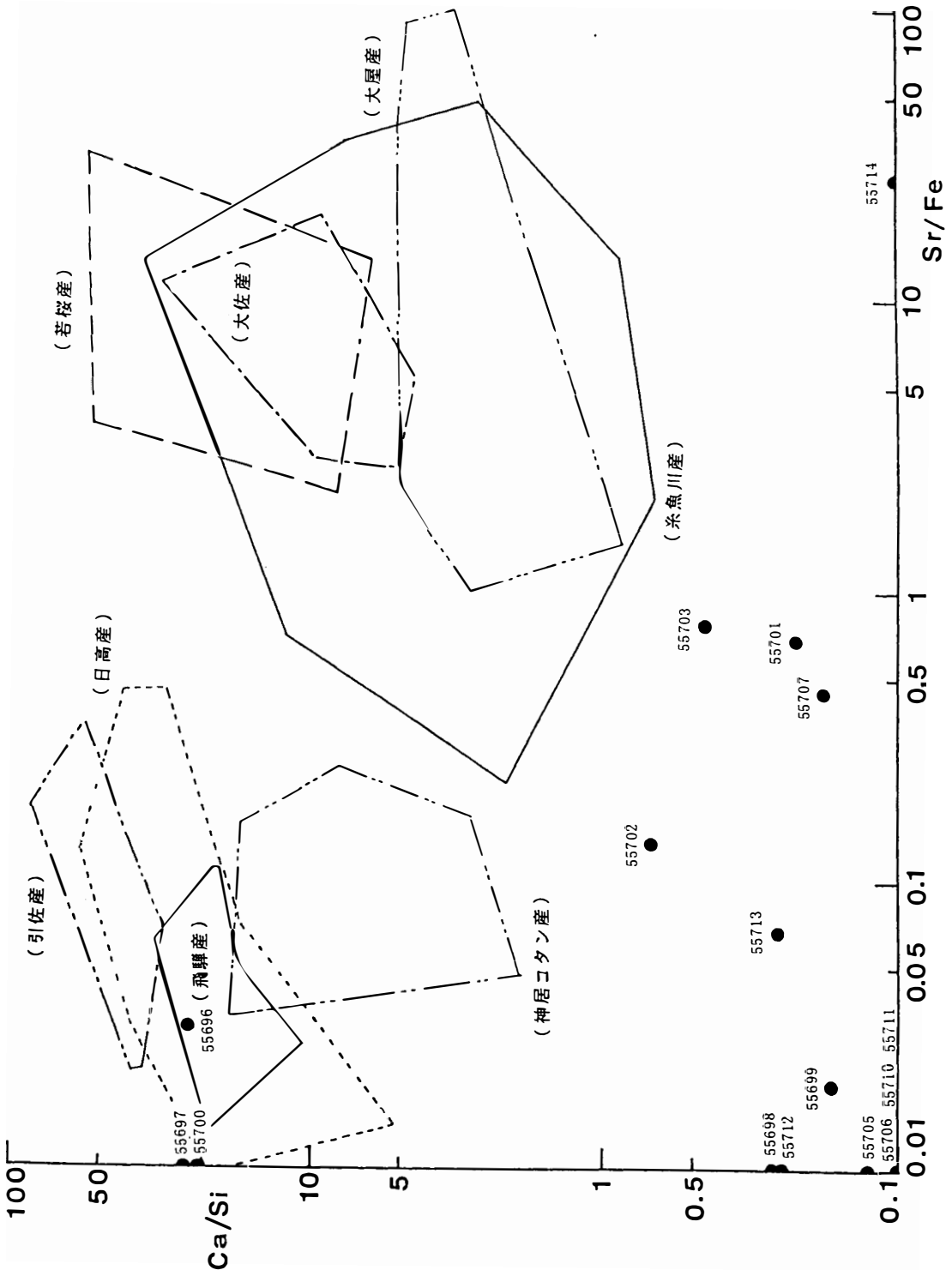
第199図　ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布および分布圏



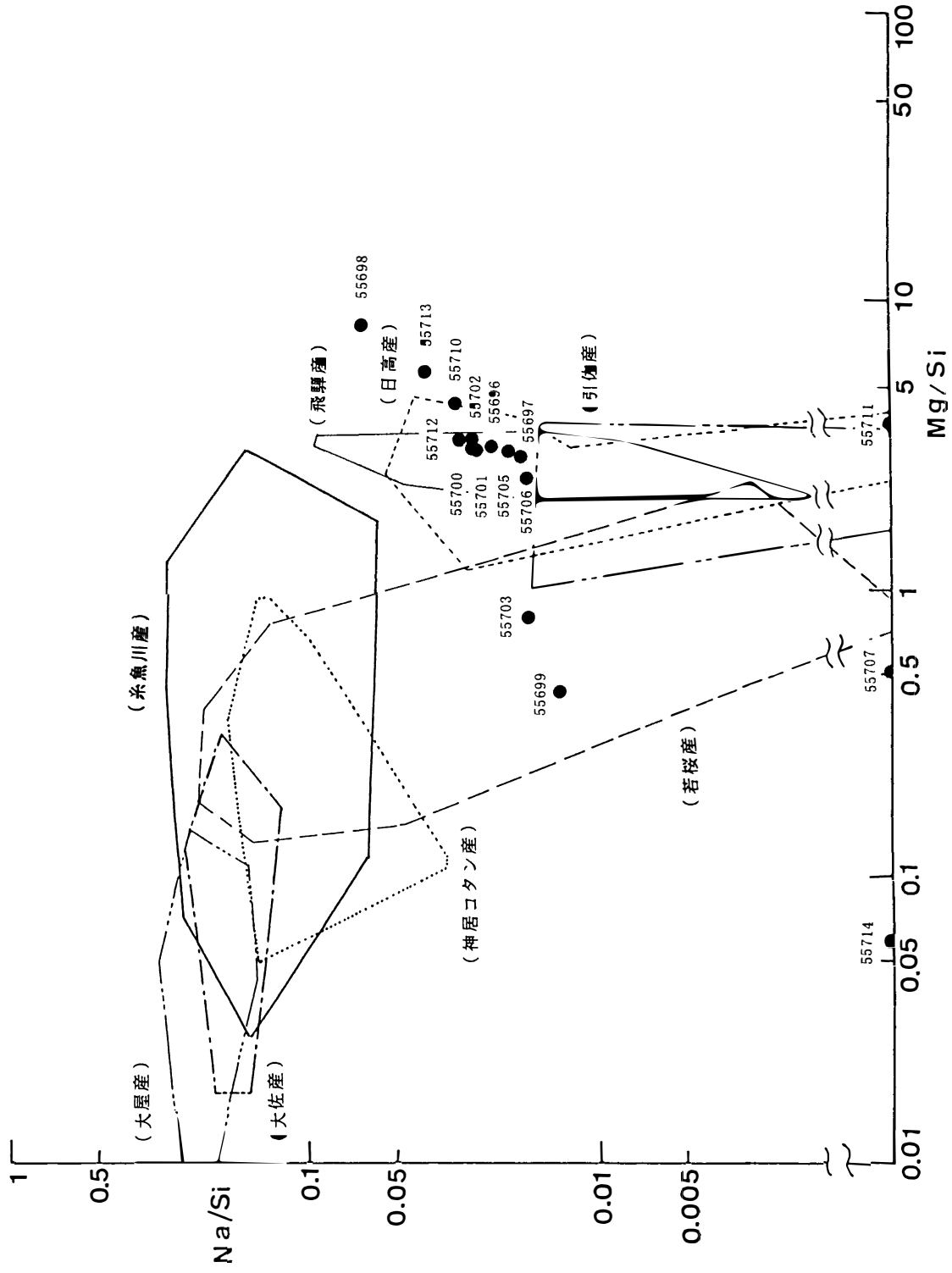
第200図　ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布および分布圏



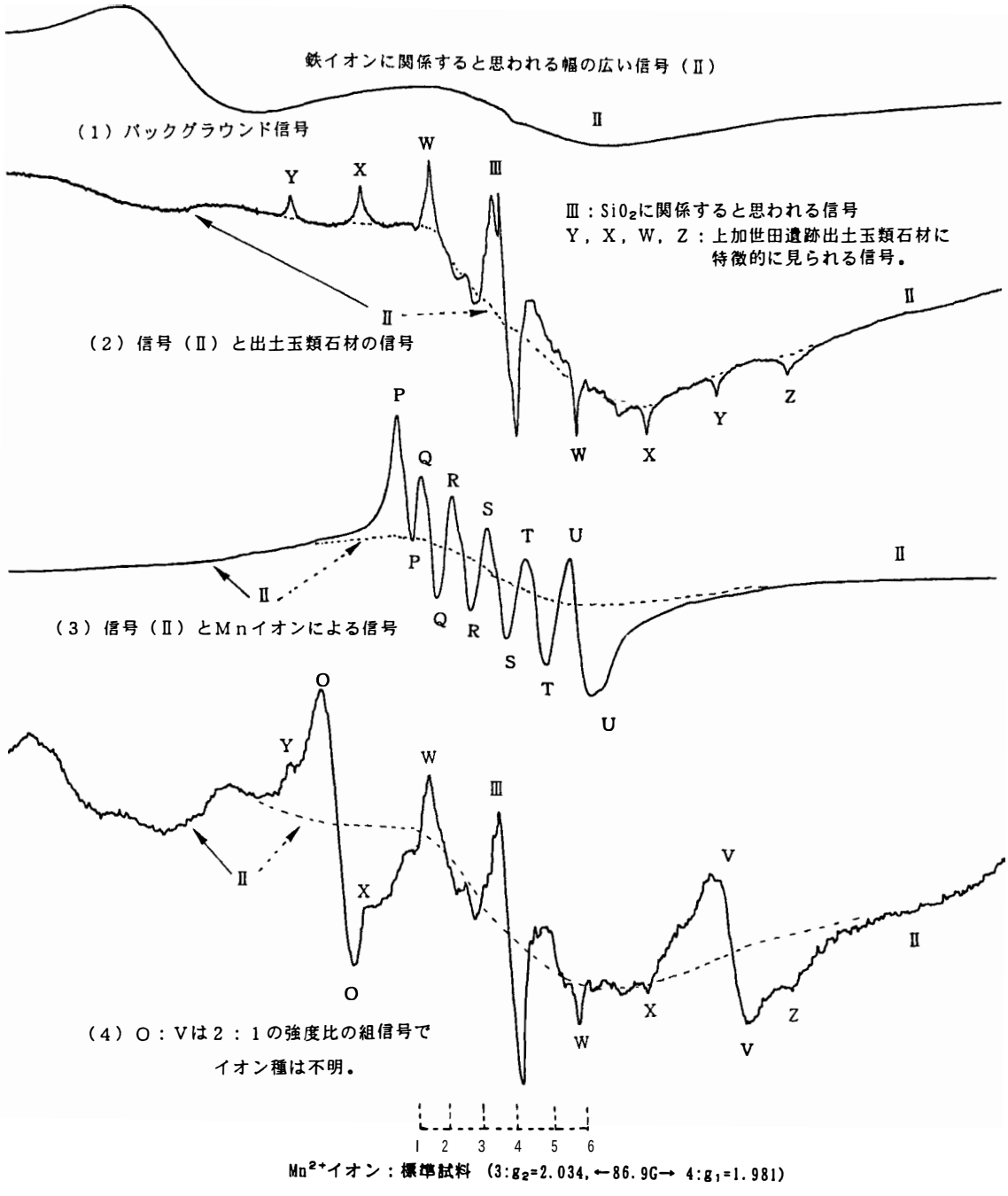
第201図　上原、戸入村平、小の原遺跡出土玉類のZr/Sr対Sr/Feの分布



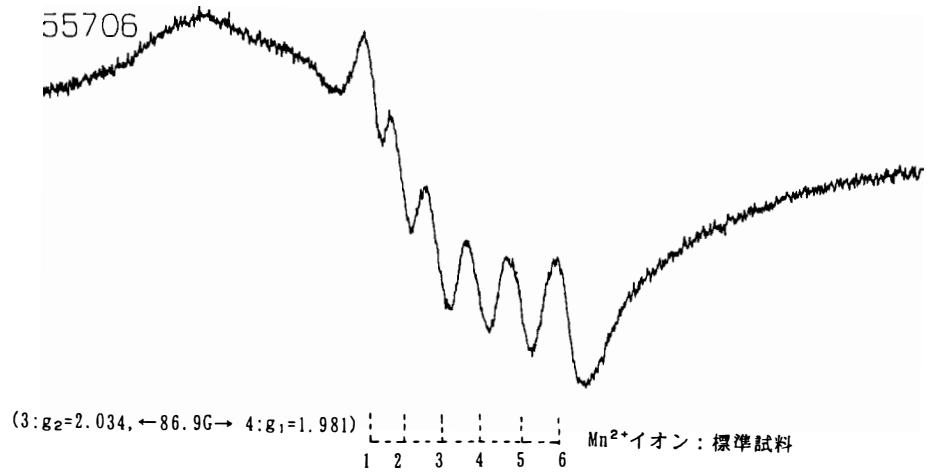
第202図　上原、戸入村平、小の原遺跡出土玉類のCa/Si対Sr/Feの分布



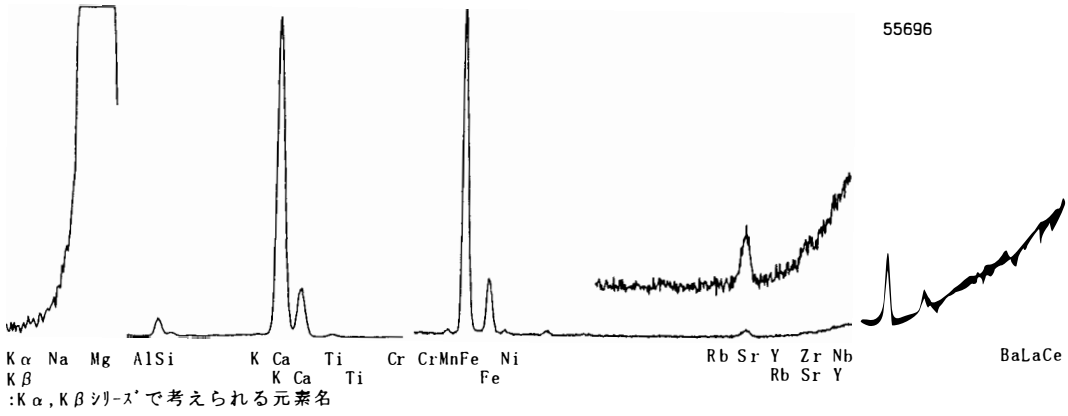
第203図　上原、戸入村平、小の原遺跡出土玉類のNa/Si対Mg/Siの分布



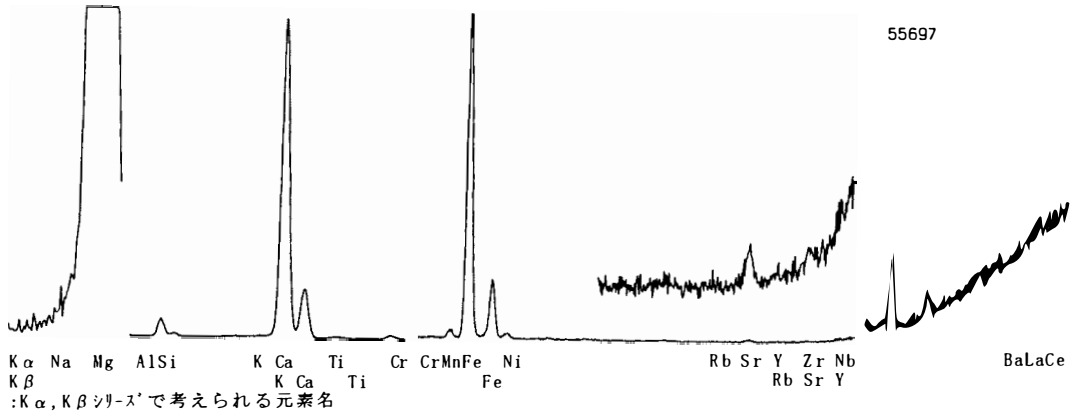
第204図　上加世田遺跡出土玉類石材のESR信号（結晶片岩様緑色玉類石材 比重、3.0～2.7）



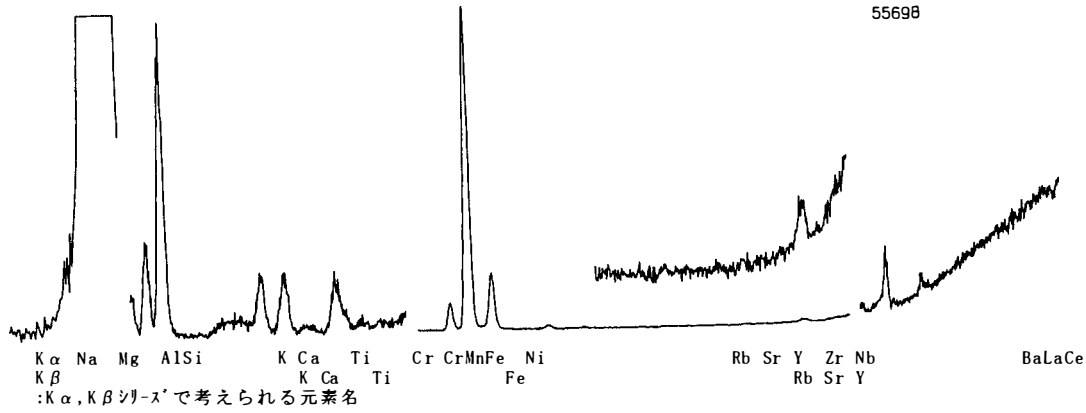
第205図　上原遺跡第１地点出土No.10：玦状耳飾のESR信号
（結晶片岩様緑色、比重2.782）



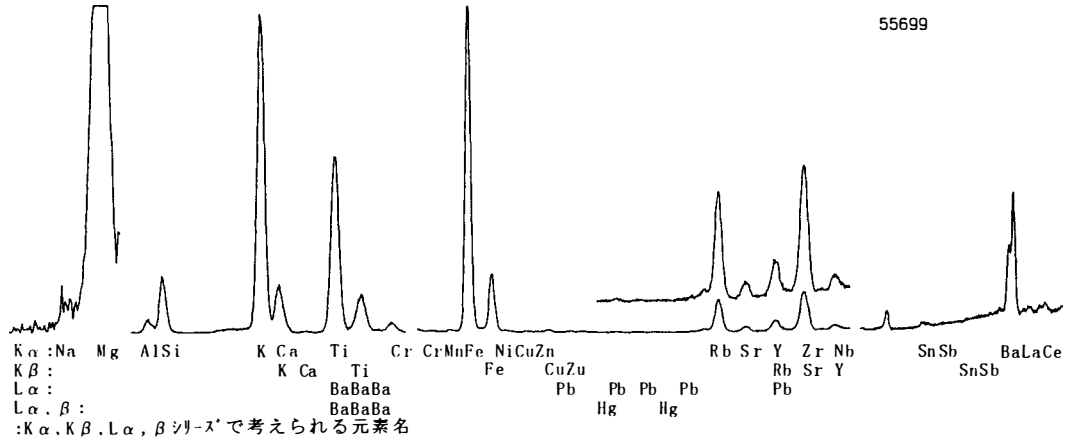
第206図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、1（55696）の蛍光X線スペクトル



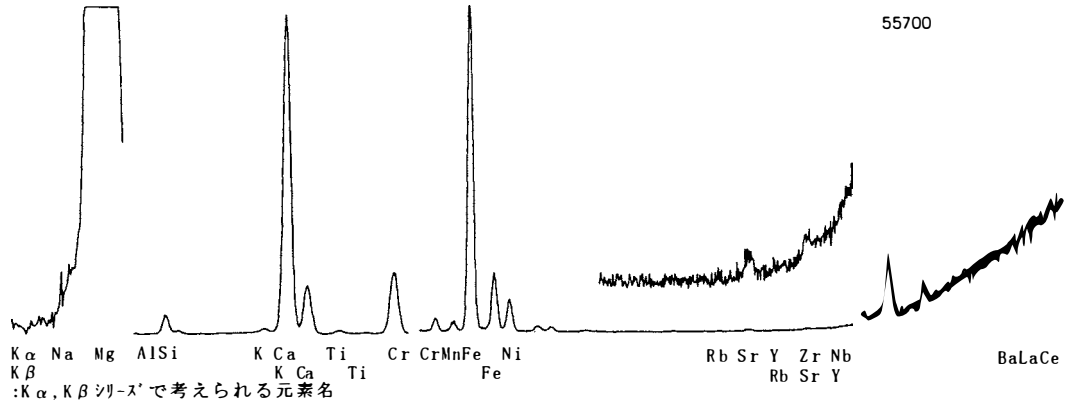
第207図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、2（55697）の蛍光X線スペクトル



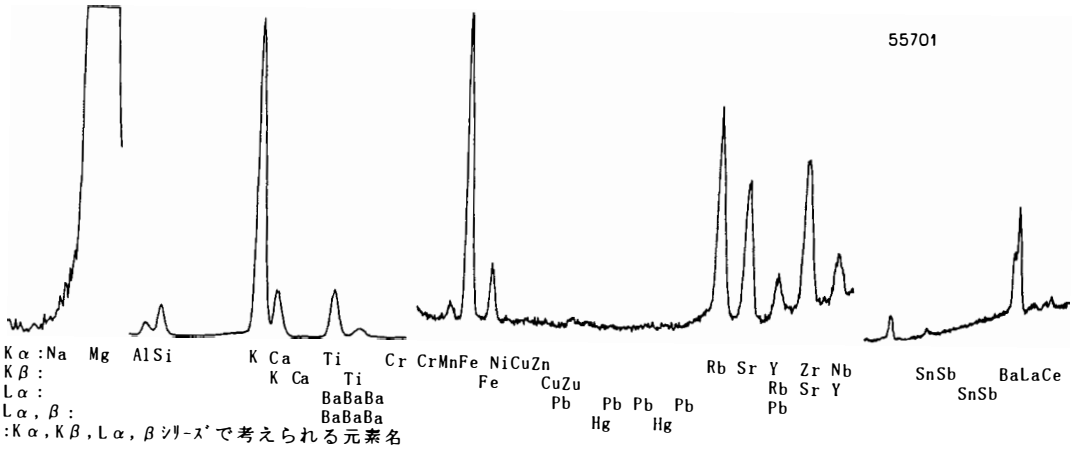
第208図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、３(55698)の蛍光X線スペクトル



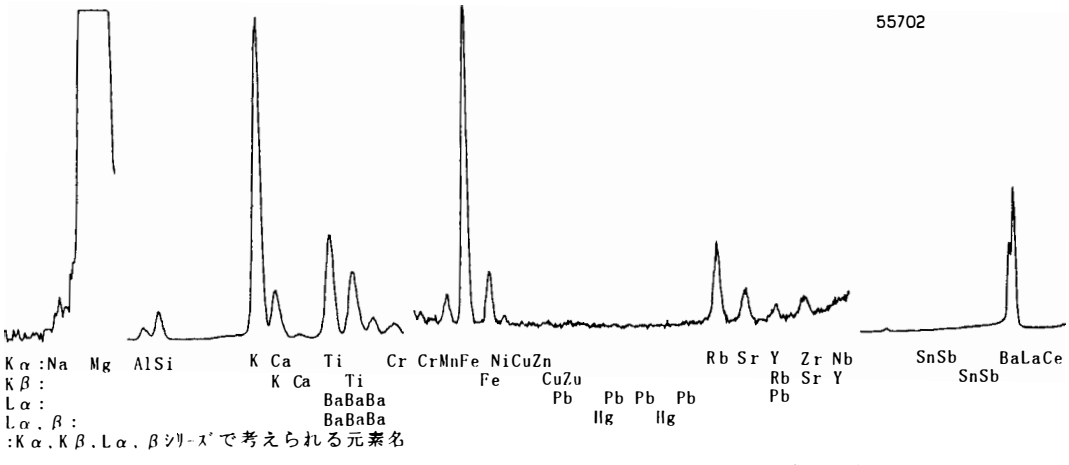
第209図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、４(55699)の蛍光X線スペクトル



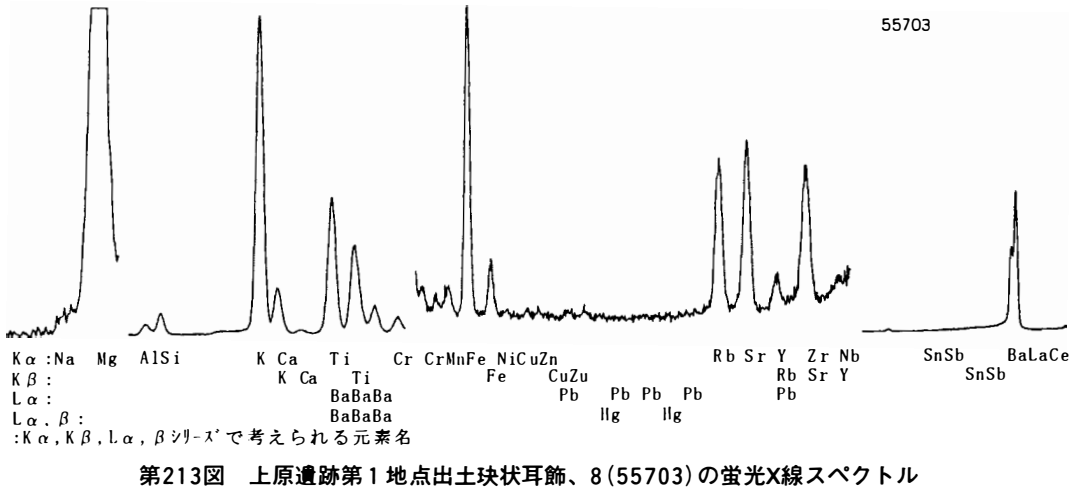
第210図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、５(55700)の蛍光X線スペクトル



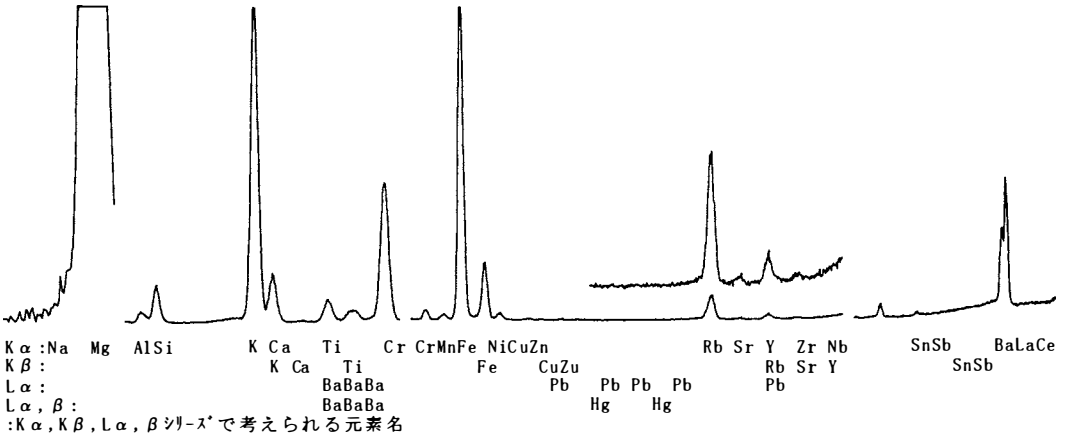
第211図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、6(55701)の蛍光X線スペクトル



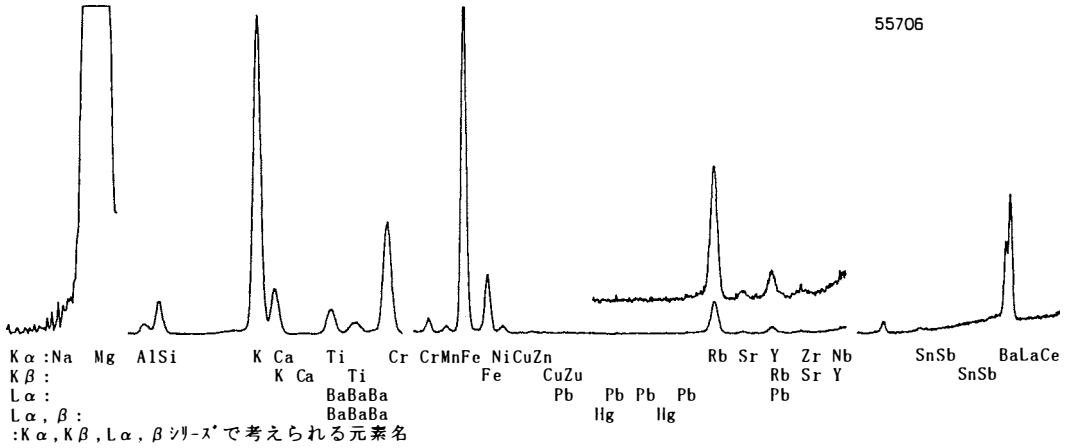
第212図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、7(55702)の蛍光X線スペクトル



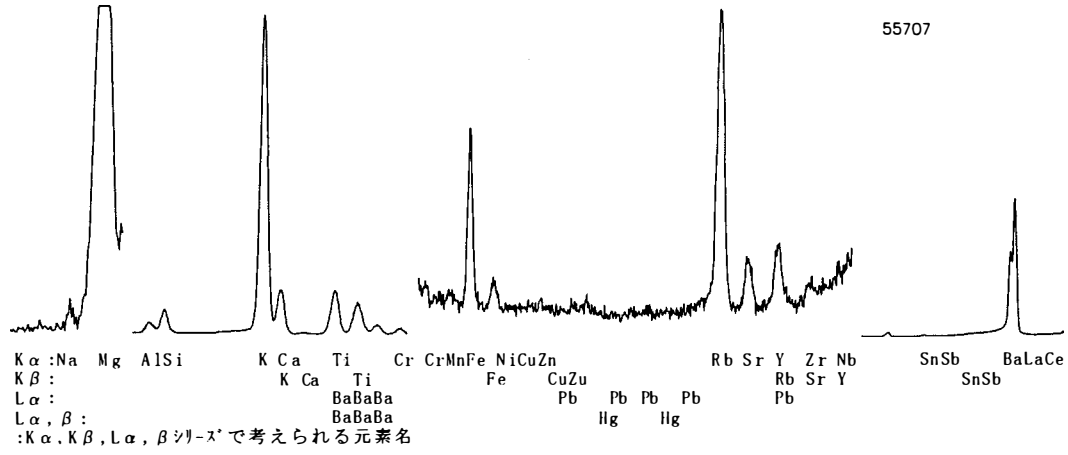
第213図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、8(55703)の蛍光X線スペクトル



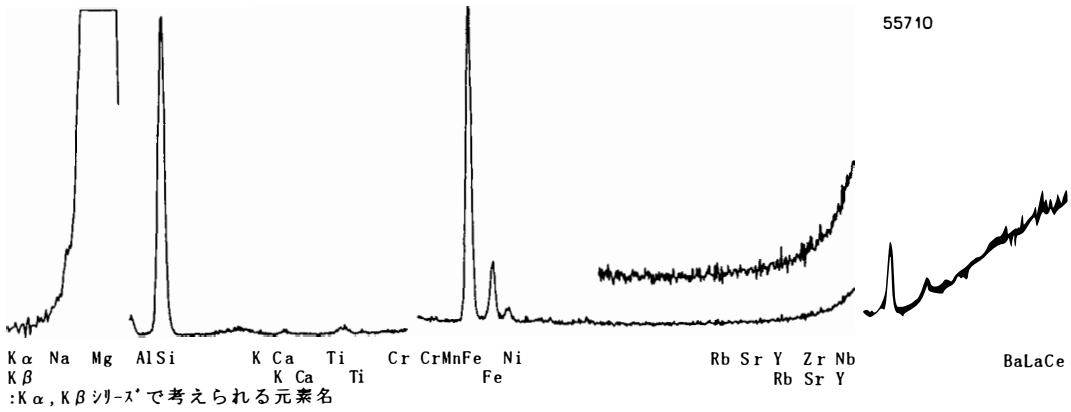
第214図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、９(55705)の蛍光X線スペクトル



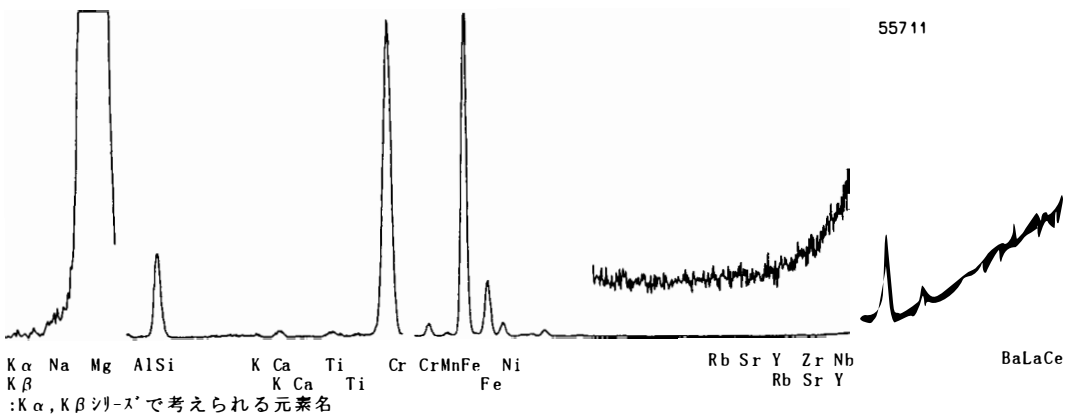
第215図　上原遺跡第１地点出土玦状耳飾、10(55706)の蛍光X線スペクトル



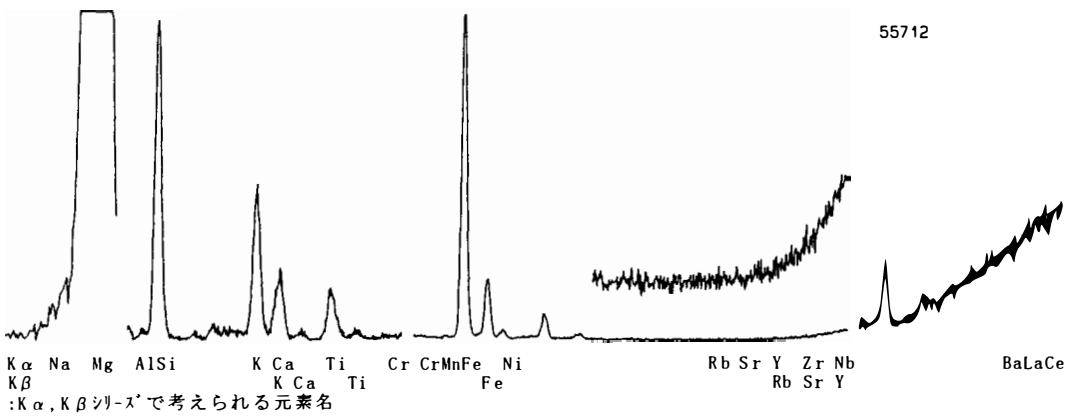
第216図　上原遺跡第１地点出土垂飾、11(55707)の蛍光X線スペクトル



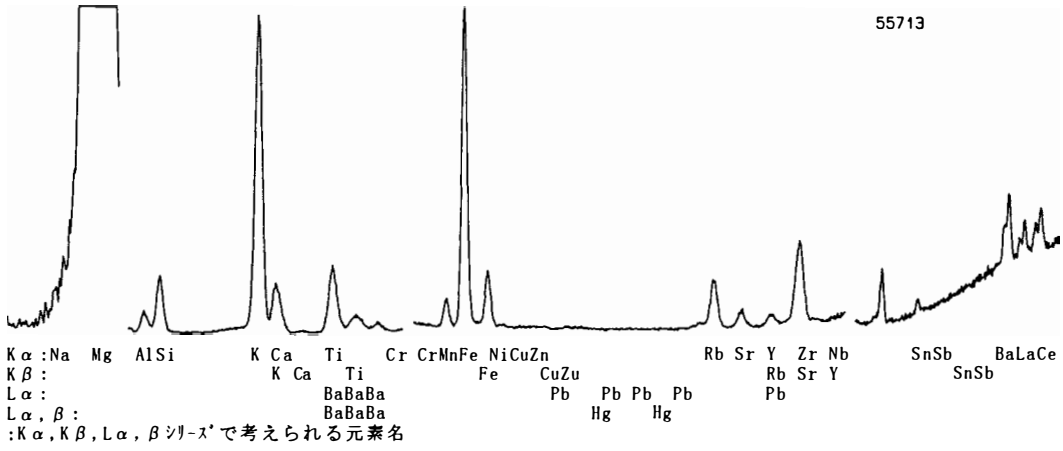
第217図　戸入村平遺跡出土垂飾、14(55710)の蛍光X線スペクトル



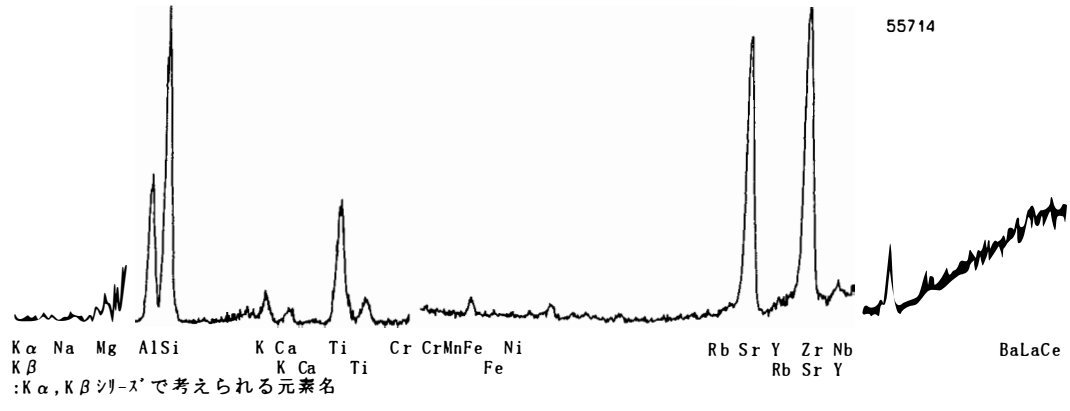
第218図　戸入村平遺跡出土垂飾、15(55711)の蛍光X線スペクトル



第219図　小の原遺跡出土管玉、16(55712)の蛍光X線スペクトル



第220図　小の原遺跡出土玦状耳飾、17(55713)の蛍光X線スペクトル



第221図　小の原遺跡出土玦状耳飾、18(55714)の蛍光X線スペクトル

第9章　考察

近藤大典・鈴木隆雄・堀田一浩

上原遺跡の調査は、平成2年度より始まり平成8年度に幕を閉じた。足かけ7年にも及ぶ、徳山地区最大級の調査であった。調査面積も25,866㎡と最大で、他に例を見ない。また整理及び報告書作成業務も5年間費やされた膨大なものであった。本書に先行して刊行されている『上原遺跡Ⅰ』では第2地点についてのみ記載されているが、上原遺跡の報告は本書と併せもって完結する。以下に本書で報告した5地点の考察と第2地点も含めた上原遺跡全体に及ぶまとめを記す。

各地点の考察

本書に記載された第1・3・4・5・6地点について、各地点の様相または調査の結果明らかになった成果などを各地点別に記述する。

第1地点

本地点の調査で得られた成果を箇条書きにしてまとめると以下のようになる。

A　縄文時代前期後葉の集落跡が確認できた。

B　徳山地区における縄文時代前期後葉の土器群の様相が明らかになった。

C　縄文時代前期後葉を主とする装飾品の様相が明らかになった。

D　上原遺跡における切目石錘の初現が確認できた。

E　徳山地区の発掘調査で初めて弥生時代中期の土器が出土した。

それぞれについては、本編中で若干触れたり詳細に後述したりするので、重複を避けここではAのみについて説明を加えることにした。なおBについては「上原遺跡出土の突帯文土器」で後述する。

Aについて

本地点では竪穴住居跡を8軒検出した。共通する特徴は長径4～5m前後と標準的な大きさであること、掘形がはっきりせずなだらかに床面中央部に向かっていく皿状の断面形を持つ、などである。どの住居跡も前期後葉の縄文土器をその埋土および床面付近に包含しており、営まれていた時期はあまり隔たらない（詳細は後述）。またSB04以外は屋内炉を持たない。床面近くで硬化した部分を検出した住居もあるが、地床炉などもほとんど確認できていない。基本的に屋内施設を持たない構造と考えられる。ただ出土した遺物量の点で他と異なるのはSB05である。他の7軒の住居跡が数十～数百点であるのに対してSB05からの出土は2,000点を超える。床面も他に比べ深く掘られている。出土した土器様相（詳細は後述）からしても他住居より長期間住居していた可能性もある。そのほかに住居跡に近い竪穴状遺構を3基確認している。中でもSX02は出土した遺物の状況から判断しても、限りなく住居跡の可能性が高いと言える。第4地点でも前期後葉の土器が出土した住居跡を1軒検出している。下層での検出のため詳細は不明な点もあるが、第1地点で検出した住居跡と似た特徴を示しているとおり、おそらく同時期に営まれていた可能性は高い。第1地点とあわせると9軒となる。これら9軒はいずれも調査区の山側で検出しており、AH4－SB01が若干離れてはいるものの、集中

が見られる。川側ではピット・土坑は検出できたが、住居跡は検出できていない。

本地点及び隣接する第4地点の一部で検出した縄文時代前期後葉の集落跡（以下「前期集落」）については3つの検討課題がある。1つは住居跡や土坑などの遺構配置についてである。これら前期集落の遺構配置の特徴として挙げられるのは、住居跡が山側部分に集中していることである。堆積状況との関係も否定できないが、川側部分では住居跡が検出できず、土坑その他が点在している。第3章第2節でも触れたが、時期がある程度特定できるＳＫ03・04を土壙（墓）と判断すると、それらの配置から居住区と墓域を区別する意識があったのではないかという仮説が成り立つ。当然のことながら遺物の出土量も住居跡集中区で多い。しかし、墓域を決定できる確証はＳＫ03・04以外にはほとんどなく、その可能性があるにすぎない。

2つ目の課題は、それぞれの住居の営まれた時期である。出土した土器を大別すると、やや古相を示す縄文突帯土器を伴う住居と、新相を示す特殊突帯文土器を主体とする住居がある。突帯文土器については後述するが、縄文突帯＝古段階、特殊突帯＝新段階という報告者の理解を前提とするならば、ＡＨ1－ＳＢ02・03・07が古段階に属し、ＳＢ01・08・06・ＡＨ4－ＳＢ01が新段階、ＳＢ05は両段階にまたがる時期と考えられる（ＳＢ04については第3章第2節で報告したように、他時期の遺構の影響を受けている可能性があるのでこの区分からは除外した）。住居跡としてではないが、ＳＸ02についても言及するならば新段階といえるであろう．ＳＸ02を含めた遺構のうち、最も古い様相を示すものはＳＢ02・03であろう。口縁部外面に多条化した縄文突帯を有する土器が比較的良好な状態で伴っている。そして最も新しい様相を示すものは前期末葉の鍋屋町式土器を伴うＳＢ01である。鍋屋町式土器を客体として捉えるならば、北白川下層Ⅲ式土器が主体となる。ここに若干の時期差を設定し、新古二段階として記述してきたが、これら二段階は明確に時期差があるというよりむしろ連続していると捉えた方が無理がないようにも思われる。それはＳＢ05の出土状況からもいえる。

3つ目の課題は、第2地点（ＡＨ2）で検出したＳＢ05との関係である。『上原遺跡Ⅰ』で報告したように、ＡＨ2－ＳＢ05は北白川下層Ⅱ式を主体とする住居跡で、周辺からも含めて約3,000点の前期の土器が出土している。『上原遺跡Ⅰ』によると、主体は北白川下層Ⅱａ～Ⅱｃ式である。本地点からは第2地点で確認したような北白川下層Ⅱｃ式は見あたらず、土器を見る限りでは同じ北白川下層Ⅱ式といえどもそこに時期差が感じられる。詳細は後述する。第2地点と第1地点の北白川下層Ⅱｃ式を区別して考えると、そこに断絶もしくは住み替えが想定できる。他の土器を見渡しても共通するものはあまりなく、石器の様相でもそうした面がうかがえる。何故の断絶もしくは住み替えであるのかは不明であるが、西谷の小の原遺跡とはいづめ遺跡でも同様なことが言える。晩期が主体であるはいづめ遺跡からも少量の前期後葉の遺物が出土しており、それらは報告書作成時には小の原遺跡からの流入と考えられていたが、その土器様相は共通項がほとんどなく、第2地点と第1地点に見られるような差がある。徳山地区で出土している前期の遺物はあまり多くなく、この断絶もしくは住み替えがこの2例だけでなく、この地区に共通する現象であるか否かは判然としないが、可能性は指摘でき、今後検討を加えていく余地があろう。

本地点の集落構造及び時期差についてはさらなる追究が可能であるかもしれないが、報告者の能力の限界を超えているので、本書ではここまでとし、後は研究者諸氏に譲りたい。

第3地点

本地点の調査では、旧石器時代のナイフ形石器に始まり、縄文時代の土器・石器類、古代以降の灰釉陶器などの多くの遺物が出土した。しかし、旧石器～縄文時代のものと特定できる遺構は確認できなかった。検出したのは平安時代の遺構だけである。

本地点より出土した縄文土器は約260点ほどであるが、その多くが摩滅している。そのため詳細は不明であるが、帰属する時期はほとんどのものが中期以降と思われる。時期的には限定されるが、出土した個体全体にはまとまりがなく、本地点で埋没したとは考えにくい。また出土した石器類は採集的色彩が強い組成である（「各地点における石器の考察」で後述）。土器・石器類の存在から縄文時代にも本地点への人々の訪れがあったことはまず間違いない。しかし縄文時代の遺物を見る限りでは、当時本地点が生活の拠点であった可能性は低く、根菜類採集地としての性格が強いと考えざるをえない面がある。

一方、縄文時代とは異なり、古代以降の土器は比較的良好な状態で出土しているし、わずかではあるが遺構も検出できた。特にＳＫ01は灰釉陶器を伴う土壙墓で、徳山地区において初めての検出である。これまで徳山地区の古代遺構については各遺跡で遺物を確認しているものの、遺構は寺屋敷遺跡で平安時代の礎石建物跡を検出しているほか、本遺跡の第２地点でも掘立柱建物跡を、山手宮前遺跡でも同様に掘立柱建物跡を検出しているにすぎない。徳山地区では縄文時代の遺構・遺物について大きく焦点が当てられているが、古代以降については未だ不明な点が多い。そうした中で、今回の土壙墓は新資料の追加となり、この地区の古代以降の歴史を解明していく上で手がかりの一つとなる。

第4地点

第５章第２節で記述したように、本地点の調査では第１地点に隣接する川側部分においてのみ成果があがっている。本地点の特徴を端的に表現すると、第１地点と第２地点の中間的な存在であると言える。本地点中央部付近では縄文時代前期後葉の住居跡を１軒検出した。またその川側では北白川下層Ⅲ式土器を出土した土坑も確認している。土器から判明する時期その他を検討すると、本地点独自のものと判断するより、第１地点に形成されている前期集落の一部と考える方が妥当である。前期の遺物はこのＳＢ01付近を中心に出土しており、他へあまり広がりはみせない。一方、下流側の第２地点に近い箇所では、中期船元・里木式土器を伴うピット群を検出している。出土した中期以降の土器についても、第１地点より良好である。中期の遺物は第２地点からの流れ込みではなく、本地点のものと言えよう。つまり上流側は隣接する第１地点の前期集落の一部であり、下流側は第２地点でその中核をなす中期以降の集落に連なるという、両地点の橋渡し的な存在であったと考えられる。本地点は位置的にも両地点の中間に当たり、まさにその立地条件が遺跡の性格に反映されていると言える。

しかしそれだけではなく、本地点は上原遺跡の縄文時代早期を考える上でも重要な意味を持っている。上原遺跡では、数点の早期の遺物が出土しているが、その中心がどこにあるのかは不明である。第１地点からは高山寺式土器が、第５地点からはさらに古相を示す押型文土器が出土している。本地点からも高山寺式土器が出土しているが、その質・量ともに本遺跡内では最も良好である。また焼礫集積遺構も確認している。早期全体をまとめてしまうには無理があるが、少なくとも高山寺式土器の分布の中心は本地点にあるといっても過言ではあるまい。

第32表　本書における土器分類と『縄文土器大観』編年の対応表

時期	『縄文土器大観』土器様式	本書での土器分類（群）	時期
早期	押型文系土器様式	S 1	S I
	条痕文系土器様式	S 2	S II
前期	羽島下層II式 北白川下層式　I式 II a 式 II b 式（古） II b 式（新） II c 式	Z 1 Z 2　Z 5　Z 6　Z 7　Z 8 Z 3　（Z 9） Z 3	Z I 期
	III式	Z 4	Z II 期
中期	船元・里木式　第1様式 第2様式 第3様式	（C12） C 1　C 4	C I 期
	第4様式 第5様式　咲畑・醍醐式　第1様式 第6様式	C 2　C 5　C 6 C 3　C 7 C 8	C II 期
	第2様式 第3様式	C 9　C10　C11	C III 期
後期	中津・福田K II式　第1様式 第2様式 第3様式 第4様式	K 1 K 2 K 3	K I 期
	縁帯文　第1様式 第2様式	K 4　K 5　K 6	K II 期
	凹線文系　元住吉山II式 宮滝式前期 宮滝式後期		K III 期
晩期	西日本磨研　第1様式 第2様式	B 1 B 2	B I 期
	凸帯文系　第1様式 第2様式 第3様式	B 3　B 5 B 4	B II 期

第33表　上原遺跡の各地点における縄文土器出土量と遺構

時期		第1地点		第2地点		第3地点		第4地点		第5地点		第6地点	
		土器	遺構	土器	遺構	土器	遺構	土器	遺構	土器	遺構	土器	遺構
早期	S I	○		△		△		○	集石1	△			
	S II									△	（焼礫2）	△	
前期	Z I	△		○	住居1			△					
	Z II	◎	住居7・土坑3	△				◎	住居1・土坑1			△	
中期	C I	△		○									
	C II	△		◎				○					
	C III	△		◎	住居2・炉5	○							
後期	K I			◎				△					
	K II			◎	炉2								
	K III			△									
晩期	B I			△		△		△					
	B II	△		◎	土器棺墓6			△					

第5地点

本地点における調査の目的は、第2地点の範囲確認の際に行ったトレンチ掘削によって確認されたアカホヤ火山灰を含む黒褐色土中の遺構・遺物の確認であった。トレンチ掘削による調査の結果、縄文時代早期の押型文土器と焼礫集積遺構が確認できた。早期の土器は第1・2・4地点から出土している山形押型文土器や高山寺式土器より型式編年上古く、上原遺跡最古のもので徳山地区では小の原遺跡の表裏縄文土器に次ぐものであることが判明した。本地点の現状は中位段丘上にあるといえども背後には高位段丘を控え、生活の拠点とするにはいささか不向きな面もある。しかし縄文時代早期の時期においては適した環境下にあり、何らかの営みが行われており、それがアカホヤ火山灰降灰後、度重なる崩落により移動を余儀なくされることになったと思われる。第6章にプラントオパールの分析結果に基づく古環境について記したが、当時は森林の下草的存在であり水利に富んだ好環境であったと思われる。

第6地点

本地点の調査によって得られた成果は、数度にわたる自然災害の影響を受け、縄文時代には生活の拠点とする環境ではなかったということである。本地点は隣接する第1地点を初めとする中位段丘に付随する根菜類採集地としての性格が強かったのではないかと思われる。その点では第3地点と同様である。ただ違う点は古代以降も近現代に至るまで、土地の利用度は低かったということである。本地点から出土した早期末～前期初頭に帰属すると考えられる「オセンベ土器」は、第5地点で出土した摩滅が激しい土器と似ていることから、第5地点からの流入が考えられる。

縄文時代の上原遺跡

上原遺跡の縄文時代については、『縄文土器大観』における土器編年などを参照し、表32のように時期区分を行った（詳細については『上原遺跡Ⅰ』を参照）。ここで次の1点のみ解説を加えておきたい。前期について、前期末、北白川下層Ⅲ式（大歳山式を含む）をＺⅡ期に、それ以前をＺⅠ期とした。区分の分量に問題がある。これは前期前半（型式名でいうと北白川下層Ⅰ式以前）が確認されなかったこと、前期末に第1地点を中心に大きなピークが認められたこと、などによってこのような形になった。

さてその時期区分にもとづき、各地点において出土した土器量、主な遺構の種類とその数を合わせて示したのが表33である。なお土器量については、多量を◎、少量を△、その中間を○とあらわした。その基準については、本来個体数などを利用すべきであろうが、大半が破片で出土し正確な個体数の把握が不可能であったため、ある程度感覚に頼らざるを得なかった。

第33表をみながら、各時期について簡単に概観したい。

早期　各地点で土器が確認されているが、第1・4地点を除いては少量の出土である。大半はＳⅠ期、押型文土器であるが、第5・第6地点においてはＳⅡ期の条痕文土器も確認されている。遺構としては、第4地点で集石遺構が1基（ＳⅠ期）、第5地点で焼礫集積遺構が1基（ＳⅡ期と思われる）が確認されている。

前期　前期後半以降の土器が、第3・第5地点を除く各地点で確認されている。興味深いのは、地点によってⅠ期、Ⅱ期のいずれかに出土量のピークが偏る点である。Ⅰ期（北白川下層Ⅱ式）は第2地点、Ⅱ期（北白川下層Ⅲ式以降）は第1・第4地点である。遺構については、竪穴住居跡がⅠ期には第2地点で1軒、Ⅱ期には第1地点で8軒、第4地点で1軒検出されており、土坑が第1・第4地点で見つかっている（いずれもＺⅡ期）。ＺⅠ期からＺⅡ期にかけての時期において、遺跡の中心が第2地点から第1地点に移ったという現象が想定できそうなことは前述した。

中期　第5・第6地点を除く各地点で中期の初頭を欠くが、中期前半からの土器が確認されている。第2地点はこの時期、とくに中期後半（ＣⅡ期・ＣⅢ期）に土器量のピークがあり、それはこれまで調査された徳山地区の遺跡中でも屈指の出土量を誇る。第2地点以外の中期の土器は、第2地点に比べると圧倒的に少ない。主な遺構については、第2地点において竪穴住居跡2軒と炉跡5基が確認されている。また第2地点では中期後半の土器が集中して出土した範囲と、1,700基以上検出されたピット・土坑の分布範囲とは大まかに重なり、それが半円形あるいは環状をかたち作る状態が観察される。竪穴住居跡、炉跡は円形または環状の中に存在する。このことから中期後半には、第2地点において円形あるいは環状を意識した状態が存在した可能性が考えられる（ただし、全てのピット・土坑がその時期のものというわけではない。後期・晩期とも同じ地区を利用しているからである。ここで示したのは、総体として上記の可能性が高いという見解である）。このように中期、とくに中期後半には遺跡の中心は第2地点にあったと考えられが、その状態はＣⅠ期（船元・里木土器第3様式併行期）から認められる。なお、第1地点ではＣⅠ期内でもそれより遡る船元・里木土器第2様式併行（船元Ⅰ式）と考えられる土器が出土している。同時期のものは他地点では確認されておらず、中期における遺跡の開始は、その後の第2地点への発展に連続的に移行したものではないと想定される。

後期　第2地点と第4地点において土器が確認されるが、第4地点は少量である。第2地点ではＫⅠ期～ＫⅡ期（中津・福田ＫⅡ式土器～縁帯文土器第1様式）の土器が連続してまとまった量出土している。主な遺構としては、第2地点においてＫⅡ期と考えられる炉跡が2基検出されており、小期は不明であるが土器棺墓も1基検出されている。ＫⅢ期については、第2地点においてわずかに土器が確認されるのみである。後期前半における遺跡の中心は、中期に引き続き第2地点にあった。

晩期　第5・第6地点を除く各地点で土器が出土している。ＢⅠ期の土器は第2・第3・第4地点で確認できるが、いずれも少量である。ＢⅡ期には第2地点においてまとまった量が出土している。主な遺構としては、第2地点において土器棺墓を6基検出している。

なお、第2地点の遺跡状況の詳細については、『上原遺跡Ⅰ』を参照されたい。

弥生時代の上原遺跡

第1・第2地点で、弥生土器が出土している。弥生前期には遠賀川式系・条痕文系・沈線文系土器が、中期には朝日式土器が確認できた。出土量は、第2地点に多く、第1地点で少ない。遺構としては、第2地点において、土坑の中から遠賀川式系の甕が出土しており、「はいづめ遺跡」ＳＺの状況を鑑みると、土器棺墓の可能性が考えられる。

徳山地区においては、弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡に比べ激減している。上原遺跡では、量的

には少ないが、これまで徳山地区で確認されていない中期の遺物が出土しており、当該期における地域の状況を考える材料を提供したと評価できる。

歴史時代の上原遺跡

徳山地区では、弥生時代中期以降奈良時代末までの遺構・遺物は未発見である。上原遺跡においてもやはり確認されていない。

奈良時代末になると第２地点で、礫集石遺構が１基確認されている。平安時代にはいると、第１・第２・第３地点において灰釉陶器がまとまって出土しており、第２地点では当該期の大型の堀立柱建物跡が検出されている。遺物を詳細に見ると、第２地点では広口壺や越州窯産の青磁椀が、第３地点では転用硯、朱墨のついた転用硯などが出土しており注目される。

中世以降については、第２地点で山茶碗を中心に陶磁器類が若干出土しているが、当時の状況を復原できるほどは資料に恵まれていない。

上原遺跡出土の突帯文土器について

上原遺跡からは、縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる突帯を有する土器が多く出土している。その主体は縄文突帯文土器・特殊突帯文土器と、少量ながら指頭成形突帯文土器である。縄文突帯文土器には北白川下層Ⅱ式ｃ式末にみられる口縁部外面に２～３条の縄文突帯を貼付するものやそれが多条化したものがある。２～３条のものは第２地点と第１地点で出土している。共通する点は多く、同時期のものと考えられるが、違うのは内面肥厚の有無である。第２地点から出土した北白川下層Ⅱｃ式のものには内面肥厚がない。しかし第１地点から出土したものの中にはすでに内面肥厚が始まり、多条化した縄文突帯土器に似ている。縄文時代前期後葉の時期に第２地点から第１地点へは断絶もしくは住み替えがあった可能性については前述したが、この点からもその可能性が高いことが指摘できる。多条化した縄文突帯を有する土器は第２地点からは出土していない。第１地点から出土した多条化した土器は比較的まとまっており、第１地点固有のものと言える。

第１地点固有という点では、指頭成形突帯文土器も同様である。上原遺跡では本地点にのみ分布する。上原遺跡だけでなく、徳山地区全体で出土例がない。しかしこの指頭成形突帯文土器はＡＨ１－ＳＸ02からは良好な状態で１個体が出土しているが、他にはあまりなく、縄文突帯文土器や特殊突帯文土器と比較すると、量的に占める割合はかなり低い。従って第１地点固有といいながらも、その拠点が第１地点にあったとは考えにくく、客体である可能性も否定しきれない。そして何より問題なのはその帰属時期である。多条化した縄文突帯文土器が比較的古相を示し、特殊突帯文土器がそれより新しいという前提に立つと、この指頭成形突帯文土器は両者の様相をともに有している。古相と思われる点は文様モチーフである。縄文突帯文土器によく見られるラグビーボール状のモチーフを有するものが多い。また文様帯も口縁部から頸部に限られ、胴部以下へ降りていかない。それに比べ、口縁端部が内面肥厚され、さらに端部がさざ波状を呈していることは、特殊突帯文土器に通じる。また指頭成形突帯の断面が三角形であることを特殊突帯の発展形が断面三角であることと結びつけて考えると、新しい様相と捉えることができる。これらの土器はＳＸ02から特殊突帯文土器とともに出土している。

その点に重きを置き、本書ではこの土器は比較的新相を呈すると理解しておく。

特殊突帯文土器については、突帯状に施された押し引きの様相から細分を試みたが、連続的な変化である故に判別は困難であった。しかし基本的な変遷については成果が挙げられたような気がする。ただ今回の分類は、器形・文様などはまったく考慮せず、突帯上の施文および突帯の断面形のみにより行ったので、他の基準との関連を究明していく課題が残された。

各地点における石器の考察

徳山谷においては、縄文時代前期以前の遺跡として小の原遺跡や下開田村平遺跡Ⅳ層などが報告されている。しかし、小の原遺跡は草創期～前期という時代幅を有する遺跡であり、また、下開田村平遺跡Ⅳ層は早期の文化層とされるが、出土した石器は2点に留まることから、その性格をとらえるにはやや不十分の感は否めない。今回の上原遺跡第1地点出土の石器組成は、出土した土器型式からある程度縄文時代前期に時期限定できるという点で有効性のある資料となり得ると考える。

上原遺跡において使用された石材は、チャートをはじめ、砂岩、泥岩などの堆積岩や安山岩、流紋岩系の火成岩がほとんどを占める。これらは、どれも在地の川原石を素材としたものであり、現在でも揖斐川本流や支流の西谷川で容易に採集することができる。チャートは数量的には多くみられるとはいえ、石器をみる限り節理の入る粗雑なものを素材にしている例が多く良質のものは少ない。砂岩は肌理の細かいものから粗いものまで多様であり、用途に従ってそれらを使い分けている。泥岩は板状に剝離されたものを使用している例が多い。しかし、打製石斧などの製作に使用された砂岩や泥岩のような石材の剝片は少ない。これらは、川原石という天然の素材や砥石、そして水の便に恵まれた場所での作業であったと推測される。遺跡から砥石の出土がないことも、その裏付けとなっている。打欠石錘や切目石錘も同様の場所での製作作業であったと思われる。流紋岩質溶岩（下呂石）と黒曜石は、これら在地の石材を補塡している。花こう岩（アプライト）は、フレイクはみられても製品は少なく、削器と打製石斧に1点みられるに留まった。また、水晶の石核が第1地点および第4地点で出土しているが、製品は確認できなかった。

石器の製作方法に関していえば、打製石斧やスクレイパー類、石篦、石錐、石鏃などの器種において、背面に自然面を残す初期剝片を素材とするものが目を惹く。これらの多くは、横位に剝離する横長剝片を用いている。中でも、打製石斧において顕著であり、片面のみに自然面を残すものと両面に自然面を残すものが共存する。今回、短冊形と撥形、分銅形という形態分類を行ったが、分銅形に整形されたものは、作業量を効率化するために装着を安定させる意図から、打点付近のバルブによる厚みを減ずるための調整剝離と考えられる。短冊形や撥形のものでも装着目的で厚みを調整した痕跡が認められることから、これらの形態も素材剝片の形態に左右されるものと考えることができる。今後は、形態分類よりも製作方法からの分類の必要性に迫られるであろう。他の器種についても同様のことが言えると思われる。

今回の調査においては、総計10,183点の石器および剝片類が出土したが、その種類と点数は第34表のとおりである。成業にかかわる生産用具や工具に玦状耳飾や垂飾などの装身具が付加され、多彩な組成を示している。

第34表　上原遺跡第１地点における石器組成表

器　　種	点　数	器　　種	点　数
石　鏃	199点	くさび形石器	6点
石鏃未製品	45点	両側縁調整剝片石器	43点
石　槍	11点	打製石斧	204点
有舌尖頭器	1点	磨製石斧	49点
石　錐	97点	石核・剝片類	7,377点
スクレイパー類	198点	ＲＦ	422点
・つまみ部付きスクレイパー	(26点)	ＵＦ	256点
・削　器	(72点)	打欠石錘	590点
・掻器Ⅰ	(41点)	切目石錘	321点
・掻器Ⅱ	(13点)	凹・敲・叩・磨石類	302点
・掻器Ⅲ	(16点)	石　皿	25点
・ノッチドスクレイパー	(20点)	異形石器	2点
・複合スクレイパー	(10点)	玦状耳飾	10点
石　篦	13点	垂　飾	1点
ヘラ形石器	11点	合　　計	10,183点

これらを、①狩猟具（石鏃・石槍・有舌尖頭器）、②漁労具（切目石錘・打欠石錘）、③採集Ａ〈根茎類〉（打製石斧）、④採集ＡＢ〈根茎類・堅果類〉（凹・敲・叩・磨石類、石皿）のように分類（長屋1996）した結果、第35表のような傾向がみられた。

第35表　上原遺跡第１地点他出土石器群の機能系列別点数

	上原第１地点	小の原遺跡	下開田村平Ⅳ層
狩猟具	211点（12.8%）	1,424点（74.0%）	2点（100%）
漁労具	911点（55.1%）	24点（ 1.2%）	
採集Ａ	204点（12.3%）	28点（ 1.4%）	
採集ＡＢ	327点（19.8%）	466点（24.0%）	
合　計	1,653点	1,942点	2点

小の原遺跡では石鏃など狩猟具が圧倒的に多く、狩猟活動への依存度の高さがうかがえる。次いで凹・敲・叩・磨石類、石皿などの根茎・堅果類の粉砕・製粉具が24%を占めている。下開田村平遺跡Ⅳ層は対象となる石器は少なく、組成を明らかにすることはできないが、狩猟具の石鏃２点が出土している。これらに対して上原遺跡第１地点では、漁猟具が全体の55%ほどを占め、次いで凹・敲・叩・磨石類、石皿が19.8%、狩猟具は12.8%に留まるという点で、同じ徳山谷の前記２遺跡とは明らかに性格を異にしている。上原遺跡第１地点では、特に石錘が多量に出土しており、この地点を特徴づけている。おそらく、漁労によって動物性蛋白質を獲得し、根茎類・堅果類の採集によって熱量を供給する澱粉を獲得したものと推測される。

次に、上原遺跡における他の地点での様相は第36表に示すとおりである。

第36表　上原遺跡第3～6地点出土石器の機能系列別点数

	第3地点	第4地点	第5地点	第6地点
狩猟具	31点（25.2%）	7点（ 8.6%）	1点（50.0%）	1点（ 3.0%）
漁労具	10点（ 8.1%）	25点（30.9%）		6点（18.2%）
採集A	68点（55.3%）	34点（42.0%）	1点（50.0%）	26点（78.8%）
採集AB	14点（11.4%）	15点（18.5%）		
合　計	123点	81点	2点	33点

第1地点は漁労に用いた石器が圧倒的で、次いで根茎類・堅果類の粉砕・製粉に用いた石器が多かったのに対して、第3～6地点では打製石斧を基本にきわめて採集的色彩の強い組成が展開する。

第3地点では、根茎類の採集に使用した石器が55.3%と最も多く、次いで狩猟具が25.2%となっており、漁労具はわずか8.1%と副次的な石器となっている。第4地点でも根茎類の採集具が多くみられ、打製石斧を基本に凹石や石皿など植物の加工具が重要視されているのがわかる。この地点においても漁労具は30.9%というものの副次的な石器となっている。第5地点は出土遺物が少なく、その性格を見出すまでには至らなかった。第6地点は根茎類の採集具と思われる打製石斧が圧倒的に多く、それらと漁労具がおよそ8：2の割合で出土している。第3・4・6地点から出土した打製石斧は、刃部が最大幅を有し両側縁が基部に向かって収束する撥形を呈するものが多い。その中でも刃幅が狭く鈍角なものは根茎類の掘り起こし作業を示唆するものである。

第1地点において漁労具が数量的に多いのは、この遺跡が河岸段丘上に位置することによるものと考えられる。第3地点に漁労具が少ないのは、この地点が高位段丘上に立地するためであろうか。しかし、中位段丘上に立地する第4地点は別にして、低位段丘上に立地する第6地点において採集具が漁労具を数量的に上回るという現象もみられ、単に土地条件からだけでは判断することはできない。いずれにせよ、根茎類や堅果類といった植物質食料を基本としながら、徳山谷の自然環境に応じた漁労および狩猟が組み合わされての生活が展開されたと考える。

次に、第1地点および第4・5地点と同様、中位段丘上に位置する上原遺跡第2地点との比較を試みることにする。第2地点は縄文中期後葉を主体とする遺跡である。第37表をみると、第1地点以上に漁労具が量的に抜きん出ているのがわかる。3,198点の内訳は、打欠石錘が1,295点、切目石錘が1,894点、有溝石錘が8点、礫石錘が1点である。第1地点の漁労具は911点であり、その内訳は打欠石錘が590点、切目石錘が321点であることから、縄文前期から時代が下るにつれて打欠石錘から切目石錘へと主流が変化したことと同時に、有溝石錘や礫石錘といったバリエーションも付加され、漁労活動の一層の活発化をうかがうことができる。因みに草創期から前期の時代幅をもつ小の原遺跡出土の石錘は24点すべてが打欠石錘であって、切目石錘の報告はされていない。第2地点における狩猟具

第37表　上原第2地点出土石器の機能系列別点数

	上原第2地点
狩猟具	614点（12.5%）
漁労具	3,198点（65.1%）
採集A	676点（13.8%）
採集AB	422点（ 8.6%）
合　計	4,910点

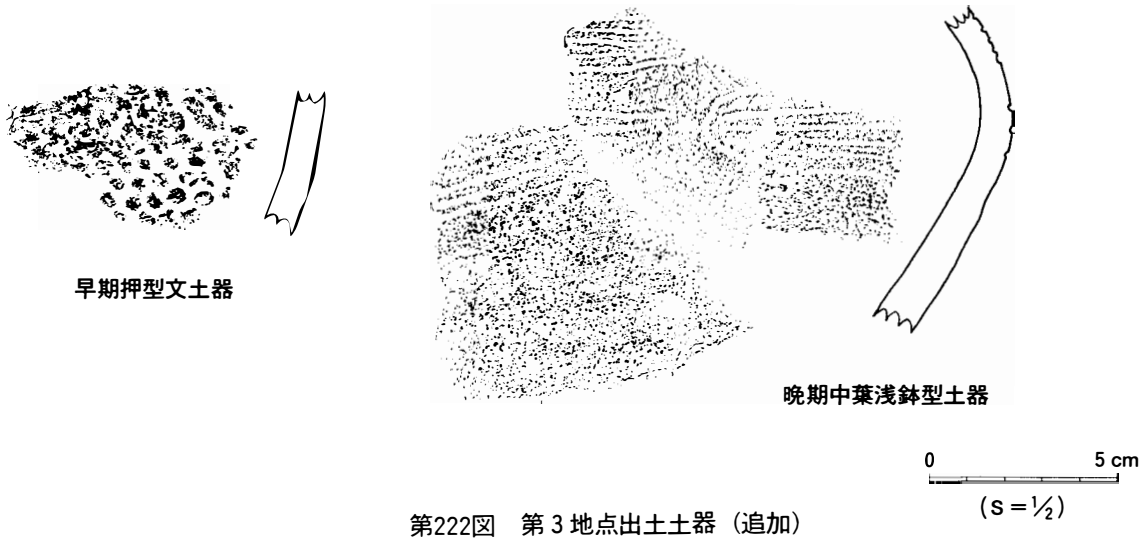
および採集Aの全体に占める割合は第1地点とよく似通っている。採集ABの割合は第1地点にくらべ約6割減であるが、狩猟や漁猟の効率化は採集の効率化をも促したものと思われる。第1地点と第2地点では、時代差があり気候や自然環境の変化もあったと思われるが、基本的に第2地点は前期末葉のあり方を継承している。共通の生活立地を有する場合の生業は時代差にかかわらず自ずと似通ったものになるのであろう。この点では、川辺の生産活動の組成のあり方を示しているといえる。

このほか、第2地点では、蛇紋岩を素材とした磨製石斧が多くを占めるのに対し、第1地点では砂岩や安山岩のような軟質の石材を選択している。これは前期においては製作技術の上で蛇紋岩のような硬質の石材は効率よく加工できなかったことを物語っている。装身具に費やす手間はともかく、消耗品である磨製石斧などには長時間の手間をかけることはなかったと推測される。また、石槍が第2地点ではみられなかったのに対して、第1地点では11点が出土しており、石鏃を含め前期における狩猟具のセット関係をうかがうことができる。さらに、第2地点では、縄文晩期に盛行する石冠や石棒のような宗教的遺物が出土しているのに対して第1地点では全くみられず、第3地点で石刀が1点出土したに過ぎなかった。それとは逆に、第2地点ではみられなかった装身具が第1地点では確認でき、本遺跡における代表的な石器となっている。この点からいうと、前述の狩猟具や漁労具、採集具などの成業にかかわる石器は時代的にも普遍であるが、宗教的遺物や装身具などはその出現に時代差を認めざるを得ない。上原遺跡は、早期以来前期・中期を通じて漁労具を重要な用具とし、他の遺跡と比較しても、成業にかかわる器種は時期的な変化の少ない安定した石器組成を有する遺跡であったといえる。

なお、本稿では従来の研究における統計資料と比較するために打欠石錘を漁労具に含めたが、もじり編みの錘具であるという説も有力になっている。取り敢えず、打欠石錘が漁網錘であるという前提にたっての考察であることを付記しておく。

付記

脱稿後、第3地点から2点の縄文土器が出土していたことが判明した。詳細な説明を省き、図のみを以下に掲載することにした。



第222図　第3地点出土土器（追加）

引用・参考文献

《遺構関係》

町田　洋　1977　『火山灰は語る』

目黒吉明　1995　「４．住居の炉」『縄文文化の研究』８　社会・文化

《石器関係》

竹岡俊樹　1989　『石器研究法』

加藤晋平・小林達雄・藤本強　1983　『縄文文化の研究』７　道具と技術

加藤晋平・鶴丸俊明　1991　『図録石器入門事典－先土器－』

鈴木道之助　1991　『図録石器入門事典－縄文－』

阿子島香　1989　『石器の使用痕』

江坂輝彌・渡辺誠　1988　『装身具と骨角製漁具の知識』

藤田富士夫　1983　「玦状耳飾の編年に関する一試論」
『北陸の考古学』石川県考古学研究会会誌第26号

1989　『玉』

1990　『古代の日本海文化』

1992　『玉とヒスイ』

寺村光晴　1995　『日本の翡翠』

高山市教育委員会　1985　「第４章　玦状耳飾」『飛騨の考古学遺物集成』Ⅰ

石川県考古学研究会　1995　『石川県考古資料調査・集成事業報告書　装身具Ⅰ』

植田文雄　1998　「縄文時代における食料獲得活動の諸相」『古代文化50』

鈴木康二　1997　「縄文時代石器研究の方法論序説」『滋賀県文化財保護協会紀要10』

長屋幸二　1994　「石器にみる縄文時代の営み」『岐阜県高等学校教育研究会社会科部会　会報33』

後藤信幸・吉田英敏　1984　「洞戸村底津遺跡について－石錘考－」『岐阜県考古９』

堀江武史　1992　「玦状耳飾の分類と製作工具に関して」『國學院大學考古学資料館紀要』第８輯

楊　　晶　1996　「日本における玦状耳飾についての分類と編年」
『財団法人のじぎく文化財保護研究財団　紀要』創刊号

川崎　保　1994　「縄文時代前期の玉と墓」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ

渡辺　誠　1981　「編み物用錘具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集80』

勝山市教育委員会　1978　『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』

滑川市教育委員会　1978　『安田古宮遺跡発掘調査報告書』

東京都八丈島教育委員会　1987　『倉輪遺跡』

長野県埋蔵文化財センター　1993　『中央自動車道長野線埋蔵文化財調査報告書11
－明科町内－北村遺跡』

中津川市教育委員会　1988　『落合五郎遺跡発掘調査報告書』
中津川市教育委員会　1991　『久須田遺跡発掘調査報告書』
広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室　1995　『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』X
岐阜県教育委員会　1989　「徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」『はいづめ遺跡』
1991　「徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書第2集」
『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』

《土器関係》
京 都 府　1935　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」
『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊
可児通宏　1989　「押型文系土器様式」『縄文土器大観』1　草創期　早期　前期
網谷克彦　1989　「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1　草創期　早期　前期
小島俊彰　1989　「十三菩提式土器様式」『縄文土器大観』1　草創期　早期　前期
京都大学文学部博物館　1991　『先史時代の北白川』
縄文セミナーの会　1993　『第6回　縄文セミナー　前期終末の諸様相』
増子康眞　1985　「北白川下層IIa式・III式併行の東海地方西部の土器」
『古代人』45　名古屋考古学会
1993　「東海西部の縄文前期末～中期初頭土器の変遷」
『知多古文化研究』7　知多古文化研究会
1992　「東海西部の縄文前期後半（凸帯縄文）土器の研究」
『古代人』53　名古屋考古学会
1996　「縄文前期後半・大麦田式土器の再検討」『古代人』57　名古屋考古学会
山口　明　1980　「縄文時代前期末葉鍋屋町系土器群の動態」
『長野県考古学会誌』39　長野県考古学会
1984　「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」
『長野県考古学会誌』48　長野県考古学会
三好博喜　1988　「志高遺跡出土の大歳山式系統の土器について」
『京都府埋蔵文化財情報』第28号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
1988　「志高遺跡出土の土器にみる北白川下層III式の発展過程」
『京都府埋蔵文化財情報』第29号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
赤塩　仁・三上徹也　1994　「下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義」
『中部高地の考古学』IV　長野県考古学会
小杉　康　1995　「文化制度としての模倣製作」『飛驒と考古学』飛驒考古学会
山岸洋一　1996　「縄文前期『特殊凸帯文土器』細分の可能性」『信濃』48-4　信濃史学会
勝山市教育委員会　1977　『破入遺跡』
米原町教育委員会　1986　『磯山城遺跡』
東大阪市教育委員会　1987　『神並遺跡II』

柿崎町教育委員会　1960　『鍋屋町遺跡』
岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会　1982　『概報・樋沢遺跡』
福井県教育委員会　1983　『鳥浜貝塚　1981・1982年度調査概報・研究の成果』
－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査３－
福井県教育委員会　1984　『鳥浜貝塚　1983年度調査概報・研究の成果』
－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査４－
福井県教育委員会　1987　『鳥浜貝塚　1985年度調査概報・研究の成果』
－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査６－
財団法人長野県埋蔵文化財センター　1987　「大洞遺跡」
『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１』
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989　「志高遺跡」
『京都府遺跡調査報告者』第12冊
財団法人長野県埋蔵文化財センター　1998　「松原遺跡」縄文時代
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４』
可児町北裏遺跡発掘調査団　1973　『北裏遺跡』
岐阜県大野郡白川村教育委員会　1983　『巾通り遺跡』
洞戸村教育委員会　1988　『岐阜県洞戸村市場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
坂祝町教育委員会　1988　『芦戸遺跡』
国府町教育委員会　1988　『宮ノ下遺跡』
岐阜市教育委員会　1995　『御望遺跡』
横浜市ふるさと歴史財団　1995　『桜並遺跡』

なお、この他に当センター刊行物の徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書および徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書のうち、第３集『追分遺跡・下開田村平遺跡』(1992)、第８集『山手宮前遺跡』(1997)、第10集『上原遺跡Ⅰ』(1999)、さらに『西乙原遺跡・勝更白山神社』(1995)を主に参考とした。

報告書抄録

ふりがな	あげはらいせき　に
書名	上原遺跡 II
副書名	
巻名	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第54集
編集者名	小野木学・近藤大典・鈴木隆雄・竹中一秋・堀田一浩・藁科哲男
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1　　ＴＥＬ 058（237）8550
発行年月日	西暦2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
あげはらいせき 上原遺跡	ぎふけんふじはしむら 岐阜県藤橋村 おおあざとくやまあざあげはら 大字徳山字上原	21407	06380	35° 41′ 49″	136° 28′ 15″	19940516 ～ 19941130 19950508 ～ 19951130 19960507 ～ 19961129 14,979㎡	徳山ダム建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上原遺跡	集落	縄文時代 （早期～晩期） 弥生時代 （前期～中期） 古代～近世	竪穴住居跡　9軒 集石遺構　10基 土坑　多数	石器・石製品 縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 山茶碗 国産陶磁器	縄文時代早期～晩期にかけての遺構・遺物を多数検出 平安時代の遺構・遺物を検出

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第54集

上　原　遺　跡　II

2000年３月31日

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印　　刷　株式会社　太　　洋　　社